

荒砥前原遺跡 赤石城址

昭和51年度県営圃場整備事業荒砥南部
地区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書

1985

群馬県教育委員会
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

頁	行	誤	正
序	9行目	縄方時代	→ 縄文時代
P 25	12行目	石鐘1点が	→ 石錐1点が
P 69	17行目	土器の蓋	→ 土製の蓋
P 72	26行目	木工具として	→ 木工具としての
"	33行目	刃部には磨痕	→ 刃部には磨耗痕
P 91	29行目	磨石・近似	→ 磨石に近似
P118	12行目	低く広が	→ 低く広がり
P125	2行目	ことから第97図	→ ことから第99図
"	12行目	文様構成は第97図	→ 文様構成は第99図
P127	3・4行目	縮歯文	→ 山形文
"	8行目	把えておきたい	→ とらえておきたい
P128	23・24行目	把え	→ とらえ
P131	18・25・26行目	施こ	→ 施
"	33行目	焼成	→ 焼成
P133	17行目	2は丸底状	→ 3は丸底状
"	19行目	脚部中位に	→ 脚部中位に
"	"	3は平底	→ 4は平底
"	22行目	木葉痕を残す。4	→ 木葉痕を残す。5
"	33行目	縮歯文	→ 山形文
P135	1・4・5行目	縮歯文	→ 山形文
P141	2・8行目	円錐	→ 円錐
"	10行目	外面全体を	→ 外面全体に
P144	16行目	系統を異にする	→ 系統を異にする
"	18行目	脚部は円錐形	→ 脚部は円錐形
P148	11行目	輪積み痕が	→ 積上げ痕が
P150	4行目	焼成は軟質	→ 焼成は軟質
"	22行目	小型台形土器	→ 小型器台形土器
P153	8行目	把える	→ とらえる
P155	23行目	口縁部破片	→ 口縁部破片
P163	32行目	截形の形状	→ 台形の形状
P164	1行目	成形は輪積	→ 成形は積上げ
P167	5行目	S字状口縁部台付甕	→ S字状口縁部台付甕
P168	30行目	肩部に粗に	→ 肩部に粗い
P174	16行目	よりも大きき	→ よりも大きき
"	25行目	明瞭に分類	→ 明瞭に分類
"	34行目	把えられる	→ とらえられる
P176	16行目	明瞭に	→ 明瞭に
"	19行目	口縁部を	→ 口縁部を
"	20行目	をハケメを施し	→ のハケメを施し
"	32行目	底部と接合部	→ 底部との接合部
P178	11行目	胎土には砂粘	→ 胎土には砂粒
"	18行目	粗いヘリミガキ	→ 粗いヘラミガキ
P181	27行目	27尺(約8.1m)	→ 27尺(約81m)
P184	2行目	大正12年まで	→ 大正15年まで
P190	31行目	深鉢工器	→ 深鉢土器
P191	34行目	文様を施する	→ 文様を施す
図版17		2・6写真左右入れ替え天地逆	
図版80	写真キャプション	D区祭祀跡出土土器(鬼高式土器)	

あら と まえ はら
荒 砥 前 原 遺 跡
あか いし
赤 石 城 址

昭和51年度県営圃場整備事業荒砥南部
地区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書

1985

群 馬 県 教 育 委 員 会
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

序

赤城山南麓に位置する前橋市荒砥地区は、県内有数の古墳密集地域であり、その他の埋蔵文化財も多く分布する所であります。一方、近年農業の機械化、近代化は著しく、近代経営に合わせた圃場整備の必要性も増し、この地域でも土地改良事業が計画・実施されております。これら事業の実施に伴って、埋蔵文化財の保護対策も必要となり、その一環として発掘調査を実施し、遺跡、遺構の様子を記録保存することにいたしました。本冊子で報告する前原遺跡も、荒砥南部土地改良事業に伴って発掘調査を実施したものの一つです。

上野国二之宮である赤城神社南方の荒砥川と神沢川の合流する付近に位置するこの遺跡では、縄方時代から古墳時代にかけての各種の遺構が調査され、この地域の人々の生活を知る上での多種にわたる貴重な資料が発見されました。特にこの地域は、従来考古学的には特異な地域として研究者間では議論がされてきましたが、資料不足からもう一步の研究が前進しませんでした。今回の調査はその資料の豊富さから、このような状況を脱却し新たな研究成果を導き出すものと思料します。

これも、本遺跡の調査、そして本報告書刊行にいたるまでの間、終始御指導、ご協力をいただいた群馬県農政部の関係機関、荒砥南部土地改良区関係者と地元地権者の方々、また発掘調査を担当した群馬県教育委員会の関係者、整理に直接たずさわっていただいた担当者をはじめとする方々の総力が結集された結果であり、ここに厚く感謝の意を表します。

この様にして出来た本報告書が多くの人々に有効に活用され、後の世に活かされていくことを念じ、序といたします。

昭和60年3月20日

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長 清水 一郎

例 言

1. 本書は昭和51年度県営團場整備事業荒砥南部地区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 遺跡の所在は以下のとおりである。

荒砥前原遺跡	前橋市二之宮町字前原、新土塚
赤石城址	前橋市飯土井町字城山
3. 発掘調査は、群馬県農政部より委託を受け、群馬教育委員会文化財保護課が実施した。調査担当および調査期間は以下のとおりである。

荒砥前原遺跡	試掘調査	担当者	文化財保護主事	原田恒弘、平野進一
		調査期間	昭和50年2月3日～同年3月31日	
	本調査	担当者	文化財保護主事	能登 健
		調査員		内田憲治、石坂 茂
		調査期間	昭和52年1月10日～同年3月24日	
赤石城址	本調査	担当者	文化財保護主事	能登 健
		調査員		内田憲治、石坂 茂
		調査期間	昭和52年3月7日～同年3月13日	
4. 発掘資料の整理および報告書の作成は、群馬県教育委員会より過年度公共事業として委託を受け、群馬県埋蔵文化財調査事業団が実施した。本書作成の担当は以下のとおりである。

事務担当	飯塚喜代子、国定 均、山本朋子
編 集	藤巻幸男
本文執筆	内田憲治（勢多郡新里村教育委員会） III-2・3（遺構）、III-4、IV
	石坂 茂（当事業団調査研究員） V
	大木紳一郎（ ） III-2・3（遺物）
	藤巻幸男（ ） I、II、III-1、V
図版作成	高橋京子、辻口敏子、井野みゆき、新井サイ子、阿佐美和子、石坂朋子
	石井弘子、後藤和美、須田まさえ、須田幸子、佐竹治美、中村民子
	細井敏子、皆川正枝、山田光子
保存処理	浜野和宗作、伊能敬司、関 邦一
遺物写真	佐藤元彦

なお、縄文土器実測図のうち32個体は、ステレオ写真実測により素図を作成した。
5. 石器の石材鑑定は、以下の二氏にお願いした。

田中宏之（群馬県立博物館）
飯島静男（群馬県地質学協会会員）

6. 本書作成にあたり、伊勢崎市立図書館より八坂樋絵図の借用および本書への掲載を快諾いただいた。記して感謝いたします。
7. 出土遺物および資料類は、一括して群馬県埋蔵文化財調査センターに保管してある。
8. 発掘調査に参加し、また多くの便宜を図っていただいた地元の方々に感謝いたします。

凡 例

1. 各遺構の名称は発掘調査時のものを使用したため、各区各トレンチ毎の通しナンバーとなっている。ただし、トレンチの遺構については、2トレンチ1号住居を2T1住と略した。
2. 遺構配置図、遺構図内の方位は磁北を表わす。
3. 一遺構から出土した遺物は、全て通しナンバーとした。
4. 遺構図中の遺物に付したナンバーは、実測図のナンバーと一致している。
5. 挿図の縮尺は以下のように統一した。ただし、石器については同器種は同縮尺としたが、各器種で異なった縮尺のものがある。スケールを参照していただきたい。

住居、竪穴状遺構……………1/10

土坑……………1/40

縄文土器……………1/6

弥生土器、土師器……………1/4

手捏ね土器・拓影図……………1/3

6. 石器実測図の表現方法は以下のとおりである。

自然面……………点描

敲打痕……………点描による濃淡

磨石の研磨面……………実線で範囲を示し、白ぬき

打製石斧等の磨耗痕（使用痕）……………茶色

磨石類の側面にみられる敲打・磨耗痕……………スクリーントーン

欠損部……………白ぬき

7. 縄文土器のうち胎土に繊維を含むものは、断面図にスクリーントーンを入れて示した。
8. 第1図は建設省国土地理院発行2万5千分の1地形図（大胡）を使用した。

目 次

序	
例 言	
凡 例	
I 調査の経緯と遺跡の環境	1
1 調査に至る経緯	1
2 遺跡の位置と環境	1
3 周 辺 の 遺 跡	3
II 調査の方法と遺跡の概要	5
III 前原遺跡の調査内容	9
1 縄文時代の遺構と遺物	9
(1) 住居 (2) 埋設土器 (3) 土壇	
(4) 遺構外出土土器 (5) 土製品 (6) 石器	
2 弥生時代の遺構と遺物	115
(1) 住居 (2) 竪穴状遺構 (3) 遺構外出土遺物	
3 古墳時代の遺構と遺物	137
(1) 住居 (2) 古墳 (3) 遺構外出土遺物	
4 八 坂 樋	181
IV 赤石城址の調査内容	185
V 成果と問題点	188
1 加曽利E式土器について	189

挿 図 目 次

- | | |
|----------------------------|-----------------------|
| 第 1 図 周辺の遺跡 | 第 38 図 // 出土遺物 |
| 第 2 図 発掘調査区配置図 (1/2500) | 第 39 図 土壇出土遺物 (3は1/6) |
| 第 3 図 A区・B区遺構配置図 (1/600) | 第 40 図 第1・2・3・4群土器 |
| 第 4 図 C区・D区遺構配置図 (1/600) | 第 41 図 第5・6・7群土器 |
| 第 5 図 3・4トレンチ // (//) | 第 42 図 第7群土器 |
| 第 6 図 5トレンチ // (//) | 第 43 図 // |
| 第 7 図 C区3号住居 | 第 44 図 第7・8群土器 |
| 第 8 図 // 出土遺物 (4～6は1/3) | 第 45 図 第8群土器 |
| 第 9 図 C区4号住居 | 第 46 図 第6・7・8群土器 |
| 第 10 図 C区5号住居 | 第 47 図 第9群土器 |
| 第 11 図 C区11号住居 | 第 48 図 // |
| 第 12 図 // 出土遺物 | 第 49 図 // |
| 第 13 図 C区12号住居 | 第 50 図 // |
| 第 14 図 // 出土遺物 | 第 51 図 第10群土器 |
| 第 15 図 D区1号住居(下)・2号住居(上) | 第 52 図 第10・12・13群土器 |
| 第 16 図 // 出土遺物 | 第 53 図 第11群土器 |
| 第 17 図 D区3号住居 // | 第 54 図 // |
| 第 18 図 // | 第 55 図 第12・13群土器 |
| 第 19 図 2T1号住居 | 第 56 図 第13群土器 |
| 第 20 図 // 出土遺物 (1) (2は1/3) | 第 57 図 石鏃 |
| 第 21 図 // // (2) | 第 58 図 打製石斧 (1) |
| 第 22 図 3T1号住居 | 第 59 図 // (2) |
| 第 23 図 // 出土遺物 | 第 60 図 // (3) |
| 第 24 図 4T1号住居 | 第 61 図 // (4) |
| 第 25 図 // 出土遺物 (1) | 第 62 図 // (5) |
| 第 26 図 // // (2) | 第 63 図 // (6) |
| 第 27 図 // // (3) | 第 64 図 // (7) |
| 第 28 図 4T2号住居 | 第 65 図 // (8) |
| 第 29 図 // 出土遺物 (1) | 第 66 図 // (9) |
| 第 30 図 // // (2) | 第 67 図 // (10) |
| 第 31 図 // // (3) | 第 68 図 打製石斧未製品 |
| 第 32 図 // // (4) | 第 69 図 剥片石器類 (1) |
| 第 33 図 4T4号住居 | 第 70 図 // (2) |
| 第 34 図 // 出土遺物 (1) | 第 71 図 // (3) |
| 第 35 図 // // (2) | 第 72 図 // (4) |
| 第 36 図 B区1号埋設土器 | 第 73 図 // (5) |
| 第 37 図 B区1号土壇(上)・C区4号土壇(下) | 第 74 図 // (6) |

第75図	〃	(7)	第115図	C区2号住居
第76図	磨石類	(1)	第116図	〃 炭化材出土状態
第77図	〃	(2)	第117図	〃 出土遺物(1)
第78図	〃	(3)	第118図	〃 〃 (2)
第79図	〃	(4)	第119図	〃 〃 (3)
第80図	〃	(5)	第120図	C区6号住居
第81図	石皿		第121図	〃 出土遺物
第82図	小型磨製石斧		第122図	C区7号住居
第83図	石錐		第123図	〃 出土遺物
第84図	礫器(1)		第124図	C区8号住居
第85図	〃(2)		第125図	〃 出土遺物
第86図	敲石		第126図	C区9号住居
第87図	特殊石器類		第127図	〃 出土遺物
第88図	石核(1)		第128図	4T3号住居
第89図	〃(2)		第129図	〃 出土遺物
第90図	多孔石		第130図	A区1号墳
第91図	石製品		第131図	D区祭祀跡出土遺物(1)
第92図	A区1号住居		第132図	〃 〃 (2)
第93図	〃 出土遺物		第133図	〃 〃 (3)
第94図	A区2号住居		第134図	〃 〃 (4)
第95図	〃 出土遺物		第135図	〃 〃 (5)
第96図	B区3号住居出土遺物		第136図	C区13-Kグリッド一括出土遺物
第97図	B区3号住居		第137図	グリッド出土遺物
第98図	5T1・2号住居		第138図	八坂樋調査区概略図
第99図	5T1号住居出土遺物		第139図	八坂樋トレンチ断面図
第100図	5T2号住居出土遺物(1)		第140図	八坂樋セクション図
第101図	〃 〃 (2)		第141図	現在の八坂用水(佐波新田用水)
第102図	5T1号竪穴状遺構		第142図	赤石城址
第103図	〃 〃 出土遺物		第143図	赤石城址現況図(1978年2月現在)
第104図	5T2・3号竪穴状遺構		第144図	調査区遺構配置図
第105図	5T2号竪穴状遺構出土遺物		第145図	壕セクション図
第106図	5T3号竪穴状遺構出土遺物		第146図	加曾利E式土器の分類
第107図	遺構外出土遺物(1)			
第108図	〃 〃 (2)			
第109図	A区3号住居出土遺物			
第110図	A区3号住居			
第111図	B区1・2号住居			
第112図	B区1号住居出土遺物			
第113図	C区1号住居			
第114図	〃 出土遺物			

表 目 次

表一 1	出土石器一覧
表一 2	遺構内出土土器の共伴関係一覧

写真図版

- | | |
|--|---|
| <p>図版 1 A区全景（南から）
B区 // （南西から）</p> <p>図版 2 C区 // （南から）
D区 // （C区から）</p> <p>図版 3 赤石城址全景（南から。手前は神沢川）
遺物の検出作業（4 T 2号住居）</p> <p>図版 4 C区3号住居（北東から）
// 石棒出土状態（東から）</p> <p>図版 5 // 土器出土状態
// 炉
// 張り出し部掘り方及び多孔
石出土状態（主体部から）
C区4号住居（北から）</p> <p>図版 6 C区11号住居（西から）
// 遺物出土状態</p> <p>図版 7 C区12号住居（西から。左方は5号土壇）
// 遺物出土状態</p> <p>図版 8 C区11号住居炉
C区12号住居炉
// 埋甕
// 磨石出土状態
5号住居（西から。手前左方は3号土壇）</p> <p>図版 9 D区1号（手前）・2号（上方）住居（南から）
D区1号住居（南から）</p> <p>図版 10 D区3号住居（東から。右上方は1号土壇）
// 遺物出土状態
2 T 1号住居土器出土状態
// 立石（西から）
// 敷石に利用された石皿片</p> <p>図版 11 // （南から）
// 敷石面と立石の状態</p> <p>12 3 T 1号住居（東から）
// セクション</p> <p>図版 13 4 T 1号住居（南から）
// 遺物出土状態（南から）</p> | <p>図版 14 3 T 1号住居炉
// 埋甕</p> <p>4 T 1号住居炉付近の礫及び多孔石
// 床面倒置土器
// 石皿の出土状態
// 遺物出土状態</p> <p>図版 15 4 T 2号住居（南から）
// 遺物出土状態（南西から）</p> <p>図版 16 4 T 4号住居（南東から）
// 遺物出土状態</p> <p>図版 17 4 T 2号住居炉
// 大型深鉢土器の出土状態
// 深鉢土器の出土状態</p> <p>4 T 4号住居炉
// 埋甕
// 床面倒置土器
// 小形把手付土器の出土状態</p> <p>図版 18 B区1号埋設土器の検出状況
C区4号土壇
B区1号土壇遺物出土状態
//
A区1号住居（西から）</p> <p>図版 19 5 T 1・2号住居（北から）
B区3号住居（南から）</p> <p>図版 20 5 T 1号竪穴状遺構（北西から）
5 T 2・3号竪穴状遺構（南から）</p> <p>図版 21 5 T 2号竪穴状遺構（南東から）
5 T 1号住居小土壇
5 T 2号竪穴状遺構土器出土状態
5 T 3号竪穴状遺構
// //</p> <p>図版 22 A区2号住居（北西から）
A区3号住居（北東から）</p> <p>図版 23 B区1・2号住居（南から）
// 1号住居遺物出土状態</p> <p>図版 24 C区1号住居（東から）
// 8号住居（ // ）</p> |
|--|---|

- 図版25 // 7号住居 (南から)
 図版25 C区6号住居 (西から)
 図版26 // 2号住居炭化材・遺物出土状態 (南から)
 C区2号住居 (南東から)
 図版27 // 北壁下遺物出土状態
 // 東コーナー付近炭化材の状態
 // 炉周辺の遺物出土状態
 // //
 // P₃炭化柱痕
 図版28 C区9号住居 (南東から)
 // 壺形土器出土状態
 図版29 4T3号住居 (西から)
 // セクション (浅間C軽石の推積状態)
 図版30 A区2号住居高坏出土状態
 // 十王台式土器出土状態
 C区9号住居P₆
 4T3号住居壺形土器出土状態
 図版31 A区1号墳 (北西から)
 同周堀内礫出土状態
 同堀セクション
 同主体部
 図版32 絵図に見られる八坂樋 (『八坂用水絵図』明治12年5月 (伊勢崎図書館蔵) より転載)
 図版33 使用時の八坂樋 (『群馬県史蹟名勝』第一号 (大正15年5月) より転載)
 図版34 八坂樋断面 (Bセクション)
 // (Cセクション)
 図版35 八坂樋の大きさ
 同上側板の状態
 下部に推積した砂礫層 (Aセクション)
 図版36 C区3・11・3T1号住居出土土器
 図版37 C区12号住居出土土器 2T1号住居出土土器
 図版37 C区12号住居出土土器 2T1号住居出土土器
 図版38 D区1号住居出土土器 D区3号住居出土土器
 図版39 4T1号住居出土土器
 図版40 4T2号住居出土土器 4T1号住居出土土器
 図版41 4T2号住居出土土器
 図版42 //
 図版43 4T4号住居出土土器
 図版44 4T4号住居出土土器 B区埋設土器一括
 図版45 住居出土石器
 図版46 B区1号土壇出土土器
 図版47 土壇出土土器
 図版48 第1・2群土器 第3・4群土器
 図版49 第5・6群土器 第7群土器
 図版50 第7群土器 第8群土器
 図版51 第9群土器
 図版52 //
 図版53 第10・12・13群土器 第11群土器
 図版54 第11群土器 第12・13群土器 (D区南採集)
 図版55 石鏃・石錐・小型磨製石斧 打製石斧
 図版56 打製石斧
 図版57 //
 図版58 //
 図版59 //
 図版60 剥片石器
 図版61 磨石類
 図版62 //
 図版63 礫器
 図版64 敲石・特殊石器類 石核
 図版65 多孔石・石製品
 図版66 石器の使用痕
 図版67 // ・製作痕
 図版68 5T1号住居出土土器
 図版69 5T2号住居出土土器 A区1号住居出土土器
 図版70 B区3号住居出土土器 5T1・2号竪穴状遺構出土土器
 図版71 5T3号竪穴状遺構出土土器
 図版72 遺構外出土土器

図版73 A区2・3号住居 B区1号住居出土
土器
図版74 C区2号住居出土土器
図版75 //
図版76 // C区1号住居出土土器
図版77 C区・7・8・9・号住居出土土器
図版78 4T3号住居出土土器
図版79 D区祭祀跡出土土器（石田川式土器・

鬼高式土器

図版80 D区祭祀跡出土土器（鬼高式土器）
図版81 // （手捏形土器）
図版82 // （ // ）
図版83 C区13-Kグリッド一括出土土器 グ
リッド出土土器
図版84 赤石城址 ピット列・壕
図版85 赤石城址壕・壕セクション

I 調査の経緯と遺跡の環境

1 調査に至る経緯

県内において急ピッチに進められている圃場整備事業は、1975（昭和50）年度に発表された群馬県新総合計画に基づいた農用地総合整備事業の一つとして行なわれているものであり、1976（昭和51）年から1980（昭和55）年の5ヶ年間で、総事業量7,050haが計画されている。

前橋市荒砥南部地区の圃場整備事業は、1974（昭和49）年より実施されているが、同計画の一環をなすものであり、その対象面積は900haに及ぶ県下でも最大規模のものである。この地区は大型の前方後円墳をはじめとした多数の古墳や原始・古代の遺跡が存在しており、いわゆる上毛野君の本拠地として考古学的にも注目されていた地域である。1974（昭和49）年度から事業が実施されるにあたって、県農政部と県教育委員会との間で文化財保護を前提とした協議が行われ、工事によって遺跡の破壊が避けられない切土部分や道・水路などの対象区域については、事前に県教育委員会が発掘調査を実施することになり、これまですでに4年次を数えている。

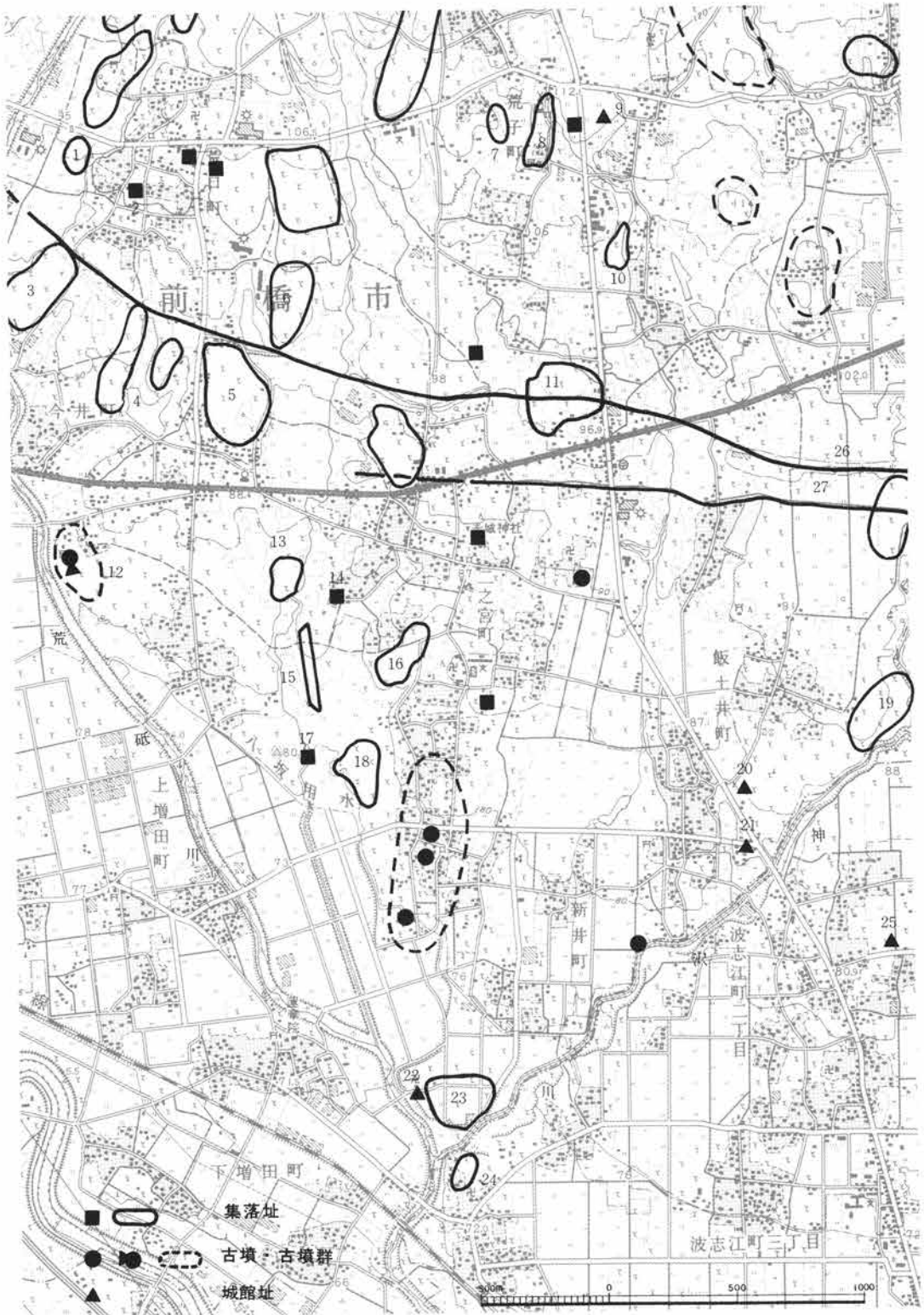
1976（昭和51）年度の圃場整備事業は、二之宮町を中心とする約120haもの広大な地区を対象とするものであり、これらの区域には周知の遺跡として、包蔵地3箇所、中世城館址2箇所のほかに、10数基の古墳が確認されていた。これらのうち、古墳については工事対象地から除外することによって現状保存することで事業者側との合意をみたが、包蔵地や城館址については試掘調査を実施してその範囲や性格を確認し、遺構の検出された区域についてはできる限り保存し得るような工事計画の変更を行なうことになった。試掘調査の対象地区は、二之宮町前原（包蔵地）、新土塚（城館址）、萩原（包蔵地）、臼井（包蔵地）、飯土井町城山（城館址）の総面積1.5haに及び、萩原地区を除く各地区から遺構の存在が確認された。このため、新土塚、臼井地区の遺跡は保存することとなったが、工事計画変更の困難な前原、城山（赤石城）地区の切土や道・水路部分（総面積9,800m²）については、本調査を実施することになった。また、新土塚城址についてはその規模を把握するために、あわせて確認調査を実施することとした。

発掘調査は、その調査費用の一部について文化庁の補助金を受け、1977（昭和52）年1月10日より同年3月24日までの期間で実施された。

2 遺跡の位置と環境

前原遺跡および新土塚城址は、前橋市二之宮町前原と新土塚地区に、また赤石城址は同飯土井町城山地区を中心に所在し、前者は国鉄両毛線駒形駅より東方約2.5km、後者は同約4kmにそれぞれ位置している。これらの遺跡を擁する地区は、旧荒砥村の南半部に該当する地域であり、前橋市街地より南東へ約11kmほど隔たっている。

I 調査の経緯と遺跡の環境



第1図 周辺の遺跡

県中東部に位置する赤城山は、黒檜山（標高1,828m）を最高峰とし、那須火山帯の南端に位置する複合成層火山である。この北西麓は、比較的大規模な輻射谷が発達した丘陵地形となるが、南麓では浅い輻射谷と緩やかで広大な裾野地形を呈している。南麓の地形を詳細にみると、標高500m付近で山地帯から丘陵性台地への地形変換がみられ、200mより下位の地域は低台地化している。この低台地域では、山腹から流出する荒砥川、神沢川、桂川などの中小河川や山麓端部からの湧水によって開析が進み、複雑に入り組んだ沖積地が形成されている。また、山麓末端は旧利根川の侵食によって小規模な崖線が形成されているが、序々に不明瞭になりつつ、旧利根川の氾濫原に消滅している。

荒砥南部地区は、この赤城山南麓の端部にあたり、地表面は下部ローム以上をのせた洪積台地の原形面とロームの二次堆積である砂壤土性の微高地のほかは、沖積地に分類される。

前原遺跡およびその遺跡内の北西側に存在する新土塚城址は、荒砥川と神沢川とが合流する地点の北側にあたる標高73mの舌状台地に立地しているが、新土塚城址は荒砥川に面した台地西縁部に寄っている。荒砥川は、前原遺跡より1km下流で広瀬川（旧利根川）と合流する流域延長20kmの河川である。遺跡をのせる台地の南側には沖積地が広がり、旧利根川の氾濫原と接している。台地の縁辺は、荒砥川、神沢川によって侵食され、比高4mの崖状を呈している。

赤石城址は、前原遺跡よりも北東へ1.5kmほど遡った神沢川の右岸にあたる標高81mの台地上に立地している。また、台地の西側には小河川の江竜川が南流して神沢川に注いでおり、赤石城はこの両河川に挟まれた河床との比高が約6mの幅の狭い舌状の台地先端部に築造されている。

新土塚城址を含む前原遺跡および赤石城址における基本土層は、約50m前後の暗褐色を呈した表土層とその下位の遺構確認面であるロームおよび黄褐色砂壤土層であり、台地中央部にはロームの堆積が認められるが、河川に近接した縁辺部には砂壤土が堆積している。

3 周辺の遺跡

縄文時代 前期後半と中期後半から後期初頭にかけての集落址が、中・小河川や湧水池を臨む台地上に点在している。草創期・早期・前期前半・中期前半・晩期の遺物散布地は数地点で確認されているが、これまでのところ前原遺跡周辺には、該期の住居址の検出された遺跡は存在しない。前期の集落址は北原(3)、北三木堂(4)、上ノ坊(11)、上諏訪などの遺跡で検出されており、そのほとんどが黒浜式や諸磯a・b式期を中心とした数軒ほどの小規模集落である。中期後半の集落址は、前原遺跡(23)をはじめ北原、二之堰(19)、赤堀村曲沢遺跡などがあり、該期の集落は前期に比べて、一時期の集落規模が大きくなる傾向をもつ。また、当地域で縄文時代の包蔵地とされているものの過半数以上が加曾利E式期に比定されるものであり、遺跡総数に占める該期遺跡の割合が高い。後期の集落址は二之堰遺跡や曲沢遺跡で検出されているが、ここでは中期後半から継続してきたものが堀之内1式期でその継続を断つという共通したパターンをもつ。後期後半および晩期の集落は検出されておらず、わずかに八坂遺跡(24)で後期後半の配石遺構や晩期の

I 調査の経緯と遺跡の環境

遺物が検出されているにとどまっている。

弥生時代 中期後半の竜見町式併行期の住居址が、荒口前原遺跡(2)や島原遺跡(18)で検出されているが、両遺跡とも集落規模・構造等を把握するまでに至っていない。後期では鶴ヶ谷(6)、上ノ坊(11)、北三木堂遺跡などで住居址が検出されているが、古式土師を伴う場合も幾例か確認されており、弥生時代から古墳時代への移行過程を示すものとして注目される。また、これらの遺跡は、水田耕作に適した小規模な沖積地を臨む台地縁辺や微高地上に立地する傾向がみられる。

古墳時代 前期の集落址は、上ノ坊、鶴ヶ谷、中屋敷(7)、宮川(15)、宮原(17)、島原、二之堰等の遺跡で調査されており、弥生時代に比べてその集落数や規模などが増大している。こうした傾向は、後期に入るとより一層顕著となり、弥生時代からその立地が継続している「伝統的集落」は、その占地範囲を広げ、また新たに大日塚(5)、洗橋(13)、宮西(14)、天之宮(16)、下押切(8)などの「^{註1}第1次新開集落」とも言うべき集落の立地が見られる。この背景には、天之宮遺跡で検出された、湧水を積極的に利用した溜井に見られるような灌漑技術の導入による水田可耕地の拡大が存在すると考えられる。一方、墓址については、北原・島原・上ノ坊・二之堰・提東遺跡で4世紀後半の方形周溝墓が検出されている。また、大型の前方後円墳では5世紀後半の今井神社古墳(12)や6世紀代の荒砥三・二子山古墳が存在し、更にかつては500基以上を数えたと思われる6～7世紀の古墳群が存在している。この他に特筆されるものとして、荒子遺跡(10)で南辺が59mの方形区画をもつ5世紀代の遺構が検出されており、該期において当地域を統括した豪族の居館の可能性をもつ遺構として注目される。

奈良・平安時代 該期集落址の多くは、古墳時代後期の集落址と複合しているが、その規模は古墳時代よりも更に増大し、台地の中央部にまでその範囲を拡大している。また、その立地は山麓奥部にまで広がり、新たに該期に至って立地する「^{註2}第2次新開集落」も多く存在する。集落に面した沖積地からは、1108年に降下した浅間Bテフラで埋没した水田址が、前田(1)、大日塚、中屋敷Ⅱ(7)、荒子、島原などの遺跡から検出されている。また、当地域内には東山道(27)や12世紀中葉に瀨名荘によって開削された農業用水址である女掘(26)が通過している。

中世以降 該期の集落址はこれまでのところ確認されていないが、北三木堂遺跡で火葬墓、富田遺跡群では板碑、五輪答、蔵骨器などが検出されている。また、城館址としては赤石城(21)の他に、城山城(20)、中屋敷(25)、今井城、荒子の砦(9)、大室元城などが点在するが、その築城者や年代および相互の関連については、ほとんど不明である。

註1 能登 健・小島敦子 1984(文献73)

能登 健・洞口正史・小島敦子 1985(文献75)

註2 注1に同じ

II 調査の方法と遺跡の概要

調査の方法 前原遺跡は、確認調査によって集落址の存在することやその範囲がほぼ判明しており、今回はそのデータをもとにして、遺跡の破壊される台地縁辺の切土部分と道・水路部分の調査を行なうことになった。調査は、切土部分についてA～D区の調査区に分割し、更に工食用ベンチマークを基本として各区に5×5mの方眼を設定し、手掘りによるグリッド調査を実施した。また、道・水路部分はNo.1～5のトレンチ調査区を設定し、幅1mのトレンチを連続的に適宜配置して遺構の検出された箇所を拡張する方法をとった。

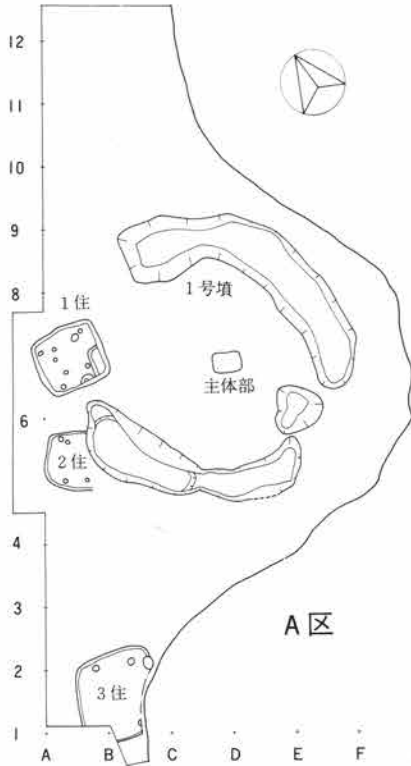
赤石城址の調査は、工事によって切土される南端部の外郭の約1,600㎡を対象として、5×1.5mのトレンチを適宜配置して遺構の検出を行なった。また、城域の大半が宅地や工場地となってその破壊が進んでいるため、現状での城跡全測図を作成することとした。

前原遺跡の概要 A区：弥生時代後期の住居址2軒と古墳時代前期の住居址1軒のほかに、直



第2図 発掘調査区配置図 (1/2500)

II 調査の方法と遺跡の概要



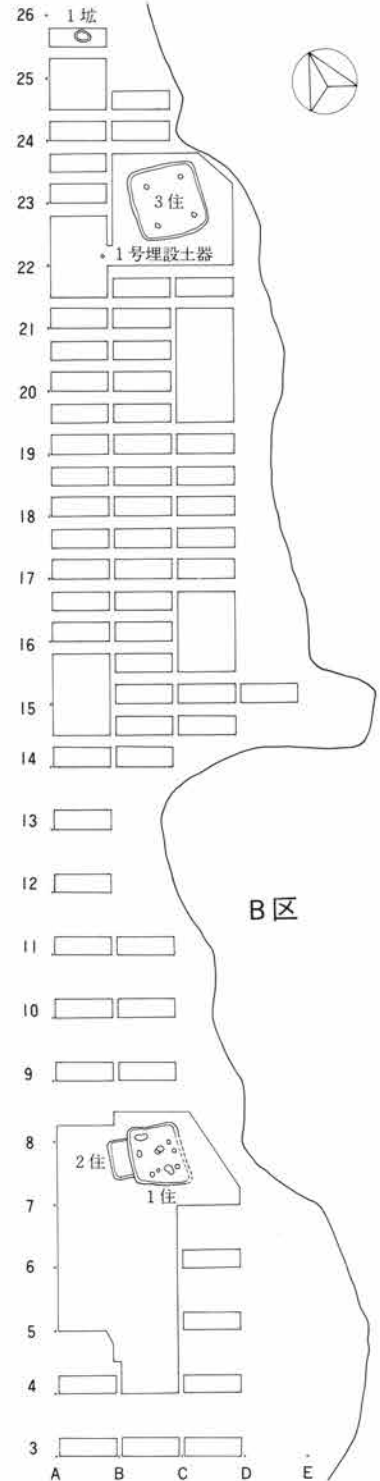
第3図 A区・B区遺構配置図 (1/600)

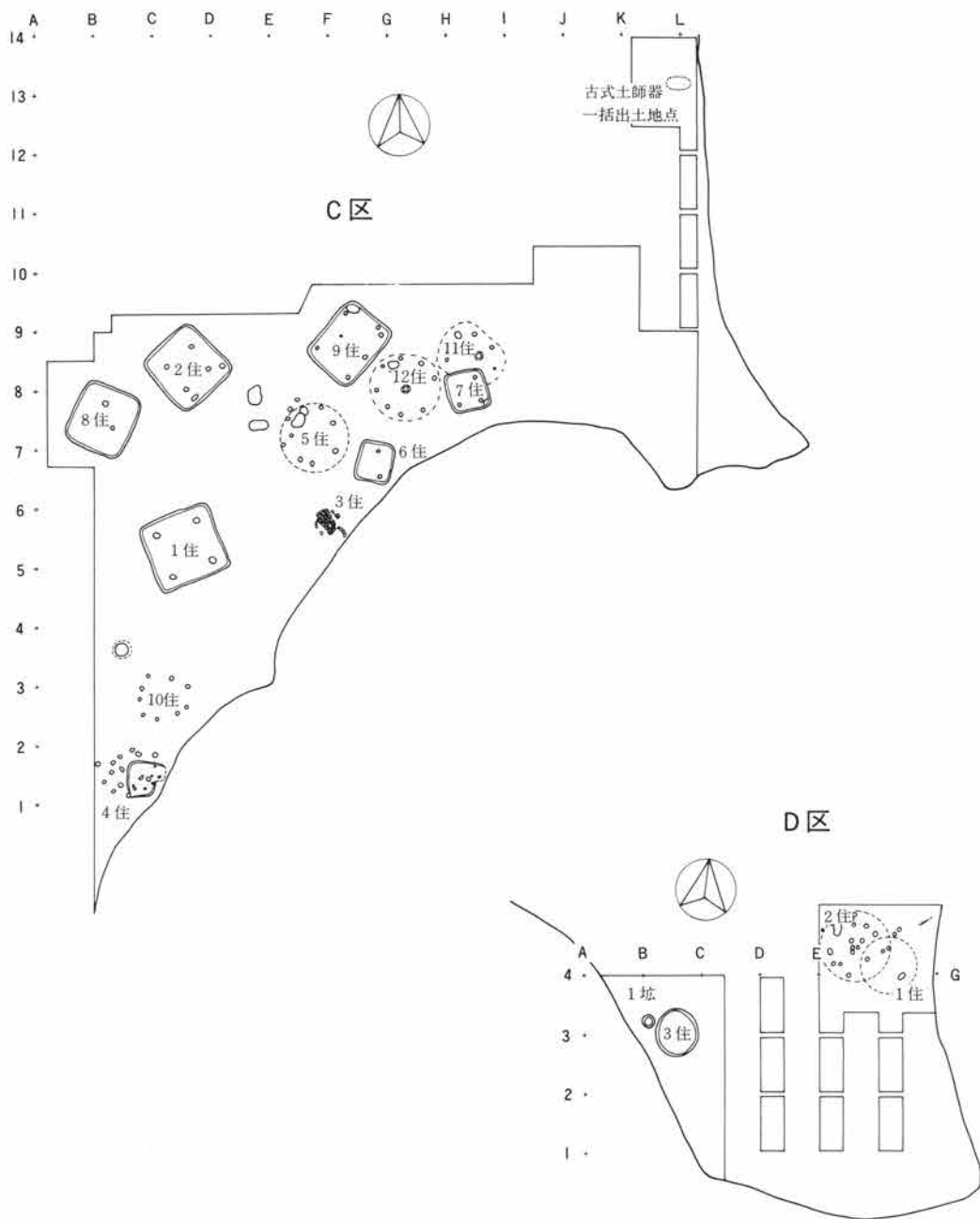
径約23mの円墳が確認された。古墳の墳丘は削平されていて全く残存せず、ほぼ南北に対になる弧状の周堀と主体部の石敷きが検出されたのみである。また、時期不明ではあるが、4基の土壇が検出された。

B区：各グリッド毎に2×5mの試掘を行なったが、面積に比べて検出された遺構は少ない。A区に接して弥生時代後期の住居址1軒と古墳時代前期の住居址2軒のほかに、縄文時代中期の土壇1基が検出された。

C区：台地の南端部にあたり、D区と接している。遺構は縄文時代中期の敷石住居址1軒を含む住居址5軒と土壇5基、古墳時代前期の住居址6軒を検出した。古墳時代の住居址は古式土師を出土しており、その内容は南関東的な様相を強くもっている。

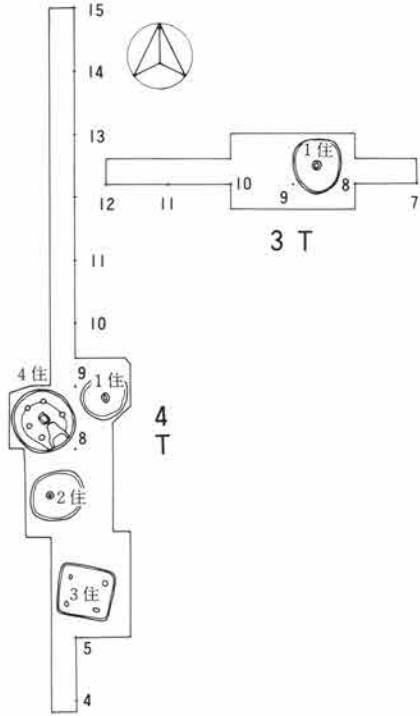
D区：現在まで墓地として使用されていた区域であり、調査に先だって埋葬人骨の発掘が行なわれたため、遺構検出面の大半が攪乱を受けていた。調査当初は遺構の検出が





第4图 C区·D区遺構配置图 (1/600)

II 調査の方法と遺跡の概要



第5図 3・4トレンチ遺構配置図 (1/600)

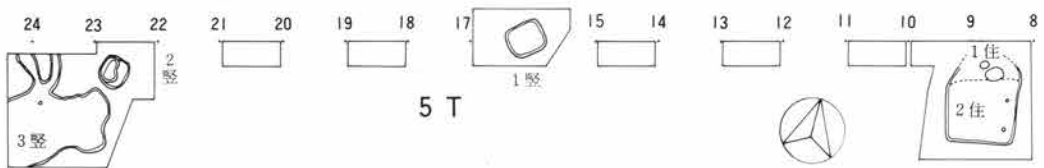
困難と思われたが、工事中に古墳時代の手づくね土器が多量に出土し、急拠調査を行なった。その結果、手づくね土器は周辺の開墾の際に集められたものであることが判明し、祭祀遺構の検出はできなかった。また、プランは不明瞭であったが、C区から連続していると思われる縄文時代中期の住居址が3軒検出された。その他に、近世の新田（八坂）用水が神沢川を渡河する懸樋の一部が調査された。

1・2トレンチ：1トレンチでは遺物や遺構が全く検出されず、遺跡の範囲外にあたることが判明した。2トレンチは、新田用水掘削の際の排土が0.8～1mの厚さで堆積しており、その下部より縄文時代中期の敷石住居址が1軒検出された。

3・4トレンチ：両トレンチは十字状に交差するが、この交差部付近より縄文時代中期の住居址4軒と古墳時代前期の住居址1軒が検出された。この地点の縄文時代住居址は、前原遺跡における該期集落の北限に位置すると考えられる。

5・6トレンチ：新土塚城の規模確認のために設定されたトレンチであるが、耕作時の攪乱によって城館に関する施設は確認できなかった。トレンチ内では、弥生時代中期の住居址2軒と住居に近似した堅穴状遺構3基が検出されたが、いずれも後世の耕作による攪乱がひどく、そのプランも不明瞭なものが多い。

赤石城址の概要 城址は自然の舌状の台地を削平して築造されており、調査の結果、南北に延びる台地をほぼ東西に区切る幅5m、深さ1mの堀と、その南側に堀と並行している約4m間隔の柱穴列を確認したが、建物等の遺構は検出できなかった。



第6図 5トレンチ遺構配置図 (1/600)

III 前原遺跡の調査内容

1 縄文時代の遺構と遺物

今回の調査では、前期中葉から晩期前葉にかけての土器および多量の石器類が検出された。これらのうち、主体を占めるのは中期後半の加曾利E 3式土器であり、遺構のほとんどはこの時期にあたる。遺構は、B区から埋設土器1基・土壇1基、C区から住居6軒(敷石住居1軒を含む)、土壇5基、D区から住居3軒・土壇1基、2トレンチから敷石住居1軒、3トレンチから住居1軒、4トレンチから住居3軒が各々検出され、総計住居14軒・埋設土器1基・土壇7基である。これらの遺構はロームの二次堆積層である黄色砂壤土を掘り込んで構築されているため、その検出は困難を極めた。特に住居の調査では、壁や柱穴の検出されたものは少ない。

以下、項目にしたがって説明を行なっていくが、遺構出土の石器のうち、出土位置の明確な大型石器以外は遺構外出土石器とともに1—(6)に一括し、表中に帰属遺構を明記した。なお、土器については以下のように分類した。この分類は本遺跡出土縄文土器全てを対象としている。

- | | |
|-------|-----------------------------|
| 第1群土器 | 黒浜式土器 |
| 第2群土器 | 諸磯式土器 |
| 第3群土器 | 五領ヶ台式土器 |
| 第4群土器 | 勝坂式・阿玉台式土器 |
| 第5群土器 | 加曾利E 1式土器 |
| 第6群土器 | 加曾利E 2式土器 |
| 第7群土器 | 加曾利E 3式土器 |
| 1類 | 渦巻文と楕円区画文による口縁部文様帯をもつ深鉢形土器 |
| 2類 | 口縁部文様帯を喪失し、胴上半部に波状文を描く深鉢形土器 |
| 3類 | 胴上半部に隆線や沈線で渦巻文を描く深鉢形土器 |
| 4類 | その他の深鉢形土器 |
| 5類 | 鉢形土器 |
| 6類 | 浅鉢形土器 |
| 第8群土器 | 加曾利E 4式土器 |
| 1類 | 断面三角形の微隆帯で文様を区画する深鉢形土器 |
| 2類 | 微隆帯と沈線で文様を区画する深鉢形土器 |
| 3類 | 沈線で文様を区画する深鉢形土器 |
| 4類 | 浅鉢形土器 |

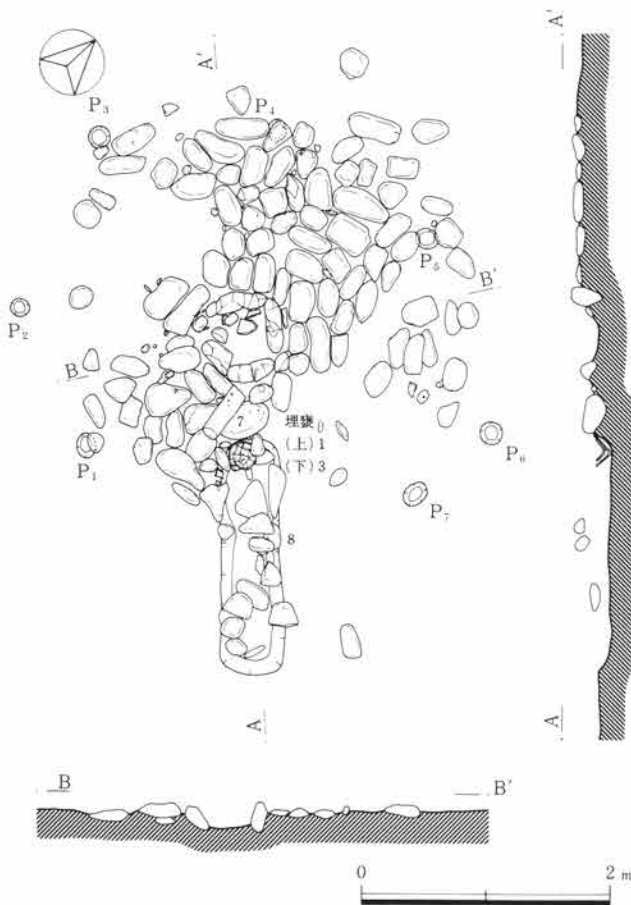
III 前原遺跡の調査内容

- 第9群土器 称名寺式土器
- 1類 沈線間を縄文で充填するもの
 - 2類 沈線間を刺突文で充填するもの
 - 3類 沈線のみで文様を描くもの
- 第10群土器 堀之内1式土器
- 1類 沈線で文様を描き、その間を縄文で充填するもの
 - 2類 縄文を地文とし、沈線で文様を描くもの
 - 3類 条線文が施されるもの
 - 4類 その他
- 第11群土器 堀之内2式土器
- 第12群土器 加曾利B式土器
- 第13群土器 安行式土器およびそれに伴うもの

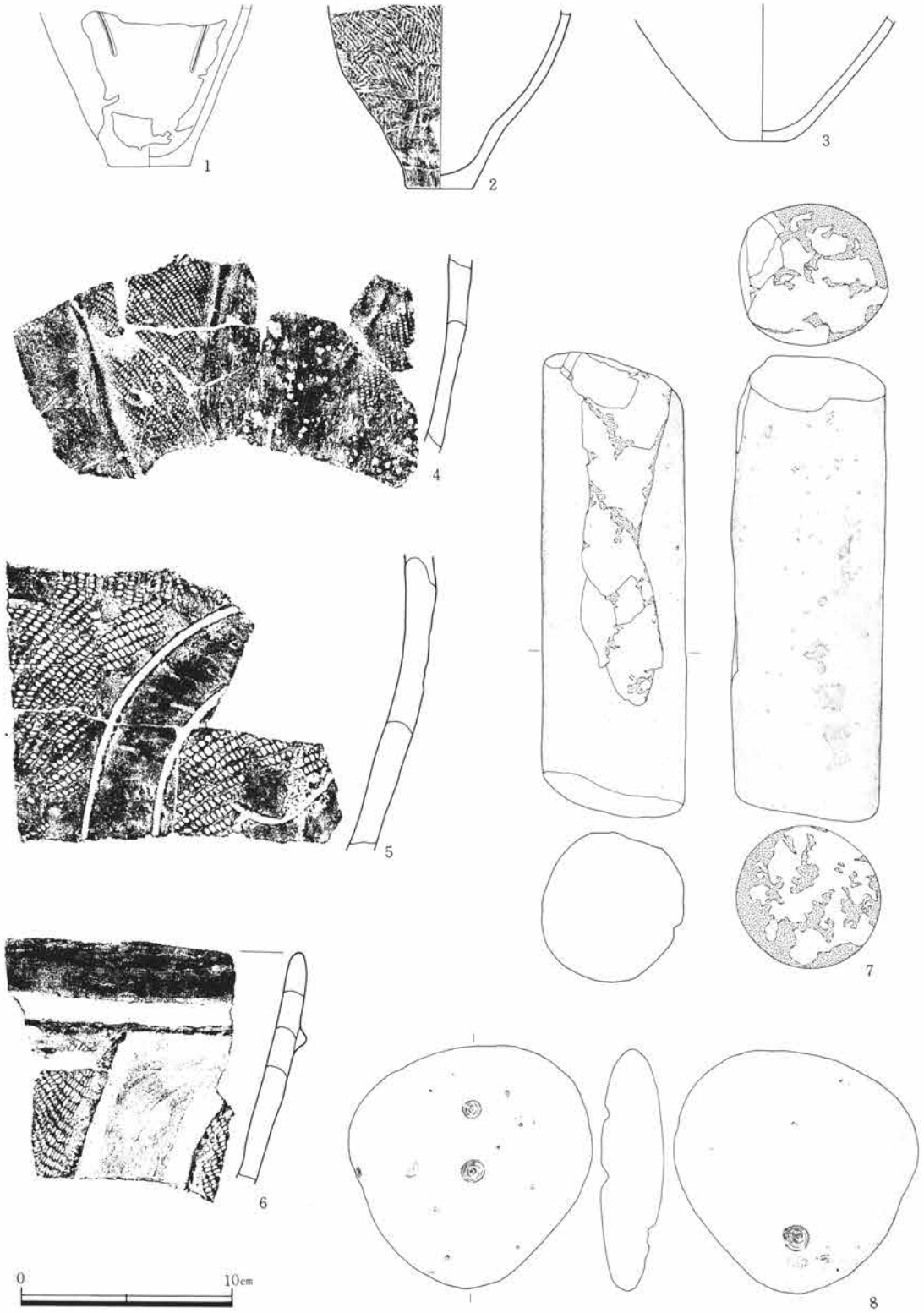
(1) 住居

C区3号住居 (第7図)

C区のほぼ中央の台地縁辺、5-Dグリッドに位置する。台地縁に向かって張り出し部をもつ柄鏡形の敷石住居である。本来、全面に石が敷かれていたと考えられるが、部分的に耕作等による攪乱によって抜き取られている。主体部は、おおよそ主軸方向が3.5m、横位が3.3mの範囲と思われる。敷石には偏平な河原石を使用し、ほぼ平らに構築されている。張り出し部にも敷石が認められるが、ほとんどの石が後世の攪乱により抜き取られている。張り出し部の下には幅0.5m長さ1.2mの掘り方が検出された。また、掘り方の側面壁には1部に河原石が立位に配されていた。炉は方形の石



第7図 C区3号住居



第8図 C区3号住居出土遺物 (4~6は $\frac{1}{3}$)

III 前原遺跡の調査内容

囲い炉で、主体部中央のやや張り出し部寄りに位置する。炉内から焼土は検出されていないが、炉石は加熱によるひび割れが著しい。また、張り出し部の基部から埋甕が検出された。埋甕は2個体の土器の胴下半部を重ねて埋設されていた。ピットは7本検出されている。

遺物出土状態

第8図2・4～6は、破片の状態で敷石面に接して出土した。埋甕は(3)の上に(1)が重なった状態で検出された。石棒(7)は埋甕と炉の間の敷石面から若干浮いた状態で出土した。また、大型の多孔石(8)が、張り出し部掘り方壁面に立てかけた状態で出土している。

出土遺物(第8図1～8)

1・3は埋甕に使用されていた土器である。1は微隆起帯で文様を区画する深鉢形土器の胴下半部、3は底部から直線的に開く鉢形土器の胴下半部である。2は胴部のふくらむ深鉢形土器の胴下半部で、全面に縄文RLがランダムに施されている。4・6は微隆起帯でアーチ状の区画文を構成する土器で、6は口縁部に幅広の無文帯が形成される。縄文は共にLRである。5は沈線でJ字状の文様を構成する土器で、区画内には縄文RLが充填されている。7は大型の無頭石棒である。両断面および側面の一部には荒割りの後に研磨が施されている。また、体部には数ヶ所に凹み穴が認められる。8は偏平な円磔を利用した多孔石で、一方に1つ他方に2つの錐揉み状の凹みが認められる。石材は7が花崗岩、8が安山岩である。これらの他に磨石4個が出土している。なお、土器はいずれも第8群土器に比定される。

C区4号住居(第9図)

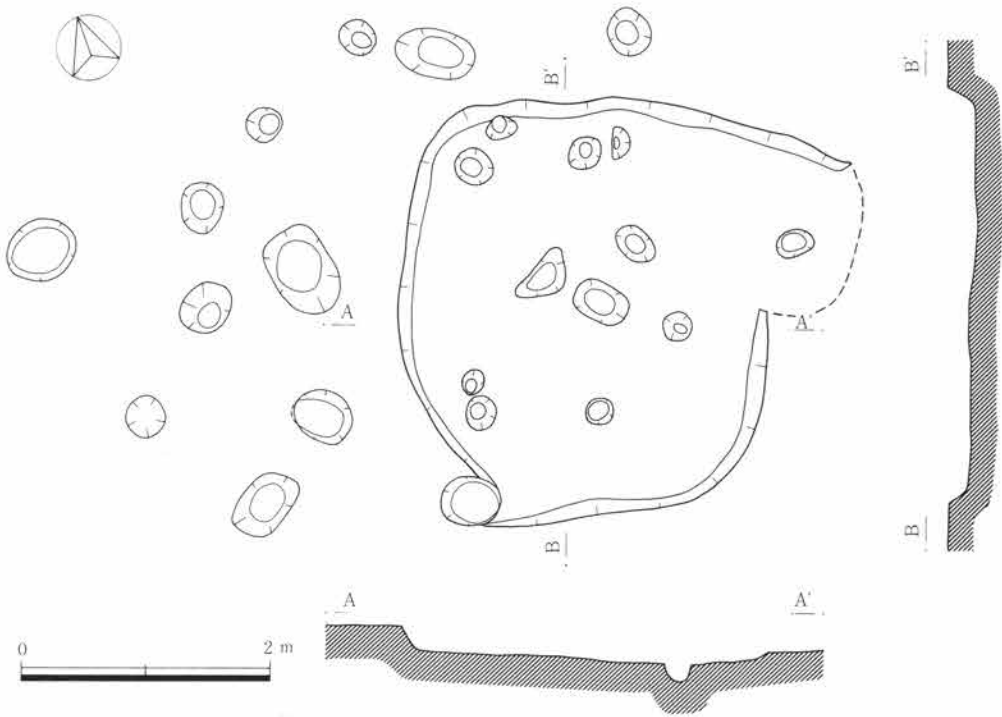
C区最南端1-Aグリッドに位置する。土器片が集中していたため掘り下げて調査を行なったが、多数のピットと不定形な落ち込みの検出にとどまった。落ち込み内からは加曾利E3式土器数片と打製石斧3点が出土したが、炉等は検出されていない。住居と認定するには不確定な部分が多い。

C区5号住居(第10図)

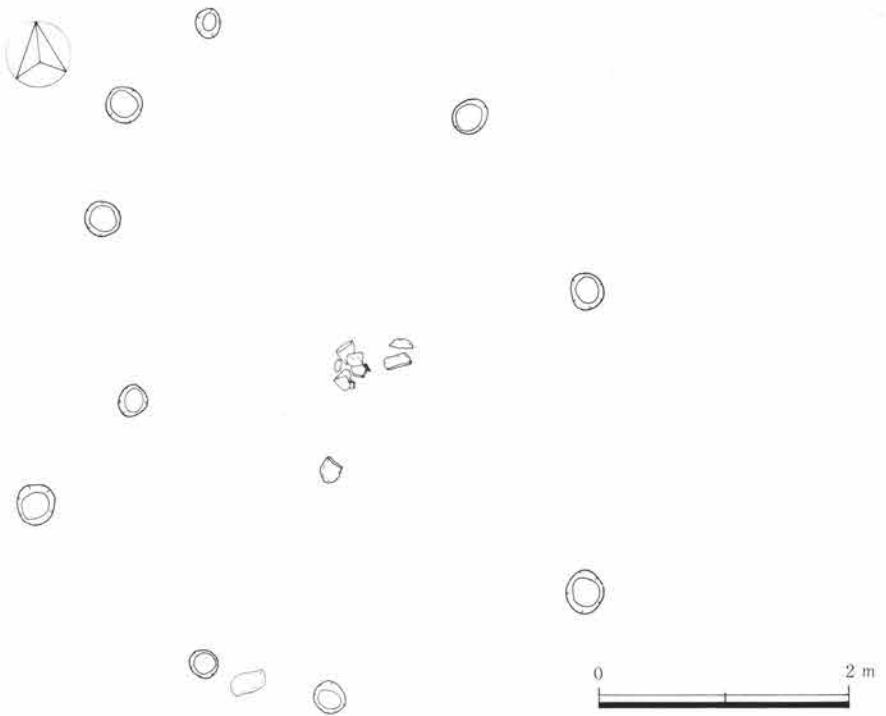
12号住居の西側、7-Dグリッドに位置する。合計10本の柱穴状ピットを検出したが、壁は検出できなかった。ピット群のほぼ中央に数個の礫が検出された。焼土は確認できなかったが、ピット群の配置と礫の位置から石囲い炉であった可能性が考えられる。遺物は加曾利E3式土器の破片が出土している。

C区10号住居

4号住居の北側、2-Bグリッドに位置する。5号住居同様、柱穴状ピットのみを検出にとどまった。ピットは不正円形状に並んで9本検出された。遺物は加曾利E3式土器の小破片が出土したのみである。



第9図 C区4号住居



第10図 C区5号住居

III 前原遺跡の調査内容

C区11号住居 (第11図)

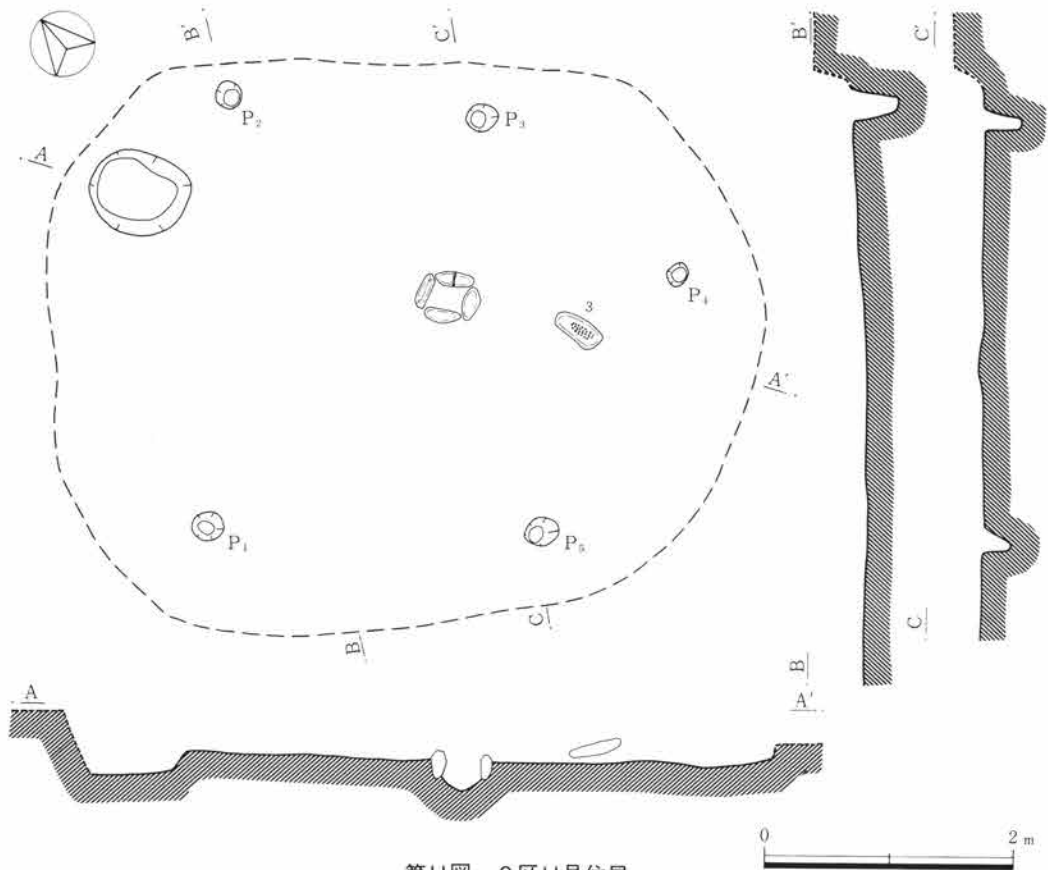
12号住居と東側で重複して検出されたが、切り合いの前後関係は不明である。また、南側を7号住居に切られている。プランについては、明確な立ち上がりが検出できなかった。床面は平坦だが、軟弱である。柱穴は炉を中心に5本検出された。深さはいずれも20~35cmである。炉は偏平な円礫4石で方形に組まれた石囲い炉で、規模は50×40cmと比較的小さく、深さは25cmである。なお、炉内から焼土は検出されていない。

遺物出土状態

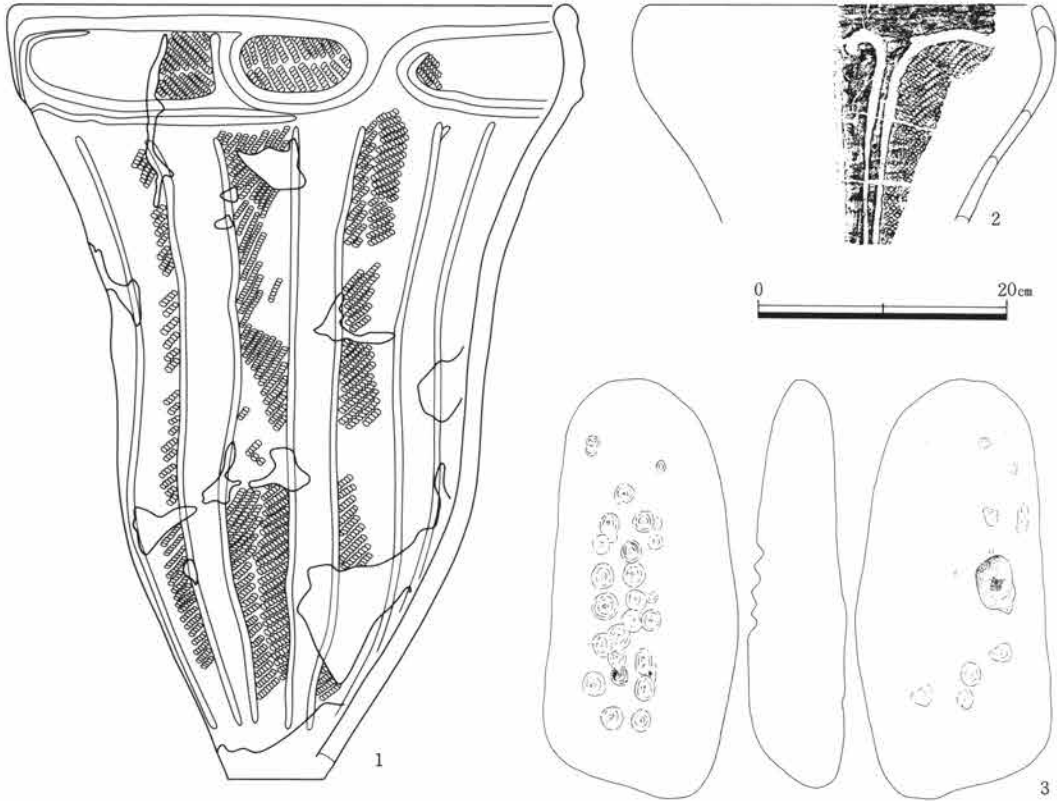
出土遺物は、いずれも床面から若干浮いた状態で出土した。(1)の大型深鉢は、炉の東側に散乱した状態で、また多孔石(3)は炉の西側から、それぞれ検出された。

出土遺物 (第12図1~3)

1は、口径45cm高さ61cmの大型深鉢である。器形は、胴部中程が若干括れるゆるやかなキャリパー形を呈す。底部は欠損しているが、器体の大きさに較べて小さく、不安定な形態である。文様は、渦巻文を簡略化した楕円文と楕円区画文を4単位連結して口縁部文様帯を構成し、胴部に



第11図 C区11号住居



第12図 C区11号住居出土遺物

幅広の無文帯を11本垂下させる。文様は沈線を主体に描かれるが、口縁部文様帯には低い隆帯が残存している。区画内には縄文RLが施される。2はキャリパー形の口縁部破片である。文様は、沈線によるアーチ状の区画文で構成され、その間に蕨手状沈線が施される。区画内は縄文RLで充填される。3は、扁平な河原石を利用した大型の多孔石である。両面に多数の錐揉み状の凹みが認められる。石質は安山岩である。石器は、この他に打製石斧・磨石・礫器・敲石が各々1個ずつ出土している。1、2は第7群土器に比定されよう。

C区12号住居（第13図）

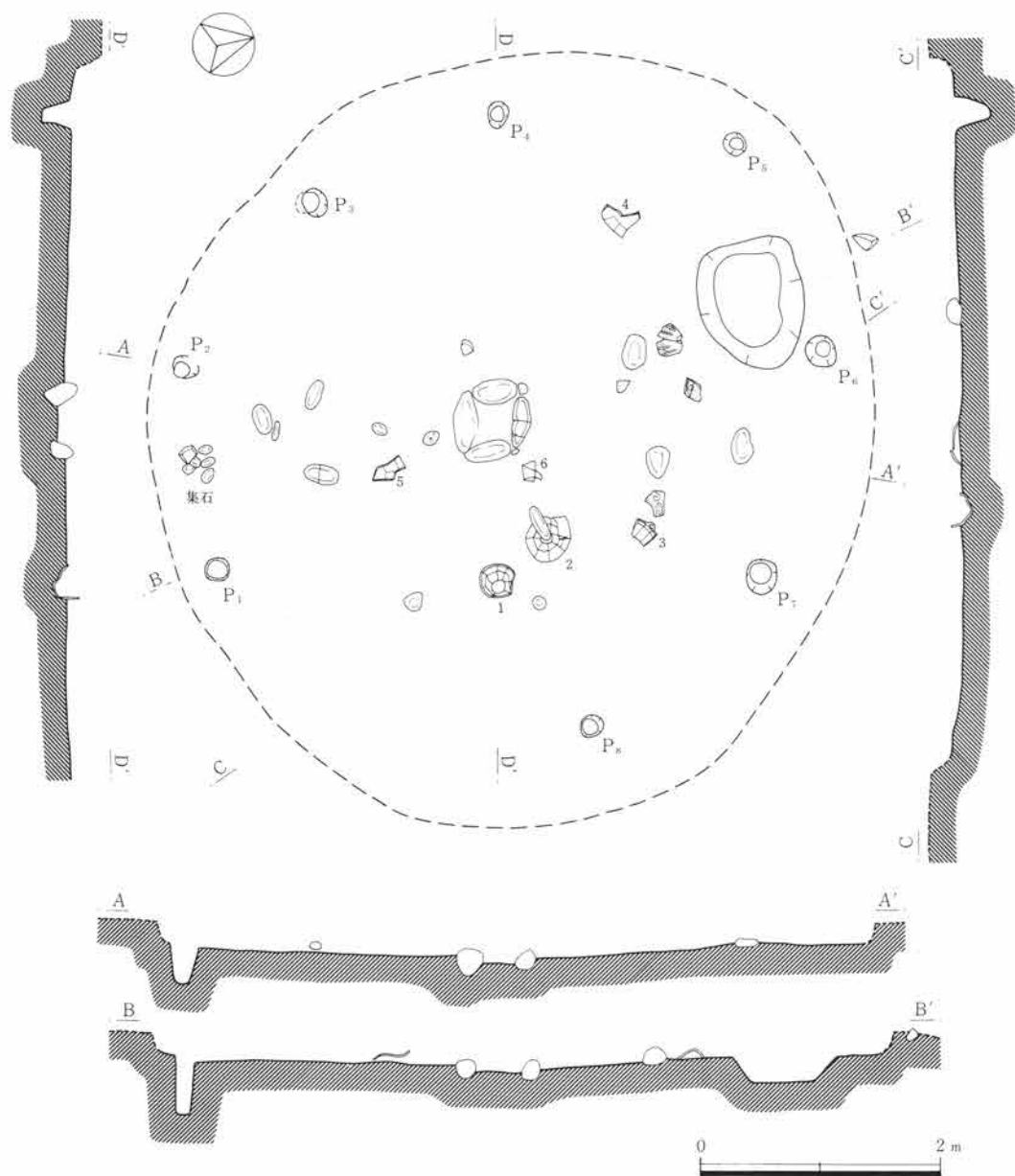
11号住居の西側、8-Fグリッドに位置する。壁面が不明確なため、形状は確定できない。床面も明確につかめなかったが、炉と埋甕のレベルを基準に精査した。その結果、柱穴は炉を中心に8本検出された。大きさは径15～25cm、深さが20～45cmで、1.8～2mの間隔をおいて配置されていることから、P₁とP₈の間にもう1本の柱穴が入り、9本柱になるものと思われる。炉は細長い円礫4石で方形に組まれた石囲い炉で、住居の中央に位置する。炉内から焼土は検出されていない。炉の東1mのところ埋甕を検出した。埋甕は口縁が若干炉の方向に傾いた状態で埋設されている。また、P₁・P₂柱穴間床面から、磨石5個がまとめて出土している。なお、本住居内に

III 前原遺跡の調査内容

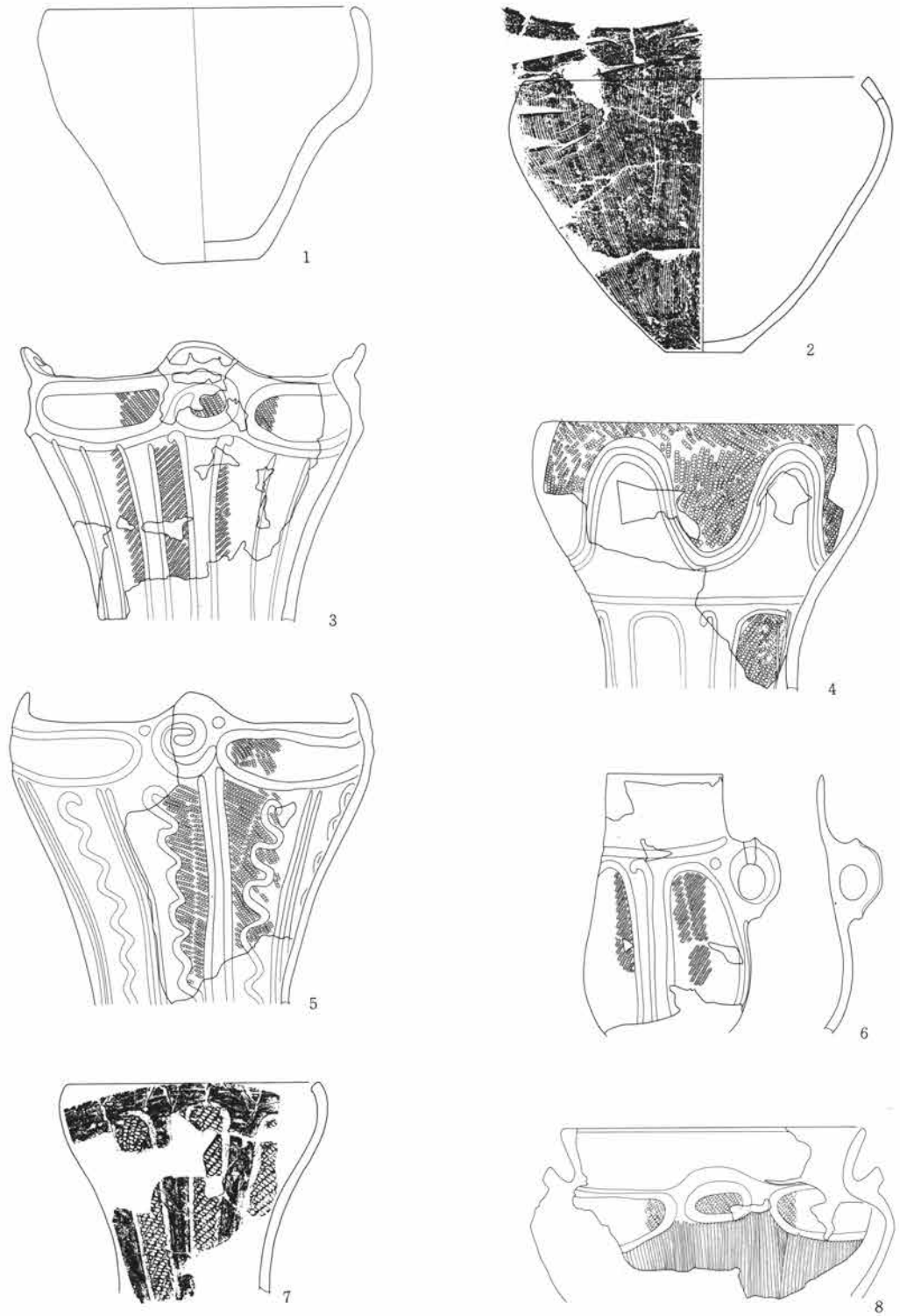
重複する5号土壇との切り合い関係は不明である。

遺物出土状態

土器の出土は比較的少なく、また完形品は埋甕のみである。埋甕のすぐ北側から、床面に伏せた状態で鉢形土器(2)が出土している。その他は覆土中からの出土であるが、大型破片(3~6)は床面に近い位置からの出土である。



第13図 C区12号住居



第14図 C区12号住居出土遺物

0 20cm

III 前原遺跡の調査内容

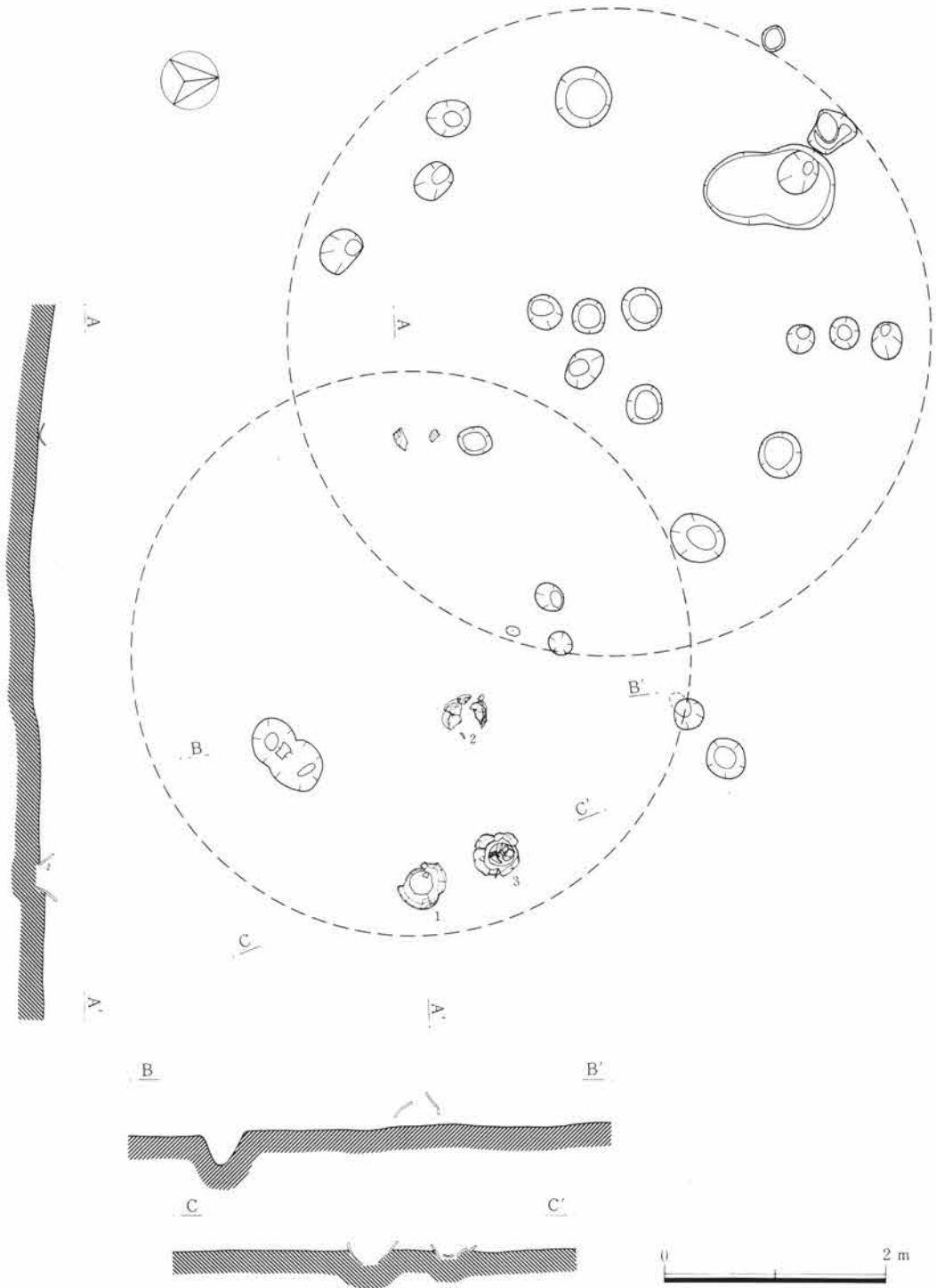
出土遺物 (第14図)

1は埋甕に使用された無文の完形土器である。器形は、口縁部が若干内湾する深鉢形を呈するが、器体は凹凸が激しく、いびつである。器面には丁寧な整形はなく、所々に指頭痕が認められる。色調は茶褐色で、器壁が厚く重量感がある。本土器は実用品としては不適當であり、このような土器が埋甕として使用されたことについて、注意する必要がある。2は、口縁部が内湾する鉢形土器である。文様は、口縁部に幅広の無文帯をおいて一条の沈線をめぐらし、以下に縦位の条線が施される。3は、キャリパー形を呈する深鉢形土器の胴上半部である。口縁部には、裏面に渦巻文を施した舌状突起が4つ付けられる。文様は、口縁部を渦巻文と楕円区画文を連結して4単位に構成し、胴部に幅広の無文帯を垂下させる。縄文はRL。4・5・7は、キャリパー形深鉢の大型破片である。4は、胴部中程に1条の沈線をめぐらして文様帯を二分し、上半を2条の沈線による波状区画文で構成し、下半をアーチ状区画文で構成する。また、胴下半部区画文間には蕨手状沈線を垂下させている。縄文はRLで、口唇下は羽状に施文させる。5は、口縁部に舌状突起が4つ付けられる。文様構成は、口縁部に渦巻文と楕円区画文を配し、胴部には無文懸垂帯と波状沈線を交互に垂下させている。縄文はLR。7は、アーチ状の区画懸垂帯を垂下させる土器で、区画内には縄文RLが充填されている。6は、胴部が若干張り出す器形の体部に、橋状把手を一つ付けたジョッキ状の土器である。口縁の一部および底部を欠損している。文様は、口唇下に幅広の無文帯をおいて1条の沈線をめぐらし、胴部にアーチ状の区画文を4単位施している。また区画文間には、蕨手状沈線が加えられる。把手は口縁下沈線に接して付けられ、両脇に円形の浅い刺突文が施される。縄文はRL。8は、口縁部が若干外反し、胴部が強く張り出す浅鉢形土器である。文様は、胴上半に楕円文と楕円区画文で文様帯を構成し、以下に縦位の条線が施される。また、楕円文の上部には舌状突起が付けられる。突起の単位は不明であるが、この文様帯は3の口縁部文様帯と共通した基本構成をとっている。縄文はLR。

以上の土器は、3・5は第7群1類に、7は同群2類に、2は同群5類に、8は同群6類にそれぞれ比定される。なお、石器は打製石斧6点、剥片石器13点、磨石10点、石鏃2点、石錐1点、小型磨製石斧1点、礫器2点、敲石3点が出土しており、この他に斧形軽石製品と埴形石製品が出土している。

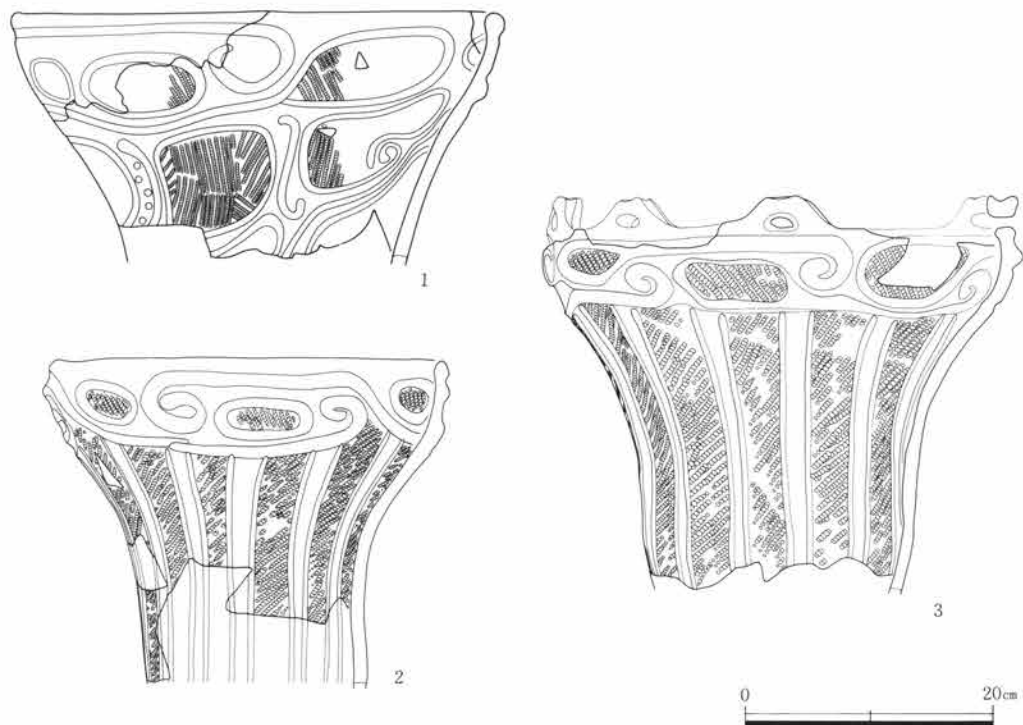
D区1号住居 (第15図)

4-Fグリッドに位置する。埋甕およびその西側1.5mの同一レベル上に倒置された土器の存在から住居と認定した。埋甕は、同一レベル上に80cmの間隔を置いて2個体検出されており、共に胴下半部を打ちかいた深鉢形土器を使用している。炉は検出されていない。また、西側で2号住居と重複するものと思われるが、両住居ともプランが不明確なため、切り合い関係は不明である。なお、埋甕の検出面は2号住居ピット群の検出面よりも約30cmほど低い。



第15図 D区1号住居(下) 2号住居(上)

III 前原遺跡の調査内容



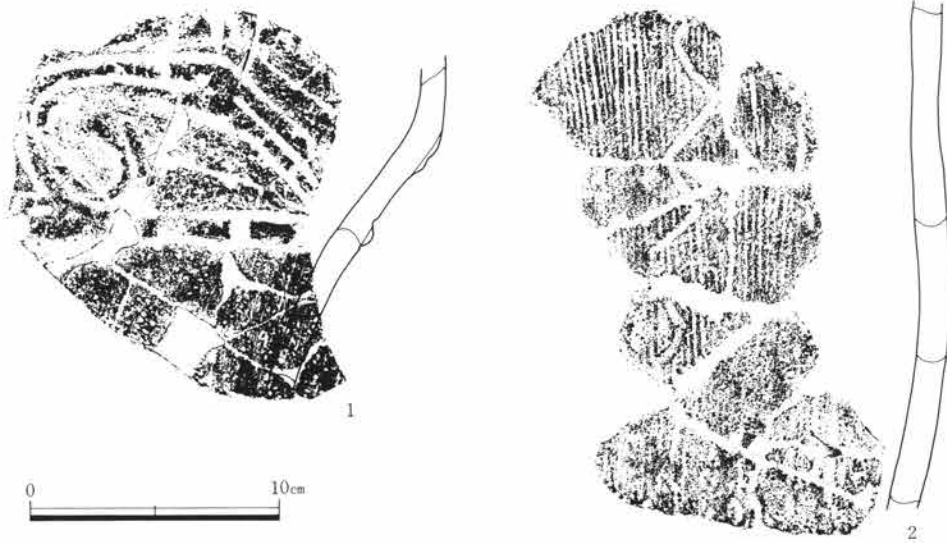
第16図 D区1号住居出土遺物

出土遺物（第16図）

1・3は、埋甕に使用されていた土器である。2は床面に倒置されていた土器である。いずれも口縁部がキャリパー状の深鉢形を呈し、胴下半部を欠損している。1は、口縁部を渦巻文と楕円区画文を入り組み状に連結して構成し、胴部には方形の区画文が施される。また胴部区画文間には、渦巻文やS字文・列点が施される。縄文はRL。2は、渦巻文を入り組み状に4単位連結し、その間に楕円区画文を配して口縁部文様帯を構成し、胴部に無文懸垂帯を14本垂下させる。縄文はRL。3は口縁部に、楕円形の孔を施した山形状突起が6つ付けられている。文様は、口縁部に渦巻文と楕円文を入り組み状に連結して7単位描き、胴部に無文懸垂帯を16本垂下させる。区画内はRLの縄文で充填される。以上3点とも第7群1類に含まれる。

D区2号住居（第15図）

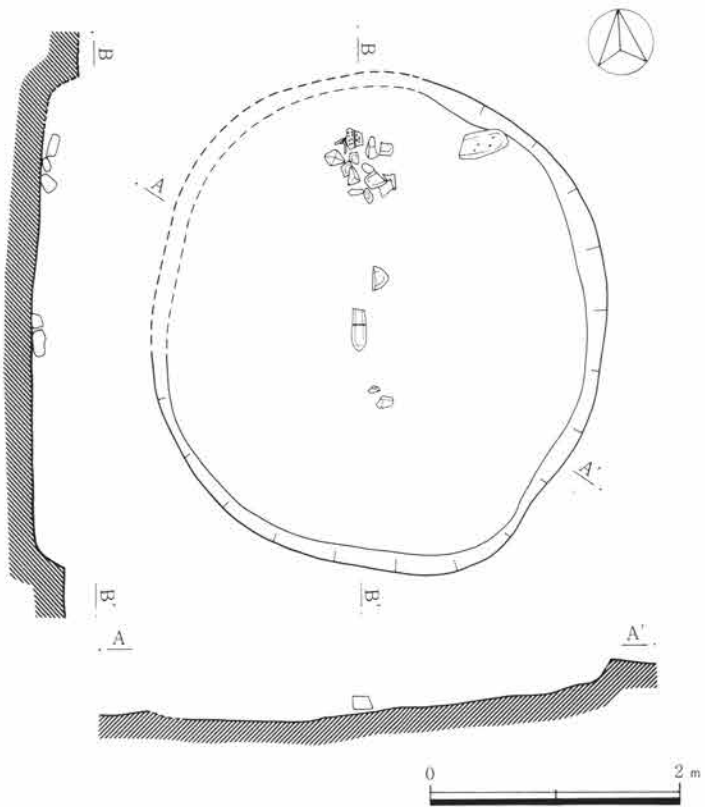
1号住居に重複して確認された。土器片が比較的集中していたため精査を行なったが、検出された遺構は柱穴状のピット17本のみであった。ピット群には規格性が認められないが、一応住居として扱っておく。遺物は加曾利E3式土器が破片で出土している。



第17図 D区3号住居出土遺物

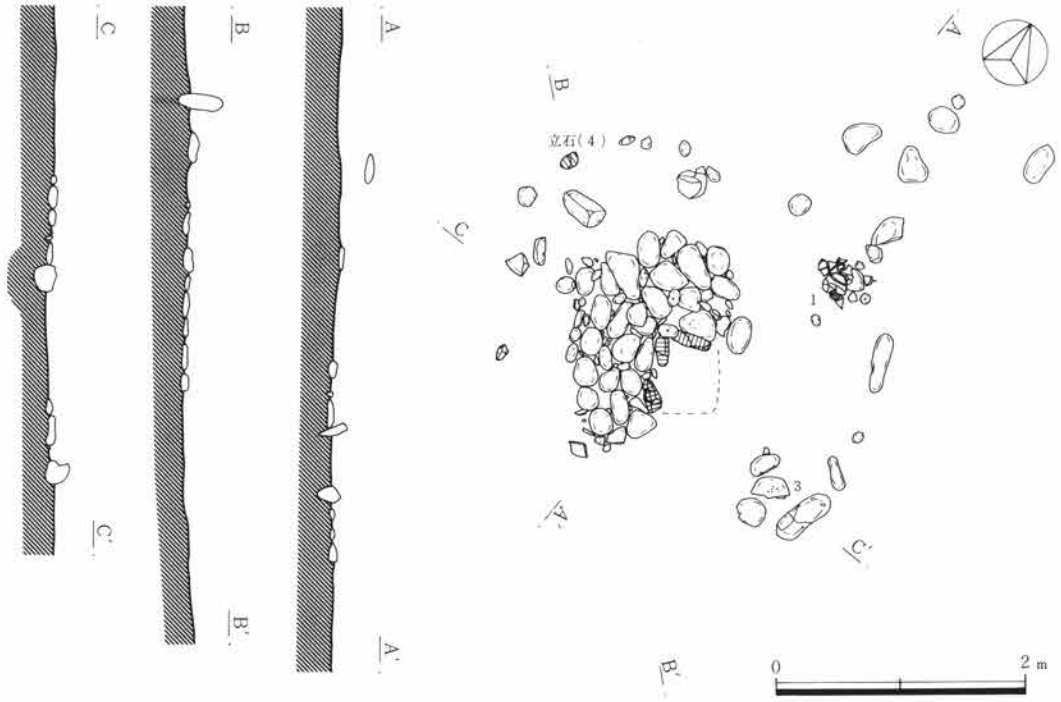
D区3号住居 (第18図)

3-Bグリッドに位置する。プランは北西の一部が不明確であるが、長軸4m短軸3.6mのほぼ円形を呈すると思われる。壁は丸みをもって立ち上がる。床面は東から西に向かって緩やかに傾斜するが、ほぼフラットな面を保っている。柱穴は検出されていない。炉も未検出であるが、炉石と思われる加熱を受けた細長い礫が、住居址中央部の床面から検出されている。また、その西側約1mの床面から、加熱を受けた礫群が検出されており、

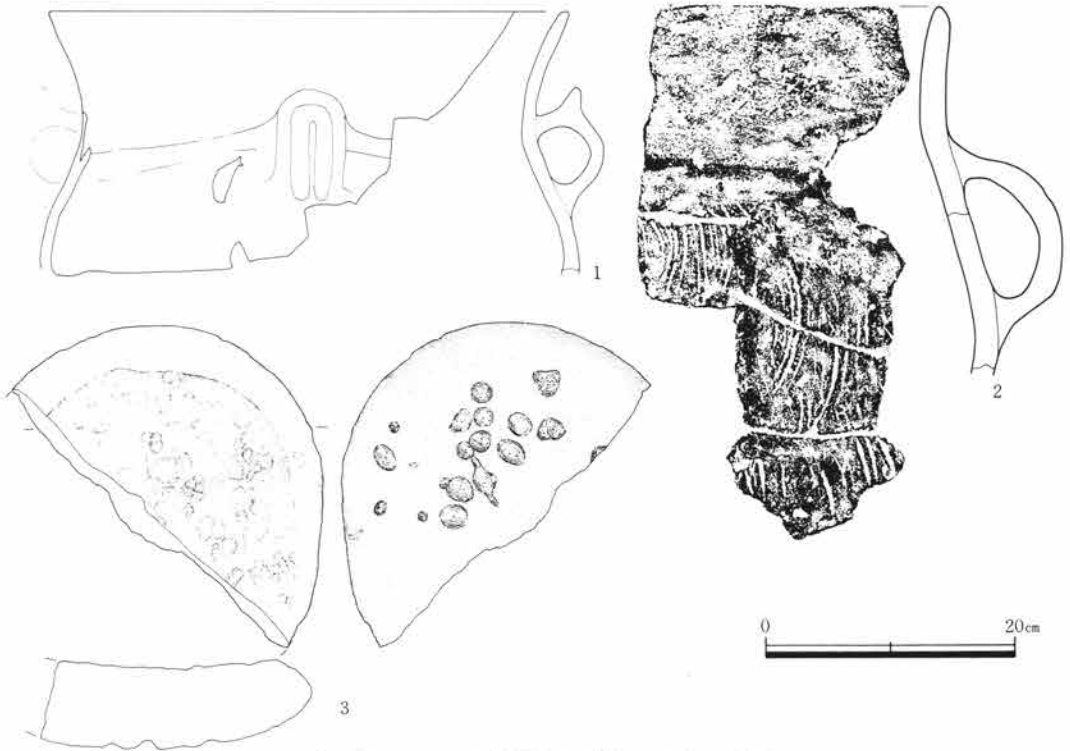


第18図 D区3号住居

III 前原遺跡の調査内容



第19図 2 T I号住居
(スクリーンストーン部は炉石)



第20図 2 T I号住居出土遺物 (1) (2は $\frac{1}{3}$)

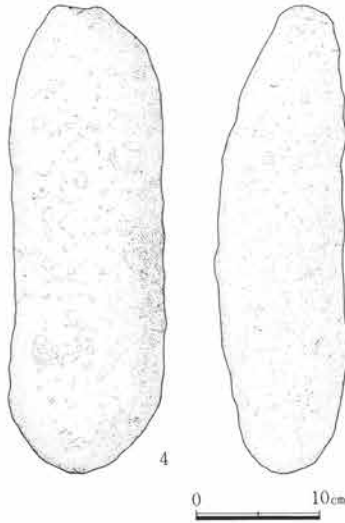
これらも炉石の一部と思われる。

遺物出土状態

壁の残っている住居の中では、遺物の少ない住居である。覆土中から若干の土器片および小礫が出土している。床面からは、礫群中に多孔石の破片一点と土器片(1)が検出された。また、北側壁際から大型円礫一点が出土している。

出土遺物 (第17図 1～2)

1は、頸部に隆帯をめぐらして文様帯を区画し、口縁部に隆帯による渦巻文を描く土器である。器面が荒れているため、地文は不明である。2は、地文に縦位の条線を施し、波状沈線を垂下させる胴部破片である。いずれも第5群土器に比定される。



第21図 2 T 1号住居出土遺物 (2)

2 T 1号住居 (第19図)

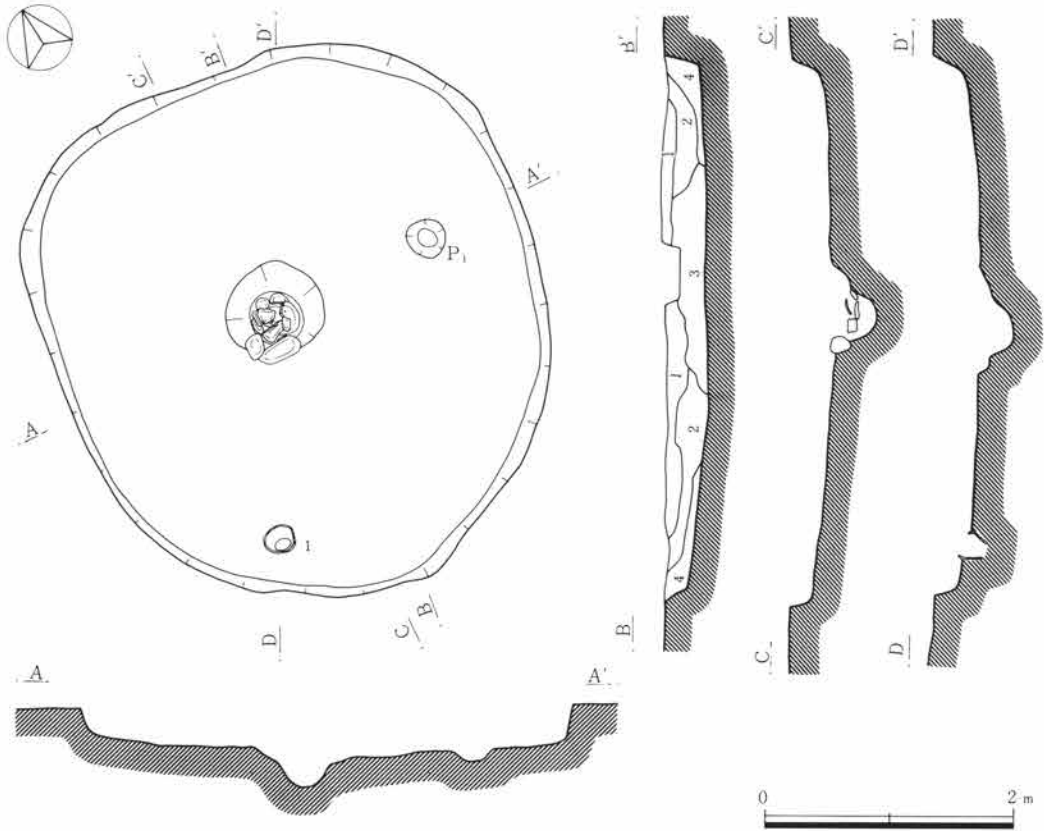
2トレンチの南端から検出された敷石住居である。敷石の大半が攪乱を受けてぬき取られているため形状は不明であるが、南東側に並ぶ細長い礫が、敷石プランの縁辺に配されたものと思われる。敷石は大型の偏平な河原石で生まれ、間を小さな円礫で根詰めをしている。炉は方形の石囲い炉であるが、南東の2辺がぬき取られている。また、炉の北側約1.5mに立石が検出されている。柱穴は確認できなかった。

遺物出土状態

1は炉の東側敷石面に密着して出土した。3は南側縁辺の敷石に使用されていた。2は覆土中からの出土である。

出土遺物 (第20図・第21図)

1は、一对の橋状把手を持つ鉢形土器である。第12図8, 第21図8の系統を引く土器であるが、器体は大型化し、湾曲が弱く器高は高い。また、胴部上半の文様帯は消失しているが、頸部をめぐり隆帯がその痕跡をとどめている。把手端部は突起状を呈し、そこに「∩」状の文様が施されている。2は、1と同形の鉢形土器の破片である。器体の湾曲はさらに弱く、頸部をめぐり隆帯は微隆起線へと変化している。また、把手の突起および正面の文様は消失している。胴部および把手には、条線が施されている。3は石皿の破損品である。裏面には錐揉みによる凹み穴が多数認められるが、表面は敲打痕のみで仕上げがなされていないことから、製作途中で割れてしまったものかもしれない。石質は安山岩である。4は、立石に使用されていた柱状の細長い円礫である。表面の荒れが著しく、加工の有無等は不明である。石質は溶結凝灰岩である。また、これらの他に、磨石2点が出土している。なお、1, 2の土器は、第8群土器に比定されよう。



第22図 3 T 1号住居

3 T 1号住居 (第22図)

3トレンチ9区に位置する。径約4.3mの不正円形を呈する。床面はフラットで、壁高は25~30cmを測る。柱穴は1本のみ検出された。炉は石囲い炉で、住居の中央に位置する。残存している炉石は2石のみであるが、炉内に落ち込んでいる礫は強い加熱を受けていることから、これが炉石にあたろう。また、南壁際に埋甕が検出された。埋甕は、胴下半部を打ちかいた深鉢を使用しており、炉の方向に若干傾けて埋設している。

遺物出土状態

器形復元できた土器は7個体あるが、全て覆土中からの出土である。この他にも破片が少量出土している。

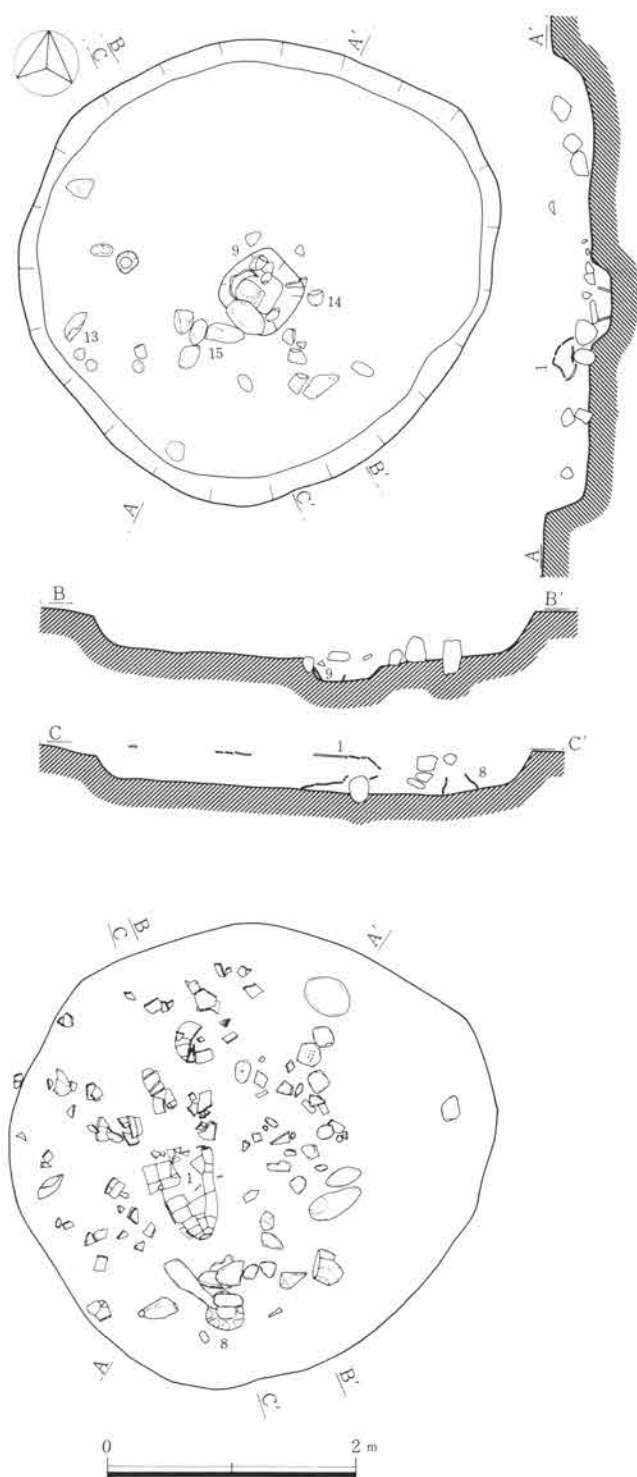
出土遺物 (第23図)

1は埋甕に利用された土器である。器形は、口縁部がキャリパー状の深鉢形を呈し、口縁には突起が4つ付けられる。文様は、沈線による渦巻文と楕円区画文で口縁部を4単位に構成し、胴部に無文懸垂帯12本を垂下させている。縄文はLR。2は、わずかに内湾しながら開く波状口縁



第23図 3 T 1号住居出土遺物

の深鉢形土器である。文様は、頸部をめぐる沈線により、口縁部文様帯を胴部文様帯とに区別される。口縁部は、渦巻文と楕円区画文で4単位に構成され、胴部には幅広の無文懸垂帯を垂下させる。胴部区画内には波状懸垂沈線が施される。縄文はLR。3は口縁部が若干内湾する鉢形土器である。文様は、口唇下に刺突を伴う2条の沈線をめぐらし、胴部には無文懸垂帯を垂下させている。縄文はRL。4・5は、口縁部がキャリパー状を呈する深鉢形土器である。文様は、ともに口縁部を渦巻文と楕円文で4単位に構成し、胴部に無文懸垂帯を垂下させる。口縁部文様の表出は、4が隆帯を主体とするのに対して、5は沈線のみで描かれている。縄文は共にRL。6は底部から直線的に開口する小型の深鉢形土器である。文様は、口縁部を円形文と楕円文で2単位に構成し、胴部に無文懸垂帯を垂下させる。縄文はLR。7は一对の橋状把手を持つ鉢形土器である。文様は胴部上半に楕円区画文が施される。縄文はLR。8は器面全面に縦位の条線が施された深鉢形土器の口縁部である。口唇は外削ぎ状を呈し、尖端が薄くなっている。石器は磨石6点、石錘1点が出土している。なお、以上の土器は1・2・4～6が第7群1類に、8が同群4類に、7が同群6類に各々比定される。



第24図 4 T 1号住居

4 T 1号住居(第24図)

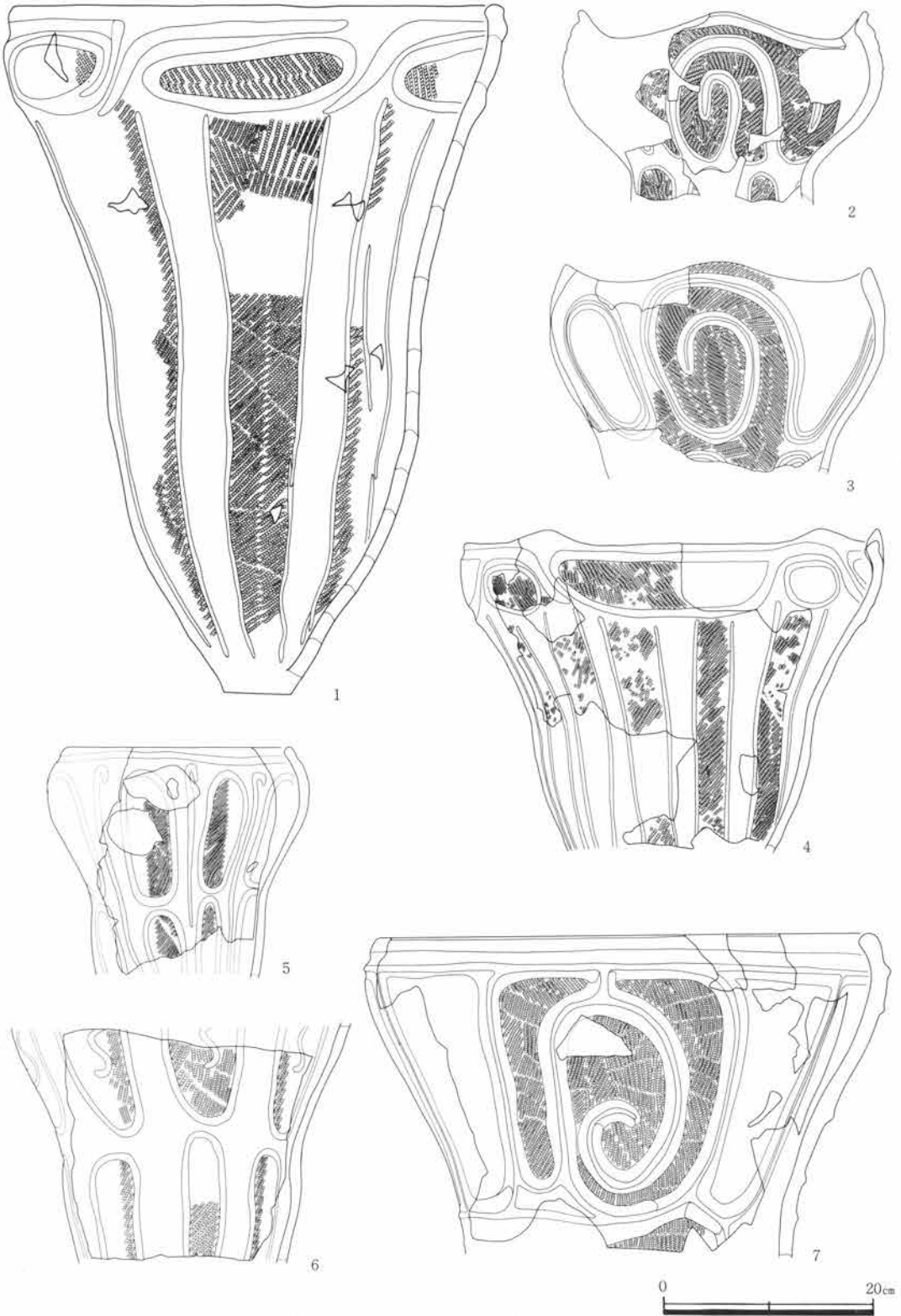
4トレンチ8・9区東側拡張区で検出された。径3.7mの円形を呈する。壁は床面から緩やかな丸みをもって立ち上がる。床面は、炉の上端レベルを手がかりに精査したが、良好な面は検出できなかった。そのため、いくつかの礫が床面に食い込んでいることに当初疑問を感じたが、炉の状態や倒置土器のレベルから考えて、極端な誤差はないものと思われる。炉は土器埋設炉で住居のほぼ中央に位置する。掘り方は60cmの方形を呈する。炉周辺の床面上からは多数の大型円礫が出土している。柱穴は検出されていない。

遺物出土状態

覆土中から多量の土器、石器大小の礫が、一括投棄された状態で出土した。いわゆる吹上パターンの典型例である。床面からは(13・14)の石器、および炉の南側から倒置された土器(8)が出土している。

出土遺物(第25図～第27図)

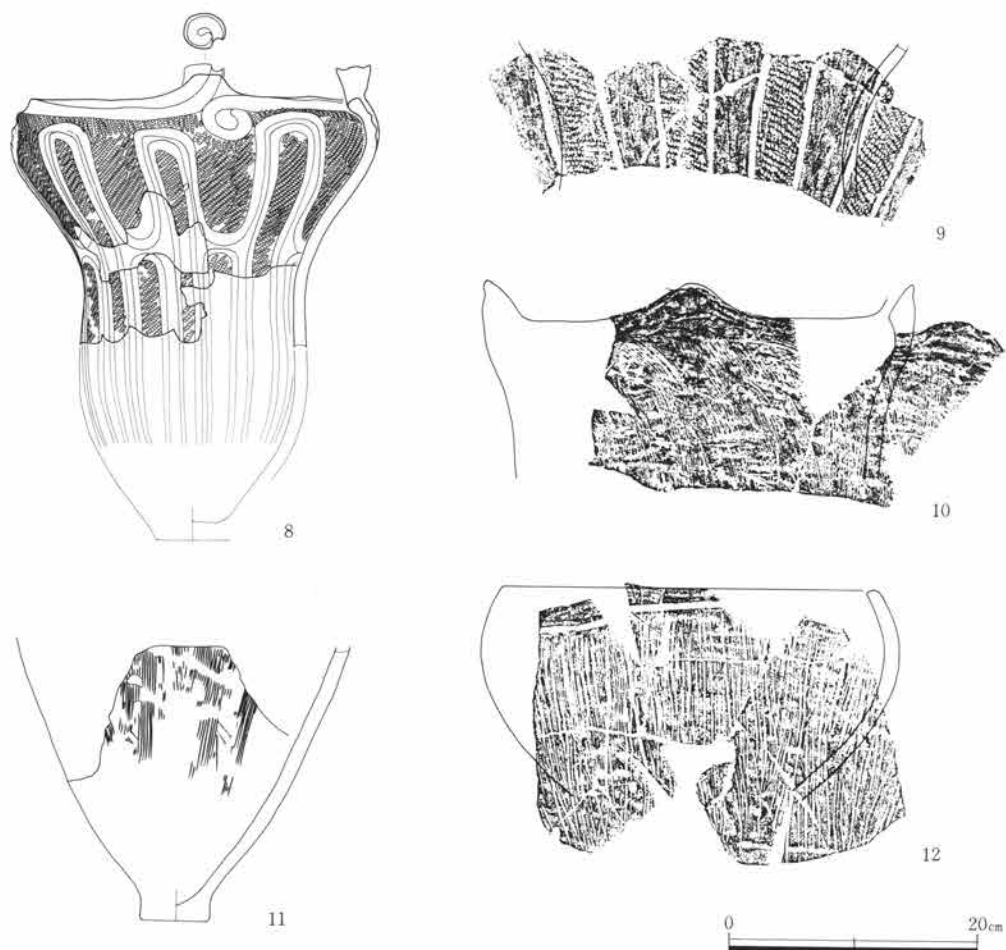
1は口径47cm器高65cmの大型土器で、底部を欠損している以外は殆んど無傷である。器形は、口縁部が僅かに内湾し、胴部中程が若干括れる深鉢形を呈する。文様は、口縁部にクランク状の沈線を伴う楕円区画文を7単位



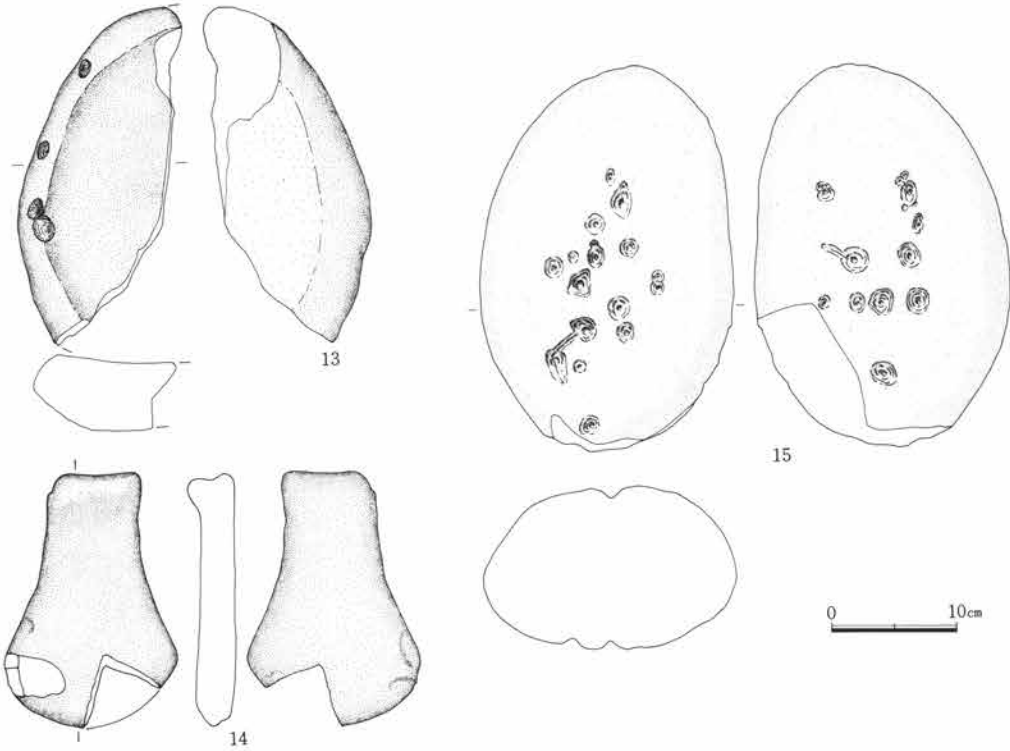
第25図 4 T I号住居出土遺物 (1)

III 前原遺跡の調査内容

配し、胴部に幅広の無文懸垂帯を7本垂下させている。縄文はRL。2は口縁部が大きく内湾し、胴部中程が強く括れる深鉢形土器の大型破片である。口縁は4単位の波状を呈するものと思われる。文様は胴部中程の括れを境に上下に分かれる。上半は、波頂部下の縄文帯による渦巻状の文様とそれをとり囲む区画文で構成され、下半にはアーチ状区画の縄文懸垂帯を垂下させている。区画内にはRLの縄文を充填している。3は2とほぼ同様の器形・文様構成をとる大型破片であるが、2と較べて器形の湾曲が弱い。また文様も、2では無文部をポジティブな部分として扱っているのに対し、3は隆線による主文様として表現している。また、隆線の両側には幅広のなぞりを加えている。縄文はRL。4は、口縁部が若干内湾し頸部が僅かに括れる深鉢形土器である。口縁には山形の小突起が付けられる。文様は、円形と楕円形の区画文で口縁部文様帯を構成し、胴部に幅広の無文懸垂帯を垂下させている。縄文は0段3条RL。5・6は口縁部がキャリパー状を呈し、胴部中程が僅かに括れる深鉢形土器の大型破片である。文様は胴部中程の括れを境に、上半に縦位の楕円区画を配し、下半にアーチ状の区画懸垂帯を垂下させる。5は口唇下に一条の沈線をめぐらし、区画文間に蕨手状沈線を垂下させている。6は、上半の区画文内に波状沈線が



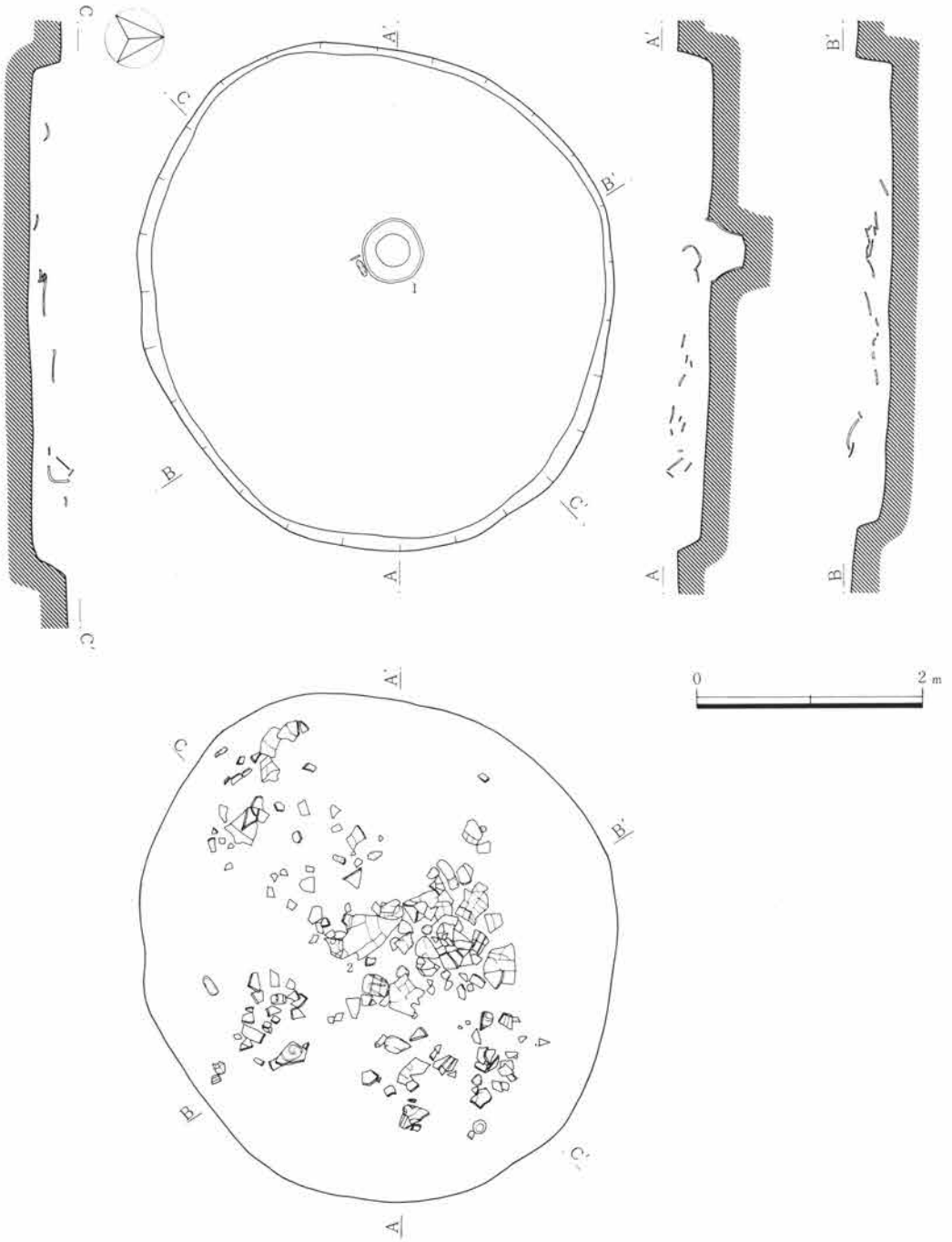
第26図 4 T I号住居出土遺物 (2)



第27図 4 T I号住居出土遺物 (3)

施される。区画内を充填する縄文は、5が0段4条RL、6がRLである。7も5・6とほぼ同様の器形を呈する。文様は、隆線による渦巻状の区画文で構成される。隆線の両側には、3同様のなぞりを加えている。縄文はRL。8は床面に倒置されていた土器で、胴下半部を欠損している。器形は、口縁部が内湾し頸部が強く括れる深鉢形を呈する。口縁には棒状の突起が一つ付けられ、口唇下をめぐる沈線は一方がこの突起下で渦巻文を描き、一方は突起上へ連なっている。突起上端が欠損しているため不明であるが、おそらく突起上で渦巻文を描くものと思われる。胴部文様は、波状区画とアーチ状の区画懸垂帯を入り組ませて構成しているが、胴部中程の括れで文様を上下に分ける意識が窺える。文様は幅広の沈線で描かれるが、一定の間隔で意識的に残されていた沈線間は隆線状を呈し、3や7の区画文と同様の効果が認められる。縄文はRL。9は炉内埋甕に使用された土器である。口縁部文様帯を持ち、胴部に幅広の無文懸垂帯を垂下させる深鉢であるが、口縁部および胴下半部を欠損している。縄文はLR。10・11は全面に条線が施された深鉢形土器である。10は口縁が4単位の波状を呈する。12は、口唇下に無文帯をおいて一条の沈線をめぐるし、以下に荒い条線を施した鉢形土器である。13は石皿の大型破片で、表面の縁部に錐揉み状の凹穴が4つ付けられている。石質は安山岩。14は閃緑岩製の砥石である。15は両面に錐揉み状の凹穴を付けた多孔石である。石質は安山岩。またこの他に打製石斧2点・磨石2点・礫器1点が出土している。なお土器のうち、1・4・9は第7群1類に、5・6・8は同群2類に、3・7は同群3類に、10・11は同群4類に、12が同群5類に・2は第8群3類に各々比定される。

III 前原遺跡の調査内容

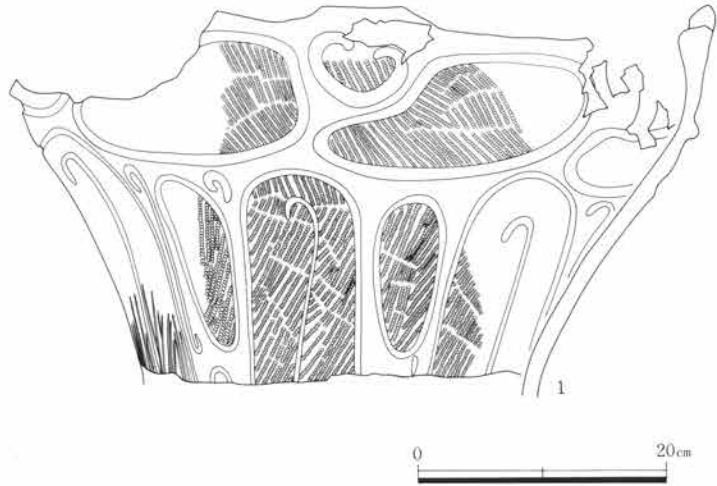


第28図 4 T 2号住居

4 T 2号住居

(第28図)

4号住居の南2m、4トレンチ7区に位置する。4.6m×4.2のほぼ円形を呈する。壁高は20~30cmを測る。床は良好な面が検出された。炉は口径58cmを測る大型土器(第27図)を使用した埋甕炉で、住居の中央よりやや北西寄りに位置する。柱穴は検出されていない。



第29図 4 T 2号住居出土遺物 (1)

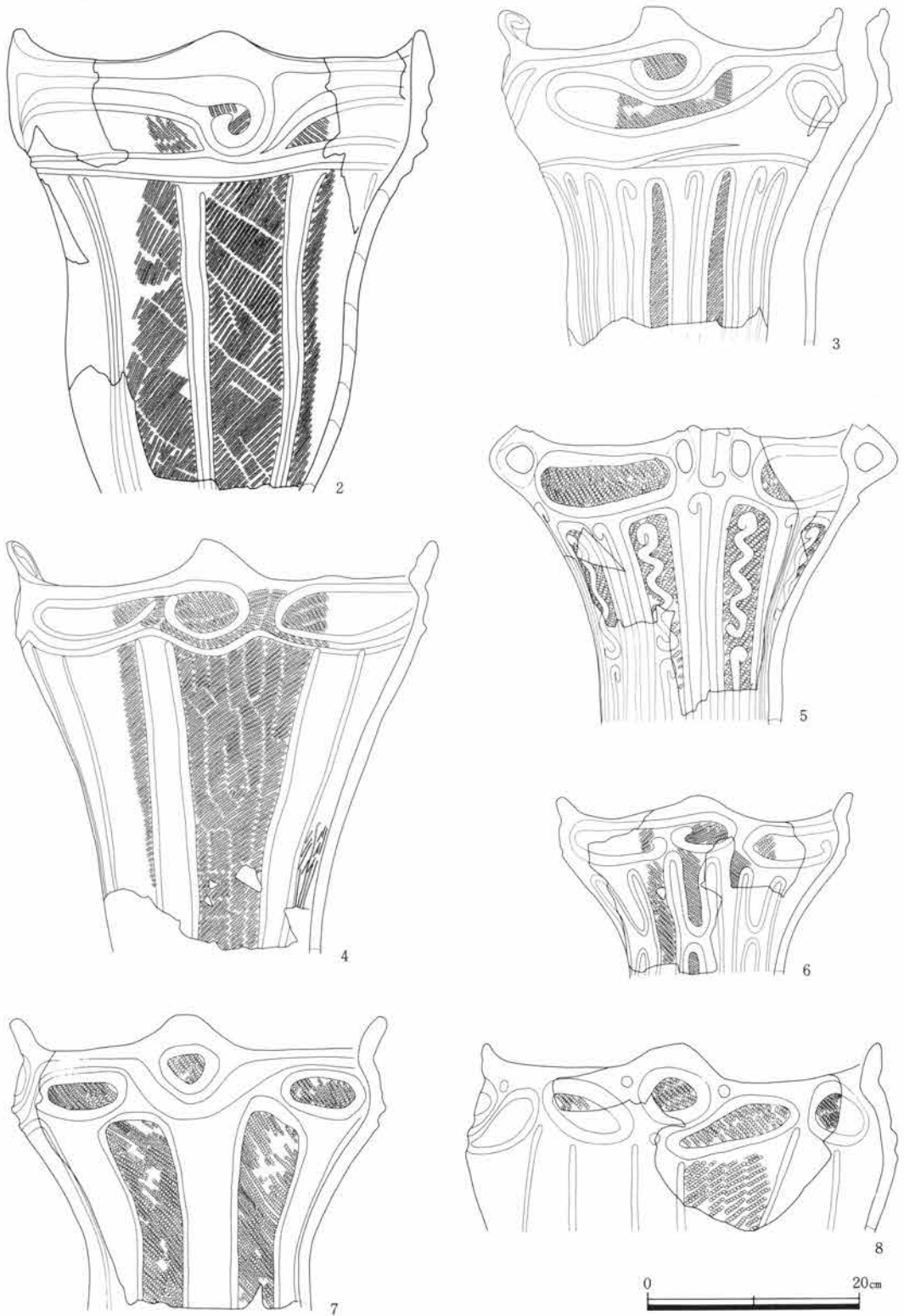
遺物出土状態

本住居からは、23個体分の復元可能な土器と共に、打製石斧5点・磨石2点・石鏃1点が出土しており、最も遺物量の豊富な住居である。これらの遺物は(1)を除いて、全て覆土中からの出土であり、床面からは若干の土器小片が出土したのみである。4 T 1号住居同様、吹上パターンの典型例である。

出土遺物 (第29図~第32図)

1は炉に使用されていた大型の深鉢形土器で、胴下半部が打ち欠かされている。口縁部には突起が4つ付けられるが、欠損している。文様は、渦巻文を簡略化した円形文と楕円形の区画文で口縁部文様帯を構成し、胴部はアーチ状区画の縄文懸垂帯と縦位の楕円区画文で構成される。また、胴部の区画文間および区画内には蕨手状沈線やS字状文が施される。縄文はRL。2は口縁部が直立し、頸部が僅かに括れる深鉢形土器で、口縁は4単位の小波状を呈す。口縁部は、隆帯による渦巻文とそれを連結する楕円状の区画文で構成し、頸部に隆帯をめぐらして文様帯を明確に区画している。胴部には比較的幅の狭い無文懸垂帯を垂下させる。縄文はRL。3~8は、口縁部がキャリパー状を呈し、胴部中程が僅かに括れる深鉢形土器である。口縁には各々舌状突起が4つ付けられ、口縁部文様はこの突起を中心に構成される。3・4は突起の裏側に渦巻文が施されている。3は口縁部に渦巻文と楕円区画文を連結した単位文様を入り組み状に4単位配し、若干の無文部において沈線を一条めぐらし、文様帯を区画している。胴部にはアーチ状区画の懸垂帯と蕨手状沈線を交互に垂下させている。縄文はRL。4は口縁部に渦巻文と楕円区画文を連結した単位文様を4単位配し、下端に沿って沈線を一条めぐらして文様帯を区画し、胴部には幅広の無文帯を垂下させている。縄文はRL。5は突起下に小さな橋状把手が付くが、口縁の突起は欠損している。口縁部文様帯は把手間に楕円区画文を配して構成し、胴部にはアーチ状区画の縄文懸垂帯を垂下

III 前原遺跡の調査内容



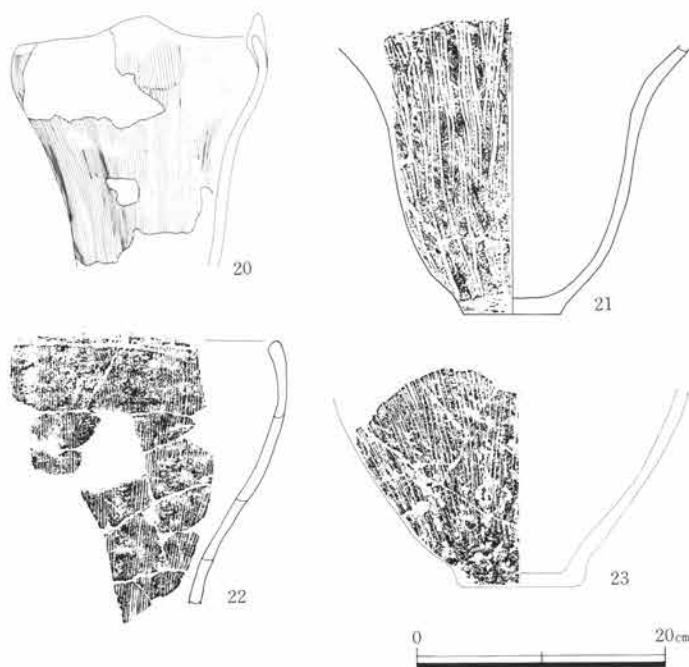
第30図 4 T 2号住居出土遺物 (2)

1 縄文時代の遺構と遺物



第31図 4 T 2号住居出土遺物 (3)

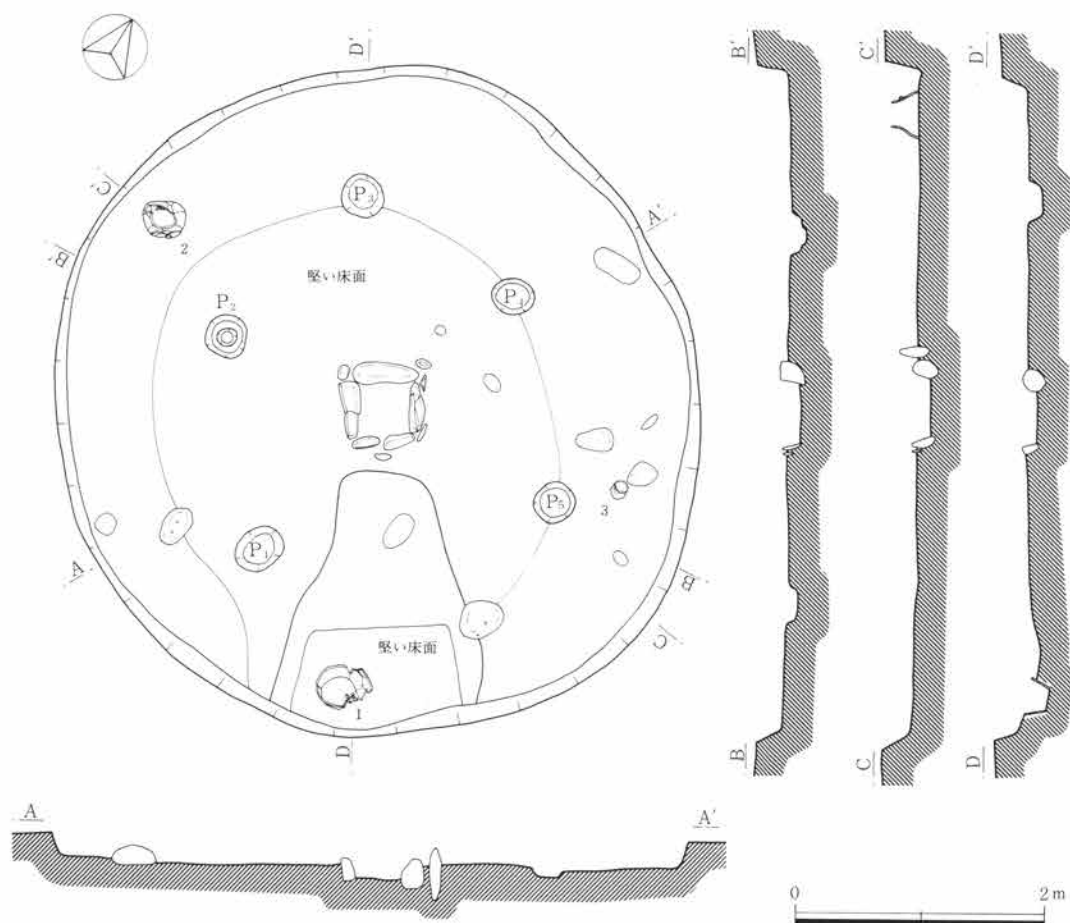
III 前原遺跡の調査内容



第32図 4 T 2号住居出土遺物 (4)

させている。また、胴部の区画文内や間には蕨手状沈線が施される。縄文はRL。6は口縁部を4と同様の文様で構成し、胴部はH字状の区画文で構成される。縄文はLR。7・8は口縁部を円形文と楕円区画文で構成する土器である。7は区画文間を千鳥状に沈線をめぐらし、胴部にアーチ状区画の縄文懸垂帯を垂下させる。8は胴部に幅広の無文懸垂帯を垂下させている。縄文は共にRLである。9は口縁部が若干内湾し、胴部中程が僅かに括れる大型の深鉢形土器である。文様は、口縁部を渦巻文と楕円

区画文で構成し、胴部は2本の隆起線による渦巻文でダイナミックに構成される。胴部文様を構成する隆起線の両側にはなぞりを加えて、文様効果をあげている。また、文様帯間には若干の無文部を設けて文様帯区画を明確にしている。文様の構成単位については、欠損部が多いため不明である。縄文はRL。10は口縁部が内湾しながら大きく開く、深鉢形土器の大型破片である。文様は頸部をめぐる沈線で明確に分けられる。口縁部は、口唇直下に1条の沈線をめぐらして縄文施文部を区画し、その間に2条の平行沈線による波状文を施し、胴部にはアーチ状区画の縄文帯と蕨手状沈線を交互に垂下させている。区画内はRLの縄文で充填されるが、口唇直下の沈線下1帯のみ横位に、他を縦位に施文して羽状を構成している。11~19は口縁部文様帯を喪失した段階の土器群である。細部の相違は認められるものの、器形・文様構成ともにほぼ規格化された一群である。器形は口縁がキャリパー形を呈する深鉢形土器で、口縁は平縁を基本とするが、舌状の突起を1つ付すものも認められる(15・19)。文様は、胴部上半の波状文とアーチ状区画の懸垂文が括れ部分で分かれるもの(11・12)、入り組み状に連結するもの(13~16)、アーチ状区画の懸垂文を口唇直下から垂下させるもの(17~19)とがある。いずれも沈線による区画文を主体としており、区画内外にS字文や波状文を付したり(12・15・16)、懸垂文間に蕨手状沈線を垂下させるのも大きな特徴である。また、11・12・16のように口唇直下に1条の沈線をめぐらし、縄文施文部を区画するものもある。文様の単位は、16が6単位・14が7単位・12・13・19が8単位で各々構成されている。11・12は同様の文様構成をとるが、12では無文部に波状懸垂文と蕨手状沈線が施されるのに対し、11では胴上半部の波状文区画内を充填する縄文が、下半にまで带状に施文されてい



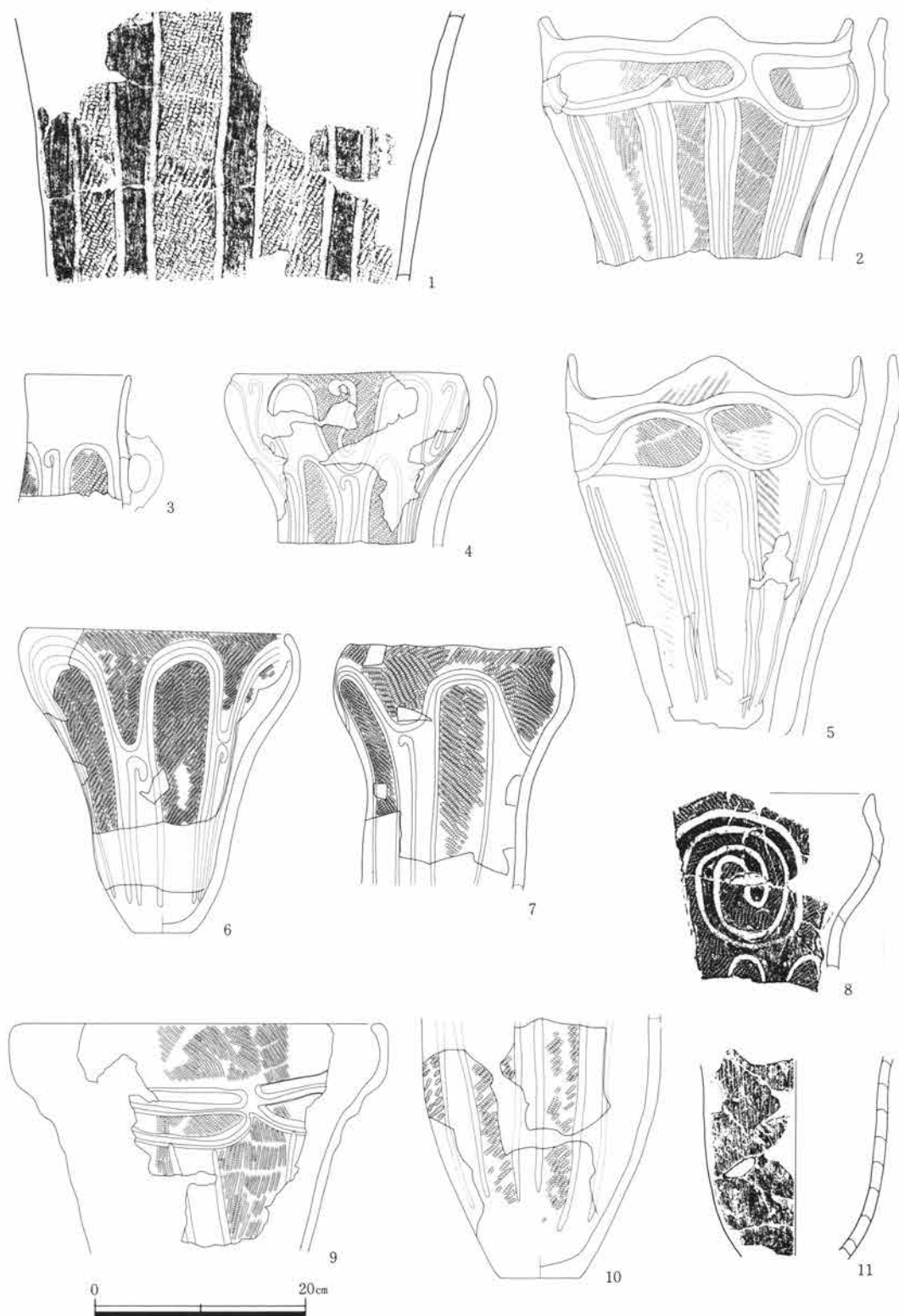
第33図 4 T 4号住居

る。13・14はまったく同一の文様構成をとっている。17は鉢形を呈する土器であろう。18は無文帯でアーチ状区画の懸垂文を構成する。区画内を充填する縄文は、11がLRの他は全てRLである。11・13～15・18は、口縁部1帯のみ横位に、他を縦位に施文して羽状を構成している。20～23は、全面に縦位の条線あるいは沈線を施す一群である。20～22は、11～19と同様の器形を呈する深鉢形土器である。20は口縁に舌状突起が1つ付けられる。22は口唇直下に1条の沈線が施される。以上の土器は1～9が第7群1類に、10～19が同群2類に、20～23が同群4類に各々比定される。なお、石器は石鏃1点・打製石斧5点・磨石2点が出土している。

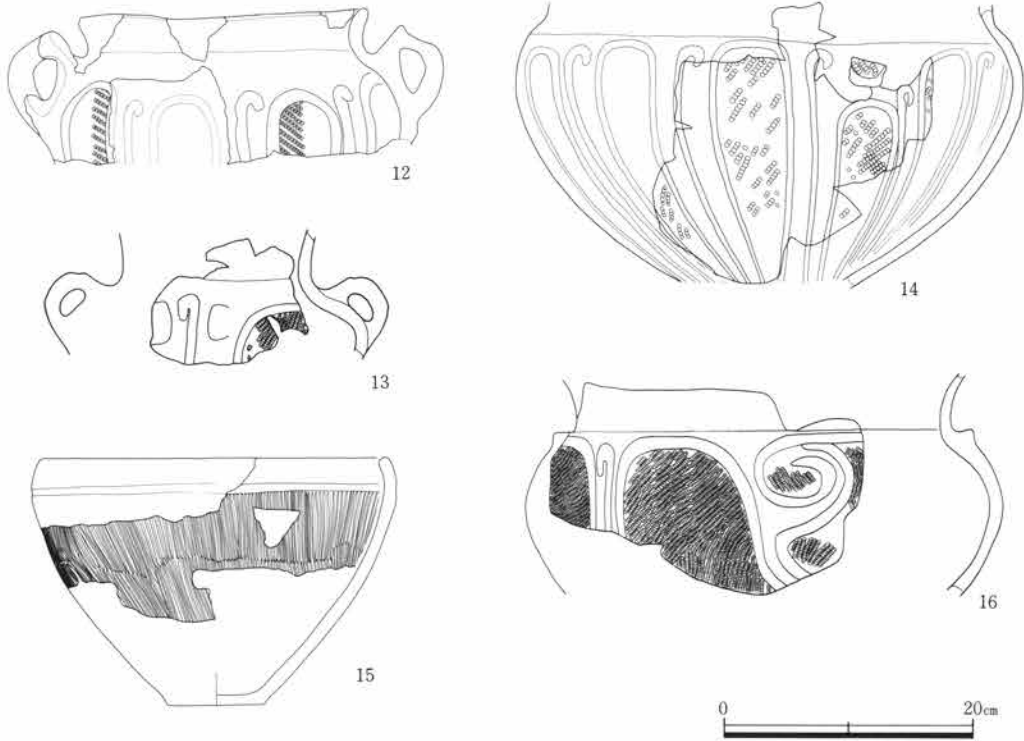
4 T 4号住居 (第33図)

8区西側拡張部分で検出された。形状は円形で、直径は約5.2mである。壁は20～30cmの高さで、わずかに外傾しながら立ち上がる。床面は水平に築かれており、壁から1mほど内側の部分は軟弱であるが、その内側は土間状の堅い床面になっている。ピットはその境目附近にほぼ等間隔で5

III 前原遺跡の調査内容



第34図 4 T 4号住居出土遺物 (1)



第35図 4 T 4号住居出土遺物 (2)

本検出された。炉は方形の石囲い炉で住居の中央に位置する。炉石には細長い自然礫5石を使用し、北側と西側の両コーナーには、小型の細長い礫を石柱状に縦に配置している。なお、炉内から焼土は検出されていない。また、炉の南東床面に浅い窪みが検出された。窪みは、炉から壁まで約2m、幅約1.5mの範囲を有し、壁下にはテラス状の傾斜をもった堅い面が認められ、そこから埋甕が検出された。埋甕は、炉の軸線上から左側にずれて位置し、床面の角度に合わせて若干傾斜をもって埋設されていた。埋甕には口縁と胴下半部を欠損したやや大型の土器が使用されている。

遺物出土状態

床面からは、西側壁際から倒置土器(2)1個体、西側で小型把手付土器(3)および大型の円礫数点が出土している。その他の土器は石器類とともに覆土中から出土している。

出土遺物(第34図・第35図)

1は埋甕に使用された土器である。口縁部に文様帯を持つ大型深鉢の胴部であり、幅広の無文懸垂帯が施されている。縄文はRL。2は床面に倒置されていた深鉢形土器で胴下半部が打ち欠かれている。器形は口縁部が僅かに内湾し胴部中程が括れる深鉢形を呈し、口縁には舌状突起が4つ付けられる。文様は、口縁部を楕円化した渦巻文と楕円区画文を一体化して4単位で構成し、

III 前原遺跡の調査内容

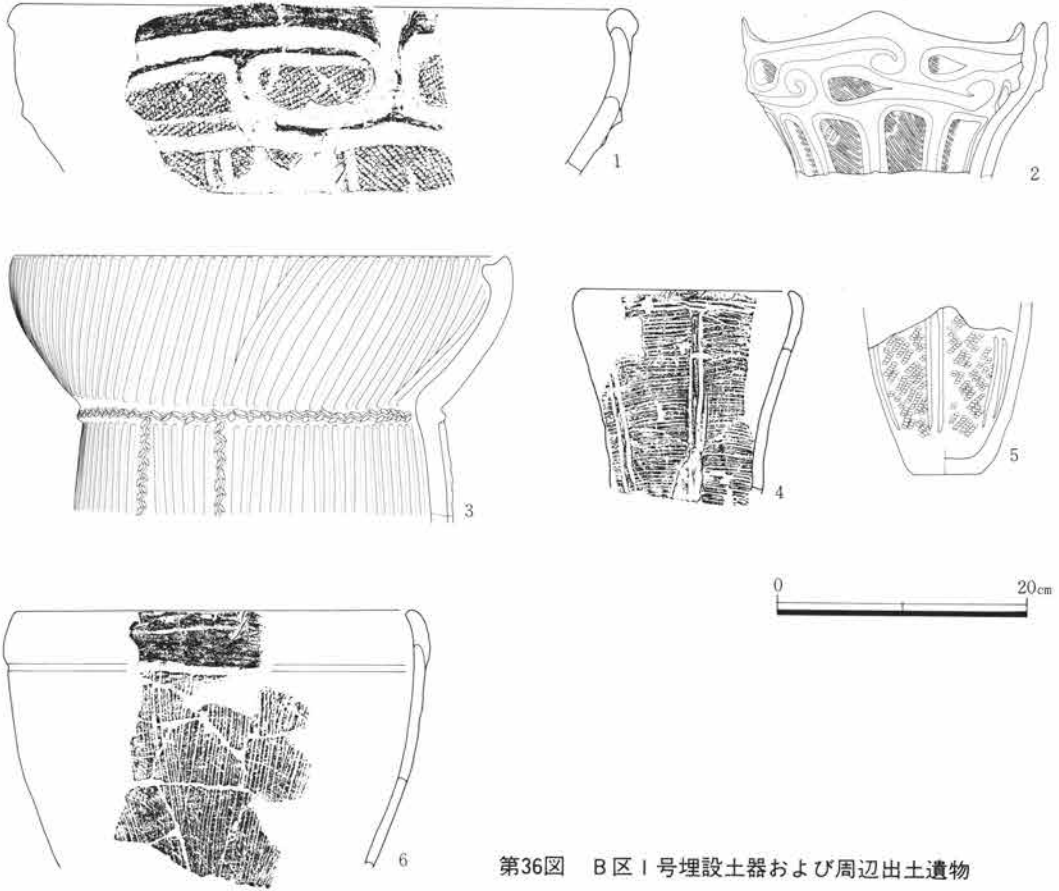
胴部に3本の沈線による無文帯を垂下させている。区画内の縄文はRL。3は口縁部が僅かに外反し胴部が若干膨らむジョッキ状の小型土器である。胴部上半に橋状把手が1つ付けられるが、欠損している。文様は、口縁部に幅広く無文部を置き、胴部にアーチ状の区画懸垂文を4単位垂下させ、その間に蕨手状の懸垂沈線を施している。なお、区画内はRLの縄文で充填されている。5は底部から直線的に開口し、口縁部がゆるやかに内湾する深鉢形土器で、口縁部は4単位の波状を呈する。文様は、口縁部を楕円区画文で構成し、胴部に無文懸垂帯を垂下させている。縄文は、口縁部区画文をRL、胴部と口縁の一部にはLを施文している。4・6・7は口縁部文様帯を喪失した土器である。器形は口縁部がキャリパー型を呈する深鉢形で、口縁は平縁を呈する。文様は胴上半部を波状文、下半部をアーチ状の区画懸垂文で構成される。4は胴部の括れで文様を2分するのに対し6・7は入り組み状に連結している。また、胴部懸垂文間には各々蕨手状沈線が施され、4では波状文区画内にS字文が施されている。文様の単位は、4が8単位、6が7単位、7が4単位である。また、区画内を充填する縄文は4がRL、6が0段3条RL、7がLRであり、ともに口唇下1帯は横位施文、以下を縦位施文して羽状を構成している。8は口縁部が大きく内湾しながら開く深鉢形土器で、口縁は4単位の波状を呈する。文様は、胴上半部を無文帯による渦巻文で構成し、下半部にアーチ状の区画懸垂文を垂下させている。区画内を充填する縄文はRLである。9は口縁部が突出ぎみに内湾する深鉢形土器である。文様は、口縁部を無文帯として頸部に杵状の区画文を施し、胴部に幅広の無文懸垂帯を垂下させている。縄文はRL。10・11は深鉢形土器の胴下半部である。10は幅広の無文懸垂帯が、11は条線が施される。10の縄文はRL。12～14・16は口縁部が外反し、胴部が強く張り出す浅鉢形土器である。ともに口縁部は無文とされ、文様は胴部全体に施される。また、いずれも頸部には僅かに稜が認められる。12・13は胴上半部に一對の把手を持つが、14・16は付けられないようである。文様は、12・14はアーチ状の区画懸垂帯と蕨手状沈線で構成され、13・16は区画文と蕨手状沈線で構成される。また、14・16では胴上半部に楕円文あるいは渦巻文が施されるが、これは12・13の把手と同様に、対で施されるのかもしれない。縄文は、12がLRの他は全てRLである。15は口縁部が緩やかに内湾する浅鉢形土器である。口縁部に幅広く無文帯を設けて一条の沈線をめぐらし、以下に条線文を施している。

以上の土器は、1・2・5が第7群1類に、4・6・7が同2類、8が同3類、11が同4類、12・16が同6類に各々比定される。なお、石器は打製石斧10点、磨石2点、小型磨製石斧1点が出土している。

(2) 埋 設 土 器

B区1号埋設土器

22-Aグリッドに位置する。埋設されていた土器(第36図2)は、胴下半部を打ち欠かれた小型の深鉢形土器で、口縁部を上にして正位で埋設されていた。また、その上面に5個体分の大型

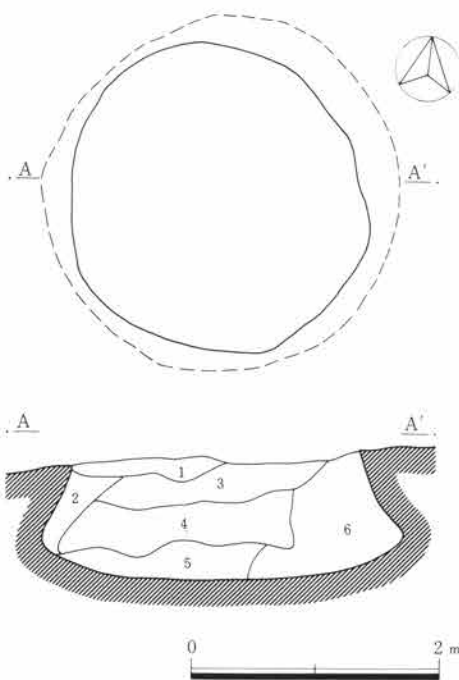
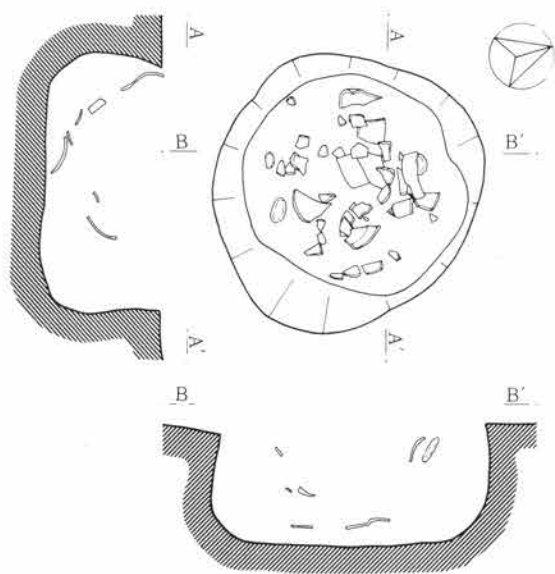


第36図 B区I号埋設土器および周辺出土遺物

土器片がおり重なるようにして出土した。なお、埋設土器内から焼土は確認されておらず、土器も加熱を受けていない。

埋設土器および周辺出土遺物（第36図）

2は埋設されていた土器である。口縁部が緩やかに内湾する深鉢形で、口縁は4単位の波状を呈する。文様は、口縁部を渦巻文と楕円区画文を連結して交互入り組み状に構成し、胴部にはアーチ状の区画懸垂帯を垂下させる。1は渦巻文と楕円区画文で口縁部文様帯を構成し、胴部に幅広の無文懸垂帯を垂下させた深鉢形土器の大型破片である。3は口縁部が内湾しながら開口し、頸部がくの字に屈曲して胴部が弱く張り出す深鉢形土器である。口唇裏面に突帯を1条付加して段を形成している。頸部には交互刺突を施した小波状隆線を1条めぐらして文様帯を区画し、口縁部には斜位、胴部には縦位の沈線を器全面に施している。また、胴部にも頸部と同様の小波状隆線を2条懸垂させている。4は口縁上端が若干内湾する深鉢形土器の大型破片である。文様は、横位条線で充填された枠状区画文で構成される。5は磨消無文帯を垂下させた深鉢形土器の胴下半部である。縄文はRL。6は、口縁部に幅広の無文部を置いて1条の沈線をめぐらし、以下に縦位の条線を施した鉢形土器の破片である。以上の土器は、1・2・5が第7群1類に、4が同4



第37図 B区1号土坑(上) C区4号土坑(下)

類に、6が同5類に各々比定される。なお、3は斜行沈線文を特徴とする曾利式土器の系譜を引く土器である。

(3) 土 坑

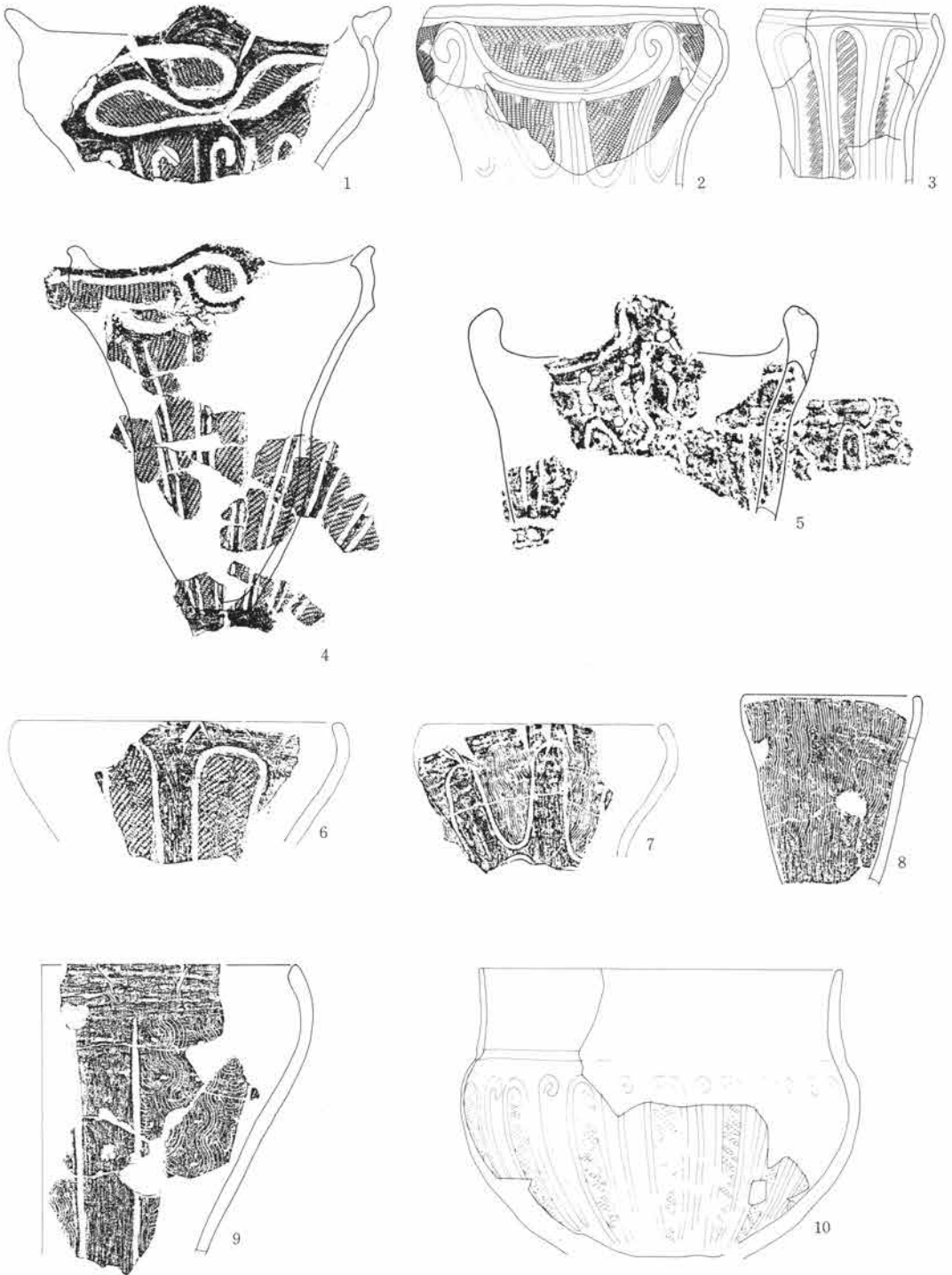
縄文時代の土坑は合計7基検出された。内訳はB区で1基、C区で5基、D区で1基であり、その分布は住居の分布とほぼ一致している。また、これらのうちC区1号土坑および3号土坑では、時期を確定できる資料が得られていないが、覆土の所見から縄文期の土坑として扱った。

B区1号土坑(第37図上・第38図)

25-Aグリッドに位置する。平面形は円形で、断面形は内傾の弱い袋状を呈する。遺物は合計10個体分の大型土器片と小礫が、底面より浮いた状態で出土した。1は口縁がキャリパー状に内湾する深鉢形土器の大型破片である。口縁には外反する山形の突起が付く。文様は、口縁部を渦巻文と楕円区画文を連結して入り組み状に構成し、胴部には幅広の無文帯を垂下させ、蕨手状懸垂沈線を施している。地文はRLの縄文である。2も1と同様の深鉢形土器の大型破片である。口縁は平縁で、口唇直下に1条の沈線をめぐらし、渦巻文を孤状に連結して口縁部文様帯を

構成している。胴部にはU字状の区画を口縁部渦巻文間に2つずつ配し、その間に一本の沈線を垂下させている。地文はRLの縄文で、口縁部上端の1帯のみ横位施文、以下を縦位施文して羽状を構成している。3は口縁部が開口しながら僅かに内湾する小型の深鉢形土器である。胴下半部を欠損する。文様は、口唇直下に1条の沈線をめぐらし、以下にアーチ状の区画懸垂文を垂下

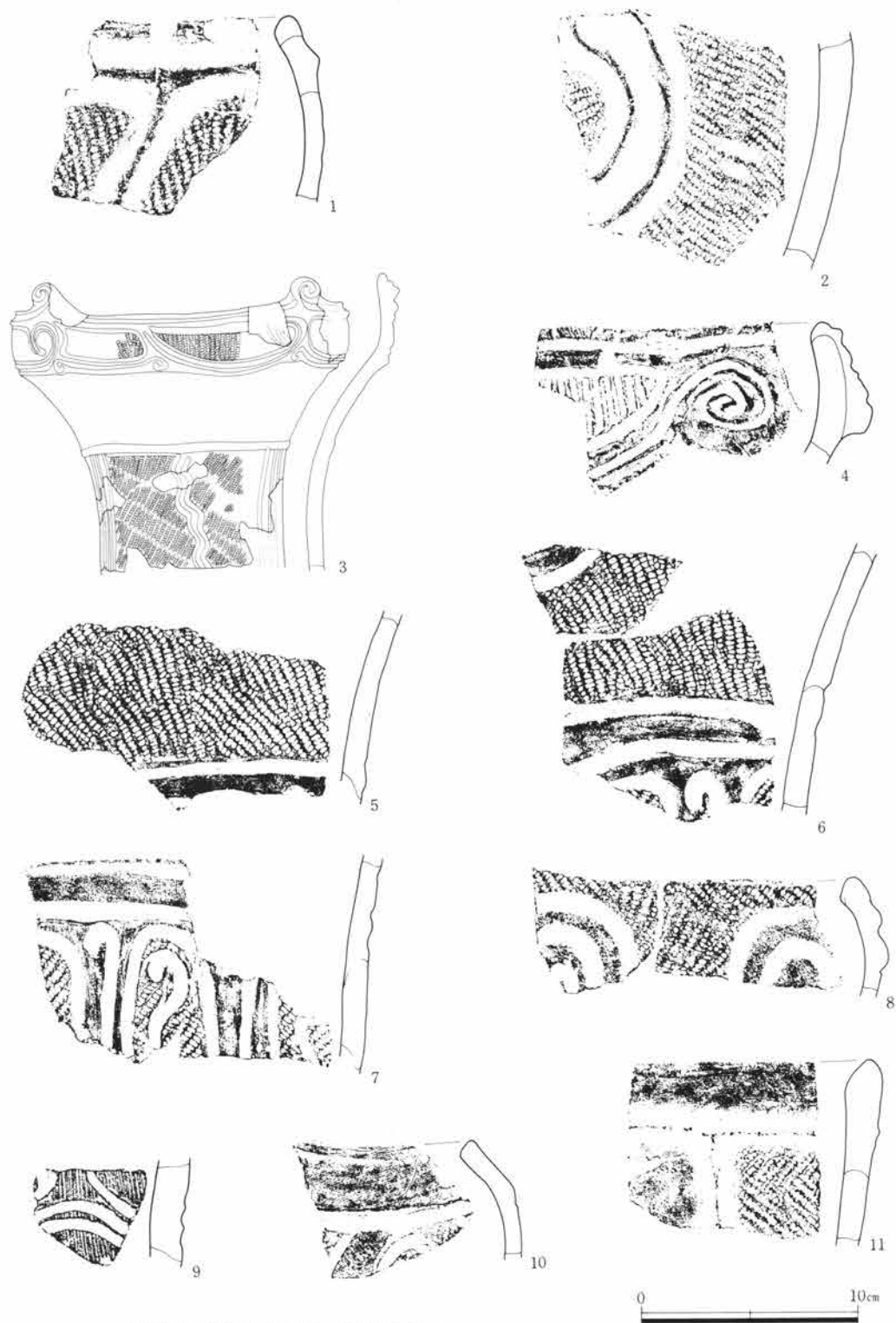
1 縄文時代の遺構と遺物



0 20cm

第38図 B区I号土塚出土遺物 (5は $\frac{1}{3}$)

III 前原遺跡の調査内容



第39図 土壇出土遺物 (3は $\frac{1}{8}$)

C区2号土壇 (1)

C区3号土壇 (5~8)

C区4号土壇 (2)

C区5号土壇 (3・4)

D区1号土壇 (9~11)

させている。地文は RL の縄文である。4 は口縁部が内湾し、胴部中程が若干括れて下半がわずかに張る深鉢形土器である。口縁には山形の突起が付けられる。文様は、口縁部突起下に渦巻文を配し、間に楕円区画文を連結して口縁部文様帯を構成し、胴部には磨消縄文帯を垂下させている。地文は RL の縄文である。5 は口縁部が開口しながらわずかに内湾し、頸部が若干括れる小型の深鉢形土器である。口縁部には内湾する方形の把手が付けられる。口唇直下に 1 条の沈線をめぐらし、胴部中程に刺突を施した 2 条の平行沈線をめぐらして文様帯を区画している。文様帯内の上半には、上下端に刺突を施した長短様々な波状沈線を垂下させ、下半には沈線によるアーチ状の区画文を等間隔に配している。地文は施されていない。6・7・9 は口縁部がキャリパー状を呈する深鉢形土器の大型破片である。6 は口縁部からアーチ区画の縄文帯を垂下させる土器で、地文は RL の縄文である。7 は口縁部に沈線による波状の区画文を施し、胴部下半にアーチ区画帯を垂下させて文様を構成している。区画内は、波状の櫛描文で充填される。9 は口縁部に幅の広い無文部を置き、以下に幅広無文帯を垂下させている。地文は波状の櫛描文である。8 は底部から直線的に開口する小型の深鉢形土器で、全面に櫛描文が施されている。10 は口縁部が直立し胴部が張る浅鉢形土器である。文様は口唇下に 1 条の沈線をめぐらし、以下にアーチ区画の縄文帯と蕨手状懸垂文を交互に配している。区画内は LR の縄文で充填される。

以上、本土壇出土の土器は、1・2・4 が第 7 群 1 類に、3・6・7・9 が同群 2 類に、(8) が同群 4 類に、10 が同群 6 類に各々比定される。

C 区 1 号土壇

7-D グリッドに位置する。南北に長径をもつ楕円形を呈し、掘り込みは比較的浅い。遺物は出土していない。

C 区 2 号土壇 (第 39 図 1)

7-D グリッドに位置する。1 号土壇の南 1.5m に近接する。東西に長形をもつ楕円形を呈し、掘り込みは浅い。遺物は、覆土中から土器が数片出土したが、図化できたものは 1 点のみである。1 は深鉢形土器の口縁部破片で、隆帯で文様を構成する。地文は LR の縄文である。第 7 群 3 類に比定される。

C 区 3 号土壇 (第 37 図 5～8)

7-E グリッドに位置する。5 号住居と重複するが切り合いの前後関係は不明である。また北側で浅い掘り込みと切り合っている。形状は不正楕円形を呈し、底面はほぼ平らで緩やかに立ち上がる。深さは 30cm である。遺物は覆土中から数点の土器片が出土した。5～7 は同一個体である。胴部中程に 2 条の沈線をめぐらして文様帯を区画し、胴部にアーチ区画の縄文帯を垂下させて、その間に蕨手状沈線を配している。またアーチ区画内にも蕨手状の波状沈線を懸垂させてい

III 前原遺跡の調査内容

る。地文は RL の縄文である。8 は 2 本の平行沈線によるアーチ区画の無文帯を口縁から垂下させる深鉢形土器の口縁部片である。左側区画内には蕨手状沈線が見られる。地文は RL の縄文で、口唇下 1 条のみ横位施文、以下を縦位施文して羽状を構成している。出土土器は第 7 群 2 類に含まれる。

C 区 4 号土坑 (第37図 (下)・第39図 2)

3-A グリッドの北東コーナーに位置する。いわゆる袋状土坑であり、平面形も円形で良く整っている。底面はフラットであるが、端にゆくにしたがって緩やかに傾斜している。覆土は、

- ① 褐色土 軽石を多量に含む。
- ② 黄褐色土 砂質ロームと黒褐色土の混土
- ③ 黒褐色土 砂質ロームと黒色土の混土
- ④ 黄褐色土 黒褐色土を斑点状に含む砂質ローム
- ⑤ 黒褐色土 ③と近似するが色調が明るい。
- ⑥ 黄褐色土 ②と近似するが色調が暗い。

である。遺物は覆土中より土器片 1 点が出土した。2 は 2 本の平行隆線で曲線的な文様を描く深鉢形土器の胴部破片で、地文は LR の縄文である。第 7 群 3 類に含まれる。

C 区 5 号土坑 (第39図 3・4)

8-F グリッド南東に位置し、12号住居に重複している。径約80cm深さ30cmで、平面形は円形、断面形は箱状を呈す。底面はフラットである。遺物は覆土中から深鉢形土器 1 個体および少量の土器片が出土した。3 はキャリバー状深鉢形土器で、胴下半部を欠損する。口縁は平縁で、渦巻文を施した小突起が 4 つ付けられる。文様は頸部無文帯により口縁部と胴部分けられ、口縁部は 2 条の隆線による渦巻文と区画文で構成され、胴部には沈線による 3 条の懸垂文と 2 条の波状懸垂文を交互に垂下させている。両文様帯には縄文 RL を施している。4 は深鉢形土器の口縁部片である。口唇直下に 1 条の沈線をめぐらし、渦巻文と縦位の沈線で充填された楕円区画文で文様を構成している。いずれも、第 6 群に含まれる。

D 区 1 号土坑 (第39図 9~11)

3-B グリッド南西部、3号住居の西側で検出された。径約 1m の円径を呈し、深さは約 80cm で、断面形は箱形を呈す。遺物は覆土中から数点の土器片が出土した。9 は条線文を地文とし、沈線で文様を描く土器である。10 は口縁部に無文部をおいて一条の沈線をめぐらし、以下に充填縄文帯で文様を構成する。地文は RL の縄文で、微隆線下 1 段を横位施文、以下を縦位施文して羽状を構成している。以上、9 は第 7 群 4 類、10 は第 8 群 3 類、11 は第 8 群 1 類に含まれる。

(4) 遺構外出土土器

第1群土器 (第40図1)

黒磯式土器である。ほぼ一個体分がまとまって出土した。器形は胴上半部が直線的に開く深鉢形を呈し、器面全体に RL と多条 RL の2種類の縄文を横位に施している。胎土には繊維を多量に含む。

第2群土器 (第40図2～8)

諸磯式土器を一括した。2は口唇下に2条の平行爪形文をめぐらし、以下を条線による肋骨文で構成する。肋骨文間には円形竹管文が施される。3は5本を単位とする条線で、横位の直線・波状を交互に重ね、円形竹管文を配している。4・5は平行爪形文で文様を構成する土器である。地文は共に縄文 RL である。6・7は浮線文土器である。8は細かな条線で文様を施す土器である。

以上の土器は、2・3が諸磯a式に、4～8が諸磯b式に比定されよう。

第3群土器 (第40図9・10)

五領ヶ台式土器を一括した。9は口縁部が強く外反する深鉢形土器の口縁部破片である。口縁部は小波状を呈する。口唇部には刻みが施され、裏面に段が形成されている。口唇下には幅広の把手状の貼り付けと、三角形印刻文が施され、細沈線で文様が構成されている。10は6本の懸垂沈線の両側に小さな円形刺突文を施こした底部である。胎土には金雲母を多量に含む。

第4群土器 (第40図11～20)

勝坂式および阿玉台式土器を一括した。11は半截竹管による平行沈線のふちに、爪形刺突文を施す土器である。12は矢羽状に刻みを施した隆帯でU字状の区画文を施し、区画内を縦位の沈線で充填する口縁部破片である。13・16は刻みを施した隆帯で渦巻文や区画文を構成する土器である。14は口縁部がくの字に折れ曲がる土器である。口唇部には幅広の平坦面が形成され2条の沈線が施される。また沈線間には刻みが施される。口縁部は無文で、頸部に数条の沈線をめぐらして、その間に刻みを施している。15は波状を呈する口縁部破片で、全面に縄文 RL が施される。文様は隆帯による楕円区画で構成され、区画内には爪形文と波状沈線が施されている。17・20は隆帯で区画文を構成し、区画内に沈線で文様を施す土器である。17は縄文 RL が施される。18・19は刻みを施した隆帯で文様帯を区画する土器である。文様帯下には、18はLの撚糸文が、19は条線が施されている。

以上の土器は、11が勝坂1式に、13・14・16～20が勝坂3式に、15が阿玉台III式に各々比定される。

第5群土器 (第41図1～3)

加曾利E1式土器を一括した。1・2は同一個体である。口縁部がいったん内湾し、口唇が外反する特徴的な形態を呈する。口唇直下および頸部に隆帯をめぐらして口縁部文様帯を区画し、

III 前原遺跡の調査内容

区画内を横位の平行沈線で充填して交互刺突を施している。また胴部にはRの捺糸文が施される。3は隆帯でクランク文を構成する口縁部破片である。地文はO段3条RL縄文である。なお、1・2は加曾利E1式の中でも古い段階に位置する。

第6群土器（第46図1、第41図4～9）

加曾利E2式土器を一括した。1はキャリパー状の深鉢形土器である。4単位の波状口縁を呈し、各波頂部には渦巻文が描かれる。文様は頸部無文帯をはさんで口縁部と胴部に分けられる。口縁部は嘴状文を伴う渦巻文を中心とする楕円状の区画文で構成され、胴部には4条の沈線による懸垂文が施される。なお、胴部の沈線間と口縁部の一部には刺突が施されている。また、口縁部区画内および胴部には、RLとLRの縄文を交互に縦位施文して羽状を構成している。4～6は渦巻文を施した口縁部破片である。4は口縁部に縦位沈線が施される。5は地文にRL縄文が施される。7・8は頸部破片である。7は3本の沈線で頸部無文帯を区画し、胴部に3本の懸垂沈線と波状沈線を施している。8は幅の広い口縁部文様帯を3本の沈線で区画している。縄文はともにRLである。9はLの捺糸文を地文に懸垂沈線を施した胴部破片である。

第7群土器（第46図2～4、第41図10～13、第42図、第43図、第44図1～4）

加曾利E3式土器を一括した。本遺跡縄文期の主体をなす土器群であり、検出された遺構のほとんどはこの時期に属す。本群は頸部無文帯の喪失および充填縄文手法の導入をメルクマールとしている。口縁部渦巻文は隆帯表現から沈線表現へと変化し、しだいに簡略化・消失の方向をたどる。また、胴部無文懸垂帯は幅狭から幅広へと変化し、やがて文様を構成するうえで重要な要素へと変化していく。以下6類に分けて説明する。

1 類（第46図2・3、第41図10～13、第42図1～8）

渦巻文と楕円区画文で口縁部文様帯を構成し、胴部の懸垂沈線間に縄文を充填するものを一括した。器形は、口縁部がキャリパー形で胴部が若干張る深鉢形を呈する。口縁部は平縁のものもあるが、渦巻文上に突起を持つものが多い。また口縁部文様帯は4単位が一般的である。第44図3、第39図10～13は口縁部文様帯を隆帯と沈線で描く土器である。3は頸部に無文帯をめぐらし、胴部にアーチ状の区画無文帯を懸垂させている。11は頸部に2本の沈線をめぐらして口縁部文様帯と胴部文様帯を明確に区分している。口縁部には隆線による渦巻文が施される。12は渦巻文上に突起を持つ例である。突起状には渦巻文施文のなごりを残している。13は隆帯と沈線による楕円化した渦巻文と楕円区画文で口縁部文様帯を構成する土器である。

第46図2、第42図1～4は、口縁部文様帯を沈線で描く土器である。口縁部の渦巻文は楕円化し、楕円区画文と一単位で描かれるようになる。胴部の無文懸垂帯はより幅広となり、縄文帯を区画する沈線が上端で連結するもの（第42図1・3）や、S字状文が施文されるもの（第46図2）が出現する。これらの要素は2類土器と共通した文様要素である。

第42図5～8は本類土器の胴部破片である。8は縄文帯内に蕨手状懸垂沈線が施される。

縄文は、第46図2・3、第41図10・11・13、第42図1・6～8がRL、第41図12・第42図2がLR、

第42図3がO段4条RL、4・5がO段3条RLである。

2 類 (第43図1～8)

明瞭な口縁部文様帯を持たず、胴上半部にU字状の区画文を連続して描く土器を一括した。本類は、従来加曾利E4式土器の古式段階として分類されてきた一群であるが、本遺跡遺構出土のものは全て加曾利E3式土器と共に検出されており、加曾利E4式土器を伴う敷石住居からは検出されていないことから、本遺跡では第7群土器として分類した。

器形は、口縁部が内湾し胴部中程が、括れる深鉢形を呈する。1類に較べて曲線的であり、3類に類似している。文様は胴上半部に、U字状の区画文を連続して描き、それに入り組ませてアーチ状の区画文を垂下させるもの(4T2号住居13～16他)、区画文が括れ部で分かれるもの(8)、アーチ状の区画文を口縁部から垂下させるもの(4T2号住居19他)とがある。口縁形態は平縁を基本とするが、突起を持つものもまれにある(4T2号住居15)。この場合、突起は必ず一つである。また、口唇直下に一条の沈線をめぐらすもの(3・4)と、そうでないものがあるが、本遺跡では後者の例が多い。胴上半の区画内にS字文を描いたり(6)、アーチ状区画文間に、蕨手状沈線を垂下させる(8)のも本類の特徴の一つであり、これは1類にもしばしば認められる。

縄文は3～7がRL、1・2・8がO段4条RLで、2～7は口縁部の一帯のみ縄文の施文方向を変えることにより、羽状を構成している。

3 類 (第46図4、第43図9～11)

胴上半部に隆線あるいは沈線で渦巻文を描く土器を一括した。器形は2類と類似するが、湾曲度がさらに強い。口縁は波状を呈するものが多く、平縁はまれである。9～11は2本の微隆起線で渦巻文を描き、空白部に縄文を充填し、微隆起線の両側になぞりを施している。この手法は本類の大きな特徴である。なお11は10の胴部破片である。縄文は9がLR、10・11がRLである。第44図4は、胴部上半を一本の隆線による渦巻文で構成し、下半には同隆線を垂下させている。隆線にはなぞりを加え、空白部に縄文LRを施している。

4 類 (第43図12・13)

深鉢形土器のその他のものを一括した。12は、口唇直下に2条の沈線をめぐらし、以下に条線を施して波状沈線を垂下させている。曾利系の土器であろう。13は連弧文土器である。

5 類 (第44図1・2)

口縁部が内湾する鉢形土器を一括した。共に口縁部は平縁で、口唇直下に若干の無文帯を設けて一条の沈線をめぐらし、以下に条線が施される。条線は、1は直線であるが、2は波状に施文されている。

6 類 (第44図3・4)

浅鉢形土器を一括した。器形は口縁部が若干外反ぎみに立ち上がり、胴部が強くふくらむ形態を呈する。文様は胴上半に円形と楕円形の区画文が配され、以下に条線が施されている。また、胴部上半にはしばしば1対の把手が付けられる。縄文はともにRL。

III 前原遺跡の調査内容

第8群土器（第46図5～7、第44図5～12、第45図）

加曾利E4式土器を一括した。

1 類（第46図5・7、第44図5～12）

断面三角形の微隆帯で文様を区画する深鉢形土器を一括した。第46図5は橋状把手を持つ大型破片である。把手は2つ付くものと思われる。器形は胴部から直線部に開口する形態で、口縁は波状を呈する。口縁部には把手からつながる微隆帯をめぐらして無文帯を区画し、胴部全体に縄文LRが施される。7は大型深鉢の胴下半部である。器体の大きさに較べて底部が小さい。文様は、微隆帯でアーチ状の区画文を構成し、区画外に縄文LRが施される。第44図5～7は、内湾する口縁部破片である。ともに口縁部に幅広く無文帯が形成される。11・12は把手である。12は環状を呈す。縄文は5・7・8・12がLR、9・10がRL、6がO段3条LRである。

2 類（第45図1～3）

幅広い口縁部下に微隆帯をめぐらし、胴部文様を沈線で描く深鉢形土器を一括した。いずれも内湾する口縁部破片である。1・2は微隆帯が低く、文様が曲線的であるが、3は微隆帯が高く文様は直線的である。縄文は1がRL、2・3はLRを微隆帯下の一幅のみ横位施文、以下を縦位施文して羽条を形成している。この施文法は、第7群土器1類・2類からの流れをくむ手法である。

3 類（第46図6、第45図4～13）

沈線で文様を区画する深鉢形土器を一括した。第46図6は、底部から直線的に開く深鉢の胴下半部である。文様は、アーチ状区画の中に玉子形の区画文をあてはめた構成をとる。区画内はLRの縄文でランダムに充填される。第45図4～8は口縁部に無文帯を持つ。9は口縁部沈線の両側に刺突文が施される。10～12は丸い窪みを持つ突起部分である。10は「し」文が施される。13は口縁に環状把手を持つ土器で、把手下に磨消縄文によるアーチ状の文様が施されている。縄文は8・9・10・12がRL、6・13がLR、4・5・7がO段3条RLである。なお、4・5・7～9は2類同様口縁部に羽条を形成している。

4 類（第45図14～18）

浅鉢形土器を一括した。14は球状の器形を呈し、小さな橋状把手を持つ。口縁部に幅広い無文帯をおいて把手間をつなぐ微隆帯をめぐらし、以下にO段3条RLの縄文が施される。15～18は胴部に微隆帯で渦巻文を描く、かぼちゃ形の浅鉢である。口縁部には、やはり無文帯が設けられ、小さな橋状の突起が付けられる。器面は全面が研磨され、光沢をおびる。

第9群土器（第47図～第50図）

後期初頭の土器群を一括した。これらは称名寺I式・同II式・掘之内1式の古い段階のものを含むが、これらの諸型式土器は互いに密接かつ複雑な関係を有しており、小破片資料では判断が難しい。そこで、ここでは一括して扱うこととし、施文の特徴から3類に分けて説明を行う。

1 類（第47図1～17）

沈線間を縄文で充填するものを一括した。1～3は口縁部破片である。ともに若干内湾しながら開口する特徴を有する。口唇部形態は、1は丸棒状を呈するが、2・3は内側に僅かに稜を持っている。また、3は沈線区画内を縄文で充填している。4～11は縄文帯で渦巻状の文様を構成する胴部破片である。12・13・15～17は、刻目を施した懸垂隆線により文様帯が分割される土器の胴部破片である。13は隆線の下端に円形刺突が施されている。15は胴下半部が無文帯となる。充填される縄文は、1～3・7・15がRL、4～6・8～14・16がLRである。なお、本類土器は称名寺I式に比定されようが、14・15は新しい段階に入るかもしれない。

2 類 (第47図18～21、第48図1～9)

沈線間を刺突文で充填するものを一括した。第47図18～21・第48図1～9は、沈線間に一列の刺突を施す土器である。18・19は口唇部に一条の凹線を施し、その下に無文部を設けて刺突を施した沈線帯を交互斜位に垂下させ、上端を2条の弧状沈線で連結している。第48図1は、口縁部を幅広く無文帯とし、口唇下にC字状の貼付文が施される。4は口唇部に円形押圧文をめぐらし口縁部を無文帯にして、胴部を枠状区面文で構成している。10～13は沈線間に2列の刺突が施される土器である。14～19は沈線区画内を刺突で充填する土器である。14～16は称名寺式の基本単位文様であるJ字文が表出されるが、17～19は2条を単位とする沈線で直線的な区画文で構成されている。

以上の土器は、第48図7・14～16は称名寺II式に比定されるが、第47図18・19、第48図1・4・17～19はすでに称名寺式土器の基本的な文様構成から逸脱している。ここでは一応堀之内1式の古い段階と理解しておきたい。

3 類 (第49図・第50図)

沈線文のみで文様が構成されると思われるものを一括した一群である。器形は、口縁部が直線的に外反し、頸部がくの字に折れて胴部が強く張り出すもの(A形、第49図1～11)、口縁部が緩やかに外反し、頸部が僅かに括れるもの(B形、第49図12～15、第50図1～9)、幅の狭い口縁部が外反し、頸部がくの字に折れて胴部が張り出すもの(C形、第50図10)の3種が認められる。A形は波状口縁を呈し口唇部がくの字に内折するものが多いが、B・C形では平縁がほとんどである。また、A形は全て口唇部文様帯を持ち、口縁部を無文化しているB形でも口唇部文様帯を持つものが主体を占めるが、口縁部と無文化するものはほとんど見られない。また、A形は比較的小型の土器が多く、焼成は良好で器面を研磨したものが多いが、B形は大型の土器が多く、器面を研磨されるものは少ない。

第49図1～4・6は波状口縁を呈する土器である。口唇部文様帯は波頂部に貼付文や刺突文で装飾を施し、その間を沈線や刺突文で連結している。また、3・6のように立体化されるものもある。1・4では頸部に沈線をめぐらし、波頂下に貼付文等が加えられる。5～11は平縁に突起が付けられる土器である。5では突起を中心に貼付文で立体的な装飾が加えられるが、7～9は刺突文が加えられる。また、5は頸部に沈線がめぐらされ、突起下に8字状の貼付文が加えられ

III 前原遺跡の調査内容

る。

第49図12～15、第50図1～6は口唇部文様帯を持つ土器である。13・14は口唇部に円形刺突文をめぐらす土器である。12・1も円形刺突文が数個施されるが、その間は沈線で連結される。1～4は口縁部に2～3条の沈線を縦位あるいは孤状に垂下させる土器である。6は口縁部に孤状の沈線文が施される。

第50図7～9は口唇部文様帯を持たない土器である。7・8は口唇下に若干の無文部を設け、以下に文様が施される。9は口唇下に無文部を設けて一条の沈線を施し、文様帯を区画している。10は口縁部を無文とし、頸部に2条の沈線をめぐらして文様帯を区画する土器で、頸部には8字状の貼付文が施される。

11～18は頸部および胴部破片である。文様は曲線的なものと直線的なものとの認められる。12・14・15は称名寺式の文様が構成される土器である。17・18は沈線間に波状沈線を施した懸垂文を垂下させる土器である。

以上の土器は、第50図12・14・15は称名寺II式に含まれるが、その他は堀之内I式の古い段階に比定されるものと思われる。

第10群土器（第51図、第52図1～5）

堀之内I式土器を一括する。出土量はさほど多くはないが、全容を理解できる良好な資料が得られた。分布はB・C・D区に亘って認められた。以下4類に分けて説明を行う。なお、縄文は全てLRである。

1 類（第51図1～9）

沈線で文様を描き、その間を縄文で充填する一群である。本類土器は口唇部に文様帯を持ち、頸部に2～3条の沈線をめぐらして口縁部と胴部を区画し、口縁部を無文化にすることを特徴としており、器形・文様の配置などの基本構造が良く一致している一群である。1は口縁部が外反し頸部がくの字に折れて胴部が張り出す深鉢形土器である。口縁は平縁で表裏面に刺突文を施した突起が付けられ、そこから垂下する刻みを施した隆線は、頸部の8字状の貼付文に連結する。胴部文様はこの貼付文を中心に、3本を単位とする平行沈線によるY字状の文様が構成される。また、胴部文様は8・9のように下半を区画されずに引きおろされる。2も1とほぼ同様の形態をとるが、頸部は緩やかに括れ、口唇部はくの字に内折し突起は付けられない。3は口唇部文様帯が幅広く設けられた土器である。4～7は1と同タイプの土器の口縁部および頸部破片である。7は口縁が小波状を呈するらしく、口唇内側に一条の沈線と刺突が施される。8は頸部に3条の沈線をめぐらし、胴部上半に渦巻文を施し、その下端に2条の沈線をめぐらして文様帯を区画している。また、沈線間の縄文は磨り消されている。9は8とほぼ同様の文様構成をとる土器であるが、胴上半部渦巻文間に蕨手状の渦巻文を施して、さらに装飾的な構成となっている。また、文様間の無文部には縄文が充填される。

2 類（第51図10～12、第52図2）

縄文を地文とし、沈線で文様が施されるものを一括した。10は口縁部に押圧を施した隆線を垂下させ、頸部に数条の沈線をめぐらして文様帯を区画する土器である。11は胴下半部の破片である。12・2は波状沈線を垂下させる土器である。

3 類 (第52図3・4)

条線が施される土器である。3は斜格子状に施される。4はくの字に内折する口唇に一条の沈線をめぐらし、口縁部に無文帯を置いて頸部以下に条線が施される。

4 類 (第52図1)

1～3類に含まれないものを便宜的に一括した。1は舟形を呈すると思われる注口土器である。両端部の破片のみであるが、観察の結果図のように復元できた。口唇部に2条の沈線がめぐり、両端には環状の把手が付けられる。器壁は比較的薄手で黄橙色を呈し、焼成は良好である。整形は内外面共に削り痕が明瞭に残り、外面は若干研磨が認められる。

第11群土器 (第53図・第54図)

堀之内2式土器を一括する。B区・C区から数点づつ出土している以外は、全てD区から出土した。器形は、底部から緩やかに外反しながら開口する深鉢形を呈する。口縁は平縁を基本とし、先端がくの字に内折する特徴的な口唇部形態を呈するが、口唇内面に文様を施した突起が付くもの(第53図7)、口唇が内折しないもの(8)、口唇を交互に内側に押し曲げて小波状を形成するもの(17・21)等のバリエーションもある。口縁部には刻みあるいは押圧を施した隆線をめぐらす、稀にないものもある(19)。隆線は1条のものと2条のものがあり、2条のものは文様の要所で梯子状に連結がなされる。また、隆線には極細のもの、細いもの、太いものの3種があり、極細には間隔のあいた押圧が、細いものには斜位の刻みが、太いものには縦位の密な刻みが各々施される。胴部文様は上限と下限がはっきり区画され、沈線区画の充填縄文帯で横位に構成される。文様には渦巻文を主とする曲線的なものと、交互に連続する三角形区画文を主とする直線的なものがある。なお、区画内を充填する縄文は全てLRである。胎土・焼成はともに良好で、内面および外面無文部分は研磨が施されて光沢をおびるものが多い。

第12群土器 (第52図6～8、第55図1～10)

加曾利B式土器を一括した。第52図6～8は台地上からの出土であるが、第55図1～10は八坂樋西側の低地からの表採品である。第52図6～8は緩やかに内湾しながら開口する深鉢形土器の破片である。6は口縁部が若干内折し、楕円形の突起が付けられる。また、口唇には刻みが施される。口縁部には無文帯下に斜位沈線を施した平行沈線がめぐらされ、胴部には充填縄文帯を数帯めぐらし、突起下に綾くり状の沈線を垂下させている。また、無文部および裏面には研磨が施される。縄文はLR。7は沈線を斜格子状に施す土器で、口縁部裏面に一条の沈線が施されている。8は4条の平行沈線による充填縄文帯を数帯重畳する胴部破片で、6同様懸垂沈線が施される。また、無文部および裏面には研磨が施される。縄文はLR。第55図1は外側へくの字状に屈曲する肩部破片で、縦位の沈線から両側に弧線が描かれ、弧線区画外を縄文LRで充填している。2～4

III 前原遺跡の調査内容

は沈線のみで文様を描く土器である。2は横位に、3は縦位に矢羽状沈線が施される。4は斜位の沈線が施される。第55図5～10は台付の鉢形を呈すると思われる同一個体の土器であるが、正確な器形は不明である。5～8は肩部の破片と思われる。文様は斜行細沈線を充填した微隆線の区画帯で構成される。10は台部で、やはり微隆線で文様が施され、中位に内孔が付される。焼成は良好で赤橙色を呈し、胎土は緻密で砂粒をほとんど含まず、無文部は研磨により光沢をおびる。なお、第52図6～8は加曾利B1式土器、第55図1～4は加曾利B2式土器に比定されると思われる。

第13群土器（第52図9・10、第55図11～28、第56図1～10）

安行式土器およびそれに伴出した土器を一括した。第55図・第56図は全て八坂樋の西側の低地からの表採品である。以下6類に分けた。

1 類（第52図9、第55図11・12）

安行2式土器である。ともに口縁部破片で、口唇部が肥厚し縄文が施されている。9は波状口縁を呈し、波頂部に魚尾状の突起が2つ付けられ、その間に2点刺突の瘤が施される。縄文はLR。12は沈刻を施した隆線で文様が構成され、接点に2点刺突が施される。11・12の縄文はRL。

2 類（第55図13～18・25・26）

安行3a式土器である。口唇部の肥厚はなくなり、文様は沈線で描かれ、三叉状印刻文が施される。13～15は波状口縁を呈する土器で口縁部は帯縄文による三角状の区画文で構成される。また、文様の接点その他には2点刺突の瘤が施される。縄文はLR。16・17・25は三叉状印刻文が施される土器である。26は台付土器の台部で、中位に円孔が付される。16・17の縄文はLR。18は磨消縄文が施される胴部破片で、2点刺突の瘤が施されている。縄文はLR。25は三叉状印刻文を組み合わせて文様を構成する土器で、三叉文間に沈線を施して木の葉状の文様を作り出している。

3 類（第52図10、第55図18～24）

安行3b式土器を一括した。第52図10は、口縁部が外傾し胴部中程が張り出す鉢形を呈すると思われる。張り出した胴部中程に十条の沈線をめぐらして文様帯を区画し、上半部に沈線に側って逆T字状の三叉文が施される。また、文様の接点には刻みを施した瘤が付される。19は波状口縁を呈し、波頂部に偏平な魚尾状の突起が付けられる。突起下には1点刺突の瘤が施され、そこから沈線による木の葉状の区画文を垂下させている。区画内は縄文LRで充填される。20～24は入組文で構成される土器である。20～22は磨消縄文が施される。23は胴部が張る浅皿形土器の口縁部破片で胴部には刻みを施した隆帯をめぐらしている。24は小突起を持つ土器で、突起には円孔が付されている。口唇下には若干の無文帯がおかれ以下に沈線のみで文様が描かれる。縄文は20・23がRL、21・22がLRである。

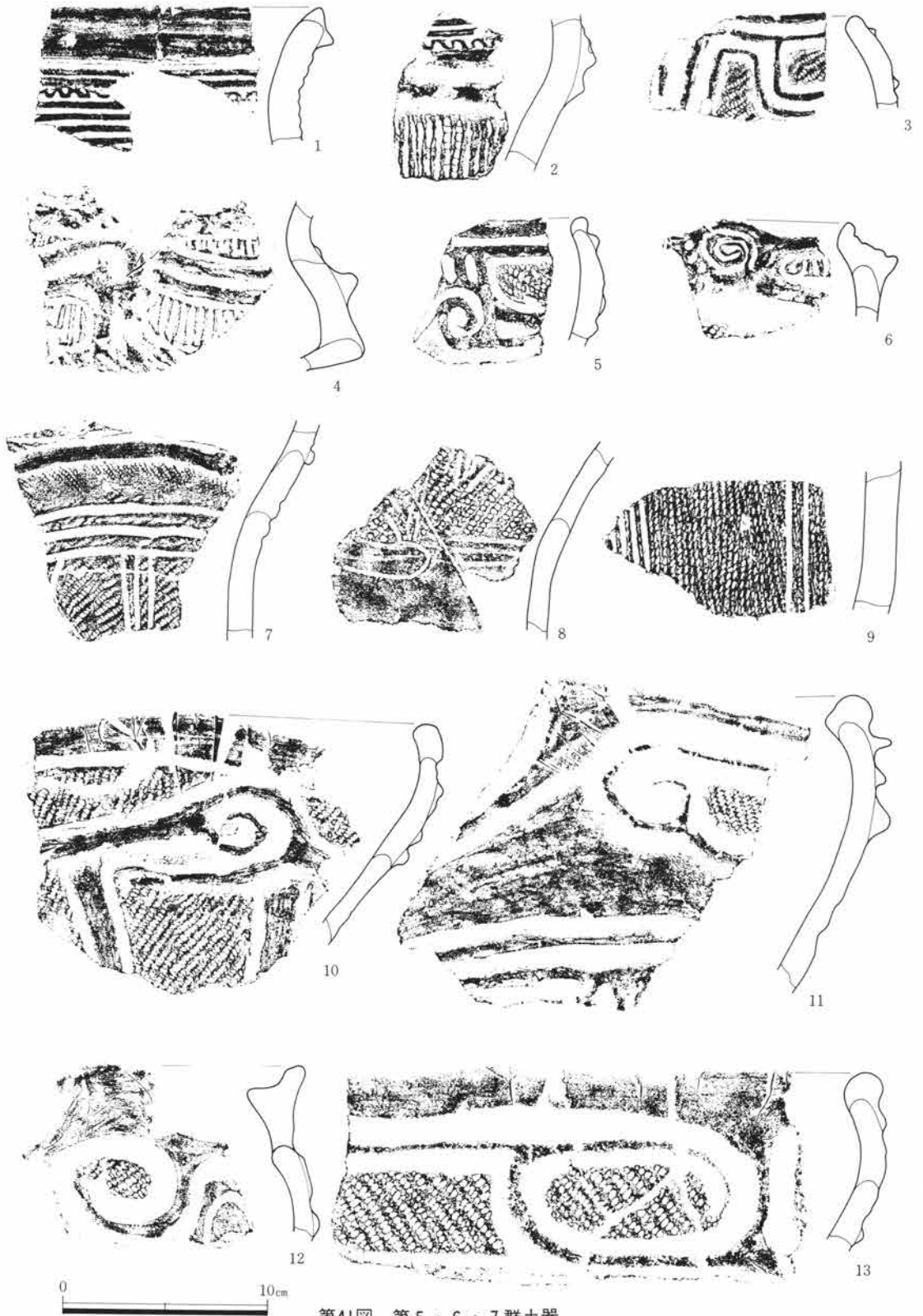
4 類（第55図27・28）

安行3c式土器である。27は口縁部が外斜し胴部が若干張り出す深鉢形土器の口縁部破片である。口縁は平縁で口唇直下に1条の沈線をめぐらし、口縁部を変形の入組状文で構成する。頸部

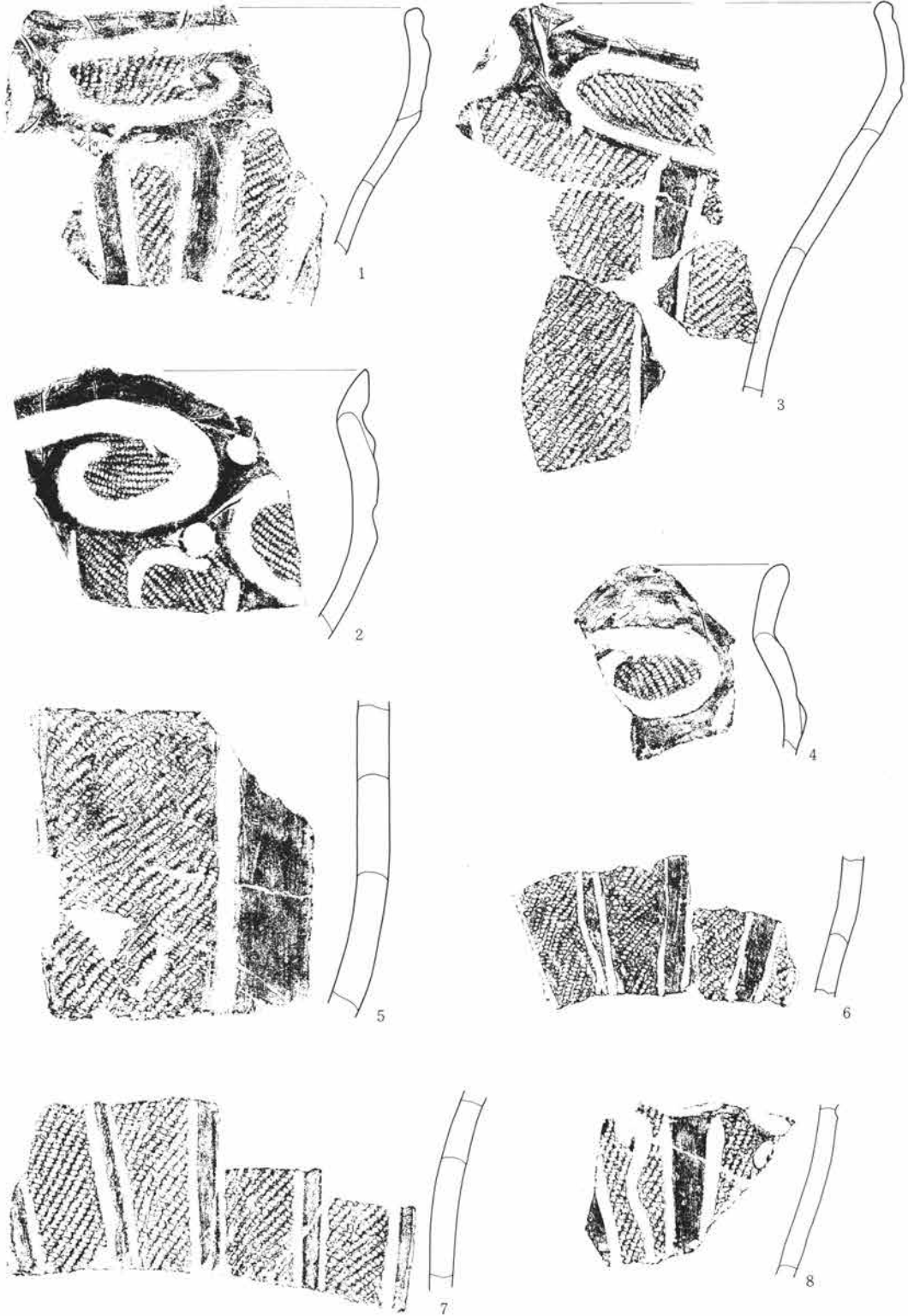


第40図 第1・2・3・4群土器 (10は $\frac{1}{6}$)

III 前原遺跡の調査内容



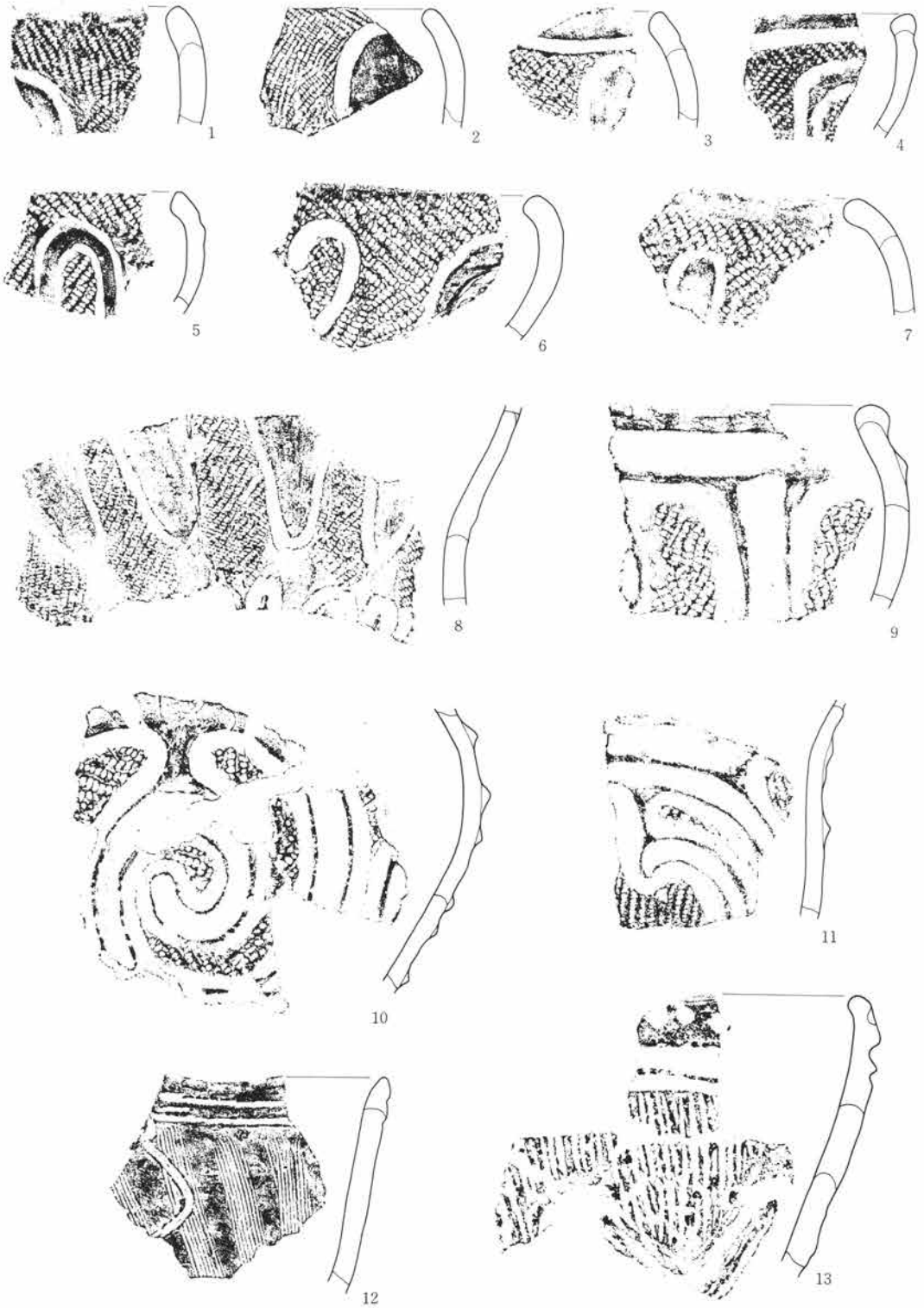
第41図 第5・6・7群土器



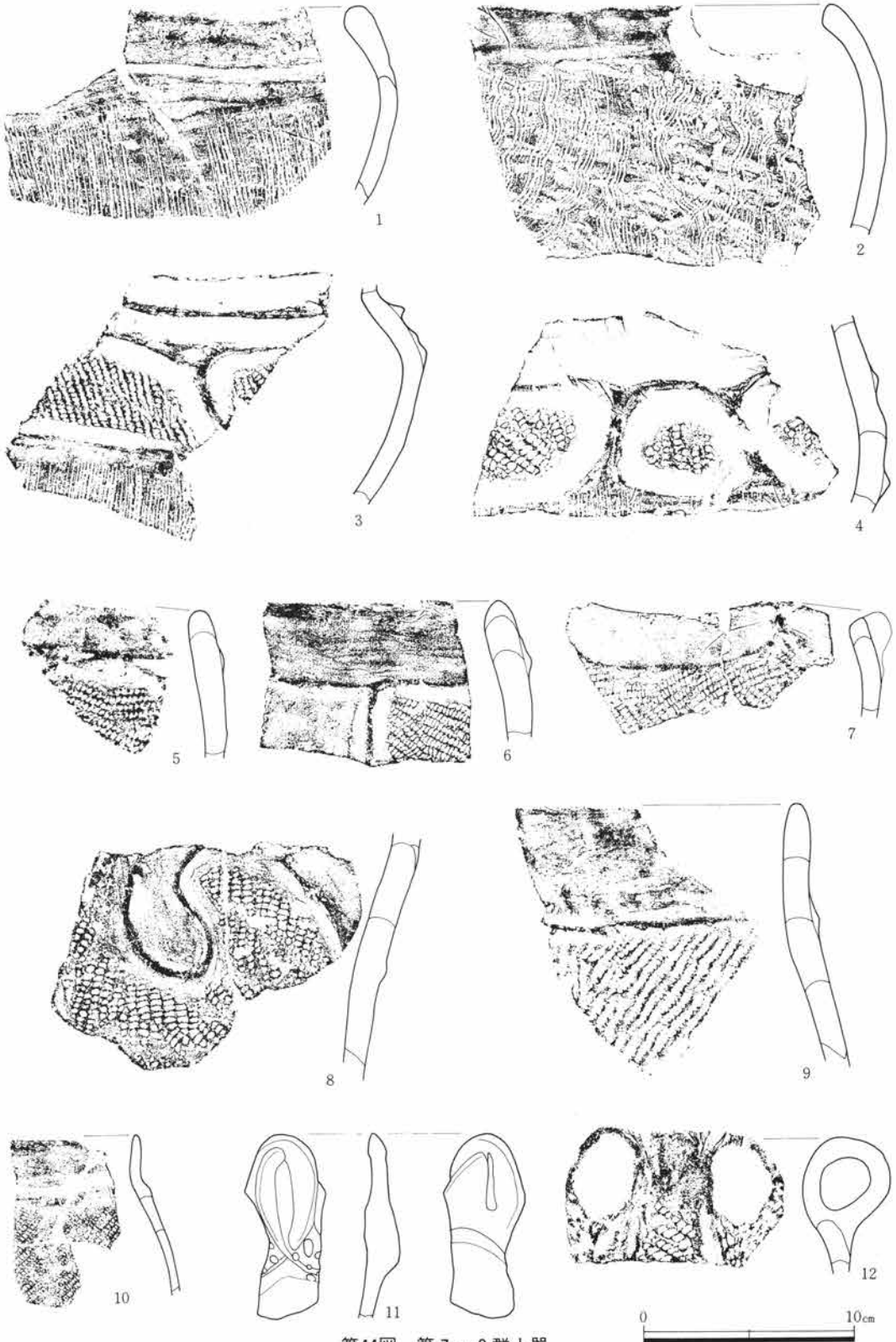
第42図 第7群土器



III 前原遺跡の調査内容

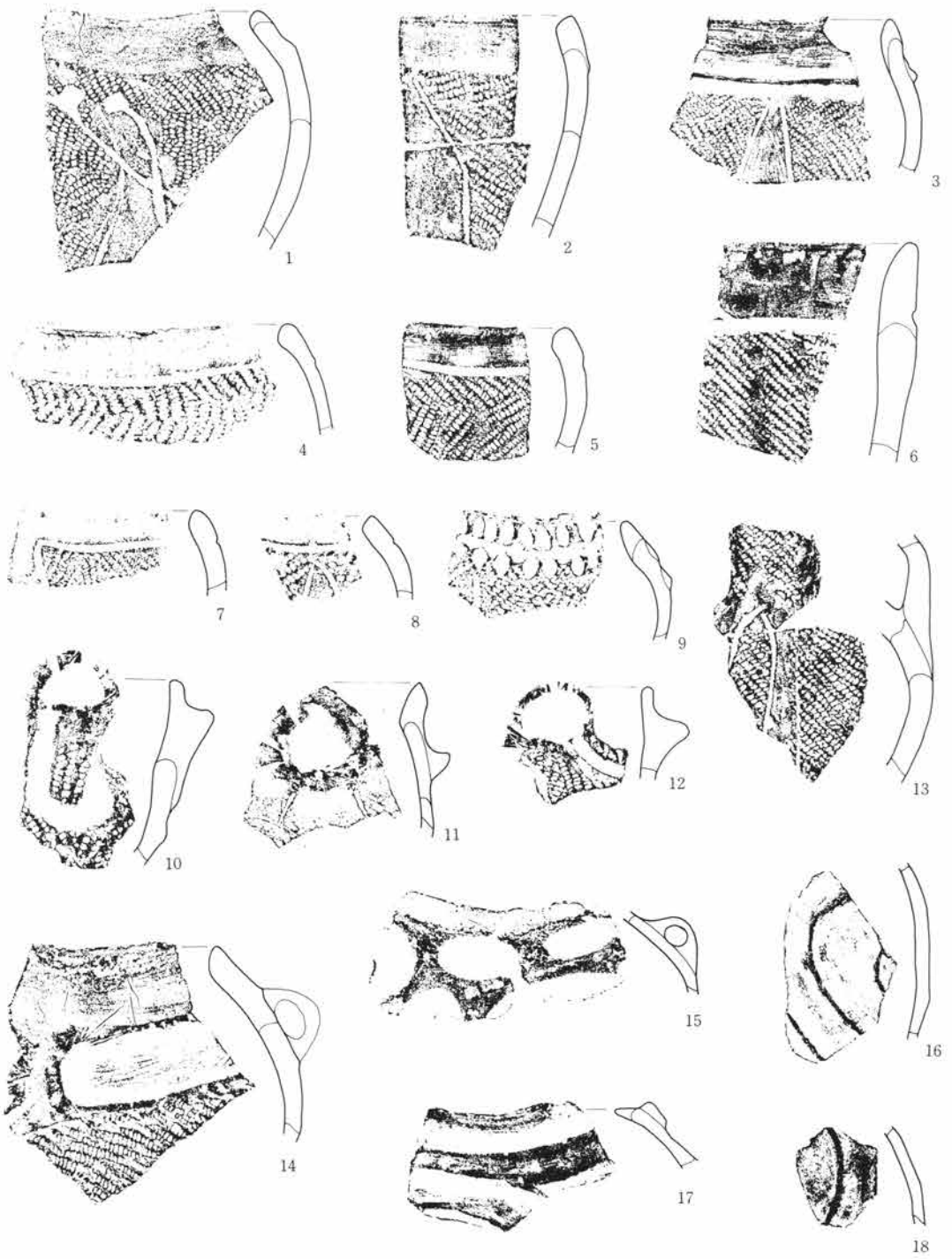


第43図 第7群土器



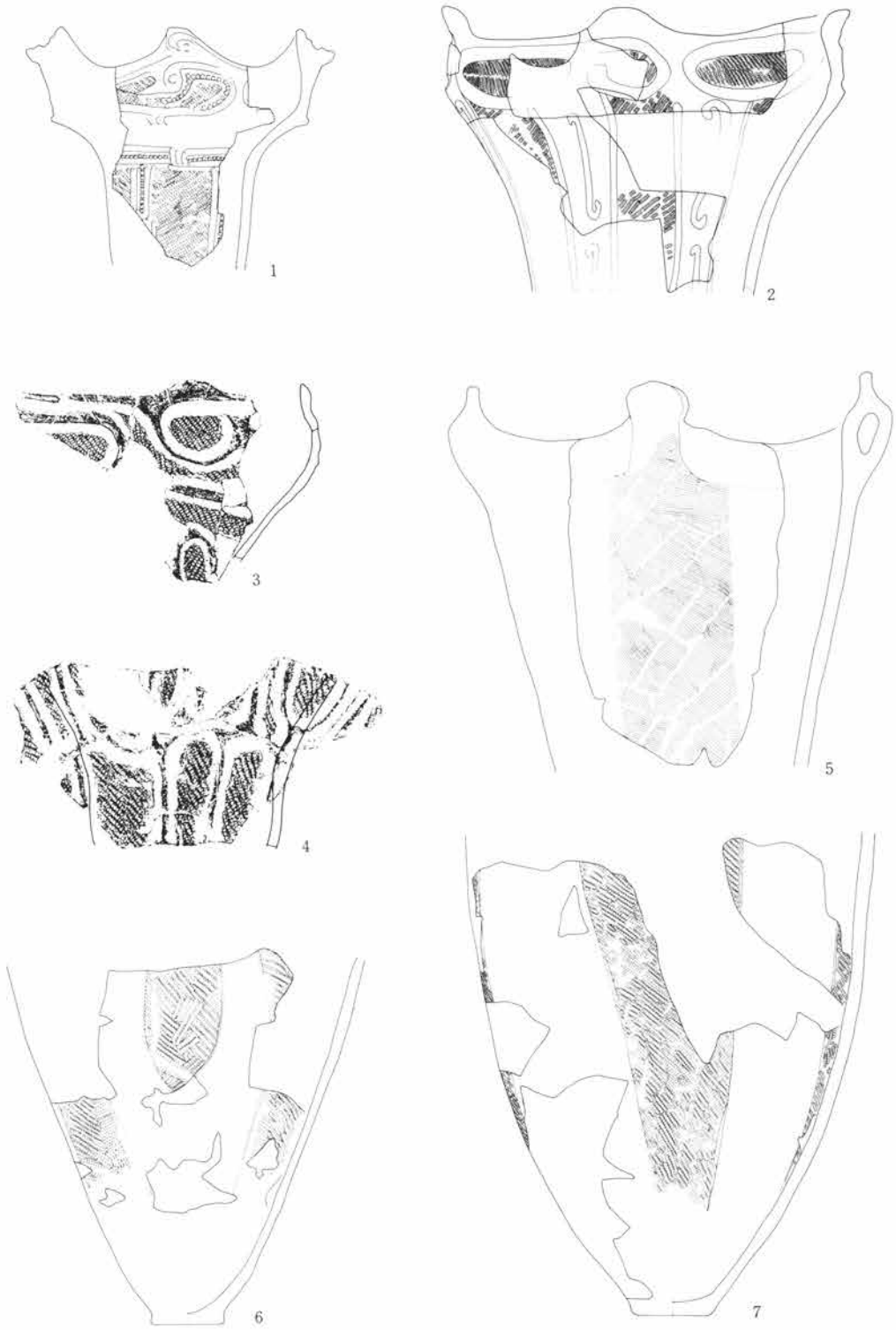
第44図 第7・8群土器

III 前原遺跡の調査内容



第45図 第8群土器

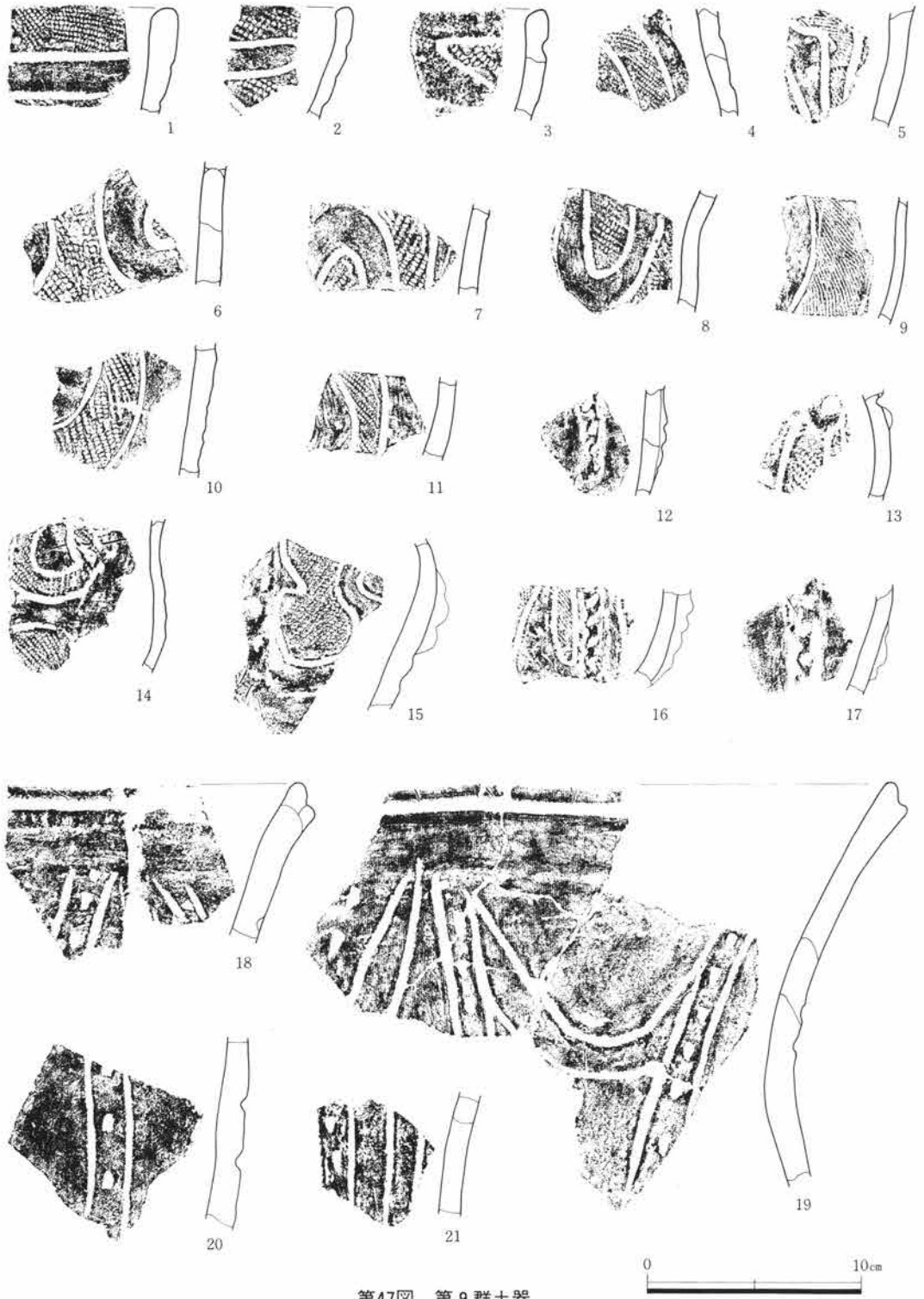
0 10cm



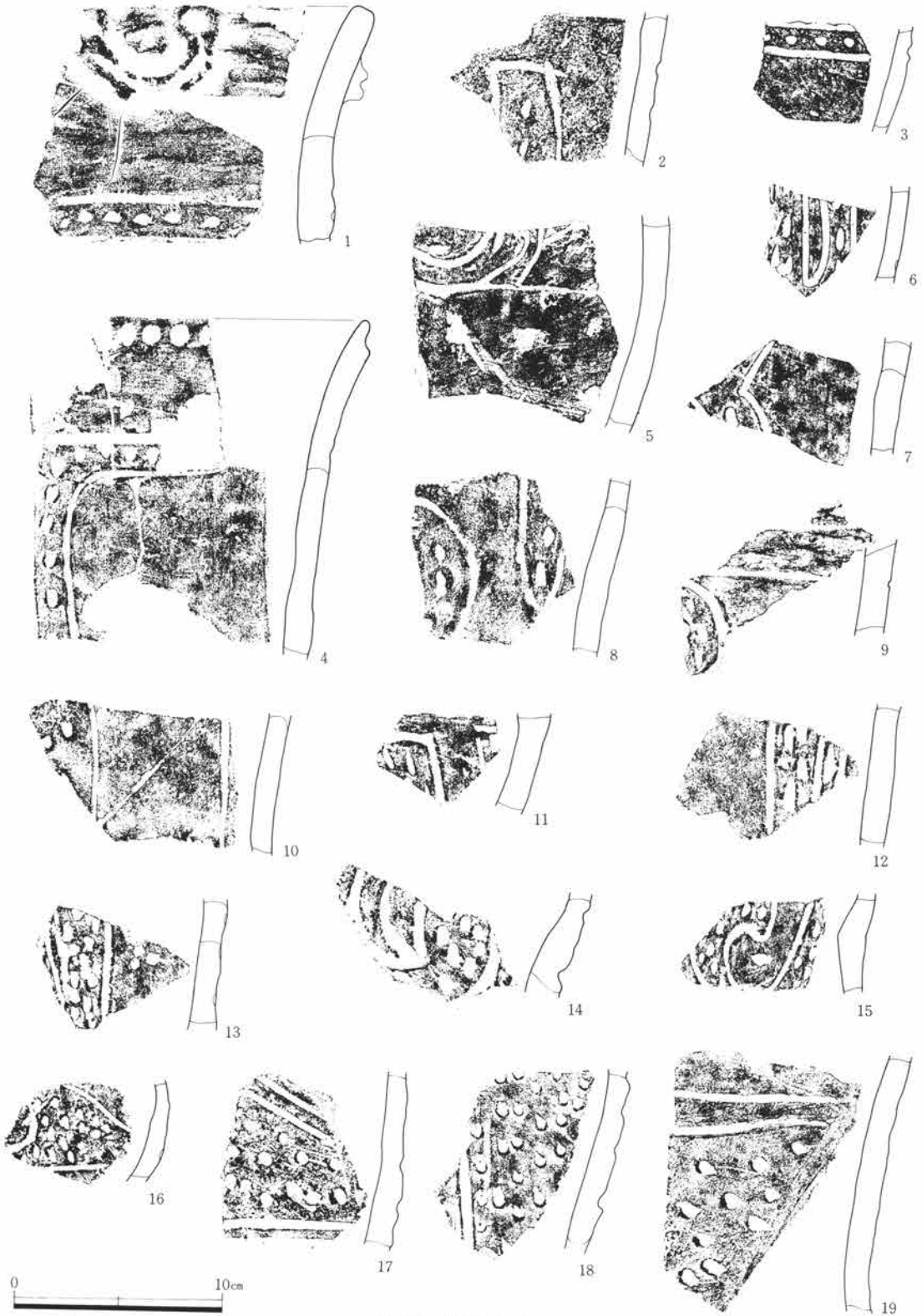
第46図 第6・7・8群土器

0 20cm

III 前原遺跡の調査内容

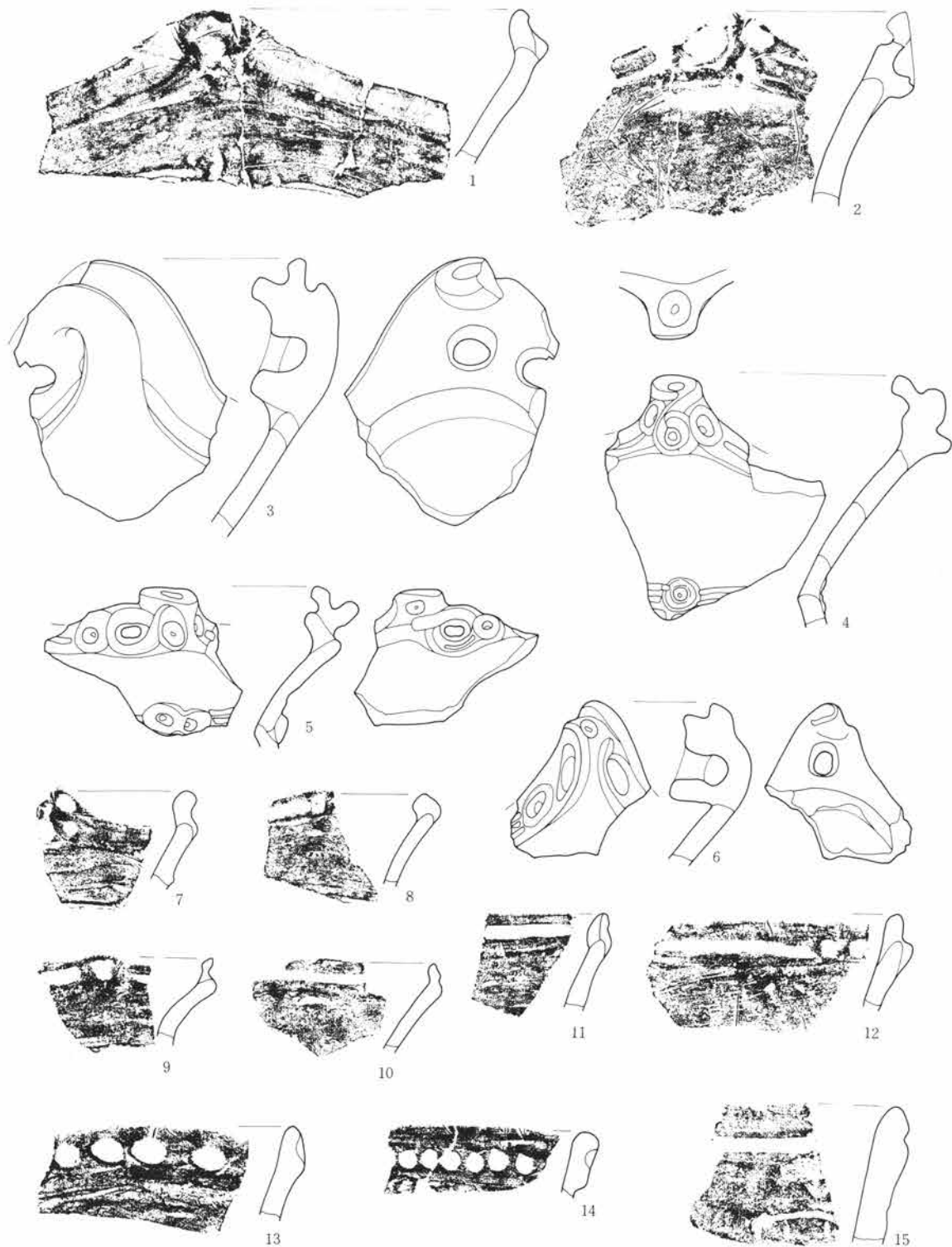


第47図 第9群土器

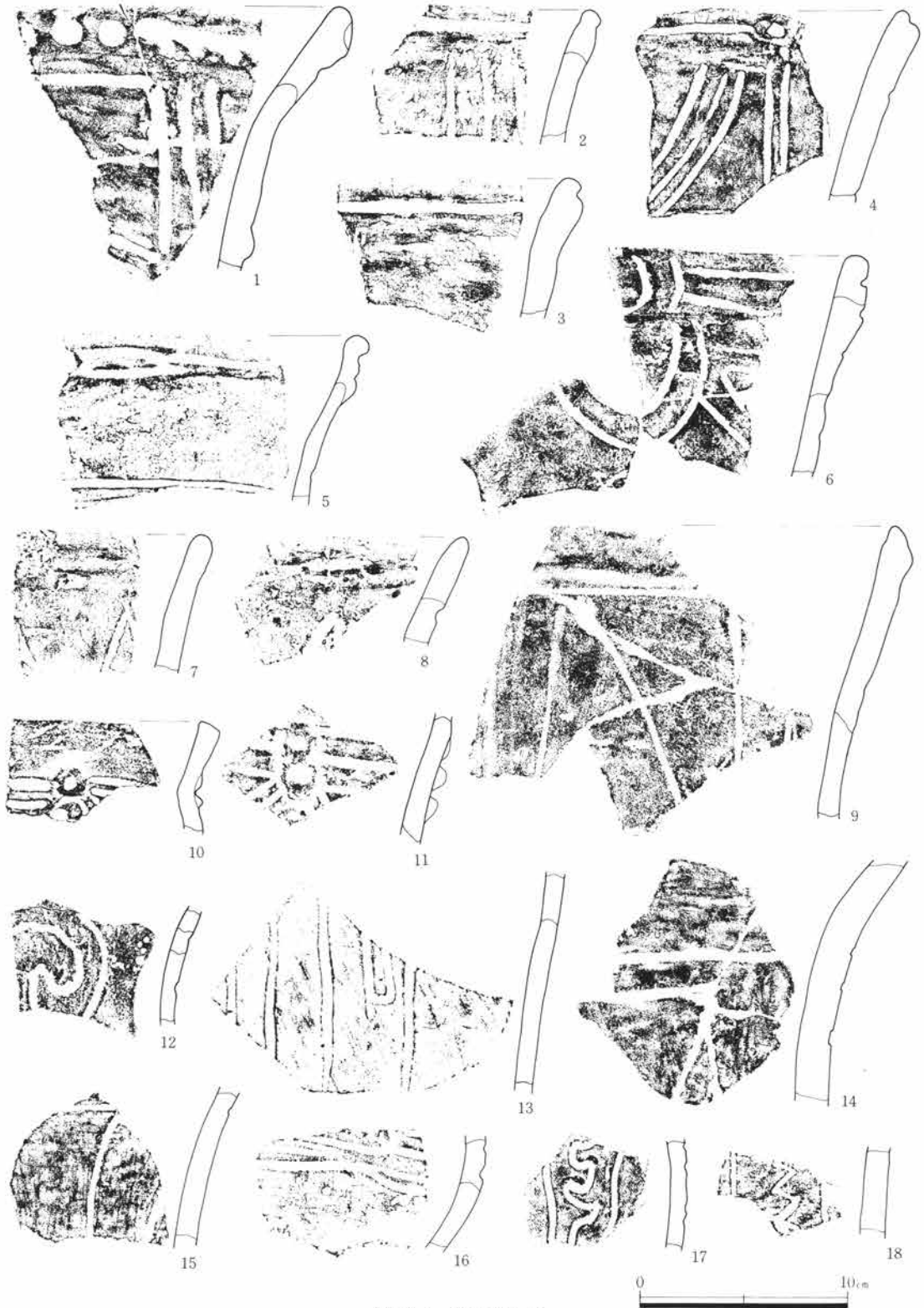


第48図 第9群土器

III 前原遺跡の調査内容

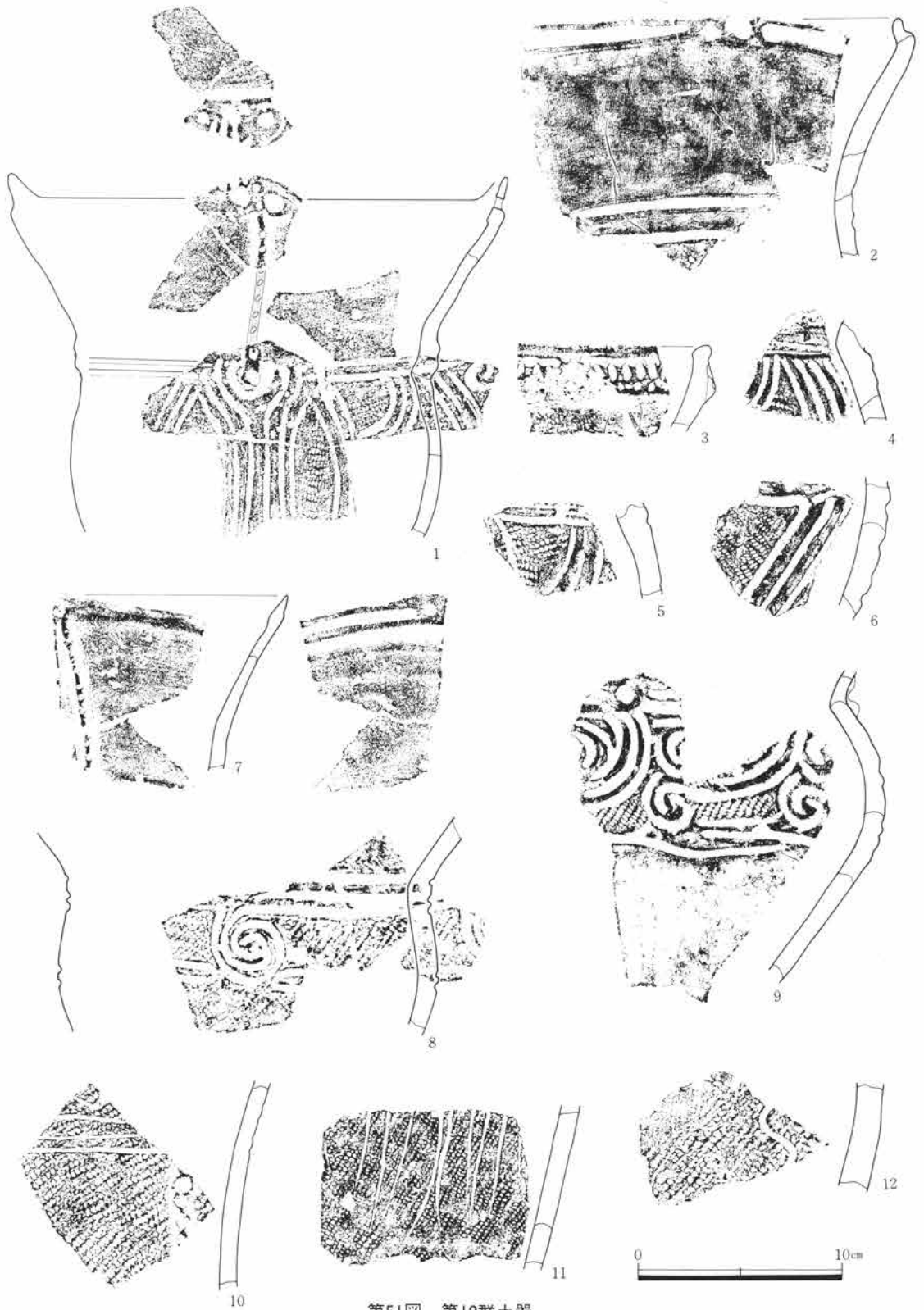


第49図 第9群土器



第50図 第9群土器

III 前原遺跡の調査内容



第51図 第10群土器

1 縄文時代の遺構と遺物

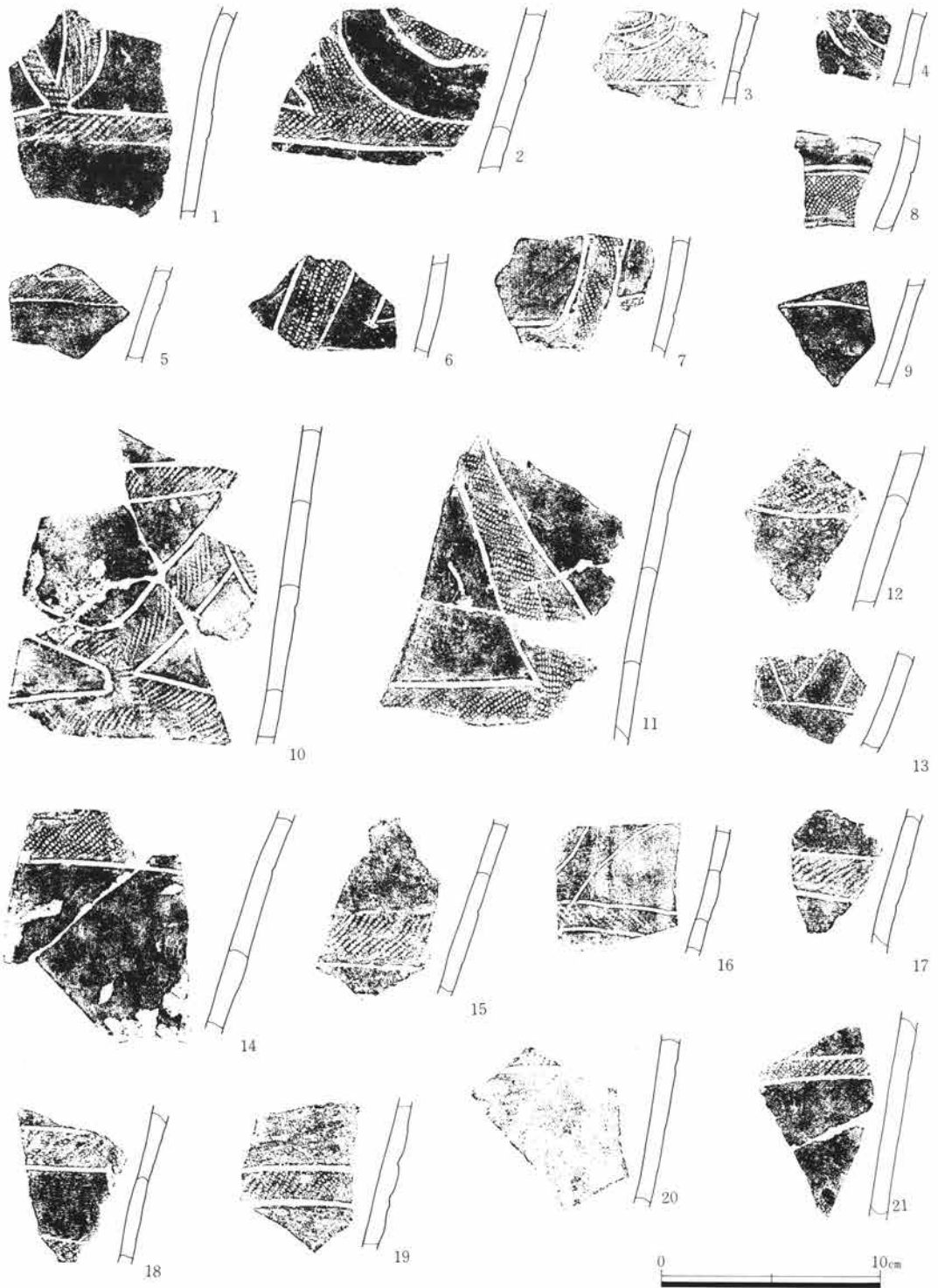


第52図 第10・12・13群土器

III 前原遺跡の調査内容



第53図 第II群土器

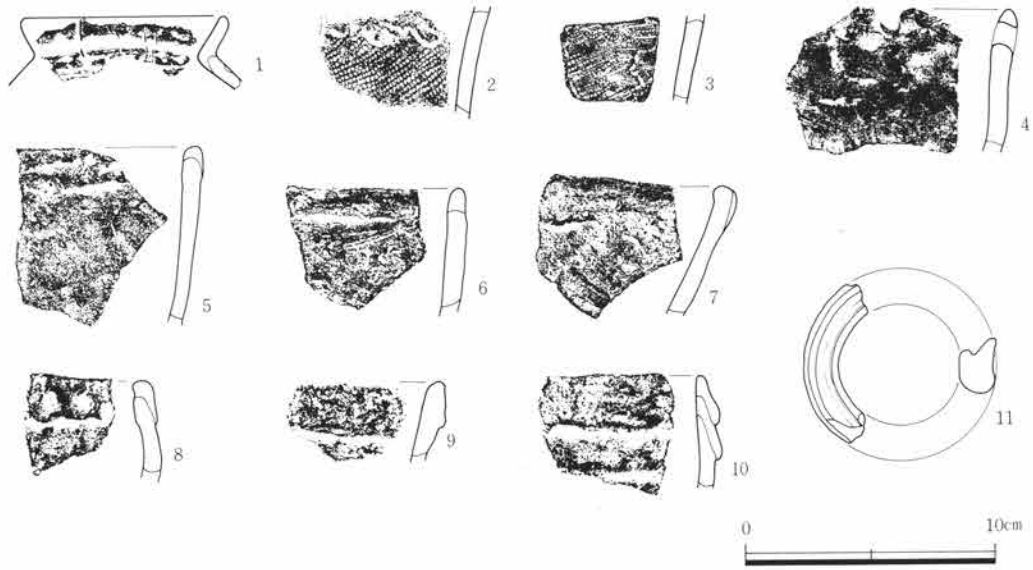


第54図 第II群土器

III 前原遺跡の調査内容



第55図 第12・13群土器



第56図 第13群土器・土製品

には刺突で充填した帯状文をめぐらして、文様帯を区画している。28は厚手の大型土器の胴部破片で、刺突で充填した帯状文で文様が構成される。

5 類 (第56図1)

大洞B-C式土器と思われるものである。器形は口縁部がくの字に外斜し、胴部が強く張り出す壺形を呈すると思われる。文様は、頸部下に沈線で区画された連続刺突文をめぐらしているが、研磨により不明瞭となっている。

6 類 (第56図2・3)

縄文のみ施文した土器である。縄文はともにLRで、結節縄文が横位に施文される。

7 類 (第56図4～10)

本群2～4類に伴うと思われる無文土器を一括した。ここに図示した土器は、200片ほどの無文土器の中から選出したものである。いずれも深鉢形を呈する粗製土器と思われ、器面に削り痕を残すものが多い。4は小波状口縁を呈する土器で、波頂部は相頭状を呈する。5～10は平縁を呈する土器で、口唇部に粘土帯の接合痕を残すものとそうでないものがある。8～10は口縁部に輪積み痕を明瞭に残す土器で、8・9は1段、10は2段認められる。

(5) 土 製 品 (第52図5・第56図11)

土製品は2点出土している。第52図5は土器の蓋であろうと思われる。上面が平坦で端部が外側に若干開いた形状を呈し、上面の平坦部にアーチ状の把手が付くが、欠損している。内面は皿状に窪んでいる。端部に2個1対の小孔がつけられているが、内1つは盲孔である。器面が荒れているため、整形は不明である。第56図11は無文の環状耳飾りの破片である。肉厚な作りであり

III 前原遺跡の調査内容

切断面は釣針状を呈する。器面は研磨が施され光沢をもっている。

なお、第52図5は5トレンチ23区から、第56図1は八坂樋西側低地からそれぞれ出土した。

(6) 石 器

今回の調査で出土した石器は総数418点であり、このうち107点が住居から、2点が土壇からの出土である。内訳（欠損品を含む）は、石鏃14点、打製石斧165点、剥片石器類115点、磨石類52点、石皿8点、小型磨製石斧2点、石錐3点、礫器17点、敲石13点、砥石1点、多孔石10点、石棒3点、石製品類9点、残核6点であり、縄文時代に一般的な磨製石斧や定形化した石匙の出土はみられなかった。ただし、敲石のなかに磨製石斧の欠損品を再利用したものが1点ある。また、これらの他に収納ケース（60×37×8cm）に8箱分の剥片類と多量の大小礫が出土している。なお、石器は器種毎に通しナンバーにしてあるため、記述はそのナンバーで行う。

石 鏃（第55図）

無茎石鏃8点、有茎石鏃1点、未製品と思われるもの5点、合計14点が出土した。

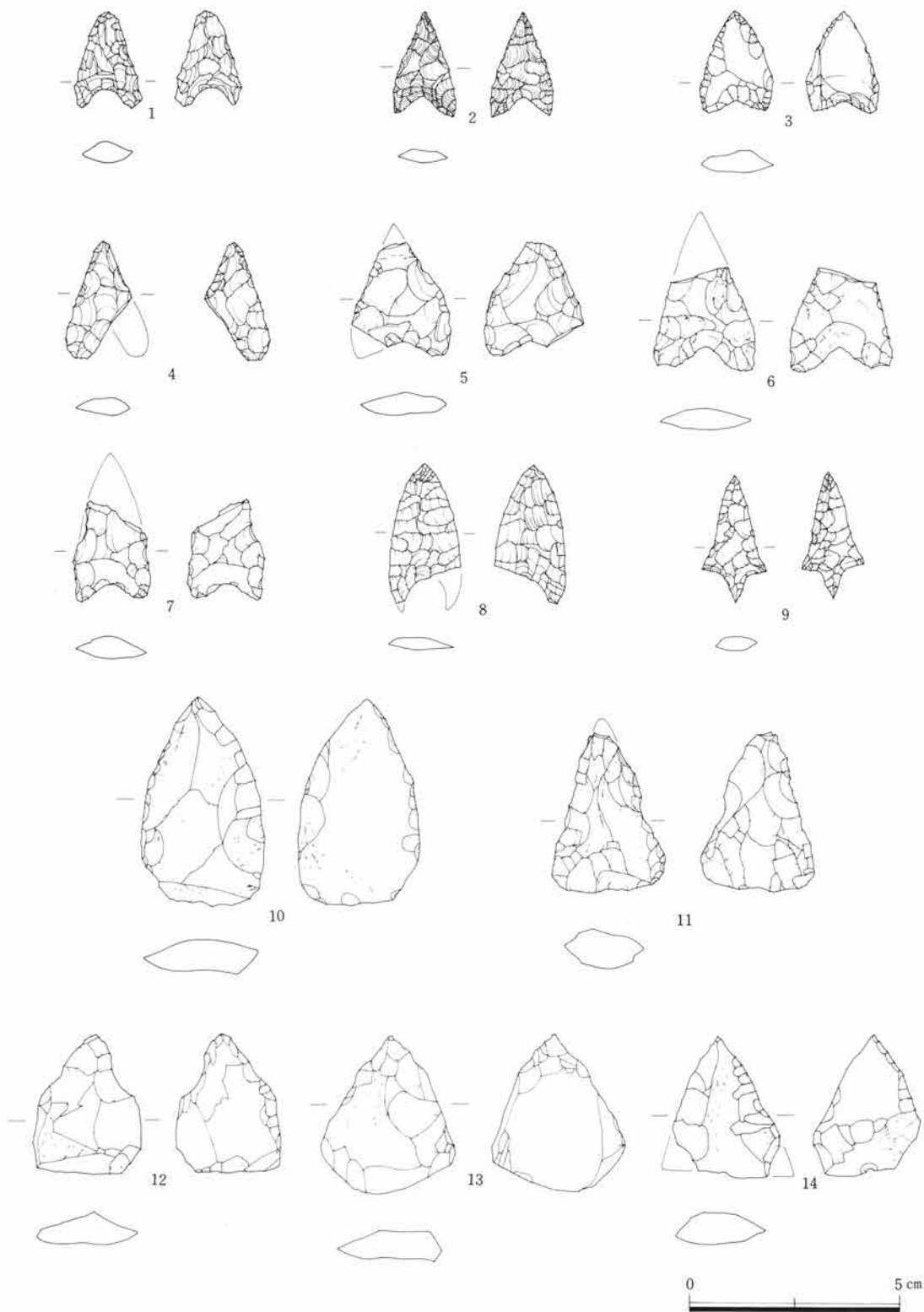
1～8は無茎石鏃で、いずれも基部に抉りが入る。1～3は小型品で、ともに完形品である。1は肉厚な作りで、先端部・脚部は丸みをもつ。2は肉薄で調整剥離もいきとどき、整ったシンメトリーな形態を呈す。3は剥片の側縁のみを調整したもので、側面形では反りが認められる。石質は1・3がチャート、2が黒曜石である。4～7は緻密安山岩製の石鏃で、全て欠損品である。調整は石質によるためかやや粗い。4は他に較べて抉りが深く、脚部は丸みをもっている。8は縦長で側縁に丸みをもち、脚部が内側に湾曲する特異な形態を呈す。整形は、中心陵線にまでおよぶみごとな押圧剥離で器肉を薄くするとともに、シンメトリーな形態に仕上げている。石質はチャートである。

9は有茎石鏃で、完形品である。かえしが若干張り出した細身な形状を呈す。小型品であるが調整はいきとどいている。石質は黒色緻密安山岩。

10～14は石鏃の未製品と思われる。石質はいずれも緻密安山岩である。10は横剥ぎ剥片の縁辺部のみを調整して形状を整え、バルブを剥ぎ取って厚みを調整していることから、尖頭器（槍先）の可能性もある。

打製石斧（第56図～第66図）

総数192点出土しており、そのうち50点が住居からの出土である。完形品は44点認められた。欠損品は、刃部が欠損したものの43点、装着部（柄部）が欠損したものの39点、両端が欠損したものの11点であり、刃部および装着部の欠損はほぼ同数である。大きさは、長さ15cm・重量210gのものから長さ7.2cm・重量27gのものまで様々である。素材は、基本的に河原石の表皮部分を利用しており、素材剥ぎ取りは横剥ぎによるものが多い。また、刃部に磨耗痕を明瞭に残すものが多数認め



第57図 石鏃

III 前原遺跡の調査内容

られ、従来から言われているように本器種が土掘り等に使用されたことを明示している。石質は頁岩・安山岩が9割以上を占め、砂岩・ホルンフェルス・閃緑岩などが若干づつ認められる。以下、形態の違いから6類に分けた。

1 類 (1～50)

側縁が平行か、あるいは若干刃部幅が広く、側縁が直線的ないわゆる短冊形を呈するものを一括した。本遺跡出土の打製石斧のなかで最もポピュラーな形態であり、大きさもバラエティに富んでいる。断面形は2～4のように平坦なものもあるが、自然面を残す表面に反りの認められるものが多く、特に8、16、26は器体全体に反りが認められる。刃部の磨耗痕は、大型品よりも中・小型品に多く認められる傾向がある。特に27・29は、調整剝離面が消耗するほどの使い込みがなされており、また両端部に磨耗が認められることから、装着部位を換えて使用されたものと考えられる。

2 類 (51～62・77～80)

装着部側縁が平行で刃部が幅広になるものを一括した。成作方法や側面形は1類と同様であるが、装着部を細く平行にすることが意図されており、装着時の固定力を意識した1類のバラエティであろう。長さは7cmのものから12cmのものまで認められるが、刃部巾は4～5cmにほぼ統一されている。

3 類 (63・65・66・67～72)

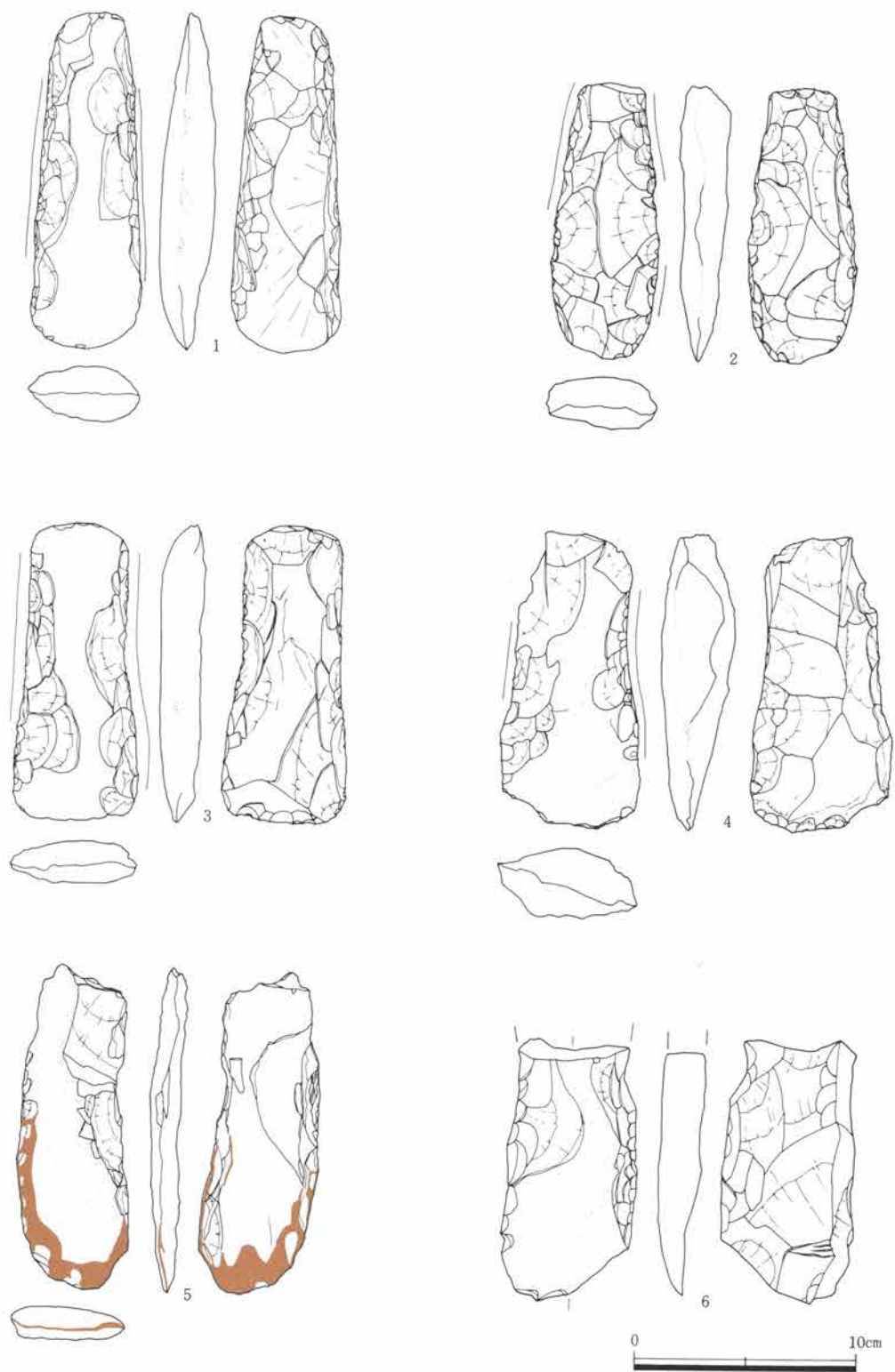
装着部側縁に抉りが入るものを一括した。比較的肉厚で反りの認められないものと、強く反るものがある。前者は一見未製品のようなのだが、側縁には製作の最終段階を示す歯つぶしが施されている。また、65の刃部には明瞭な使用痕が認められる。

4 類 (64・67・73～75・81～83)

刃部幅に比べて長さが短かく、形態が撥状を呈するものを一括した。64・67・73～75のように2類に類似するものと、81～83のように肉厚で装着部が細くなるものとが認められる。前者は2類との分離に苦慮したが、側縁の作りは3類に類似しており、2類よりも刃部の張り出しが強い点で本類とした。後者は肉厚で刃部には片刃状に角度が付けられていることから、手斧状の木工具として機能も考えられる。

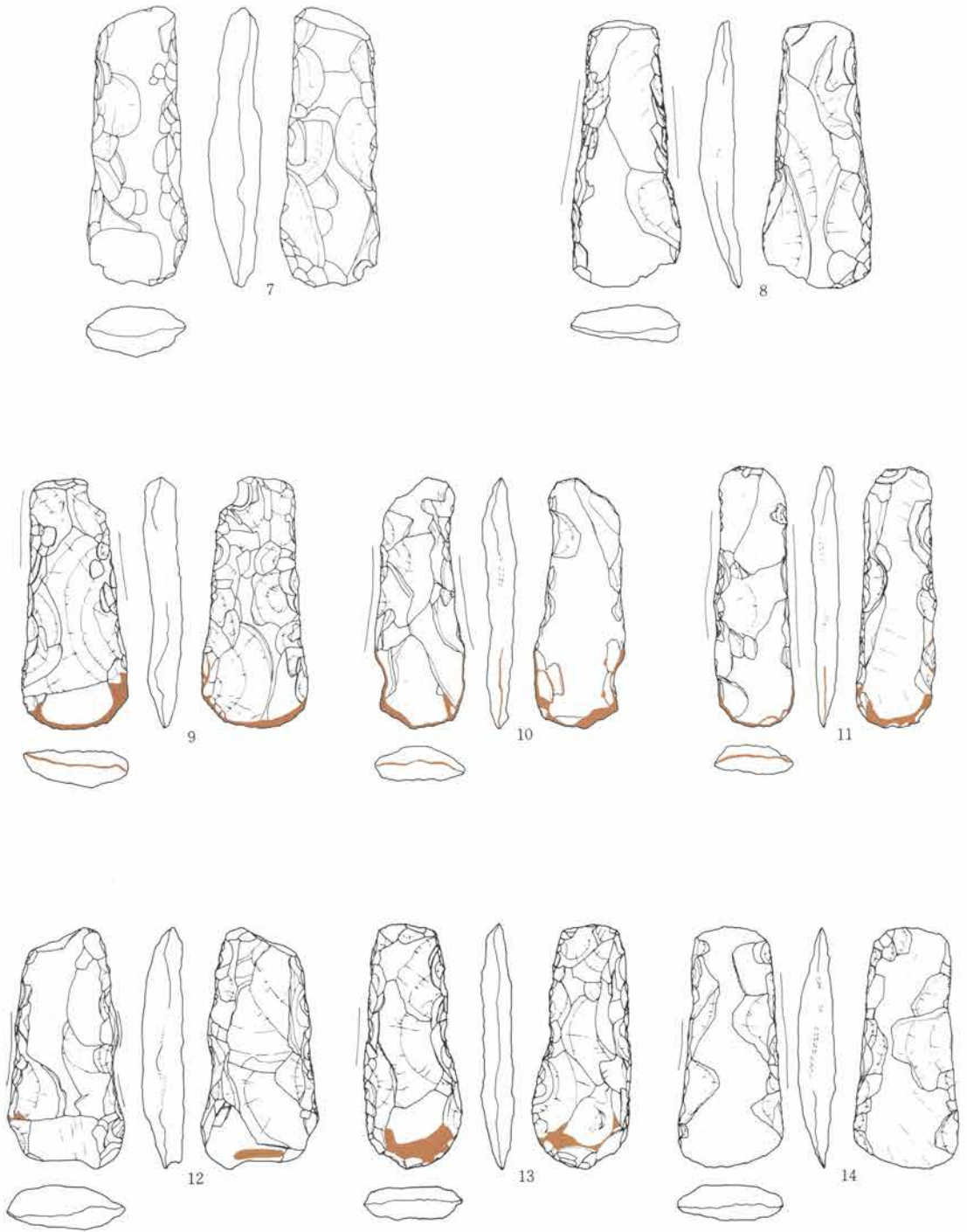
5 類 (84～91)

分銅形を呈するものを一括した。長さが11～13cmの大型品と8cm前後の小型品とがある。小型品は他類同様礫の表皮部分を素材としているが、大型品では板状の大型剝片を素材としているものがある。これは本類の形態が他に比べて横幅を広く必要とするため、湾曲する表皮部分では表面積をまかないきれないためであろう。また、本類には反りを持つものが認められない。使用痕は84・87に認められ、いずれも両刃が使用されている。また、86・88は抉れ部に明瞭な磨耗痕が認められ、この部分が装着部であることを暗示している。なお、86の刃部には磨耕痕よりも新しい剝離が認められる。



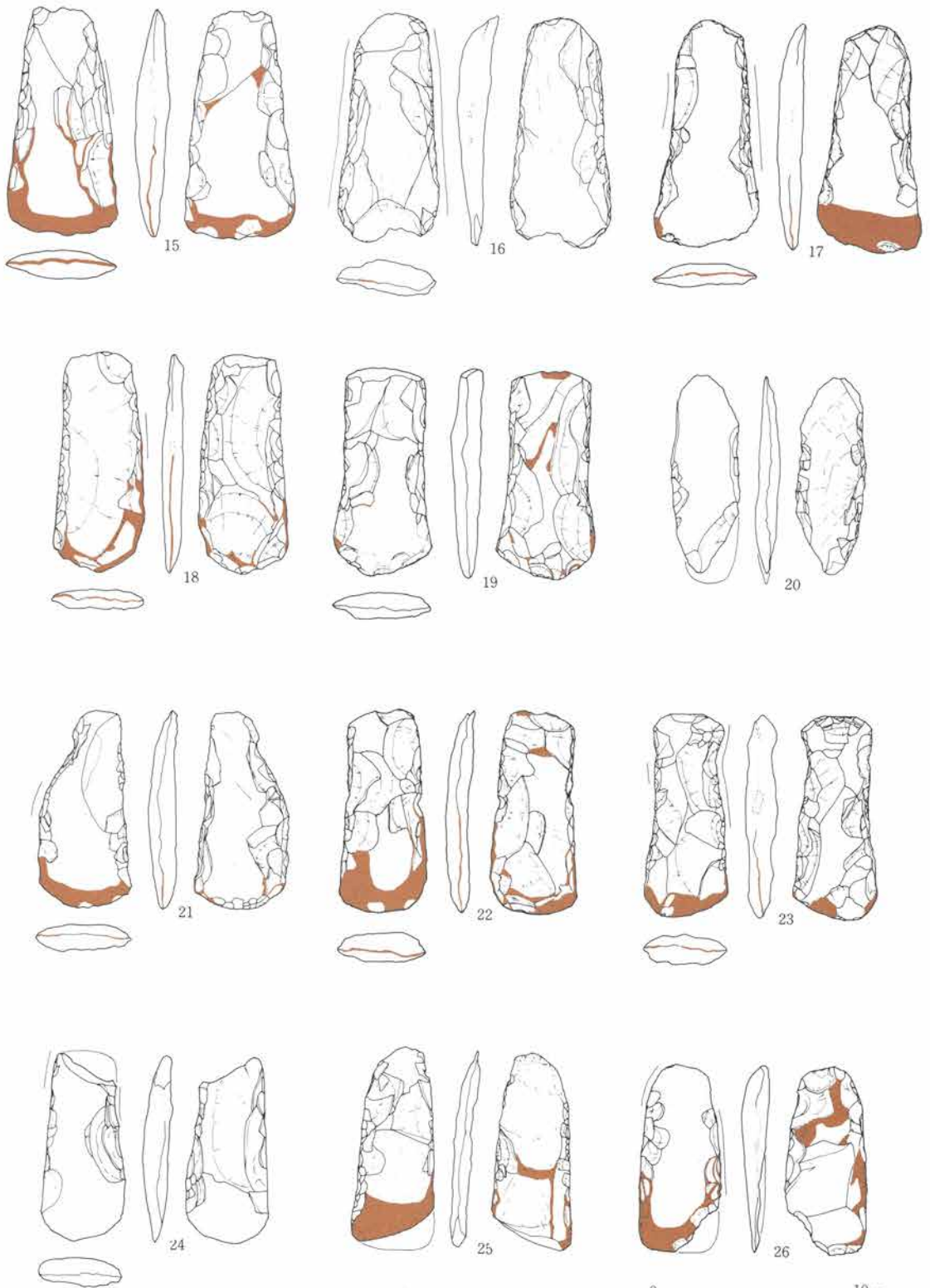
第58図 打製石斧 (1)

III 前原遺跡の調査内容



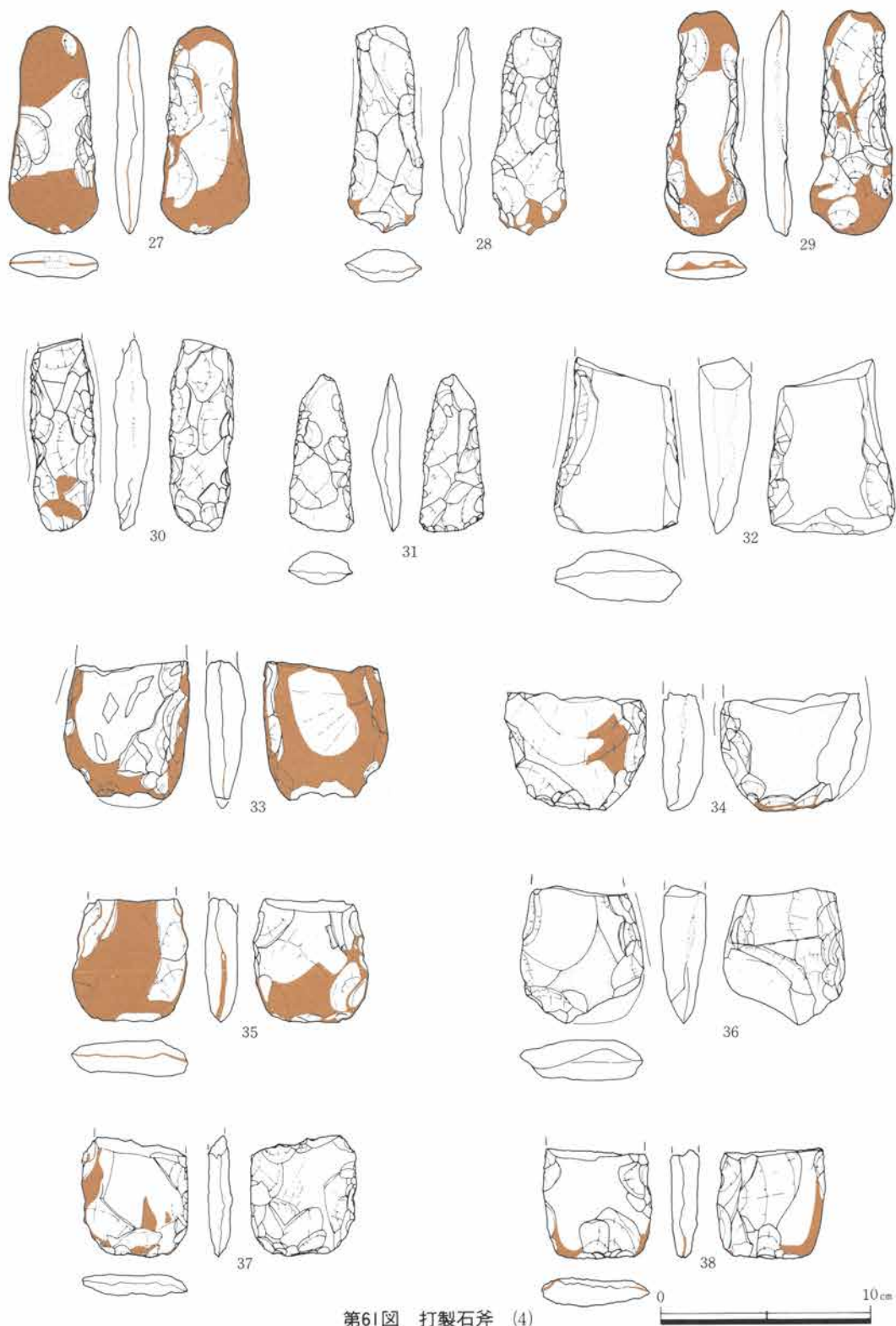
第59図 打製石斧 (2)

0 10cm

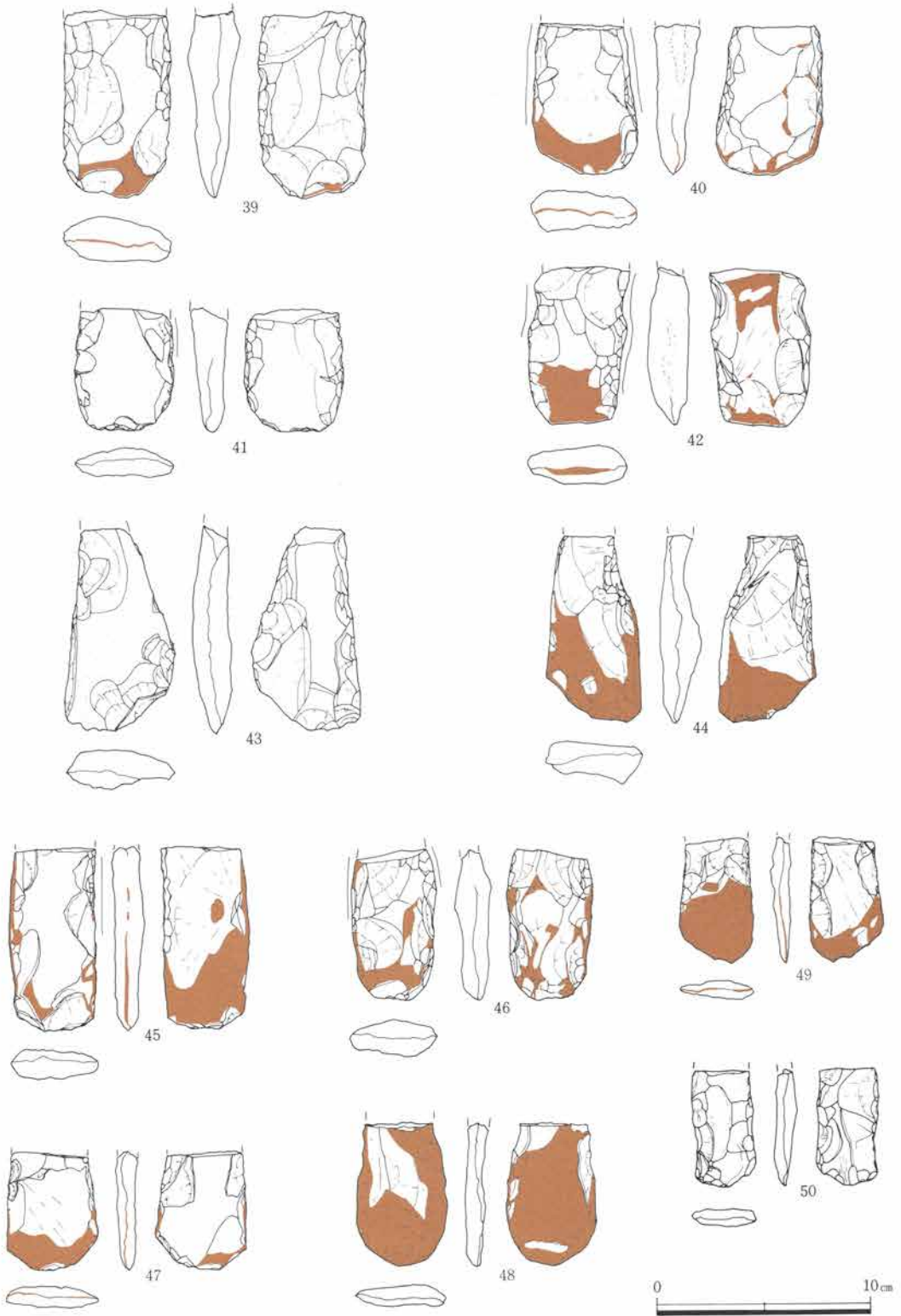


第60図 打製石斧 (3)

III 前原遺跡の調査内容



第61図 打製石斧 (4)



第62図 打製石斧 (5)

III 前原遺跡の調査内容

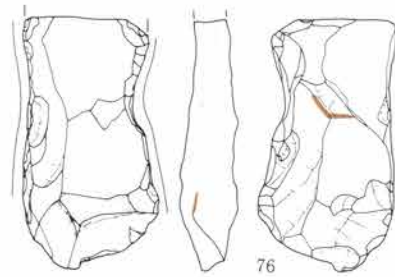
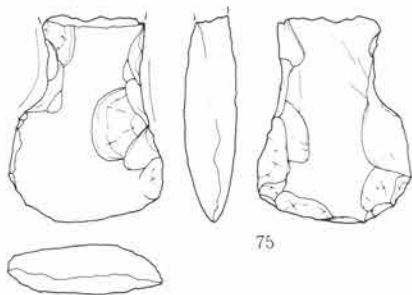
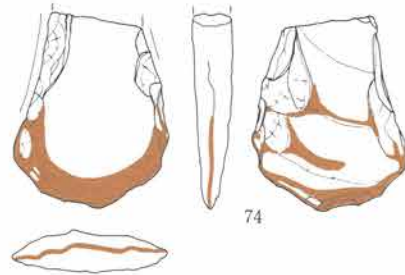
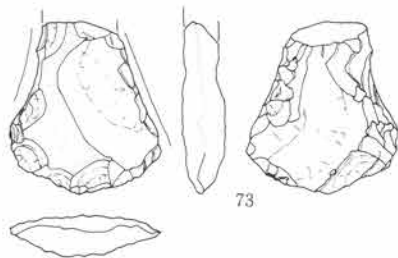
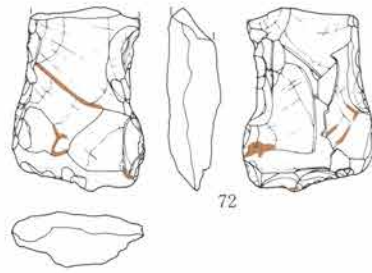
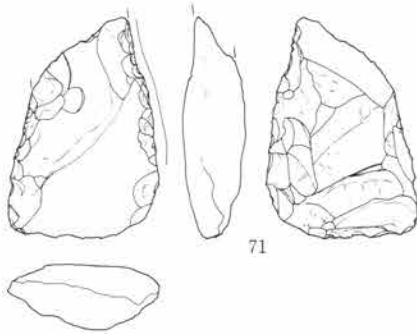
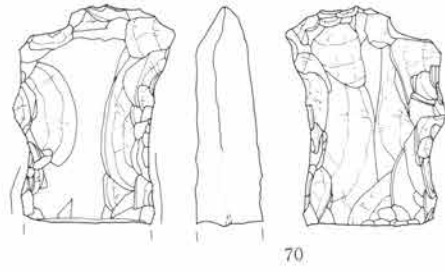
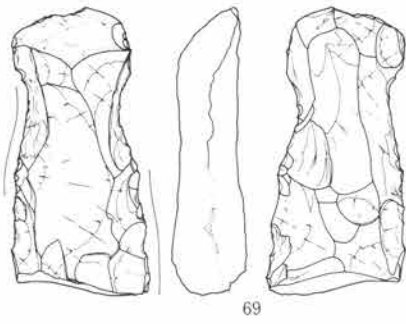


第63図 打製石斧 (6)



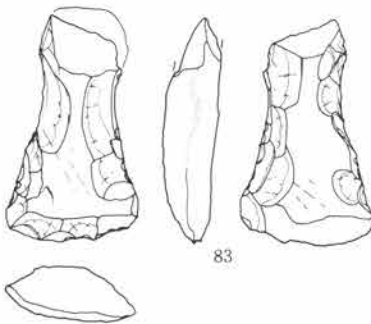
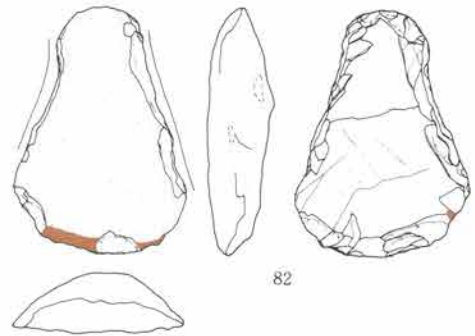
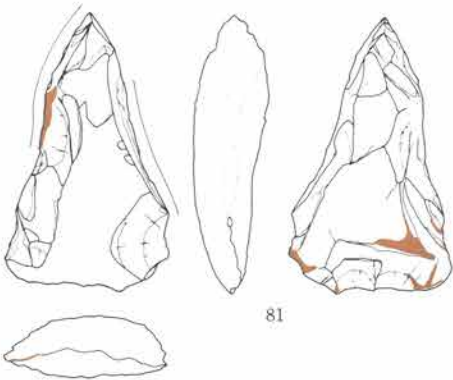
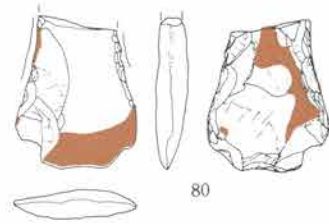
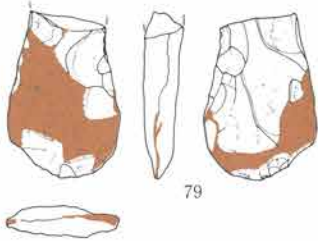
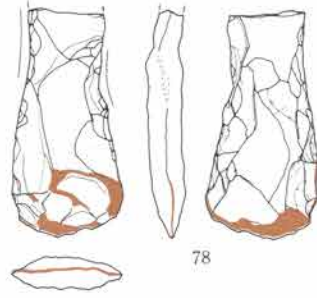
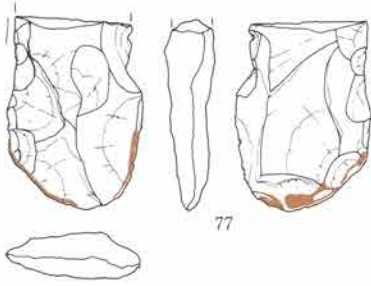
第64図 打製石斧 (7)

III 前原遺跡の調査内容



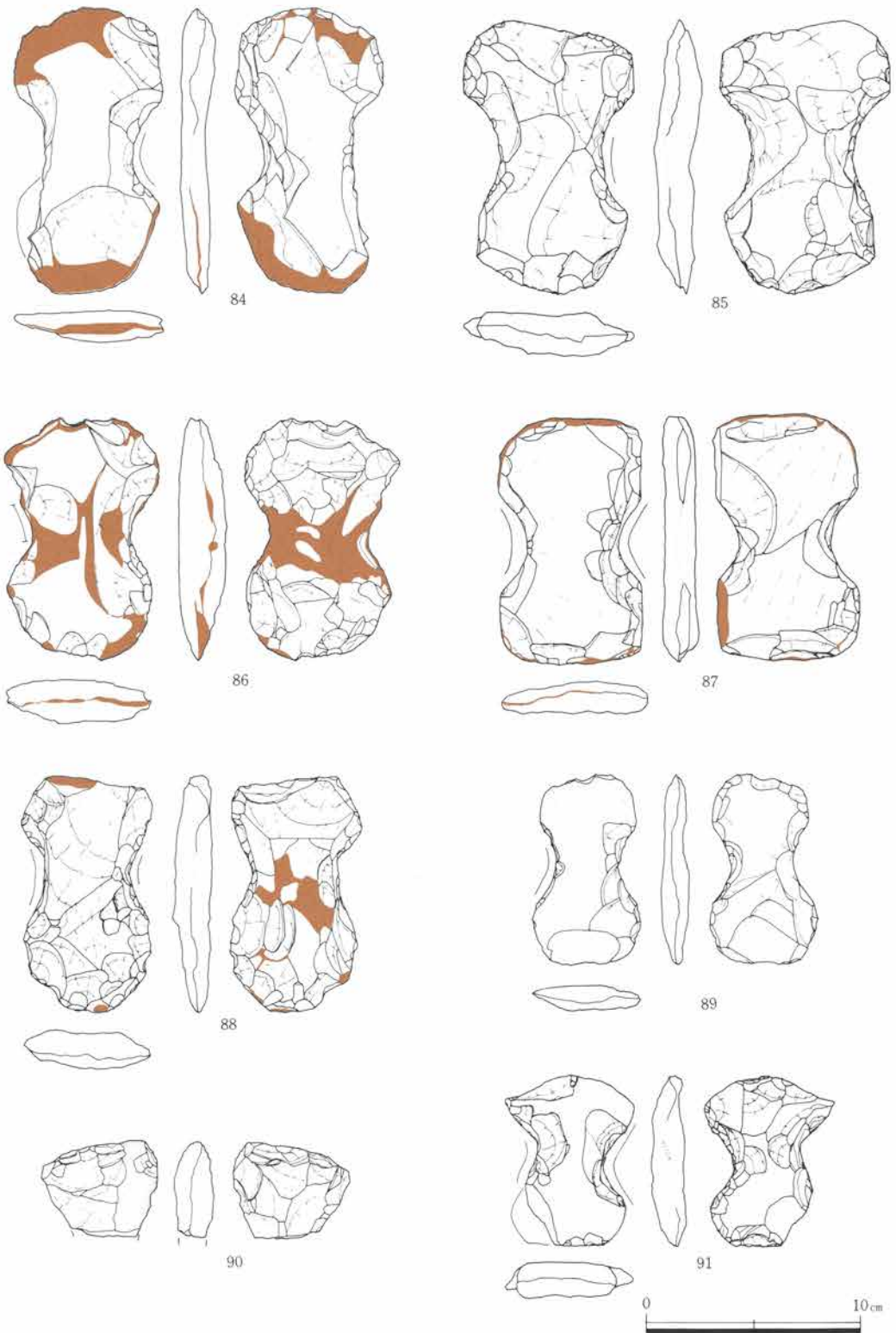
第65図 打製石斧 (8)



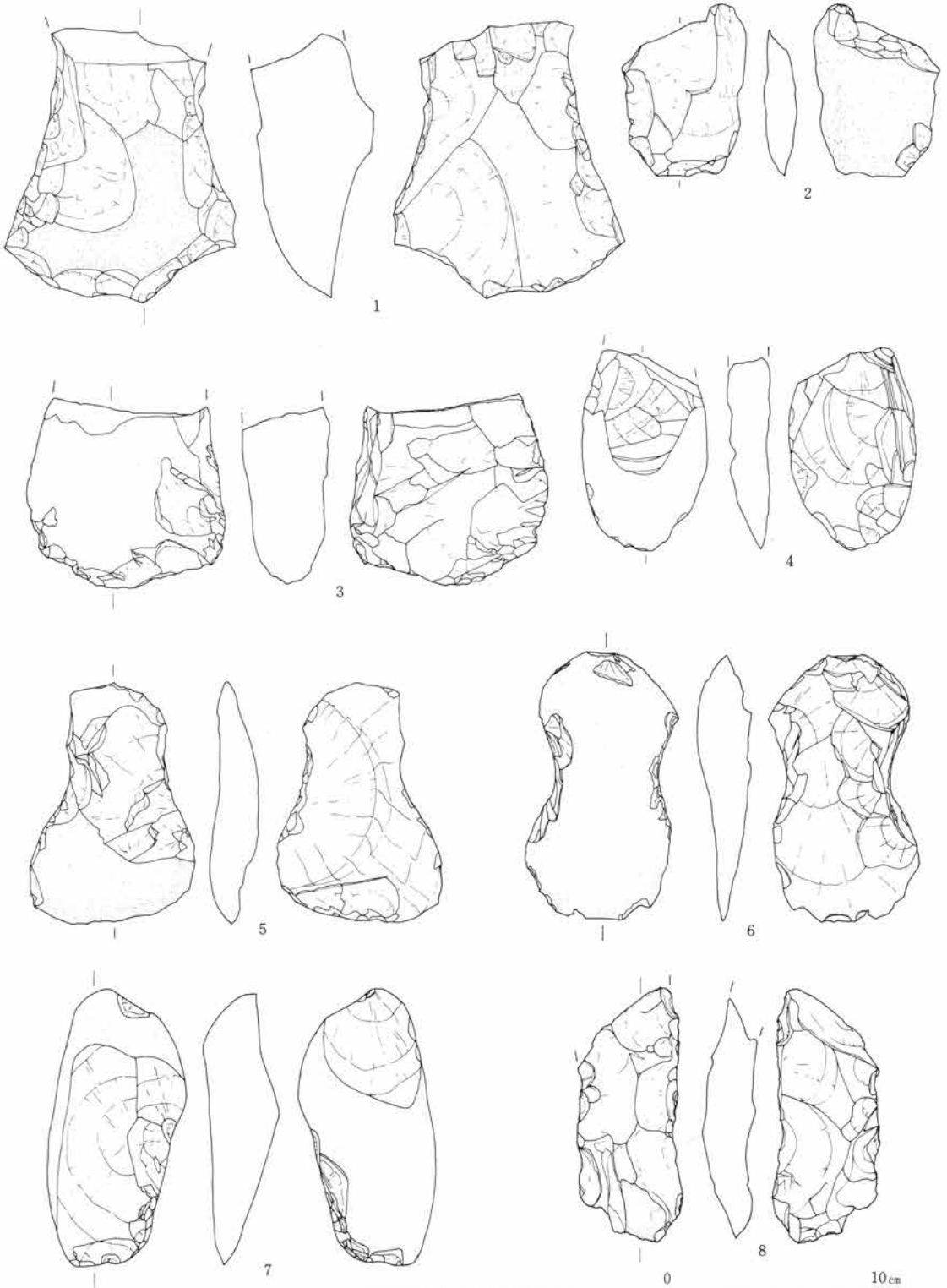


第66図 打製石斧 (9)

III 前原遺跡の調査内容



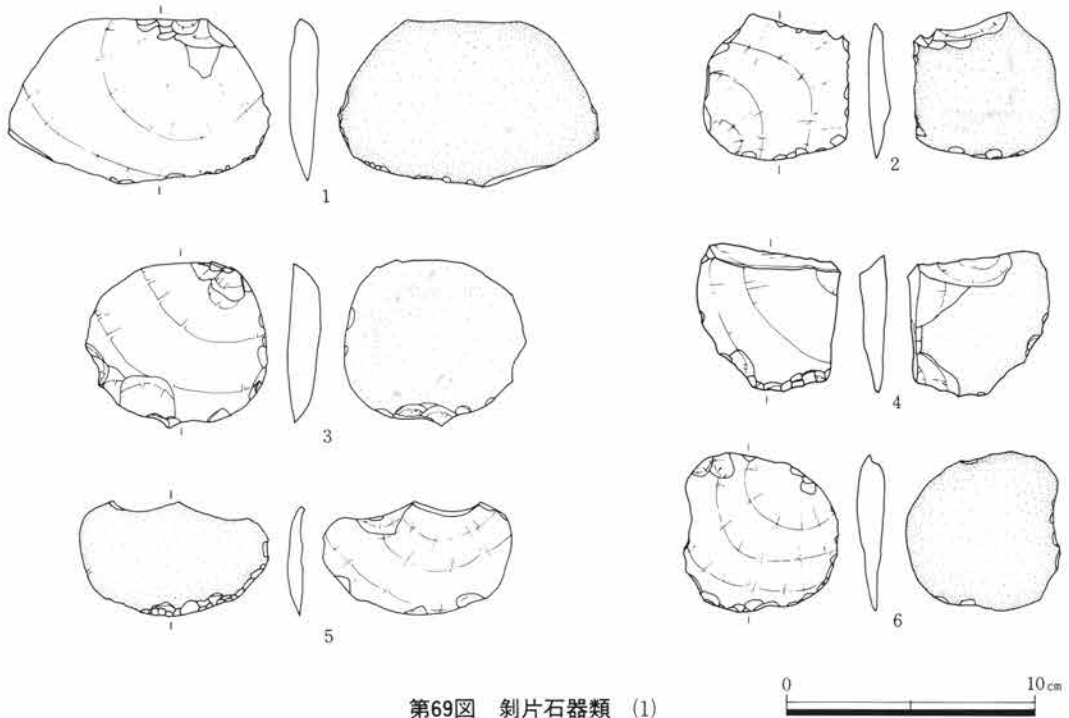
第67図 打製石斧 (10)



第68図 打製石斧未製品

0 10cm

III 前原遺跡の調査内容



第69図 剥片石器類 (1)

6 類 (第66図)

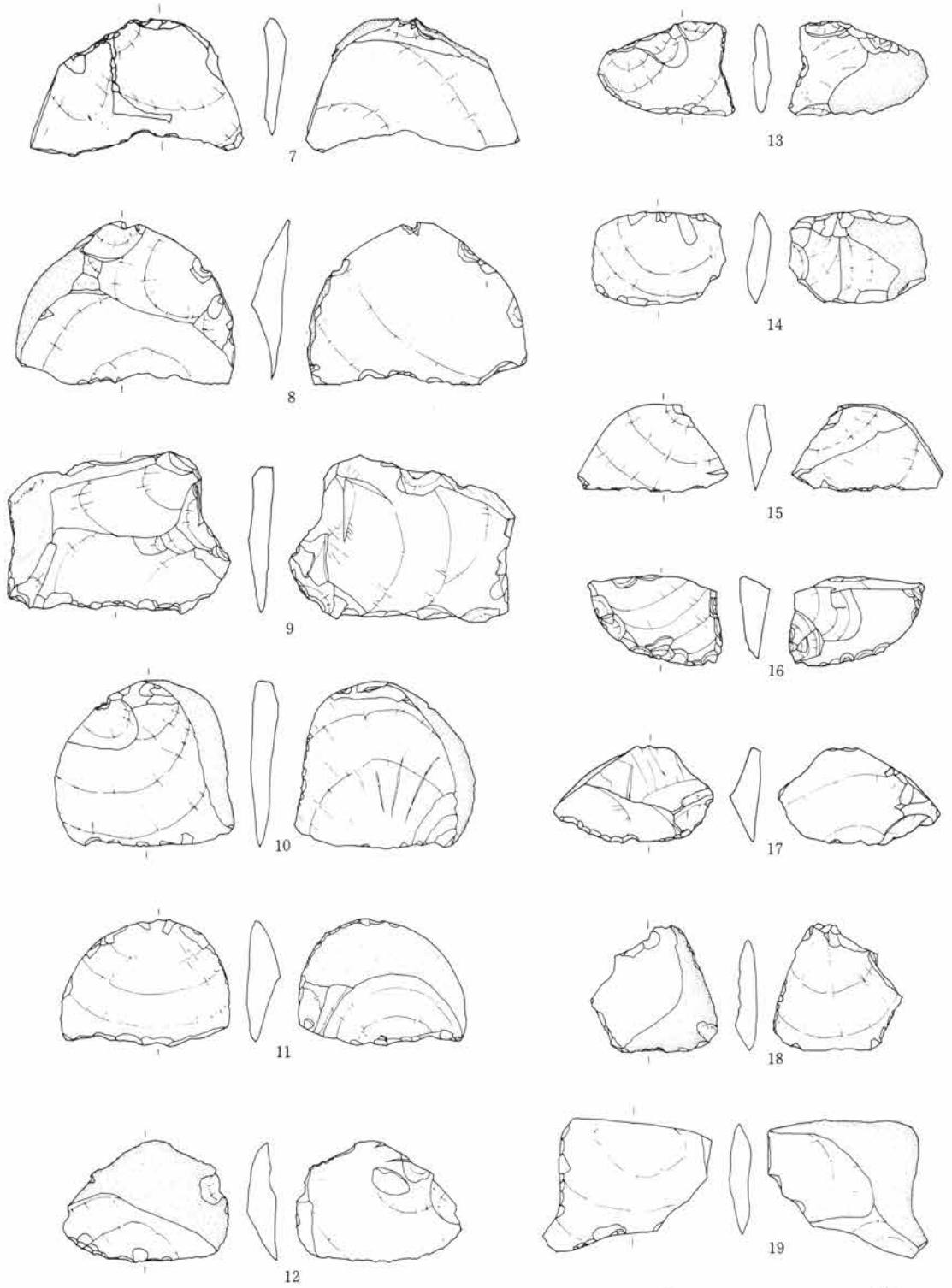
打製石斧の未製品と思われるものを一括した。本器種の製作は遺跡内で行なわれていたものと思われる。

剥片石器類 (第67図～第73図)

不定形な剥片の一辺あるいは数辺に調整を加えたものを一括した。調整剥離と思われる剥離が施されているものを対象に123点を選出したが、この他にも多量の剥片類が出土しており、これが総数とは言い切れない。また、このなかには未製品も相当量含まれていると思われるが、担当者の様々な判断で定形的なものだけを石器とすることには疑問があるため、あえて図示した。石質は頁岩が90%以上を占め、他に安山岩・ホルンフェルス等が若干づつ認められる。

1 類 (1～49・81～83)

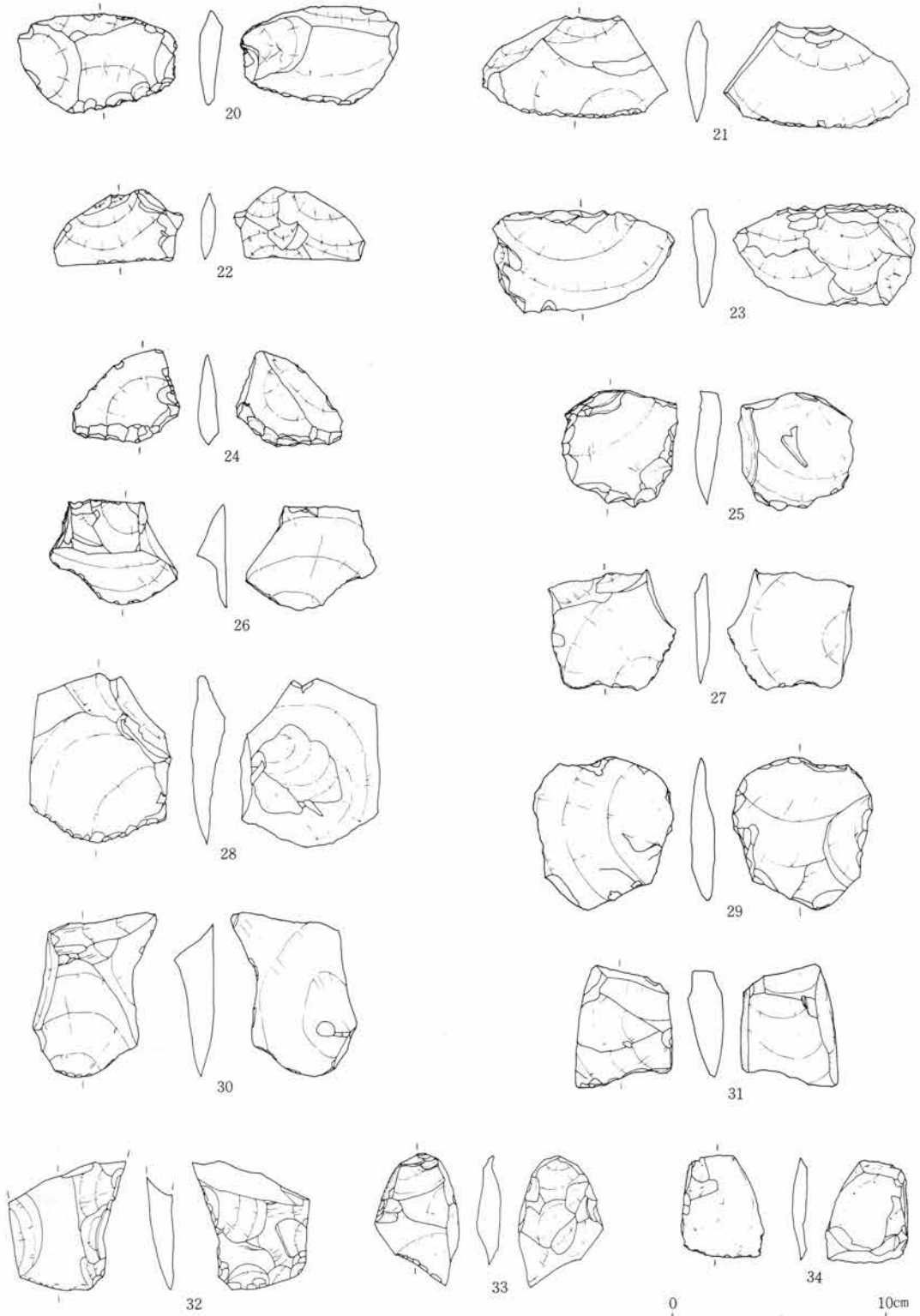
比較的薄手の剥片に細かな調整剥離を施し、鋭利な刃部を作り出したものを一括した。1～6は円礫の表皮部分を利用したもので、刃部以外の調整はほとんど行なわれない。7～12は半円状を呈する剥片の直線部分に調整を加えたもので、弧状部分に自然面を残している。大型品が多い。13～17・20～23・35～39は細長い剥片の一辺に調整を加えたもので、13・35・39にはつまみ状の突起がつく。45～49は縦長剥片の先端部に調整を加えたもので、49は刃部が尖頭状を呈す。なお、2・6・9・12・13・18～20・32・35・36・38・45の刃部には磨耗痕（使用痕）が認められ、特に9・13・20・35・38・45では明瞭である。



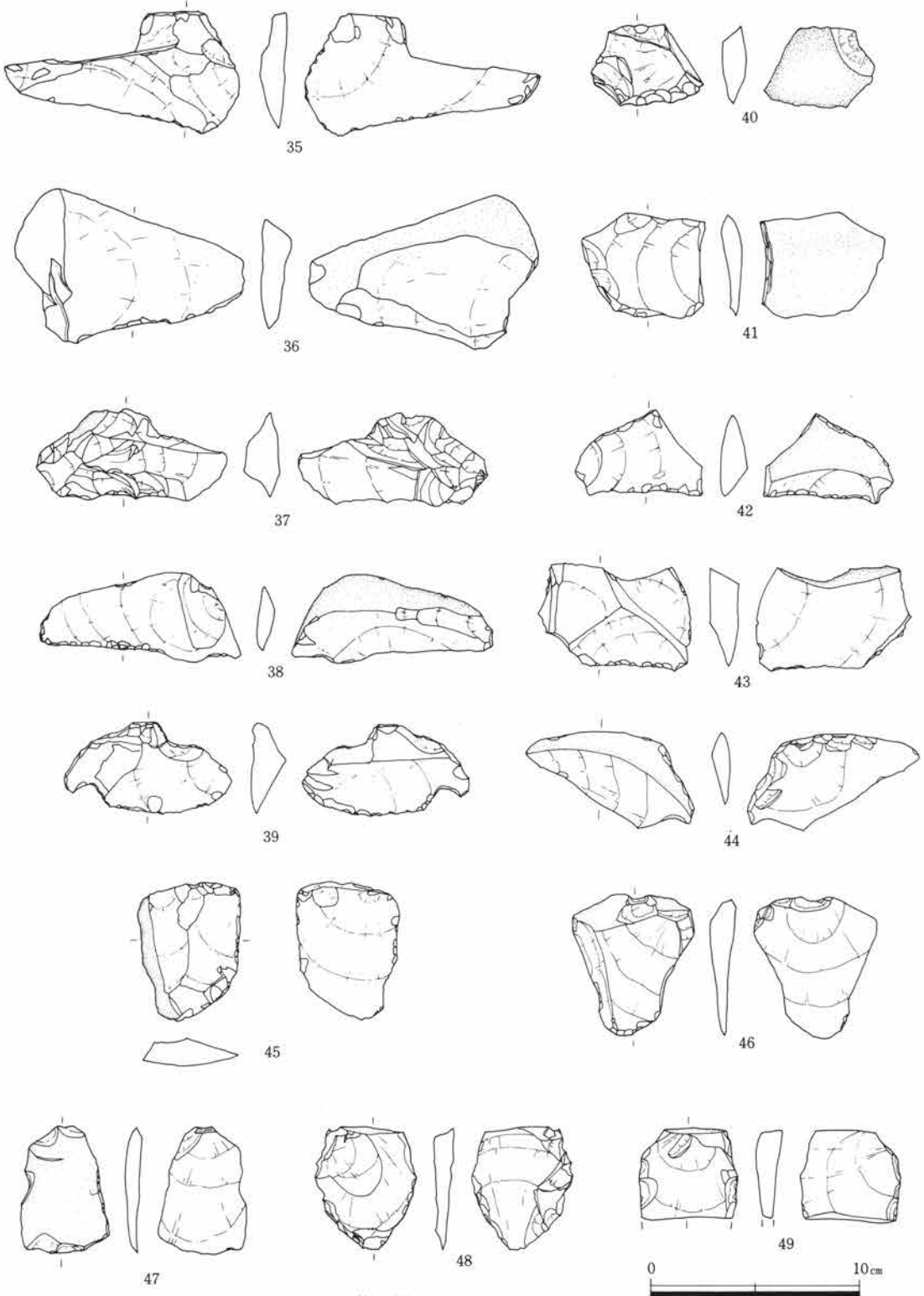
第70図 剥片石器類 (2)

0 10cm

III 前原遺跡の調査内容

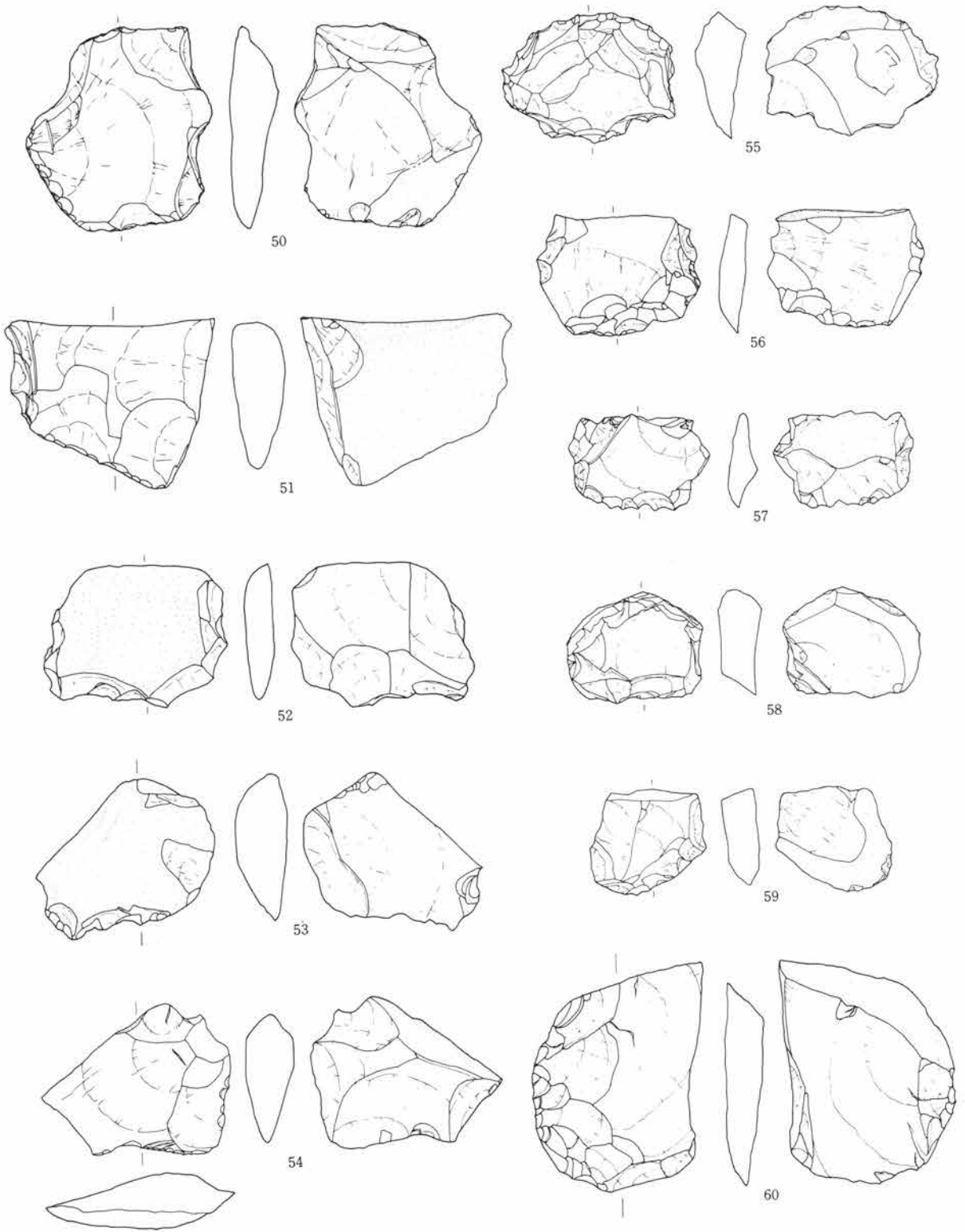


第71図 剥片石器類 (3)



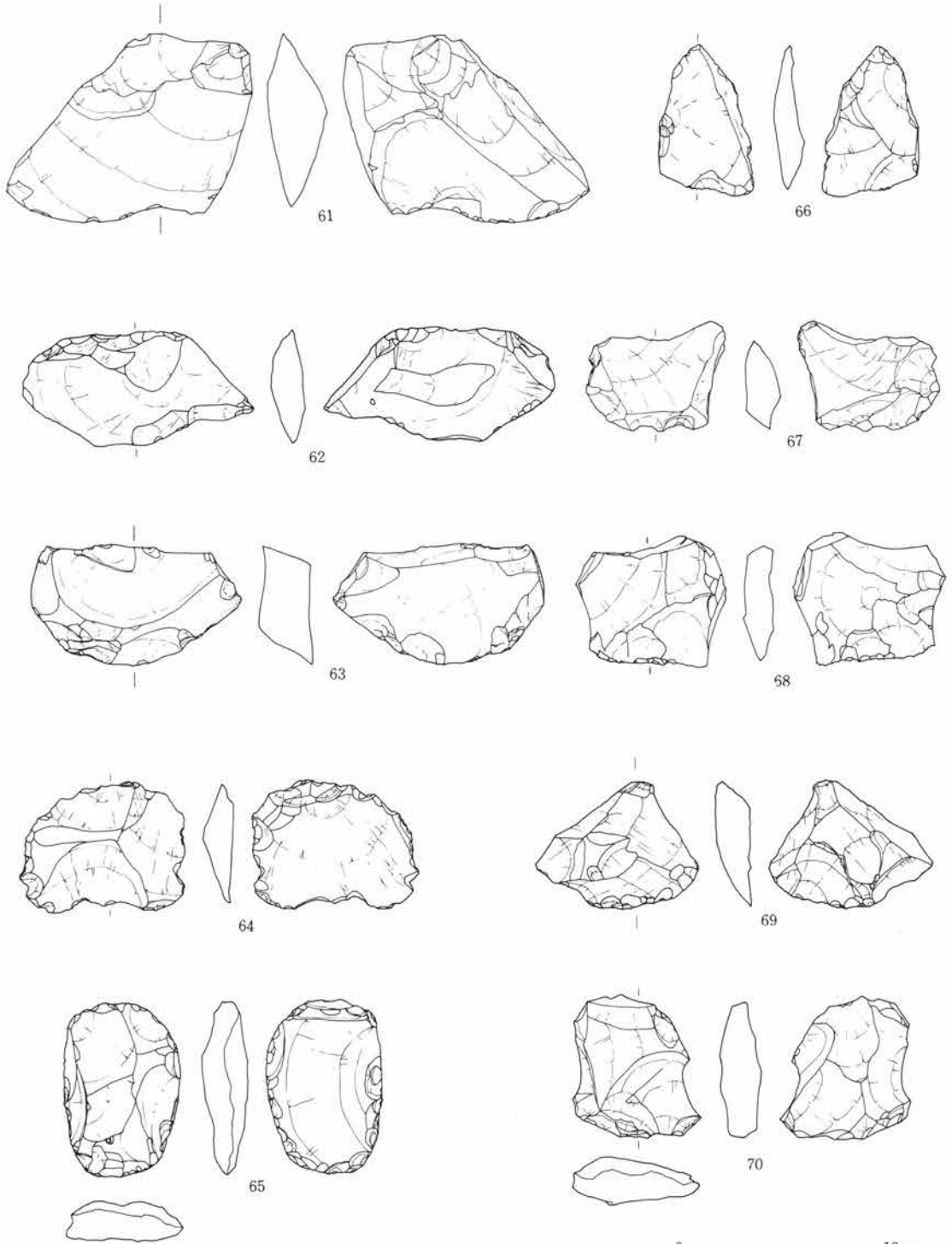
第72図 剥片石器類 (4)

III 前原遺跡の調査内容



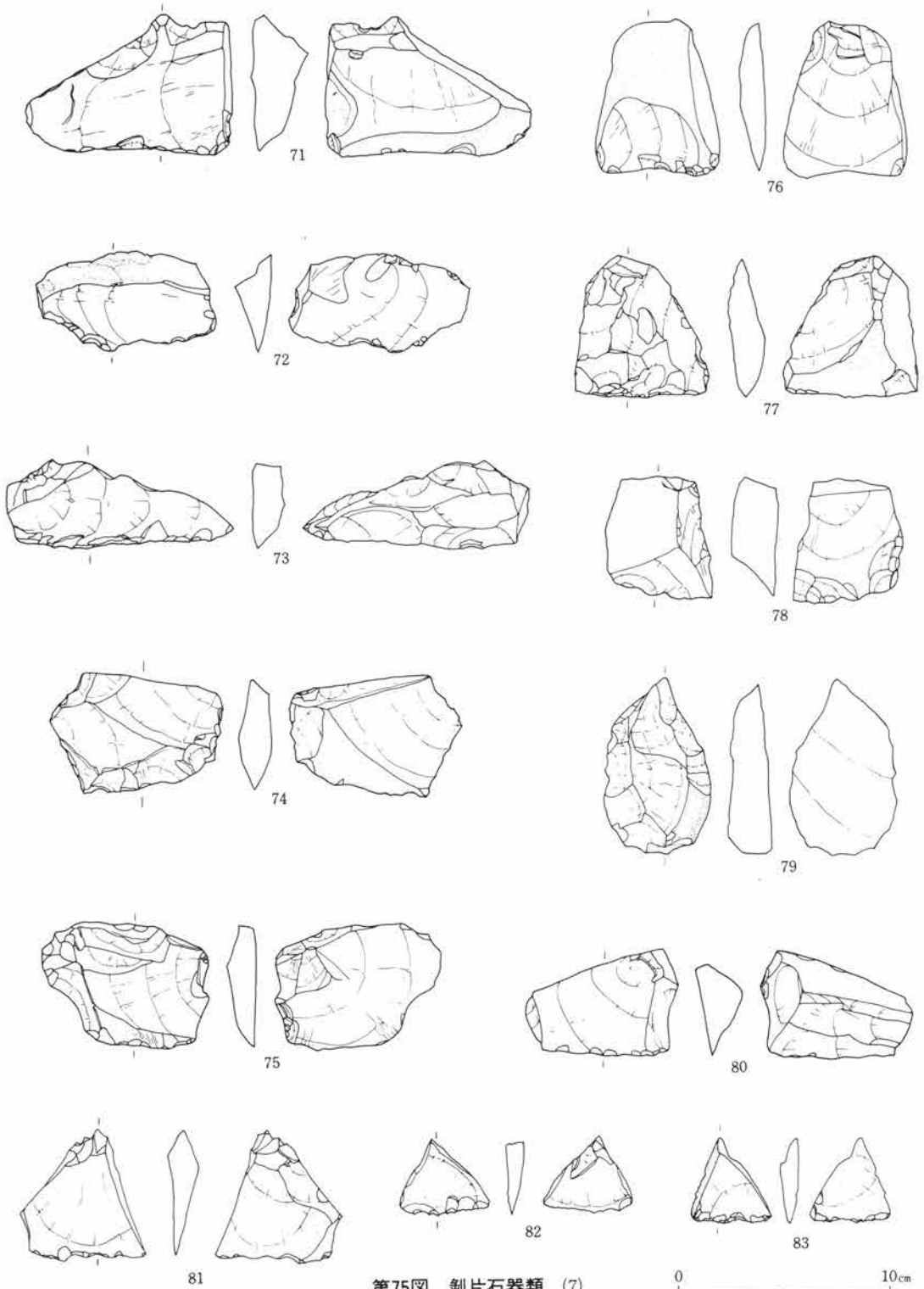
第73図 剝片石器類 (5)

0 10cm



第74図 剥片石器類 (6)

III 前原遺跡の調査内容



第75図 剥片石器類 (7)

2 類 (50~80)

厚手の剥片に粗い調整剥離を施し、角度をもった頑強な刃部を作り出したものを一括した。1類に比べて大型なものが多い。51・65・70は刃部が刃つぶし状を呈す。65は整った楕円形を呈する石器で、周辺部全体に調整剥離が施されている。また、周縁部のほとんどに刃つぶし状のつぶれが認められる。

磨石類 (第74図~第78図)

くぼみ石・磨石を一括して扱った。総数52点出土しており、そのうち27点が住居から出土している。形状は楕円形を呈し表裏面が比較的平坦なものが多いが、3・14・15のように多孔質で凹凸が認められるもの、16・17・42~44のように棒状を呈するものもある。石質は粗粒な安山岩が全体の70%を占め、他に閃緑岩・溶結凝灰岩等がある。なお、使用痕は平坦面中央部に残る窪みを集合打痕、平坦面に残る磨れた面を磨耗痕と記述する。

1 類 (1~17)

集合打痕のみで磨耗痕が認められないものを一括した。整った楕円形を呈するものが多いが、3・14・15のように多孔質で器面に凹凸が認められるもの、16・17のように棒状を呈するものもある。また、6は両側縁に敲打による平坦面が形成されている。

2 類 (18・41)

磨耗痕のみ認められるものは2点である。41は両側縁に敲打による平坦面が形成されており、また上下端部付近にも敲打痕が認められる。

3 類 (19~34)

集合打痕および磨痕が認められるものを一括した。形状は全て楕円形を呈し、1類に比べて集合打痕の規模の大きなものが多い。また、多孔質なものは認められない。

4 類 (35~40)

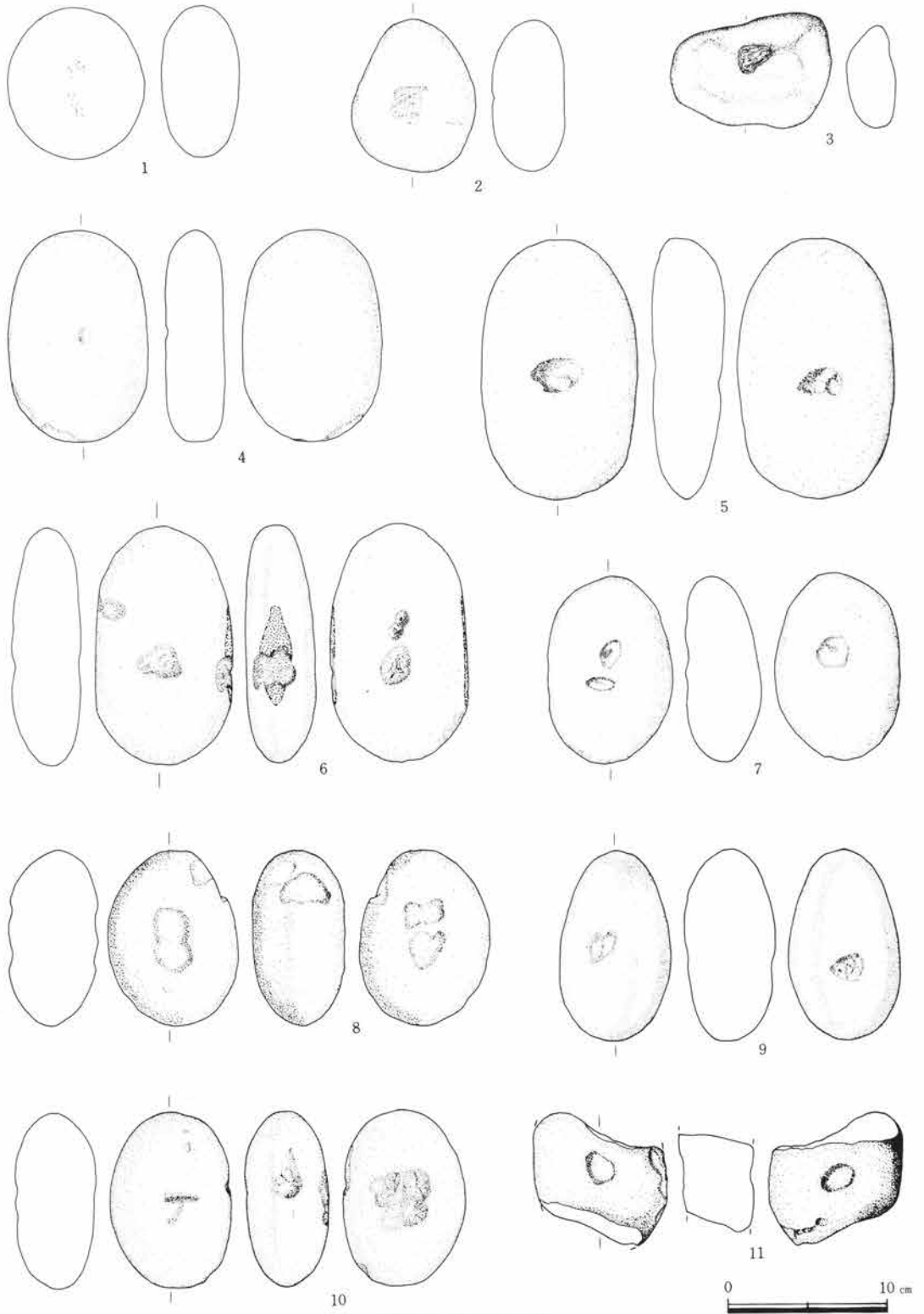
集合打痕・磨耗痕共に認められ、側縁や上下端部に敲打による平坦面が形成されるものを一括した。形状は3類同様楕円形に限られる。集合打痕は、3類に比べてさらに規模が拡大したものが多い。

5 類 (42~44)

棒状の円礫の1側縁に敲打による平坦面が形成されたものを一括した。石質は粗粒な安山岩よりも緻密な閃緑岩が利用されるようである。形態は早期の土器に伴出する横型の磨石近似するが、系統的に一連のものかは検討を要する。

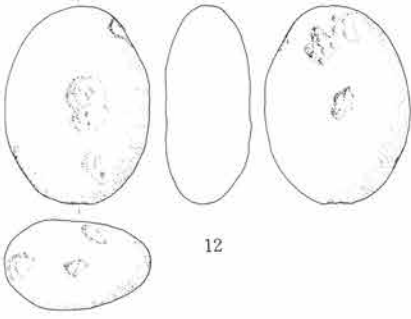
以上のように、本遺跡出土の磨石類にも他の遺跡と同様に、従来くぼみ石(集合打痕)・磨石(磨耗痕)と言われていたものの両機能を合わせ持つものが多数認められた。1類としたものの中にも、その後の摩耗や風化等により使用痕が観察できないものもあり、考慮する必要がある。これらの中で、1・2・5類の機能を合わせもつ4類は、本器種のなかで最も多機能を有すると

III 前原遺跡の調査内容

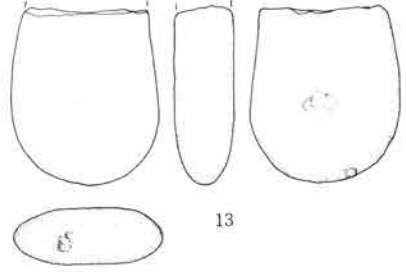


第76図 磨石類 (1)

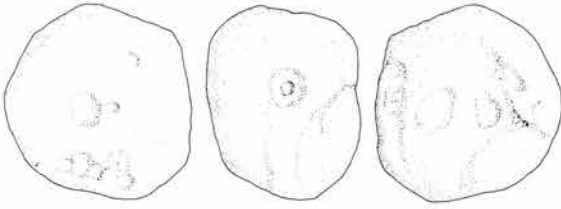
1 縄文時代の遺構と遺物



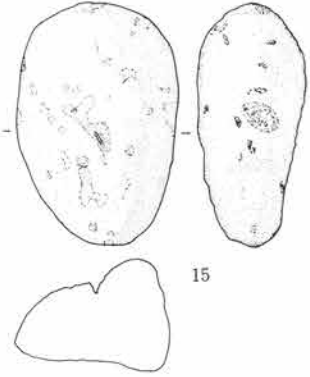
12



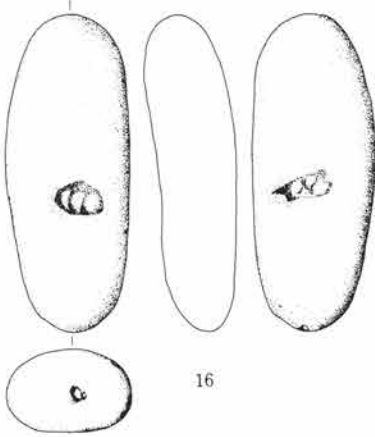
13



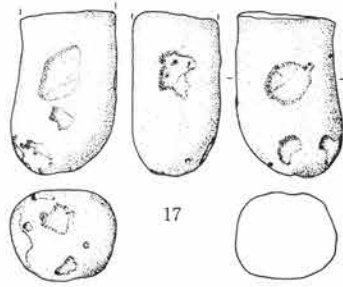
14



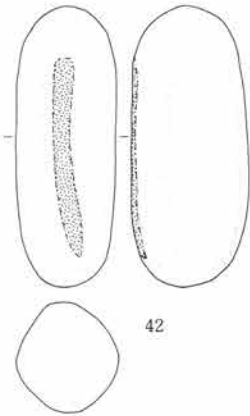
15



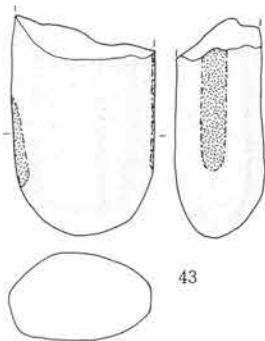
16



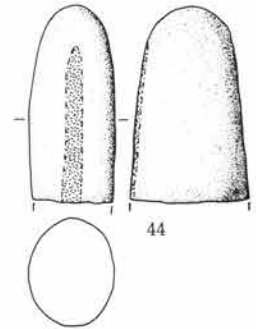
17



42



43

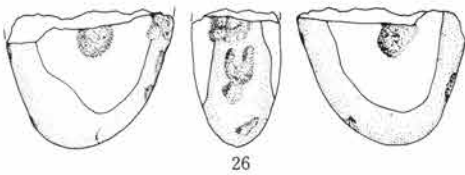
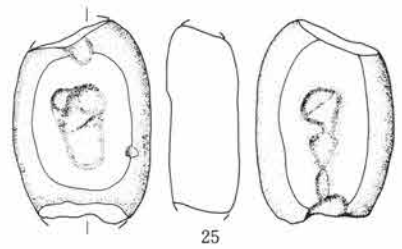
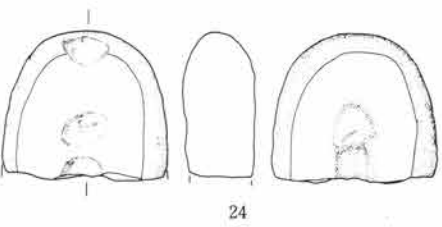
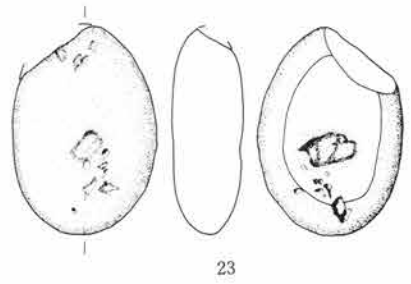
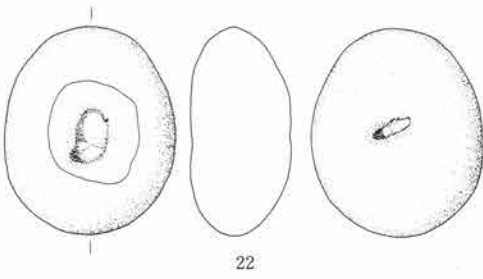
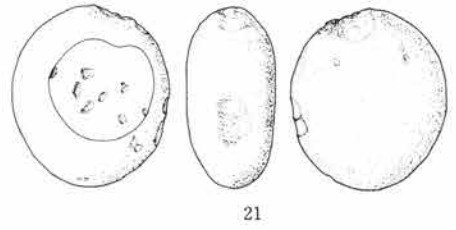
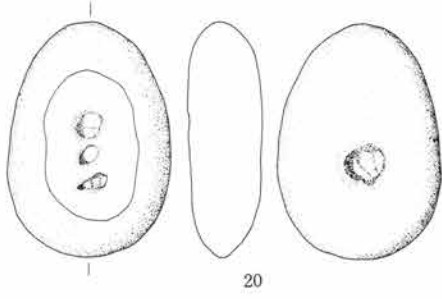
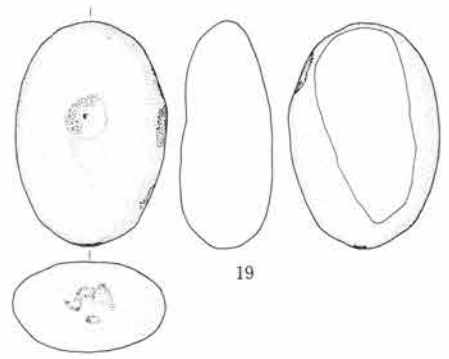
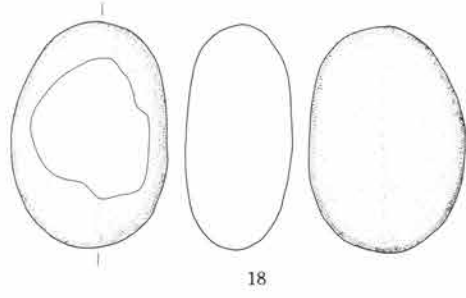


44

第77図 磨石類 (2)

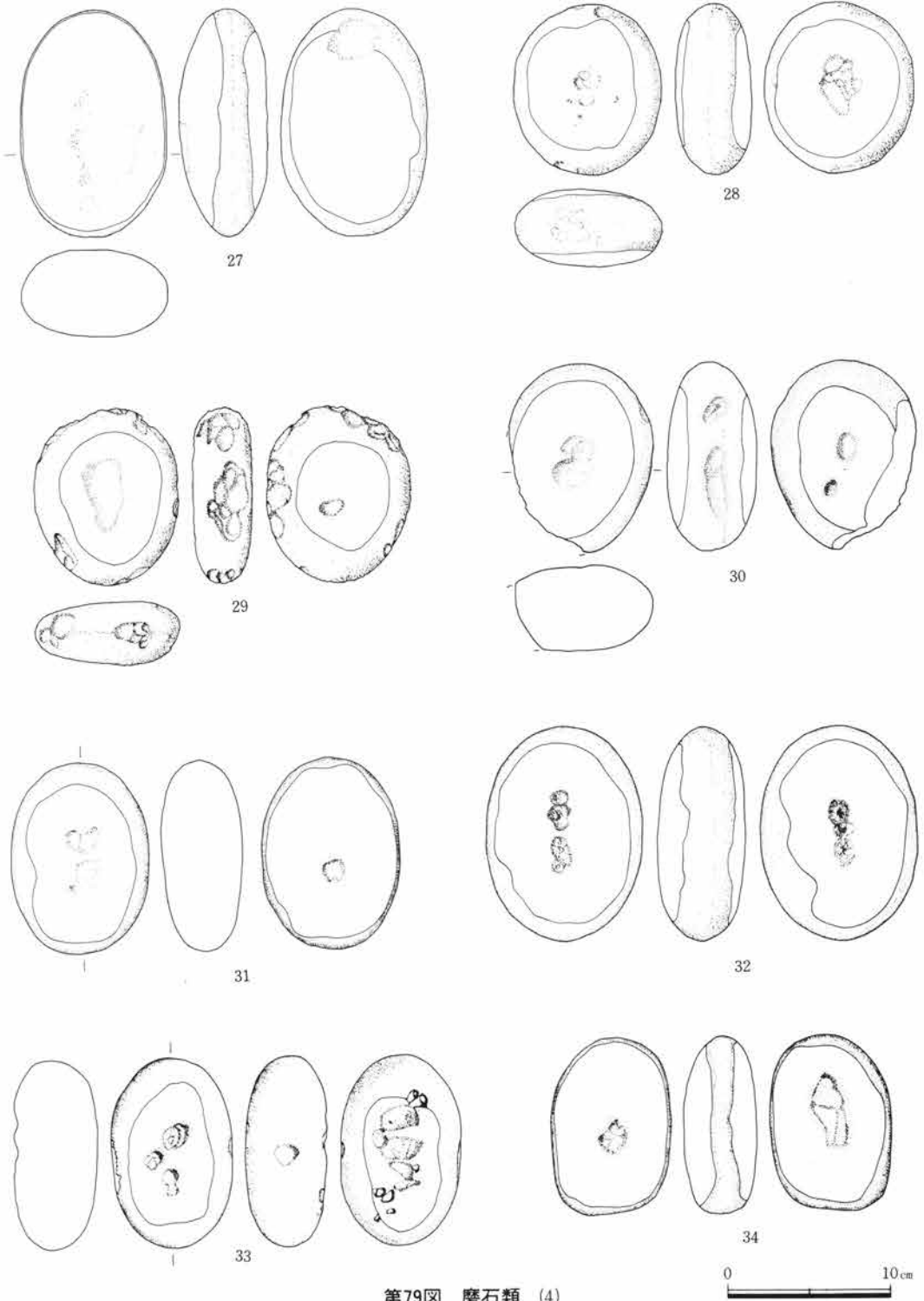
0 10cm

III 前原遺跡の調査内容



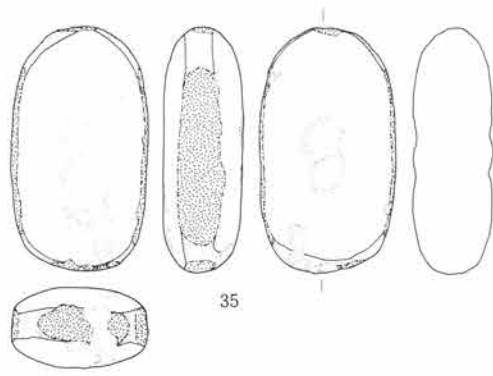
0 10 cm

第78図 磨石類 (3)

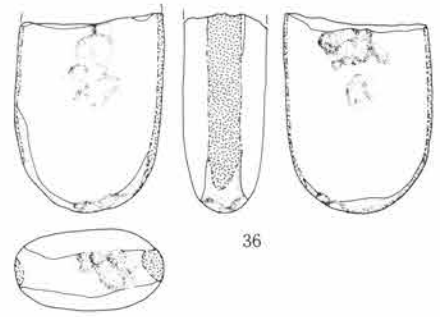


第79図 磨石類 (4)

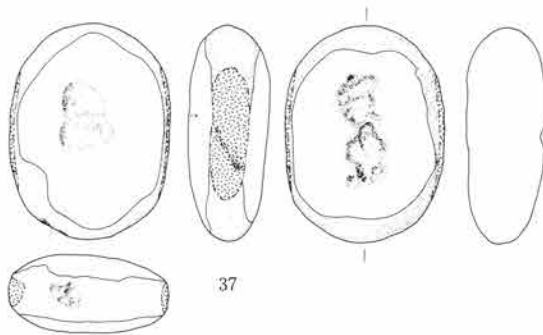
III 前原遺跡の調査内容



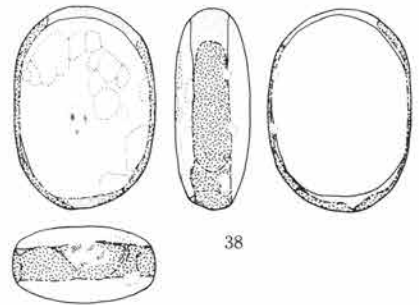
35



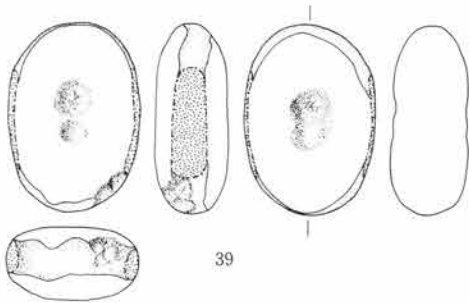
36



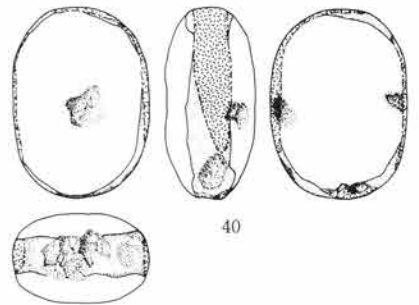
37



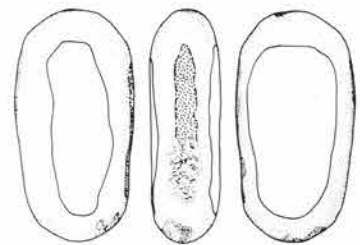
38



39



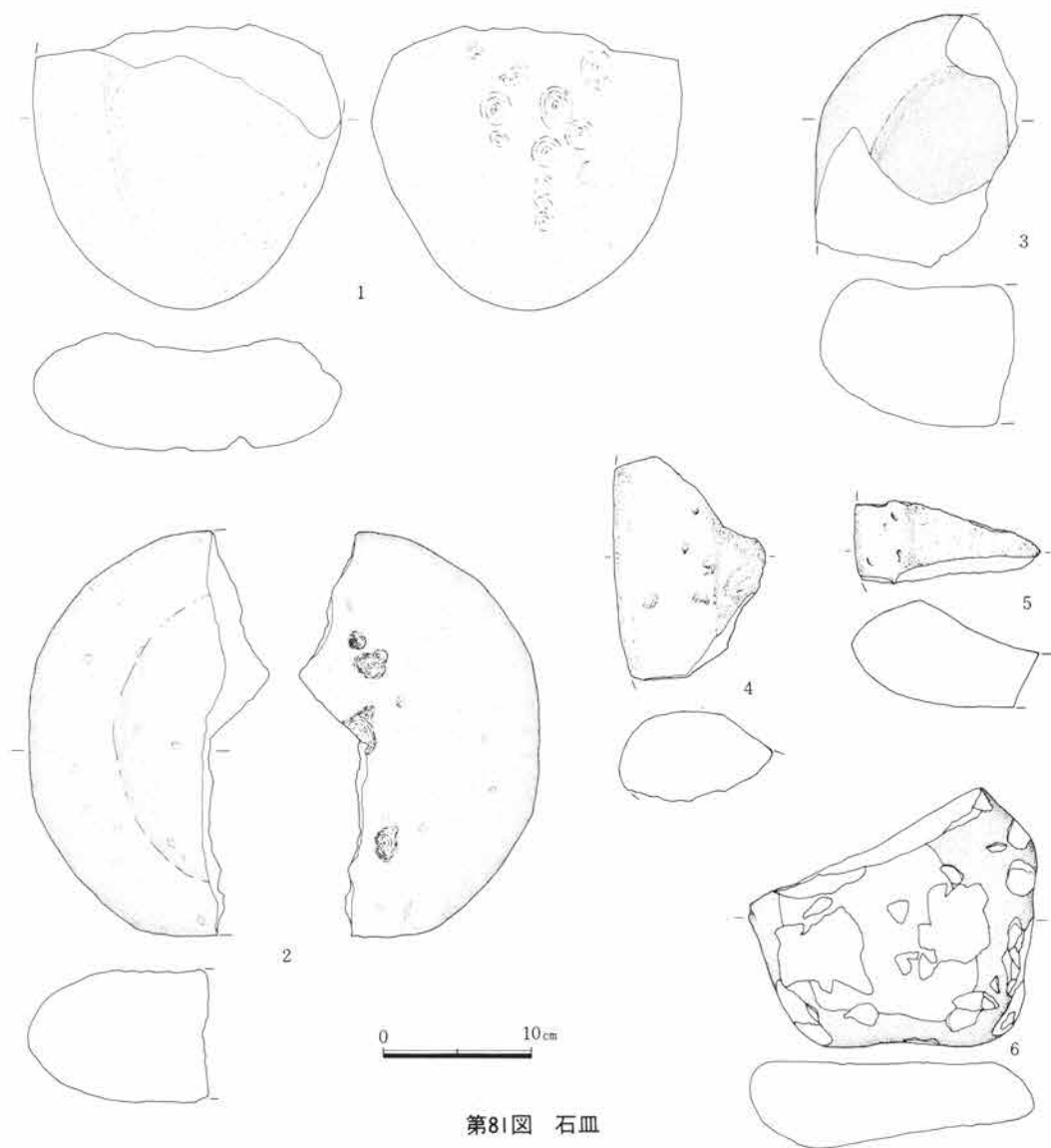
40



41

第80図 磨石類 (5)

0 10cm



第81図 石皿

もに完成された形態を呈する。また、使用痕の規模を見ると、1類→3類→4類と拡大する傾向があり、これは4類が最も長期に亘って使用された結果なのかもしれない。

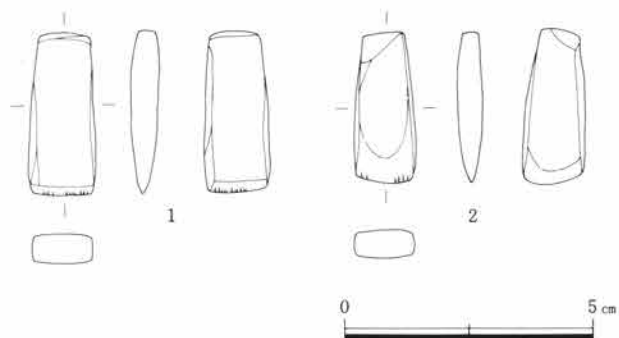
石 皿 (第79図)

合計8点の出土と少なく、また全て欠損品である。このうち7点は住居からの出土であり、遺構外出土は1点のみである。石質は安山岩が7点、花崗岩が1点である。

1は楕円形を呈する小型の石皿で、上半部を欠損している。くぼみ部は比較的浅く、下方に掻出し口をもつ。また、裏面には大小多数の錐揉み状の凹穴が付けられている。2は円形を呈する

III 前原遺跡の調査内容

石皿と思われ、半分を欠損している。やや厚手の礫を使用しており、くぼみ部は平坦で縁も不明瞭である。また、裏面に錐揉み状の凹穴がいくつか認められる。3もやや厚手のもので、くぼみ部は平坦である。4・5はくぼみ部が比較的深い石皿の破片である。他に較べて多孔質の礫が使われている。6



第82図 小形磨製石斧

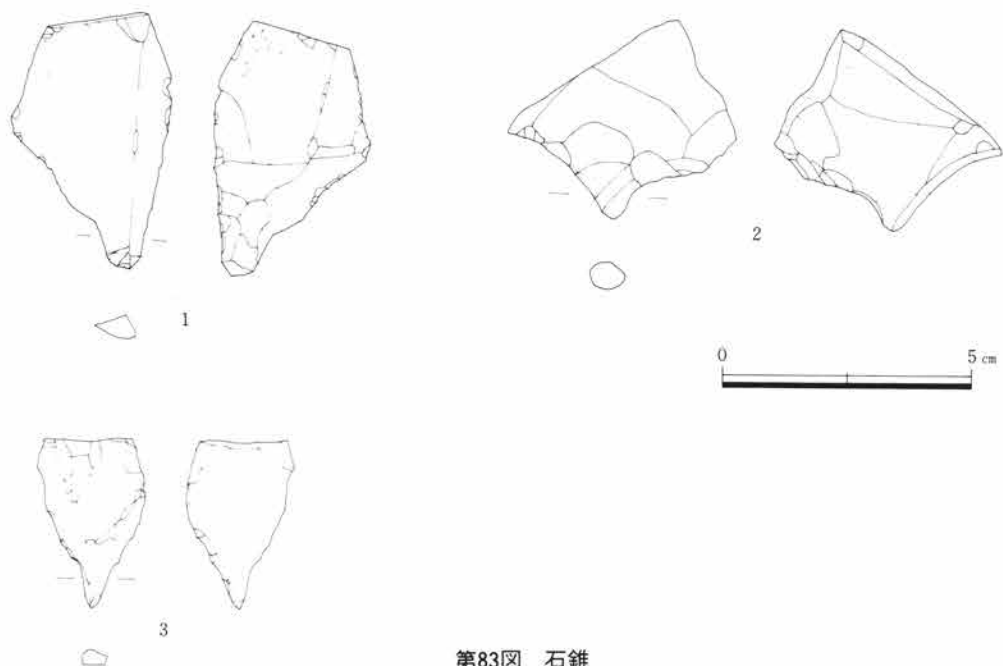
は板状を呈するもので、中央部に磨痕は認められるが平坦であり、あるいは砥石かもしれない。表面は加熱を受け剥落が著しい。石質は1～5が安山岩、6は花崗岩である。

小型磨製石斧 (第82図)

ほぼ同型のものが2点検出された。2点とも良質な灰緑色のチャートを使用しており、製作方法も同一と思われるが、2のほうがやや小型で曲線的である。刃部には相方とも垂直方向の削痕がわずかに認められる。1は4 T 4号住居出土、2は表採品である。

石 錐 (第83図)

3点出土した。いずれも剥片の一部を調整した簡易なもので、石匙同様定形化したものは認め



第83図 石錐

られなかった。1は良質なチャートの剥片の細くなった部分の先端部にのみ調整を施したもので、先端部は丸みをもつ。また、裏面の右側縁には歯こぼれ状の剥離が認められる。4トレンチ9区出土。2はホルンフェルスの肉厚な剥片にノッチ状の剥離を加えて尖頭部を作り出したもので、調整は粗く先端部は丸みをもつ。C区12号住居出土。3はチャートの縦長剥片の先端部を両側から剥離を加えて尖頭部を作り出したもので、先端部は丸みをもつ。また、尖頭部には使用による摩耗痕が認められる。3T1号住居出土。

礫 器 (第84図・第85図)

手ごろな大きさに打ち欠かれた礫、あるいは剥片を剥ぎ取った残存部のうち、調整やつぶれ痕あるいは使用痕が認められるものを一括した。合計15点が出土しており、そのうち9点は住居からの出土である。石質は頁岩が9点、ホルンフェルス・細粒砂岩が各々2点づつ認められる。

1は扁平な河原石の一端を打ち欠いたもので、欠いた稜部に敲打痕が認められことから、敲石に使用されたものと思われる。2・4は大型の剥片を剥ぎ取った残存部を利用したもので、4は下端および右側縁に調整剥離を加えている。3は大型の表皮剥片の周縁部に粗い剥離を加えたものである。5は河原石の周縁を打ち欠いて楕円形に調整している。下端部が歯つぶし状につぶれていることから、敲石に使用された可能性が高い。6は3と同様に大型の表皮剥片を素材とし、長軸両端を打ち欠いて尖頭状に成形している。また、両側に打撃によるつぶれが認められる。7も大型の表皮剥片で、左側縁に敲打によるつぶれが認められる。8は河原石を斜位に半折したもので、左下側縁に敲打によるつぶれが認められる。9も表皮部分の剥片で、両側縁を斜位に打ち欠いて尖頭状に成形している。尖頭部は全て自然面側から打撃が加えられ、断面形は斜状を呈する。10～13はやや小型の剥片を素材とするもので、剥片石器類に加えるべきかもしれない。10は両側縁に敲打によるつぶれが認められる。11は下端に調整剥離が施されたもので、左側縁にはつぶれが認められる。12は表裏が平坦な剥片で、周縁全体に敲打によるつぶれが認められる。また、部分的に磨耗痕も見られる。13は下端につぶれが認められる。14は縦長剥片の端部を調整したもので、先端はへら状を呈する。15は河原石を縦割りにした剥片を素材としたもので、先端部を剥離面から一定方向で打ち欠き、平坦な刃部を作り出している。

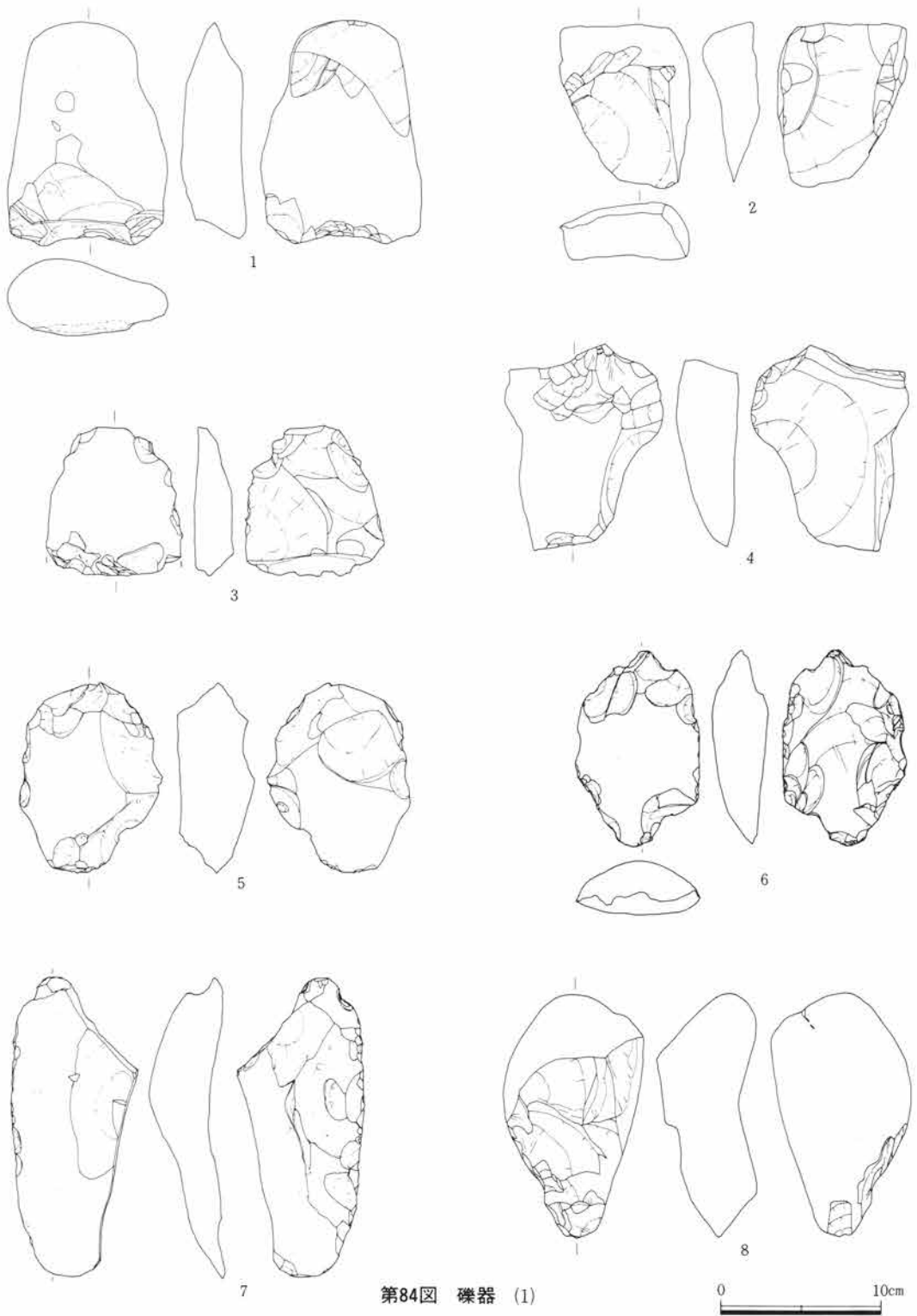
以上の石器のうち、大型なものは敲石として使用された可能性が高い。

敲 石 (第86図)

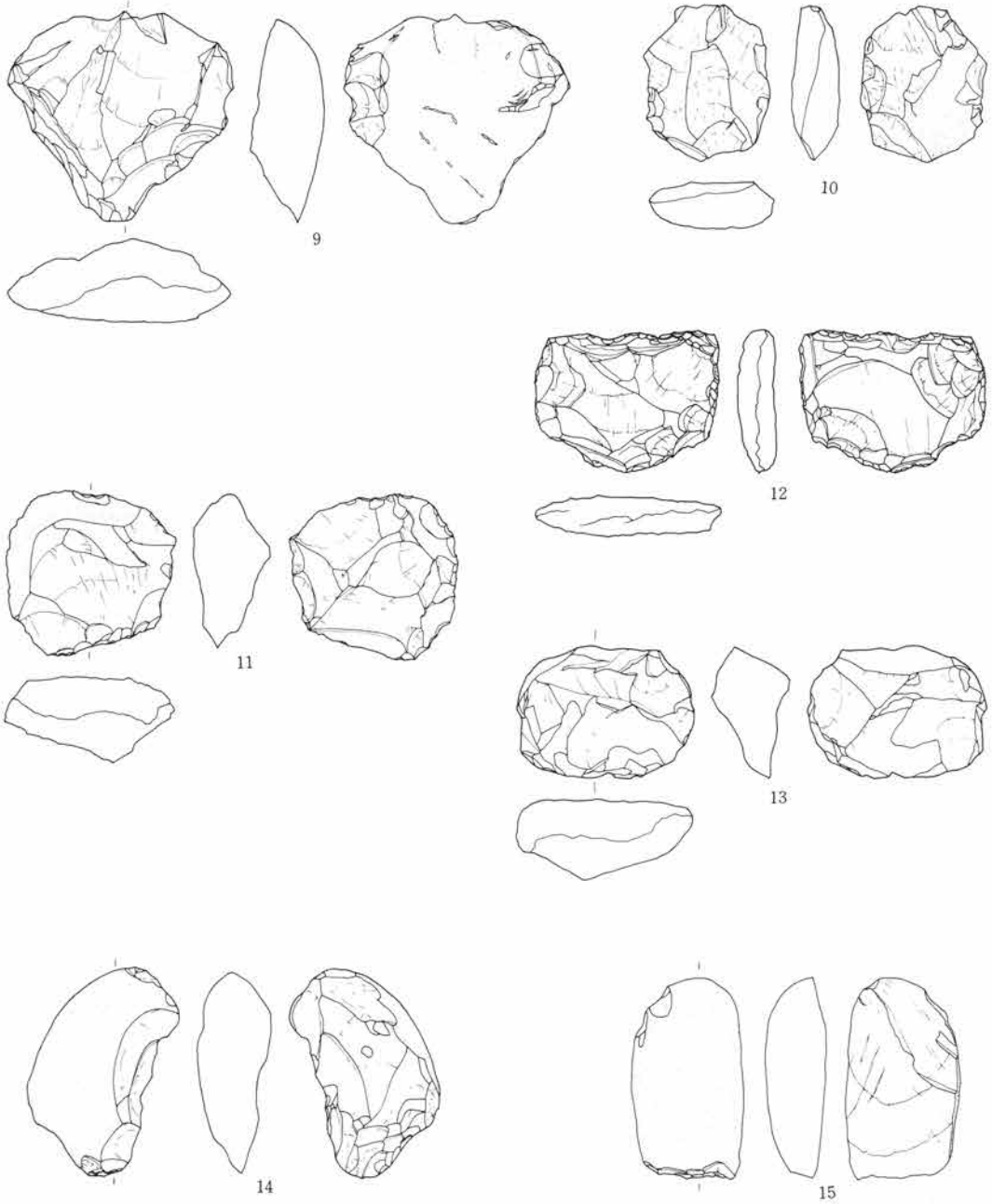
明確に敲石と判断できたものはこの8点のみである。このうち4点は住居からの出土である。いずれも棒状を呈する河原石を利用しており、石質は比較的緻密な安山岩が2点、閃緑岩が1点、他の5点は片岩類である。

1・2はいずれも先端部に敲打痕が認められる。3は断面形が楕円形を呈する棒状の石器で、上半分を欠損している。先端部には敲打痕は認められず、側面部に鼠歯痕状の傷痕が、特に両側

III 前原遺跡の調査内容



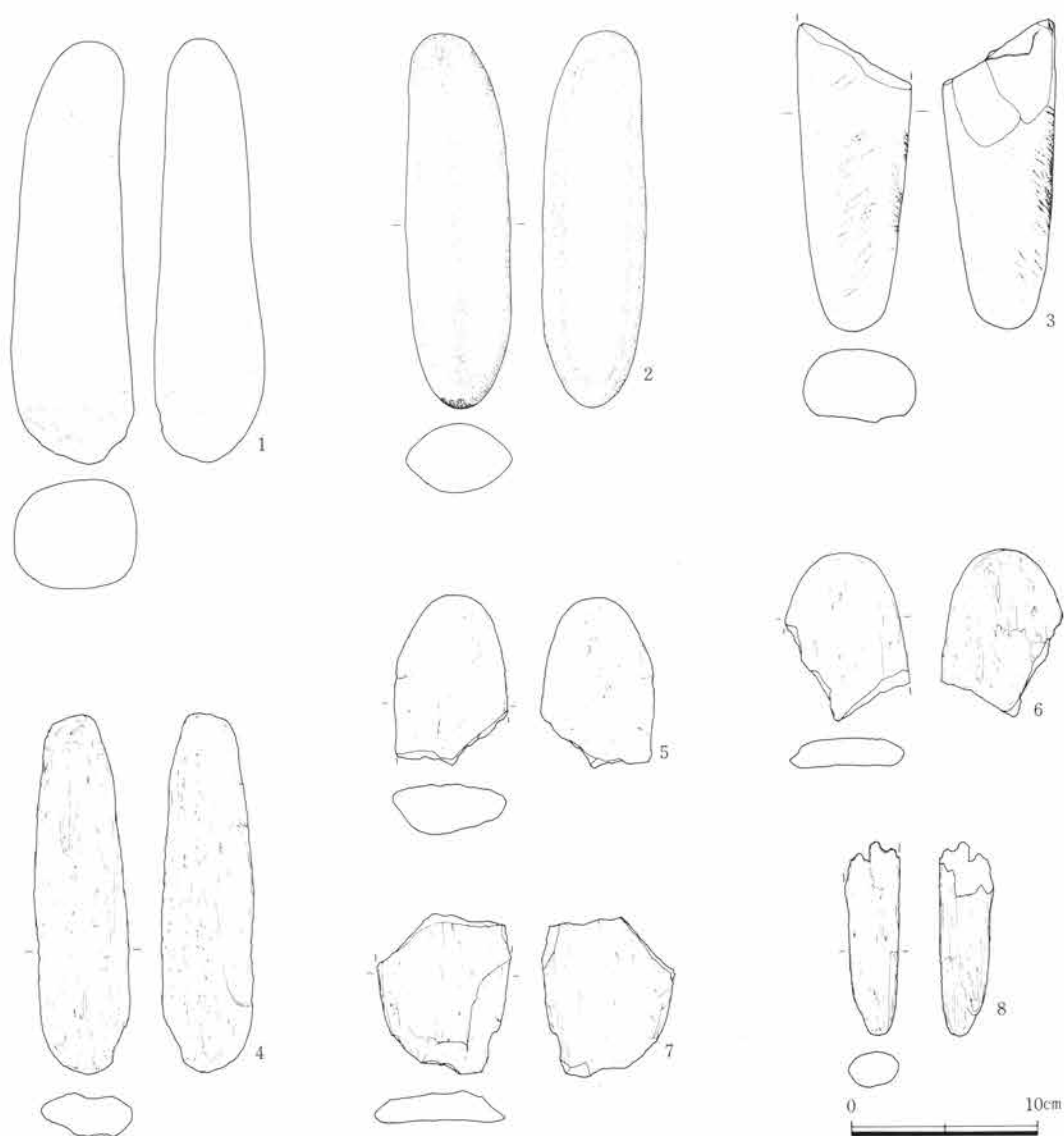
第84図 礫器 (1)



第85図 礫器 (2)

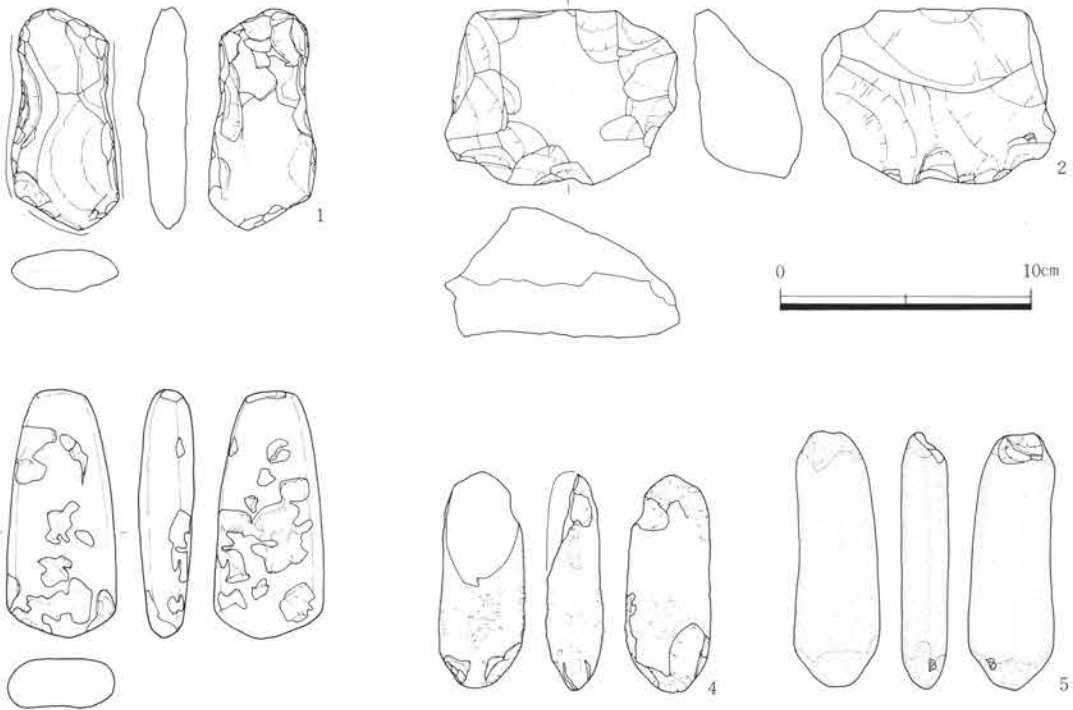


III 前原遺跡の調査内容



第86図 敲石

面の左側縁部に集中して認められる。おそらく小型石器を製作するときの台石として使用されたものと思われ、本器種とするよりも第87図4・5とセットでとらえるべきかもしれない。4～7は縦長の扁平な河原石を使用したものである。4は完存品で、裏面左下側縁および右中程側縁に敲打痕が認められる。5～7は欠損品で、5は左側縁に、7は下端部および両側縁に、それぞれ敲打痕が認められる。8は細い棒状を呈するもので、上半を欠損している。使用痕は先端部に磨れたような痕が認められるのみである。



第87図 特殊石器類

特殊石器類 (第87図)

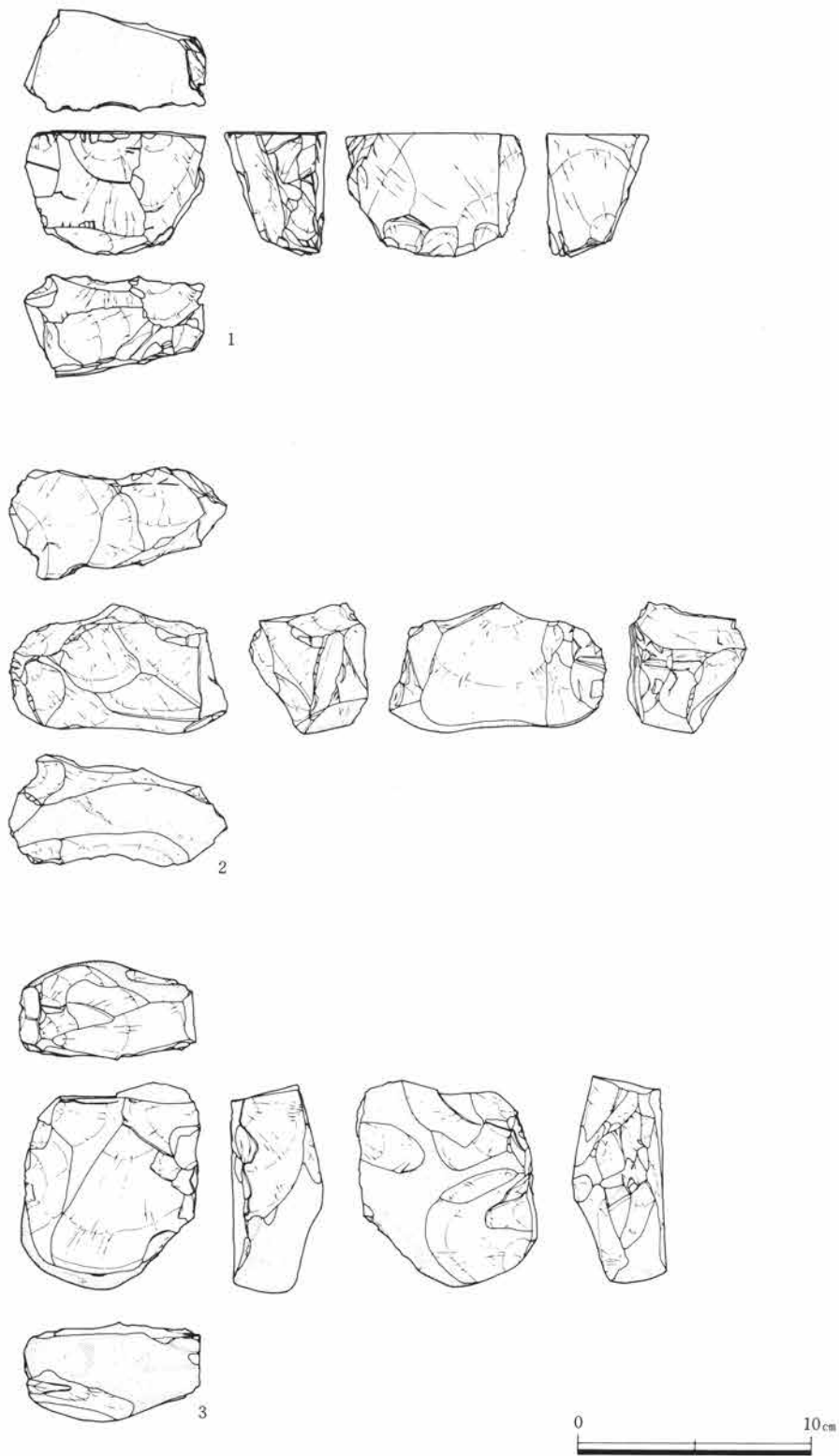
他の器種の中に含まれない利器を便宜的に一括した。

1は打製石斧の欠損品を再利用したもので、欠損品はV字状を呈し、敲打によるつぶれおよび磨耗が認められる。C区17-Kグリッド出土。2は磨製石斧の欠損品を再利用したもので、欠損部はやはりゆるくV字状を呈し、磨耗が著しい。C区12号住居出土。3は周縁部に粗い打ち欠きを施して形を整のえた石器で、右側縁部には打撃によるつぶれが認められる。以上の様相は礫器としたものに共通するが、裏面下半のふくらんだ部分に磨耗痕が認められる。4 T 2号住居出土。4・5はいわゆるストーンリタッチャーである。2点とも両端部側縁および表裏両平坦部が細かな敲打によりV字状を呈する。また、4では両側縁部および平坦部のやや下半にも鼠歯状の細かな敲打痕が認められる。なお、2点とも先端部に剝離状の欠け口が認められ、特に4の下端部では欠け口が不明瞭になるほどの敲打痕が認められる。4は5 T 1号住居出土、5は4 T 4号住居出土。

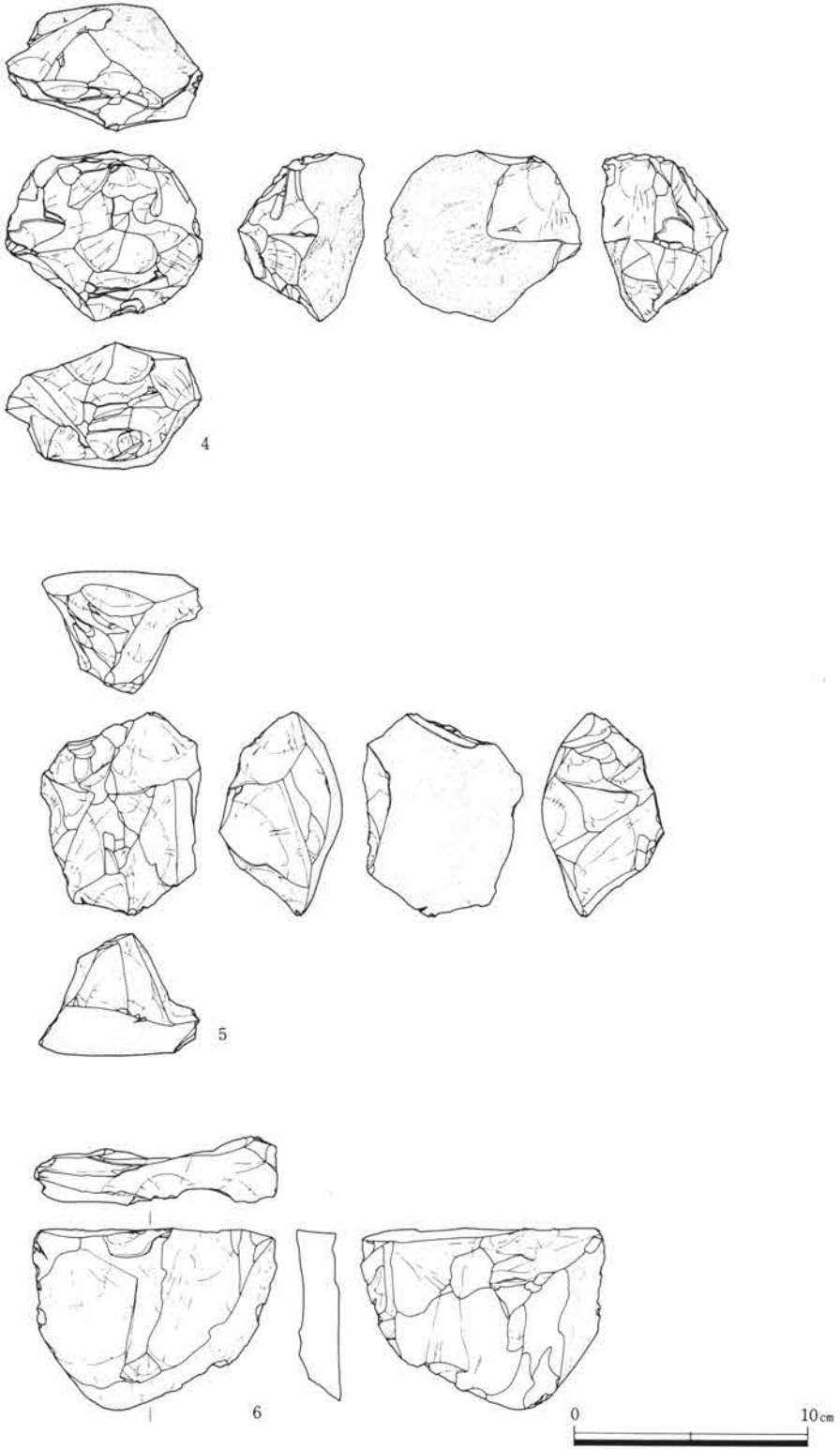
残 核 (第88図・第89図)

これらは母岩から必要な剝片を剥ぎ取っていく過程で、最終的に残った残核であろうと思われる。縄文時代の剝片剝離工程には旧石器時代のような法則性はいまだ確認されていない。本遺跡においても、担当の問題意識が浅く観察も不十分なため僅かな資料しか引き出せないが、これら

III 前原遺跡の調査内容



第88図 石核 (1)



第89図 石核 (2)

III 前原遺跡の調査内容

の中にも異なる点が見られるので紹介しておきたい。1・2・3は箱状を呈するもので、剥離は打面を回転しながらランダムに行なわれている。4・5は亀甲状を呈するもので、剥離は自然面を打面にする場合が多いようである。6は板状を呈するもので、剥離はほぼ一定方向で行なわれている。

多孔石 (第90図)

錐揉み状の凹穴が付けられたものを一括した。同種の凹穴はしばしば石棒や石皿等の特定の石器にも認められるが、ここでは凹穴のみ付けられたものを扱う。合計6点出土しており、そのうち5点は住居からの出土である。なお1点はC区11号住居出土遺物の中で扱っている。石質は溶結凝灰岩が1点、他は全て安山岩である。

1は楕円形を呈する肉厚な河原石を使用したもので、約半分を欠損している。凹穴は表裏両面の平坦部に多数集中して付けられている。4 T 1号住居出土。2も1とほぼ同様と思われ、約 $\frac{1}{4}$ を欠損している。C区12号住居出土。3～5はやや小型の河原石を使用したもので、凹穴は片面に1つだけ付けられている。いずれも断面形は楕円形を呈し、すわりが良い。平面形は1が他に較べてやや丸みを持つ。凹穴は3・5は真中に付けられているが、4はやや上方に付けられている。なお、5は約半分を欠損している。3は4 T 1号住居床面出土、4はC区12号住居出土、5はC区8-Jグリッド出土である。

石製品類 (第91図)

1は無頭石棒の頭部で、体部を欠損している。裏面も欠損したように平坦であるが、研磨がなされておきもともとの形状かもしれない。石質は点紋緑色片岩である。B区5-Cグリッド出土。

2は緑色片岩製の有頭石棒で下半を欠損、裏面は石理にそって僅かに剝落している。断面形は隅丸長方形を呈する。頭部は横長の隅丸長方形を呈し、頸部が僅かにくびれ、体部はやや下方が幅広となる。また、頭部には印刻沈線による文様が施されている。文様は各隅をむすぶように襷状に沈線を施し、左右の区画内に交点から2本の沈線を施している。器面は研磨で仕上げられているが、頭端部は擦切りにより切断されており、研磨は明瞭でない。C区4号住居出土。

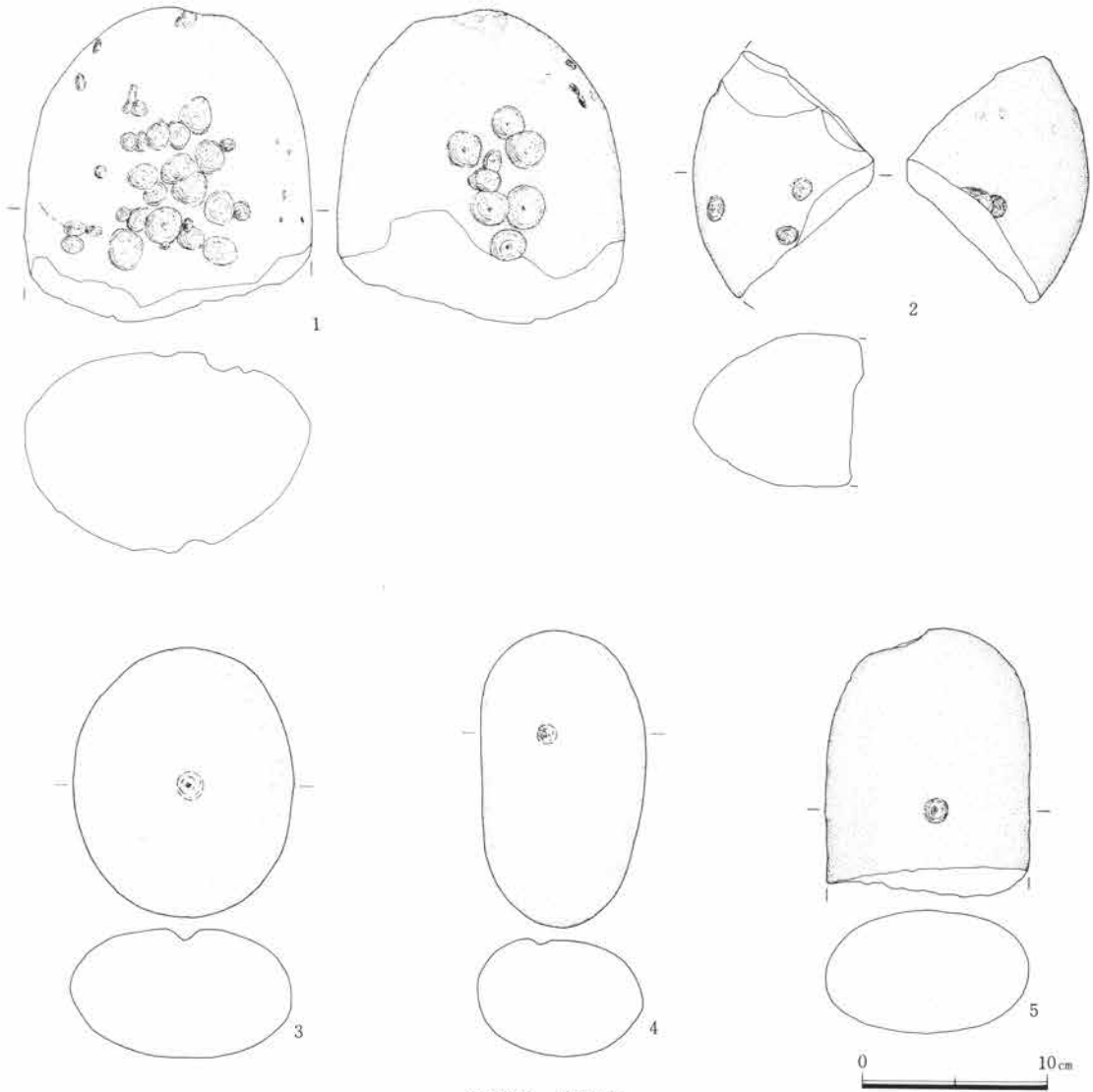
3は碗形を呈する石製品である。6.4×5.6cmのやや楕円形を呈する小型品で、短軸線上の右側縁に片口状の窪みが付けられていることから、液体を扱う容器であろうと思われる。石質は軟質多孔質安山岩で、内外面とも荒れが著しい。C区12号住居出土。

4も3と同様の形態をとる石製品と思われる。約 $\frac{1}{2}$ を欠損しているが、3に較べて大型であり、石材は多孔質の軽石を使用している。内面には僅かに凹凸が認められるが、外面は丁寧に研磨されている。C区出土。

5～7は板状を呈する軽石製品である。5は楕円形状を呈すると思われるが欠損している。6は台形を呈するもので、大きさに比べて肉厚な作りである。また、上部に円孔が1つあけられて

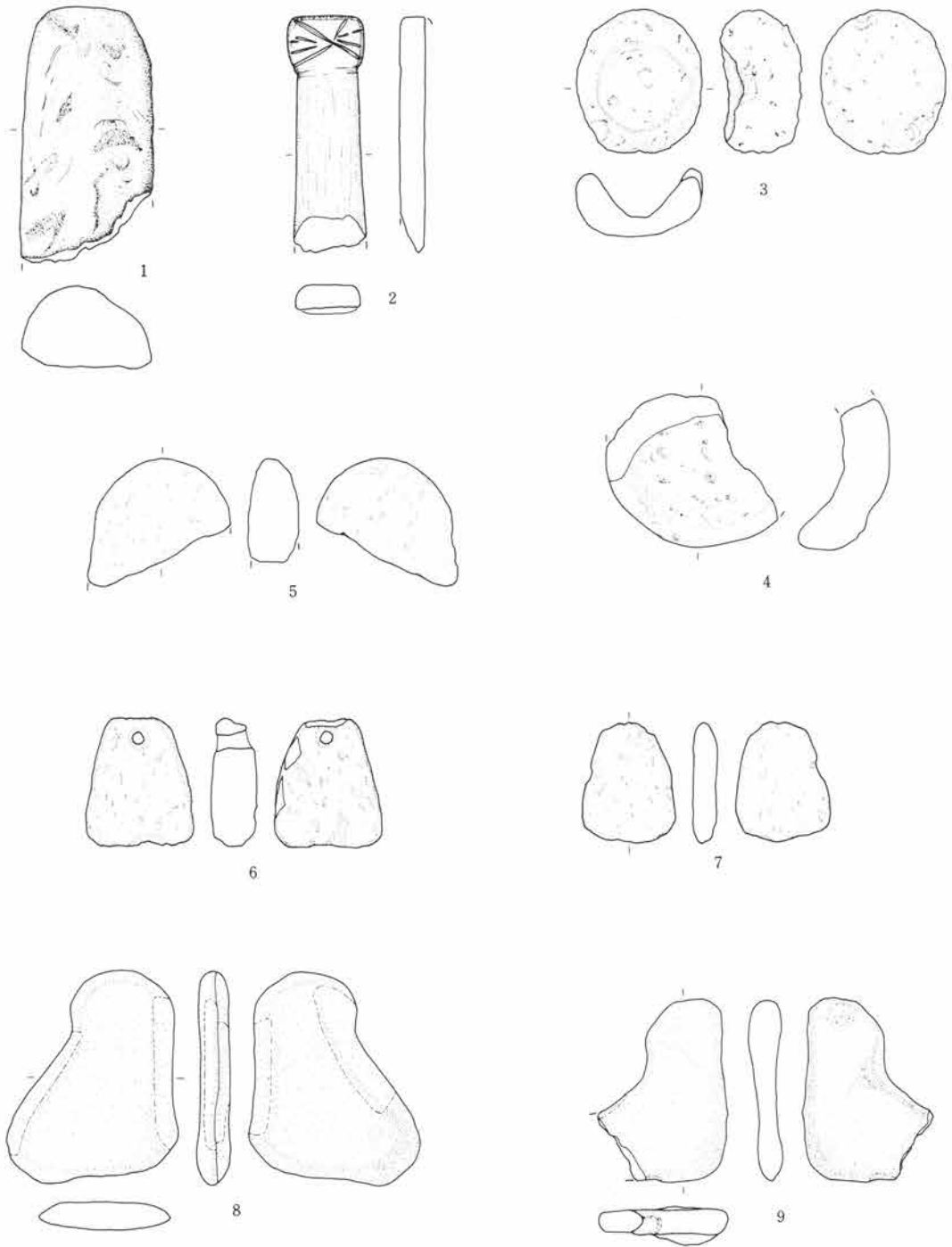
いる。7は隅の丸い台形状を呈する小型品で、円孔は認められない。3点とも器面は丁寧に研磨されている。6はC区12号住居出土、5・7は表採品である。

8・9は使用痕が明確でないため、利器か石製品か判断をしかねる。石質はともに硬質の中粒砂岩である。8は角の丸い2等辺三角形を呈し、両側縁破線部分を研磨して両刃状の刃部を形成している。2は鉤の手状を呈すると思われるが、左側端部を欠損している。欠損部の両側縁破線部分を研磨して平坦面を形成している。8はC区4号住居出土、9は4T4号住居出土である。



第90図 多孔石

III 前原遺跡の調査内容



第91図 石製品



1 縄文時代の遺構と遺物

表一 1 出土石器一覧

(重量のうち()内は欠損品)

遺構・ナンバー	器種	石質	重量(g)
C区3号住居 7	石 棒	珪質岩	14,520
〃 8	多 孔 石	安山岩	(2,930)
C区11号住居 3	多 孔 石	安山岩	7,520
2 T 1号住居 3	石 皿	安山岩	(3,610)
〃 4	石 柱	溶結凝灰岩	7,700
4 T 1号住居 13	石 皿	安山岩	(2,320)
〃 14	砥 石	閃緑岩	(1,206)
〃 15	多 孔 石	安山岩	9,790

石鏃、尖頭器

No	出土地点	石質	重量(g)
1	B区1住覆土	チャート	1.4
2	表 採	黒曜石	0.7
3	4 T 2住	チャート	1.5
4	C区12住	安山岩	(1.1)
5	4 T 8区	〃	(2.8)
6	表 採	〃	(2.5)
7	B区18-Eグリッド	〃	(2.0)
8	C区7-Kグリッド	チャート	(1.6)
9	C区12住覆土	安山岩	1.1
10	4 T 9区	〃	9.5
11	〃	〃	7.4
12	4 T 8区	〃	5.1
13	4 T 9区	チャート	9.3
14	4 T 7区	安山岩	5.0

打製石斧

No	出土地点	石質	重量(g)
1	4 T 7区	頁 岩	210
2	C区8住	〃	150

3	4 T 4住	安山岩	185
4	C区12住	頁 岩	300
5	B区7-Cグリッド	安山岩	110
6	4 T 8区	〃	190
7	C区6-Gグリッド	頁 岩	160
8	4 T 2住	〃	95
9		頁 岩	95
10	B区18-Bグリッド	安山岩	70
11	4 T 7区2住	〃	65
12	C区12住	頁 岩	135
13	4 T 7区	〃	75
14	4 T 4住	閃緑岩	110
15	B区4-Cグリッド	頁 岩	100
16	4 T 8区	安山岩	90
17	4 T 8区	〃	75
18	C区4住覆土	〃	60
19	5 T 16区	頁 岩	75
20	C区9住覆土	〃	40
21	4 T 4住	〃	65
22	B区24-Aグリッド	〃	60
23	4 T 8区	〃	65
24	C区12住	安山岩	50
25	3 T 8区	頁 岩	35
26	4 T 9区北東拡張	安山岩	40
27	C区4-Aグリッド	頁 岩	65
28	4 T 7区	〃	47
29	C区2住	〃	65
30	C区4住	〃	60
31	C区12住	〃	27
32	4 T 1住	安山岩	(140)
33	D区表採	頁 岩	(85)

III 前原遺跡の調査内容

34	3 T 8 区南拡	頁 岩	(95)
35	3 T 11区	〃	(75)
36	4 T 7 区	〃	(85)
37	3 T 8 区	〃	(60)
38	4 T 2 住	〃	(45)
39	B 区 5-C グリッド	〃	(115)
40	2 T	安山岩	(90)
41	B 区15-A グリッド	砂 岩	(55)
42	4 T 8 区	頁 岩	(90)
43	C 区 7-C グリッド	安山岩	(95)
44	C 区表採	頁 岩	(75)
45	4 T 4 住	安山岩	(75)
46	表 採	〃	(50)
47	4 T 4 住	〃	(30)
48	C 区 8 住	ホルンフェルス	(35)
49	4 T 7 区	頁 岩	(17)
50	4 T 7 区	安山岩	(18)
51	4 T 9 区	頁 岩	115
52	C 区13-E グリッド	〃	70
53	C 区 4 住	〃	70
54	B 区25-A グリッド	安山岩	85
55	4 T 1 住	〃	70
56	4 T 2 住	〃	85
57	4 T 4 住	〃	105
58	C 区11住	頁 岩	95
59	3 T 11区	〃	(45)
60	4 T 8 区	〃	55
61	4 T 7 区	安山岩	75
62	3 T 8 区南拡	頁 岩	33
63	5 T 1 住	〃	185
64	C 区 7 住	安山岩	125

65	4 T 2 住	頁 岩	135
66	C 区	〃	155
67	C 区 6-A グリッド	安山岩	85
68	4 T 4 住	頁 岩	80
69	C 区	〃	(230)
70	C 区 3-A グリッド	安山岩	(155)
71	4 T 6 区	頁 岩	(130)
72	4 T 3 住覆土	〃	(87)
73	B 区 5-C グリッド	〃	(63)
74	C 区	安山岩	(95)
75	C 区 7-C グリッド	〃	(125)
76	C 区 4-A グリッド	頁 岩	(140)
77	C 区	〃	(88)
78	4 T 4 住	〃	(65)
79	4 T 8 区	〃	(45)
80	4 T 4 住	〃	(40)
81	C 区 7-C グリッド	安山岩	190
82	C 区 8 住	頁 岩	185
83	4 T 4 住	砂 岩	100
84	C 区	安山岩	140
85	C 区13-E グリッド	頁 岩	190
86	B 区 4-C グリッド	〃	190
87	B 区22-A グリッド	〃	160
88	C 区 8-K グリッド	〃	127
89	B 区21-A グリッド	〃	60
90	4 T 8 区	〃	(45)
91	2 T	〃	70

打製石斧未製品

No	出 土 地 点	石 質	重 量(※)
1	6 T 2 区	砂 岩	(817)

1 縄文時代の遺構と遺物

2	C区12住	頁岩	(93)
3	5 T 2号土壇覆土	〃	(490)
4	4 T 16区	安山岩	(133)
5	C区7-Cグリッド	〃	188
6	C区6-Oグリッド	頁岩	211
7	4 T 7区	安山岩	315
8	3 T 8区	頁岩	146

剥片石器類

No	出土地点	石質	重量(g)
1	4 T 8区	頁岩	88
2	C区13-Eグリッド	〃	35
3	C区12住	〃	79
4	C区3-Bグリッド	〃	43
5	C区11住	〃	30
6	4 T 7区	〃	45
7	4 T 4住覆土	〃	55
8	C区12住	〃	104
9	B区15-Bグリッド	〃	97
10	4 T 7区	〃	90
11	C区4住	〃	76
12	4 T 2住	〃	54
13	4 T 4住覆土	〃	22
14	B区1号土壇	〃	30
15	B区24-Bグリッド	〃	35
16	C区5-Dグリッド	〃	35
17	C区8-Jグリッド	〃	46
18	3 T 1住	〃	36
19	4 T 2住	〃	55
20	4 T 8区	〃	36
21	4 T 2住	〃	37

22	C区8住覆土	頁岩	16
23	5 T 2住	〃	43
24	C区	〃	18
25	C区表採	〃	36
26	3 T 1住	〃	27
27	〃	〃	26
28	〃	〃	85
29	C区表採	〃	51
30	3 T 8区南壇	〃	65
31	C区3住	〃	53
32	4 T 7区	〃	33
33	B区5-Aグリッド	〃	27
34	C区12住覆土	〃	15
35	B区25-Aグリッド	〃	61
36	3 T 8区	〃	109
37	C区12住	安山岩	65
38	4 T 9区拡張	頁岩	32
39	C区	〃	43
40	4 T 7区	〃	30
41	〃	〃	35
42	4 T 7区	〃	25
43	4 T 4住覆土	〃	51
44	4 T 5区拡張	〃	29
45	3 T 8区南壇	〃	43
46	4 T 9区北東拡張部 土壇	〃	38
47	C区8-Aグリッド	〃	17
48	4 T 8区	〃	26
49	A区22A	〃	28
50	4 T 2住	〃	224
51	A区3住覆土	〃	265
52	〃	安山岩	122

III 前原遺跡の調査内容

53	C区1住覆土	頁岩	185
54	C区8-Kグリッド	〃	154
55	3T8区	〃	132
56	C区8住覆土	〃	90
57	C区1住覆土	〃	65
58	C区2住覆土	〃	105
59	C区	〃	71
60	C区12住	〃	225
61	5T23区	〃	245
62	4T7区	安山岩	95
63	〃	頁岩	196
64	4T4住覆土	安山岩	66
65	C区10-Jグリッド	頁岩	97
66	4T8区北西拡張	安山岩	43
67	C区	頁岩	58
68	C区11住	〃	65
69	C区12住	〃	72
70	4T8区	〃	90
71	4T8区拡張	ホルンフェルス	161
72	3T9区南拡	頁岩	60
73	3T1住覆土	〃	65
74	C区6-Aグリッド	〃	68
75	4T4区	ホルンフェルス	67
76	4T4住覆土	頁岩	67
77	4T8区北西拡張	〃	60
78	C区1-A	〃	72
79	C区3住覆土	〃	112
80	3T8区南拡	〃	62
81	C区12住	〃	35
82	C区2住覆土	安山岩	10
83	3T11区	〃	10

磨石

No	出土地点	石質	重量(g)
1	C区7-Jグリッド	安山岩	578
2	4T1住	閃緑岩	523
3	C区8住覆土	安山岩	240
4	2T1住	溶結凝灰岩	630
5	2T1住	安山岩	1110
6	C区12住	〃	850
7	4T8区	〃	580
8	C区8-Kグリッド	〃	578
9	C区12住	〃	600
10	C区4-Aグリッド	〃	642
11	4T8区西拡	〃	(340)
12	C区3住	〃	502
13	B区11-Aグリッド	〃	(394)
14	5T1住覆土	〃	680
15	C区6-Aグリッド	〃	470
16	C区11住	〃	770
17	C区12住	花崗閃緑岩	(400)
18	A区3住	安山岩	850
19	C区3住	石英閃緑岩	671
20		安山岩	553
21	4T4住	〃	522
22	C区12住	〃	835
23	C区3住	変質珪化岩	(483)
24	3T1区	安山岩	(390)
25	C区3住	〃	(465)
26	C区4-Aグリッド	〃	(408)
27	C区12住	安山岩	980
28	B区8-Aグリッド	石英閃緑岩	665
29	3T8区北拡	〃	525

1 縄文時代の遺構と遺物

30	C区12住	安山岩	(770)
31	3 T 1 住	〃	770
32	B区6-Bグリッド	〃	940
33	3 T 1 住	〃	608
34	3 T 1 住覆土	花崗閃緑岩	570
35	B区23-Cグリッド	安山岩	633
36	C区1号土坑	〃	(620)
37	B区表採	〃	650
38	4 T 1 住	〃	545
39	C区12住	〃	410
40	4 T 2 住	〃	576
41	C-12住	石英ヒン岩	471
42	3 T 1 住	石英閃緑岩	770
43	C区5住	安山岩	(632)
44	2 T	閃緑岩	(470)

石皿

No	出土地点	石質	重量(g)
1	C区	多孔質安山岩	(1,760)
2	3 T 1 住	安山岩	(4,980)
3	4 T 1 住	安山岩	(2,560)
4	C区3住	安山岩	(400)
5	C区12住	〃	(232)
6	C区2住	花崗閃緑岩	(2,380)

小型磨製石斧

No	出土地点	石質	重量(g)
1	B区20-Cグリッド	チャート	6.0
2	4 T 4 住覆土	〃	4.7

石錐

No	出土地点	石質	重量(g)
1	4 T 9 住	安山岩	17.5
2	C区12住	〃	21
3	3 T 1 住	チャート	3.1

礫器

No	出土地点	石質	重量(g)
1	6 T 4 区	頁岩	745
2	C区12住	〃	320
3	C区11住	ホルンフェルス	239
4	C区11住	細粒砂岩	557
5	4 T 1 住覆土	ホルンフェルス	530
6	C区12住	頁岩	314
7	C区12住	ホルンフェルス	682
8	C区5号土坑覆土	細粒砂岩	961
9	B区表採	頁岩	283
10	4 T 2 住	〃	82
11	C区7-Hグリッド	〃	170
12	A区周溝	〃	97
13	4 T 7 区	〃	155
14	C区3住	〃	176
15	C区	〃	156

敲石

No	出土地点	石質	重量(g)
1	3 T 8 区	閃緑岩	1,242
2	4 T 2 住	安山岩	568
3	C区11住	〃	590
4	C区11-Kグリッド	点紋緑色片岩	318
5	C区12住	点紋緑色片岩	(200)
6	3 T 8 区	〃	(116)

III 前原遺跡の調査内容

7	4 T 4 住	点紋緑色片岩	(138)
8	C区8-Kグリッド	黒炭緑色片岩	(75)

特殊石器

No	出土地点	石質	重量(g)
1	C区7-Kグリッド	ホルンフェルス	88
2	4 T 2 住覆土	緑色凝灰岩	176
3	C区12住覆土	頁岩	366
4	5 T 1 住覆土	〃	90
5	4 T 4 住覆土	〃	103

残核

No	出土地点	石質	重量(g)
1	5 T 3 号土壇	頁岩	226
2	3 T 8 区	安山岩	275
3	C区	頁岩	336
4	3 T 9 区北拡	〃	322
5	C区8-Jグリッド	〃	265
6	4 T 8 区	安山岩	228

多孔石

No	出土地点	石質	重量(g)
1	4 T 1 住	溶結凝灰炭	6,780
2	C区12住	安山岩	(1,650)
3	4 T 1 住	〃	2,930
4	4 T 12住	〃	2,840
5	C区8-Jグリッド	〃	(3,170)

石製品類

No	出土地点	石質	重量(g)
1	B区5-Cグリッド	点紋緑色片岩	(520)
2	C区4住	緑色片岩	(71)
3	C区12住	安山岩	85

4	C区	軽石	(75)
5	C区	〃	(75)
6	C区12住	〃	26
7	C区	〃	(14)
8	C区4住	中粒砂岩	94
9	4 T 4 住	〃	(56)

2 弥生時代の遺構と遺物

弥生時代の遺構は、住居5軒、竪穴状遺構3基が検出された。分布は神沢川右岸のA・B区から住居3軒、荒砥川左岸の5トレンチから住居2軒、竪穴状遺構3基と、立地を異にした2地点に分かれている。また、この立地の違いは時期差としてとらえることもできる。

(1) 住 居

A区1号住居(第92図)

6～7-Aグリッドに位置する。規模は4.9×5.3mで、やや隅の丸い方形を呈す。壁高は20～40cmである。ピットは8個検出されたが、柱穴と思われるものはP₁～P₄の4個である。それぞれ直径約20cmで、深さは約50cmであるが、P₃のみ25cmで浅い。なお、P₂は床面部分に粘質ロームを環状に貼り付けている。柱の根本の補強と考えられる。住居内には、他に4個のピットがあるが、用途は不明である。周溝は認められない。床面は掘り込まれたローム面を使用している。4個の柱穴と南壁に接する部分は他に比べて堅緻である。南壁中央部の東寄りに、貯蔵穴がある。80×40cmの半円形で一部が壁に接しており、深さは35cmである。開口部分は床面が盛り上っており、住居構築時に意図的に地山を掘り残して造られている。また、東壁南半から東南コーナーにかけて、2.2×1.1mの方形の高まりがあり、これも地山を残して造られている。住居中央よりやや北寄りに炉がある。河原石1個を配しており、掘り込みはほとんどない。焼土の範囲は直径約40cmで、中央の厚さは3～4cm程である。

覆 土

- ①褐色土：砂質ロームを班状に混入し軽石を多量に含む。色調はやや暗い。
- ②黒褐色土：砂質ロームを班状に混入する。軽石の含有は①層より少ない。
- ③黄褐色土：褐色土と砂質ロームとの混土层。
- ④黒色土：軽石を多量に混入するややソフトな層。
- ⑤黄褐色土：砂質ローム中に若干褐色土を混入する。

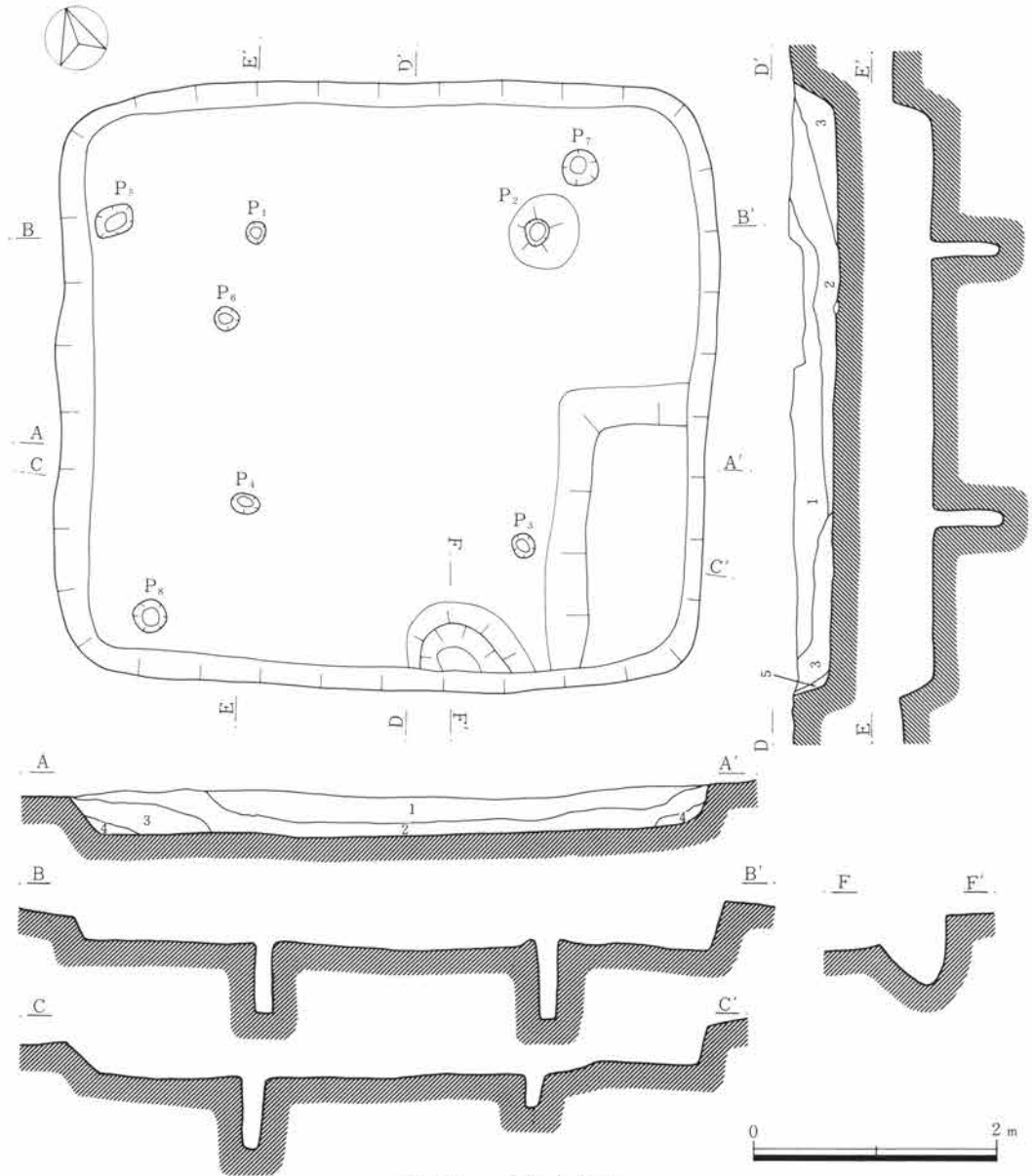
遺物出土状態

完形土器の出土は無い。住居北半部床面で壺形土器の口縁部破片(第93図1)が出土している。他の破片は②層から出土している。

出土遺物(第93図)

1～6は櫛描文で文様を施す十王台式系土器^{註1}である。1～4は頸部がすぼまり、口縁が緩やかに外反する壺形土器の口縁部破片である。口唇には櫛状工具による刻目が施される。口縁部には5段前後の横位櫛描波状文が施され、頸部に3～4段の押捺を加えた粘土帯をめぐらして文様帯を区画している。また、胴上半部は櫛描懸垂文により縦区画がなされ、その間を波状文で充たしている。6は櫛描文の下部にRを2条付加した縄文が施されるが、その間には櫛描連弧文をめぐ

III 前原遺跡の調査内容

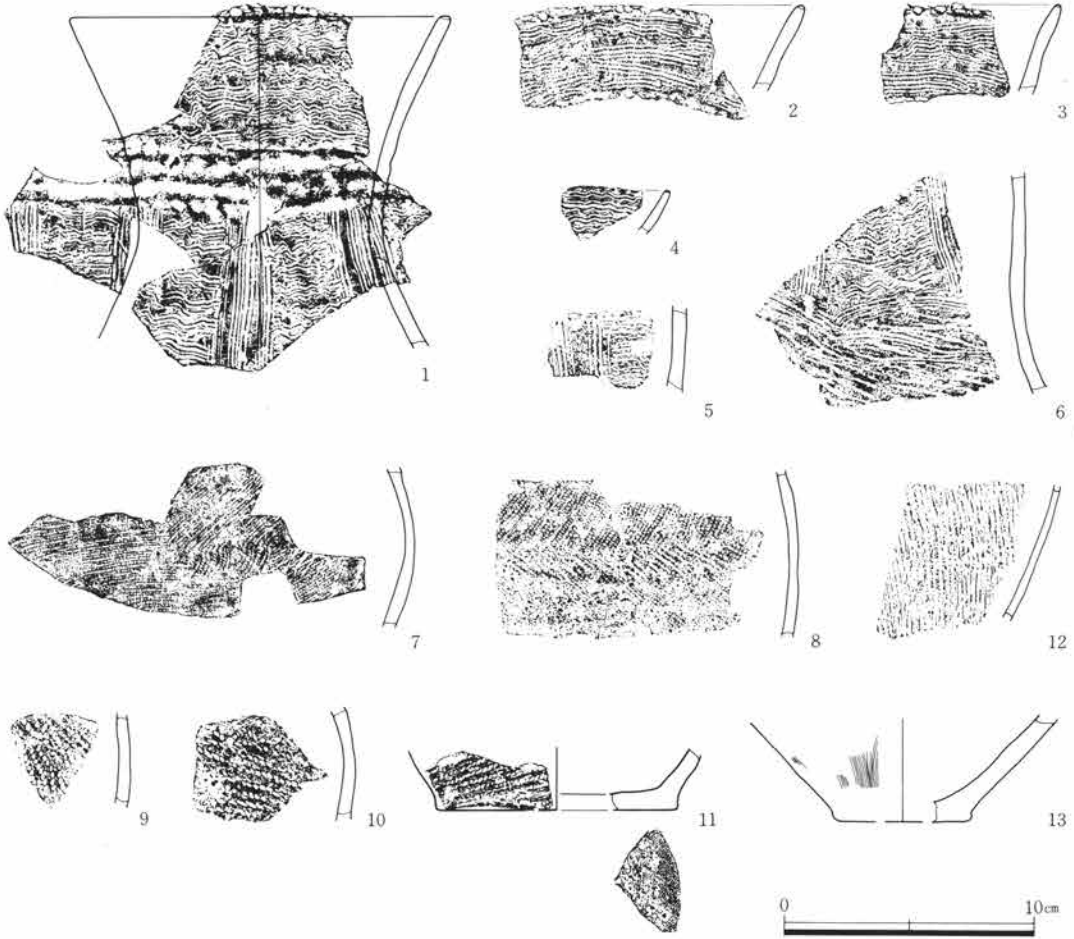


第92図 A区1号住居

らしている。

7～10は縄文を施した破片で、文様構成や製作技法、胎土等の比較から、1～6に続く胴下半部と考えられる。いずれも附加条第1種で、2本の縄を附加している。7・9・11は $LR + \frac{R}{R}$ 、8・10は $RL + \frac{L}{L}$ の原体を用いて施文しており、特に8は同じ原体の縦回転と横回転で羽状の構成をつくり出している。

12・13は土師器の破片で前者はS字状口縁甕形土器の胴部、後者は壺形土器の底部と思われる。



第93図 A区1号住居出土遺物

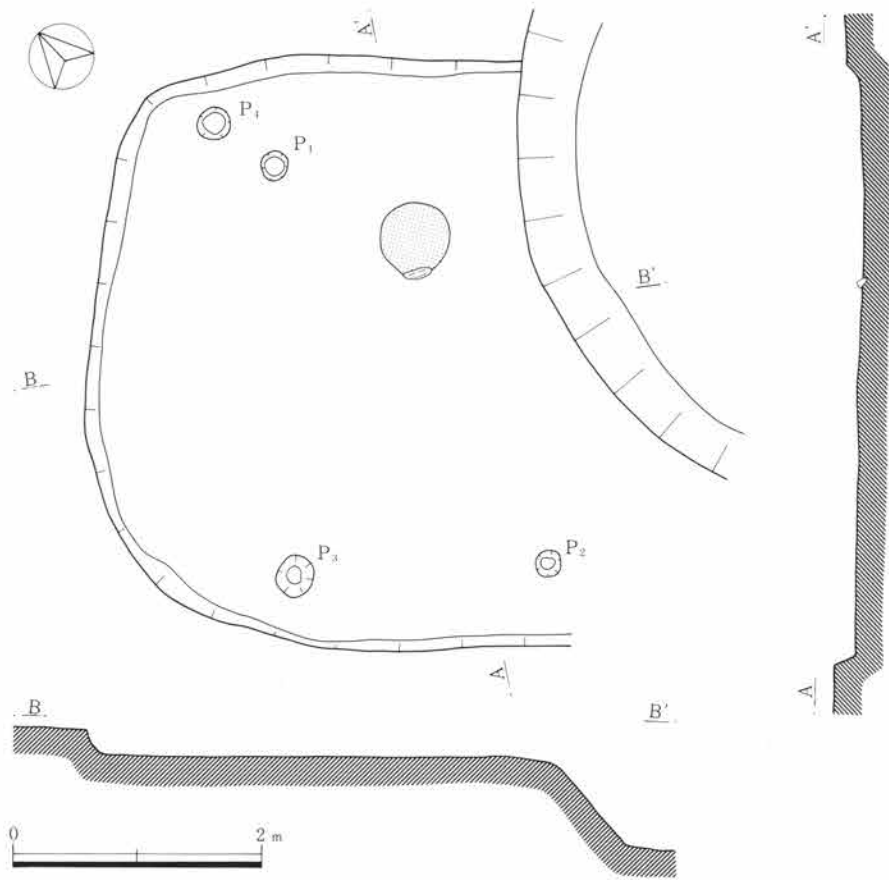
A区2号住居 (第94図)

5-Aグリッドに位置する。住居東南部分は1号古墳の周堀により切られている。形状は南北が4.7mと一辺のみ計測されたが、隅丸の方形状を呈するものであろう。主軸方向はN-59°-Eを示す。壁高は床面から10~20cmでその立ち上がりはやや斜状を呈する。ピットは4個検出したが本住居の柱穴として結びつくものは3個である。床面はローム面を使用しており、若干起伏があるが至って堅緻である。炉址は住居中央部北東寄り1mの位置に設けられて、径50cmの円形状に僅かな窪があり主軸方向手前に河原石1個が配されている。炉底面は焼成を受けて赤色を呈す。

覆土

覆土は3層に分層される。上位層は炭化物を少量、軽石を多量に混入する砂質の黒色土である。中位層は上位層より軽石の混入は少ないが砂質ロームを若干含む黒褐色土である。覆土の最下層は砂質ロームを主体に黒褐色土を含有し、軽石を僅かに混入する。

III 前原遺跡の調査内容



第94図 A区2号住居

遺物出土状態

炉址を挟んで壁側に高坏の脚部、炉の南に壺形土器が共に床直で出土している。

出土遺物（第95図）

1は小型の十王台式系土器である。口縁部と胴部下半を欠き、全形は知り得ない。頸部上位には数条の粘土紐を段状に廻らし、その上に指頭による押捺を施している。頸部文様帯は、6本を単位とする櫛状施文具で、平行する2本の懸垂文を等間隔に5単位施し、その間に横位波状文を10～11段施して充填し、下端部に同施文具による条線をめぐらして、文様帯を画している。胴部にはL縄を附加した附加条縄文が施される。軸縄も圧痕が一部認められるが、不鮮明である。文様の施文順序は、附加条縄文→頸部文様帯下端の横位条線→縦位区画条線→横位充填波状文である。胎土は小砂粒を若干含み、焼成は良好で非常に堅緻であり、色調は明褐色を呈している。内外面とも施文以前に、ナデによって器面が調整されている。

2は高坏形土器の脚部破片で、坏部を欠く。脚裾部は低く展がり、裾端はやや反り気味になる。

円孔は等間隔で3ヶ所に穿たれる。器面が放射状の粗いヘラミガキ、内面及び裾部は丁寧なナデが施される。非常に堅緻な焼成で、色調は黄白色を呈する。

B区3号住居（第97図）

23-B～Cグリッドに位置する。形状は5.6×5.5mの隅丸方形を呈するが、若干歪みが見受けられる。床面積は約27㎡で、壁高は床面から20～40cmでやや斜状に立上がる。主軸方向はN-9°-Eを示す。柱穴は4個検出され、径は30～40cmで深さ30～40cmである。各柱穴の位置は壁から1～1.2m内側に穿ってある。床面はローム面を使用しており、起伏なく平坦である。柱穴を囲んだ範囲内は至って堅緻な為、発掘の際覆土との剥離が容易であった。住居中央部北寄りに炉が検出された。床面を浅く穿った円形状を呈し、規模は直径90cmである。

覆土

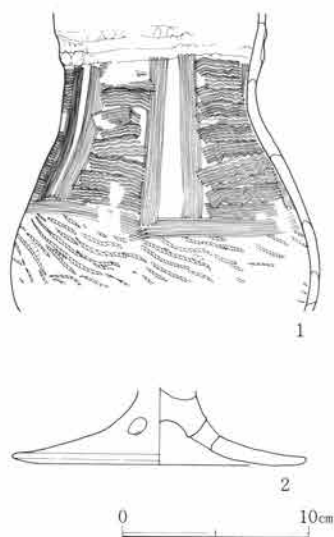
上位層は軽石を混入する暗褐色土で、砂質ローム粒をまばらに含有する。中位層はほぼレンズ状に堆積する黒褐色土で上位層に比較し軽石の含有量は少なく住居覆土の下層を成す。下位層は壁際にほぼ三角状を呈して堆積する黒褐色土で砂質ロームとの混土層である。

遺物出土状態

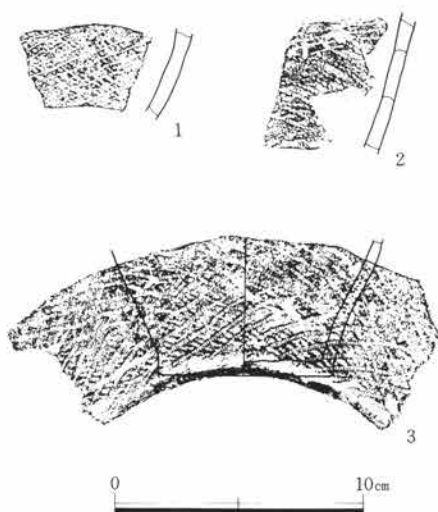
遺物の出土は極めて少なく、北東コーナーと南東コーナー2ヶ所に3片の土器が床直出土したのみで、覆土中からの出土は殆んどない。

出土遺物（第96図）

1～3はいずれも十王台式系と思われる壺あるいは甕形土器の胴部破片である。いずれも附加条縄文を施文した土器で、1は附加条第2種 RL+L、2は附加条第1種と思われる、附加する縄はLだが軸縄は不明である。3は附加条第2種 RL+Rと LR+Lの2種類の原体を横位に交互に施文して、羽状縄文を構成している。2も羽状を呈するが、おそらく同一原体で施文方向を変えて

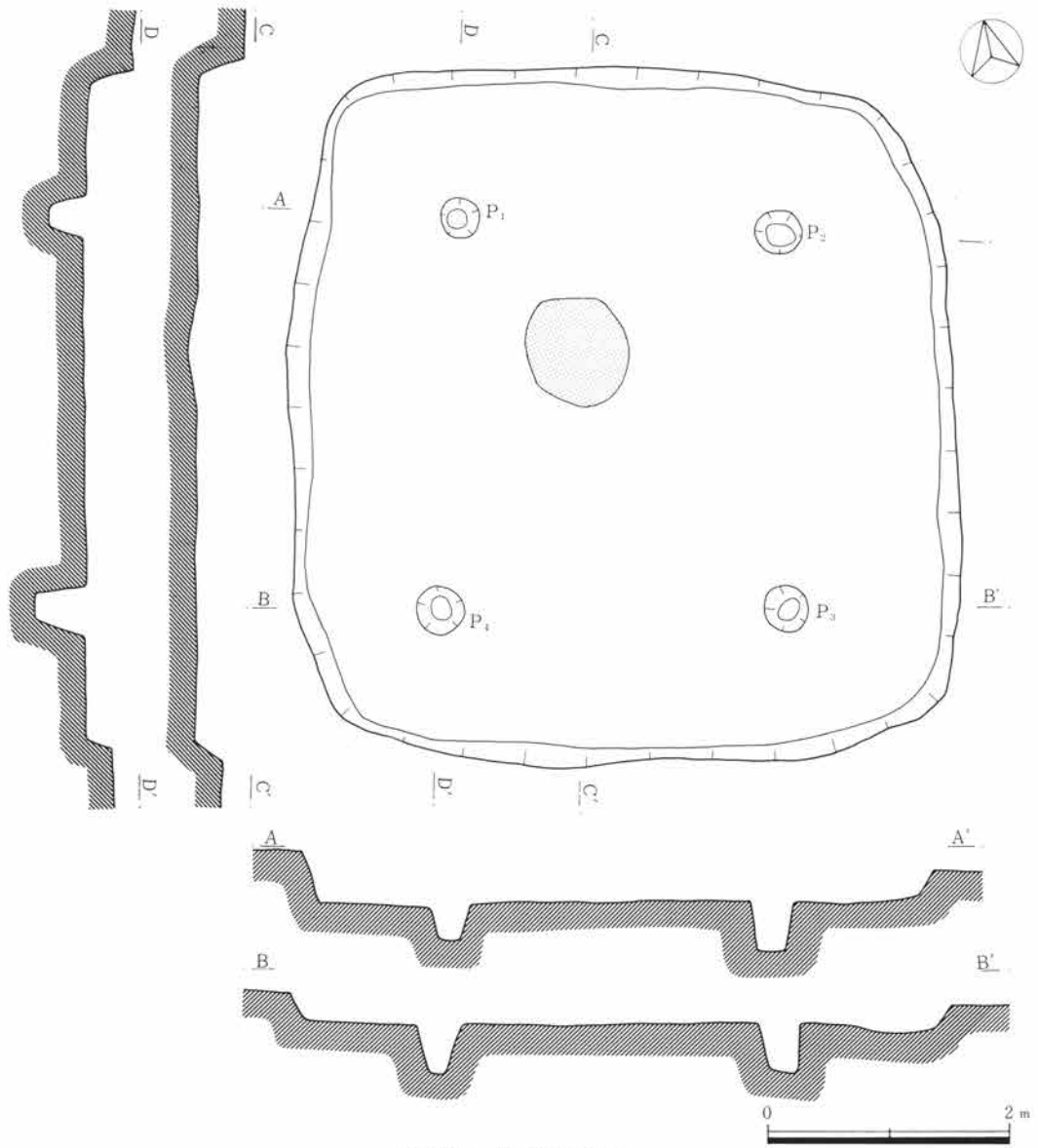


第95図 A区2号住居出土遺物



第96図 B区3号住居出土遺物

III 前原遺跡の調査内容

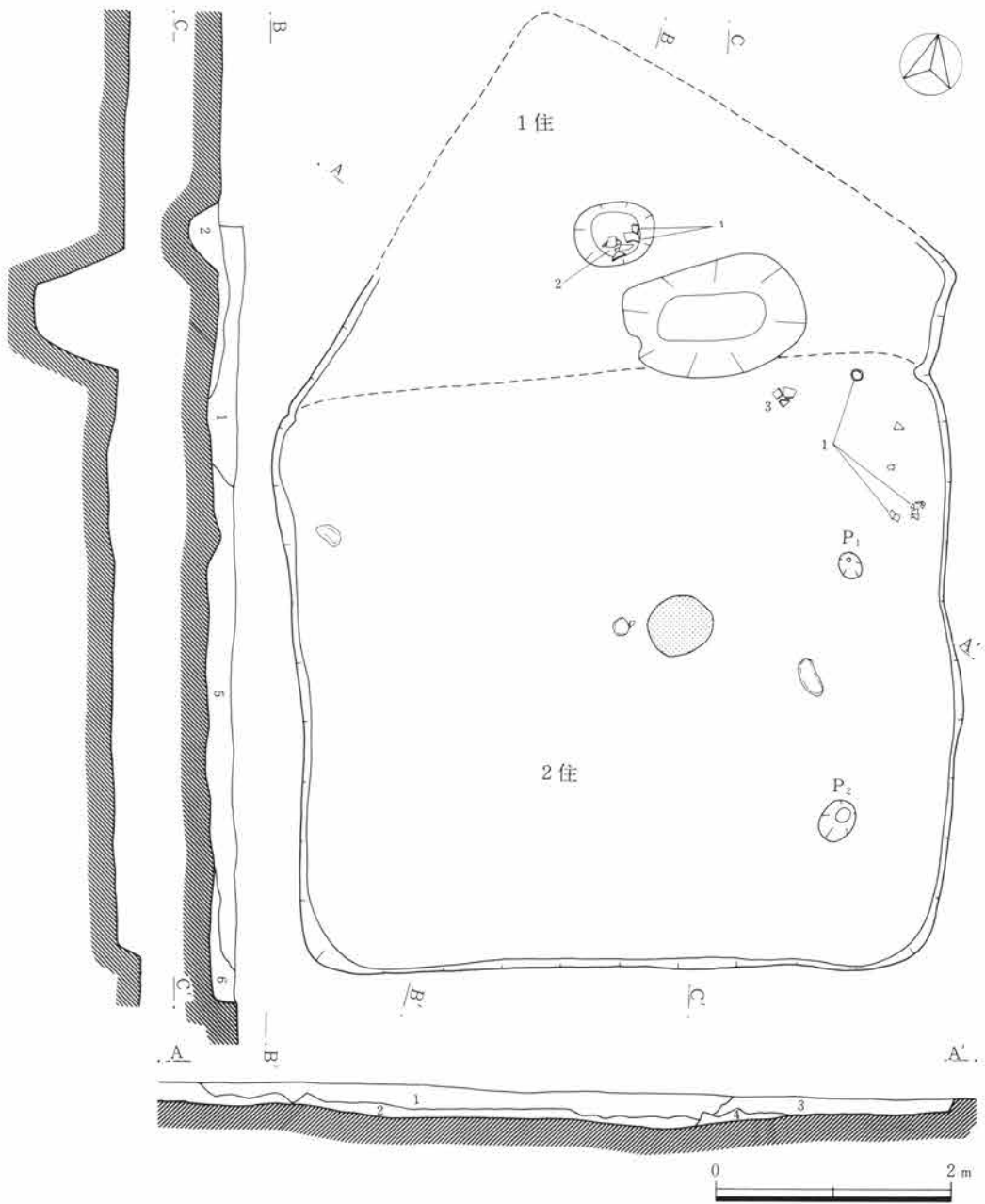


第97図 B区3号住居

いるものと思われる。胎土には砂粒を僅かに含む精良な土を用い、焼成は良好で硬質な仕上がりである。2は他に較べ、やや軟質でもろい。

5 T 1号住居 (第98図)

本住居は新土塚地内の新設道路に伴うトレンチで検出された。8～9グリッド内に位置し、他に住居が1軒重複していることが判明したため、更に拡張し調査を行なった。



第98図 5 T I ・ 2号住居

1号住居は一辺4mほどの方形を呈すると思われるが、北側の壁は不明確であり、また南半は2号住居と重複している。2号住居との切り合い関係は、覆土の観察では明確にできなかったが、ほぼ同レベルの床面でありながら2号住居の炉が壊されていないこと、第98図1の接合関係から、2号住居が本住居を切っていると考えた。壁高は約15cmである。柱穴は検出されなかった。なお、

III 前原遺跡の調査内容

住居中央やや北寄りに70×55cm、深さ25cmの落ち込みが、またそれに南接して1.5×1.0m、深さ70cmの土壇状の落ち込みが検出されたが、後者は本住居の覆土とは全く異なり、住居には伴わない遺構であることが判明している。床面は部分的には堅緻なところも見受けられるが、全体的にやや軟弱である。

覆土（1・2号住居）

- ①黒色土：軽石を多量に混入する砂質土でサラサラしている。
- ②黒褐色土：軽石を混入するソフトな層。
- ③黄褐色土：軽石の混入が見受けられるソフトな層でやや黒味を帯びる。
- ④黄褐色土：粒度の粗いザラザラした砂質ローム。
- ⑤黒色土：①層に近似するがやや暗灰色を呈する。
- ⑥黄褐色土：③層と同質層。

遺物出土状態

住居中央やや北寄りの土壇内から甕形土器（1）・壺形土器（2）が出土した。他の破片は覆土中からの出土である。

出土遺物（第99図）

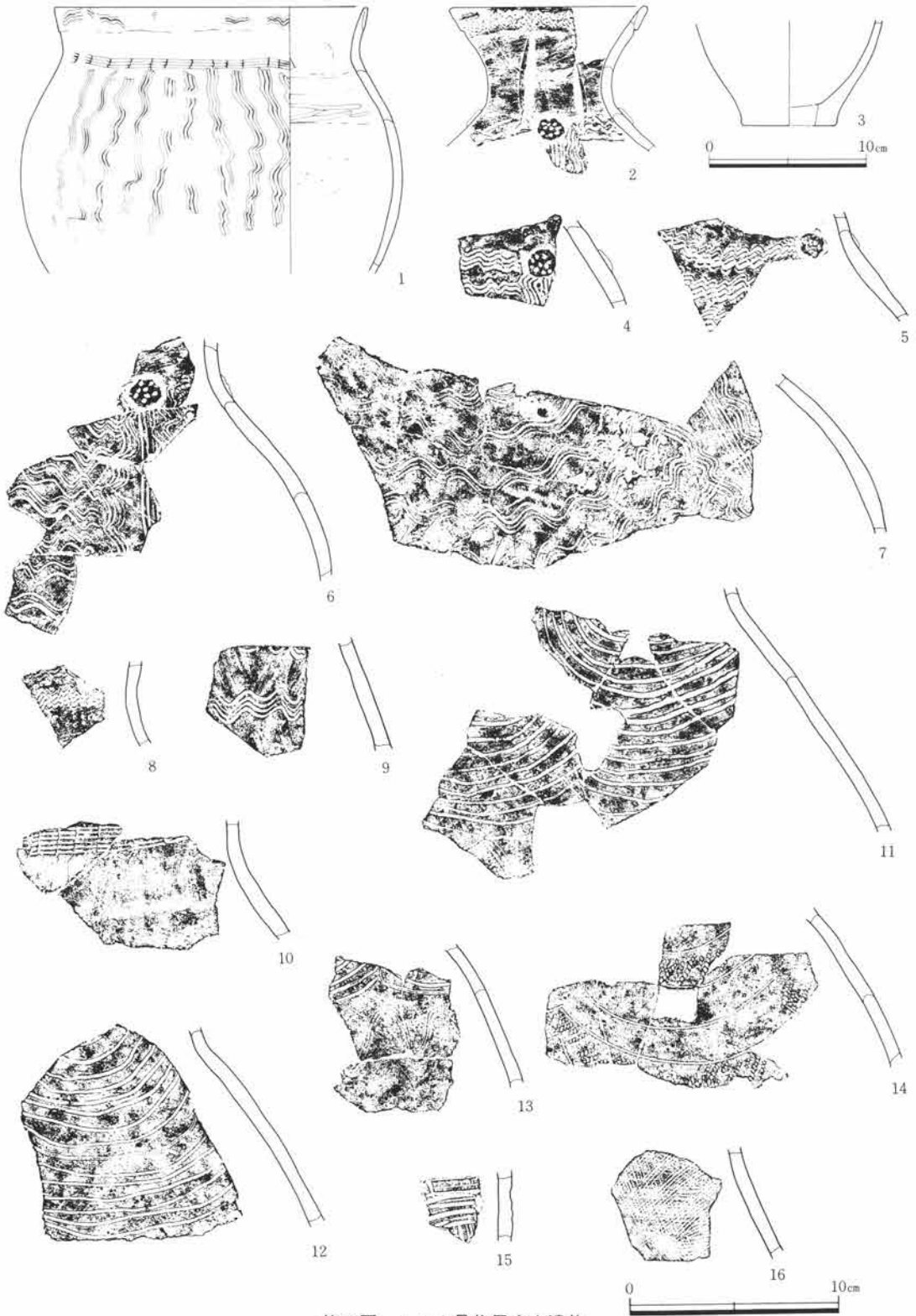
1・2・4～10は櫛描文を施した土器である。1は甕形土器で、頸部が緩く締まる広口の形状を呈する。口縁部外側には1条の粘土帯を貼付し、弱い折り返し口縁をつくり出している。口縁部外面に横方向の波状文、頸部には時計回りにほぼ等間隔の簾状文を描き、そこから等間隔に波状文を垂下させる。施文具は、3本を単位とした幅6mm程の先端が丸味をもつ櫛状具を用いている。なお外面の一部に赤彩らしき跡が認められる。施文前の器面調整にはヘラケズリを行ない、弱いナデが施される。胎土は小砂粒を多く含む比較的キメの細かい土を用いている。色調は、外面が黒色、内面が灰褐色を呈する。

2・4～7はいずれも壺形土器の破片で、文様や胎土から、同一個体の可能性がある。2は弱い複合口縁を呈するもので、頸部は強い曲線を描いて締まり、なだらかな肩部に続く形状を示す。口縁部外面には横方向の波状文を施し、肩部上位に刺突を施した円形貼付文を配している。6・7は胴部と思われる破片であるが、円形貼付文より直線文を垂下させ、更にその両側に波状文を一条ずつ垂下させる。この直線文と波状文の組合せによる懸垂文によって区切られた部分には横走る波状文を施している。施文具は4本を単位とした幅8mmの櫛状具を用いている。器面は頸部を横方向のヘラミガキ、胴部をナデで調整し、内面はヘラケズリを施す。胎土は砂粒を多く含むやや粗いもので、色調は明赤褐色を呈する。

8・9は頸部及び肩部の破片で4本単位の櫛状具による波状文を施すものである。

10は頸部破片で、6本単位の櫛描簾状文を反時計回りに施す。櫛目は浅く、鋭さを欠く。胎土は砂粒を多く含むやや粗い土を用いている。色調は暗赤褐色を呈する。

11～13は沈線文を施した壺形土器で、同一個体の可能性がある。胴上半部に植物の茎状の工具



第99図 5 T I 号住居出土遺物

III 前原遺跡の調査内容

の先端を用いて同心円状の沈線文を描く。沈線文は1本で描き、円文の継ぎ足しはほとんど見られず一気に描いているようである。胴部中位には3本単位の櫛状具によって振幅の大きい波状文を横位に廻らせている。器面は施文前に丁寧なナデで調整される。胎土は砂粒を多く含む粗い土を用いる。色調は明褐色を呈し、器表面の一部に黒斑が見られる。

14は壺形土器の肩部と思われる破片である。文様は細く鋭い篋描沈線による連弧文を重畳施文し、連弧文の間を間隔をあけて附加条と思われる縄文を充填している。胎土は小砂粒を含む緻密な土を用いており、色調は黒褐色～明灰褐色を呈する。

15は小破片で器形、文様構成等は不明であるが、集合沈線状の直線文を施している。

16は4本単位の細かい櫛状具を用いてハケメ状の器面調整を施したものである。

本住居出土の主体を占めるものは1～13の櫛描文及び沈線文を施す土器である。

1・2・4～7に見られる櫛描文を垂下させる文様構成は他にあまり例を見ないものであるが形態や施文具の特徴から長野県における百瀬式あるいは吉田式に併行する土器と考えられる^{註2}。又11～13はその特徴的な文様から従来山草荷式系といわれてきたものであるが、沈線が太く1本ずつ描出している事から、東北地方南部の編年で中期後半に位置づけられる二ツ釜式あるいは陣場式^{註3}に相当するものかと思われる。

5 T 2 号住居 (第98図)

1号住居の南側に重複して検出された。切り合い関係は本住居のほうが新しい。形状は5.5×5.0mの隅丸形状を呈し、床面積は26.5m²である。壁高は約15cmである。主軸方向はN-9°-Wを示す。壁の立ち上がりはほぼ垂直で東壁と西壁のラインは若干歪んでいる。柱穴は東壁側に面して2個検出されたが他は確認されなかった。床面はローム面を使用しており、中央部分は堅固だが、周囲は軟弱である。全体的に若干の起伏が見受けられる。炉は約50cmの円形状を呈する地床炉で住居中央部のやや北東よりに位置する。

遺物出土状態

完形土器や大型破片の出土はなく床直に於てまばらに小破片を検出。また、覆土中より数10片の土器片と礫が数個出土している。

出土遺物 (第100図・第101図)

第100図1および第101図2・7・8は櫛描文を施した土器で、この他に掲載していない破片を含めれば本住居の主体を占める土器である。

1は甕形土器と思われる胴下半部破片で、胴中位に3本単位の櫛描波状文を垂下させている。底部はやや突出気味でやや不安定な成形である。胎土は砂粒を多量に含み、やや粗い土を用いている。色調は明灰褐色を呈す。文様の特徴から第99図一1と同種の甕と思われる。

2は折り返し口縁を呈する壺形土器の口縁部破片で、口縁外面に3本単位の櫛描波状文を施す。色調は明褐色を呈し、胎土には小砂粒を多く含む。

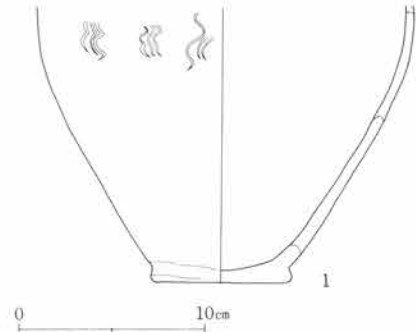
7も3本単位の波状文を描くものであるが、上端に横走する簾状文が認められることから第97図1と同様の文様をもつものと思われる。

8は櫛描文というよりもむしろ条痕に近い沈線を羽状に斜行させる土器である。器面調整は内面をハケメ調整の後、ヘラミガキを施すもので、他の土器と異なっている。

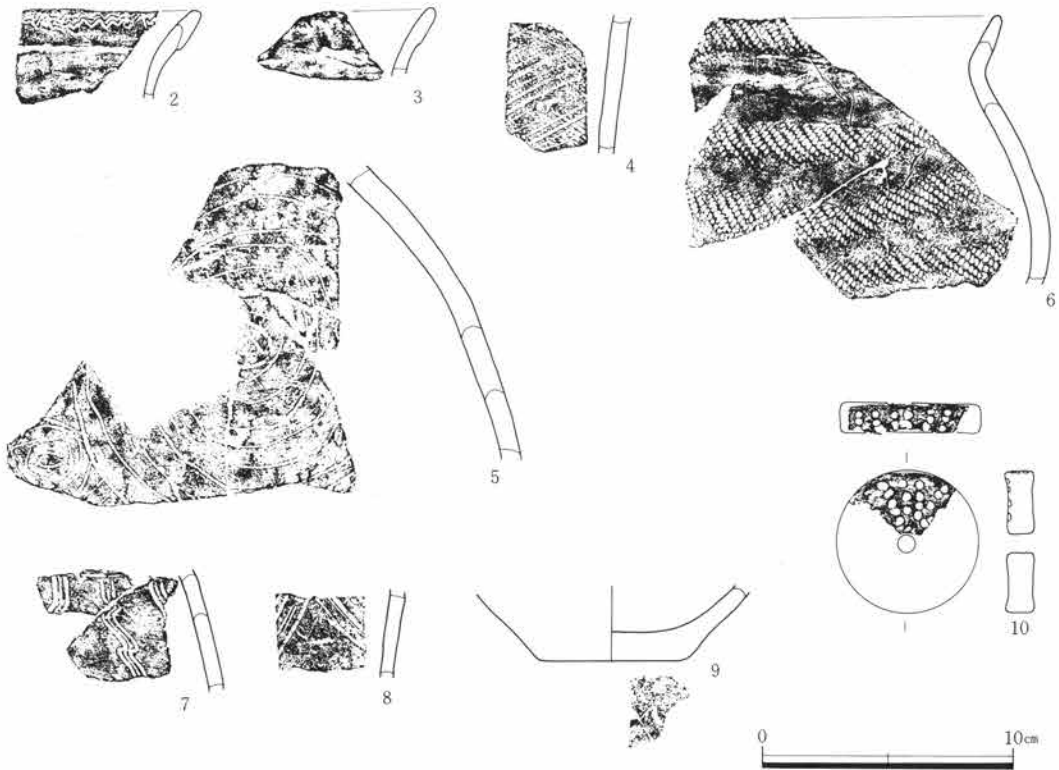
3は折り返し口縁を呈する壺形土器の無文の口縁部破片で、2と同様の器形を呈すると思われる。

4は5本単位の鋭い櫛状具による条痕を格子目状に施した土器である。

5は同心円状の沈線文を描く壺形土器である。鋭い篋状具により直径15cm前後の文様を描き、隣接する円文との間の下端空白に小さな円文を描いている。文様構成は第97図11～13と同様と思われるが、沈線に継ぎ目が多く、また文様もぎこちない。この違いはおそらく施文具の相違（軟質な植物の茎のようなものと、硬質な篋状具の違い）によるものであろう。調整は内外面ともヘラケズリを施し、ナデ・ミガキ等は行なわれない。胎土には砂粒を多く含み、色調は明褐色を呈



第100図 5 T 2号住居出土遺物 (1)



第101図 5 T 2号住居址出土遺物 (2)

III 前原遺跡の調査内容

する。

6は縄文のみを施したもので、器形は広口の甕形土器と思われる。口縁部は短かく内湾ぎみに開き、頸部は「く」の字状に屈曲する。胴部は張りの弱い「^{なつめ}囊」形を呈す。口唇部および口縁部に縄文 RL を横位に施し、頸部に幅広く無文部をおいて、胴部に同縄文 RL を若干間隔をあけて横位に帯状に施文している。なお、無文部には弱いヘラミガキが認められる。胎土は黒雲母・細砂粒を多く含むやや粗い土を用い、色調は橙色を呈す。また、外面には煤が付着して黒変した部分が認められる。縄文を施した土器としてはこの他に無節の縄文を施すものや沈線で横帯の区画をし、縄文 RL を充填するものなどが出土している。

10は紡錘車の破片で、推定径5.6cmを測る。上面と側面に細い管状具による刺突文を施す。

9は無文の壺あるいは甕の底部破片で、底面に網代痕が残る。

5 T 1号住居と同様に櫛描文と篋描沈線文を主体とする中期後半の土器群であるが、帯状縄文を施文するものが相伴しており、本地域における後期弥生土器である赤井戸式との関連も考えられる。^{註4}

(2) 竪穴状遺構

5 T 1号竪穴状遺構 (第102図)

5 トレンチ16グリッドに位置する。3.1×2.1mの隅丸長方形を呈し、主軸方向はN-24°-Eを

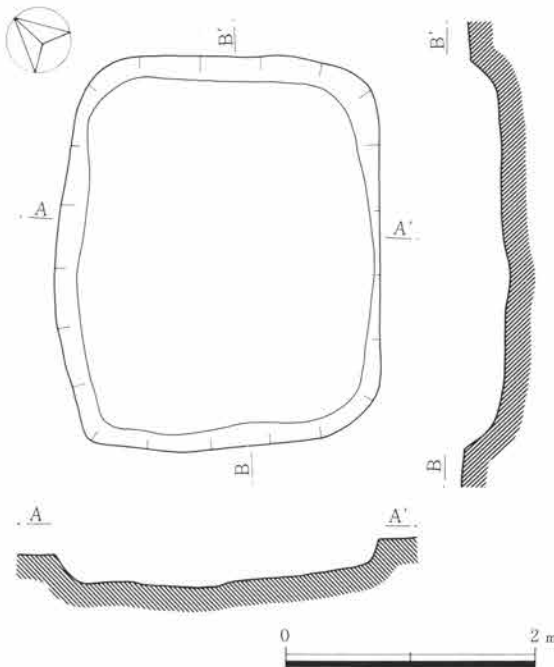
示す。床面積は6.2m²である。住居状のプランを呈すが、柱穴や炉等の施設を伴っていない。壁は緩やかに傾斜しながら立ち上がり、壁高は20~30cmである。床面は軟弱で南から北に向かって緩傾斜しており、若干の凹凸が認められる。

覆土

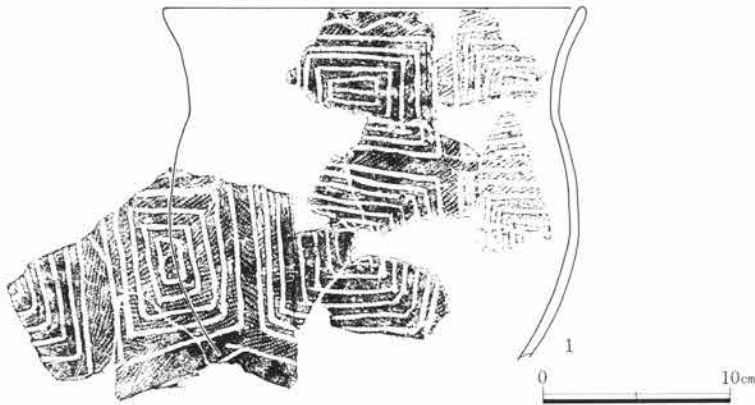
軽石を僅かに含む黒褐色土。壁ぎわに地山の黄色砂壤土を少量含む。

遺物出土状態 (図版20-1)

東北コーナーから甕形土器(1)が底面から5cmほど浮いた状態でまともに出て出土した。その他に、北側コーナー寄りの床面から河原石1個が、中央付近の床上15cmで河原石2個が出土している。



第102図 5 T 1号竪穴状遺構



第103図 5 T 1号竪穴状遺構出土遺物

出土遺物（第103図）

甕形土器の大型破片で、底部付近を欠く。口縁部は外反気味に開き、頸部は緩く屈曲し、胴部最大径を中位にもつ形状を呈する。文様はRL縄文を地文とし、口縁部に1条の鋸歯文、それ以下を胴下位まで重四角文を描く。鋸歯文、重四角文は幅3mm程の沈線文で、重四角文は頸部と胴部の上下2段で、全周を4区画に分割して構成されている。なお、口縁部内面にヘラミガキが施される。胎土には砂粒を多く含むやや粗い土を用い、色調は淡黄褐色を呈している。

本例に見られる特徴的な重四角文は、比較的中期前半に多く見られるが、その器形や口縁部文様の^{註5}特徴から、時期的には中期後半の範疇で捉えておきたい。

5 T 2号竪穴状遺構（第104図）

5トレンチ22グリッドに位置する。2.6×2.4mの不正隅丸方形形状を呈する。壁は緩やかに傾斜しながら立ち上がる。床面は東側は平坦であるが、西側は一段低くなっており、底面は皿状を呈す。壁高は東側で20cm、西側で35cmである。

覆土

軽石を含むややソフトな黒褐色土を埋土とする。壁付近には地山の黄色砂壤土を斑点状に含む。西側の一段低い部分と東側の平坦面の覆土に明確な差は認められなかった。

遺物出土状態

南西隅の床上10cmから壺形土器（2）が、北西の一段低い部分の床上20cmから壺形土器（1）が、それぞれ正位に直立した状態で出土した。また、南東コーナーの床上10cmから偏平な河原石が出土している。

出土遺物（第105図）

1は完形の壺形土器である。口縁部はやや外反ぎみに開き、頸部が「く」の字状に緩く屈曲し

III 前原遺跡の調査内容

て、張りの強い球形状の胴部へと続く。底部は安定した平底を呈す。口縁部は折り返し口縁を呈し、節の揃った縄文 LR が横位に施される。頸部には幅広く無文部がおかれ、肩部には同縄文 LR による横位縄文帯が2段施される。外面の無文部分および口頸部内面には、横方向の丁寧なヘラミガキが施されている。また、胴部内面はヘラケズリの後、粗いナデで調整がなされている。底部はヘラケズリ整形のままである。胎土には大粒の砂粒を多量に含み、焼成は良好で堅緻な仕上がりにある。色調は全体に赤褐色を呈し、胴下半部の一部に焼成時のものと思われる黒斑が認められる。

2は無文の壺形土器で、口唇の一部と胴下半部を欠損している。口縁部は「朝顔」状にやや外反しながら大きく開き、頸部は緩やかにくびれ、胴下半部に向かって直線的に開く形状を呈する。器面は内外面ともナデによる調整がなされている。胎土には黒色の細砂粒を多量に含む。焼成はやや軟質な仕上がりにあり、色調は全体に明赤褐色を呈している。

3～10は、いずれも縄文を施した壺あるいは甕形土器の破片である。3は受口状を呈する口縁部の破片で、口唇部には縄文 LR が施され、口縁部および頸部には楯状具による横位のハケメが施されている。4は折り返し口縁を呈する土器で、口唇部および口縁部には縄文 LR が施される。5～8は壺形土器の頸部から肩部にかけての破片と思われる。5・7は縄文 LR による横位の帯状縄文が施された土器で、7では帯状縄文の上端にL縄による結節縄文が伴う。6・8は全面に縄文 RL が施される。9・10は縄文を地文とし、その上に篋描沈線による文様を施した土器である。9は太い3本の沈線を横位に施した頸部破片で、胎土や文様の特徴から3と同一個体の可能性がある。縄文は9がLR、10がRLである。

11は高坏形土器、あるいは鉢形土器の口縁部破片で、口唇には小さな突起が付けられている。器面には内外面とも丁寧なヘラミガキが施されている。

12は外面に粗いハケメが施された土器で、底部付近の破片と思われるが器種は不明である。

以上の土器のうち、1は赤井戸式土器の範疇で把えてさしつかえなからう。2は無文ではあるが、形態的な特徴から樽式土器の可能性が強い。^{註6}3・9は中期後半の竜見町式の範疇で把えられるものだろう。4～8は縄文のみの施文であるため、時期の限定は困難であるが、5・7は無文帯のある事から中期後半～後期前半の可能性はある。

5 T 3号竪穴状遺構 (第104図)

2号竪穴状遺構の南に位置する。東壁と南壁・北壁の一部が確認されたが、西壁は検出されていない。確認された壁はかなり凹凸が激しく、立ち上がりの傾斜も一様でない。壁高は15～20cmである。床面はやや軟弱であるが平坦面となっており、全体に若干南傾斜している。

覆 土

軽石を多量に含む黒褐色土で、僅かにローム粒と褐色土ブロックを含む。

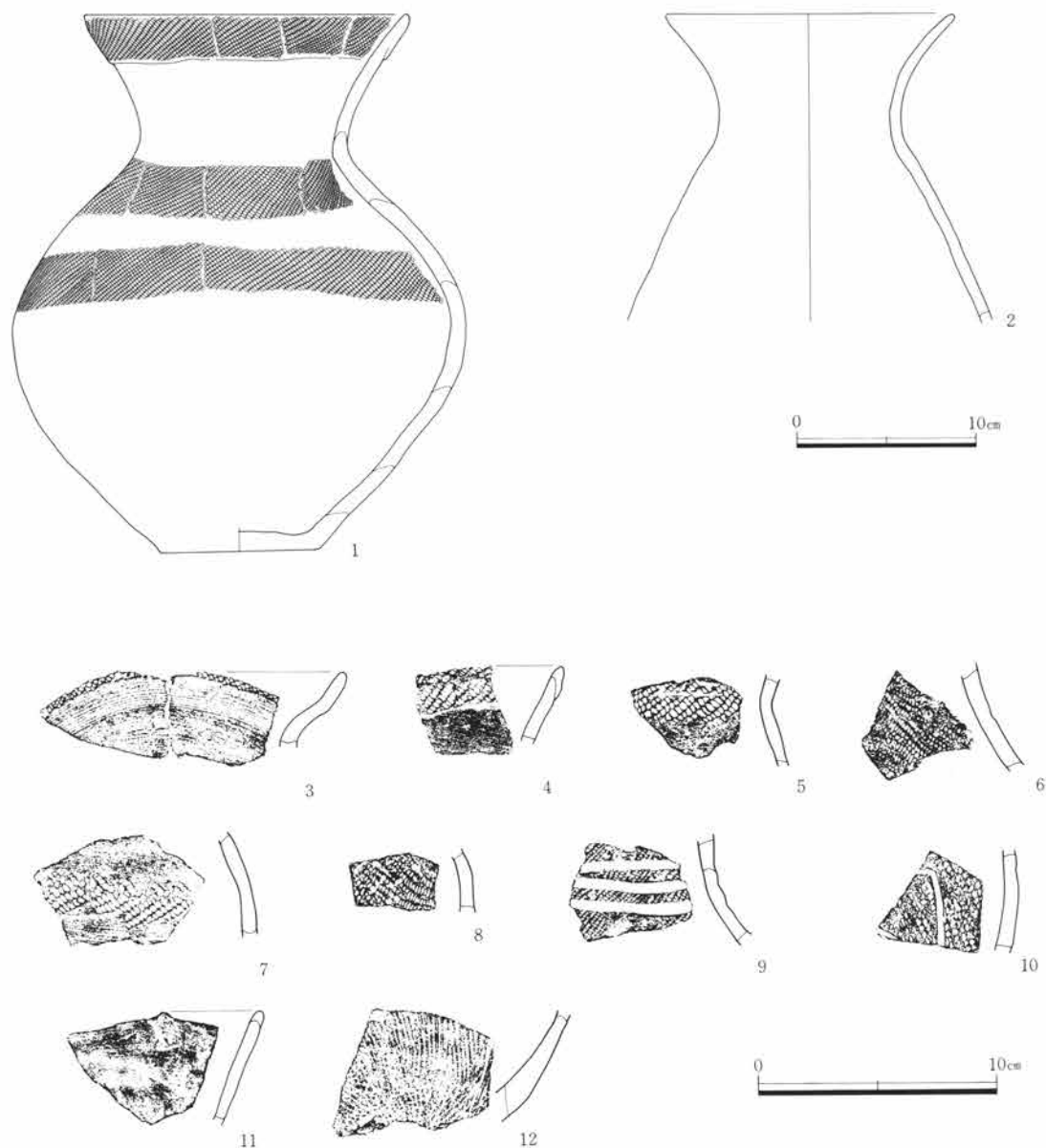
遺物出土状態

南と北の壁際に壺形土器・甕形土器6個体が床直で出土している。また、中央部分で10～30cm



第104図 5 T 2号・3号竖穴状遺構

III 前原遺跡の調査内容



第105図 5 T 2号竪穴状遺構出土遺物

ほどの円礫3個が出土している。

出土遺物 (第106図)

1は壺形土器で、頸部以上を欠損する。胴部は長胴で中央部分に最大径をもつ算盤玉状を呈し、底部は若干突出ぎみの安定した平底をなす。文様は、肩部に沈線で区画された縄文帯を2段めぐらせている。縄文はLRで、沈線は縄文施文後に、先端の丸い篋状具を用いて反時計回りに施さ

れている。調整は、胴部中位以上が横方向、下半が縦方向の粗いヘラミガキが施されている。頸部の欠損部分は磨耗しており、欠損後に再利用した可能性がある。また、欠損部直下に焼成後の穿孔が1ヶ所あけられており、補修孔あるいは蓋留めかと思われる。胎土には黒雲母・石英等の砂粒を多量に含む。焼成は良好で堅緻であり、色調は灰褐色～明灰褐色である。なお、胴部にはたすき状に交差する籠目の痕跡が認められる。

2は中型の壺形土器で、肩部以上を欠損する。胴部は球形状を呈し、中位に最大径をもつ。残存部に文様はなく、全体に丁寧なヘラミガキで調整が施されている。底部は安定性のある平底で、底面には木葉痕が残る。

3は壺形土器の口縁部破片で、直線状に弱く開く形状を呈する。口唇部上面と外面、及び頸部から肩部にかけて縄文LRを施す。無文部は丁寧なヘラミガキを施し、光沢を有する。胎土は小砂粒を多く含み、色調は内外面とも黒色を呈する。

4は細頸の壺形土器で、やや下膨れの「無花果」形を呈する。肩部から胴部中位まで無節の縄文Rを施している。頸部は無文でヘラミガキ、胴部下位はヘラケズリを施している。胎土は砂粒を含むが精良な土を用いており、色調は煤が付着したため黒色を呈する。

5は広口壺形土器で底部を欠く。口縁部は折り返し口縁で、成形はやや丁寧に欠ける。胴部は中央部に最大径をもつ球形状を呈すが、張りは弱い。口縁部と胴部を文様帯とし、節の細かい縄文LRを施す。口唇部にも同一の縄文を施している。なお無文部分及び内面は、丁寧なヘラミガキとナデが施こされる。胎土は小砂粒を含むもので、焼成は良好である。色調は淡黄褐色を呈する。下半の一部が赤変し、胴部の一ヶ所に煤が付着している。

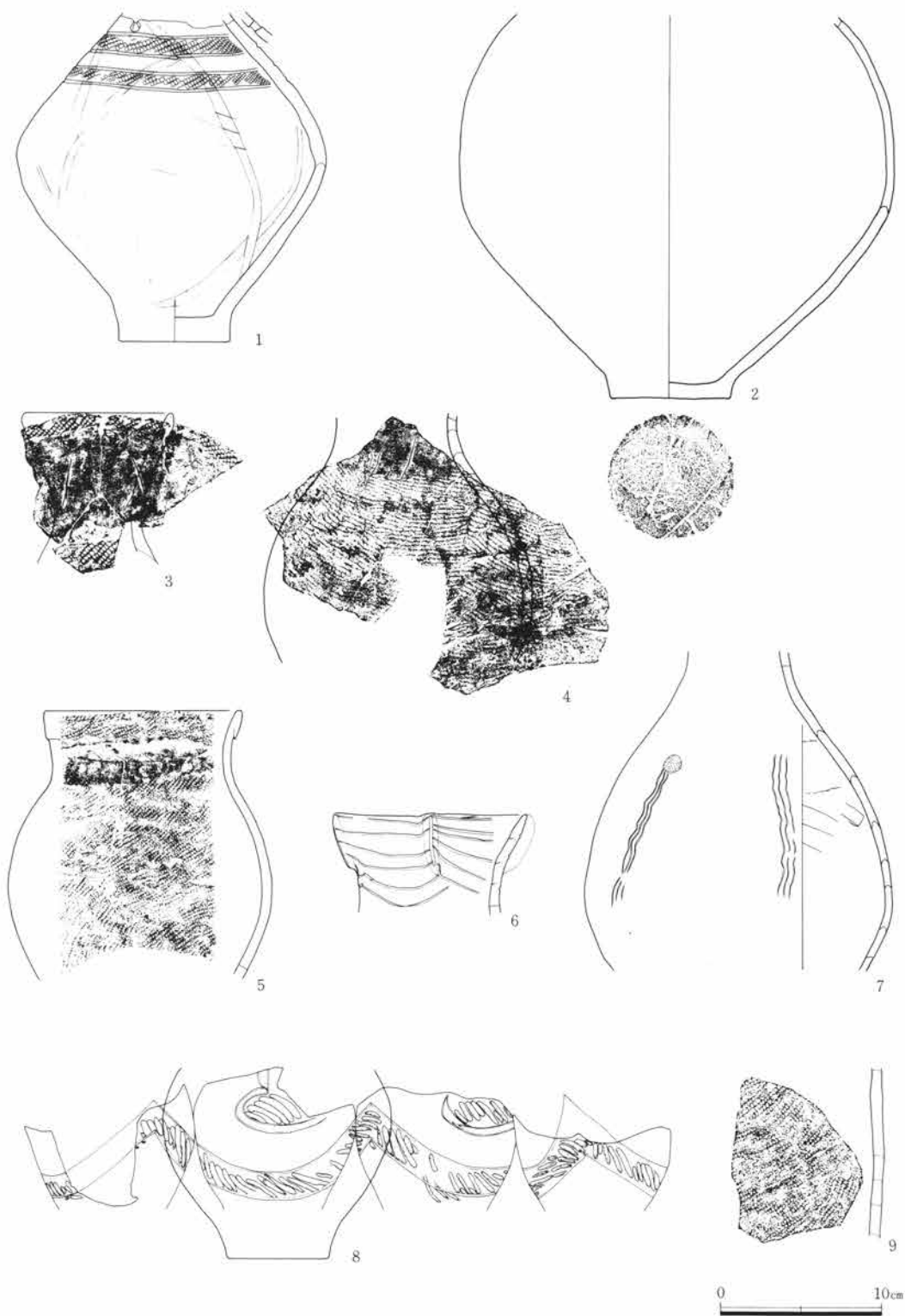
6は壺形土器の口縁部で頸部以下を欠く。いわゆる袋状口縁の形状を呈しており、6ヶ所に粘土紐を縦位に貼付し、その間に細い沈線による連弧文を描出する。沈線は篋状具の先端を用いて施文したと思われる。

7は長頸の壺形土器で頸部以上と胴下半部を欠く。頸部は比較的強くしまり、なだらかな肩部から下膨れの胴部へ続く。文様は肩部に刺突を施した円形浮文を貼付し、その直下に3本単位の間隔の広い櫛状具による波状文を垂下させる。おそらく5～6ヶ所に等間隔で施こしたものとと思われる。調整は外面にナデと粗いヘラミガキ、内面にナデを施こす。胎土には黒色鉱物を主とした細砂粒を含む。焼成はややあまく軟質である。色調は全体に明黄褐色を呈する。

8は細頸の壺形土器と思われるもので、肩部以上を欠く。最大径は胴中位にあり、球形を呈する。底部は突出し、安定した大きめの平底をなしている。文様は沈線で区画された縄文帯で構成される。肩部には下端が楕円状の垂下文が施され、胴部にはそれらを区画するように連弧文が施される。区画する沈線は垂下文では2本、連弧文では1本であり、区画内は無節の縄文Rで充填される。無文部の調整は、胴上半が横方向、下半が縦方向のヘラミガキである。胎土には細砂粒を含む。焼成はややあまく軟弱で、色調は黄褐色を呈す。

9は胴部破片と思われるが、器種は不明である。全体にLR縄文を施す。胎土は砂粒の多いや

III 前原遺跡の調査内容



第106図 5 T 3号竪穴状遺構出土遺物

や粗い土を用い、色調は淡黄褐色を呈する。

他の遺構で見られたのと同様に、ここでもそれぞれ系統の異なる土器が共伴しているのが特徴である。1・3は南関東地方の宮ノ台式に近似し、又6は南東北地方の中期後半の土器と同様の特徴をもつ。4・5は縄文のみを施す例で、その形状や文様構成から東関東地方の長岡式土器との関連が注目されるが、その系統については今後の検討を要する。また、8の文様も他にあまり例を見ないが、野沢II式土器に見られる渦巻文様の影響を受けている可能性がある。7は貼付文と垂下波状文だけの簡素な文様構成であるが、5 T 1号住居例と同様に中期後半に位置付けたい。

(3) 遺構外出土遺物 (第107図・第108図)

第107図1は、長頸の壺形土器で、口縁部付近を欠損する。胴部は長胴の「棗」形を呈する。肩部上位及び胴部中位に沈線で横帯を描き、その中に縄文 LR を充填する。縄文は肩部文様が上下2段、胴部文様が3段に施される。無文部分は縦方向のヘラミガキを施している。なお胴下半部に焼成時のものと思われる黒斑が1ヶ所認められる。胎土には大粒の砂粒を含み、焼成はややあまく軟質である。また、底部には1葉の木葉痕が残る。

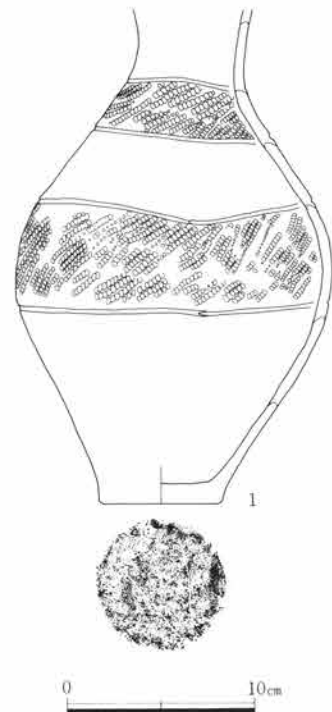
第108図2は無文の鉢形土器で、完形品である。体部は直斜上に開き、突出ぎみの安定した底部をもつ。体部全体にヘラナデによる調整を施している。胎土には砂粒を多量に含む。焼成はややあまく軟質で、色調は淡橙色を呈す。

3・4は脚部で、器種は不明である。2は丸底状の底部にわずかに開く脚を付けたもので、全面に縄文 LR が施され、胴部中位に2個1対の小孔が穿たれている。3は平底状の底部に開きぎみの脚を付けた大型なもので、4ヶ所に大きな楕円状の孔があげられている。

5・6は壺形土器の底部で、いずれも木葉痕を残す。4は底面の側縁に粘土帯を貼りつけている。

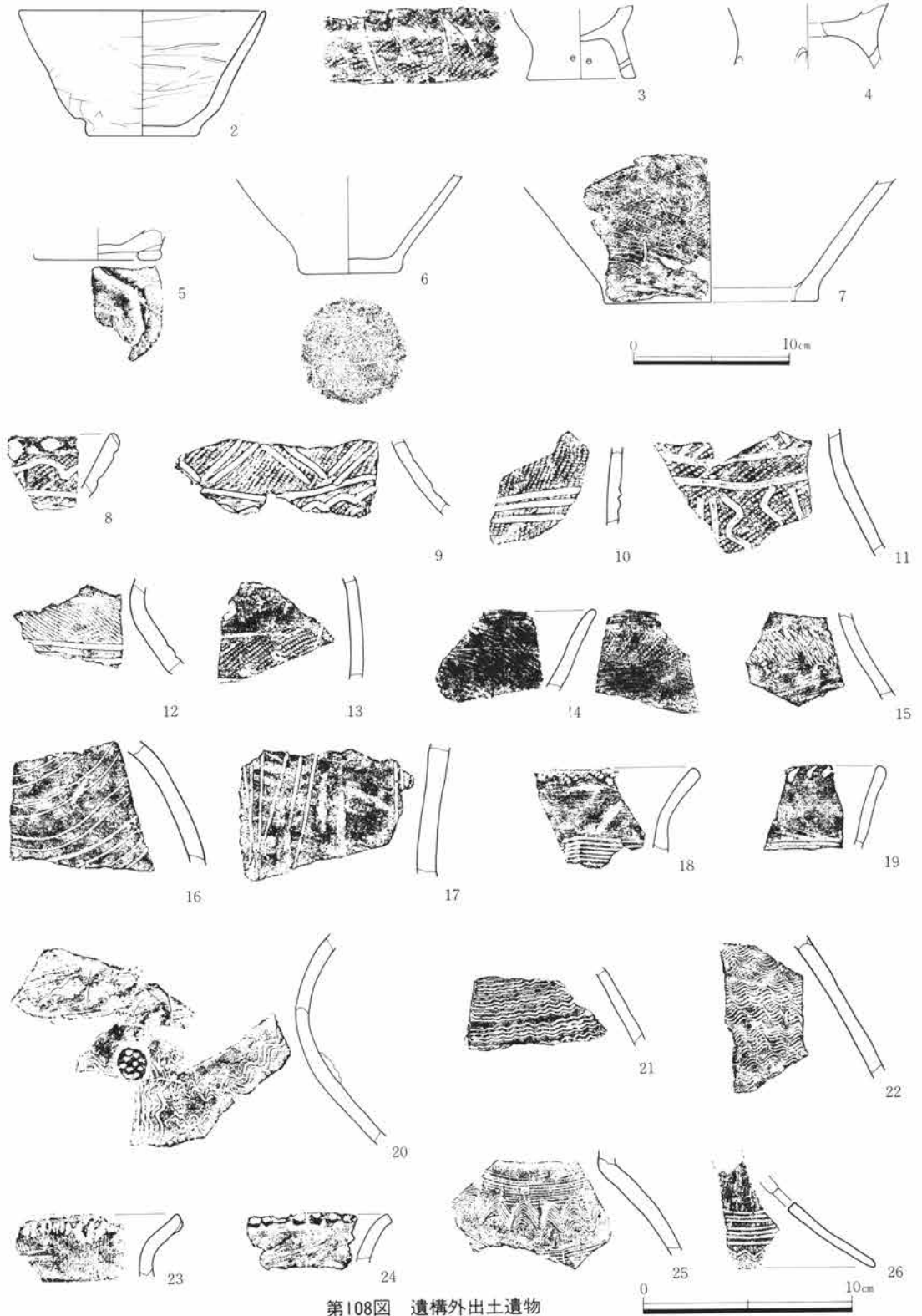
7は壺あるいは甕形土器の胴下半部破片である。附加条2種 LR+L、RL+Rを用いて羽状縄文を施文する。

8~12は縄文を地文とし沈線で文様を描く土器で、壺形土器の破片と思われる。8~10は同一個体と思われる。8は口縁部破片で、やや厚めの口唇部に篋状具による刻目が施される。文様はLRの縄文を地文とし、その上から幅3mm程度の先端の丸い工具を用いて連弧文と直線文を横位に施す。連弧文は1本を単位としているが、直線文は2本以上と思われる。9は肩部破片で8と同様の縄文地に、同じ工具を用いて上から鋸歯文、直線文、連弧文の順に沈線文を



第107図 遺構外出土遺物 (1)

III 前原遺跡の調査内容



第108図 遺構外出土遺物

施す。鋸歯文は2本単位で断続的に、直線文と連弧文はほぼ連続して施している。10は頸部破片と思われる。8・9と同様の縄文地と沈線の組合せで、横位に3本単位の直線文を施す。なお8～10の内面には細い篋状工具によるヘラケズリを横方向に施している。11は頸部破片で、LRの縄文地に幅3mm程の先端の平坦な工具を用いて上から鋸歯文、直線文を横位に描き、その下に2本単位の直線とその両側に1本ずつの波状文を組合せた文様を垂下させる。なお鋸歯文と直線文は2本を単位としている。内面はヘラミガキとナデを併用して器面を平滑に仕上げている。12は頸部破片と思われ、節の細かいRLの単軸絡条体を施文して縄文地とし、その上に2本単位の直線文を横位に施している。また、口縁内面にも地文と同じ縄文を縦位に施文している。

13は壺形土器の肩部と思われ、細い沈線区画の中を縄文LRで充填している。無文部分はヘラミガキを施した痕跡が残る。

14は口縁部の破片で、器形は不明である。外面には無節Lの縄文を縦位に施文、内面には結節を伴う縄文LRを横位に施文している。内面は施文前にハケメ整形を行ない、外面は施文後ナデを行なっている。

15は壺形土器の肩部破片で、無節の縄文Rが帯状に施文される。また、内面はヘラケズリ整形がなされている。

16・17は沈線文を施した土器である。16は2本同時施文による同心円状の文様を描いたもので、沈線は2本の間隔が6mm程で、先端の細く鋭い工具を用いている。系統としては5T1号住居例と同じだが、時期的にはそれよりやや下るものと考えられる。胎土には砂粒を多量に含む粗い土を用い、器面は荒れている。17は1本単位の直線文を垂下させる土器である。

18～22は櫛描文を施した土器である。18・19は甕形土器の口縁部で、18は口唇部に篋による刻目、19は縄文を施し、いずれも頸部に7～8本単位の櫛描簾状文を施している。20は壺形土器の頸部破片で、円形貼付文と櫛描波状文を施している。5T1号住居例と同類と考えられる。21・22は横位の細かな波状文が施された土器である。

23・24は甕形土器の口縁部で、全体をハケメ整形し、口唇部に前者は刻目、後者は押捺を加えている。

25は壺形土器の肩部破片で8本単位の櫛状具により直線文、波状文、直線文の順に施している。施文は時計回りで継ぎ足しを行なっている。

26は高坏形土器の脚部破片で、円孔を1ヶ所穿っている。やや太い櫛状具により直線文と鋸歯文を描いている。内面には整ったハケメが施される。

1は南関東地方の宮ノ台式土器に相当するものと思われる。8～11は文様の特徴から、おそらく中部山岳地方の栗林式系統の土器であろう。16・20は5T1号住居出土土器に類例がある。22は樽式土器である。7は十王台式系の土器と思われる。25・26は弥生時代後期～古墳時代初頭期の東海系土器と考えられる。

III 前原遺跡の調査内容

- 註1 本遺跡出土土器の中には十王台式そのものと思われるものも数点見られるが、近年栃木県内での調査が進み、従来二軒屋式と呼称されていたものの中に十王台式土器と非常に類似した文様をもつ例のあることが指摘されるようになった。したがって破片資料での型式認定は困難なため、それらを包括して「十王台式系」の呼称を便宜的に用いる。
- 註2 桐原 健「弥生式遺物」『海戸・安源寺』長野県考古学会研究報告書2 長野県考古学会 1967
藤沢宗平「長野県東筑摩郡寿村百瀬弥生式遺跡調査概報」『信濃』第三卷第八号 信濃郷土研究会 1951
海戸遺跡報文で第2類とされたものや百瀬遺跡出土土器に類例が見られるが、文様構成は本例とは異なるようである。
- 註3 馬目順一「入門淳座・弥生土器—南東北4—」『月刊考古学ジャーナル』No156 1978
- 註4 赤井戸式土器は、本地域において後期に位置付けられるのが一般的であるが、その祖型については資料に乏しく、現状では不明な部分が多い。
- 註5 杉原荘介『栃木県出流原における弥生時代の再葬墓群』明治大学文学部研究報告 考古学第八冊 1981
栃木県塩原町宇都野遺跡、同県佐野市出流原遺跡等に類例がある。
- 註6 綿貫鋭次郎『竹沼遺跡』昭和52年度発掘調査概報 群馬県藤岡市教育委員会 1978
竹沼遺跡 EH-20号住居址から同類の土器が出土しており、相伴土器は古墳時代初頭の様相を呈している。

3 古墳時代の遺構と遺物

遺構は住居10軒、古墳1基が検出された。住居は全て古墳時代前期に属し、内訳はA区1軒、B区2軒、C区6軒、4トレンチ1軒であり、神沢川右岸に集中している。古墳はA区の神沢川に向かって張り出した部分で検出された。

遺構外からは、D区南東部およびC区13-Kグリッドから遺物が一括出土している。D区一括出土遺物は鬼高期の土器を中心とし、これに多量の手捏形土器を伴っている。本地点は荒砥川と神沢川の合流点を一望できる場所であり、祭祀跡としての性格が予測される。

(1) 住 居

A区3号住居（第110図）

A区南端1～2-A～Bグリッドに位置する。住居の主軸方向はN-60°-Wを示す。住居南西コーナーは、圃場整備事業の測量基本杭があり、更に東南部分は削へいされており調査し得なかった。プランは一辺7.0×6.3mと大型で隅丸長方形を呈し、推定の床面積は41㎡である。壁はほぼ垂直に立上がり床からの壁高は10～15cmである。柱穴は3個検出され、深さは約20cm内外である。東南コーナー付近に貯蔵穴状のピットが確認された。規模は1.1×0.9mで深さは55cmを測る。床面はローム面を使用しており、平坦で至って堅緻である。住居中央部分に河原石を一石使用した炉を検出した。床面をわずかに穿ったもので焼土の範囲は70×35cmの長方形を呈す。

覆 土

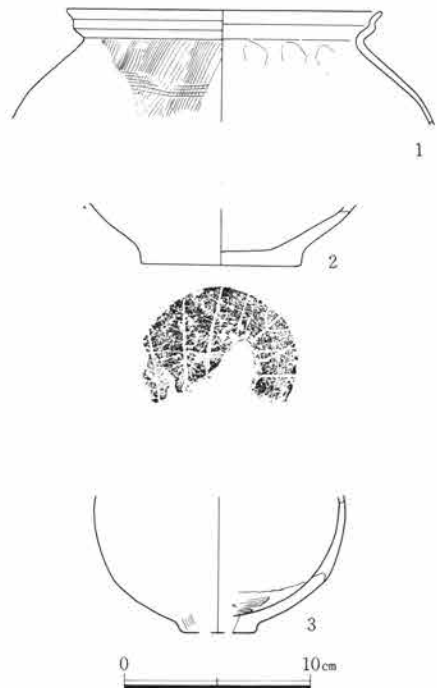
- ①黄褐色土：軽石を多量に混入する砂質土。
- ②黒褐色土：黒色土と砂質褐色土との混土層で軽石（2～3mm）を多量に混入する。炭化粒もわずかに見受けられる。
- ③黄褐色土：黒褐色土と砂質ロームを斑状に混入し軽石も若干含有する。
- ④黄褐色土：軽石をわずかに含有する砂質土。

遺物出土状態

住居南半部の床直及び覆土中より甕型土器小片等が数点出土したのみである。

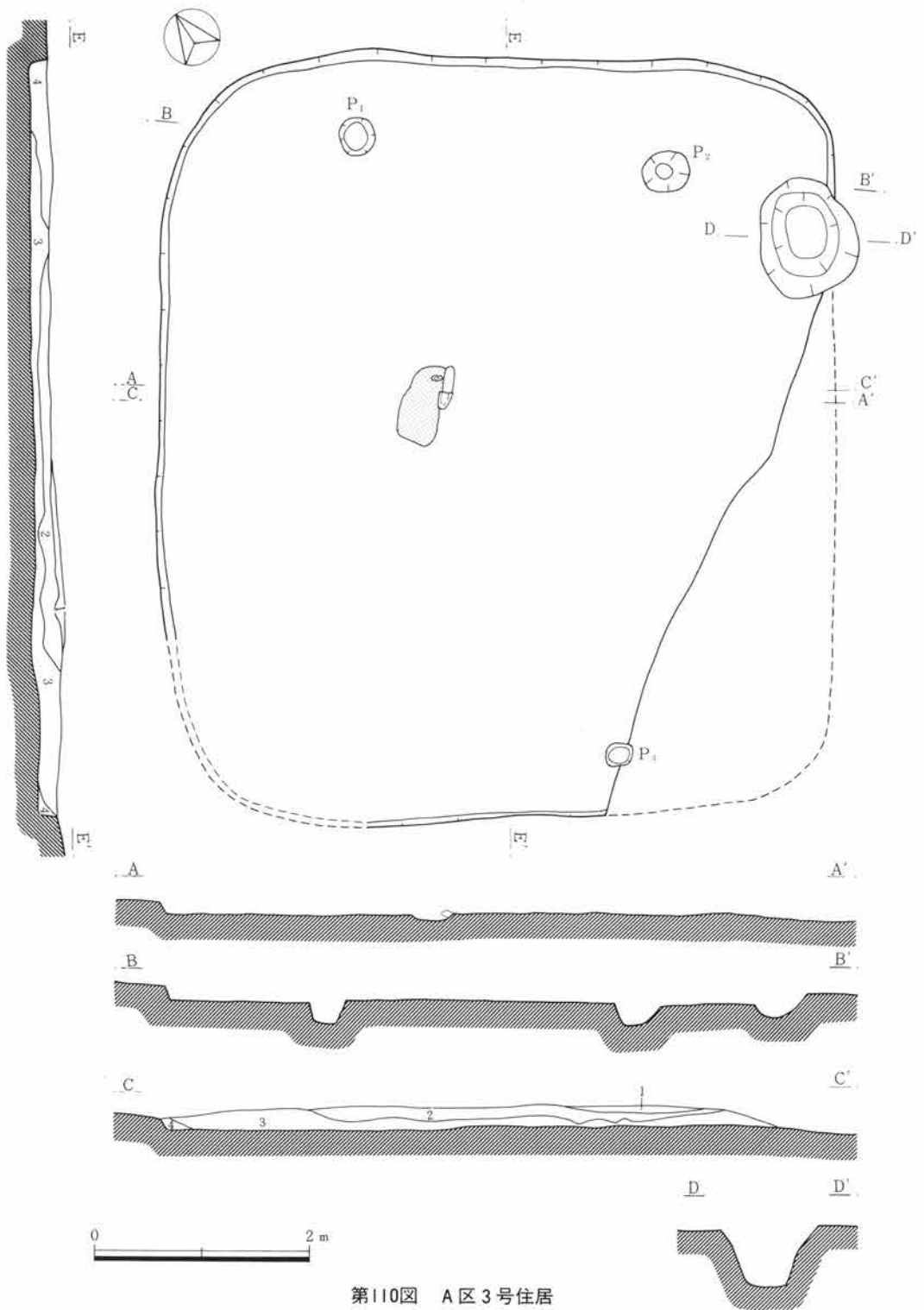
出土遺物（第109図、1～3）

1はS字状口縁部付甕形土器の口縁部～肩部破片である。口縁部は弱く「S」字状に屈曲して外斜方向に開く。口唇部はやや丸味を持つが、器壁が薄く



第109図 A区3号住居出土遺物

III 前原遺跡の調査内容



第110図 A区3号住居

内面の段や外面の稜が明瞭であるため比較的シャープな感じを受ける。肩は大きく張るもので、胴部はおそらく「無花果」形を呈すると思われる。外面の頸部から肩部にかけて左下斜方向の鋭いハケメを施し、その上に同工具による横方向のハケメを廻らす。内面はなめし皮様の表面の極めてなめらかな調整具を用いてナデが施されたと思われる。なお頸部直下の内面には指頭圧痕が明瞭に残る。胎土は小砂粒を多く含む粘土を用いており、焼成は良好で堅緻な仕上がりを示す。色調は明赤褐色を呈する。

2・3は壺形土器の底部破片で、3は2に比べ小型のものである。いずれも底部がやや突出し球形に近い胴部をもつと思われる。調整は外面をハケメ整形した後、丁寧な縦方向のヘラミガキを施す。内面は底部付近にハケメを残し、それ以外をナデで仕上げている。なお2の底面には1葉の木葉痕が残る。胎土はいずれも若干の砂粒を含む比較的精良な粘土を用いており、焼成は良好である。色調はいずれも明赤褐色を呈する。

1～3はいずれも古墳時代初頭のもので、特に1はその形態的特徴から、同じS字状口縁台付甕の中でも中葉段階に位置づけられよう。

B区1号住居（第111図）

7～8グリッドに位置する。西側部分で2号住居と重複しており、2号住居を切って構築されている。主軸方向N-8°-Eを示し、北壁に対し南壁は若干長い。従ってプランはやや隅丸の梯形状を呈す。一辺5.4×4.4mで床面積は約22㎡である。床面からの壁高は約10cmであり、北壁はなだらかな立上がりであるが南壁は直に立上がる。ローム面の掘り込みが浅く全体的に壁の状態は悪い。

ピットは9個検出されたが、浅いものが殆んどで本住居に結びつくか否かは判明しない。床面は起伏があり西南コーナーへ向って傾斜している。炉は住居中央部分に確認され、径70cmの円形状に床面を若干穿って構築されている。

覆 土

- ①暗褐色土：軽石を混入するやや軟弱である。
- ②黄褐色土：軽石を多量に混入し砂質ロームを斑状に含む。
- ③暗黄褐色土：ロームと褐色土との混土層。
- ④黒色土：わずかに軽石を混入するソフトな層。
- ⑤暗黄褐色土：③層と同質層。

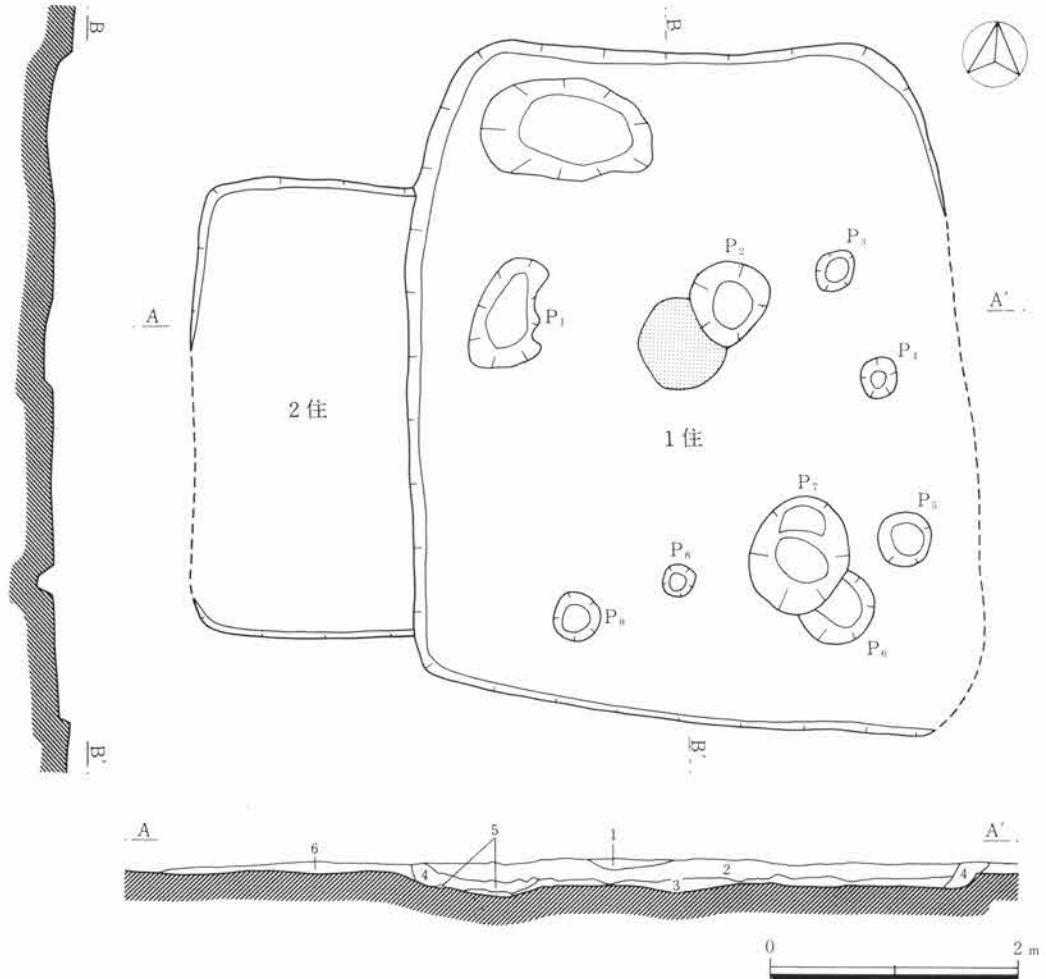
遺物出土状態（図版23）

遺物は北壁付近に集中しており南半部では全く出土していない。集中出土している遺物は高坏、器台、小型甕形土器、壺形土器等で一括床直の状態出土している。

出土遺物（第112図）

1は単口縁の壺形土器で、形状は口頸部が短かく、胴部が球形を呈し底部がやや突出する特徴

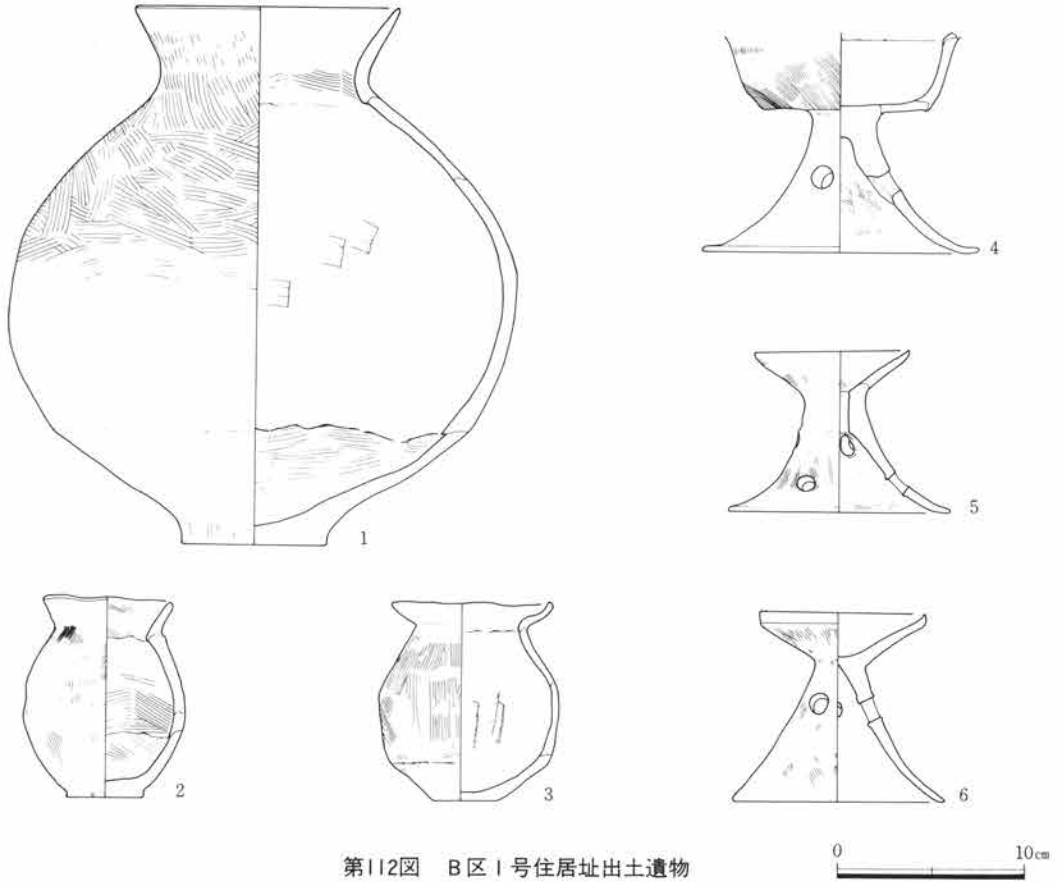
III 前原遺跡の調査内容



第III図 B区1・2号住居

を示す。胴部下半において成形時の粘土帯の継ぎ目が明瞭に残っており、この部分が外面で弱い稜をなしている。調整は、外面上半部と内面の頸部付近及び胴下半部に粗いハケメが施される。又胴部内面の中位から上半にかけては、木口面の緻密な板状の工具を用いて丁寧なナデが施されたと思われる。なお胴下半部内面におけるハケメは、粘土帯継ぎ目を境にして切れる事から、成形時の胴部中位以上を接合する以前に施されたものと思われる。なお、調整は口縁内外面においてはナデ、胴部外面には縦方向のヘラミガキが施される。色調は明褐色を呈し、胎土には小砂粒を少量含んでいる。

2・3は小型壺形土器ともいべき器形で、いずれも器高が10cm前後の胴長の形状を呈する。成形は粘土帯積上げで行なわれるが、形状はやや歪んでいる。口縁は2が直線状、3は受け口状を呈する。調整は粗いハケメを施した後ナデを行う。なお3については、胴部内面に1と同様の工具によるナデが施される。色調は暗褐色を呈し、胎土には小砂粒を少量含んでいる。



第112図 B区I号住居址出土遺物

4は高環形土器で、坏部上半を欠く。坏部は、口縁部が強く外反し、下半部が強い段をもつ。脚部形状は円錐状で、やや外反している。調整は全体にハケメを施し、その後坏部内面と脚部内面はナデ、脚部外面においては放射状のヘラミガキを施している。また、坏部外面については、若干ナデ様の調整が見られるが、ほとんどハケメを残したままになっている。円孔は脚部中位に三ヶ所穿たれており、この部分の器面調整はなされていない。色調は灰褐色を呈し、胎土には砂粒をほとんど含まず、焼成は非常に堅緻なものとなっている。関東地方のこの時期における一般的な高環形土器とは異なり、むしろ畿内的な色彩の強いものとして注目される。

5・6は小型器台形土器である。5はほぼ直線状に開く器受部と、外反する円錐形の脚部をもつもので、器受部と脚部を結ぶ穿孔がなされている。また、脚部の円孔は2段にそれぞれ三ヶ所づつ穿たれる。調整は、全体にハケメを施した後、器受部口縁と脚裾部をヨコナデ、外面全体を粗いヘラミガキが施される。色調は明褐色で、胎土には砂粒をほとんど含まず、焼成はやや堅緻である。6は、器受部口唇がつまみ上げられている。器受部と脚部を結ぶ穿孔がなされない点で5と異なっている。脚部の円孔は三ヶ所で、やや上位に穿たれる。調整は5と同様に、ハケメを施した後、器受部と脚部内面及び裾部をナデ、脚部外面にヘラミガキを施す。色調、胎土、焼成

III 前原遺跡の調査内容

は5とほとんど同様である。

1～6はいずれも、古墳時代初頭のものと考えられる。

B区2号住居 (第111図)

東側を1号住居に切られており、全容はつかみ得ない。西壁は3.6mを測り住居の主軸方向はN-2°-Wである。ロームの掘り込みが浅いため、殆んど壁は残っていない。柱穴・炉等の施設も確認できなかった。遺物は覆土中より小片な数点出土したのみである。

覆 土

⑥暗褐色土：黒色土ブロックを含み、軽石を僅かに含む。

C区1号住居 (第113図)

4～5-B～Cグリッドに位置する。主軸方向はN-6°-Wを示し、プランは一辺6.2×6.8mを測りほぼ方形を呈す。床面積は約39㎡である。壁は直に立上がり、床面からの壁高は55～60cmと深い。柱穴は4個検出され、その規模は径35～45cmで深さは約30～40cmである。床面はローム面を使用しており、わずかに起伏があるものの殆んど平坦で、堅緻である。中央付近に河原石を一石設けた炉を検出した。炉内は火による焼成を余り受けておらず、炉面も殆んど穿っていない。東壁と南壁付近は住居中央に向かって炭化材が検出された。炭化材は長いものは60cm前後のものもある。

覆 土

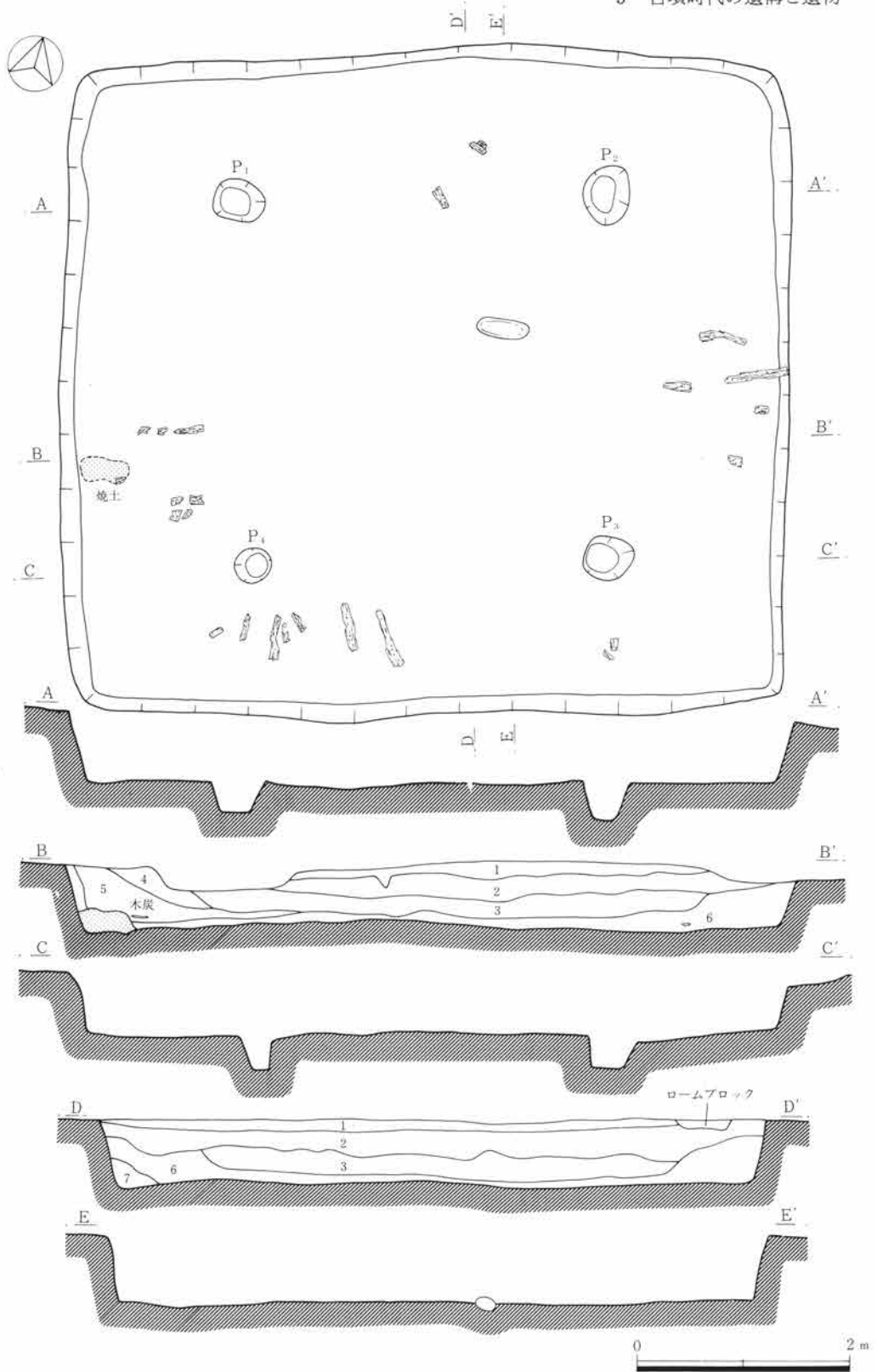
- ①黒 色 土：黒色土中に多量の浅間B軽石を混入する。
- ②黒褐色土：砂質ロームが斑状に混入し、軽石・炭化物・小砂礫を多量に含有する。
- ③黒 色 土：多量の軽石を混入し砂質ローム・小砂礫・炭化物を若干含む。
- ④黒褐色土：②層に近似するがやや色調が明るい。
- ⑤黒褐色土：②層に近似する。
- ⑥黄褐色土：砂質ロームを斑状に混入し、小砂礫と炭化物を多量に含有する。
- ⑦黒 色 土：小砂礫・炭化物・軽石を混入する。

遺物出土状態

出土遺物は少なく、壺形土器の口縁部や器台などが床面から若干浮いた状態で出土している。

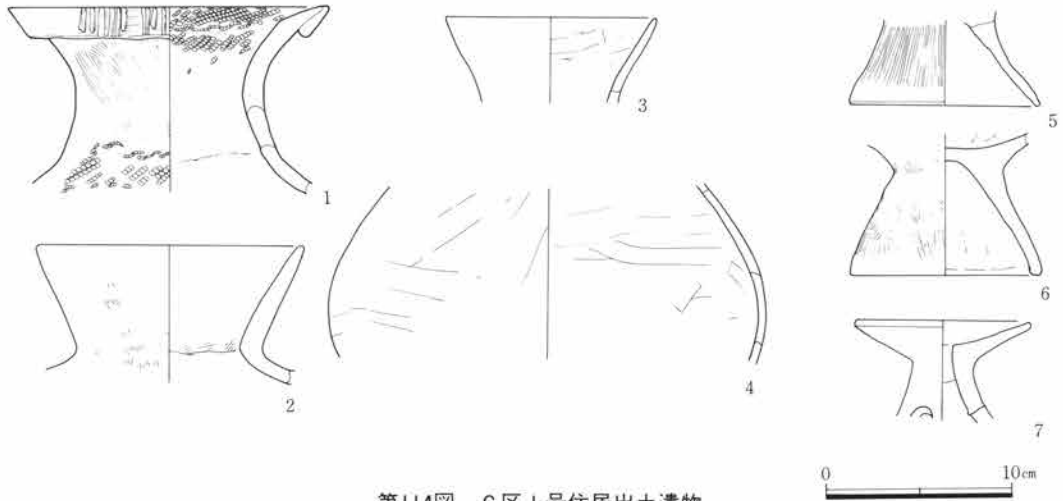
出土遺物 (第114図)

1は複合口縁壺形土器の口縁部破片である。口縁部は一条の粘土帯を貼り付けて成形する折り返し口縁である。頸部は円弧を描いて屈曲し、なだらかな肩部へと続く。調整は、全体にハケメを施した後、部分的にナデを行なっている。文様は、複合口縁部に縦方向の浅い沈線を施し、また口縁部内面と肩部に、横回転のRL斜縄文と、一条のS字状結節縄文を交互に施している。色調は明褐色で、胎土には小砂粒を多く含み、焼成は良好で堅緻である。



第113図 C区1号住居

III 前原遺跡の調査内容



第114図 C区1号住居出土遺物

2・3はいずれも単口縁壺形土器の口縁部破片である。2は口縁部が直線状に開き、頸部が強く「く」の字に屈曲する形状を呈する。調整はハケメを施した後、口唇部をナデ、更に内外面とも縦方向の丁寧なヘラミガキを施している。色調は明褐色で、胎土は小砂粒を多く含む。焼成はやや軟弱である。3は2よりも器厚が薄く、成形もやや粗いつくりである。口縁部は緩い曲線を描いて内湾気味に開く。調整は粗いヘラナデが行なわれており、ヘラケズリ様の痕跡を残す。色調は暗褐色を呈し、胎土には砂粒を多く含む。焼成は硬質であるが、ややむらが見られる。

4は壺形土器の肩部破片である。やや下膨らみの形状を呈すると思われる。調整は、内外面にヘラケズリした後、外面に粗い縦方向のヘラミガキを施す。色調は淡褐色を呈し、焼成は硬質である。胎土には大粒の砂粒を多く含む。調整及び色調、胎土等の近似から、3の口縁部と同一個体になる可能性がある。

5・6は台付甕形土器の脚台部である。5は器高が低く、開きの大きい形状を呈す。調整は、外面に縦方向のハケメを施し、内面及び裾部にナデを施している。色調は淡黄色で、焼成はやや軟質である。胎土には大砂粒を含む。6は5に比べ、やや器高が高い。調整は外面にハケメ、内面にナデを施し、後に裾部をナデで仕上げている。色調は暗褐色で、胴下半部外面は赤褐色を呈する。胎土には小砂粒を含む。なお、6については南関東地方の普遍的な台付甕と思われるが、5はその形状の特徴から系統を異する可能性がある。

7は器台形土器で、脚部下半を欠く。器受部は浅い皿状で、口径は9.4cmを測る。口唇部外面は直立する小さな平坦面をなしている。脚部は円錐形を呈すると思われる。また、脚部の円孔は3ヶ所に認められる。器受部と脚部を貫通する円孔は、直径1cmで器受部から穿孔したと思われる。調整は、外面全体に丁寧なヘラミガキを施し、脚部内面と口唇部にはナデを施している。また、脚部内面には縦方向のしぼり目が残る。色調は淡褐色で、焼成は堅緻である。胎土は砂粒を少量含む。なお器受部の中心付近、表面に剝落が認められる。おそらく壺等載せた使用痕と解釈し

てよいだろう。

いずれも古墳時代初頭のものと考えられるが、1は東海地方東部の後期弥生式土器の系統をひく可能性があり、また甕形土器においても、5・6のように本地域のS字状口縁を主体とする石田川式とは別系統の土器が混在する様相を示している。

C区2号住居（第115図）

7～8-B～Cグリッドに位置する。プランは方形を呈し、一辺6.1×6.1mを測る。床面積は約33.6m²で、主軸方向はN-25°-Wを示す。壁はほぼ直に立上がり、床面からの壁高は25～50cmである。柱穴は4個検出され、他に南壁と東南コーナー付近とに2個のピットを確認した。4個の柱穴の規模は径25～35cmで深さは30～55cmを測る。なお、P₃内からは柱材が炭化状態で検出されている。床面はローム面を使用し、起伏はあるが貼床等の施設はなく、全体的にいたって堅緻である。西壁に平行して幅約2mにわたりわずかな高まりがある。住居中央部やや北寄りに細長い河原石を一石設けた炉が確認された。径は45×45cmで中央の深さは約7cmである。炉付近は特に床面の起伏があり、周囲は炉に向ってわずかな傾斜が観察された。また、本住居からは多量の炭化材が出土している（第116図）。炭化材は壁際では床面から20～30cm浮いており、住居中央部に向って傾斜しながら床直上に接する。炭化材の出土状態は住居中央から概ね放射状を呈し、本住居の建築構造を彷彿される。更にわずかであるが茅が炭化状態で出土している。何れに使用されたものであるかは明らかでないが床面に密着しており、その上を炭化材が覆う状態から、床面に関連して使用された可能性が考えられよう。多量の炭化材の出土、また床面が焼土化している状況から、焼失により廃棄された住居と断定してさしつかえないであろう。

覆 土

- ①黒色土：砂質ロームを斑状に混入し、軽石を多量に含み炭化物も若干見受けられる。
- ②黒褐色土：炭化物・小砂礫を若干含み、砂質ロームと多量の軽石を混入する。
- ③黄褐色土：砂質ロームと暗褐色土の混土層で、軽石と小砂礫を少量、炭化物と焼土を多量に含有する。
- ④黄褐色土：③層と同質層であるがやや色調が暗い。炭化物と焼土ブロックを多量に含む。

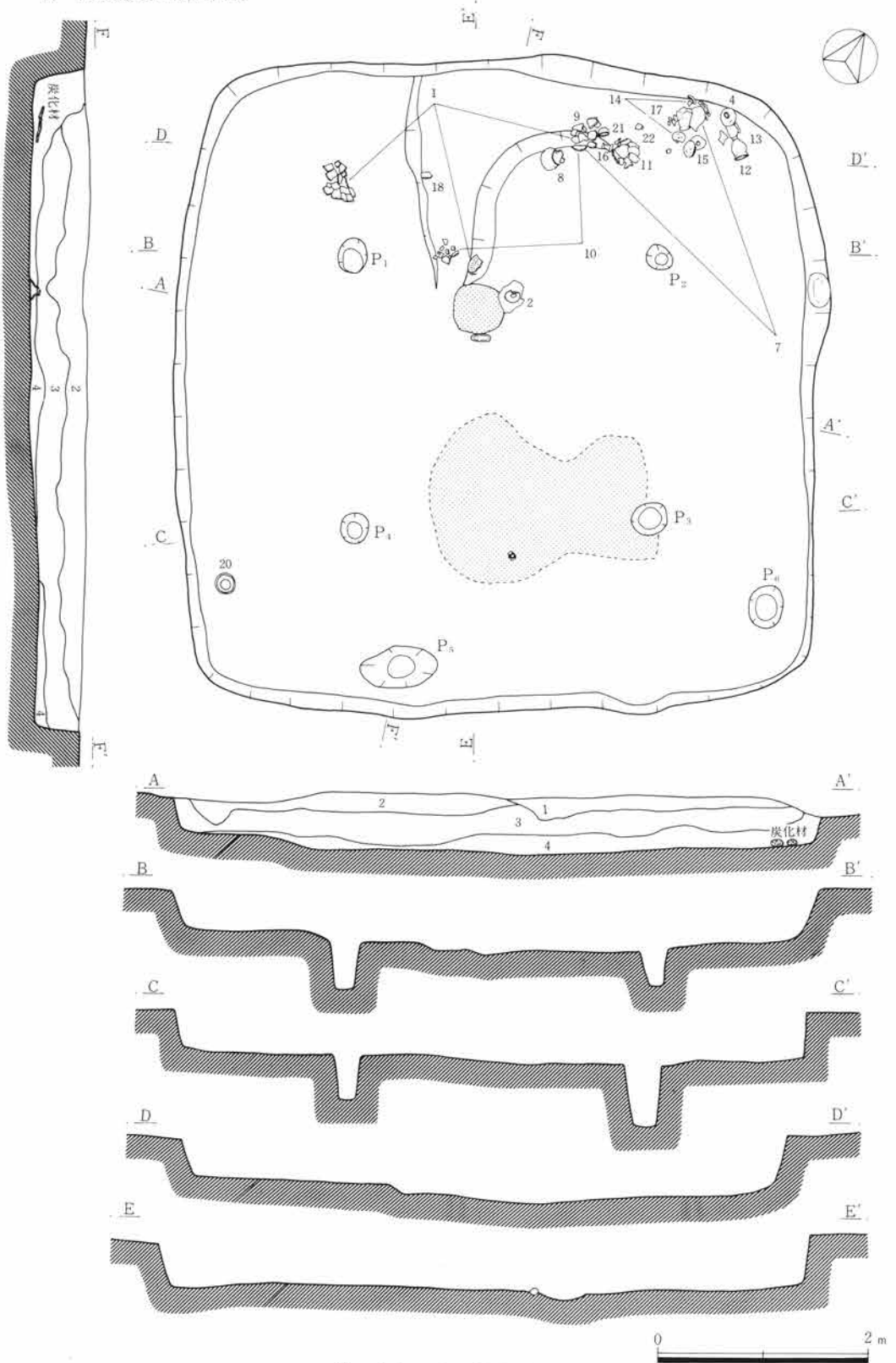
遺物出土状態

遺物は住居北半部に集中している。特に北壁寄りが著しく、台付甕型土器・高坏・壺型土器・器台・小型土器等十数個体が殆んど完形で床直一括出土している。炭化材は大きなもので2m程のものもあり、割った面をもつ等加工されているものが目立っている。

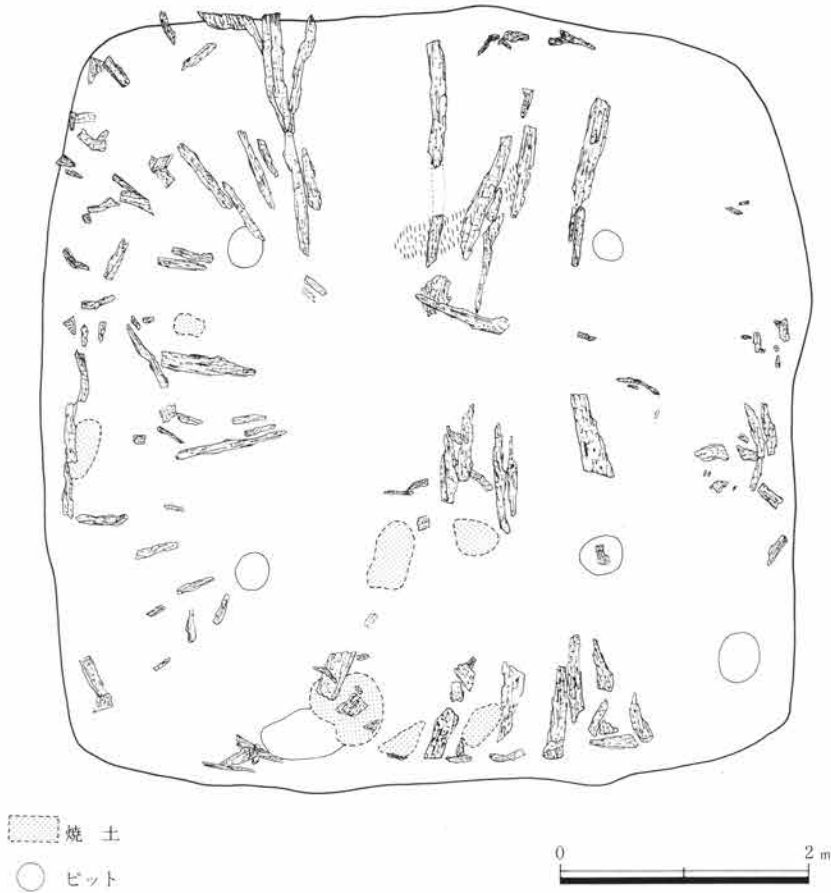
出土遺物（第117図～第119図）

1は壺形土器で、口縁部・肩部・底部の各部破片から図上復元したものである。口縁部は複合口縁をなし、やや内湾しながら立ち上がる。口唇部は、ナデによる小さな平坦面をもつ口縁部と頸部との境は、弱い段をなし、内面では稜をもつ。頸部はほぼ直立し、強く屈曲して張り気味の

III 前原遺跡の調査内容



第115図 C区2号住居



第116図 C区2号住居炭化材出土状態

肩部につづく。口縁部は、いわゆる有段口縁の形状に近似するが、成形技法の特徴から、南関東地方の後期弥生式土器の系統と考えられる。胴部は、球形を呈し、最大径は中位にあると思われる。底部はやや突出気味の平底で、底面には木葉痕が残る。調整は目の粗いハケメを内外面に施し口縁部をナデ、胴部には間隔をあけた横方向の粗いヘラミガキを施す。色調は暗褐色を呈し、焼成は軟質である。胎土には小砂粒を多量に含んでいる。なお、底部から胴部にかけて二次焼成を受けたためと思われる赤色斑文が見られる。

2は単口縁壺形土器の上半部破片である。口縁部は内湾して開き、口唇部は丸味をもつ。頸部は強く「く」の字状に屈曲し、なだらかな肩部へ移行する。調整は、外面と頸部内面にハケメを施し、後に口唇部と胴部内面上位および頸部内外面にナデを施す。また、胴部外面と口縁部内面には斜方向の丁寧なヘラミガキ、胴部内面には横方向のヘラナデを加えて器面を調整している。なお、胴部内面の中位に残るヘラケズリ痕は、ヘラナデ以前の整形段階で施された可能性がある。色調は明褐色を呈し、焼成は非常に堅緻な仕上がりを示す。胎土には砂粒を多く含んでいる。以

III 前原遺跡の調査内容

上の形態上の特徴から、本土器は南関東地方ではなく、東海地方西部の後期弥生式土器の系統を引くか、あるいはその影響を受けたものと想定される。

3・4・5は壺形土器の大型の破片で、口縁部あるいは上半部を欠く。3は突出した大きめの底部をもつもので、最大径は胴部中位にあるらしい。また、胴下半で粘土帯接合痕が残り、外面で弱い稜を呈する。調整は、外面に丁寧なヘラミガキを施し、内面はヘラナデが施される。また胴部外面中位にハケメが残っていることから、胴部上半はヘラミガキが省略あるいは簡略であった可能性もある。底面はヘラケズリによって調整されている。色調は淡褐色で、焼成は良好。胎土には砂粒を若干含んでいる。

4は小型の壺形土器で、球形の胴部をもつ。底部は小さめの平底でやや安定性に欠ける。調整は、外面にハケメを施した後、ナデとヘラミガキを併用して器面を平滑にしている。内面は若干ナデを施すのみで、ほとんど成形時のままである。内面には6～7段の粘土帯の輪積み痕が残される。色調は赤褐色を呈し、焼成は軟質でもろい。胎土には多量の砂粒を含む。

5は、胴下半部に稜をもつ土器で、底部はやや突出した平底を呈す。整形は内外面とも細かく鋭いハケメを施し、外面にはその後横方向のヘラミガキが施される。また、底面には木葉痕と1点の靱圧痕が残る。色調は暗褐色を呈し、焼成は堅緻な仕上がりである。胎土には小砂粒を多量に含む。

6は甕形土器の口縁部破片で、口唇部に刻目を廻らす。頸部は強い曲線で屈曲する。整形は外面にハケメ、内面にナデを施している。色調は暗褐色で、胎土には砂粒を多く含む。

7～9は単口縁の平底甕形土器である。7は胴の張る形状を呈し、頸部は「く」の字状に屈曲する。底部は突出したやや小さめのものである。整形は、内外面ともハケメを施した後、内面をヘラミガキによって整えている。なお底面はヘラケズリによって整形される。色調は明褐色で、胴下半の一部には二次焼成を受けたと思われる赤色斑が見られる。胎土には小砂粒を多く含む。

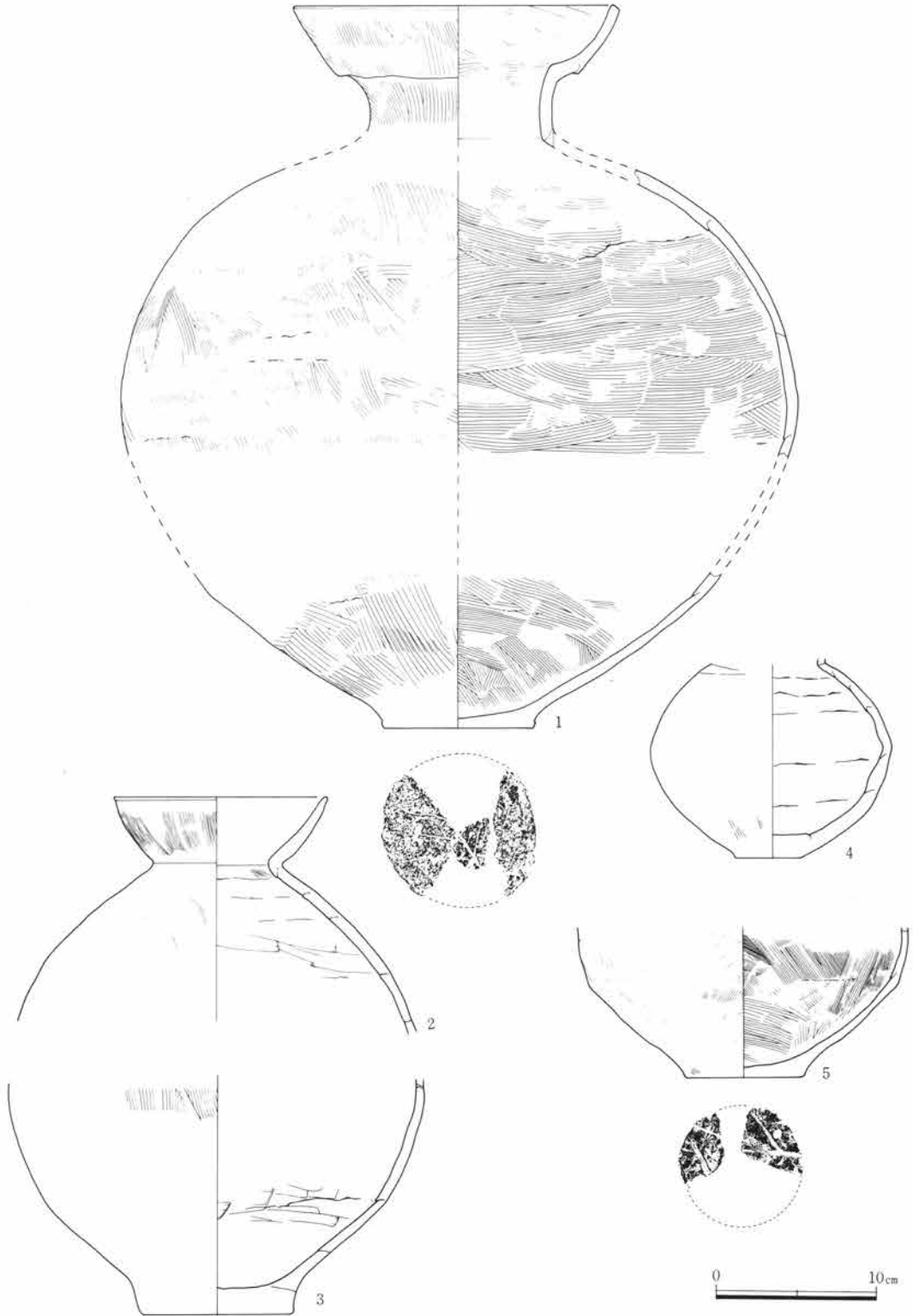
8は「卵」形の胴部にやや突出した底部をもつ。口縁部はやや肥厚して外側に開く。整形は外面及び口縁部内面にハケメを施し、口縁部外面と胴部内面はナデで仕上げる。又底部はヘラケズリで整形を行なう。色調は赤褐色で、胴上半の一部に黒斑が見られる。焼成は不良である。胎土には砂粒を多量に含んでいる。

9は口縁部が長く、頸部の屈曲が比較的弱いものであるが、形態や調整技法は8とほぼ同様である。色調は明褐色で、焼成は軟質である。なお胴部外面の一部に煤の付着が見られる。

10～13は単口縁台付甕形土器で、その法量の比較から大・中・小の3種に分けられる。

10は大型品で脚台部を欠く。口縁部は外反して立ち上がり、頸部は強い曲線を描いて屈曲する。胴部は上位に最大径をもつ「無花果」形を呈する。整形は内外面ともに鋭いハケメを施し、その後、内面には粗いヘラミガキを行なっている。色調は暗褐色～黒色を呈するが、破片接合部を境に変色している。焼成は堅緻であり、胎土には小砂粒を含んでいる。

11は中型の土器である。口縁部は短く、やや外反気味に開く形状を呈する。頸部は「く」の字



第117図 C区2号住居出土遺物 (1)

III 前原遺跡の調査内容

状に屈曲し、球形の胴部に移行する。脚台部は台形状のもので裾部は丸味を帯びる。整形は、内外面ともハケメを施すが、外面は上半部を縦方向に、下半部では横方向に施され、内面は横あるいは斜方向を基調としている。なお、口縁部内外面と胴部内面下半及び脚部内面は指頭によるナデが施される。色調は灰褐色で、焼成は軌質でもろい。胎土には多量の砂粒を含んでいる。

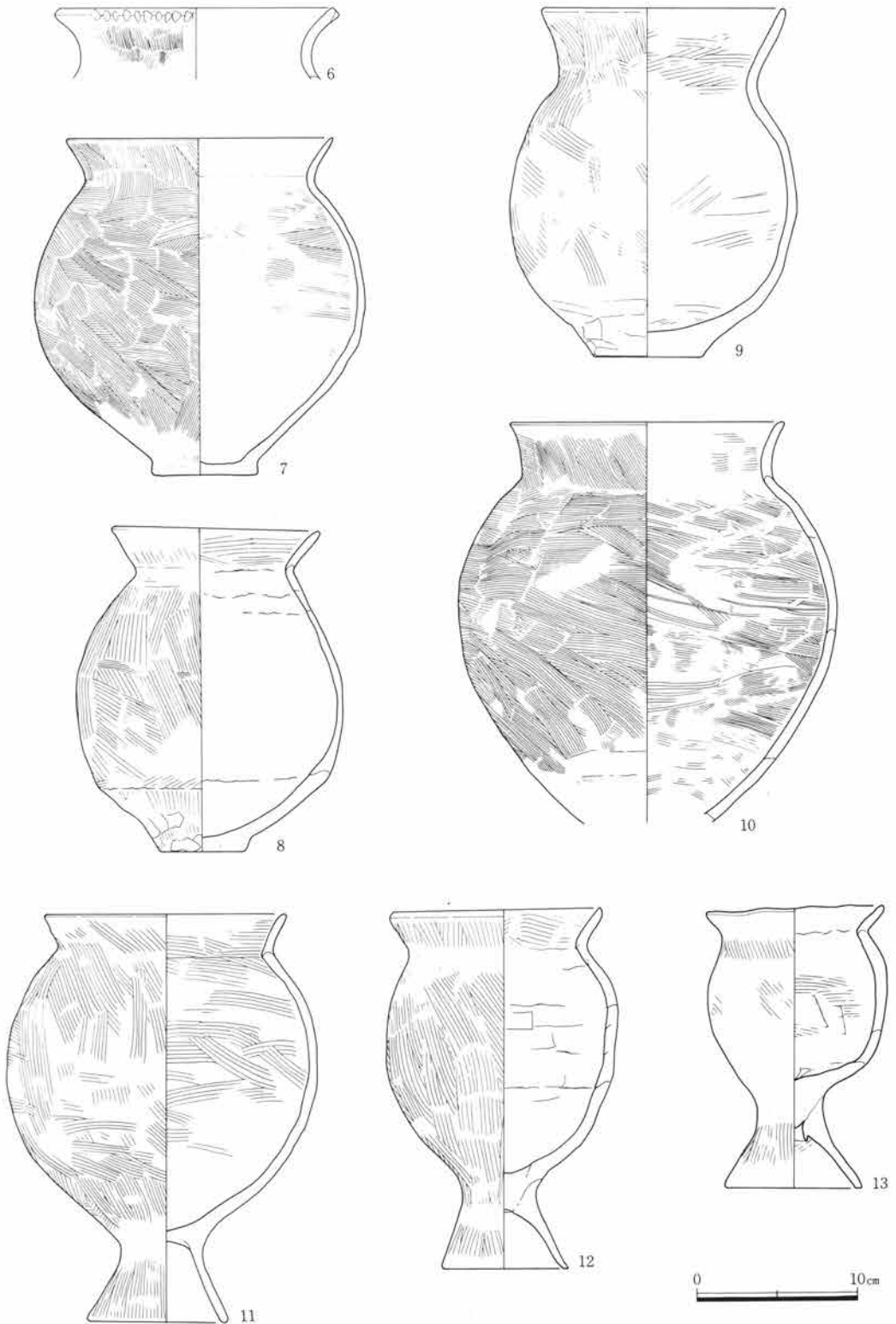
12・13は小型品である。11をそのまま小型化した形状を呈するが、整形が十分になされず、やや歪んだものとなっている。成形は輪積法で行なわれたらしく、その痕跡が内面に残っている。また、脚台部の接合は粘土塊を充填する方法によって行なわれている。調整は12が外面及び口縁部内面にハケメを施し、胴部内面をヘラナデで仕上げしており、13は外面に粗いハケメを施し、内面は12と同様のヘラナデを行なう。色調はいずれも明褐色を呈し、胎土に小砂粒を多く含む。なお、両者とも、二次的加熱によると思われる赤斑が認められる。そのため、これらが本来の甕の機能を果たしたかどうかを色調から判断する事はできない。

14は高坏形土器である。坏部は、内湾しながら緩やかな曲線を描いて開く鉢形を呈し、坏部底面は、尖り気味に凹む。脚部は低い円錐状をなす。また、口唇部と裾端部は丸味をもつ。整形は、全体にヘラケズリを施した後、裾部内面をハケメで、また坏部内外面及び裾部外面をヘラミガキで器面を整えている。なお坏部内面の同心円状のヘラミガキは、形態上の特徴とともに、後期弥生式土器の特徴を強く残すものと考えられる。

15はいわゆる器台結合土器で、大きめの器台に「朝顔」形の口縁部を結合させた形状を呈する。口唇部は外側に小さな平坦面をもつ。器台部分は「コ」の字状に屈曲し、脚部上半は筒状、下半は低い円錐形をなす。器受部と脚部を結ぶ穿孔は直径1cm程であり、脚部については当初から筒状に成形されている。整形は、全体に細かいハケメを施し、脚部内面を残して丁寧なヘラミガキがなされる。色調は淡褐色で、焼成は硬質である。胎土には小砂粒を若干含んでいる。

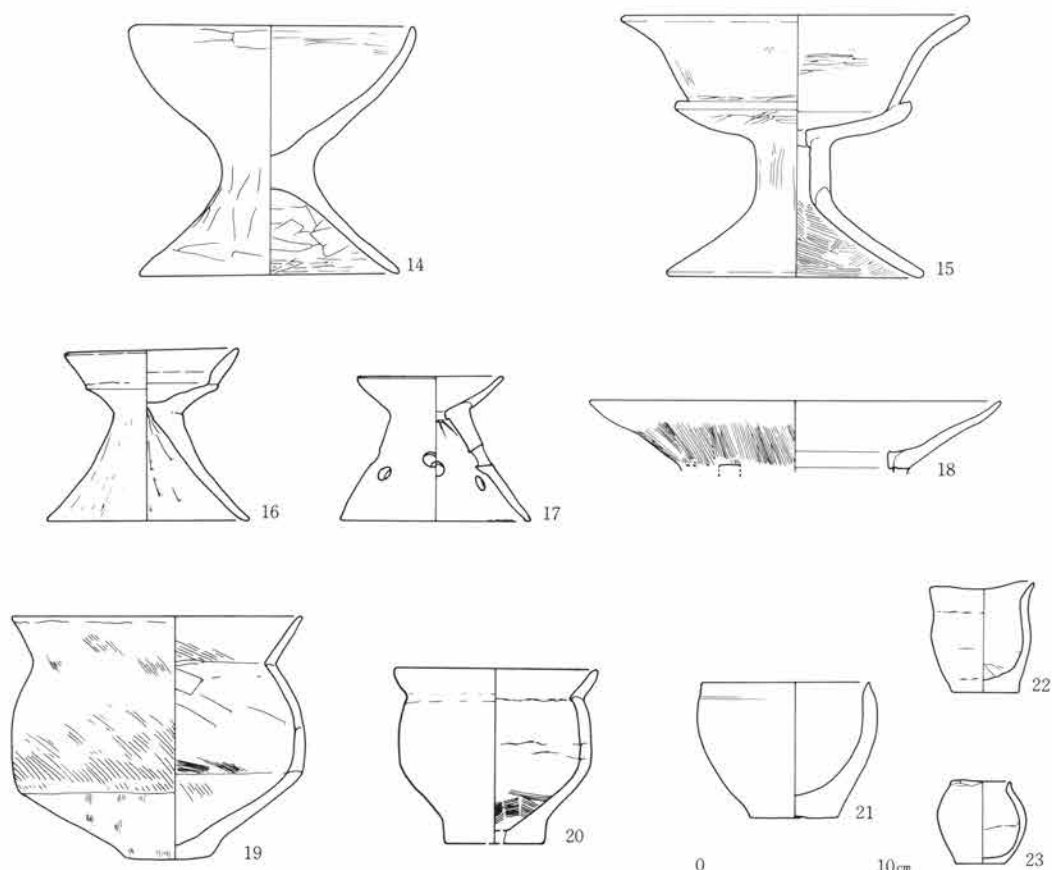
16・17は小型台形土器で、前者は有段口縁、後者は単口縁をなす。16は単口縁のものに粘土帯を1条接合して有段部を作り出している。脚部は外反しながら円錐状に開き、円孔は穿たれていない。器受部はナデの後、内面を放射状のヘラミガキで調整し、脚部は内外面をヘラケズリで整形した後、外面に縦方向のヘラミガキ、内面に斜方向のヘラナデを施し、最後に裾部をナデで仕上げている。17は、皿状の器受部に円錐状の脚部をもつもので、その裾部は若干内湾気味になる。脚部には2段互い違いに4ヶ所の穿孔がなされる。整形は16とほぼ同様であるがヘラミガキがやや粗い。両者とも色調は明褐色で、二次的加熱を受けており、ややもろくなっている。胎土は砂粒を多く含み非常に粗い。なお16は器受部内面の器表面に剝離が認められる。

18は外側に大きく開く口縁部破片で、欠失する下位部分は、屈曲して下方にのびると思われる。この屈曲部位に方形あるいは三角形かと思われる「透し」が認められる。残存部からは1ヶ所しか確認できないが、数ヶ所廻っていた可能性が考えられる。屈曲部の内面には粘土帯接合痕が突出して残る。整形は外面に縦方向のハケメ、口唇部と内面全体にナデを施している。その特異な形状と透しの存在から、装飾された器台形土器あるいは高坏形土器と推定される。色調は暗褐色



第118図 C区2号住居出土遺物 (2)

III 前原遺跡の調査内容



第119図 C区2号住居出土遺物 (3)

を呈し、胎土は比較的砂粒が多く粗い。

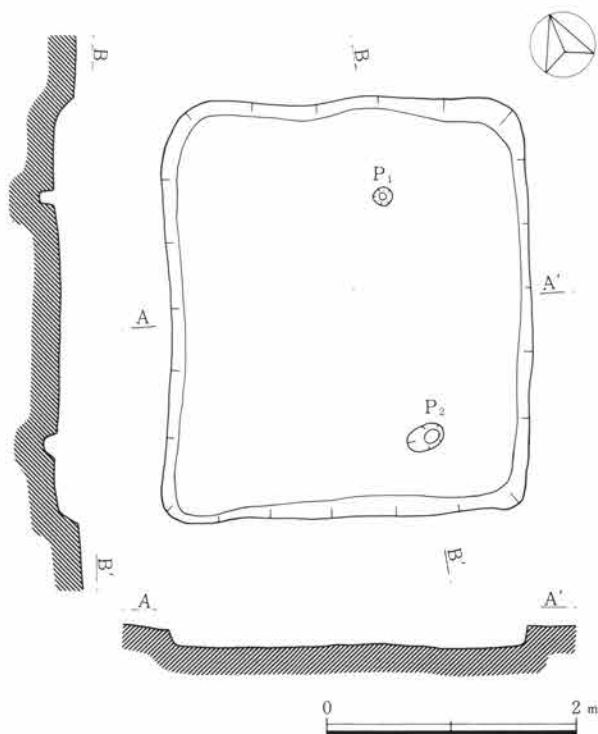
19は完形の鉢形土器である。「く」の字状に屈曲する口縁部と下膨らみの体部を持つ。体部下半の接合部には稜線を残している。底部は小さめの平底でやや安定感に欠ける。整形は、内外面とも斜方向のハケメを施し、その後内面上位はヘラナデを施している。なお外面には粗いヘラミガキが若干認められる。色調は二次的加熱により明赤褐色を呈する。胎土は砂粒を多量に含むやや粗いものである。

20・21は小型の甕形土器と鉢形土器で、前者は「く」の字状口縁をもち、後者はつまみ上げた小さな口縁をもつ。20は底部内面をハケメで整形する以外は、すべてナデで仕上げている。21は碗状の形態を呈するもので、口縁部をナデ、他を粗いヘラミガキで整形している。両者とも暗褐色を呈し、胎土には小砂粒を若干含む。

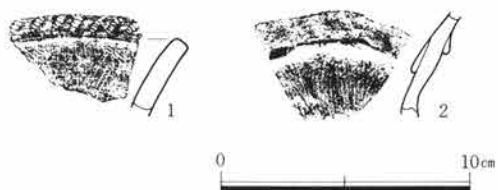
22・23は小型の土器であるが、手握ねではなく粘土帯積み上げによる成形を行っている。それぞれ20・21を小型化した形状を呈す。調整は両者ともナデによるもので、底面には若干ヘラケズリを施している。色調・胎土とも20・21とはほぼ同様である。これら小型土器群は、平底である

が、小型丸底土器と同様に、小型器台とセットで使用されたものであろうか。

本住居出土の土器はすべて古墳時代初頭のもので、しかも壺・甕・高坏・器台・特殊器台・鉢・ミニチュア土器等の当該時期における代表的な器種がすべて共伴関係で出土している事からセット関係を把握する上での良好な資料であるといえる。特徴としては、当地域の代表的な土器である石田川式をほとんど含まない点があげられる。特にS字状口縁甕形土器や有段口縁壺形土器を含まず、むしろ壺形土器(1)や甕形土器(6~13特に6)に見られるように南関東的な特徴を備えたものが主体を占める事は、典型的な石田川式との地域差あるいは時期差のある事を示唆している。



第120図 C区6号住居



第121図 C区6号住居出土遺物

C区6号住居 (第120図)

6-Fグリッドに位置する。3.3×2.9mの長方形を呈し、床面積は8.1㎡である。主軸方向はN-20°-Wを示す。

壁高は15cm内外で浅く、壁は若干斜状に立ち上がる。床面は平坦でやや軟弱である。径10~15cm、深さ約10cmの柱穴状のピットが2個検出されたのみで、他の施設は全く確認されない。

覆土

①黒褐色土：砂質ロームと軽石を混入しソフトである。

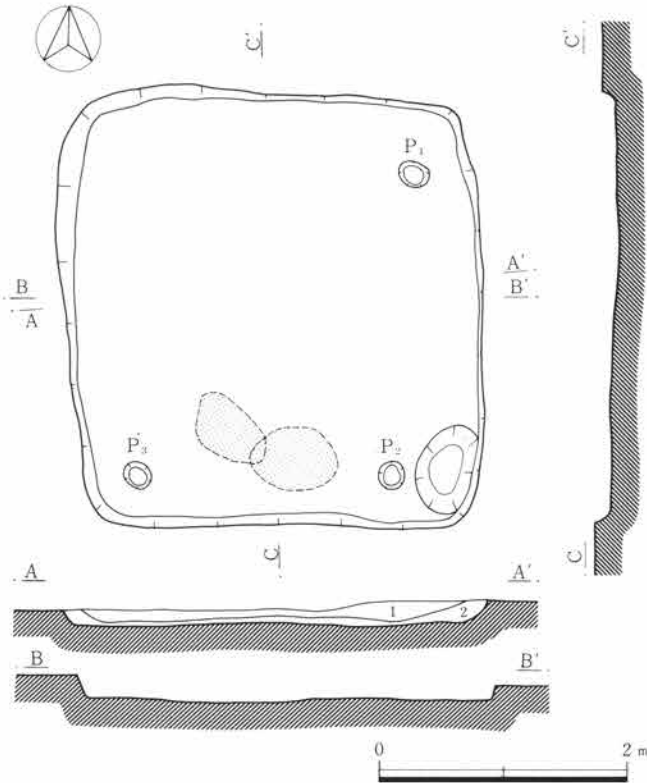
遺物出土状態

出土遺物は極めて少なく、土器片を数個出土したのみである。

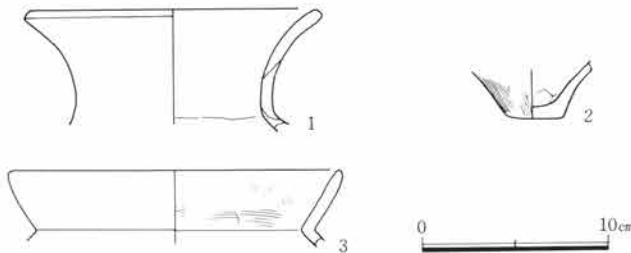
出土遺物 (第121図)

1・2はいずれも壺形土器の口縁部破片と思われる。1は単口縁のもので、口唇の平坦部にLR斜縄文を施す。2は内外面に粘土帯を貼付したもので、有段口縁部を呈するものと思われる。整形は、両者とも外面をハケメ、内面をナデで仕上げている。色調は明褐色で、胎土には砂粒を含

III 前原遺跡の調査内容



第122図 C区7号住居



第123図 C区7号住居出土遺物

甕形土器の口縁部が床面より出土している。

出土遺物 (第123図)

1は壺形土器の口縁部破片で、頸部で弱く「く」の字状に屈曲し、外反しながら開く形状を呈する。口唇部は外側に平坦面をもつ。整形はナデを施した後、外面は縦方向、内面は横方向のヘラミガキを施す。胎土には砂粒を若干含む。焼成は良好で堅緻である。色調は暗灰色を呈する。

2は手捏ねによる小型の土器で、器形はおそらく鉢形を呈すると思われる。内面には指頭圧痕を残すが、外面は粗いハケメを施す。1・2とも色調は暗褐色を呈し、胎土には小砂粒を若干含んでいる。

んでいる。

C区7号住居 (第122図)

7～8-G～Hグリッドに位置する。C区11号住居(縄文時代中期)と重複している。プランは3.4×3.3mの方形を呈し、床面積は10.4㎡である。壁はやや斜状に立ち上がり、床面からの壁高は10～15cmと浅い。主軸方向はほぼ磁北を示す。柱穴は3個検出されたが、規模は各柱穴とも径約20cmで深さは約10cmと浅い。床面はほとんど平坦でやや軟弱である。南壁付近に床面から若干浮いた状態で2ヶ所の焼土が確認された。また、東南壁コーナーに貯蔵穴状のピットが確認された。

覆土

- ①黒褐色土：多量の軽石及び小砂礫・炭化物を含む。
- ②黄褐色土：黄色砂壤土と黒褐色土の混土。

遺物出土状態

3は甕形土器の口縁部破片である。形状は頸部で「く」の字状に屈曲し、やや内湾気味に開くものである。口唇部は丸味をもつ。整形は内面にハケメを施し、口唇及び外面にはナデを施す。

他の住居に比べて極めて遺物量が少ないが、共伴する小破片を含めていずれも古墳時代初頭のものである。

C区8号住居（第124図）

6～8-A～Bグリッドに位置する。プランは一辺5.5×5.1mを測り、やや隅丸状の方形を呈し、床面積は25.5㎡である。主軸方向はN-15°-Eを示す。壁はややなだらかに立上がり、床面からの壁高は30～40cmである。床面精査の結果柱穴と考えられるものは検出されず、炉も確認し得なかった。床面は軟弱であるが、ほぼ平坦な面を呈する。また、住居内周縁部を中心に炭化材や焼土が、床面および床面から浮いた状態で出土していることから、焼失住居の可能性が強い。

覆 土

- ①黒色土：層中に浅間B軽石を多量に混入する。
- ②黒褐色土：砂質ロームを斑点状に多量に混入し、軽石や小礫・焼土ブロックを少量、炭化物を多量に含有する。
- ③黄褐色土：砂質ロームと黒褐色土との混土層で軽石を微量混入し、炭化物を多量に含有する。
- ④炭化物：炭化材・灰・焼土の堆積層。
- ⑤黒褐色土：②層に比較し色調はやや明るい。炭化物・軽石を多量に含む（攪乱層）。
- ⑥黄褐色土：ロームブロック層で壁くずれの堆積層。

遺物出土状態

遺物は南西コーナー付近に集中して出土した。甕形土器が4個体押し潰された状態で床直出土し、高坏等数点の破片は若干浮いて出土している。

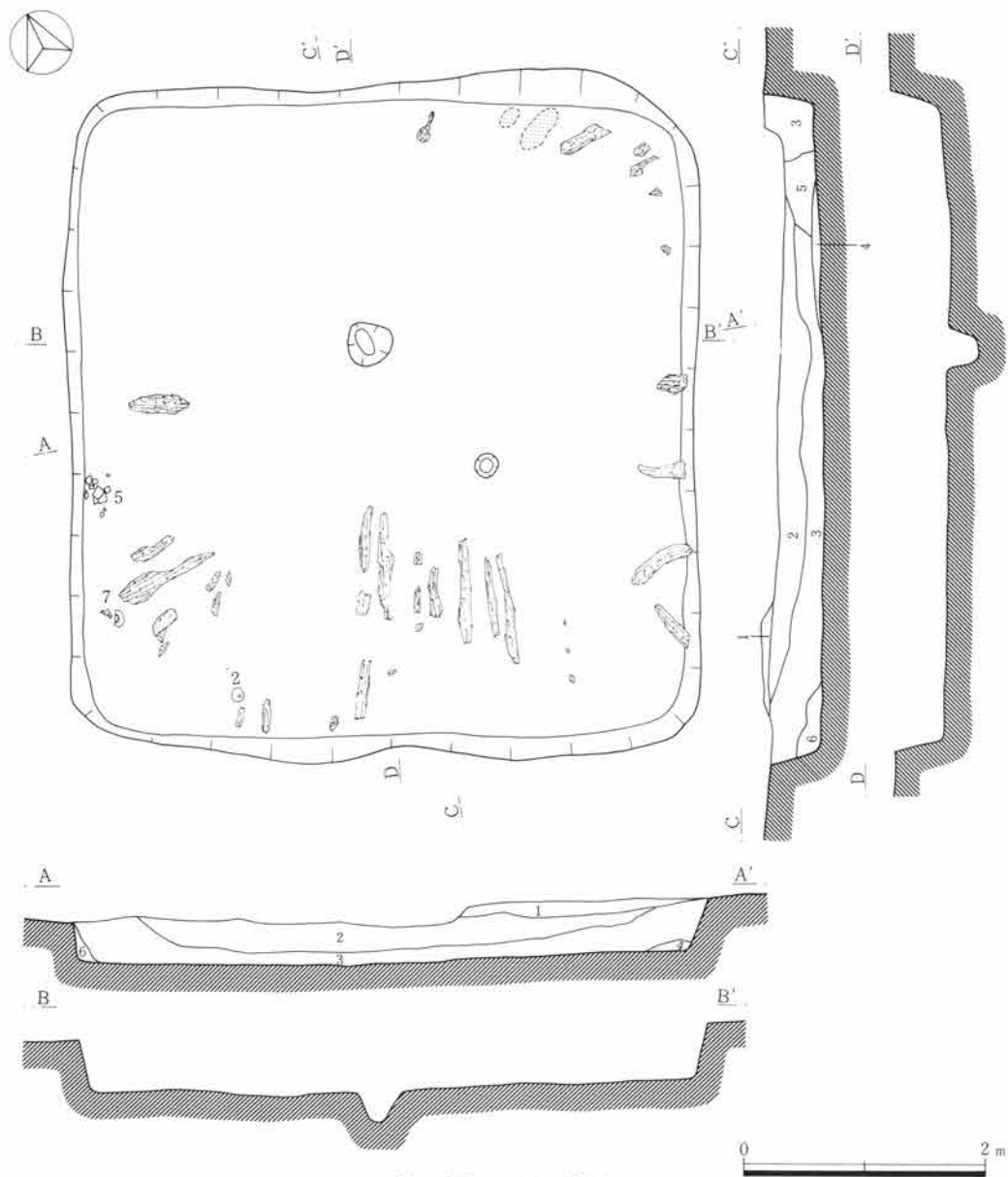
出土遺物（第125図）

1は壺形土器の口縁部破片で肩部以下を欠失する。口縁部は直行して開き、頸部は強く「く」の字状に屈曲する。口縁部は幅広の粘土帯の内側に接合して成形した痕跡が認められる。胴部はおそらく球形を呈すものと思われる。整形は、外面を縦方向、内面を横方向のハケメを施し、口唇部をナデで仕上げている。色調は明褐色を呈し、胎土は砂粒を若干含む。焼成はややあまく、軟弱である。

2・3は小型壺形土器で、いずれも口縁部を欠く。両者はほぼ同じ球形胴部をもつもので、法量もほぼ同様である。整形は両者とも外面をヘラミガキ、内面をナデで仕上げるが、2は外面の一部にハケメを若干残す。色調はいずれも明褐色を呈し、胎土は砂粒の少ない木目の細かいものである。焼成も良好で、堅緻である。

4は甕形土器で肩部以上の破片である。頸部が弱い「く」の字状に屈曲するもので、肩部はさほど張らないと思われる。整形は、外面の斜方向を基調にしたハケメを施し、内面は横方向のへ

III 前原遺跡の調査内容

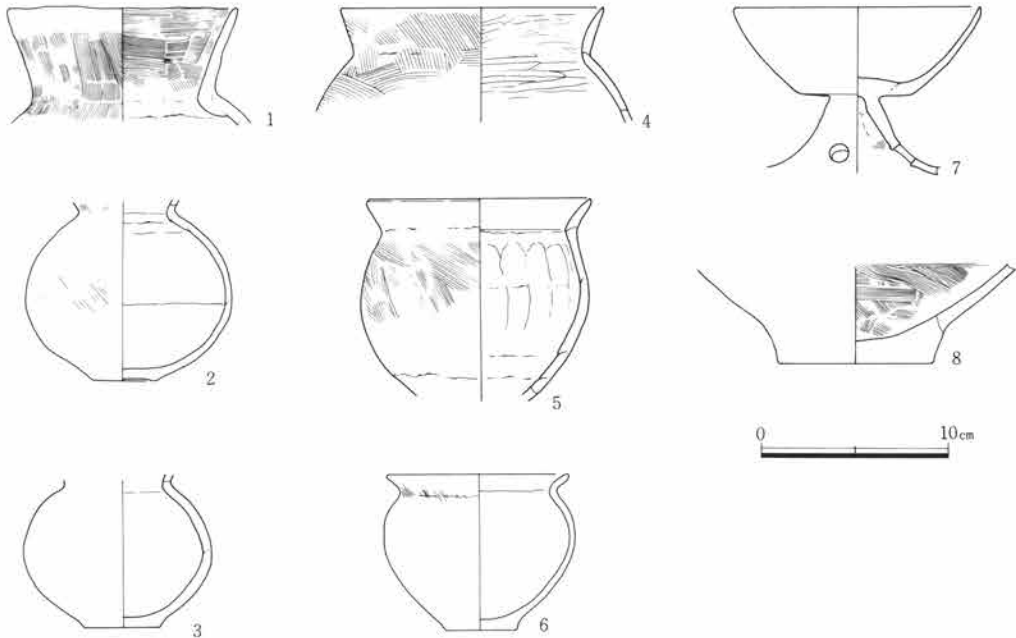


第124図 C区8号住居

ラミガキを施す。色調は暗褐色を呈し、胎土には小砂粒を多く含んでいる。焼成は良好で、甕形土器としては堅緻である。

5・6は小型の甕形土器で、いずれも「く」の字状に屈曲する単口縁をもつ。5は外面の胴上半をハケメで整形する他は、全てナデで仕上げられる。6は外面をハケメで整形した後、丁寧なヘラミガキが施され、内面にはナデが加えられる。

7は高坏形土器で、裾部を欠失している。坏部は底部外面に稜をもつ碗形を呈し、脚部は外反



第125図 C区8号住居出土遺物

しながら大きく開く形状をとる。脚部の円孔は3ヶ所に認められる。整形は坏部内外面と脚部外面を縦方向のヘラミガキで、脚部内面はハケメの後、ナデによって仕上げられる。色調は明褐色を呈し、胎土には小砂粒を若干含む。焼成は良好で、堅緻である。

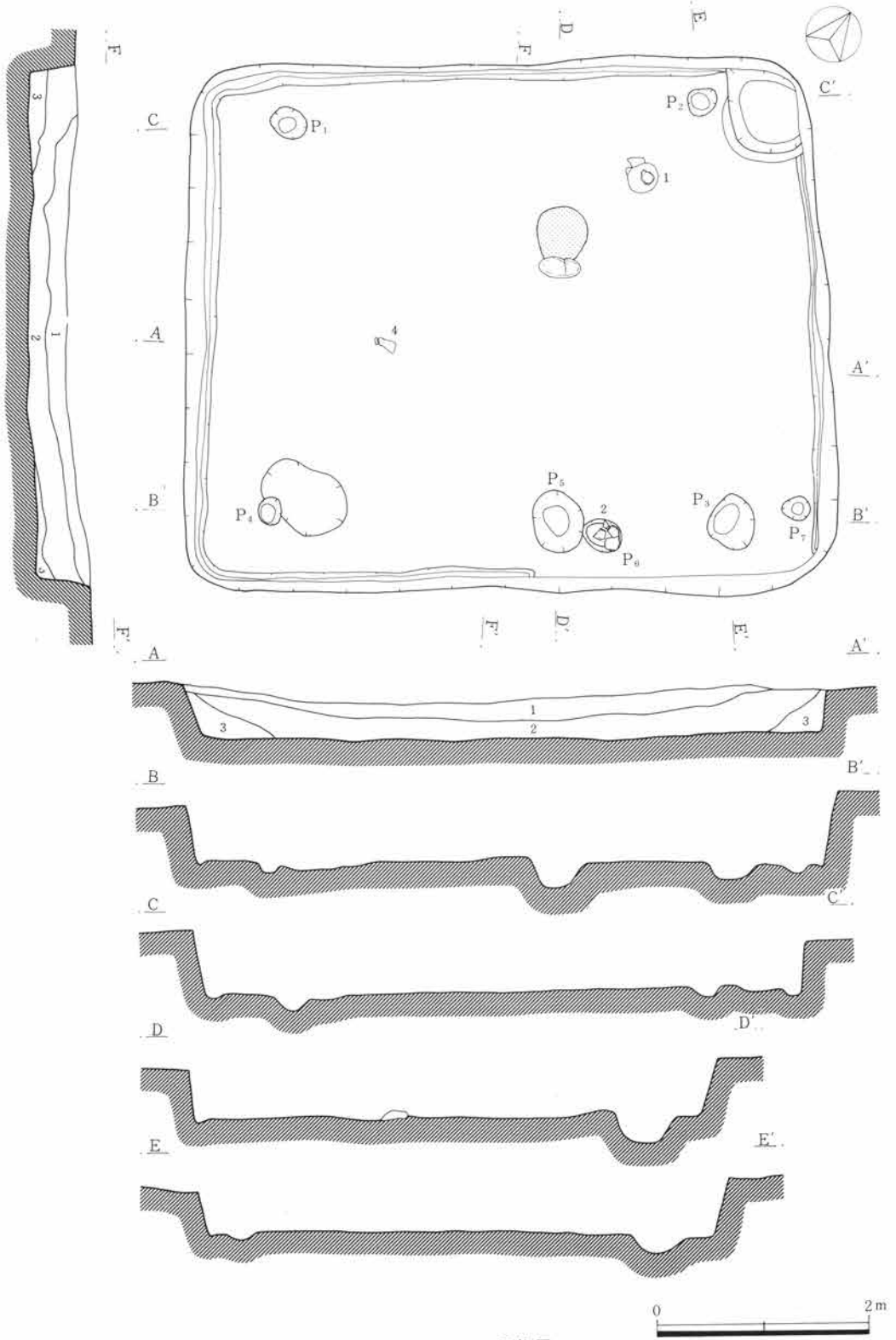
8は壺形土器の底部破片で、やや突出した安定感のある平底を呈する。整形は、外面にナデと粗いヘラミガキ、内面にハケメを施している。なお、底面には杵圧痕が一ヶ所残されている。杵圧痕は長径5mm、短径3mm程の「俵」形を呈するものである。色調は明褐色を呈し、胎土には砂粒を多く含んでいる。

1～8はいずれも古墳時代初頭のもので、特に2・3・5・6のように小型品の存在が目立つ。また7の高坏形土器は従来から五領式古段階に位置付けられているものであるが、系統的には東海地方西部地域の後期弥生式土器に求められる可能性が強く、関東地方の内での一元論的な編年的位置付けは当を得たものではないと思われる。

C区9号住居 (第126図)

8～9-E～Fグリッドに位置する。プランは一辺6.0×4.9mの長方形を呈し、床面積は約25.3㎡である。主軸方向はN-24°-Wを示す。壁は直に立上がり、床面からの壁高は40～60cmを測る。南壁の一部を除き周溝が検出された。規模は幅約15cmで深さは約5cmを測る。柱穴は各コーナー付近に4個認められたが各柱穴とも10cm足らずの浅いものである。床面はローム面を使用しており、中央部分は至って堅緻である。炉は南側に河原石一石を設けたもので、住居中央のやや北東

III 前原遺跡の調査内容



第126図 C区9号住居

寄りに検出された。また、北東コーナーに方形状の浅い落ち込みと、北壁寄りの周溝が切れる部に径50cm、深さ30cmほどのピットと土器を伴う浅い落ち込みを検出した。

覆 土

- ①黒色土：軽石を多量に混入し、砂質ロームブロックを斑点状に含有する。炭化物・小礫も少量含む。
- ②黄褐色土：黒褐色土を混入し、軽石・小礫をわずかに混入する。
- ③黒褐色土：①層に近似する。黒色土及びわずかな軽石を混入する。集中的に炭化物を含む。

遺物出土状態

出土量は少ないが、大半が床面から出土している。甕形土器(2)は南壁床面の窪みから、また炉の北側で大型の壺形土器の上半部(1)が、正位に直立した状態で出土している。

出土遺物 (第127図)

1は壺形土器で、口縁部と胴下半部を欠く。頸部は比較的長く、緩い曲線をもって屈曲する。肩部はなだらかで、下膨れの胴部に至る。胴下半部の接合部は強い稜線をもって屈曲する。なお肩部には結節を伴うRL斜縄文が2段に施文される。整形は、外面をハケメの後、口頸部と胴下半部に粗いヘラミガキを施し、内面には全体にナデを加えている。色調は明褐色を呈し、胎土には大粒の砂粒を含む。器面調整は粗野であるが、その形態上の特徴から、南関東あるいは東海地方東部の後期弥生式土器の系統を引くものと思われる。

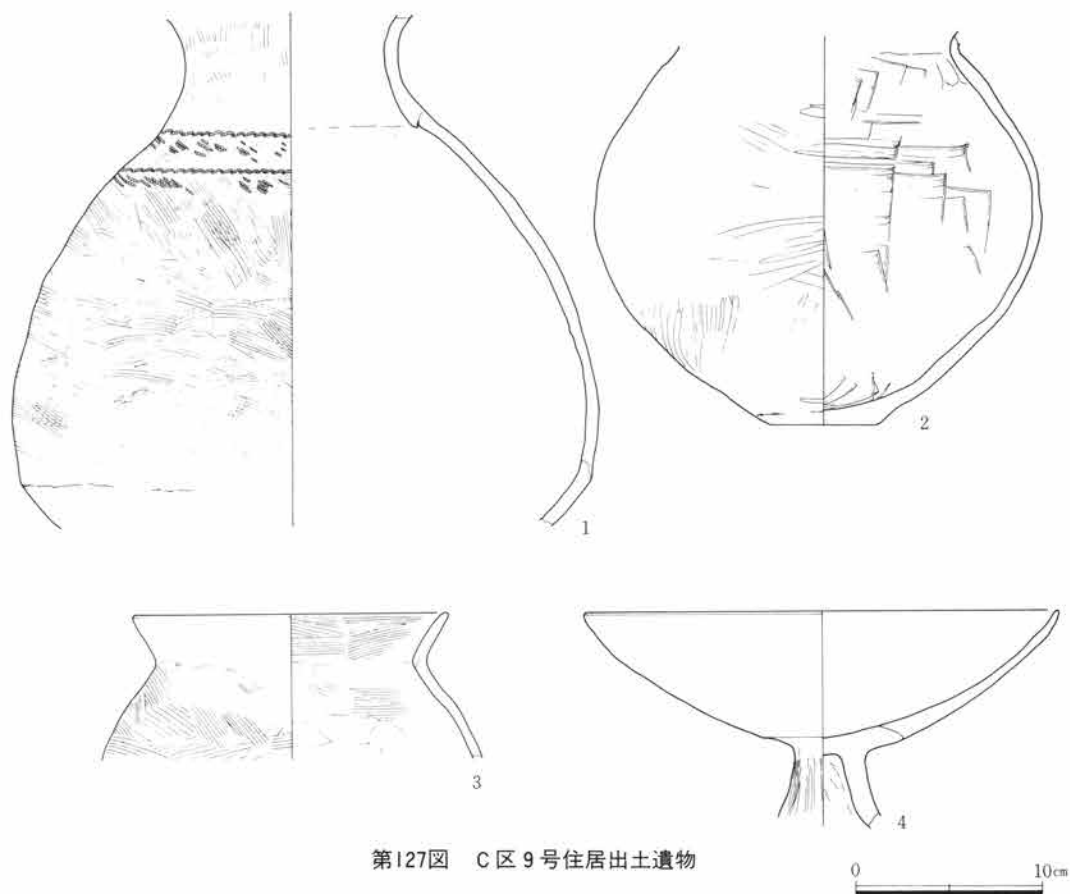
2は広口壺形土器と思われるもので口頸部を欠いている。胴部は球形をなし、小さな平底をもつ。頸部は「く」の字状に屈曲する部分が若干残っており、おそらく短い直口縁がつくものと思われる。整形は、外面にハケメを施した後、丁寧なヘラミガキを施すもので、内面は全体にナデを施して器面を平滑にしている。色調は明褐色を呈し、胎土には若干の小砂粒を含む。焼成は良好で硬質な仕上がりである。

3は甕形土器の上半部破片である。頸部は「く」の字状に屈曲し、短く開く単口縁となっている。整形は全体にハケメを施した後、口頸部にナデ、胴部内面に横方向のヘラケズリを施している。通常はヘラケズリ整形後にハケメを施すが、本例は最終段階で内面のケズリ直しをしたものと思われる。色調は褐色を呈し、胎土に砂粒を多く含む。

4は大型の高坏形土器で、脚部の中位以下を欠いている。坏部は内湾しながら大きく開き、底面に若干の段をもつ。脚部は、上半部は外反気味の筒形を呈するが、下半部は屈曲しながら円錐状に開く形状をとるものと思われる。整形は内外面ともに放射状のヘラミガキを施すもので、脚部内面のみ丁寧なナデが施される。なお脚部の円孔の有無については不明である。色調は明褐色を呈し、胎土は砂粒の少ない木目の細かいものである。

1は弥生式土器の特徴を強く残すが、他の土器から古墳時代初頭のものと考えられる。

III 前原遺跡の調査内容



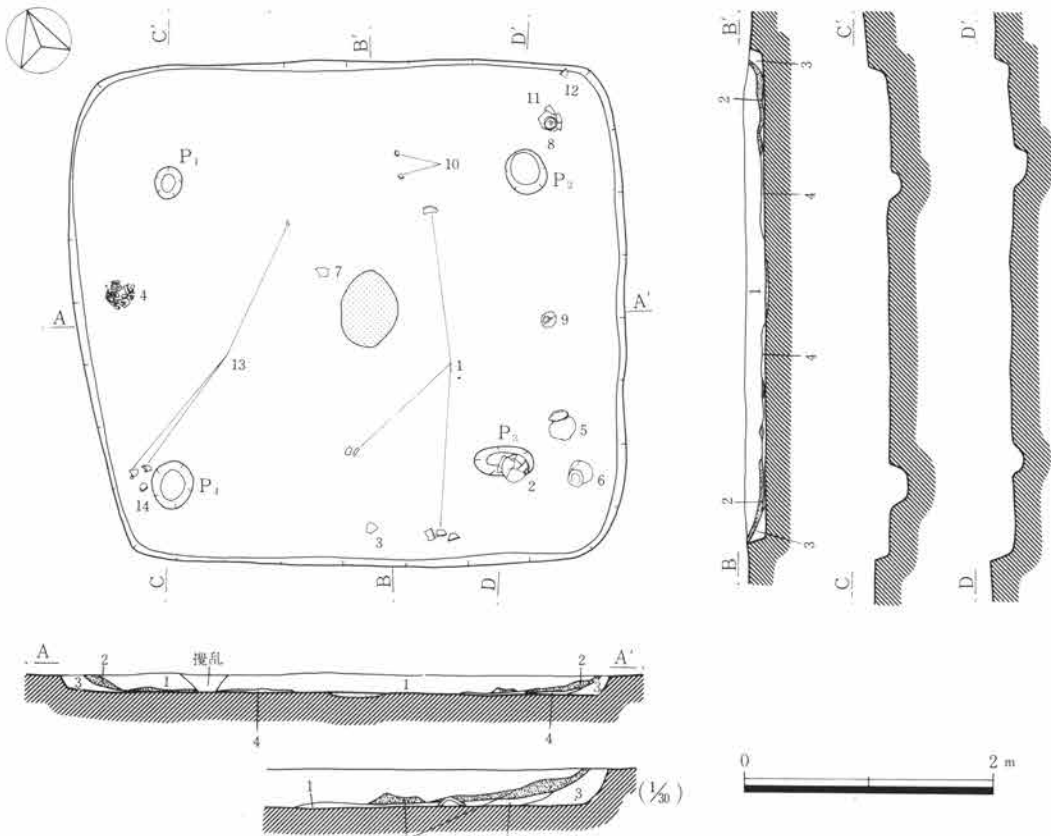
第127図 C区9号住居出土遺物

4 T 3号住居 (第128図)

4トレンチ6区に位置する。プランは一辺4.0×4.4mを測り、北壁側にやや開きのある方形状を呈す。床面積は約16.7㎡で、主軸方向はN-13°-Eを示す。壁はなだらかに立ち上がり、床面からの壁高は10~15cmを測る。柱穴は4個検出したが、その径は20~30cmで深さは10cm内外と浅い。床面はローム面を使用しており平坦である。壁付近の床面は軟弱であるが中央部分は至って堅緻である。また、住居中央部分で炉が確認された。炉は径45×60cmの卵形のプランを呈し床面を4cm程穿っており、中央が若干窪んでいる。なお、側石は検出されていない。

覆土

- ①黒褐色土：軽石を多量に含み、砂質ロームを混入する。
- ②浅間C軽石純層。
- ③褐色土：褐色土中に砂質ロームを混入する。軽石も微量に含む。
- ④黒褐色土：軽石を多量に含む。①層に近する層



第128図 4 T 3号住居

浅間C軽石純層は、第1次堆積土である③層形成後に堆積している。軽石層は最も厚い部分で7cmを測り、住居中央付近に至り、ほぼ床面に密着した状態を呈している。このことから、本住居は、浅間山の爆発直前に廃棄されたものと考えられよう。

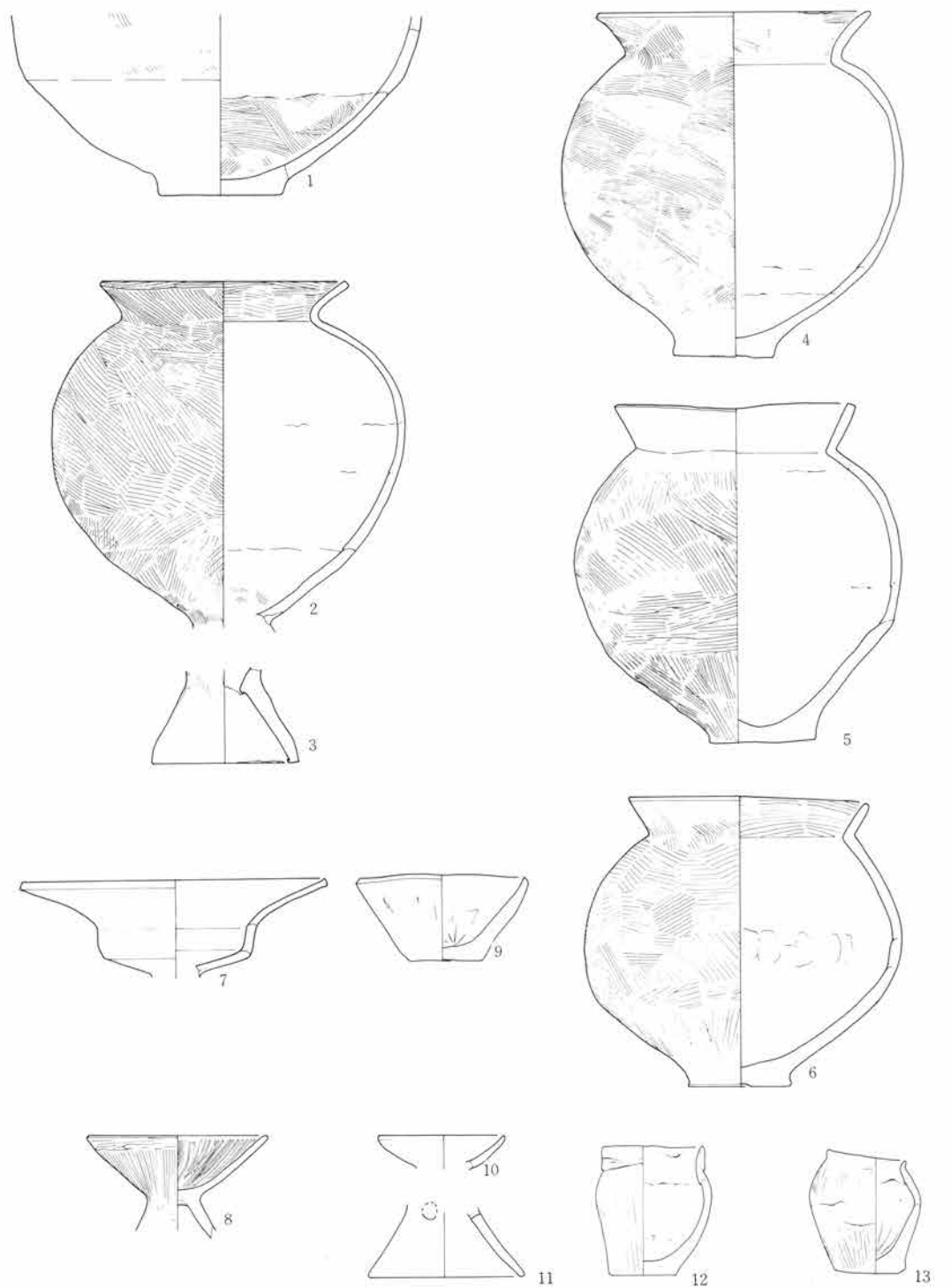
遺物出土状態

一括出土の土器が多く南西コーナー付近には甕形土器3個体が、横倒状態で床直出土した。そのうち2個体内には浅間C軽石がギッシリ詰った状態で検出された。更に北東コーナーでは高坏や器台等、また炉の北側から北西コーナーにかけて小型土器が3個体出土している。

出土遺物 (第129図)

1は壺形土器の胴下半部破片である。下膨れの形状を呈すると思われる、接合部分には弱い稜をもつ。底部は小さく突出した平底をなす。整形は、外面がハケメの後ヘラミガキを施すもので、内面は接合部下半をハケメ、それ以上はナデを施す。なお、接合部を境にハケメが切れている事

III 前原遺跡の調査内容



第129図 4 T 3号住居出土遺物

0 10cm

から、このハケメは胴部中位を接合する以前に施されたのが明らかである。色調は明褐色を呈し、外面に2ヶ所、対極する位置に黒斑が見られる。胎土は砂粒を多く含む木目の粗いものであるが焼成が良好なため非常に硬質である。なお、底面に木葉痕が若干見られるが、使用によると思われる擦痕が甚だしく、不明瞭になっている。

2・3は台付甕形土器で、前者は脚部のみを欠き、後者は脚部のみの破片であるが、色調・胎土の違いより両者は別個体のものである。2の頸部は強い曲線をもって「く」の字状に屈曲するもので、口縁部は短く外方に開く。口唇部は外側に小さな平坦面をつくる。胴部は「無花果」形の形状を呈し、器高に比べ胴径の大きいものである。整形は外面と口縁部内面に斜方向を基調にした整ったハケメを施し、胴部内面は「なめし皮」状のものをを用いた丁寧なナデで、器高を整えている。なお、接合部胴下半の接合部以下のハケメは接合前に行なわれたものである。色調は明褐色を呈し、胴中位の一部に黒斑が見られる。胎土には砂粒を含むやや木目の粗いものである。焼成は他の甕形土器に比べ硬質な仕上がりになっている。本遺跡出土の他の甕形土器と比べて、口縁形態や整形の違いが認められ、やや異質な感じを与える。3は内湾気味に開く脚部で、外面に縦方向のハケメを施し、その後内外面をナデで器面調整している。胴部との接合には、粘土塊を充填して行なったらしく、この部分が筒状に成形される。色調は褐色を呈するが、一部に二次的加熱を受けて赤斑を生じている。胎土は砂粒を含むもので、やや粗い感じを与える。

4～6は平底を呈する甕形土器である。いずれも「く」の字状に屈曲する頸部に小さく開く単口縁をもつもので、球形に近い胴部に突出気味の底部と三者とも同形状を呈する。整形は斜方向のハケメを外面に施し、内面をナデと粗いヘラミガキで仕上げる。5は4・6と異なり口縁部内外面にナデを施してこの部分のハケメを消しており、頸部内面に整形のヘラケズリを施す。色調は赤褐色を呈し、胎土には小砂粒を多く含むもので、三者とも非常に近似している。なおいずれも口縁部外面と胴部中位に多量の煤が付着しており、煮沸用として用いられた事が窺われる。

7は高坏形土器の坏部破片で、2段に屈曲する形状を呈する。口縁部は浅く大きく外方に開くため、容量はさほど大きくない。整形は内外面にハケメを施した後、丁寧に放射状のヘラミガキを施している。又口唇部はナデで整形されるが、外側に小さな平坦面をもつ事が特徴である。色調は黄褐色を呈しており、胎土は小砂粒を多く含む。焼成は良好で、堅緻な仕上がりを示す。関東地方における後期弥生式土器の系統ではなく、むしろ畿内地方の系統を引くものと思われる。

8・10・11は器台形土器である。8・10は段をもたない皿状の器受部で、脚部は11のような円錐形を呈すると思われる。8はやや大きめのもので、内外面に丁寧なヘラミガキを施している。10はヘラミガキを施すが、器面がやや荒れているため、痕跡は不明瞭である。色調はいずれも淡褐色を呈しており、胎土に小砂粒を若干含んでいる。

9は小型鉢形土器で、截形の形状を呈する。口唇部は外側に小さな平坦面をもつ。整形は内外面ともヘラケズリの後ナデを施している。

12・13は壺形のミニチュア土器ともいふべき器形で、口縁部がややすぼまり、胴部が膨らむ平

III 前原遺跡の調査内容

底の形状を呈する。成形は輪積で行ない、粗雑な整形を行なう。いずれも内面をヘラケズリ、外面を縦方向のハケメで器形を調整する。色調は淡褐色で、胎土には砂粒を多く含んでおり、焼成はややあまく、もろい仕上がりである。

いずれも古墳時代初頭の代表的な器種が揃っており、比較的良好なセット関係を示す。特に7の高环形土器はB区1号住居例（第112図-4）と同様の系統で考えられよう。

(2) 古 墳

A区1号古墳（第130図）

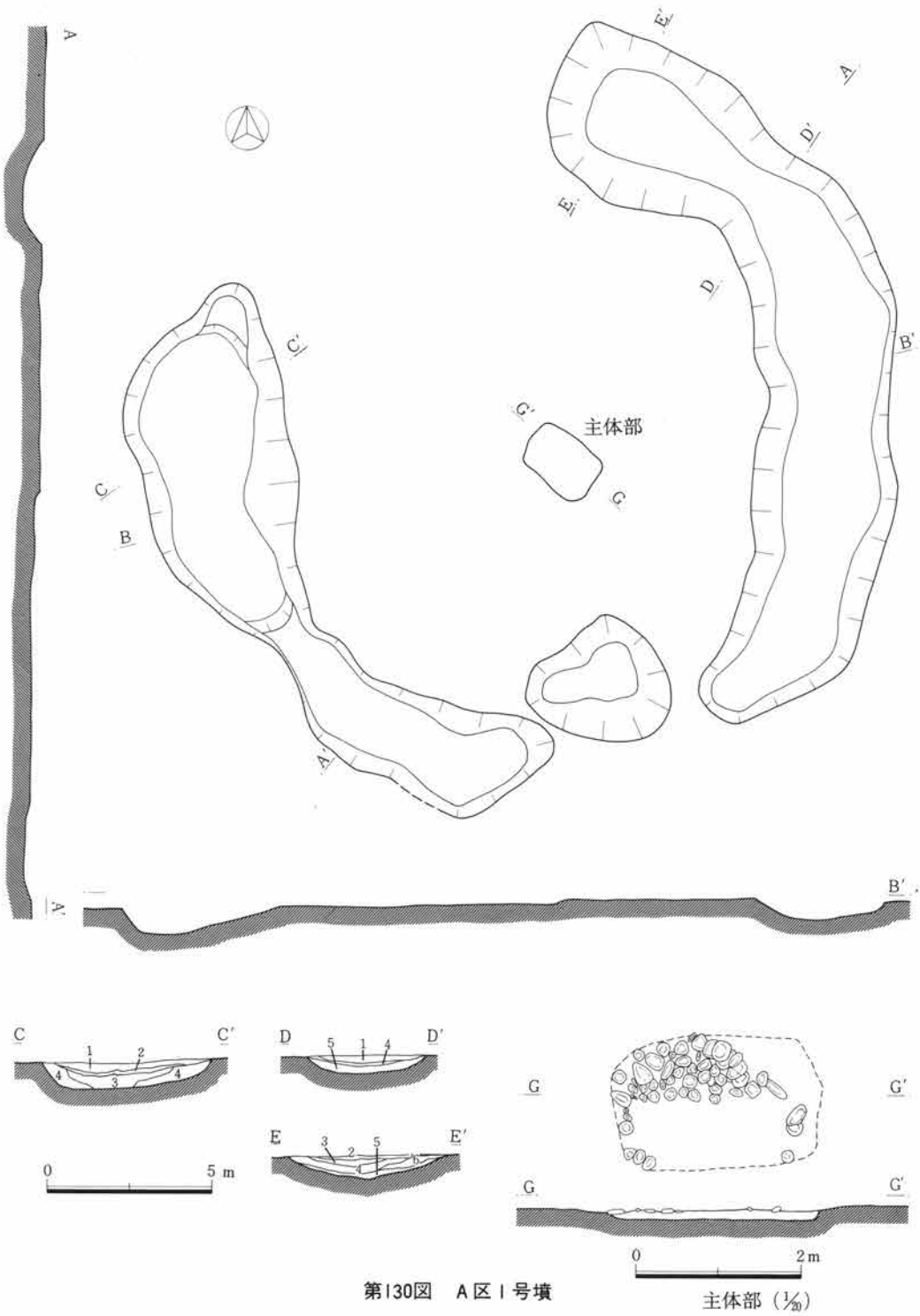
A区台地の東側に突出した部分に位置する。調査時、付近一帯は平坦地であった。検出された遺構は周堀と主体部床面のみであり、上部構造は耕作等により削平されたものと思われる。周堀は西南部と東北部に弧状に対をなすように検出された。北西部分と南東部分は掘り残されているが、南東部分は掘り残し部分が狭くなっており、やや内側には不正形な浅い掘り込みが認められた。規模は周堀を含めた径が約23cmで、形態は外周部では円形を呈する。周堀の幅は広い部分で5mであるが、2mと狭い部分もあり一様ではない。また、確認面からの深さは50~70cmであるが20cmと浅い部分もある。周堀断面の形状は皿状を呈し、外側の壁は急傾斜で内側はやや緩傾斜である。また、周堀内および浅い掘り込みからは、多量の円礫が検出された（図版31）。礫は底面からかなり浮いた状態で、内側から外側に傾斜して出土していることから葺石に使用されていたものであろうと思われる。墳丘の盛土は一切残っておらず、中央部分に埋葬主体部の底面のみが検出された。主体部長軸はN-50°-Wを示し、底面の規模は2.3×1.6mである。また、底面は若干の掘り込みが認められ、上面には5~10cm大の小礫が敷きつめていたものと思われるが、耕作等による攪乱でかなり抜き取られている。なお、本古墳に伴う遺物は出土していない。

周堀の覆土

- ①黒褐色土：軽石を多量に混入する砂質土。
- ②浅間B軽石層：黒色土をわずかに含むが、ほぼ純層に近い。上面に暗紫色アッシュが認められる。
- ③黒色土：軽石を混入するソフトな層。
- ④黒褐色土：軽石と砂質ロームブロックを含む。
- ⑤暗褐色土：軽石をわずかに混入する砂質灰白色土と褐色土との混土層。
- ⑥黒褐色土：砂質ロームブロックと軽石を少量含む。

(3) 遺構外出土遺物

遺構に伴わずに出土したもの、および明確に遺構と確定できないものを一括した。後者には



III 前原遺跡の調査内容

前述のD区一括出土遺物とC区13-Kグリッド一括出土遺物がある。D区一括出土遺物は、今回の調査区内では遺構・遺物が検出されていない鬼高期を中心とするもので、その立地や出土状態および多量の手捏形土器の共伴から、祭祀跡としての性格が考えられる。それ以外の出土遺物はいずれも古墳時代初期のものである。

D区祭祀跡出土遺物（第131図～第135図）

D区1-B・C、2-B・Cグリッドの表土掘削中に一括状態で検出されたものである。本地点は荒砥川と神沢川の合流点を一望することができる台地縁辺部にあたる。発見時、すでに遺構としての把握が不可能であったため、出土地点の土壌をフルイにかけ、全遺物の採集を行った。出土した遺物は古墳時代初頭から平安時代にかけての土器群（手捏形土器を含む）であり、その他の遺物は認められなかった。土器は、本調査区内で住居が検出されていない鬼高式土器が主体を占めており、また多量の手捏形土器を伴っている。手捏形土器は比較的完形品が多く、その他の器種は破片が大部分を占める。以下に各器種毎の数量を示すが、器種の判定にあたって、ヘラケズリを残し厚手で湾曲の少ないものを甕（甗を含む）、ヘラミガキあるいはナデを施し湾曲の強いものを壺（埴を含む）として扱った。また、壺と高坏（器台を含む）については、破片での時期判別が困難なため一括して扱った。

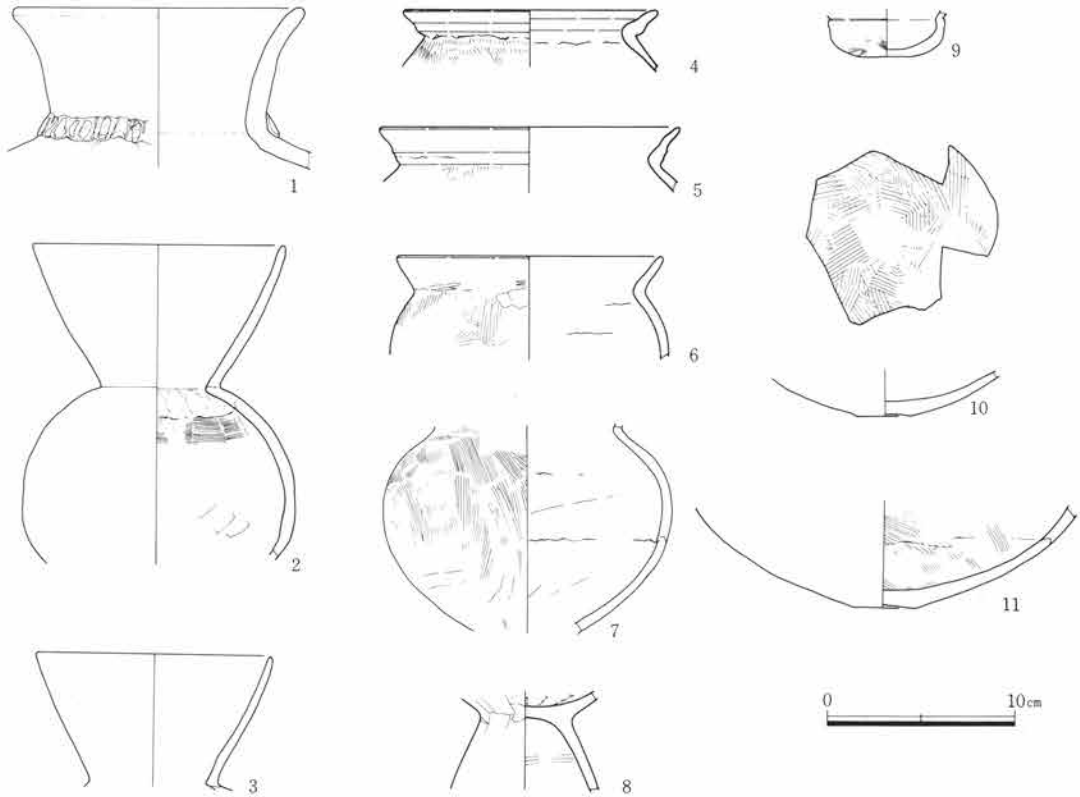
石田川期	甕	218点	（台付甕を含む）					
鬼高期	甕	3,416点	坏	459点	鉢	46点	手捏形土器	639点
国分期			坏	34点				
時期不明	壺	132点	高坏	30点			器種不明	257点
							総計	5,311点

以上の土器のうち、器形の復元可能なものについて説明を行っておきたい。

古墳時代初頭期（第131図）

1は単口縁壺形土器の口縁部破片である。口縁部は外反しながら開き、口唇部は丸味をもつ。頸部は「く」の字状に屈曲し、張りぎみの肩部へと続く。頸部外面には一条の粘土帯を廻らし、幅広の棒状工具による押捺を施している。整形は内外面とも縦方向のヘラミガキを施し、口唇部をナデで仕上げている。なお肩部内面はヘラケズリの後、若干のナデを加えている。胎土には小砂を含む比較的良質な粘土を用い、焼成は良好で堅緻である。色調は黄褐色を呈する。

2は大型の埴形土器で底部を欠く。口縁部は内湾気味に大きく開き、口径は胴部最大径とほぼ同長である。口唇部は丸味をもち、稜は見られない。頸部は鋭く「く」の字状に屈曲し、球形胴部へと続く。外面は縦方向の丁寧なヘラミガキを施し、内面は口縁部を縦方向のヘラミガキ、胴部は下半をヘラケズリ、肩部は横方向のハケメを施した後ナデで仕上げている。なお頸部直下の内面には成形時の指頭押圧痕が明瞭に残る。胎土は小砂粒を若干含む精良な粘土を用いており、焼成は良好で堅緻である。色調は明褐色を呈する。3も埴形土器破片で、形態や技法・胎土・色



第131図 D区祭祀跡出土遺物 (1)

調等については2とほぼ同様である。

4・5はS字状口縁部付甕形土器と思われる口縁部破片である。いずれも口縁部形状が、段の弱いものであり、典型的なものに較べて、屈曲が明瞭ではない。口縁部はナデで調整し、頸部以下は細かいハケメを施している。胎土に砂粒を含むが金雲母は見られない。色調は褐色を呈する。おそらくS字状口縁部付甕形土器でも最終段階に近いものと考えられる。

6は単口縁の甕形土器の体部上半の破片である。短い口縁はやや内湾気味に開き、頸部は曲線的な「く」の字状に屈曲する。肩部はさほど張らずに胴部に続く。整形は口縁部がナデ、胴部外面が横方向と斜方向のハケメ、内面はナデを施している。胎土には小砂粒を含む。焼成はややうまく軟質である。色調は暗褐色を呈する。

7はS字状口縁部付甕形土器の胴部破片である。肩部の張った「無花果」形を呈するもので、やや小型のものと思われる。外面は縦方向のハケメの後、下半を粗いハケメ、内面は全体をナデで器面を調整する。胎土には砂粒を含み、焼成は良好で、甕形土器としては堅緻である。色調は暗褐色を呈している。

8は甕形土器の脚台部で、やや内湾気味に開く形状を呈する。整形は外面を縦方向のヘラケズ

III 前原遺跡の調査内容

りの後にナデ、内面は横方向のハケメの後ナデで仕上げる。なお胴部内面は篋状具によるナデが施されている。形状からS字状口縁台付甕の脚台部と推定されるが、外面整形にヘラケズリを用いている点で、新しい段階のものである可能性が高い。

9は小型埴形土器の体部破片である。形状は上下につぶれた扁球形を呈し、底部は平底気味になる。外面整形はハケメの後粗いヘラミガキで、内面は全体をナデで仕上げています。胎土には大粒の砂粒を若干含む。焼成は良好で堅緻である。色調は明褐色を呈する。なお口縁形状については不明であるが、頸部外側でやや凹線になっていたらしい。

10・11は壺形土器の底部破片で、いずれも下膨れの胴部にやや凹んだ小さな平底という同形状を呈する。外面は全体を丁寧なヘラミガキで調整し、内面は底面を中心にして時計回りに斜方向のハケメを施している。胎土は砂粒を含むもので、焼成はいずれも良好で堅緻である。色調は明褐色を呈する。

鬼高期（第132図～第133図）

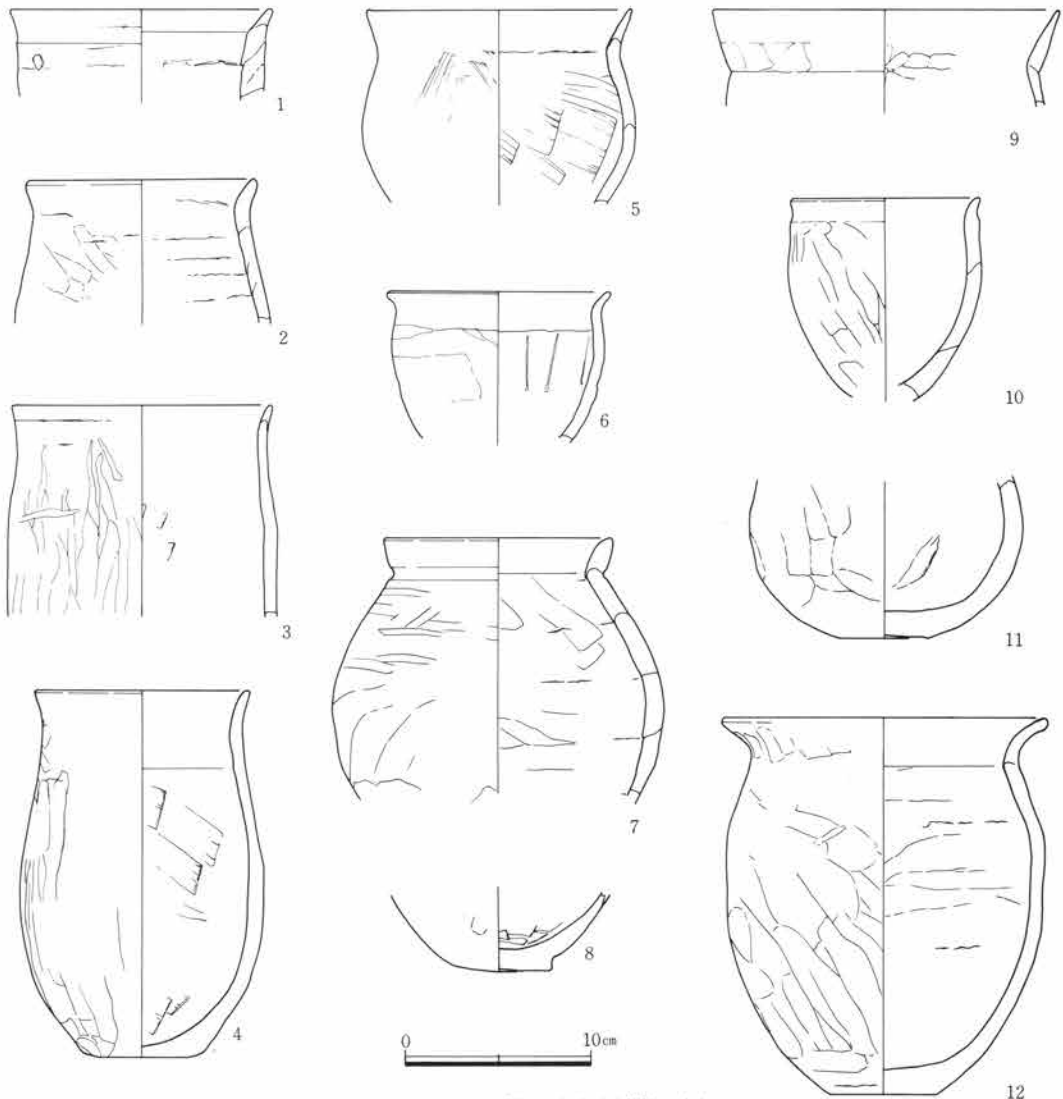
1～4は長胴の小型甕形土器の破片である。形状は口縁部が短かく外反し、頸部は緩くしまり胴部は中程がわずかに膨らむ筒状を呈すると思われる。1・3は胴部の膨らみがほとんどない点で、2・4と区別されるかもしれない。4は底部を有するが安定感に欠ける平底を呈している。1・2は輪積痕を明瞭に残しており、整形は粗いヘラケズリとナデで仕上げています。なお1は頸部の下位に「オナモミ」と思われる種子の圧痕が見られた。3は外面を縦方向の粗いヘラミガキ、内面を横方向のヘラケズリの後ナデで仕上げています。4は外面が縦方向、内面が斜方向のヘラケズリを施し、その後口縁部をナデで仕上げる。1～4はいずれも胎土に小砂粒を若干含んでおり、焼成はややあまく軟質である。色調は1～3が暗褐色、4が明褐色を呈する。

5は小型の甕形土器の破片で、短かく外方に開く単口縁と、緩い曲線で屈曲する頸部から球形に近い胴部へと続く。整形は外面を縦方向のヘラケズリの後、同方向のヘラナデ、内面に全体を横方向のヘラナデ、口縁部内外はナデを施す。胎土には砂粒を多量に含む。色調は明褐色を呈する。

6は鉢形土器で、底部を欠損する。短かく外反する口縁部に、下半がすぼむ半球形の胴部をもつ。整形は、外面に横方向のヘラケズリの後粗いヘラミガキ。内面には横方向のヘラナデの後丁寧なナデを施す。口縁部はナデを施している。胎土は砂粒を含んでおり、焼成は良好で堅緻である。色調は明褐色を呈している。

7は壺形に近い器形で、口縁部は短く開き、胴部は中位に最大径をもつ球形を呈する。整形は外面に縦方向のヘラケズリを施した後、肩部に粗に横方向のヘラナデを施す。内面には斜方向のヘラケズリの後粗いナデを施す。胎土には砂粒を多く含む。色調は明褐色を呈する。

8は底部破片で器形は不明である。不整形の小さな平底で安定感を欠く。おそらく胴部は球形に近いと思われる。内外面ともヘラケズリを施した後、外面は粗いヘラミガキ、内面はナデで仕上げる。胎土・焼成・色調は5・7に近似する。



第132図 D区祭祀跡出土遺物 (2)

9は甕形土器の口縁部破片と思われる。口縁部は一条の粘土帯を接合して作り出し、その接合痕がそのまま体部との境になっている。口縁部内外面はナデ、体部内外面はヘラケズリが施される。胎土に小砂粒を多く含み、焼成は良好である。色調は赤褐色を呈する。

10は6と同様の鉢形に近い器形で、短い口縁部にそのまま「卵形」の胴部が続く。体部外面は縦方向のヘラケズリ、口縁部および内面はナデが施される。胎土は比較的砂粒の少ない粘土を用いており、焼成はややあまく軟質である。色調は灰褐色を呈する。

11は壺形土器の胴部破片と思われる。ほぼ球形を呈し、底部は安定感を欠く不整形な平底となっている。調整は、外面はヘラケズリの後、粗いヘラミガキ、内面はナデを施している。成形・整形とも粗雑なものである。胎土には砂粒を含み、色調は明褐色を呈する。

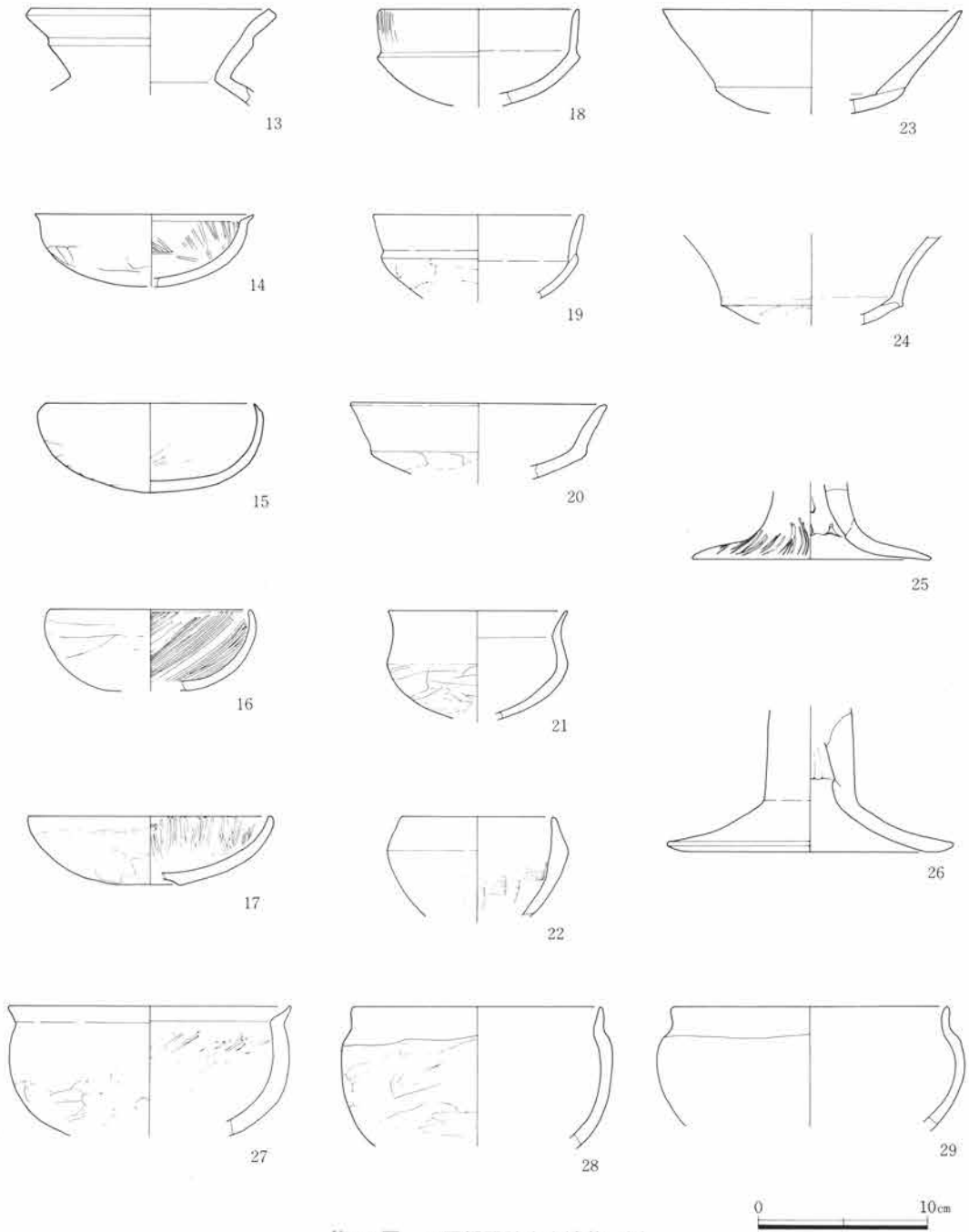
III 前原遺跡の調査内容

12は甕形土器である。口縁部は短かく外反し、頸部で緩く屈曲して扁球形の胴部に続く。底部は小さめの平底をなす。外面の整形は、全体に斜方向のヘラケズリを施した後、頸部と口縁部を粗くナデで仕上げる。内面はヘラナデとナデを併用している。胎土には小砂粒を多く含み、焼成は良好である。色調は明赤褐色を呈する。

13は壺形土器の口縁部破片で、頸部が「く」の字状に屈曲し、口縁部は、外面に段を有する。口唇部は外面に小さな平坦面をもち稜をなしている。内面は口縁部で若干凹んでいる。整形は全体をナデで仕上げる。胎土には砂粒を多く含み、焼成は良好で堅緻である。色調は明黄褐色を呈する。須恵器壺形土器の模倣形態かと思われる。

14～20は坏形土器で、その口縁形態より3種に分けられる。14は口縁部が鋭く「く」の字状に屈曲して小さく外側に開くもので、口唇部先端は尖っている。体部は浅い塊状で、緩い曲線の丸底を呈する。体部外面は全体を横方向のヘラケズリの後、上半はナデ、下半から底部にかけて粗いヘラミガキを施す。内面は丁寧なナデの後、体部に斜方向の暗文状ヘラミガキを施す。15～18は口縁部が内湾して立ち上がるもので、体部との境は不明瞭である。15は口唇部が内傾し、先端が尖る。底部は緩い曲線の丸底を呈する。外面は横方向のヘラケズリを施し、内面は丁寧なナデの後、斜方向の暗文状ヘラミガキを施す。口縁部内外面は外面ヘラケズリの後にナデを施している。16は口唇部が若干内傾し、先端は丸味をもつ。体部の形状は15とほぼ同じである。整形は外面ヘラケズリ、内面ナデの後、口縁部外面に横方向、体部内面に斜方向のヘラミガキを施す。なお、内面と口縁部外面のヘラミガキを施した部分は黒色処理がなされている。おそらく焼成時に伏せて炭素を吸着させたものかと思われる。17は15・16に較べ器高の低いもので、口縁部は上方に立ち上がり先端は丸味をもつ。底部は小さな凹み底を呈する。外面は横方向のヘラケズリの後、粗いヘラミガキ、内面は丁寧なナデの後に放射状のヘラミガキを施す。なお口縁部外面はナデを施すのみで、16のようなヘラミガキはみられない。18～20はいわゆる須恵器模倣の坏形土器で、口縁部は18・19がほぼ垂直に立ち上がり、20は外反して開く形態を呈する。18は口唇部が丸味をもち、底部はやや深い塊状の丸底を呈する。口縁部と底部との境は屈曲して稜をなすが、その先端は丸味をもつ。整形は底部外面をヘラケズリした後粗いヘラミガキ、口縁部外面及び内面全体は丁寧なナデを施す。なお、口縁部外面の一部に縦方向のハケメ状擦痕がみられるが、整形によるものとは思わない。19は形態的に18と近似するが、口縁部がやや外反する点で異なる。整形は底部外面に横方向のヘラケズリ、口縁部外面および内面全体にナデを施す。20は器高が低く底部は平底に近いと思われる。また、口縁部と底部の境の稜も弱く丸味をもつ。整形は19と同様である。胎土は14・15・17～19が小砂粒を含むやや木目きめの細かい粘土で、16・20は砂粒を多く含むやや粗い粘土を用いている。焼成は16を除き、いずれも良好で堅緻である。色調は胎土の違いと同じく14・15・17・19が赤褐色、16・20が暗赤褐色を呈する。

21は小型の鉢形土器である。口縁部は、頸部で弱く「く」の字状に屈曲して外方へ開く。体部は深い塊状で中位より上に最大径があり、強く膨らむ。底部は丸底を呈すると思われる。整形は



第133図 D区祭祀跡出土遺物 (3)

III 前原遺跡の調査内容

体部外面を横方向にヘラケズリの後、粗いヘラミガキ、口縁部外面および内面全体に丁寧なナデを施す。胎土は砂粒をほとんど含まない精良なもので、焼成は良好である。色調は赤褐色～明褐色を呈する。

22も小型鉢形土器で、口縁部がやや内傾し、体部は半球形を呈すると思われる。整形は体部外面を縦方向のヘラケズリ、内面に横方向のハケメを施し、口縁部内外面をナデで仕上げる。胎土は小砂粒を多く含み、焼成はややあまくもろい。色調は明赤褐色を呈する。

27は鉢形土器で、器形は14に近似する。口縁部は頸部で「く」の字状に屈曲して外方に開き、口唇部が若干内湾する。体部は塊状で、浅い丸底を呈すると思われる。整形は、外面を横方向のヘラケズリの後、口縁部から体部上半にかけてナデを施し、内面は丁寧なナデの後、斜方向の暗文状ヘラミガキを施す。胎土は大粒の砂粒を含むやや粗い粘土を用いており、焼成はややあまく軟質である。色調は暗赤褐色を呈する。

28・29は鉢形土器で、頸部が弱く屈曲し、口縁部が短く上方に立ち上がる形状を呈する。体部はやや上位に最大径のある半球形の塊状を呈し、器高は28が深く29が浅いものである。整形は両者とも外面を横方向のヘラケズリ、口縁内外面および体部内面をナデで仕上げています。29は器面が荒れてるためヘラケズリ痕はやや不明瞭である。胎土は28が砂粒を含むやや良質な粘土であるのに較べ29はやや粗い粘土を用いている。焼成は28が非常に良く焼き締まり、29はもろく軟質である。色調は28が暗赤褐色、29が灰黄褐色を呈する。

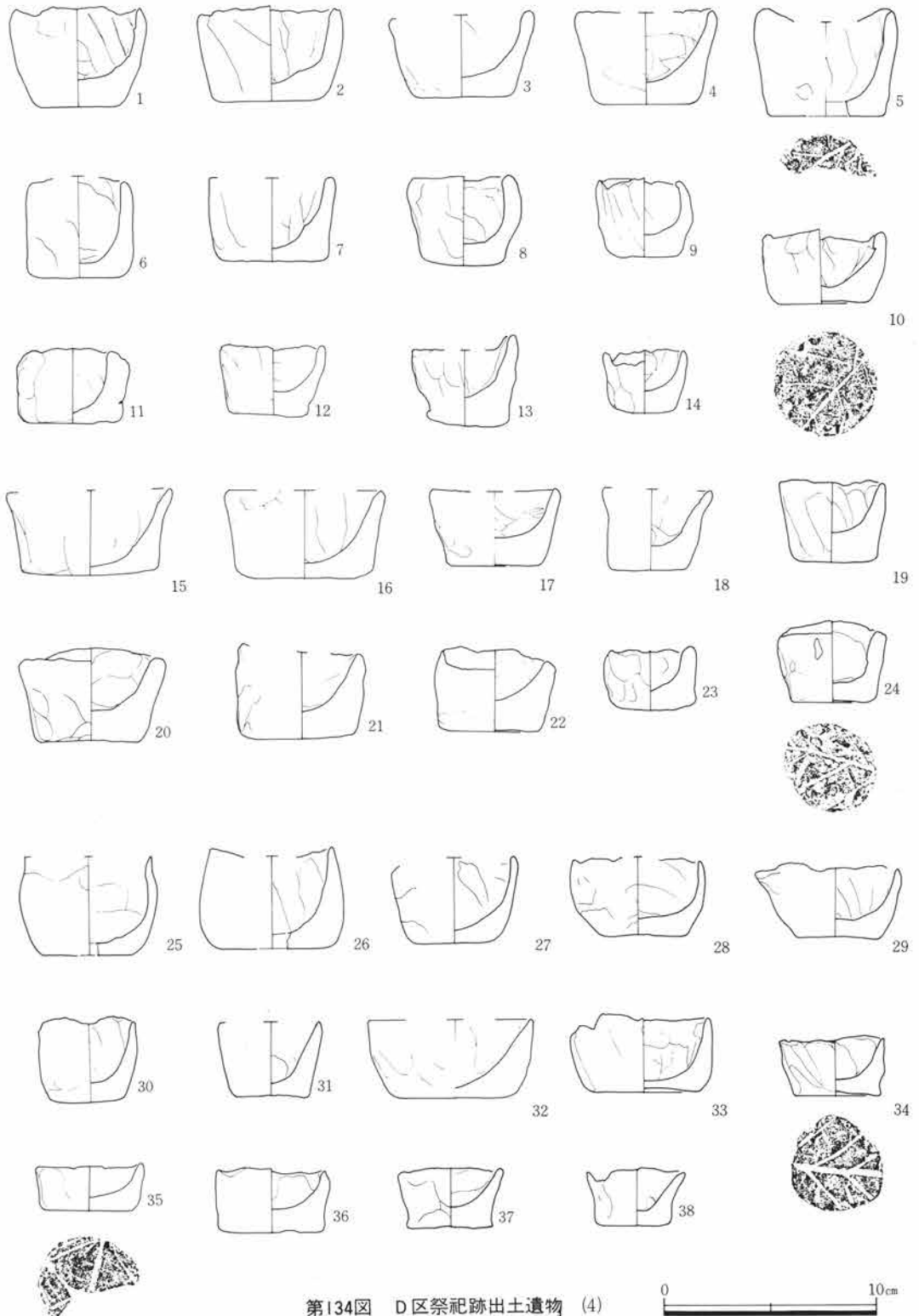
23・24は高坏形土器の坏部破片である。両者とも坏部と底部の境が段をなすもので、23は稜がやや弱く、24は強い。坏部の立ち上がりは、23が若干外反しながら口唇部で弱く内湾する形状を呈するのに較べ、24は強く外反する。整形は、両者とも底部外面を横方向のヘラケズリ、坏部内外面にナデを施す。胎土は小砂粒を含むもので、焼成は23が軟質、24は硬質である。色調は23が赤褐色、24が暗赤褐色を呈する。

25・26は高坏形土器の脚部破片である。円柱状の脚部に外曲して裾部が大きく開く形状を呈する。裾端部の形状について、25はほぼ水平、26は肥厚して外反するという差がみられる。整形は、両者とも脚部内面にヘラケズリを施した後、裾部内外面全体をナデ、外面に縦方向および放射状のヘラミガキを施す。胎土は砂粒を含むやや木目の細かい粘土を用いており、焼成は25が硬質で、26がややあまい軟質な仕上がりを示す。色調は両者とも赤褐色を呈する。

手捏形土器（第134図～第135図）

手捏形土器は祭祀跡出土遺物の中で主体を占めるもので、個体数は200個体以上と思われる。形態上の変化から数類に分類できるが、本稿では8種の類別を行った。形態上の特徴としては、大きく平底のものと丸底のものに二分できる。これは更に口径・器高・底径の比率によって各類型に分類する事ができる。また体部形状が内湾するものと外反するものも形態上の特徴と考え、分類要素に入れている。なお平底の一群をA類、丸底の一群をB類として扱っている。

A₁類—第134図1～14。平底を呈し、口径・器高・底径の比がほぼ同率の一群で、形態は筒状



第134図 D区祭祀跡出土遺物 (4)

0 10cm

III 前原遺跡の調査内容

を呈する。また口縁部は整形されず、器厚も全体に厚い。体部は直立かやや内湾気味である。なお5・10には木葉痕が残る。

A₂類——第134図15～24。平底を呈し、口径と底径の比はほぼ同率で、器高がA₁に比べやや低い。口縁部は整形されず、器厚の厚いものである。また体部はA₁と異なり外反気味のものが多い。24には木葉痕が残る。

A₃類——第134図25～31。形態上はA₁に近似するが、口縁部をつまみ上げて薄くする整形技法がみられる。

A₄類——第134図32～38。形態上はA₂に近似するが、A₃と同様に口縁部の整形技法がみられる。なお34・35には木葉痕が残る。

A₅類——第135図39～57。平底を呈し、口径と器高の比がほぼ同率で、底径が小さく、逆台形の形状を呈する。体部はやや内湾気味である。器厚は全体に厚いが、底部が特に肥厚している。39は整った器形を呈しており、手捏ね後、ナデ調整を施す点で他の手捏形土器とは異なる。なお、39には木葉痕。48には棒状の圧痕が残る。

B₁類——第135図58～69。丸底を呈し、口径と器高の比がほぼ等しい。体部は内湾気味で口縁部の整形はみられない。なお58は平底の可能性もあり、A類に含まれるかもしれない。

B₂類——第135図70～75。丸底を呈し、口径が器高よりも大きき、皿形の形状を呈する。口縁部の整形はみられない。

B₃類——第135図76～81。丸底を呈し、口径と器高の比がほぼ等しい。体部はやや内湾気味で底部を除けばA₅に近似する。口縁部はつまみ上げて整形を行なっている。

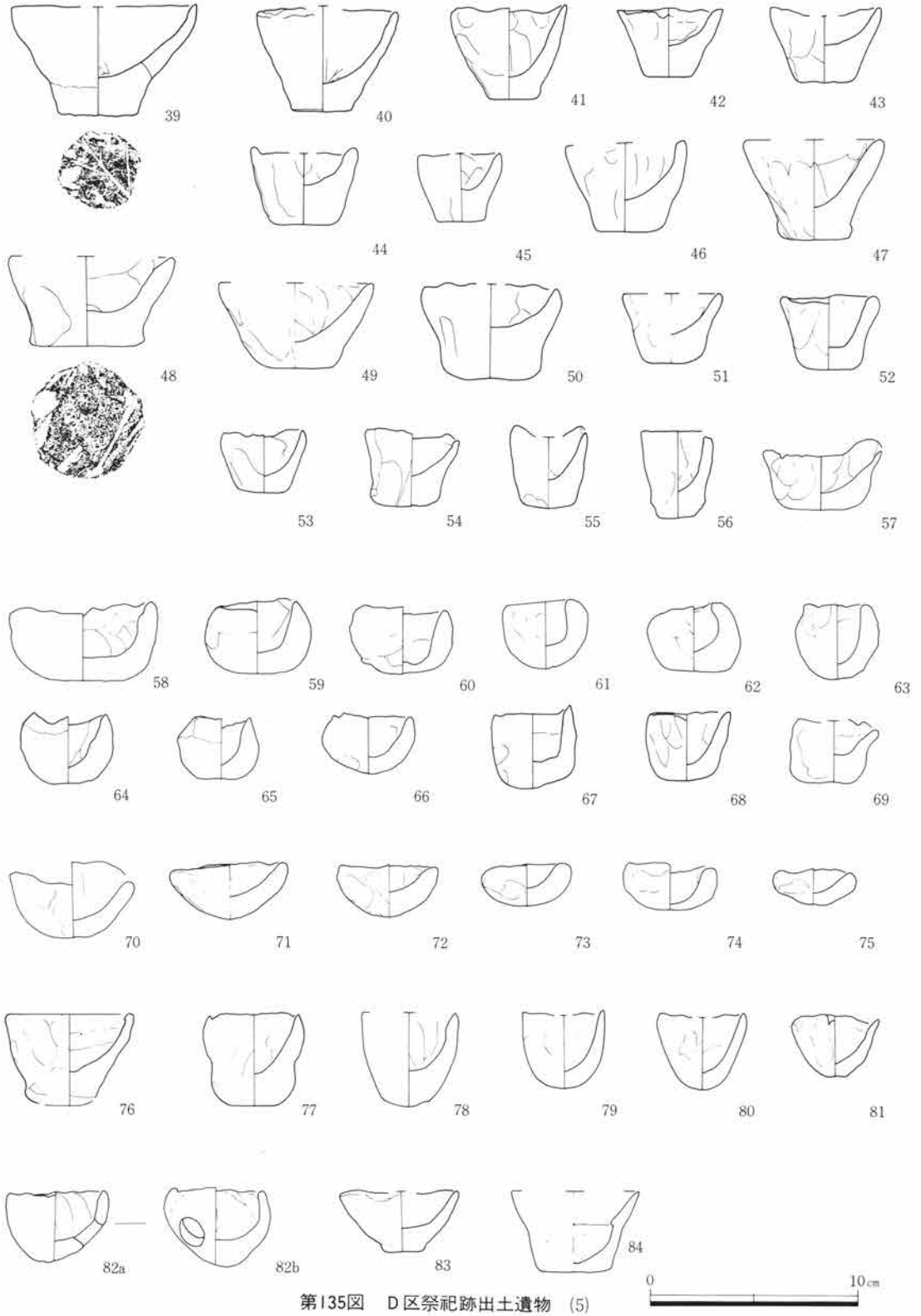
なお、82はB₁と同形状であるが、体部に円孔を穿っており、また胎土が他の手捏形土器と異なり砂粒の少ない良質な粘土を用いる点で異なっている。83・84はA₅に類似するが、胎土が良質で、また後者は口縁部をつくり出している点で特異なものと考えられる。

手捏形土器は、日常生活用の土器である壺・甕・高坏・鉢等を模したものと考えるのが一般的であるが、それが機能を持たない事や、手捏ねのみによる成形である事等から、個々の形態差を明瞭に分類する作業は非常に困難である。しかしながら当面は各形態がどの器種を模倣したのか、またそれらが時間的変遷をたどるのかどうかを把握する必要がある。

本遺跡出土の手捏形土器は、共伴遺物から鬼高I～II期のものと考えられるが、同期における各器種と対比した場合、A₅類は鉢形土器、B₂類は坏形土器、B₃類及びA₅類の一部が埴形土器に相当すると思われる。A₁～A₄は小さな変化は認められるものの、単純な形態で、特に想定しうる器種はない。しかしA₅類やB類に較べ中型品が多い事から、甕に相当することも予想されるが、推測の域を出ない。B₁類についても特定器種を想定するのは困難であるが、小型品が主である点から埴あるいは碗等を模倣したものかもしれない。

ここに見られる特定器種を想定できるものとできないものの相違は、模倣品から一定形態のものへの時間的推移を認めた場合、時間差として扱えられる可能性もある。またA₁類とA₃類、A₂

3 古墳時代の遺構と遺物



第135図 D区祭祀跡出土遺物 (5)

III 前原遺跡の調査内容

類とA₄類は口縁部を意識的に整形したかどうかの相違であり、あるいはこれも、同一器種を模倣したものの時間差として想定できるかもしれない。

本遺跡では一括して出土したものであり、出土状況や共伴遺物から年代差を証拠づける資料が得られなかったが、今後は住居出土資料や層別資料等をもとにして、手捏形土器の器種構成や変遷を追求する必要があるだろう。

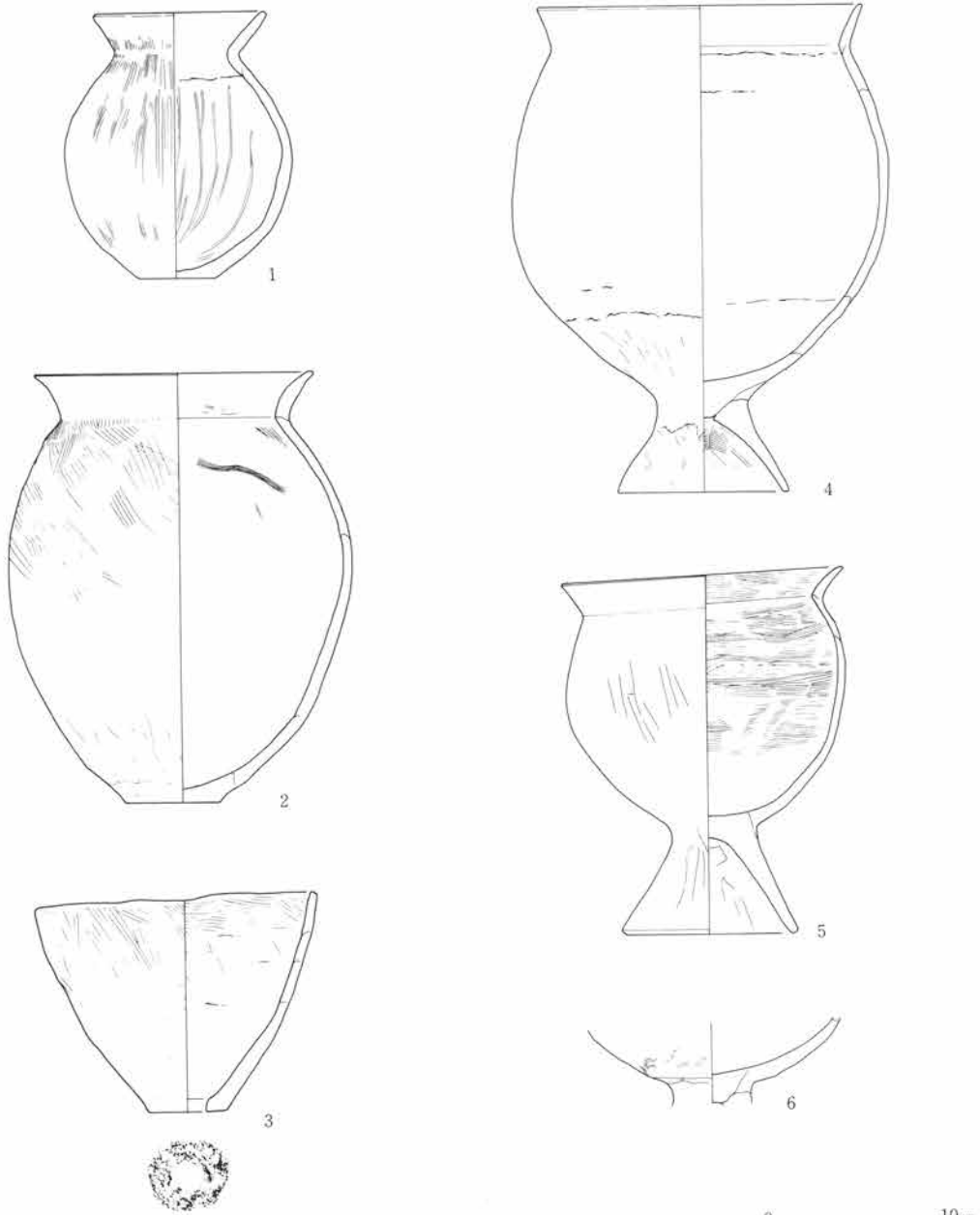
C区13-Kグリット一括出土遺物 (第136図)

1は小型壺形土器の完形品である。口縁部は外方に短く開く単口縁で、頸は「く」の字状に屈曲する。胴部は中位に最大径をもつ扁球形を呈し、小さな平底をもつ。口縁部と胴部の粘土帯接合痕が内面に残る。整形は、外面をハケメ整形した後、縦方向のヘラミガキを施し、内面はナデの後、縦方向の粗いヘラミガキを施す。また口縁部は最終段階でナデ、底面は粗いヘラミガキを施している。色調は暗褐色を呈し、胎土には小砂粒を多量に含んでいる。焼成はやや軟質で、もろい仕上がりとなっている。

2は甕形土器で、長胴平底の形状を示す。口縁部は短く外反し、頸部は「く」の字状に屈曲する。整形は、外面をヘラケズリした後、斜方向の粗いハケメを施す。内面はハケメを施した後、ナデ状の器面調整を施している。口縁部は内外面ともハケメの後ナデを施す。胴下半部外面と底面には、ヘラケズリ痕が明瞭に残っている。胎土に砂粒を多く含み、焼成はやや軟質である。色調は暗褐色である。

3は甕形土器である。体部が内湾する截頭円錐形で、やや器高の高い形状を呈する。底部円孔は径2cmで、焼成前に穿孔されている。整形は、内外面とも口縁部を横方向、後に体部を縦方向をハケメを施し、内外面下半部を主に縦方向のヘラミガキで仕上げている。なおハケメは先端が丸味をもち、条が不揃いな事から板片ではなく、植物の茎状のものを束ねて用いたと思われる。胎土には大粒の砂粒を含み、焼成は良好で硬質な仕上がりである。

4・5は単口縁付甕形土器である。4は頸部の括れが弱く、全体に下膨れの球形を呈する。脚台部は胴部に較べてやや小さく低い。整形は胴部にはハケメを用いず、全面ヘラナデを施す。口縁部はナデ、脚台部は粗い斜方向のハケメの後、端部をナデで器面調整する。なお胴部と脚台部の接合は「ほぞ」状の粘土塊充填によって行なう。胎土には小砂粒を多く含む。焼成は良好で硬質な仕上がりである。胴部中位には帯状に煤の付着が認められ、煮沸用に使われた事を示している。5は小型品で形状は4に近似する。脚台部は截頭円錐形で、胴部に較べてやや大きめのものである。外面の口縁部はナデ、胴部以下は縦方向の粗いヘラミガキを施す。内面は口縁部、胴部とも横方向のハケメを施し、その後下半部を縦方向のヘラミガキを施す。脚台部内面はヘラケズリの後、粗いヘラミガキを施している。胎土には砂粒を多く含む。焼成は良好で、焼き締まっている。なお脚台部内面に整形後砂粒の多い粘土をナデつけているが、おそらく底部と接合部の補強のためと思われる。



第136図 C区I3-Kグリット一括出土遺物

6は高環形土器の破片で、口縁部と脚部を欠く。形状はおそらく浅鉢形を呈すると思われる。整形は、外面に目の細かいハケメを施した後、内外面とも放射状のヘラミガキを行う。内面にハケメが施されたか否かは不明である。なお坏部下半に横方向のヘラケズリがみられるが、おそらく坏底部外面に稜を作り出す意図があったと解される。また坏部と脚部の接合には「ほぞ」状粘

III 前原遺跡の調査内容

土塊の充填によって行なわれている。胎土には細かい砂粒を含む、焼成はややあまく軟質である。色調は明褐色を呈する。

グリッド出土遺物（第137図）

1は壺形土器で下半部を欠く。やや外反気味に開く単口縁と下膨れの球形胴部をもつもので、頸部は強く「く」の字状に屈曲する。外面整形は斜方向のハケメを施した後、口唇部をナデ、胴部を縦方向の粗いヘラミガキで仕上げる。内面は、口縁部にハケメを施し、口唇部・胴部をナデで仕上げる。胎土には砂粒を少量含む。焼成は良好である。色調は明褐色を呈する。

2はS字状口縁台付甕形土器の口縁部破片である。口唇部は段をもって外方に聞き、その内面は外面に軟べ稜の弱いものである。頸部は「く」の字状に屈曲し、内面では丸味をもつ。肩部外面には縦方向のハケメの後、縦方向のハケメを廻らせている。内面は頸部付近を横方向のハケメで整形した後、全体をナデで仕上げる。なお肩部内面には、指頭圧痕が残る。胎土には砂粘を多く含むが、金雲母は含まれない。焼成は良好で、硬質な仕上がりとなっている。色調は暗褐色を呈する。

3は単口縁甕形土器で、胴下半部を欠損している。頸部で「く」の字状に屈曲する短い口縁部と肩の張らない胴部をもつ。口縁部内外面はハケメの後ナデ、胴部外面は斜方向のハケメ、胴部内面は丁寧なナデを施す。胎土に砂粒を含み、焼成はあまく軟質である。色調は暗褐色を呈する。

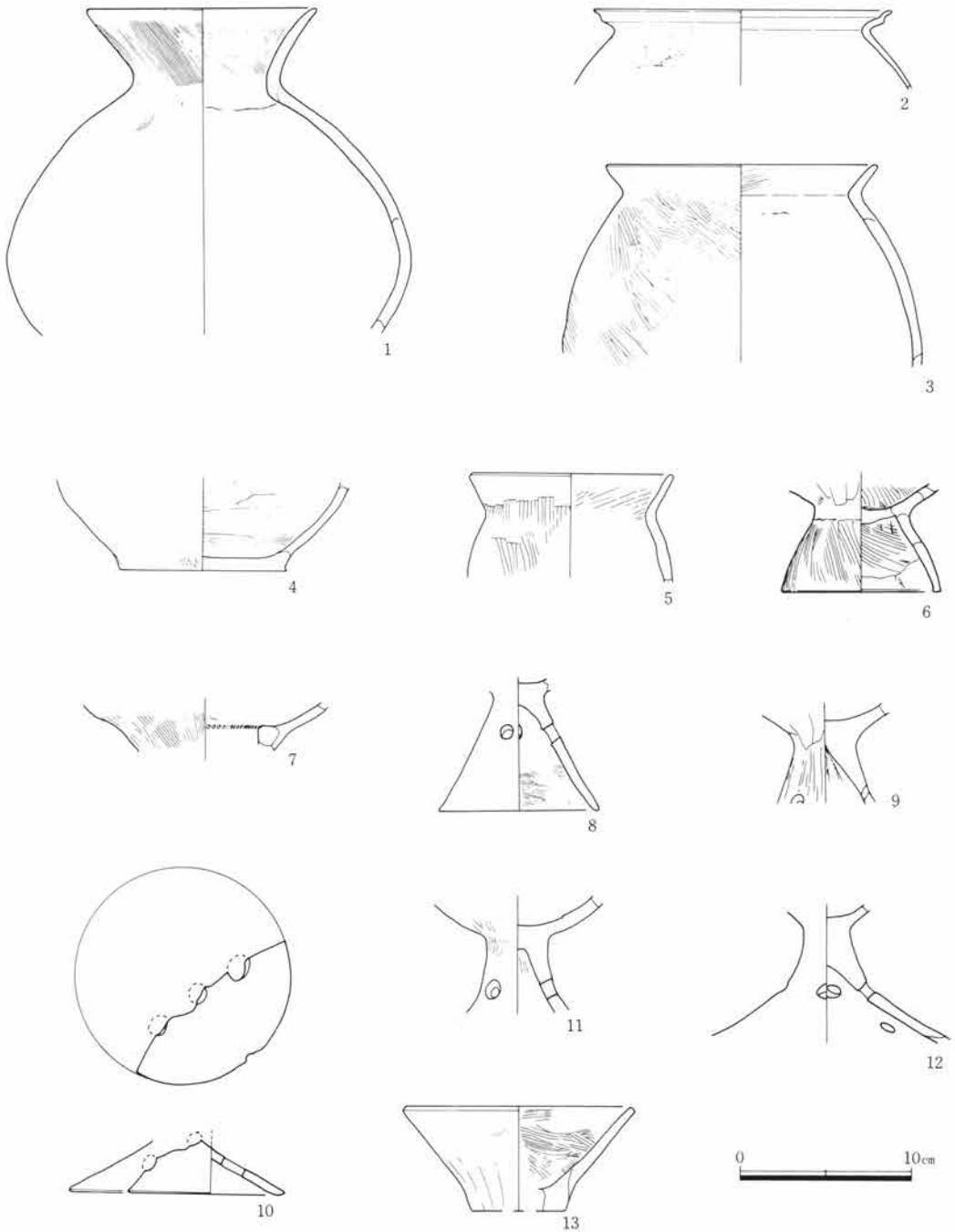
4は壺形土器の底部で、胴部の張りに較べてやや大きめの平底を呈する。外面は縦方向、内面は横方向のハケメで整形し、その後外面には縦方向の粗いヘラミガキを施す。底面はヘラケズリのままになっている。なお本例は胴部下半の接合部で剥落しており、接合面には接着効果を高めるためのハケメが施されている。胎土には砂粒を多く含む。焼成はややあまく軟質である。

5は小型の甕形土器で下半部を欠損している。頸部は「く」の字状に屈曲し、短かく開く単口縁をもつ。肩部は張らず、長胴になるようである。外面は頸部以下を縦方向のハケメで整形し、内面は口縁部を横方向のハケメ、胴部をナデで整形する。また口縁部は内外面ともナデ調整が施される。胎土には小砂粒を含み、焼成はややあまい。色調は暗褐色を呈する。

6は台付甕形土器の脚台部である。形状は内湾して開く台形を呈し、端部は内側にやや肥厚する。胴部外面と脚台部内面は斜方向のハケメの後、部分的ヘラケズリを施し、胴部内面と脚台部外面は鋭い斜方向のハケメで整形する。胎土には大粒の砂粒を多く含む。焼成はややあまくもろい。色調は明褐色を呈する。形態の特徴から単口縁甕形土器の可能性が高い。

7は第119図-18と同様な装飾器台形土器の破片と思われる。口縁部は大きく外方に開き、内面に粘土帯を廻らして段を形成する。この粘土帯の稜には篋状具の押捺による刻目が施される。内面は丁寧なヘラミガキ、外面は放射状のハケメを施す。胎土には小砂粒を多量に含む。焼成は良好で硬質な仕上がりである。色調は暗褐色を呈する。

8～10は高坏形土器の脚部破片である。8・9は器高の高い円錐形を呈し、10は裾部が大きく



第137図 グリッド出土遺物

開く形状を呈すると思われる。いずれも脚部中位以上に円孔を3ヶ所に穿っている。整形は内外面ともハケメの後、縦方向のヘラミガキを施す。9は坏部下半外面にヘラケズリを施している。胎土はいずれも砂粒の少ない精良な粘土を用いている。色調はいずれも明褐色を呈する。

III 前原遺跡の調査内容

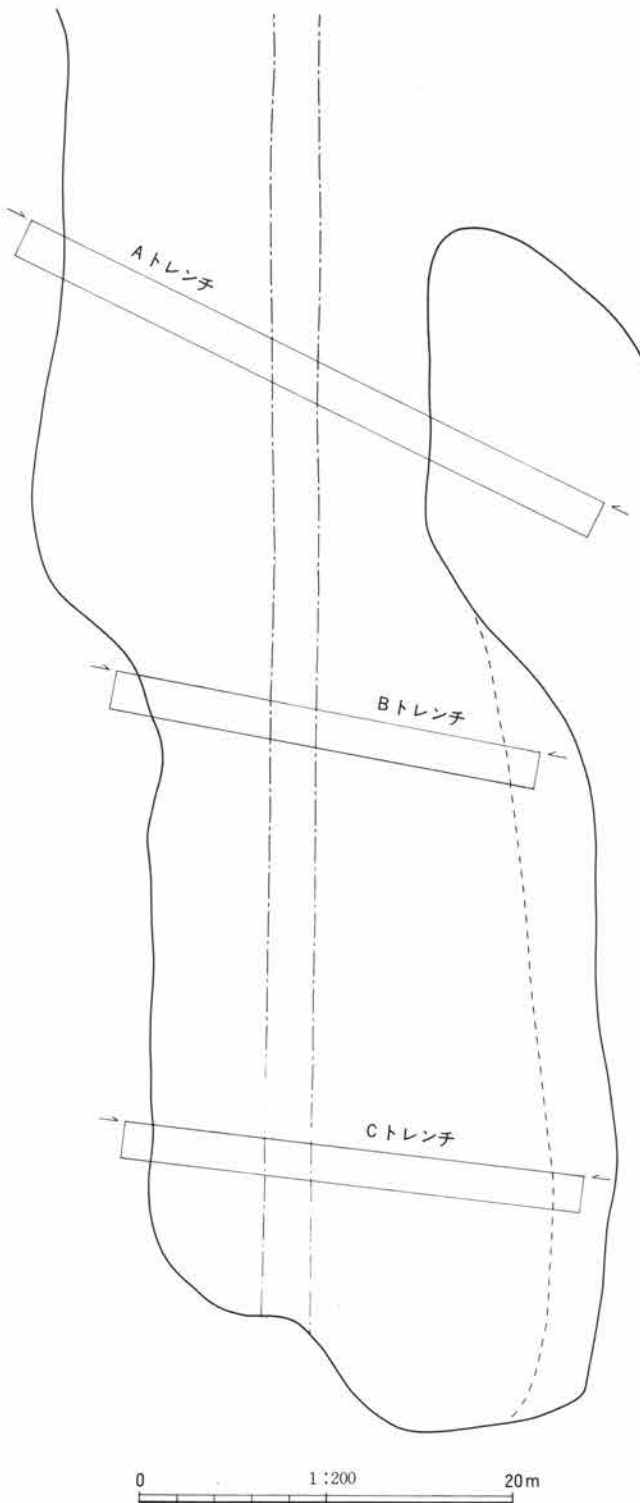
11・12は器台形土器の脚部で、裾部は大きく開くものと思われる。円孔は3ヶ所、二段の計6ヶ所に穿たれたと思われる。整形は丁寧なヘラミガキを多面に施し、内面はナデで仕上げている。胎土・色調は高坏形土器8～10とほぼ同様である。

13は小型鉢形土器の破片である。口唇部は外側に小さな面をもち、稜をなしている。整形は外面に縦方向、内面に横方向のハケメを施し、その後、外面は縦方向の粗いヘラミガキ、内面はナデを施している。色調は暗褐色を呈し、胎土に小砂粒を多く含む。なお底面はヘラケズリのまま器面調整はなされず、擦痕等も認められない。

4 八坂樋

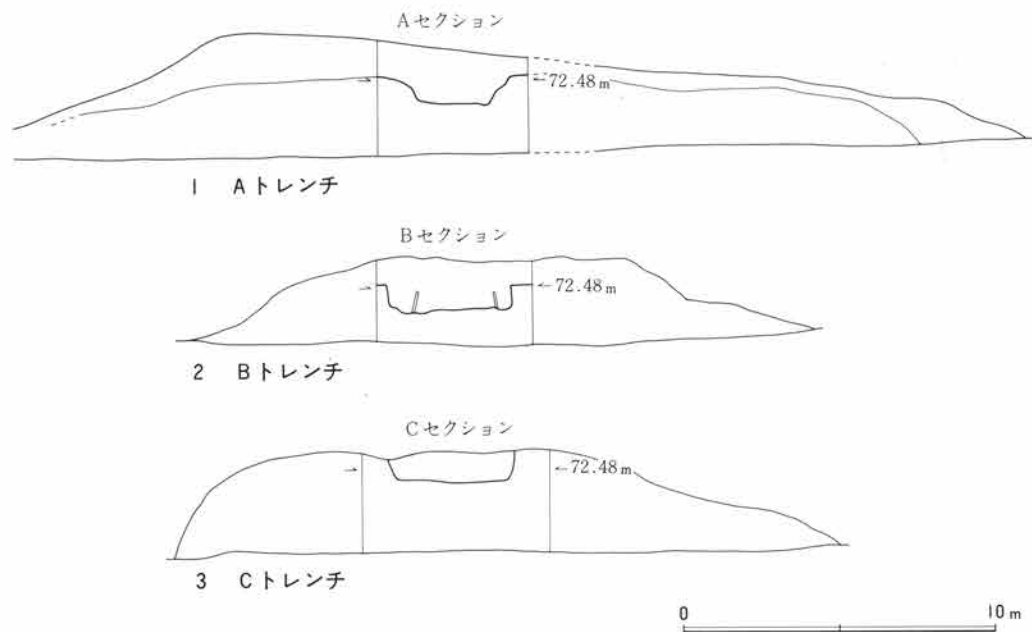
赤城南面に於ける水田農耕は、湧水利用による谷地水田を始原に溜池灌漑や河川灌漑の発達に伴い、次第にその規模の拡大がなされてきた。現在、赤城南麓を横断する用水は佐波新田用水、大正用水、群馬用水（用水堀ではなく埋管による通水）がある。これをさかのぼる12世紀代、既に赤城南麓を横断する用水堀が存在した。それは「女堀」と通称される巨大な用水堀遺構で、今なおその面影をとどめている。その後、悲願ともいうべき最初の南麓横断用水の完成は、江戸時代中期の宝永3年(1706年)に伊勢崎藩によって、八坂用水として開削された。当初の八坂用水は、旧利根川流域である荒砥川（上増田地内）から取水し、赤城南麓の台地縁辺の二之宮地内を通り神沢川に至る。神沢川を八坂樋によって渡河し、八坂に入り波志江を通過して粕川へ落水する（第141図）。全長はおよそ6kmである。「伊勢崎風土記」によれば、八坂樋の長さは27尺（約8.1m）、深さ3尺（約90cm）であると伝う（図版32）。また、開削期間は宝永2年10月に起工、翌年3月竣工しその間およそ7ヶ月に亘る。毎年神沢川の増水にせめられて被害を受けたが、数村は水利を得て民は大いに助かったという。

八坂樋調査は、荒砥川と神沢川合



第138図 八坂樋調査区概略図

III 前原遺跡の調査内容



第139図 八坂樋トレンチ断面図

流点の神沢川上流60m地点の台地西端に堤状に突出した部分である(第2図)。両川の浸食を受けた台地先端部の西端に八坂用水は開削された。標高は約73mで樋の施設があった突出部は、南北の長さ約70mで幅は15~25mである。調査は堤状突出部分を横断するトレンチを3ヶ所設定した(第138図)。

B断面では木樋の板材(第139図-2、スクリーントーン部分)が残っており比較的良好な状態で検出された。板材は高さ50cm、厚さ5cm程で両端にやや内傾している。樋の断面は、幅約3m程の掘り方があり、この中に底板・側板を入れ固定した後に掘り方との空間を粘質土を使用して詰め固め、樋を更に固定させると共に漏水を防いでいる。また、樋の土台である突出部のA断面の土層は自然堆積土を掘削して施工している(第140図-1)。B・C断面はA断面と様相が異なる。砂質土、ローム 黒色土等が版築状に平行堆積しており明らかに人為的なものであった。各層とも非常に固くしまっている。以上のように断面調査の結果、突出部は樋の土台として築堤したものであるとの結論を得た。その長さは30m余りである。築堤部の東接地は谷状の窪みがあるが、恐らくこの土を運搬して築いたものであろう。樋の支えを出来るだけ固定し、かつ安全性を求めるとしたら正に当然なことと言えるだろう。樋の規模については以前から論議があるが、調査結果にもとづき考えてみたい。神沢川左岸から築堤までの間が約25m、築堤部分が約30mである。築堤部分の樋施工は調査により明らかになっている所である。この地域一帯は砂質土で保水性に乏しい所である。従って、それを防ぐ為にかなり前後からの、樋施工の必要性が生じることであろう。つまり築堤前10数m、神沢川渡河後10数mであるが、これらの数値から27丈(81m)はほぼ一

(樋覆土)

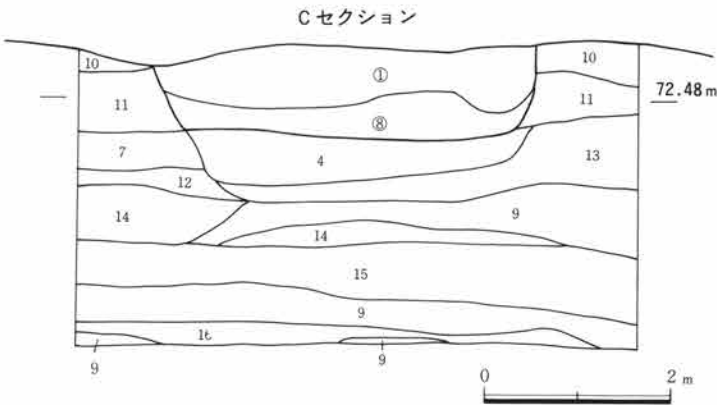
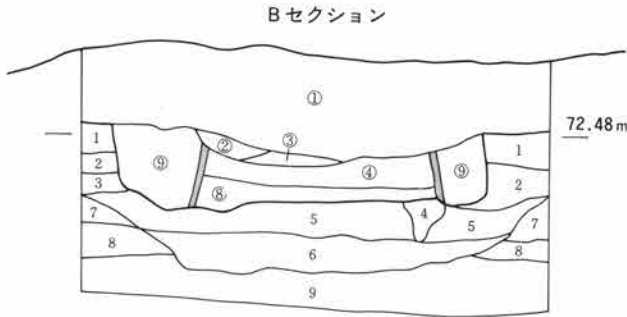
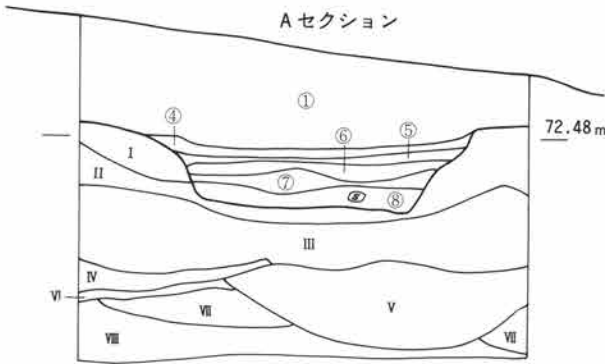
- ① 褐色土 砂を多量に含むサラサラした土で小礫を少量含む。
- ② 褐色土 ①に近似するが、砂を殆んど含まずやわらかい。
- ③ 砂層 ラミナ状に堆積する微砂層。
- ④ 褐色土 ラミナ状の微砂層を含む。
- ⑤ 砂礫層 下部は0.5~1.0cm大の礫層、上部は小礫と砂の互層。
- ⑥ 暗褐色土 小礫を少量含み、やや粘性をもち堅固。
- ⑦ 暗褐色土 褐色土と砂の互層。
- ⑧ 砂層 樋覆土の最下層である。下部に1.0~1.5cm大の礫と砂の堆積が認められ、鉄分の凝集が著しい。
- ⑨ 褐色土 粘性が強く、樋板材に接する部分には鉄分の凝集が著しい。

(築堤部土層)

- 1 暗褐色土 ローム小ブロックを含む。
- 2 黄褐色土 礫を含む砂質ローム。
- 3 黄褐色土 褐色土を含んだ砂質ロームで堅くしまっている。
- 4 暗褐色土 礫を少量含み粘性のある堅固な土で、鉄分凝集が見られる。
- 5 黄茶褐色土 礫を多量に含む砂質ロームでいたって堅い。
- 6 黄茶褐色土 礫を少量含み、粘性が強くしまっている。
- 7 黒色土 礫と砂を少量含み堅い。
- 8 褐色土 砂質ロームを塊状に含み堅い。
- 9 黒色土 やや粘性がありしまっている。
- 10 褐色土 サラサラした砂質土。
- 11 黄褐色土 砂礫混りのザラザラした土で堅い。
- 12 黄褐色土 砂質ロームと黒色土の混土。
- 13 暗褐色土 礫を多量に含み堅い。
- 14 黄白色土 砂質で、小礫を少量含む。
- 15 褐色土 ロームブロックを含む。
- 16 黄褐色土 褐色土をブロック状に含む砂質ローム。

(地山土台土層)

- I 褐色土層 小礫をわずかに含む粘性のある堅固な層。
- II 黄褐色土層 砂質ローム層。小礫をわずかに含む。
- III~VIII 黄白色土層 礫を少量含む砂質土層・水性堆積土層であり、ラミナ状堆積が著しく、部分的に鉄分の凝集が見受けられる。同質層であるが、堆積順に分層した。

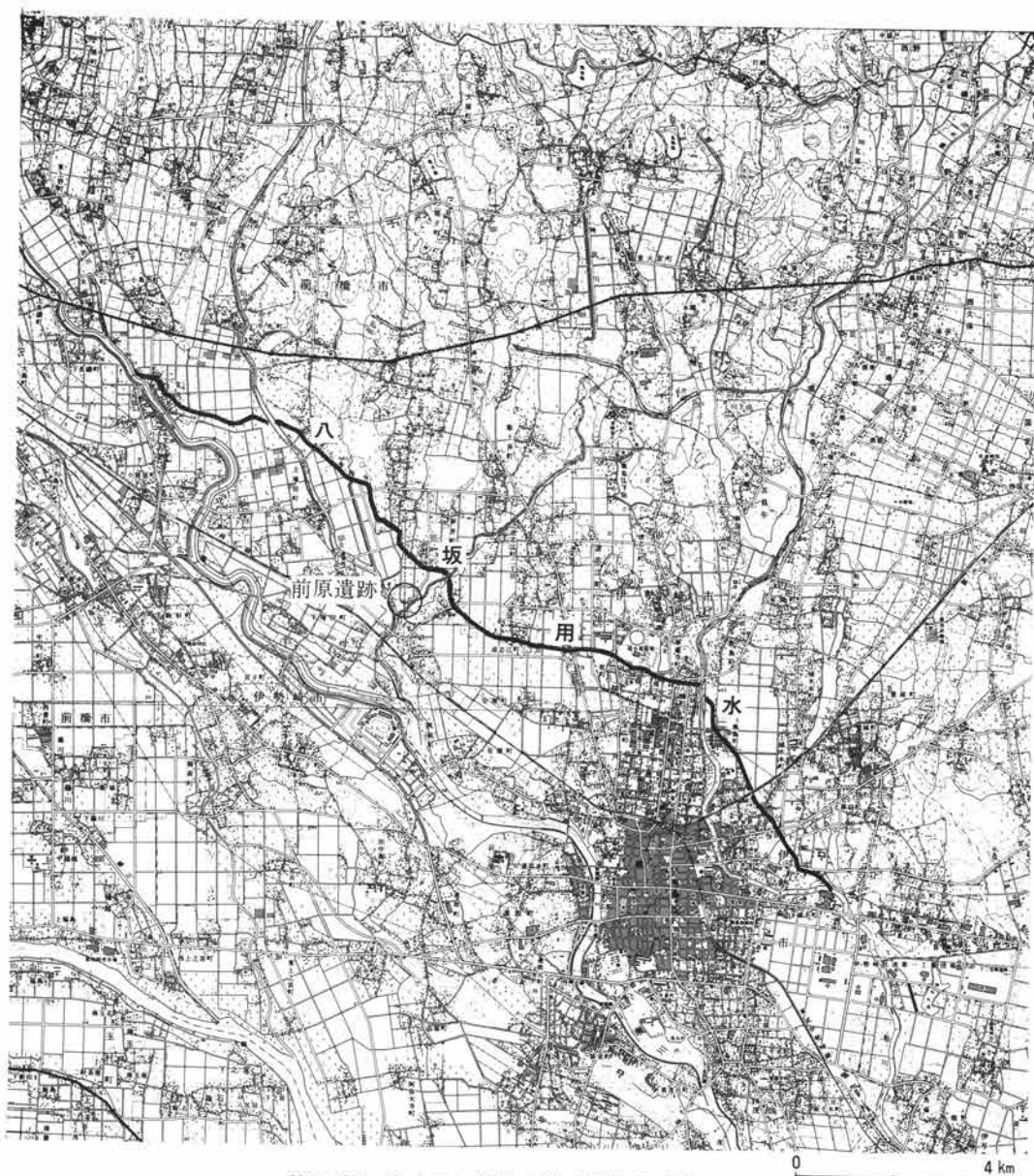


第140図 八坂樋セクション図

III 前原遺跡の調査内容

致する。幅は2m前後で深さ約90cmと考えたい。

八坂用水は大正12年まで、およそ200年間の永きに亘って利用された(図版33)。現在は佐波新田用水として桃木川より取水し、神沢川渡河に至り一部流路を変更し(約500m上流をサイフォンにより渡河)、下流は境町にまで及びその先はやがて早川に落水合流している(第141図)。また、八坂樋は昭和53年の土地改良事業の工事により、今はその姿を見ることはできない。



第141図 現在の八坂用水(佐波新田用水)

Ⅳ 赤石城址の調査内容

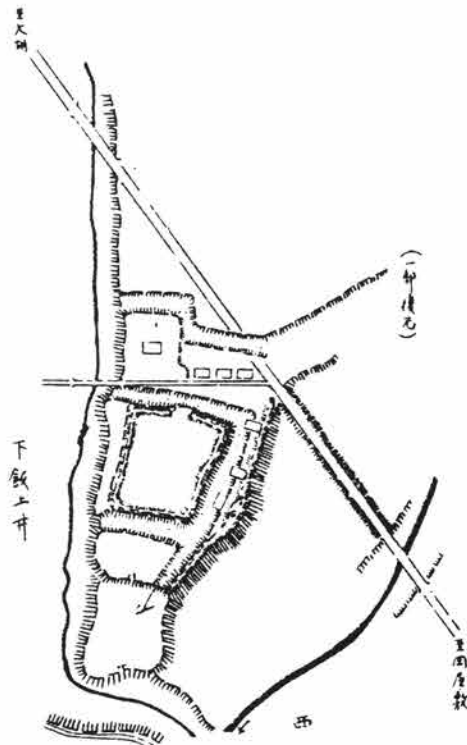
本城址について、山崎一氏は「群馬県古城墨址の研究—上巻—」のなかで、「中央の本丸は高さ4m程の土居をめぐらし、南と北とに虎口を開き北、東、南の三方に壕があって、西だけは腰曲輪をもつ。本丸を挟んで南北に郭を配し、南に3m程低く更に一郭がある。本丸の東に帯曲輪があり、内側の壕は交通壕である。最北の堀切りには「折」があって、そこに追手虎口が開く」と、その構造を紹介している（第142図）。20年程前まではこのような遺構がよく保存されていたと言われるが、現在では伊勢崎大胡県道で北東側追手虎口部分を南北に、また農免道路により本丸南側を南北に寸断され、更には削土や工場建設で、また住宅化に伴う削平等により、城郭址としての景観を殆んど留めていない（第143図）。

周辺の類例（第1図）としては、北方約350mに城山城、東南方約600mに中屋敷、その東約400mに岡屋敷、西南方約1.5kmに新土塚城、北西方約3.3kmに今井城、北方約2.5kmに荒子の砦などが点在するが、その築城年代や関連などについては不明な点が多い。なお、赤石城の築城年代は大永年間（1525年頃）と推定されており、創建者は赤石左衛門尉で、この地から伊勢崎へ移ったと伝えられている。

調査の方法と経過

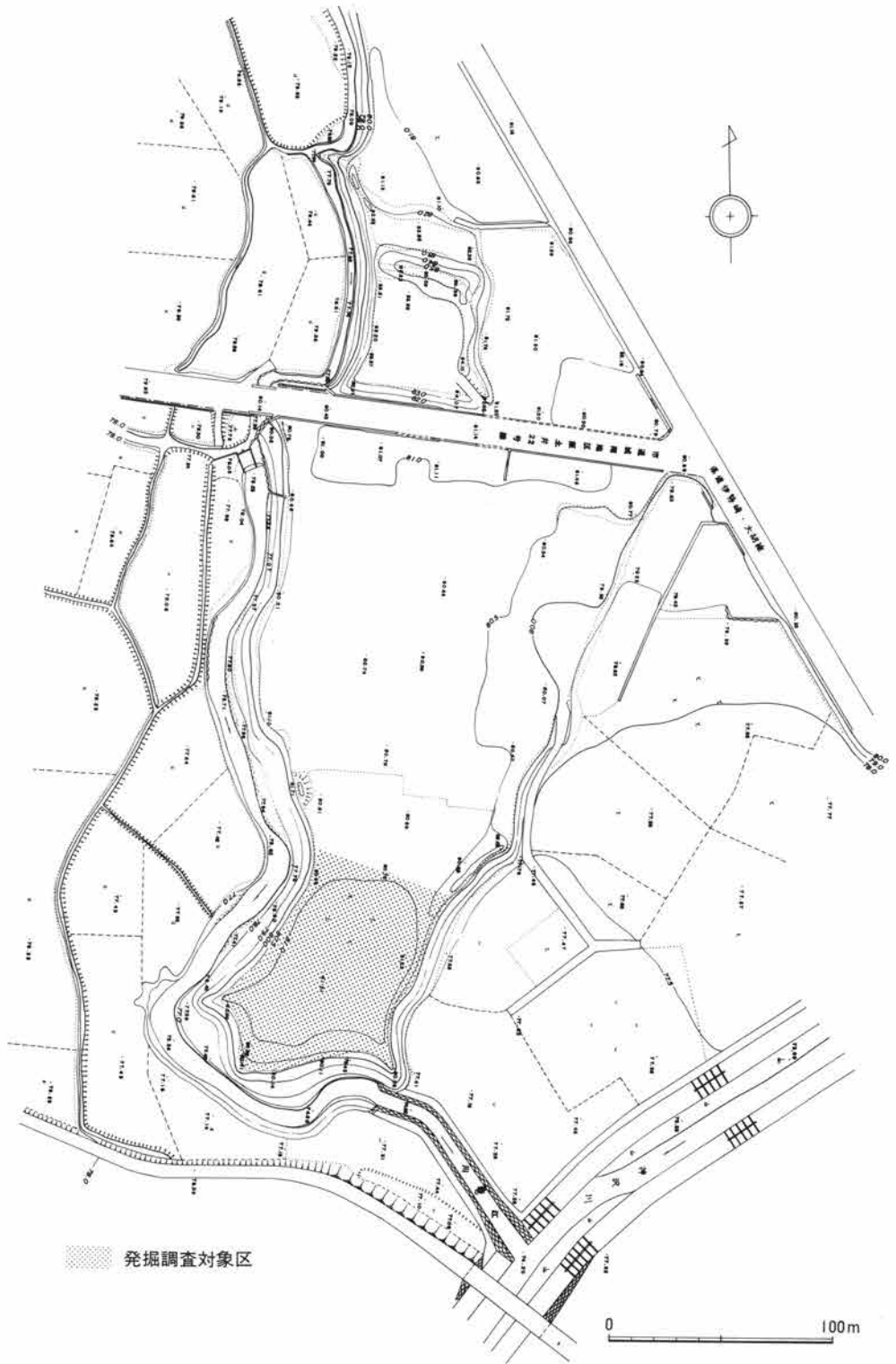
今回調査対象となった地区は、城郭址の南端に位置する「郭」にあたる部分で、現状は平坦な畑地であった（第143図）。調査は、台地中央に5×1.5mの南北トレンチを設定し、それに直行する東西トレンチを10m毎に設けて遺構・遺物の検出にあたりるとともに、土塁等の存在を加味して台地周縁部は全て調査対象とした（第144図）。

トレンチ調査の結果、調査地区北側で堀状の遺構およびピットが検出された。堀状の遺構については、直行する3本のトレンチを設定してその形態と走行の確定を行った。ピットについては、その配列に沿って追跡調査を行っ



第142図 赤石城（「群馬県古城墨址の研究 上巻」より転載）

IV 赤石城址の調査内容



第143図 赤石城址現況図 (1978年2月現在)

た。

検出された遺構

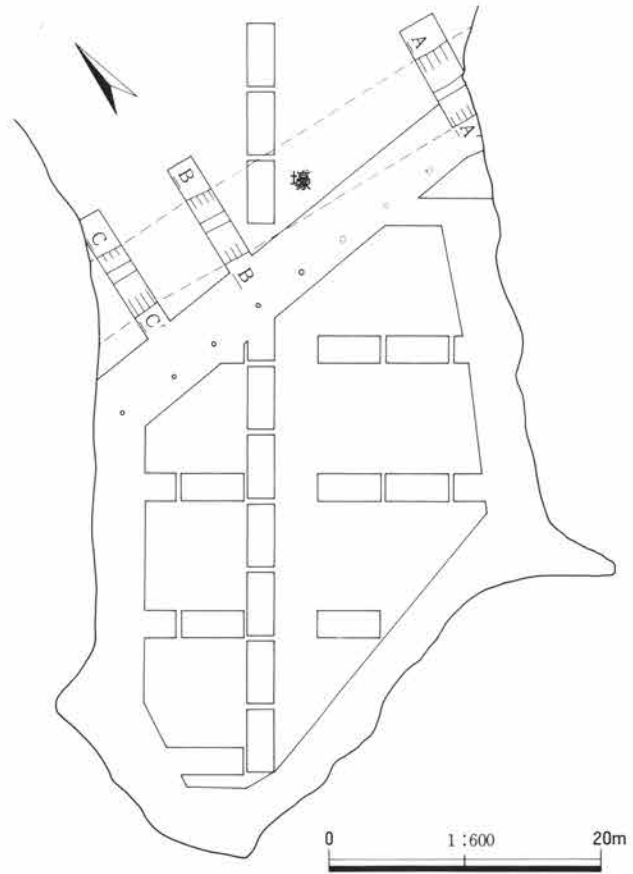
今回の調査では、郭を区画する壕と、その南側にピット列を検出した。台地周縁部からは遺構は確認されなかった。

壕は上端部が5～6mで、断面形はV字状を呈する。走行は台地の最も狭まる部分を、ほぼ磁北と直交するように直線的にぬけるものと思われる。壕の埋土中から遺物は検出されていない。

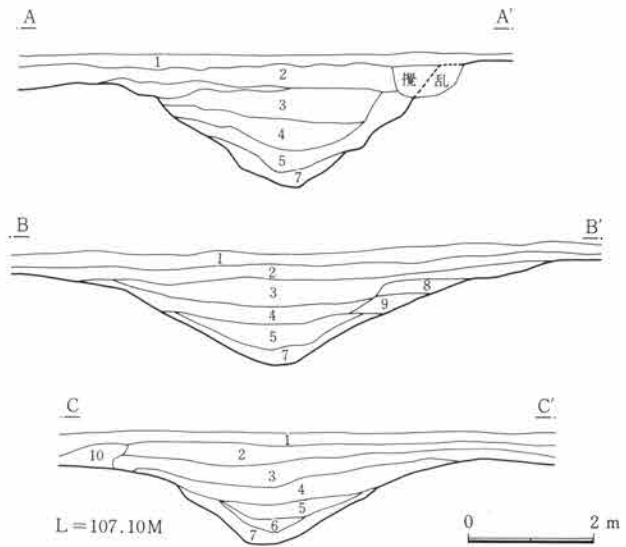
ピットは壕の南側に5本検出された。規模は径が25～30cm、深さが20～25cmでほぼ揃っている。ピット間の距離は3.7～4.6mと若干のばらつきはみられるが、各ピットは磁北に直交して一列に配されている。壕の走行とは若干角度がずれているが、本城址に関連する遺構と考えてさしつかえないだろう。また、東側部分は耕作等による攪乱を受けており確認し得なかった。

なお、本調査区から関連する遺物は検出されていない。

- 1 表 土
- 2 黄褐色砂質土
- 3 黄褐色土
- 4 褐色土
- 5 黒褐色土
- 6 褐色土
- 7 黄褐色砂質土
- 8 黄褐色土
- 9 黒褐色土
- 10 砂 礫



第144図 調査区遺構配置図



第145図 壕セクション図

V 成果と問題点

赤城山南麓地域は恵まれた環境を備えており、各時期にわたって数多くの遺跡が分布している。今回はそれらを構成する遺跡群のうち、荒砥前原遺跡および赤石城址の発掘調査により、重要ないくつかの成果を得ることができた。それらについて、ここで概要をまとめておきたい。

荒砥前原遺跡の調査では、縄文時代中期後半、弥生時代中期後半～後期、古墳時代前期の集落および古墳一基、古墳時代後期の祭祀遺物、江戸時代後半から大正末期まで使用されていた八坂用水に伴う懸樋が検出された。

縄文時代の集落は中期加曾利E式後半を中心としているが、特に主体を占める加曾利E3式期の住居からは多量の土器が検出され、加曾利E式後半の土器の変遷を把握するための好資料を得ることができた。また、これに続く加曾利E4式期の住居は2軒の検出にとどまったが、いずれも敷石住居である。保存状態は良好とはいいがたいが、2軒とも柄鏡形を呈するものと考えられる。本遺跡においても、加曾利E4式期にいたって住居形態が円形住居から柄鏡形(敷石)住居に変化することが明らかになった。なお、敷石住居のうち、C区3号住居からは大型の無頭石棒が、2T1号住居からは石柱が検出されており、住居形態の変化とともに呪術的要素の強い遺物を伴出するようになる。

弥生時代では中期後半～後期の遺構および遺物が、比較的まとまって検出された。本地域での弥生時代の調査例がまだ少ないだけに、重要な資料と言えよう。従来、群馬県における弥生時代の研究は西毛を中心に行なわれてきており、隣接する長野県との関連が重要視されていた。しかし、本遺跡出土の中期後半の土器は東北地方南部や東関東との関連を強く示しており、新たな検討を必要としている。また、A区1号・A区2号・B区3号住居からは茨城県を中心に分布する十王台式土器が出土している。A区2号住居では古墳時代前期の土器と共伴しているが、他の住居では十王台式土器のみの出土である。なお、十王台式土器を出土する住居はいずれも古墳時代前期の遺構が集中する台地東側縁辺部に限られるが、それ以前のものも全て台地西側で検出されており、後期後半に居住地点を移動していることが明確である。

古墳時代前期の集落は、台地東側のA・B区およびC区の2地点にまとまりをもって検出された。重複する住居はB区1号・2号住居のみであり、ほぼ一時期の集落と考えることもできよう。住居は方形を基調としているが、やや長方形を呈すものや小型のものも見られる。出土遺物も豊富なものが多く、特に火災住居であるC区2号住居出土土器は良好な一括資料である。また、4T1号住居では覆土中に浅間C軽石の純層がレンズ状に堆積しており、浅間C軽石降下以前の住居であることが判明している。なお、C軽石純層は甕形土器の中にも充満していた。

以上のように、各時期にわたって重要な成果が得られたが、今回の調査は台地縁辺部の一面を中心とするものであり、集落形態やその構造といったことについては今後の調査・研究を待たな

ければならない。

赤石城址の調査では、本丸の南に位置する2つの郭は壕によって区切られ、更に壕の南側には磁北にほぼ直交するピット列が配置されていることを確認した。部分的な調査であるために、城郭の全容を明らかにするまでにはとうてい至らなかったが、記録保存の一策として全体の実測図を作成し、今後の調査に備えた。(藤巻)

1 加曾利E式土器について

前原遺跡では、縄文時代の遺構として14軒の竪穴住居址と3基の土壇が検出されているが、それらのいずれも、中期後半の加曾利E式土器を伴出している。

本稿では、この加曾利E式土器について、文様構成や器形などがある程度判明しているものを中心として、その変遷過程を分析してみたい。

(1) 土器の分類

口縁部・胴部文様の差異により、I～VII類に大分類^{註1}されるが、文様変化や器種のあり方より更に各類内で小分類される(第146図)。

I類(1・2) 頸部に無文帯を設けて、口縁部・胴部文様帯を明確に2分している。口縁部文様帯は、2本一単位の隆線によるS字の変形した渦巻文が4単位に施文され、その隆線の両側は竹管による縁取りが加えられる。また、この渦巻文下の胴部には、隆線あるいは沈線による平行状の懸垂文が施文される。縄文は隆線や沈線の文様施文以前に施文され、施文工程は①縄文の施文②隆線・沈線の施文という順序になる。1・2ともに口唇に渦巻文を伴う小突起を配して、口縁部文様帯が2段構成となる点で特徴的である。

器形は、口縁部がく字形に屈曲し、胴部上半で一担括れた後に直線的に底部へと移行する。

II類(3) 口縁部の文様や器形は、I類と比べてあまり差異はないが、頸部無文帯が構成されない点で大きな差異がみられる。胴部の懸垂文は、沈線となっているが、その内側の縄文は磨り消されていない。施文工程はI類と同様である。

III類(4～7) 口縁部や胴部の文様は、半截竹管や指頭部による太い沈線文を主モチーフとして構成され、口縁部は渦巻文と楕円状の区画文が4単位に施文されるが、胴部は平行状の懸垂文が不規則かつ多単位に施文される。口縁部の渦巻文は、上下から交互に入り組み状に施されるもの(4・5)と、上方から並列的に施されるもの(6・7)とがある。文様の施文工程は、口縁部、胴部ともに①隆線・沈線の施文、②区画内への縄文施文、③①の文様のなぞりという順序で行なわれており、縄文の区画内充填手法によって、胴部の懸垂文内は無文帯となる。

深鉢形土器はI・II類と同様のキャリパー形を基本とするが、口縁部の屈曲が弱くなり、胴部

V 成果と問題点

下半でやや膨らみをもつ。

IV類 (8～17) 口縁部文様が太い沈線で表現されて、隆線によるモチーフがほとんど消失し、渦巻文が簡略化されて区画文化するとともに、楕円区画文と一体化するようになる。文様の施文工程は、III類と同様である。器形もIII類と類似するが、口径や器高に比べて底部の径がより小さくなる。胴部懸垂文や器種によって、更に4分類できる。

○IV a類 (8～11) 胴部懸垂文間の無文部の幅が広がるものである。口縁部の渦巻文は区画文化しているが、8のように渦巻文が省略されたものもある。10の胴部には、3本単位の懸垂文が施されている。

○IV b類 (12～14) 胴部に平行状の懸垂文の他に、蛇行状や蕨手状の沈線文が施されるものであるが、無文部に施文されるもの(12)と縄文部に施文されるもの(13・14)とがある。

○IV c類 (15) 口縁部文様はIV a・b類とほぼ同様であるが、頸部に幅の狭い無文帯をもち、胴部文様は2本単位の隆線による大柄な渦巻文が構成され、その隆線の両側に指頭による太いなぞりが加えられる。

○IV d類 (16・17) 一対の橋状把手をもつ浅鉢土器であり、肩部から胴部にかけてIV a類の口縁部文様と同様の区画文が施される。区画文内には縄文が充填されるが、16では胴部下半に条線文が施される。

V類 (18～27) 口縁文様や器形はIV類とほぼ共通するが、胴部文様が∩字状や波状の区画文で構成される。文様の施文工程は、III・IV類と同様、①沈線施文、②区画内の縄文施文、③①のなぞりの順で行なわれる。胴部文様のあり方によって、更に3分類される。

○V a類 (18～21) 胴部懸垂文の上端が連結して∩字状の区画文となる。20は∩字状区画文の相互間に蕨手状の沈線文を垂下させ、21では更に縄文の充填部分に蛇行状や蕨手状の沈線文を付加している。また、20は4単位に配した口唇の舌状突起部上端に、渦巻文を施している。

○V b類 (22～25) 胴部にU字・H字・楕円状の区画文を有するものである。22、23は区画文の間隙やその内側に蕨手状文が施されている。

○V c類 (26・27) 胴部上半に2本単位の沈線による波状文をめぐるせ、胴部下半にはV a類の胴部文様を施すが、胴部中位の括れ部分に沈線を一条めぐるせることにより、文様帯を明確に二分する文様構成をとる。27は口唇下に沈線をめぐるせるが、26とともに口唇下の縄文は1段のみ横位施文となって羽状を呈している。また、26の波状文下部には、縄文が充填されていない。

VI類 (28～49) 楕円区画文などの口縁部文様が簡略・省略化され、V類でみられた太い沈線による∩字状や波状・蕨手状・楕円状の胴部文様で構成されるものである。深鉢・浅鉢・カップ形などの器種があり、深鉢工器の器形はIV・V類とあまり差異はないが、一部には胴部中位の括れや下半の膨らみがより強くなるものも存在する。文様の施文工程は、①隆線・沈線施文、②区画内の縄文施文、③①のなぞりの順序で行なわれ、文様や器種のあり方により、更に7分類される。

○VI a類 (28～30) V a類の胴部文様と同様の∩字状や蕨手状の文様で構成される。口唇下に

沈線がめぐるもの(30)や口唇に1個の小突起を有するもの(28)もあるが、後者は小突起の表裏に渦巻文を簡略化したC字状の沈線文が施される。

○VI*b*類(31~36) 胴部上半に波状文を施し、その下部に∩字状の区画文を垂下させるものが主体であるが、36のように波状文のかわりに楕円状の区画文をもつものも含む。文様は入り組み状の構成をとるもの(31・33・34)と、胴部中位の括れ部分で分離されるもの(32・35・36)とが存在する。区画文内やその間隙に、S字状や蕨手状の沈線文が多用されるのも本類の特徴の一つであるが、S字状文は胴部上半に施されることが多い。また、口唇下に一条の沈線をめぐらせるもの(33~36)や、一帯のみ縄文の施文方向を変えているもの(31~33)もあり、更に口唇下の沈線が突起部分で渦巻状となり、口縁部文様帯のなごりをとどめているもの(33)もある。

○VI*c*類(37~39) 胴部中位の括れ部を境いとして、その上半部に大柄な渦巻文を施し、下半部に∩字状の区画文をもつ。文様は、1本単位の隆線によるもの(37・38)と2本単位の沈線によるもの(39)があり、隆線の場合、その両側には指頭による幅広いなごりが加えられる。器形は平縁と波状口縁の2様があり、平縁のものは大型であるのに対し、波状口縁をもつものは小型で屈曲が強くなる。

○VI*d*類(40~42) 器面の全面に櫛歯状工具による条線文が施される深鉢土器であるが、口唇下に幅の狭い無文帯をつくるもの(40・41)もある。

○VI*e*類(43~45) IV*c*類と同様、1対の橋状把手をもつ浅鉢土器であるが、肩部以下に∩字状や蕨手状の沈線文をもつ。これらの文様は交互に施され、∩字状の区画内には縄文が充填される。45は把手が欠損しているが、43・44と同様の橋状把手が1対付されると思われる。

○VI*f*類(46・47) VI*d*類と同様の条線文が施された浅鉢土器である。口唇下にやや幅広い無文帯をもち、その下位に一条の沈線をめぐらせる。47は46に比べて器高が高く、深鉢に近い器形となるものであろう。

○VI*g*類(48・49) いわゆるカップ形土器と呼ばれるものであり、1個の橋状把手をもつ。口唇下にやや幅の広い無文帯をもち、その下位にVI*a*類やVI*e*類と同様の∩字状や蕨手状の沈線文が交互に施文される。

VII類(50~54) 口縁部文様帯は省略化されるとともに、胴部文様帯のみで文様構成されるものであり、微隆起帯や円形竹管および棒状工具を使用した細い沈線によるV字状や∩字状の区画文が多用される。施文工程は、①微隆起帯・沈線区画文施文、②区画内の縄文施文という順序で行なわれるが、縄文施文後の①のなごりはほとんど行なわれない。器形はVI類と大差なく、小さな底部をもつ。文様や器種により、更に5分類される。

○VII*a*類(50) 胴部上半の文様が不明であるが、口唇下に微隆起帯あるいは細沈線をめぐらせ、それと接して同様の微隆起帯や沈線による平行状や∩字状の文様を垂下させるものである。

○VII*b*類(51) 微隆起帯や細沈線により胴部上半に連続したV字状の文様と、胴部下半に∩字状の文様を施するものである。口唇下には微隆起帯あるいは細沈線をめぐらせ、その間にやや幅

の広い無文帯を構成すると思われる。

○VII c 類 (52) 胴部上半に沈線による渦巻状とV字状の区画文を交互に配し、下半には∩字状の区画文を施す。口唇下には幅の狭い無文帯が形成され、文様は胴部の括れ部で上・下に2分される。波状口縁をもち、屈曲の強い小型の器形となる。

○VII d 類 (53) 口唇下にやや幅の広い無文帯と1条の微隆起帯をめぐらせ、それ以下に縄文を全面施文したものである。屈曲の弱い器形であり、口縁には橋状の把手が付される。

○VII e 類 (54) 一对の橋状把手をもつ浅鉢土器である。橋状把手を連結するように偏平な隆線が一条めぐるが、他は口縁部ともに無文となっている。器形はVI e 類と類似するが、屈曲は弱く、器高がより高くなる。

(2) 文様と器形の変遷

以上の分類は、全出土土器のうち、全体的な文様構成や器形の判断できる資料をもとにしており、量的に偏りがみられるが、口縁部・胴部の文様分析によって、各類がどのように変遷しているのかを、深鉢と浅鉢土器についてたどってみたい。

深鉢土器 まず、口縁部に渦巻文や楕円区画文をもち、胴部に懸垂文を施した深鉢土器の系譜についてみてみよう。I類は口縁部にS字文のくずれた2本単位の隆線渦巻文をもち、頸部に無文帯を構成するが、II類でも隆線の口縁部渦巻文やその下位の胴部に懸垂文を規則的に配置し、その間の縄文を磨消さない点などは、I類と共通している。しかし、頸部無文帯をもたずに文様帯の構成が変わる点は、大きな差異と言える。III類では口縁部文様の隆線が扁平化し、隆線を縁取っていた沈線が区画文化することによって、沈線渦巻文とともに文様表出の主体となる。また、太沈線化した渦巻文は、楕円区画文を挟んで交互に入り組むものもあり、ここではS字の意匠がほとんど崩れてしまっている。一方、胴部文様はIII類では口縁部と同様の太い沈線による懸垂文の単位が増加し、同時にII類のような配置の規則性も失われている。

こうした変化の他に、施文工程にも変化が生じている。I・II類では、縄文施文→隆線・沈線の施文の順であるのに対し、III類では隆線・沈線区画文の施文→区画内の縄文施文(区画内充填縄文)→区画文のなぞりという順序で行なわれ、縄文の施文意識が大きく転換している。

I類からII類への変遷は、頸部無文帯の消失により、また、II類からIII類への変遷は口縁部文様の沈線化によって端的にとらえられるが、胴部の磨消縄文手法をとび越えた充填縄文手法の登場は、その変遷がスムーズではなく、大きなヒアタスが存在していることを示している。

IV類の文様構成や施文工程は、III類と大差ないが、口縁部の渦巻文が簡略化されて円形の区画文となったり、楕円区画文と一体化したりする方向性をもつ点で、III類よりも文様の手抜きが進んでいる。V類の場合、口縁文様はIV a 類と共通するが、胴部の懸垂文が∩字状や波状の区画文となっている。このうち、V a 類にみられる文様変化は、IV類の平行状懸垂文の上端が連結して∩字状の文様となったものと考えられ、III・IV類に見られた充填縄文手法の採用による懸垂文

の区画文化が、より具体化したものと言える。しかし、V b 類の波状文は平行状懸垂文からの直接的变化とみるには無理があり、他型式からの影響をうけて成立した文様の可能性が強い。VI 類の深鉢形土器のうち、VI a・b 類は口縁部文様帯が口縁上端に押し上げられて簡略化あるいは消失し、V a・b 類の胴部文様とほとんど同じ文様によって構成されている。また、各文様は太い沈線によって施文され、III～V 類と同様の施文手法を踏襲している。口縁部文様帯の有無によって、V 類→VI 類 (V a→VI a 類、V b→VI b 類) という変遷をたどることができるが、口唇下をめぐる沈線文や渦巻文(33)および横位縄文の一段施文のあり方は、III～V 類の口縁部文様のなごりとどめていられる。VI a・b 類の中で、口唇下に沈線をめぐらせるもの(30・33～36)とそうでないもの(28・29・31・32)が認められるが、口縁部文様帯の消失や全体的な文様のモチーフとしては両者にほとんど差がないことから、同一段階でのバラエティーとしてとらえられるのであろう。VII 類は資料が乏しいためにその全容を述べるまでに至らないが、波状文や∩字状文を施す点はVI a・b 類と共通しているものの、それが微隆起帯や細沈線によって文様構成され、VI a・b 類でみられたS字文・蕨手文などの文様が消失している点は、VI 類からの変化としてとらえられる。おそらく、VII a 類はVI a 類から、またVII b 類はVI b 類から各々変化したものであろう。

一方、こうした文様とは系譜を異にするものに、IV c 類、VI c 類、V c 類、VI d 類、VII d 類が存在する。IV c 類の場合、口縁部文様はIV a 類と同様であるが、胴部文様が2本単位の隆線の渦巻文によって構成される点で大きく異なっている。このIV c 類は、VI c 類へと移行することが口縁部文様の有無によって把握されるが、VI c 類では微隆起帯に近似した1本単位の隆線や2本単位の沈線による渦巻文へと変化している。例えば、VI c 類の37は隆線の両側に指頭によるなぞりを加えるが、これが39のような沈線区画文へと変化し、更に縄文の充填部分がネガとポジの関係で入れ替わったものが、VII c 類となるのであろう。VII c 類の沈線はVI c 類に比べて細く、円形竹管あるいは棒状工具によって施文される点は、VII a・b 類とも共通している。この系統の土器は、大型と小型の両者が認められるが、小型化するものの多くは波状口縁を呈する。

V c 類はVI b 類と類似した文様をもつが、胴部上半の沈線波状文が2本1単位であることや、胴部中位に沈線をめぐらせて文様を明確に2分している点で異なっている。こうしたあり方は、いわゆる連弧文土器の基本的文様構成と合致しており、その系譜を当該土器に求めることができると思われる。また、胴部下半の文様がV a 類など類似することからみて、V a 類と併行期に位置するものであろう。

VI d 類は条線文のみによって文様構成されるが、この前段階の資料が検出されていないため、その系譜は明らかでない。口縁部文様帯を形成しないことや器形などから見て、VI a～c 類との共通性が強いと言えよう。また、VII d 類は口唇下に微隆起帯をめぐらせて胴部に縄文のみを施文するものであるが、縄文と条線という差はあるものの、他に文様を持たない点や口唇下に無文帯を形成する点はVI d 類とも共通しており、微隆起帯の有無によってVI d 類→VII d 類という変遷が想定される。

V 成果と問題点

次に器形での変化をたどってみると、I類で顕著であった頸部から口縁部にかけてのく字状の強い屈曲は、II類でやや弱まり、III類では口縁部のなだらかな湾曲と胴部下半の膨らみがみられるようになる。IV類では更に底部の縮少化が顕著となり、V類でも同様のあり方を示すが、VI類では口縁部の内湾や胴部下半の膨らみが、より強くなるものも存在する。VII類はVI類とほぼ同様のあり方を示す。また、III類からVII類になくは、器形の大型化するものも存在する。このような器形変化の他に、波状口縁の変化が見られる。口唇に山形状の小突起を配した波状口線をもつものは、I～VII類にかけて認められるが、更にその波頂部や裏面に渦巻文をもつものに、I類、V a類(20)、VI a類(28)、VI b類(33)などがある。こうした小突起上に渦巻文をもち、口縁部文様帯が2帯構成されるものは、I類にその系譜をたどることができる。しかし、波状口縁の全てが上記と同様の系譜をもつのか否かは明らかでない。

以上のことを文様の変化を中心に要約すれば、I類(口縁部文様の隆線表現、頸部無文帯)→II類(頸部無文帯の消失)→III類(口縁部文様の沈線化、区画内充填縄文)→IV類(口縁部渦巻文の区画文化)→V類(胴部文様の明確な区画文化と波状文の出現)→VI類(口縁部文様帯の消失と波状・∩字状・蕨手状文による文様構成)→VII類(微隆起帯・細沈線による文様構成)という変遷をたどることができよう。

浅鉢土器 浅鉢土器の文様は、基本的に深鉢土器の文様変遷に強く規制されていると言える。こうした観点より見れば、肩部にIV a・b類と同様の楕円区画文をもつIV d類から蕨手や∩字状文をもつVI e類、更には括れ部に微隆起帯をめぐらせるVII e類への変遷がたどれよう。VI f類はVI d類の文様を模倣していると見られるが、肩部に1対の橋状把手を持ついわゆる「両耳壺」と呼ばれるIV d・VI e類とは、文様ばかりでなく器形においてもその系統を異にしている。両耳壺の器形は、新しい段階になるにつれて、胴部の膨らみが弱く、器高が高くなる傾向が看取される。

VI g類は浅鉢土器ではないが、やはりVI a類の文様を踏襲しており、VI e・f類と共にVI a類と併行期に置かれるものであろう。

(3) 各類の共伴関係

次に、I類からVII類までの時間的先後関係を遺構の共伴資料より分析し、先述した変遷過程について検証を加えてみたい。

明確に共伴関係を示すと思われる住居址の埋設土器や床面直上からの出土土器について、それを住居址別に分類したものが第2表である。この表からも判るように、D区1住ではIII類(4・5)とV b類(23)、C区12住ではIV b類(13)とVI f類が共伴しており、更に口縁部および胴部下半が欠損しているために明確ではないが、IV aまたはV a類に属すると思われる埋設土器が、4 T 1住でVI b類(33)と4 T 4住でIV a類(10)やVI g類(49)とそれぞれ共伴関係にある。また、4 T 1住では住居中央の埋設土最下層よりIV a類(8)が出土しているが、この土器はその出土状況からみて、床面に置かれていたものが住居の埋設過程で転倒した可能性もある。いずれにしても、

IV a類とVI b類とがほぼ共伴すると見て良いだろう。C区3住では、埋甕にVII a類が使用され、床面より若干浮いた状態でVII a～d類が出土しており、明確な共伴資料とは言えないまでも、出土土器の全てがVII類に属する。I類とII類に関しては、資料の少ないともあるが、他類との共伴関係は認められない。

上記の例からみると、IV・V類の口縁部文様帯を有する土器とそれの省略されたVI類とが、かなりの頻度で共伴関係にあることが理解できる。また、こうした資料にいわゆる吹上パターン的な出土状況を示す4 T 1・2・4住や、B区1塚などの埋土中からの一括出土土器を加え得るならば、そうした共伴関係はより可能性の高いものと言える。これに対して、I類とII類、II類とIII類、VII類とIII～VI類などの間には、明確な共伴関係は認められない。

つまり、こうしたことはI・II・VII類が各々1時期を形成し、同様にIV～VI類も同一時期としてとらえることができよう。しかし、IV～VI類の共伴関係も基本的には廃棄時の同時性であり、その出土状況を加味するならば、個々に若干の時間差を見い出すことができる。例えば、IV・V類は住居の埋甕に使用されるのに対し、VI類はいずれも床面からの出土であり、炉内や出入口部を含めた埋甕が住居の構築時に設置されるものであるとすることができるならば、IV・V類に比べVI類がより後出である可能性を示すものとも言えよう。^{註2}一方、III類はV類と共伴関係にあること

表一 2 遺構内出土土器の共伴関係一覧

遺構番号	埋 設 土 器		床面直上	埋 没 土 内	第146図掲載の土器番号
	炉	出 入 口			
C区3住 C区11住 C区12住		VII a	IV b, VI f	VII a～d IV a, VI a IV a・b・d, V c, VI a ～c	9 13, 16, 26, 29, 48
D区1住 2 T 1住 3 T 1住 4 T 1住	IV a or V a	III, V b III	VII e VI b	III, IV a・b・d, VI a・d IV a, VI b～d・f, VII c	4, 5, 23 54 6, 7, 14, 17 8, 10, 33, 36～38, 40, 52
4 T 2住 4 T 4住	V b			III, IV a・c, V a～c, VI a・b・d IV a, V a, VI b～f	15, 18, 20～22, 24, 27, 28, 34, 35, 41 11, 31, 32, 39, 43, 44, 46, 49
B区1塚		IV a or V a	IV a, VI g	IV a・b, V b, VI a・b・d・e	25, 30, 42, 45
その他					2 (C区5塚), 1, 3, 12, 19, 47, 50, 51, 53 (遺構 外)

V 成果と問題点

がD区1住で確認されており、更に3T1住や4T2住での埋土中におけるV類やVI類などの一括出土資料を加味した場合には、IV～VI類ともそう大きな時間的差異はないとも考えられるが、VI類との明確な共伴関係が認められないことや上記のIV・V類とVI類との出土関係を考慮するならば、III類はIV・V類よりも、若干先行する可能性をもっている。

(4) 各類土器の編年

各類土器について、文様や器形の型式学的な分析と、遺構内での共伴関係による層位学的な分析結果を総合するならば、その変遷はI類→II類→III類→IV・V・VI類→VII類とすることができよう。更にこうした変遷を加曾利E式土器の編年^{註3}の中に位置付けるならば、I類は頸部に無文帯を構成することや口縁部のS字文の変化のあり方からみて、加曾利E2式としてとらえられる。頸部無文帯を構成せずに、口縁部には沈線による渦巻文や楕円区画文を、胴部には懸垂文と磨消縄文帯をもつ土器が加曾利3式であるとする編年観に立てば、II類は磨消縄文をもたず文様的にI類と共通する点があるが、同3式の古い段階に位置するものであろう。また、III～V類は充填縄文手法による胴部磨消縄文帯の無文帯化という変化はあるものの、同3式に比定できるものであり、更にIV・V類と共伴関係にあつて単独で出土することのほとんど見られないVI類は、口縁部文様帯が簡略化あるいは省略化されていたとしても、同3式の範中でとらえられるべきものと考えられる。前述したように、文様の変遷過程や埋甕という出土状況の中にIV・V類とVI類との時間的な差を見出し得るが、それは一型式を認定できるほどの差ではなく、むしろIV・V類からVI類までの文様変化が比較的短い期間内で完了していることを示すものであろう。また、III類に関しては、VI類との明確な共伴が認められない点でIV～VI類よりも若干先行する可能性があり、これが型式として分離できるものなのか否かについて、II類を含めて加曾利E3式の細分作業の中で検討する必要がある。しかし、III類とII類の間には、胴部に磨消縄文帯をもつ土器群の存在が想定されることから、III類をはじめIV～VI類は同3式の中でも新しい段階に位置づけられるものであり、少なくとも同3式が2細分できる可能性を指摘しておきたい。VII類の文様構成は、VI類との共通性をもっているが、微隆起帯や細沈線による施文手法は、VI類に認められないものであり、同4式としてとらえられる。

(5) 問題点と今後の課題

以上、前原遺跡から出土した加曾利E式土器について、その変遷過程を分析し、編年の位置付けを行なってみた。資料の関係から、III～VI類の土器を中心とした分析にとどまったが、その過程で気付いた問題点を幾つか指摘しておきたい。

1つには、Vb類やVIb類の胴部文様にみられる波状文の系譜である。これについては、現在のところ、Vc類にみられるような連弧文土器の文様にその系譜を求める考え方が大勢を占めている。^{註4}Vc類は胴部下半にVa類と同様の文様をもつことからみて、連弧文土器でも最終段階に

位置するものであり、前段階の3本単位の連弧文が2本単位へと簡略化されているものの、Vb類やVIb類の1本単位の波状文とは異なる。また、文様構成が胴部の横位沈線文を境として明確に2分される点などは、連弧文土器の基本的文様構成を継承するものであり、Vb類やVIb類との大きな違いでもある。更に加曾利E式土器総体の中で見れば、連弧文土器のモチーフは、口縁部のS字文を中心とする加曾利E式土器の変遷過程に同化・吸収される方向性をもっており、それが最終段階において、逆にS字文からの系譜をもつIII・IV類などの胴部文様に影響を与えてゆくということは、考えにくいではなからうか。

現在のところ、この系譜についての明確な見解をもちあわせていないが、こうした波状文出現の背景には、施文工程の変化が介在しているものと思われる。III・IV類では、胴部の沈線施文→区画内への縄文施文→区画のなぞりという施文工程の登場によって、その前段階には胴部の主文様としてあった懸垂文間の磨消縄文帯が無文部に転化し、更に懸垂文の区画文化とともに地文としてあった縄文部が区画内縄文として主文様に置換されるという、いわば、ネガとポジの関係の施文意識の転換が行なわれており、これを契機としてV類の∩字状や波状の胴部区画文が出現している。つまり、こうした施文工程の変化による胴部懸垂文の区画文化という変遷過程で、他型式からの影響を受けて波状文などの区画文が生じていると想定されるのであるが、実際に、Vb類(24)にみられる胴部の区画文には、大木9b式土器のH字状のモチーフと類似するものがあり、ここでは同式からの影響による波状文生成の可能性を考えておきたい。

もう一つは、IVc類やVIc類の胴部に見られる隆線渦巻文の系譜に関してである。この土器は「胴部隆帯文土器」とも呼ばれ、大木式土器にその系譜を求める考え方が一般的であるが、その中には大木式土器そのものとする考え方もある。^{註5}最近、この土器について堀越正行氏の論考があり、同氏はこの隆線渦巻文土器とS字文の系譜を引く加曾利E式土器との共伴関係を検討することによって、「大木9a式の胴部渦巻状隆帯文が加曾利EⅡ式後半の土器に一部取り込まれ、更に加曾利EⅢ式土器へと発展」したものとして、その成立過程を明らかにしている。^{註6}これを言いかえるならば、IVc類やVIc類の隆線渦巻文土器が大木式土器そのものでなく、その影響を受けて成立した異系統の加曾利E式土器であるとして考えることができよう。氏の言う加曾利EⅡ式後半・同Ⅲ式は、おおよそ本論での加曾利E3式前半・同式後半として対比されるものであり、筆者らもこの考え方に基本的に賛同するものであるが、^{註7}この隆線渦巻文のもたらされる時期に関しては、今後の資料の増加によって、更に遡る可能性もあろう。また、加曾利E式土器の中におけるこの隆線渦巻文土器の消長に関しては、埼玉県の島ノ上遺跡、裏慈恩寺東遺跡、ゴシン遺跡等の報文中で、ここで言うIVa・b類やVa・b類などの口縁部渦巻文系とも言うべき土器に対するVIc類の胴部隆線渦巻文土器の後出性が論じられ、それを型式細分によって把握しようとしている。この問題についても、すでに堀越氏によって千葉県中野僧御堂遺跡2住、小池麻生遺跡14住や東京都廻沢北遺跡1住などにおける両者の共伴例から、その可能性が否定されている。^{註8}当遺跡では、VIc類の隆線渦巻文土器と他類との良好な共伴資料が存在しないために明言できないが、型式

V 成果と問題点

学的には口縁部文様帯の有無によるIV・V類とVIc類との時間差が認められるとしても、4T1住・4住などの埋土中からのIVa類、VIb・d・f類を含めた一括出土状況を考慮した場合、それを型式差として認定することは困難と思われる。

前原遺跡出土の加曾利E式土器は、同3式後半を主体としているため、本論でもその分析が中心となった。分析不十分であることは否めないが、口縁部文様帯を有するIV・V類とそれを消失しているVI類との共伴関係が確認され、ここではそれらを加曾利E3式の最も新しい段階として位置付けた。基本的には同3式の型式細分によって把握すべきであるが、この点に関しては全体的な加曾利E式土器の編年とも関係する問題であり、後日を期したい。こうした土器群の共伴については、埼玉県志久遺跡や島ノ上遺跡などの報文中で、笹森健一氏によって「加曾利EIII式」と呼称されたものであり、筆者らとその型式名は異なるが、これらの土器群を一型式として把握することの妥当性を、本遺跡でも確認し得たと言えるだろう。しかし、IV・V類とVIc類との型式細分やVb・VIb類に見られる波状文の系譜および学史を踏まえた加曾利E式土器の編年観については、見解を異にするものである。

今後、県内における該期資料を総合的に検討するとともに、他地域との資料と対比する中で、上記の問題点をはじめ、本論では扱い得なかった加曾利E式土器全般についての変遷を明らかにしたいと考えている。

(石坂・藤巻)

註1 本遺跡から出土した土器の分類については、III章でも行なっているが、本論ではこれとは別に加曾利E式土器の分析のために、再分類をしている。

註2 こうしたIV・V類とVI類との関係は本遺跡の北東2kmに位置する二之堰遺跡の14住・22住(文献76)や埼玉県裏慈恩寺東遺跡1住(文献41)、同宮地遺跡2住(文献21)などの出土土器にも認められる。

註3 加曾利E式土器の編年については、下記のa表に分類できるほど諸説に分かれ、今だ一定の見解をみるに至っていない。こうした混乱は早急に解消されなければならないものであることは言を待たないが、問題はそれをどのような次元で一致をみるのかである。加曾利E式土器編年の混乱の原因については、山内清男による土器編年の研究成果を正当に理解・継承しなかったことによって生じたものであることが、能登 健(文献26)、戸田哲也(文献66)の両氏によって論じられている。両氏は、この問題解決のために、各研究者が山内編年を再確認することによって、加曾利E式土器研究の共通基盤を作ろうという提起をしているのであるが、これについては山内による加曾利E式土器編年の具体的内容の提示がないとする米田明訓氏や宮崎朝雄氏らの意見(文献66・67)もあり、単に細分型式の呼称名に関してだけでなく、その具体的内容という問題も内包しているのである。

いうまでもなく、山内による加曾利E式土器の細分は、大木式土器編年との対比の中で行なわれてきたのであり、それは伊東信雄氏によって考古学研究誌上に紹介された下記b表の1929年の山内編年表からも、うかがうことができる。こうした学史的背景を踏えれば、その具体的内容の補充や両型式相互の細部における対応関係についてはこれからの問題としても、能登・戸田両氏が指摘したように、加曾利E1式(大木8a式併行)、同2式(大木8b式併行)、同3式(大木9式併行)、同4式(大木10式併行)を基本ラインとすることができるのではないか。

本論での加曾利E式土器の細分型式名は、このような考えのもとに1969年の山内編年(文献15)に順拠しているが、その具体的内容(特にE3・E4式)に関しては、筆者らの見解によるものである。

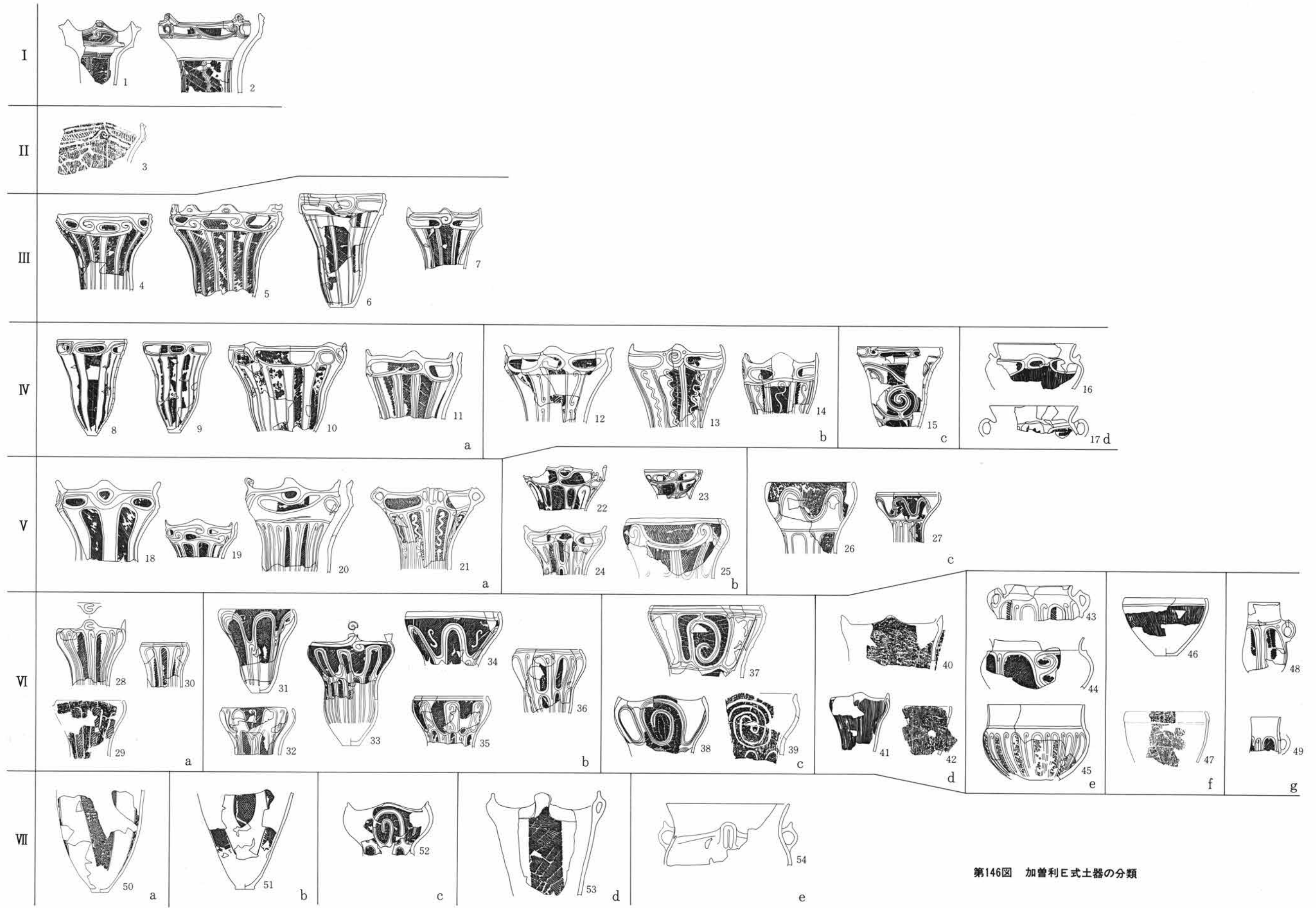
註4 笹森健一氏(文献31)や折原 繁氏(文献34)による論考以来、こうした考え方が多くなされているが、山内清男は日本先史土器図譜(文献6)の中で、連弧文土器とこのVI類に類似した土器とが、その系統を異にすることを意味すると思われる「別の型式」であるとしている。

註5 埼玉県花影遺跡(文献24)の報文中では、VI類(38)とほぼ同様の文様構成をとる10号住居出土の土器に対して、「大木9b式土器」としている。

註6 堀越正行 1984. 文献74を参照。

註7 ただし、堀越氏が同論文中で「加曾利E II式後半」の土器と考えた荒砥前原遺跡のIV類(15)は、口縁部の区画文のあり方や4 T 2住内におけるV・VI類土器との一括出土状況を見る限り、むしろ「加曾利E III式」の中でとらえられるべきものと思われる。

註8 註6に同じ。



a表 加曾利E式土器編年の各説対照表

綾 鈴 木 登 (1981)	吉 田 (1956 1958)	坂 田 (1965)	栗 原 (1962)	堀 越 (B) (1975)	堀 越 (A) (1972)	新 藤 (1976)	米 田 (1980)	岡 本・ 戸 沢 (1965)	谷 井 (1974)	宮 崎 (1979)	山 内 (1969)	能 登 (1975)	戸 田 (1976 1977)	安 孫 子 他 (1978 1980)	堀 越 (C) (1984)
E 1式		E I				E I(a)	E I(a)		E I(前)	E I(前)	E 1	E 1	I	I	
E 2式	E I		E I	E I	E I	E I(b)	E I(b)	E I	E I(中)	E I(中)	E 2	E 2	II a II b II c	II	E I
E 3式	E II E III	E III	E II	E II	E II	E II	E II	E II	E II(前) E II(後) E III(前)	E II(前) E II(後) E III(前)	E 3 E 4	E 3 E 3(前) E 3(中)	III IV	IV V	E II E III
E 4式			E III	E III	E III	E III(a) E III(b)	E III(a) E III(b)	E III E IV	E III E IV	E III(後) E IV	E 4	E 4 E 4(前) E 4(中)	IV V VI VII	VI VII	E IV E V

※「縄文土器大成」3(文献65)より転載、加筆した。

関東	陸前	陸奥
	……槻木 1	堀の内 1
織 維A(茅 山) …… 2		2 大洞Pre-B 3 = 境2 オセドウ上層
B(黒谷等) ……大木 1 ……中居貝塚 I a		加曾利 B
	2	○ Pre-B 2 = 三貫地下層
諸 磯 a	3	安 行 { ……Pre-B 1 = 三貫地中層 中居遺跡○
	4	………B ○
b	5	………C先 ○
阿玉台	6	II a C旧 ○
	7	b C新 ○
加曾利 E 1	○	A ○
2 …… 8 …… III a		A' ○
3	9	弥生式 a 樹形 1
	10 = 境 1	b 吉田 2
		…

b表 1929年の山内氏縄文土器編年表(文献36)

〈参 考 文 献〉

- 1 諸田八百八 『群馬県史蹟名勝』第1号 群馬県史蹟名勝刊行会 1926(昭和1)年
- 2 柴田常恵 監修 『群馬県史蹟名勝天然記念物調査報告』第1輯 1928(昭和3)年
- 3 山内清男 「下総上本郷貝塚」 『人類学雑誌』第43巻第10号 1928(昭和3)年
- 4 山内清男 「日本考古学の秩序」 『ミネルヴァ』第1巻第4号 1936(昭和11)年
- 5 山内清男 「縄紋土器型式の細別と大別」 『先史考古学』第1巻第1号 1937(昭和12)年
- 6 山内清男 「加曾利E式」 『日本先史土器図譜』第IX集 1940(昭和15)年
- 7 吉田 格 「東京国分寺恋ヶ窪堅穴住居址の土器に就いて」 『銅鐸』第12号1956(昭和31)年
- 8 吉田 格 「東京都小金井町貫井遺跡調査報告——縄文中期堅穴住居——」 『武蔵野』第38巻1号 1958(昭和33)年
- 9 栗原文蔵・他 「大蔵遺跡」 『新修世田谷区史』附篇 1962(昭和37)年
- 10 岡本 勇・戸沢充則 「縄文文化の発展と地域性 関東」 『日本の考古学』II 1965(昭和40)年
- 11 坂詰秀一 『新座』 吉川弘文館 1965(昭和40)年
- 12 藤森栄一 『井戸尻』 中央公論美術出版 1965(昭和40)年
- 13 井上唯雄 『前橋市城南地区の土師器使用遺跡』 荒砥史談会 1968(昭和43)年
- 14 小林達雄・安孫子昭二・可児通宏・他 「多摩ニュータウンNo46遺跡の発掘調査」 『多摩ニュータウン遺跡調査報告VII』 多摩ニュータウン遺跡調査会 1969(昭和43)年
- 15 山内清男 「縄紋草創期の諸問題」 『ミュージアム』224 1969(昭和44)年
- 16 『群馬県遺跡出張I(東毛編)』 群馬県教育委員会 1971(昭和46)年
- 17 尾崎喜左雄 「豪族の支配と古墳の構造」 『前橋市』第1巻 1971(昭和46)年
- 18 山崎 一 『群馬県古城址の研究』上巻 1971(昭和46)年
- 19 堀越正行 「加曾利E式土器研究史(1)~(3)」 『信濃』第24巻第2~4号 1971(昭和46)年
- 20 岡本 勇 「横須賀市吉井城山第一貝塚の土器」 『横須賀市博物館研究報告』第7号 1972(昭和47)年
- 21 並木 隆・他 『宮地遺跡』 1972(昭和47)年
- 22 相沢貞順 『八坂遺跡調査概報』 東国古文化研究所・前橋育英高校郷土部・伊勢崎市教育委員会 1973(昭和48)年
- 23 柿沼恵介 「荒口前原遺跡」 『まえあし』14 1973(昭和48)年
- 24 谷井 彪・他 『関越自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告I 南大塚・中組・上組・鶴ヶ丘・花影』 埼玉県教育委員会 1974(昭和49)年
- 25 小田静夫・安孫子昭二・他 『小金井市貫井南遺跡調査報告』 小金井市貫井南遺跡調査会 1974(昭和49)年
- 26 能登 健 「縄文文化解明における地域研究のあり方——関東地方加曾利E式土器を中心として——」 『信濃』第27巻第4号 1975(昭和50)年
- 27 原田恒弘・能登 健 『二之宮遺跡群緊急発掘調査概報』 群馬県教育委員会 1976(昭和51)年
- 28 平野進一 「群馬県荒砥前原遺跡—赤城山における弥生中期から後期にかけての住居址とその出土遺物について—」 『信濃』第28巻第4号 1976(昭和51)年
- 29 戸田哲也 『千葉県山武郡芝山町小池麻生遺跡』 山武考古学研究会 1976(昭和51)年
- 30 新藤康夫 「加曾利E式土器細分の再検討」 『考古学雑誌』第62巻第3号 1976(昭和51)年
- 31 笹森健一・他 『志久遺跡』 埼玉県遺跡調査会 1976(昭和51)年
- 32 柿沼幹夫・笹森健一・小川良祐 『上越新幹線埋蔵文化財発掘調査報告I 前富・島之上・出口・芝山』 埼玉県教育委員会 1977(昭和52)年

- 33 今村啓爾 「称名寺式土器の研究（上）・（下）」 『考古学雑誌』第63巻第1号・第2号 1977（昭和52）年
- 34 折原 繁 「関東地方における縄文時代中期末の土器群」 『研究紀要』2 千葉県文化財センター 1977（昭和52）年
- 35 戸田哲也・他 『釣鐘池北遺跡』 釣鐘池北遺跡調査団 1977（昭和52）年
- 36 伊東信雄 「山内博士東北縄文土器編年の成立過程」 『考古学研究』第24巻第3・4号 1977（昭和52）年
- 37 鈴木保彦 『下北原遺跡』 神奈川県教育委員会 1977（昭和52）年
- 38 能登 健・下城 正 『梨の木平遺跡』 群馬県教育委員会 1977（昭和52）年
- 39 能登 健・内田憲治・石坂 茂 『前原遺跡・臼井遺跡・赤石城跡』 群馬県教育委員会 1977（昭和55）年
- 40 能登 健 「浅間山大焼・榛名山爆烈—考古学に見る北関東の火山災害—」 『どるめん』19号 1978（昭和53）年
- 41 並木 隆 『真慈恩寺東遺跡』 埼玉県遺跡調査会 1978（昭和53）年
- 42 並木 隆・他 『甘粕原・ゴシン・霧梨子遺跡』 埼玉県遺跡調査会 1978（昭和53）年
- 43 神奈川考古同人会縄文研究グループ 「神奈川県における縄文時代中期後半土器編年試案 第I版」 『神奈川考古』第4号 1978（昭和53）年
- 44 白石浩之 「加曾利E式土器の変遷」 『考古学研究』第25巻第1号 1978（昭和53）年
- 45 山崎 一・他 『日本城郭大系』第4巻 新人物往来社 1979（昭和54）年
- 46 宮崎朝雄 「加曾利E式土器について—埼玉県出土土器を中心に—」 『なわ』第17号 1979（昭和54）年
- 47 松本浩一・井上唯雄・桜場一寿・原 雅信・石坂 茂・石北直樹・大塚昌彦 『空沢遺跡』 渋川市教育委員会 1979（昭和54）年
- 48 石川正之助・井上唯雄・梅沢重昭・松本浩一編 「特集・火山堆積物と遺跡」 『考古学ジャーナル』No.157 1979（昭和54）年
- 49 能登 健・飯田陽一 『荒砥東原遺跡』 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1979（昭和54）年
- 50 井上唯雄 『荒砥上諏訪遺跡』 群馬県教育委員会 1979（昭和54）年
- 51 能登 健・西田健彦 『宮川遺跡』 群馬県教育委員会 1980（昭和55）年
- 52 能登 健・石坂 茂 「重弧文土器の系譜」 『信濃』第27巻4号 1980（昭和55）年
- 53 峰岸純夫・山本隆志・山本良知・能登 健 『女堀』 群馬県教育委員会 1980（昭和55）年
- 54 赤山容造 『三原田遺跡（住居篇）』 群馬県企業局 1980（昭和55）年
- 55 米田明訓 「南信天龍川沿岸における縄文時代中期後半の土器編年」 『甲斐考古』第17巻第1号 1980（昭和55）年
- 56 安孫子昭二・秋山道生・中西 充 「東京・埼玉における縄文中期後半土器の編年試案」 『神奈川考古』第10号 1980（昭和55）年
- 57 山村貴輝・関塚英一・他 『井の頭池遺跡群A地点発掘調査報告』 三鷹市遺跡調査会 1980（昭和55）年
- 58 峰岸純夫・能登 健 「赤城山南麓の開発と遺構《女堀》」 『アーバンクボタ』19号 1981（昭和56）年
- 59 能登 健・飯田陽一 『荒砥上諏訪遺跡』 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1981（昭和56）年
- 60 細野雅男・石坂 茂・小島敦子・徳江秀夫 『二之宮遺跡群』 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1981（昭和56）年
- 61 石塚久則・飯田陽一 『今宮遺跡』 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1981（昭和56）年
- 62 山本良知 「御富士山古墳」 『群馬県史』資料編3 1981（昭和56）年
- 63 小田静夫・伊藤富治夫・C・T・キリー編 『前原遺跡I』 国際キリスト教大学考古学研究センター 1981（昭和56）年
- 64 丹羽 茂 「大木式土器」 『縄文文化の研究』4 1981（昭和56）年
- 65 樋口昇一・鈴木保彦・能登 健 「関東・中部・北陸地方」 『縄文土器大成』2 1981（昭和56）年

- 66 鈴木保彦・山本暉久・戸田哲也・安孫子昭二・秋山道生・中西 充・末木 健・米田明訓・奈良泰史・長崎元
広・島田哲男 「シンポジウム 縄文時代中期後半の諸問題—とくに加曾利E式と曾利式土器との
関係について—」 『神奈川考古』第11号 1981(昭和56)年
- 67 谷井 彪・宮崎朝雄・大塚孝司・鈴木秀雄・青木美代子・金子直行・細田 勝 「縄文中期土器群の再編」 『研
究紀要』1 勸埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1982(昭和57)年
- 68 田川 良・小川和博 「千葉県における縄文時代中期土器の変遷(1)」 『日本考古学研究所集報』IV 1982
(昭和57)年
- 69 『年報1』 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1982(昭和57)年
- 70 『年報2』 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1983(昭和58)年
- 71 橋口尚武 「加曾利E式土器の研究史考察—特にIII・IV式土器を中心として—」 『考古学雑誌』 第69巻第
1号 1983(昭和58)年
- 72 能登 健・石坂 茂・小島敦子・徳江秀夫 「赤城山南麓における遺跡群研究—農耕集落の変遷と溜井灌溉の
出現—」 『信濃』第35巻第4号 1983(昭和58)年
- 73 能登 健・小島敦子 「弥生から平安時代の遺跡分布」 『新里村の遺跡』 新里村教育委員会 1984(昭和
54)年
- 74 堀越正行 「加曾利E式土器断想」 『史館』 第17号 1984(昭和59)年
- 75 能登 健・洞口正史・小島敦子 「山棲み集落の出現とその背景—二つの「ヤマ」に関する考古学的分析—」
『信濃』第37巻第4号 1985(昭和60)年
- 76 石坂 茂・徳江秀夫 『荒砥二之堰遺跡』 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1985(昭和60)年

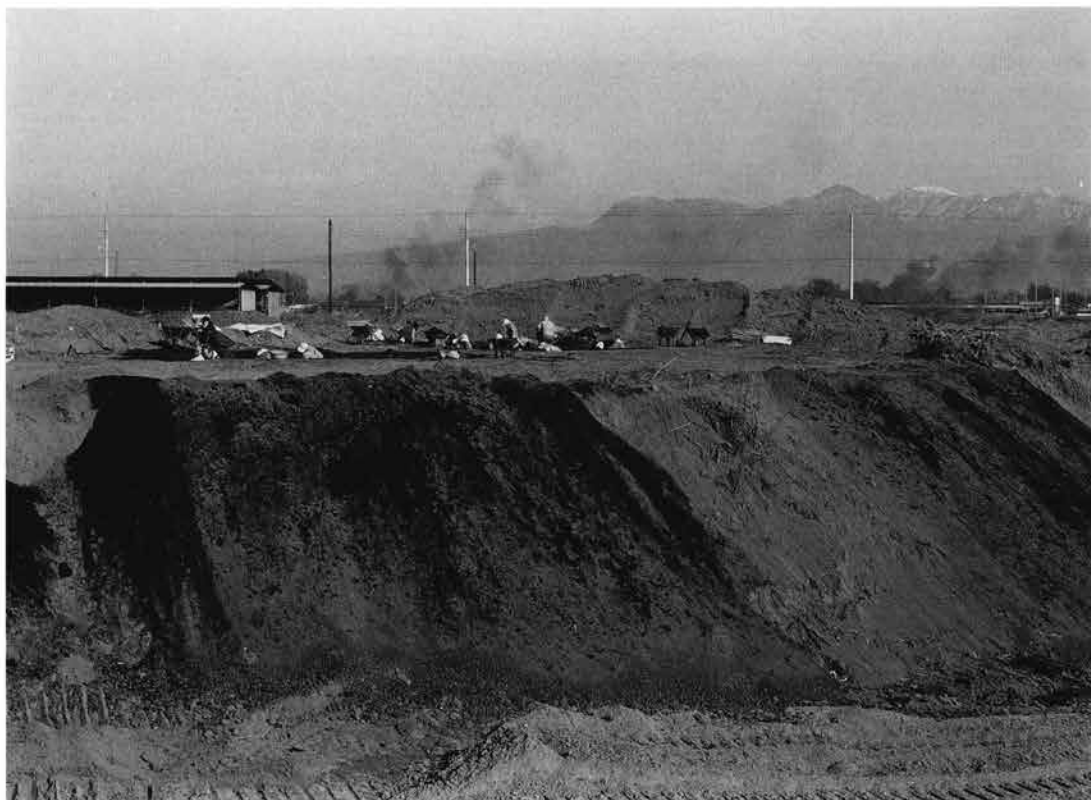
写 真 图 版



1 A区全景(南から)



2 B区全景(南西から)



1 C区全景(南から)



2 D区全景(C区から)



1 赤石城址全景(南東から。手前は神沢川)



2 遺物の検出作業(4T2号住居)



1 C区3号住居(北東から)



2 C区3号住居 石棒出土状態(東から)



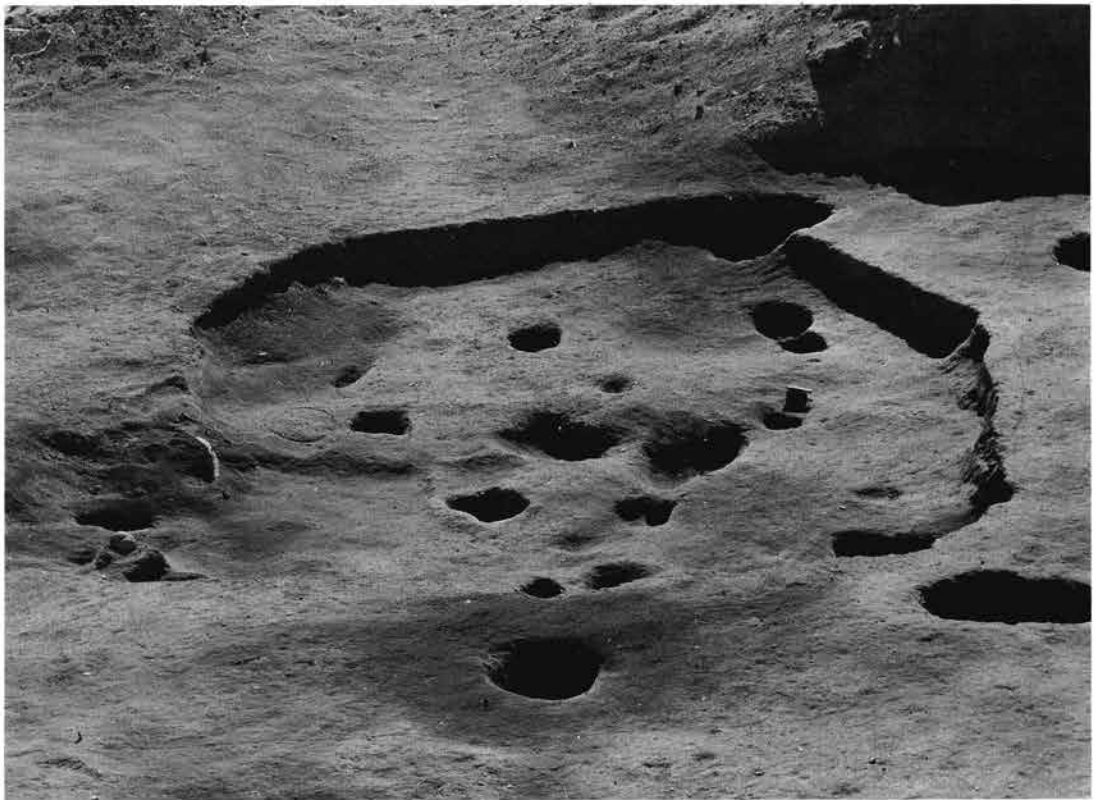
1 C区3号住居 土器出土状態



2 C区3号住居 炉



3 C区3号住居 張り出し部掘り方及び多孔石出土状態
(主体部から)



4 C区4号住居(北から)



1 C区11号住居(西から)



2 C区11号住居 遺物出土状態



1 C区12号住居(西から。左方は5号土坑)



2 C区12号住居 遺物出土状態



1 C区11号住居 炉



2 C区12号住居 炉



3 C区12号住居 埋葬



4 C区12号住居 磨石出土状態



5 C区5号住居(西から。手前左方は3号土塚)



1 D区1号(手前)・2号(上方)住居(南から)



2 D区1号住居(南から)



1 D区3号住居(東から。右上方は1号土坑)



2 D区3号住居 遺物出土状態



3 2T1号住居 土器(1)出土状態



4 2T1号住居 立石(西から)



5 2T1号住居 敷石に利用された石皿片



1 2T1号住居(南から)



2 2T1号住居 敷石面と立石の状態



1 3T1号住居(東から)



2 3T1号住居 セクション



1 4T1号住居(南から)



2 4T1号住居 遺物出土状態(南から)



1 3T1号住居 炉



2 3T1号住居 埋葬



3 4T1号住居 炉付近の礫及び多孔石



4 4T1号住居 床面倒置土器(8)



5 4T1号住居 石皿の出土状態



6 4T1号住居大型深鉢土器(1)の出土状態



7 4T1号住居 石器出土状態



8 4T1号住居 出土状態



1 4T2号住居(南から)



2 4T2号住居 遺物出土状態(南西から)



1 4T4号住居(南東から)



2 4T4号住居 遺物出土状態



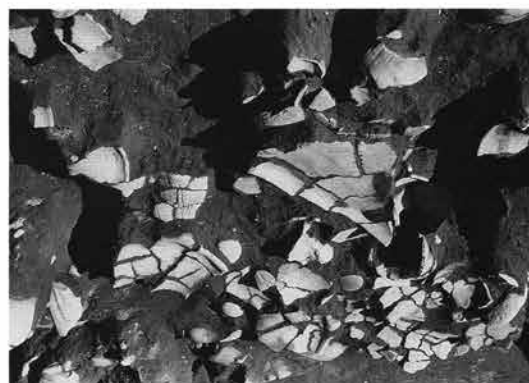
1 4T2号住居 炉



5 4T4号住居 炉



2 4T2号住居 大型深鉢土器



6 4T4号住居 埋甕



3 4T2号住居 深鉢土器(4)の出土状態



7 4T4号住居 床面倒置土器(2)



4 4T4号住居 小型把手付土器(3)



8 4T4号住居 丸石の出土状態



1 B区埋ガメ 出土状態



3 B区1号土壇 遺物出土状態



2 C区4号土壇



4 B区1号土壇



5 A区1号住居



1 5T1号・2号住居(北から)



2 B区3号住居(南から)



1 5T1号竪穴状遺構(南西から)



2 5T2号・3号竪穴状遺構(南から)



1 5T2号竖穴状遺構(南東から)



2 5T1号住居 小土壇



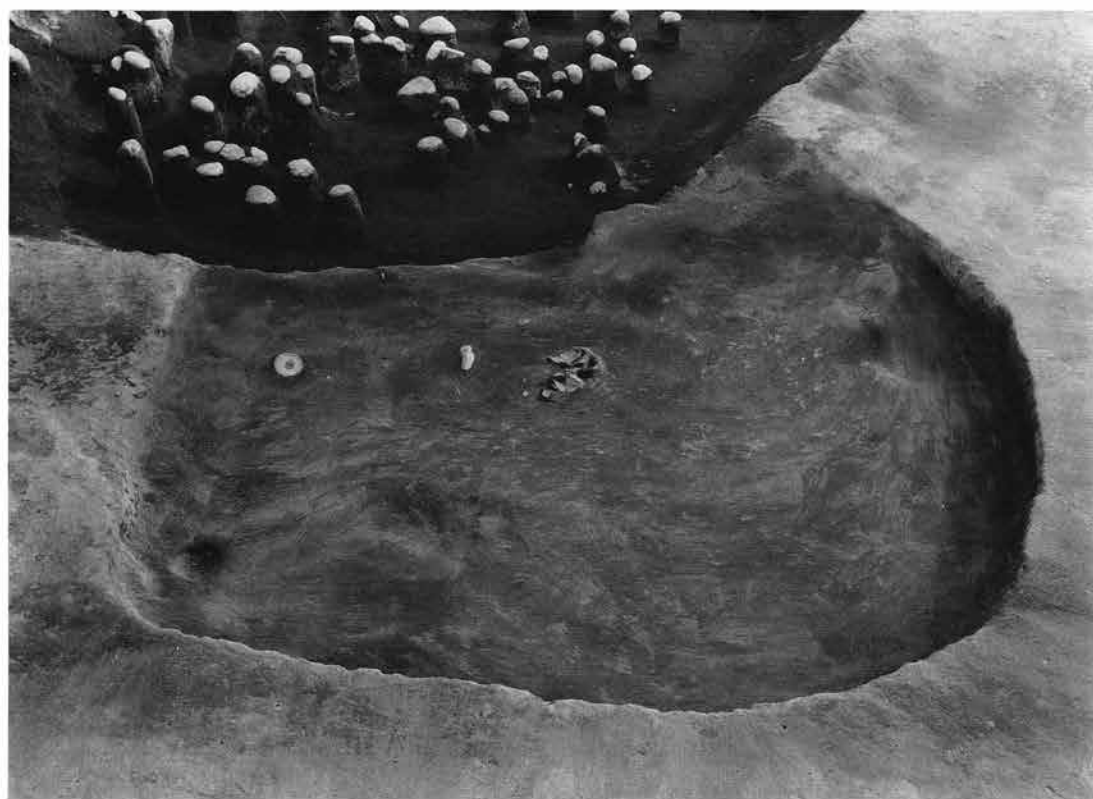
3 5T2号竖穴状遺構(1)出土状態



4 5T3号竖穴状遺構(1・7)出土状態



5 5T3号竖穴状遺構(2・4・5・8)出土状態



1 A区2号住居(北西から)



2 A区3号住居(北東から)



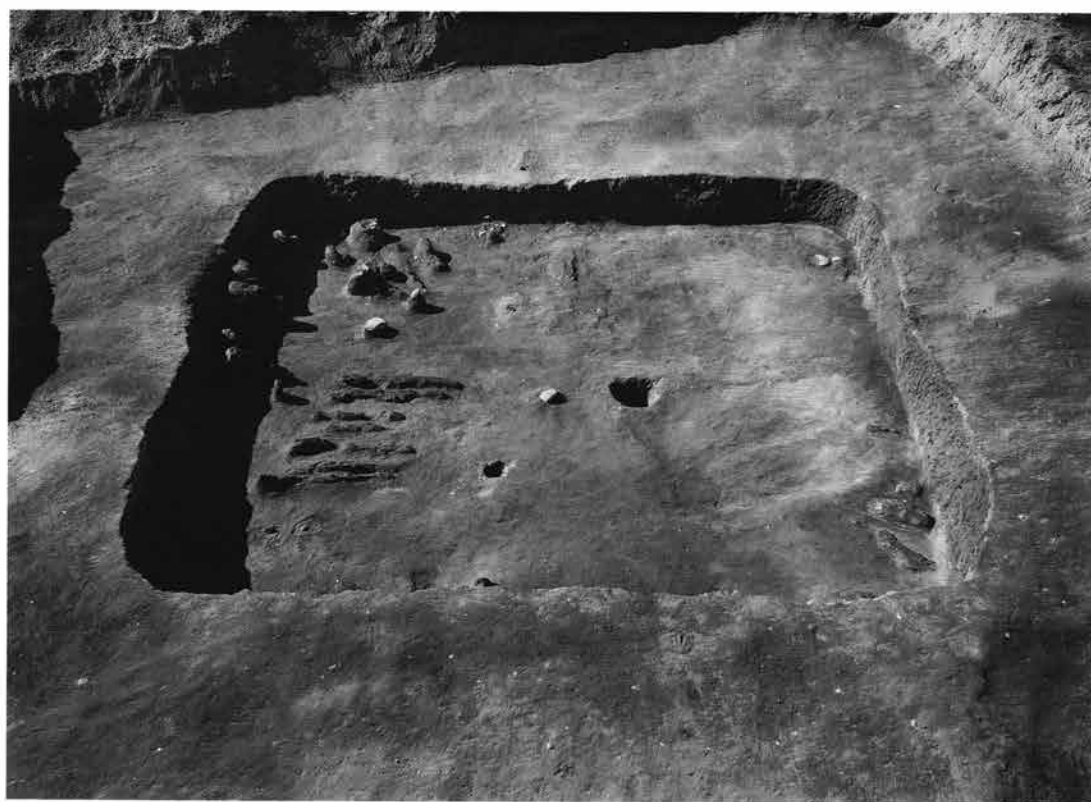
1 B区1号・2号住居(南から)



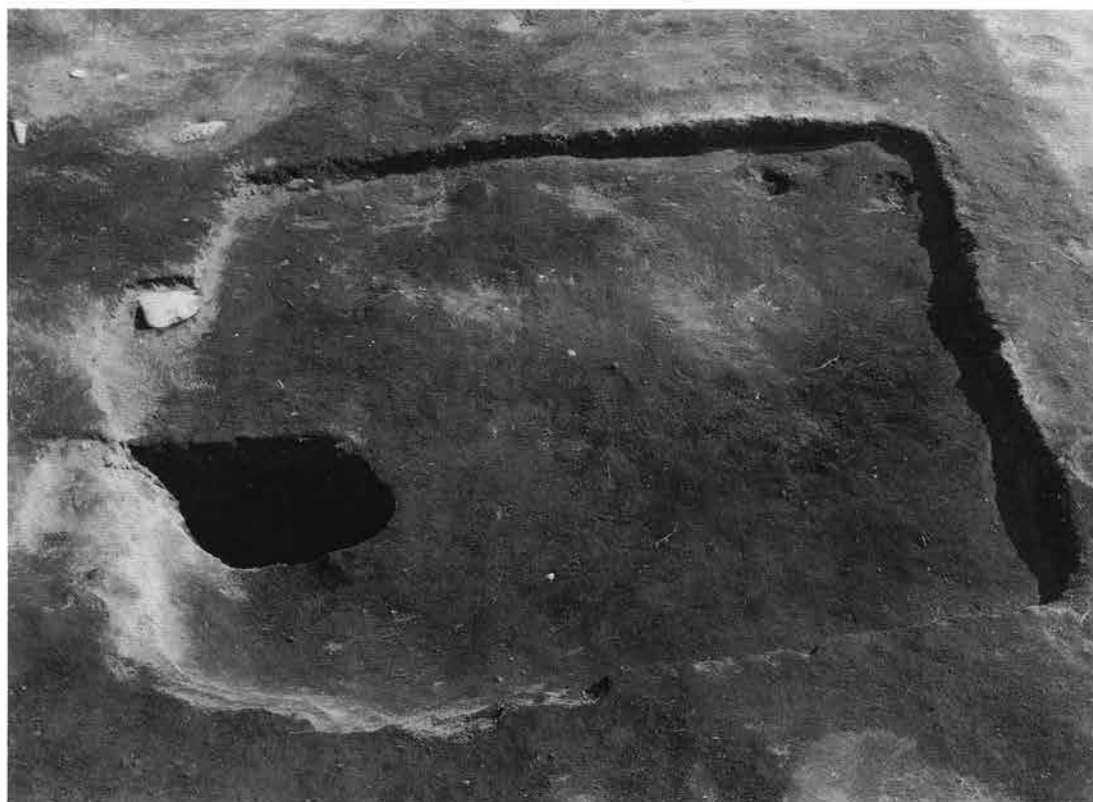
2 B区2号住居 遺物出土状態



1 C区1号住居(東から)



2 C区8号住居(東から)



1 C区7号住居(南から)



2 C区6号住居(西から)



1 C区2号住居 炭化材・遺物出土状態(南東から)



2 C区2号住居(南東から)



1 C区2号住居 北壁下遺物出土状態



2 C区2号住居東コーナー付近炭化材の状態



3 C区2号住居 炉周辺の遺物出土状態



4 同 1



5 C区2号住居 P₃炭化柱痕



1 C区9号住居(南東から)



2 C区9号住居 壺形土器(1)出土状態



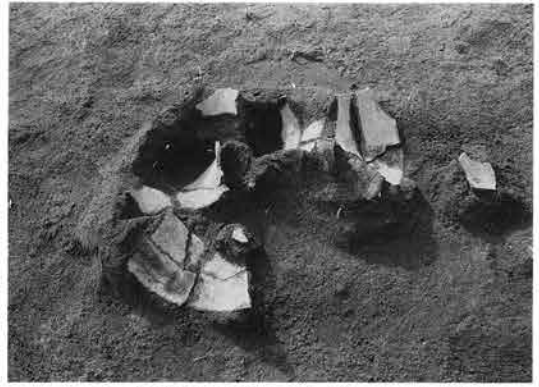
1 4T3号住居(西から)



2 4T3号住居セクション(浅間C軽石の堆積状態)



1 A区2号住居 高環(2)出土状態



2 A区2号住居 十王台式土器(1)出土状態



3 C区9号住居 P。



4 4T3号住居 壺形土器出土状態



5 C区13-Kグリッド一括遺物出土状態



1 A区1号墳(北西から)



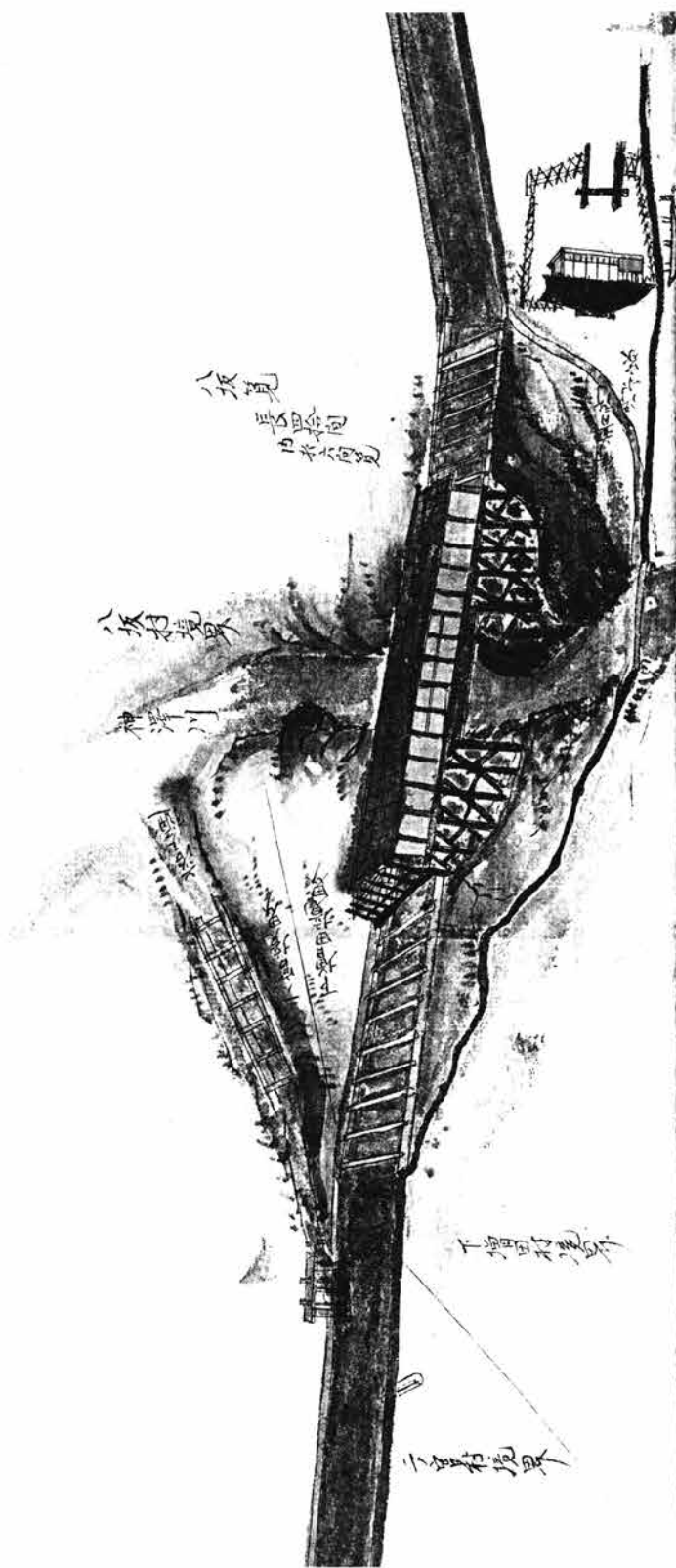
2 同 周堀内礫出土状態



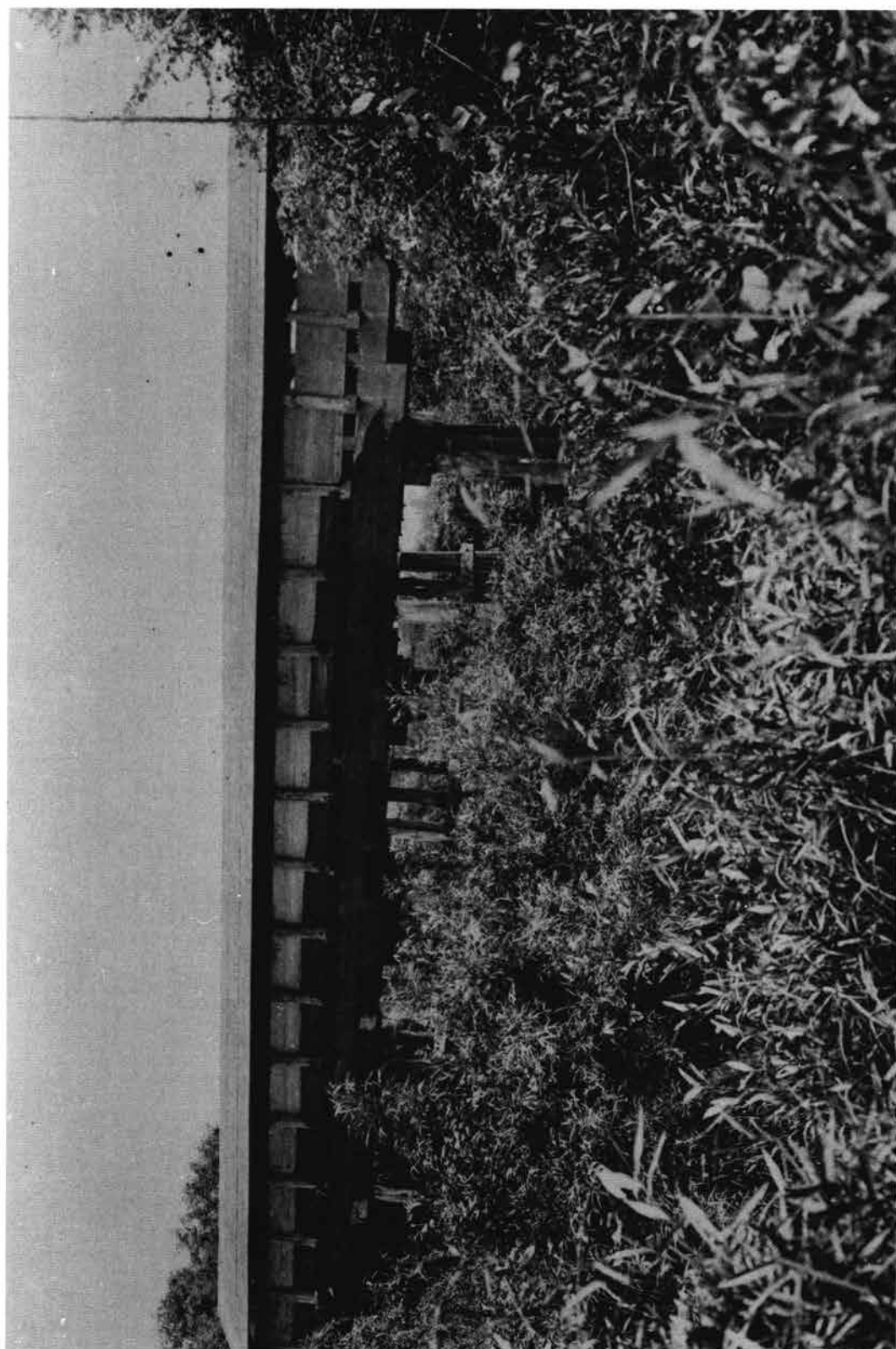
3 同 周堀セクション



4 同 主体部



絵図に見られる八坂樋〔八坂用木絵図 明治12年5月作成(伊勢崎図書館蔵より転載)〕



使用時の八坂樋(『群馬県の史蹟名勝』第一号(大正15年5月)より転載)



1 八坂樋断面(Bセクション)



2 八坂樋断面(Cセクション)



1 八坂樋の大きさ



2 同上 側板の状態



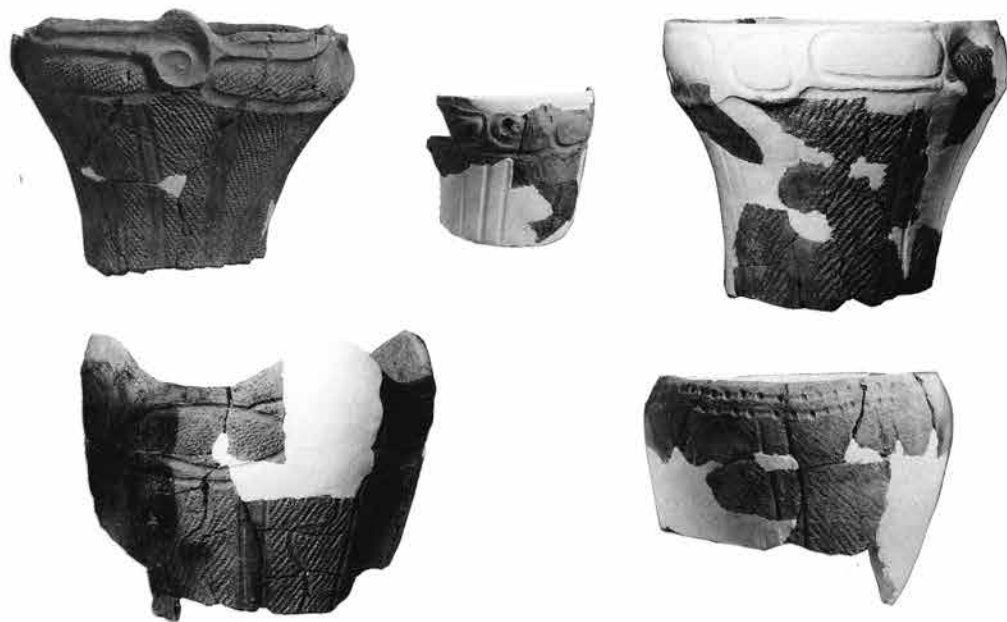
3 下部に堆積した砂礫層(Aセクション)



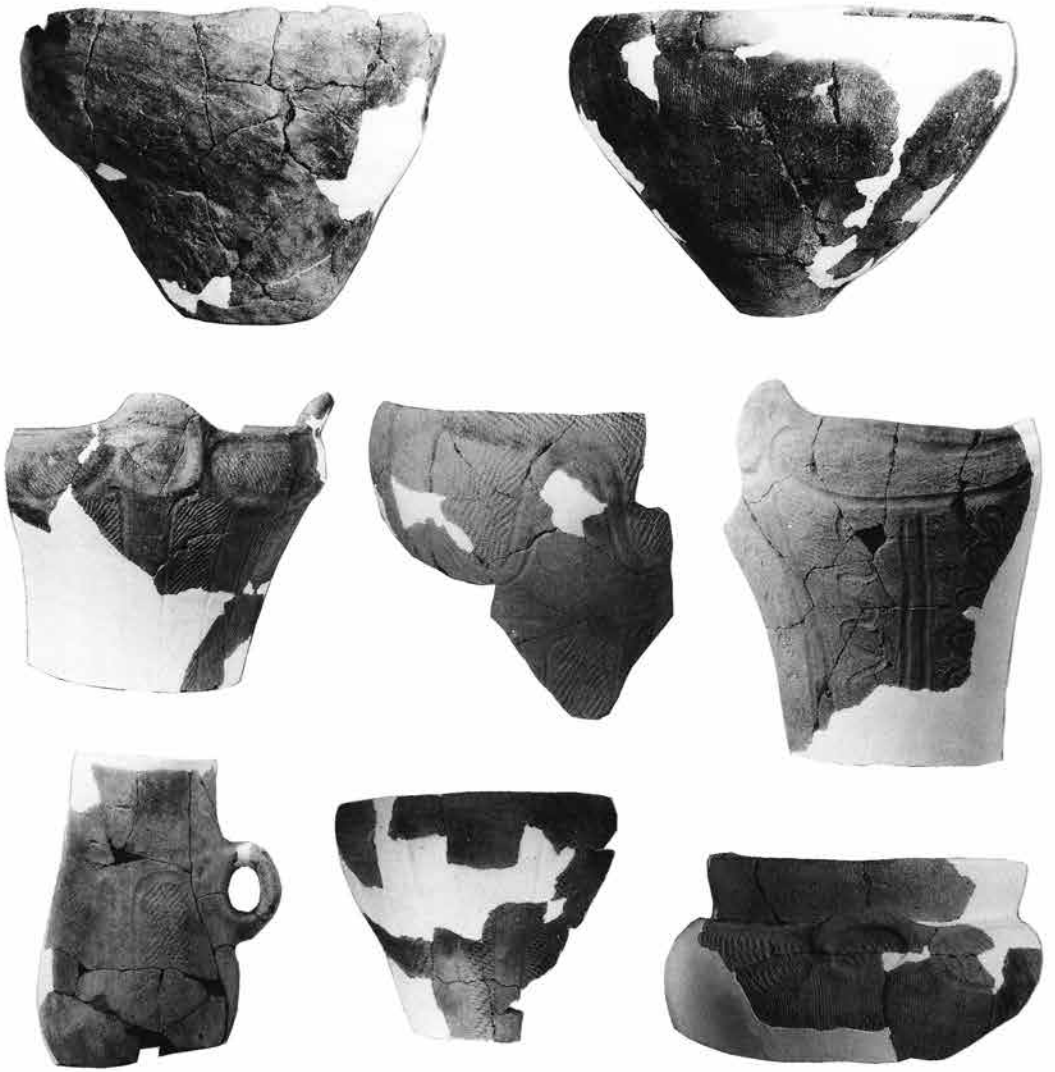
C区3号住居出土土器



C区11号住居出土土器



3T1号住居出土土器



C区12号住居出土土器



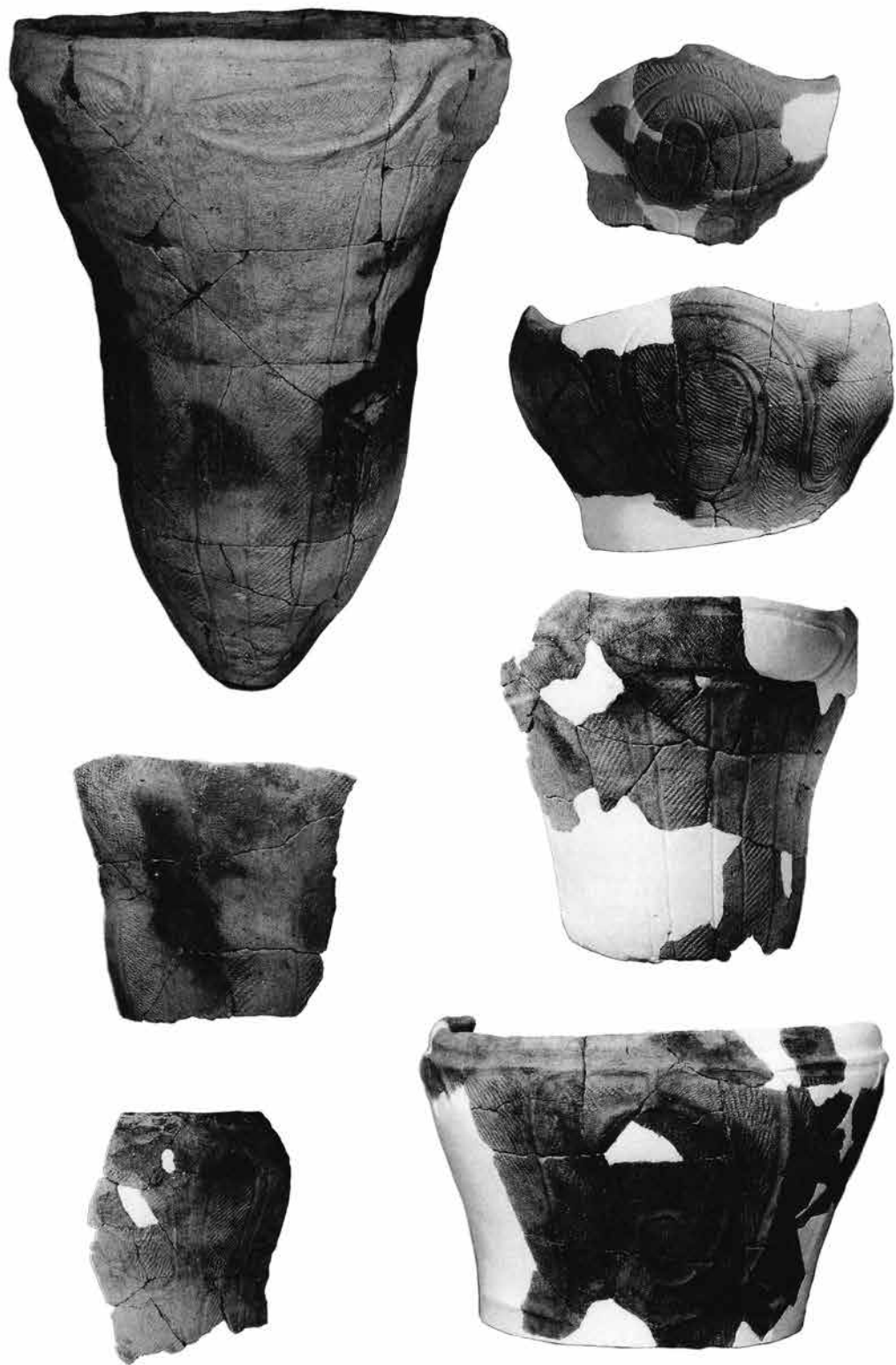
2T1号住居出土土器



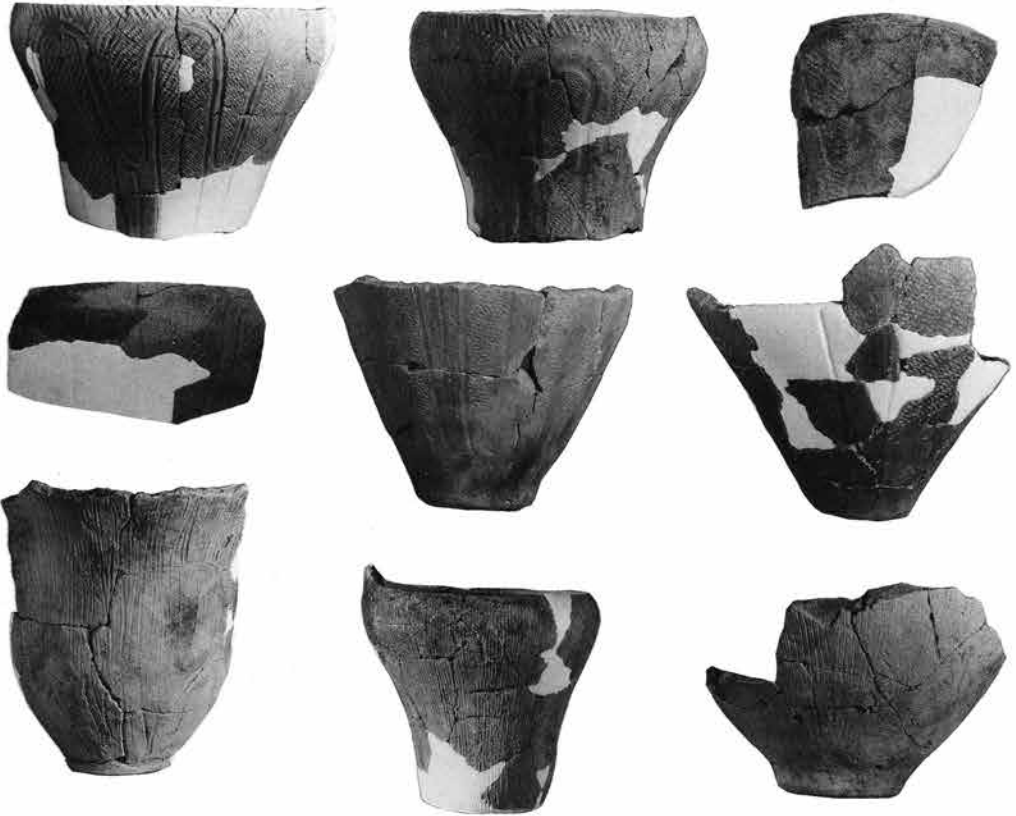
D区1号住居出土遺物



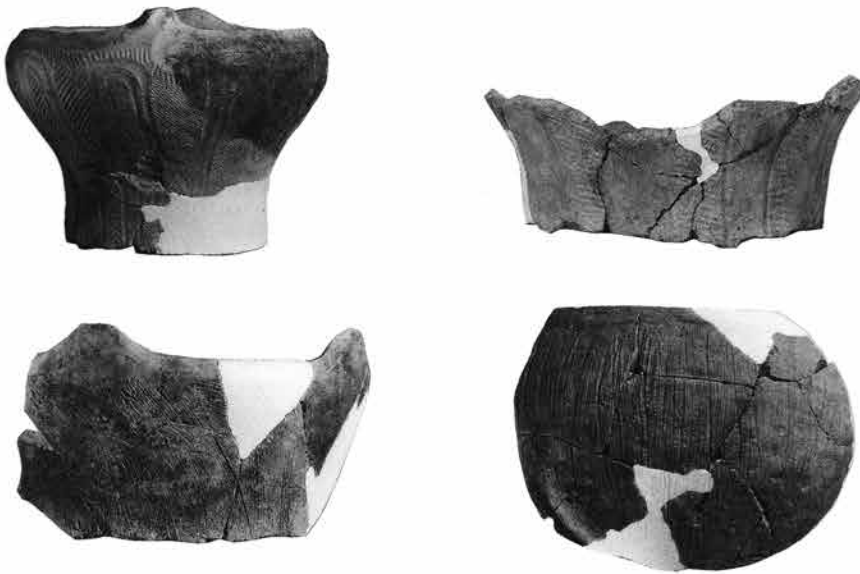
D区3号住居出土遺物



4 T 1 号住居出土土器



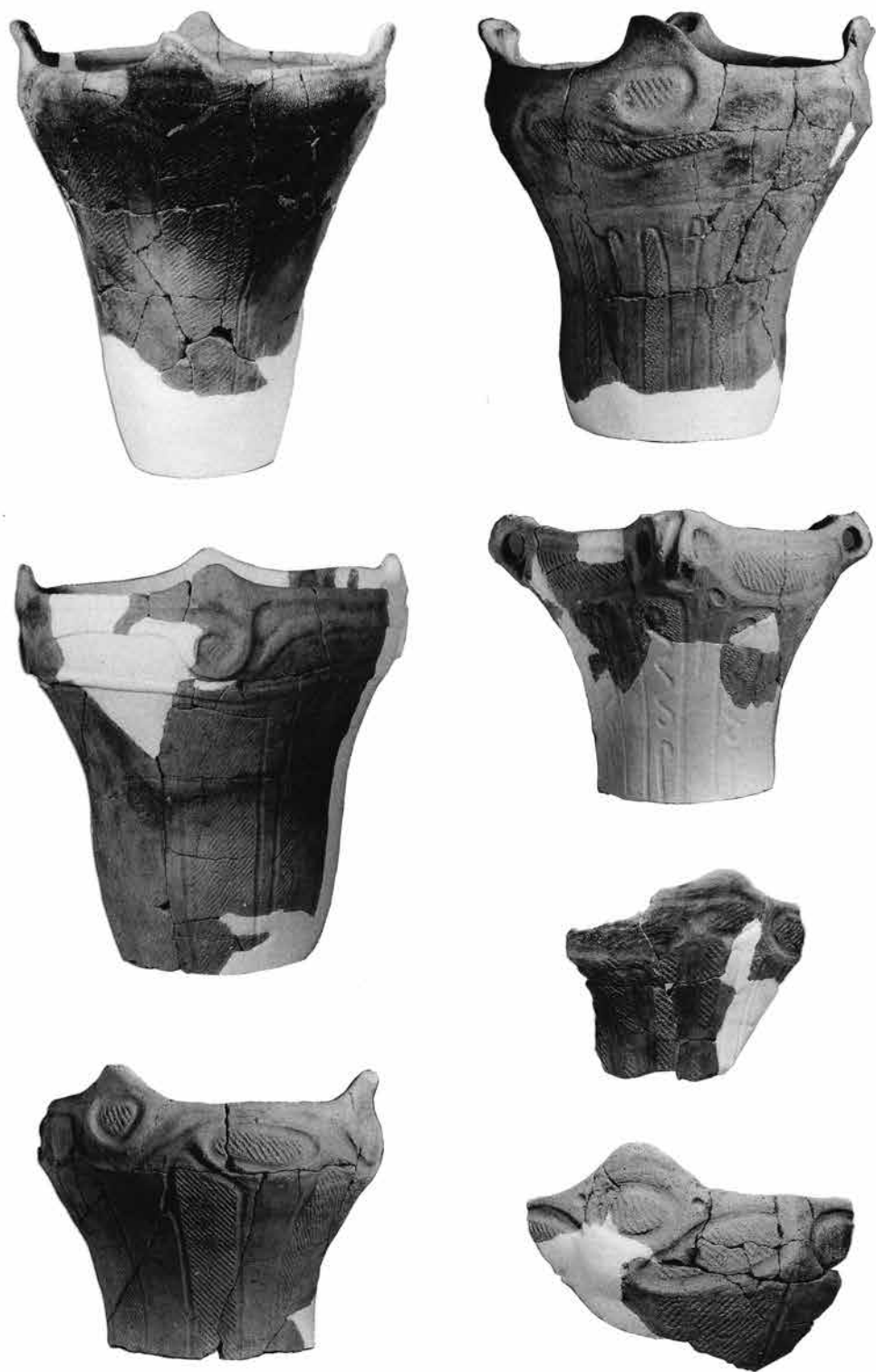
4 T 2 号住居出土土器



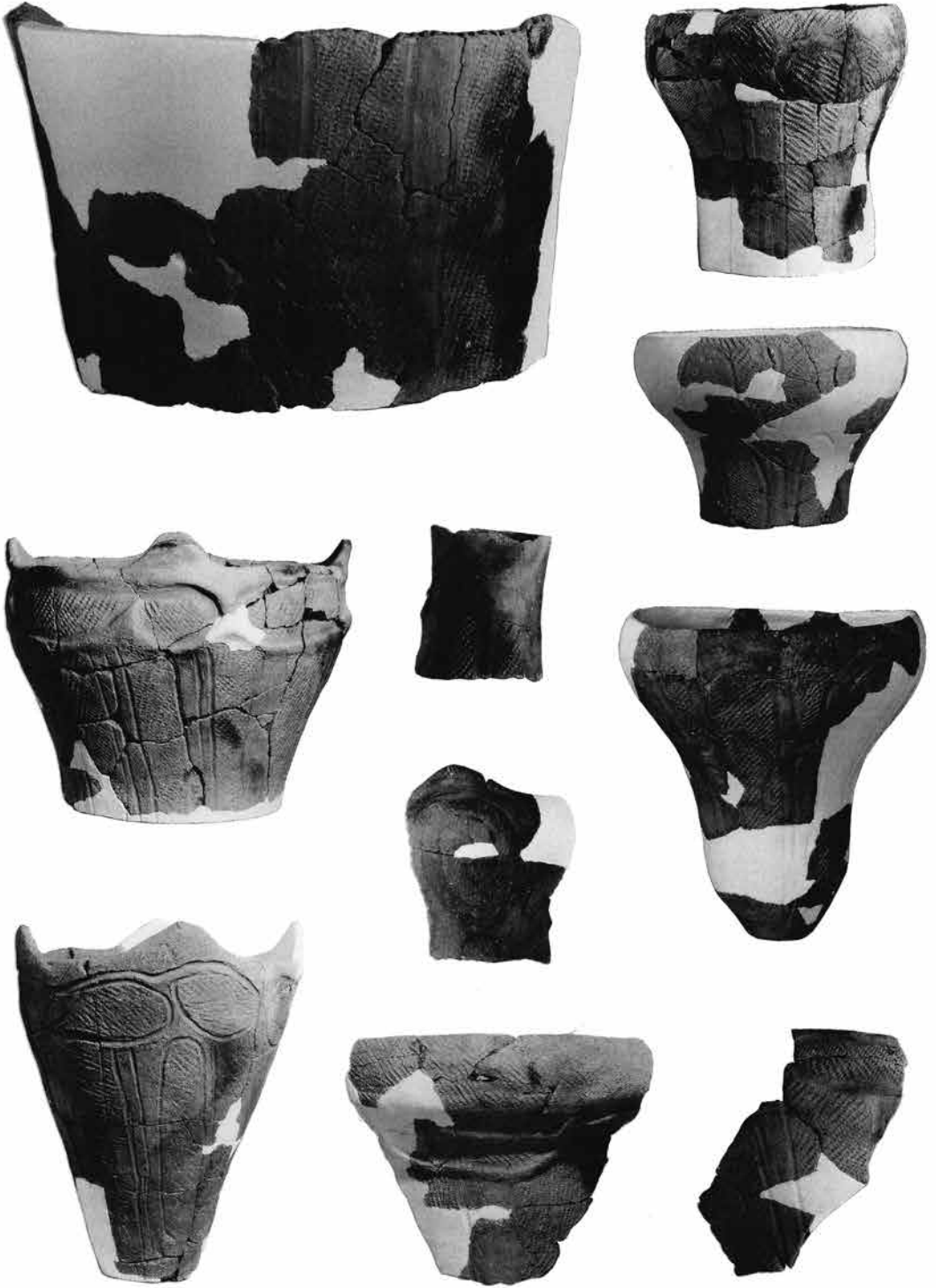
4 T 1 号住居出土土器



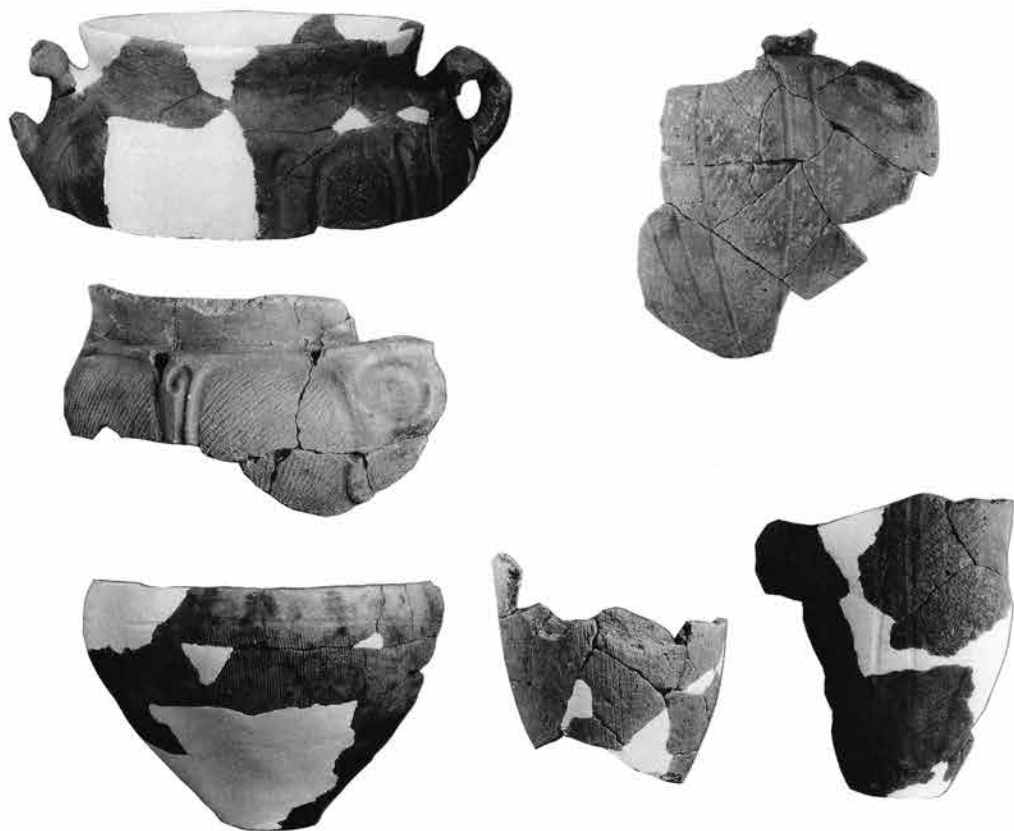
4 T 2 号住居出土土器



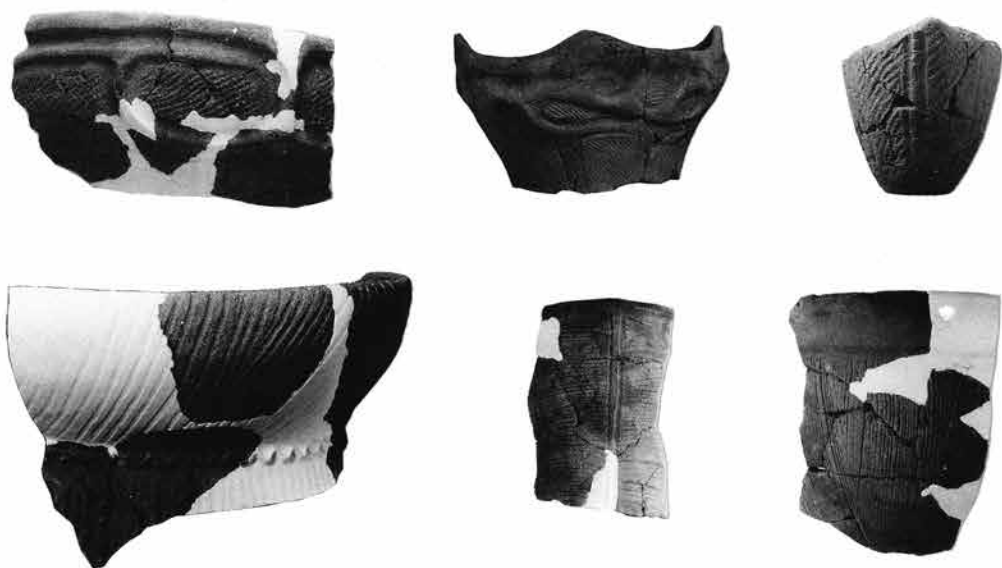
4 T 2 号住居出土土器



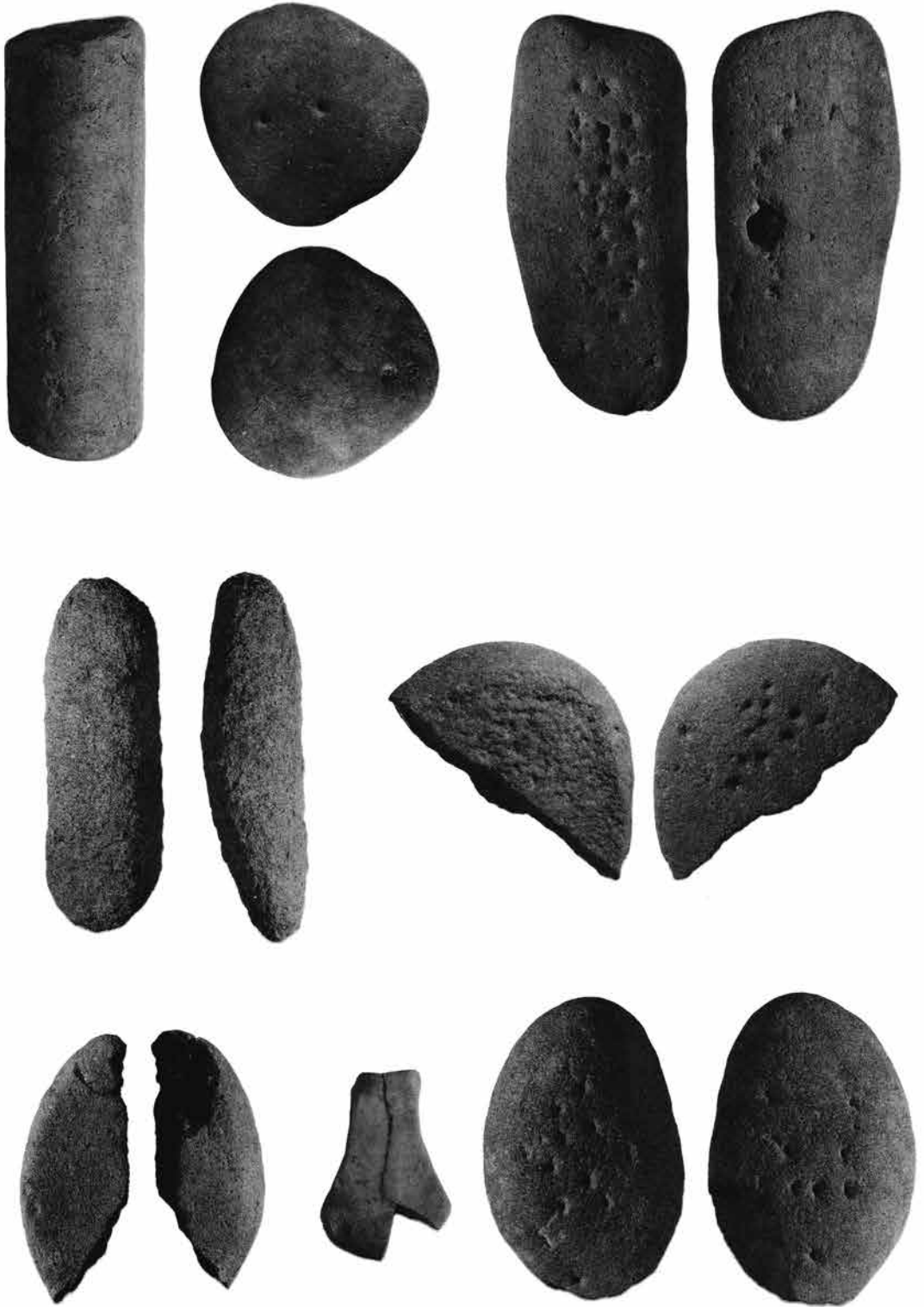
4T4号住居出土土器



4 T 4 号住居出土土器



B区埋設土器一括



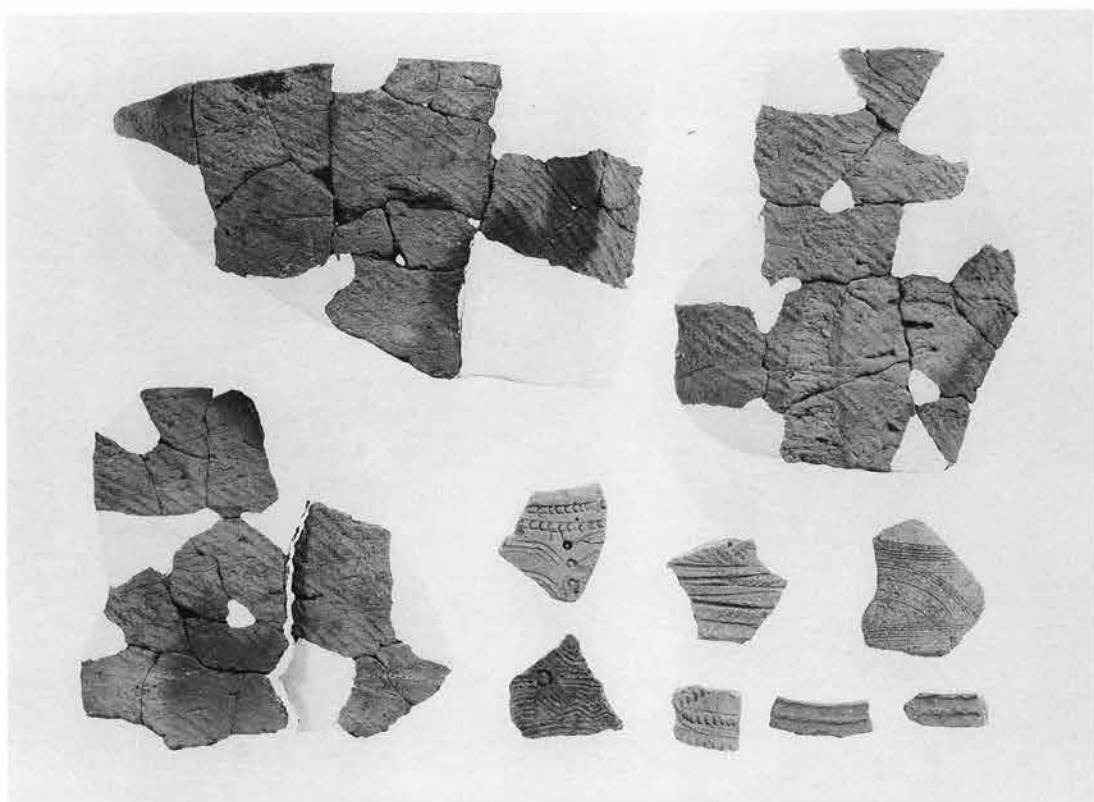
住居出土石器



B区1号土坑出土土器



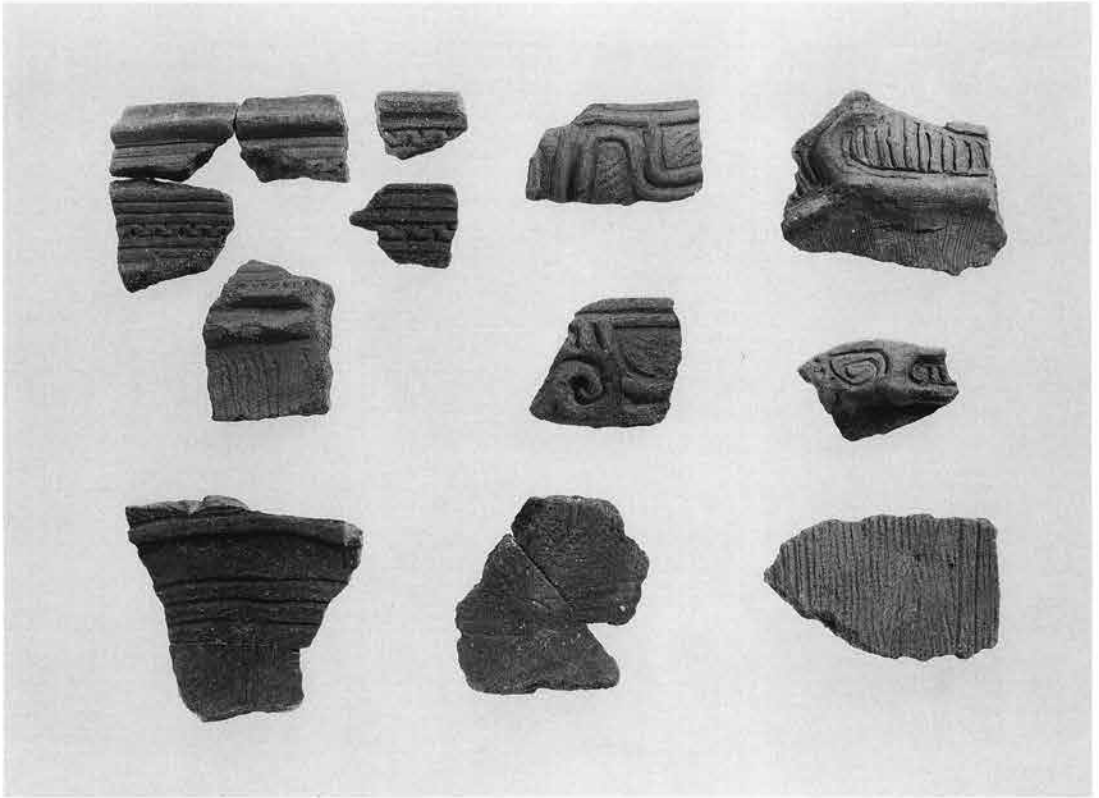
土壇出土土器



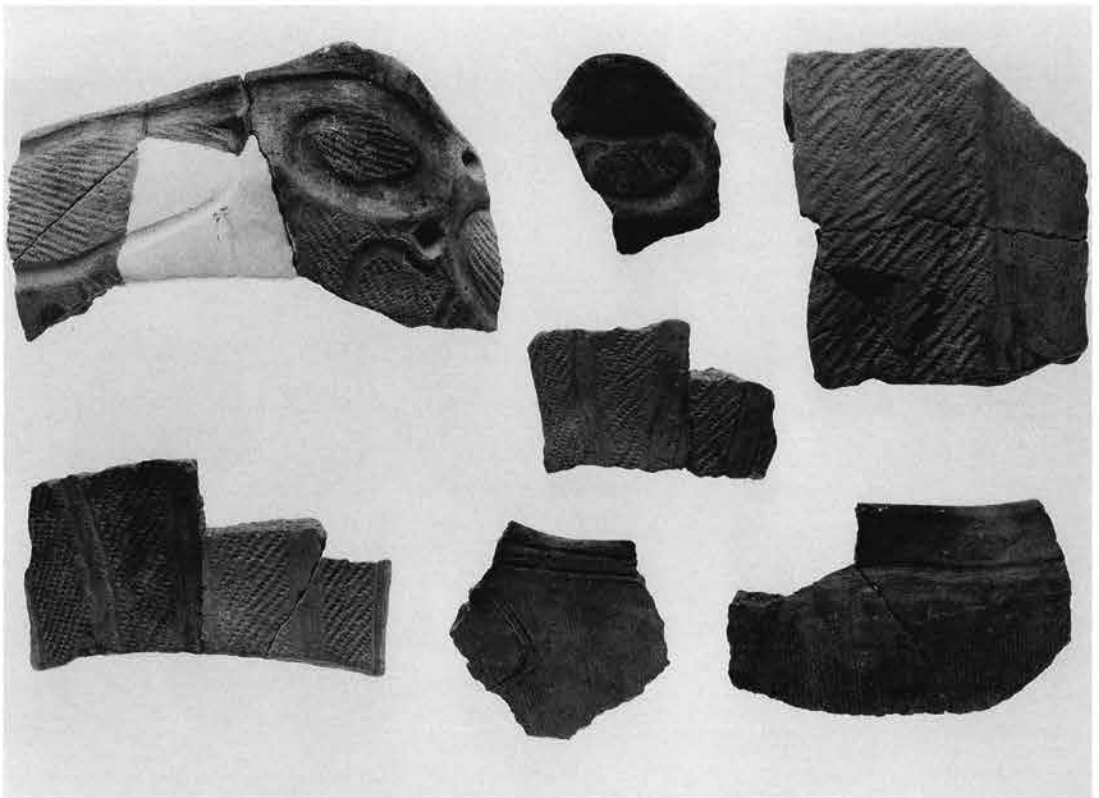
第1・2群土器



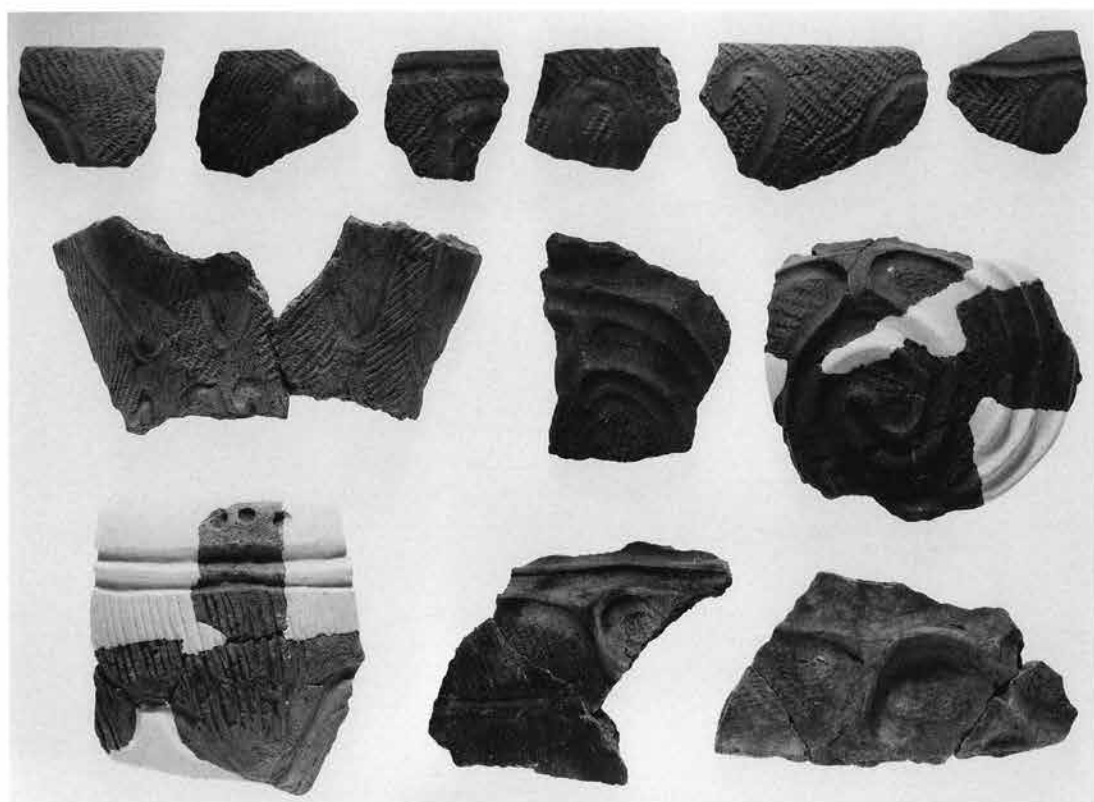
第3・4群土器



第5・6群土器



第7群土器



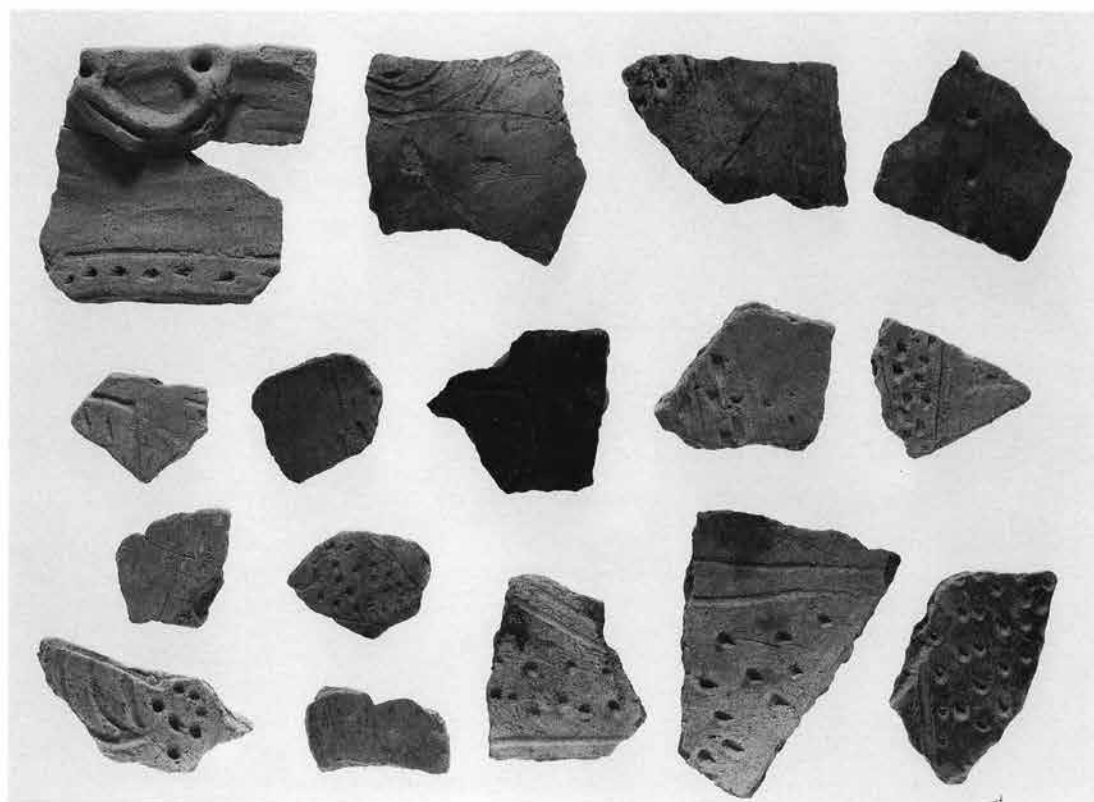
第7群土器



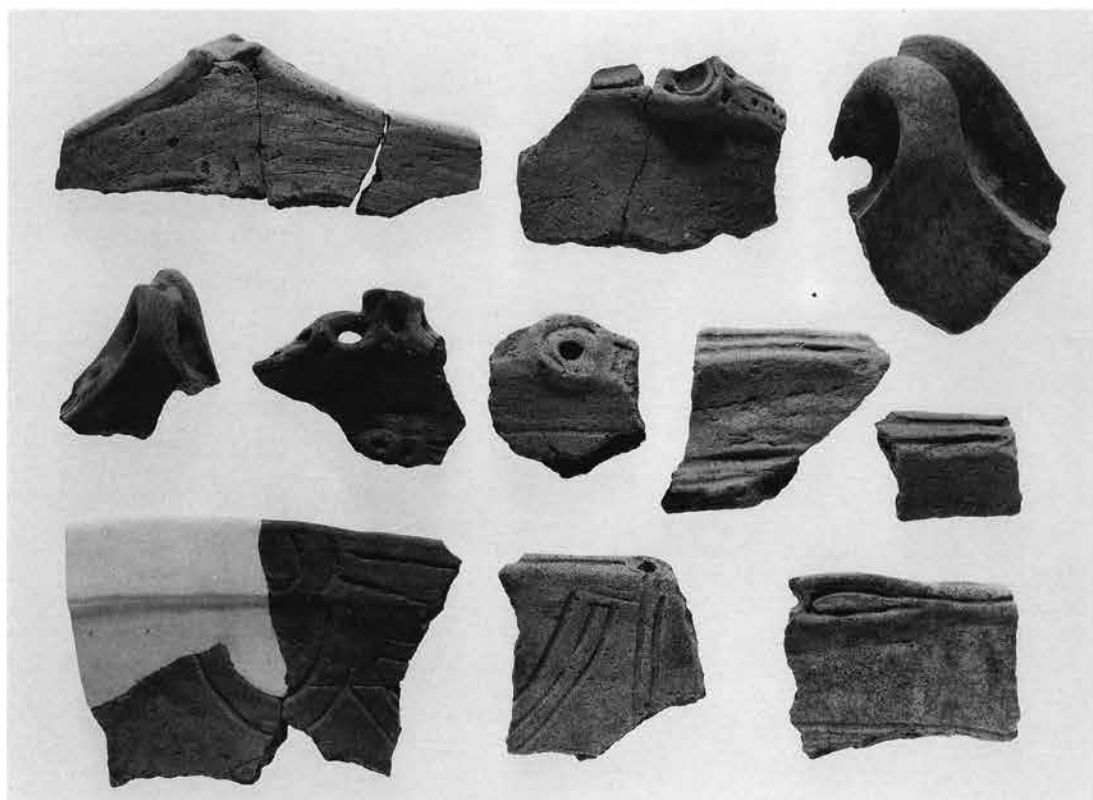
第8群土器



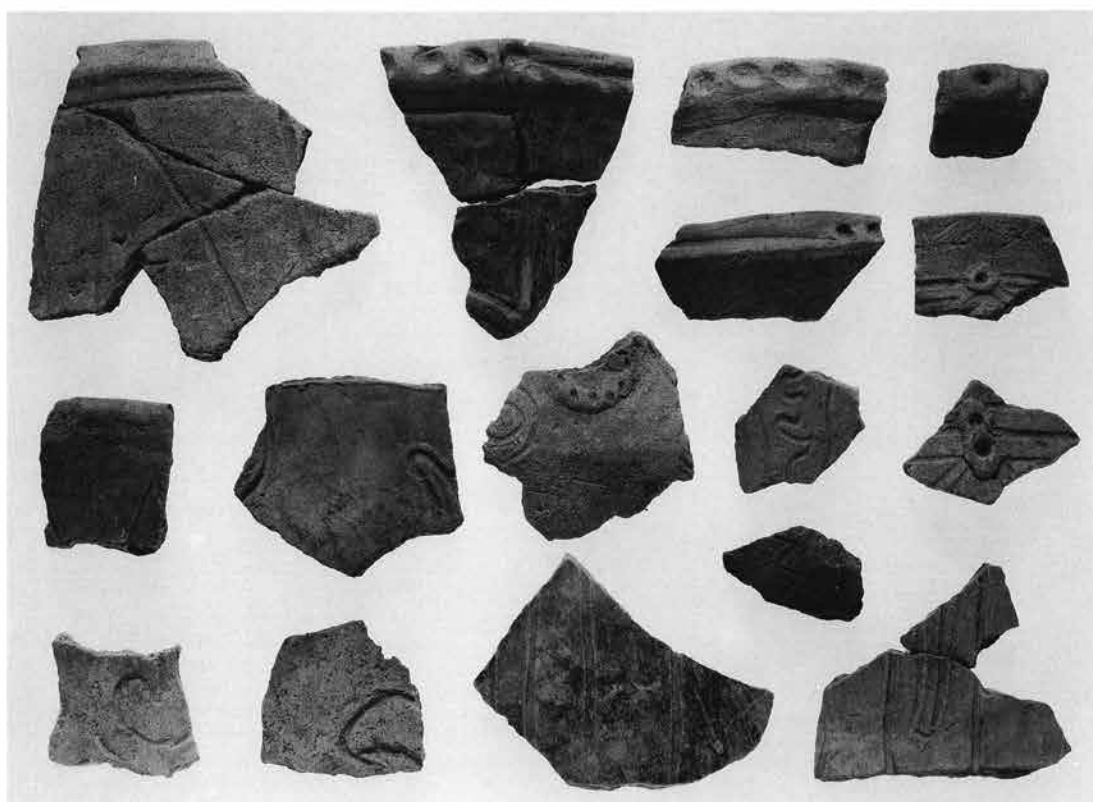
第9群土器



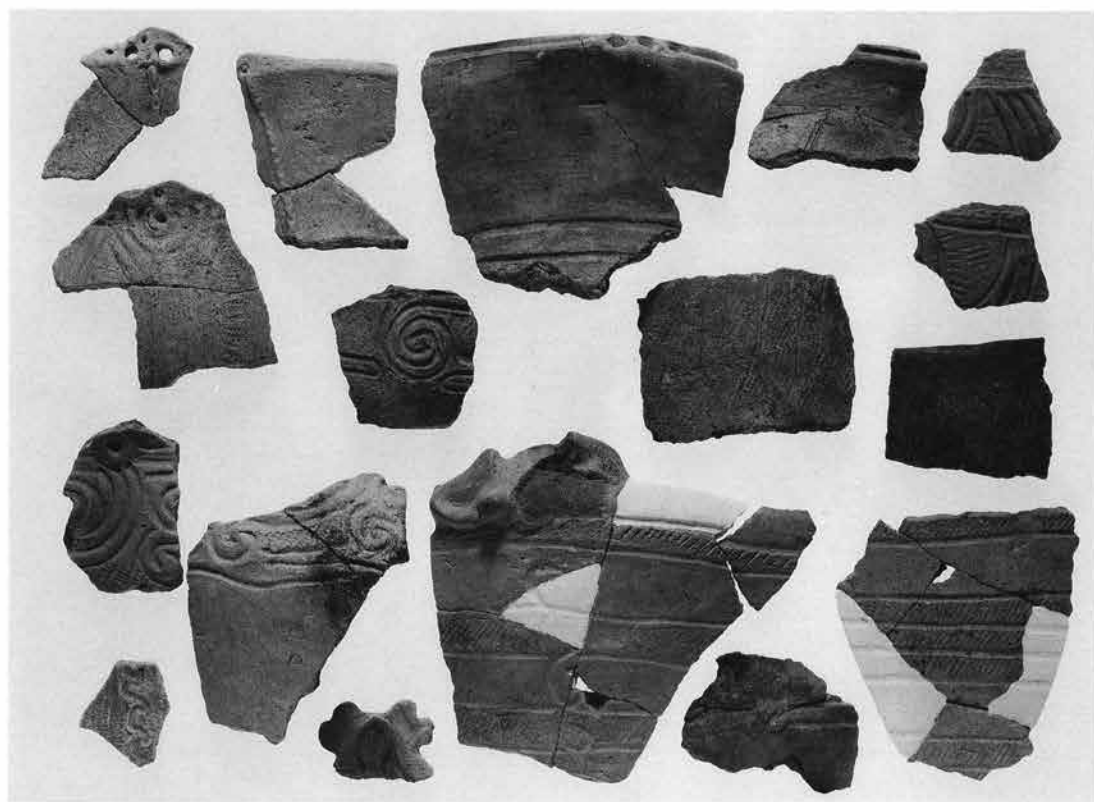
第9群土器



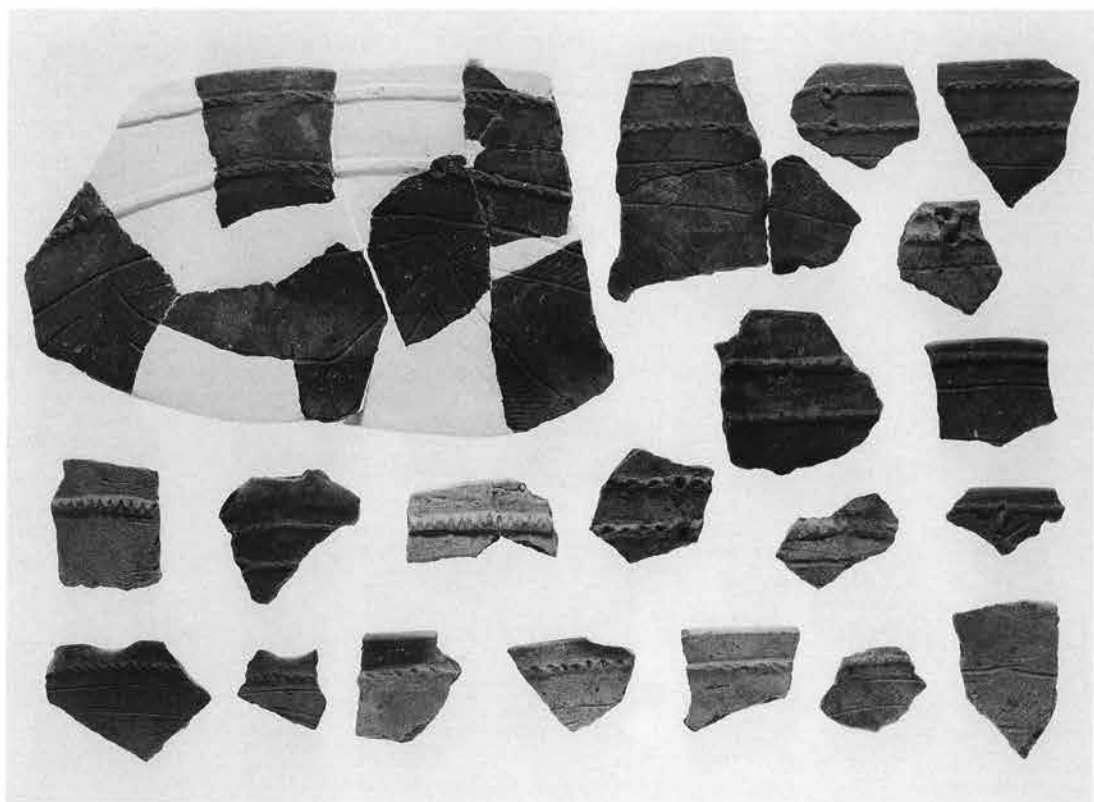
第9群土器



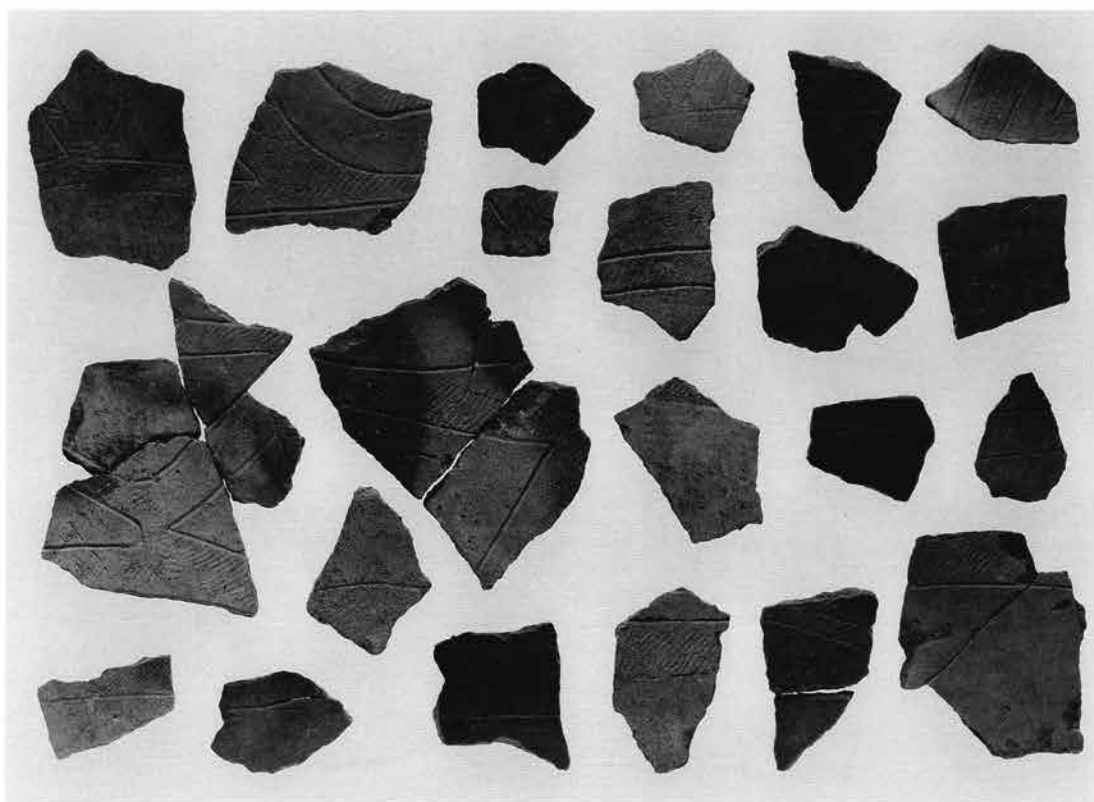
第9群土器



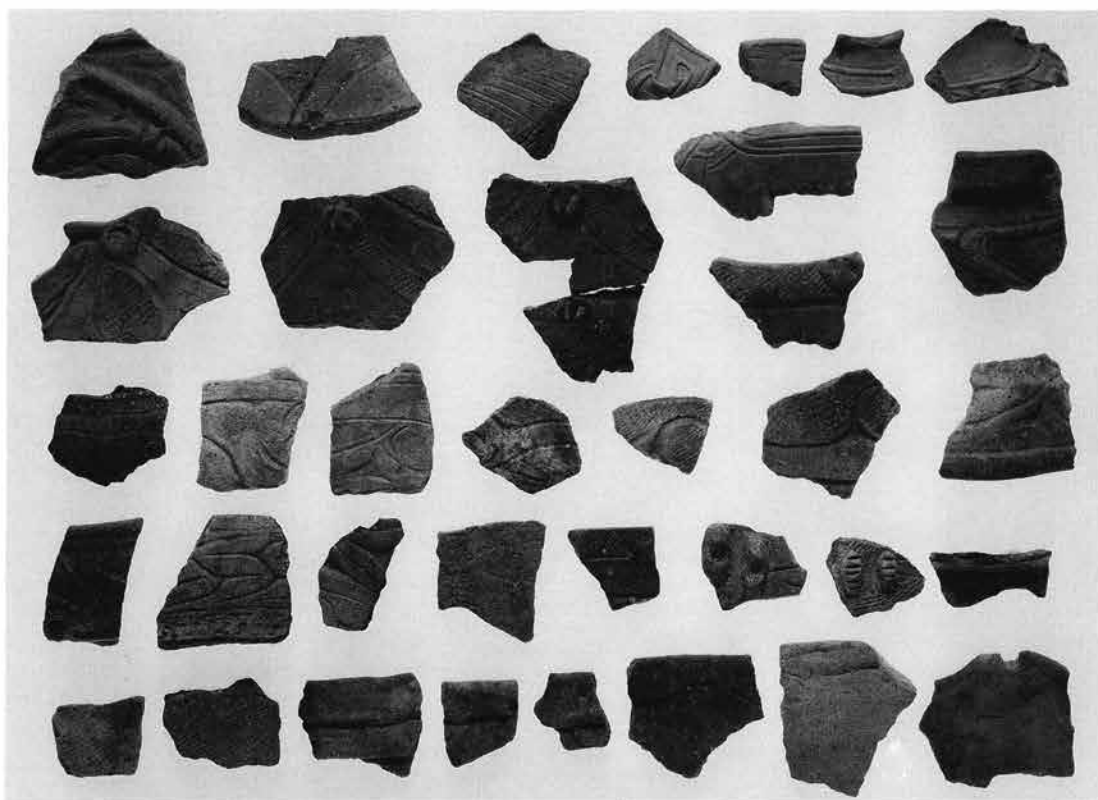
第10・12・13群土器



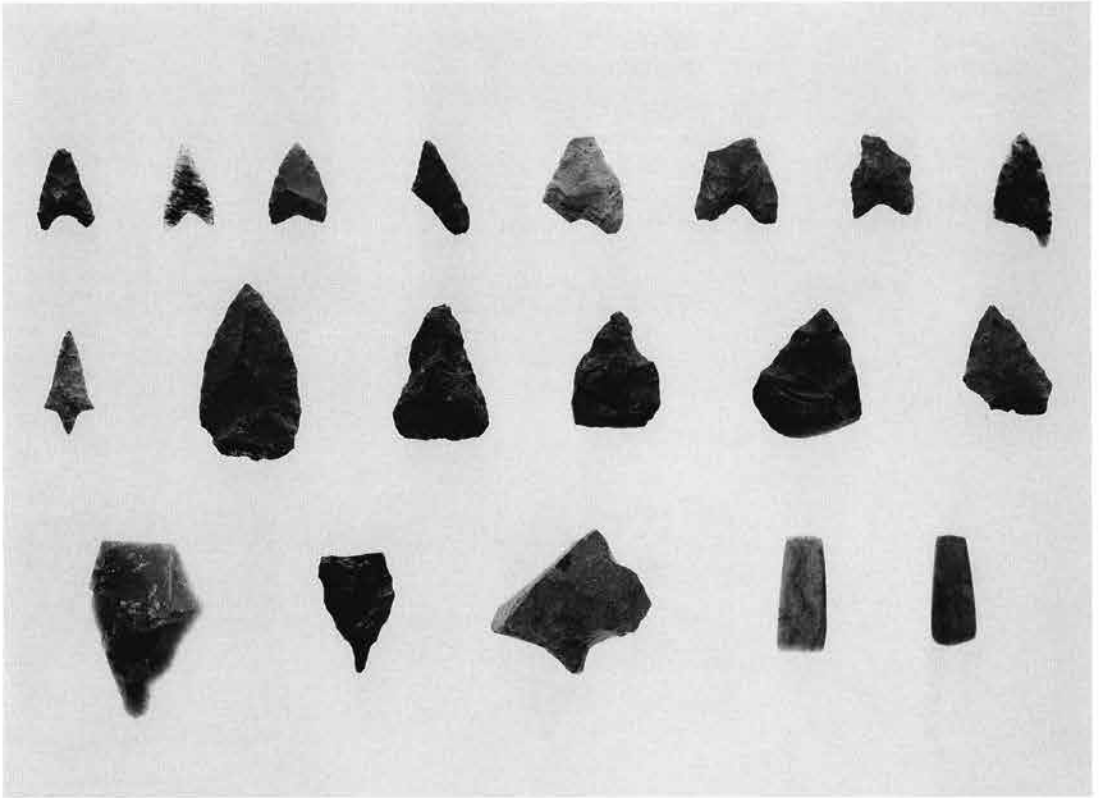
第11群土器



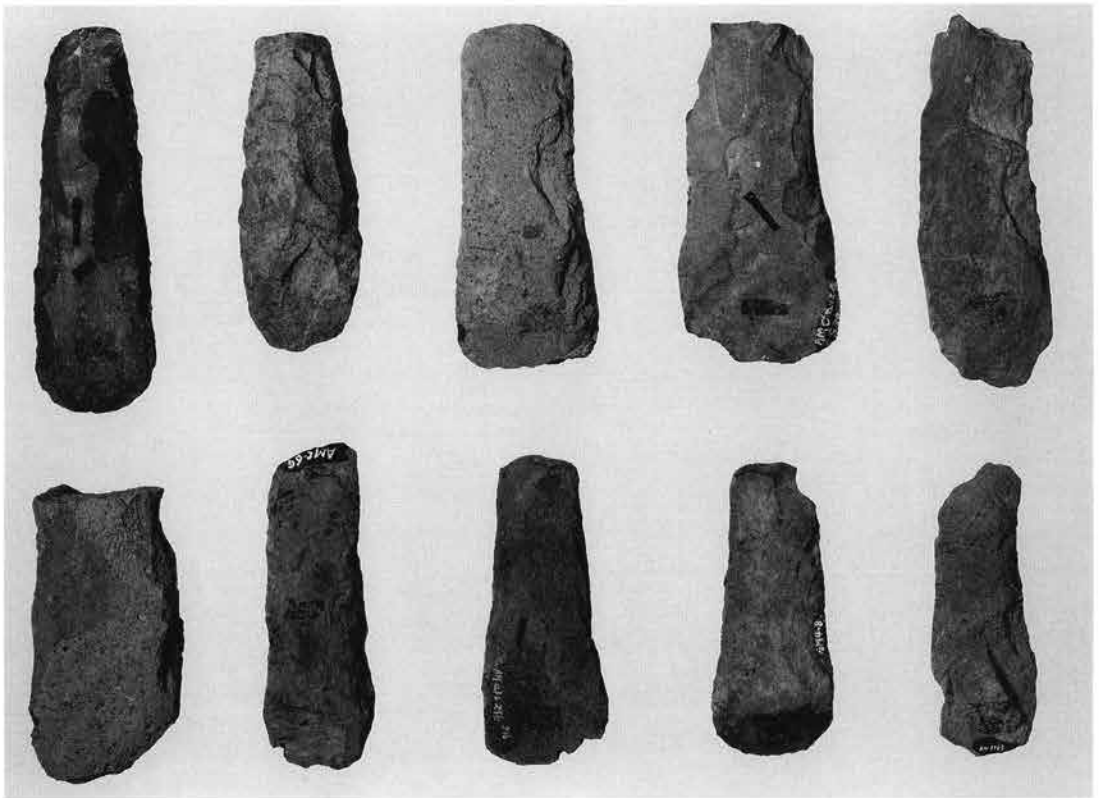
第11群土器



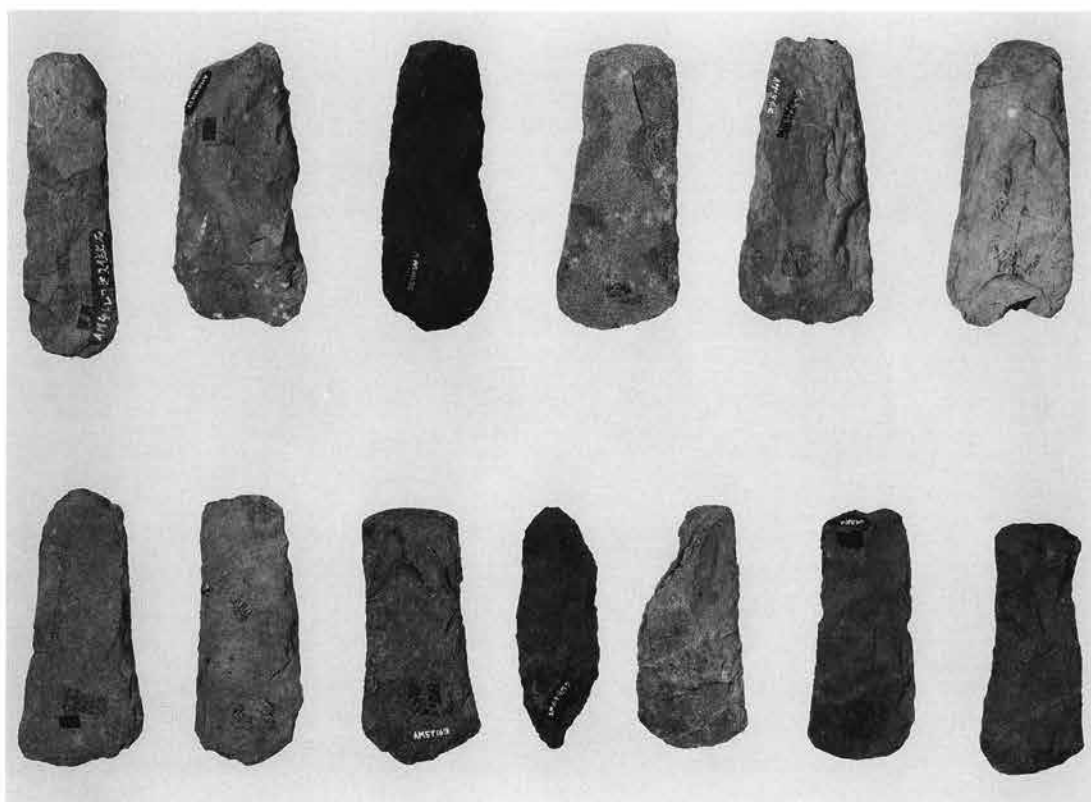
第12・13群土器(D区南採集)



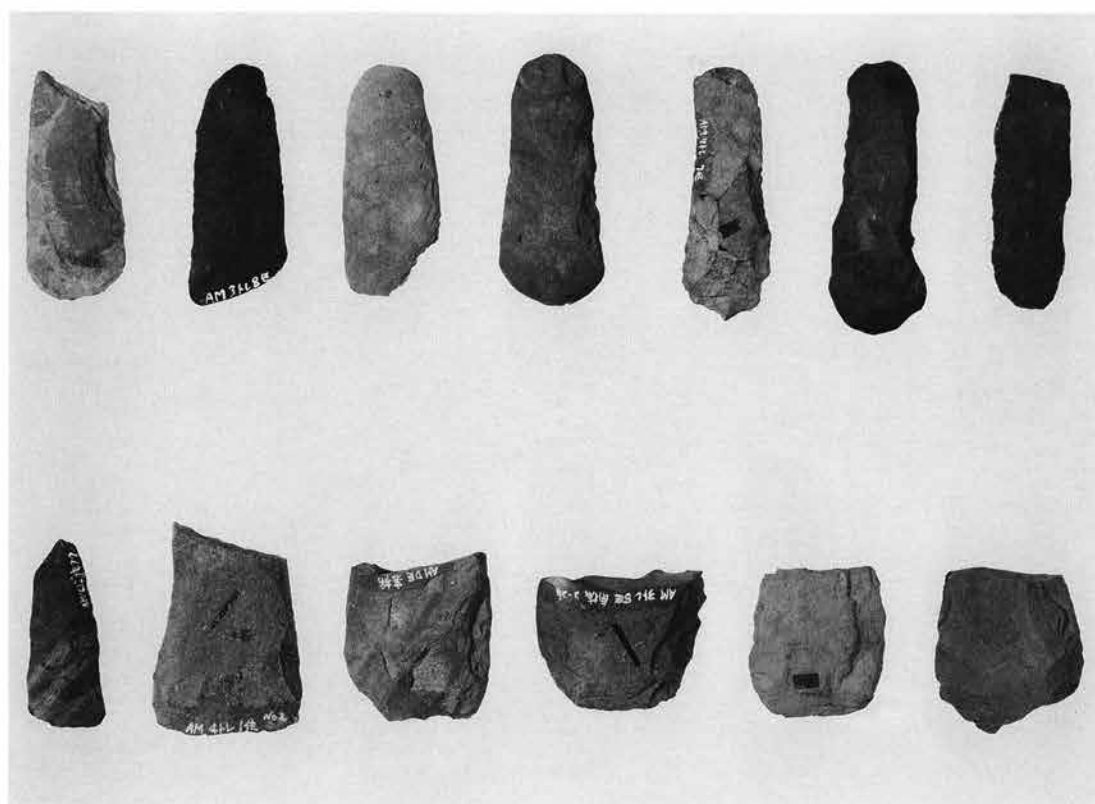
石鏃・石錐・小型磨製石斧



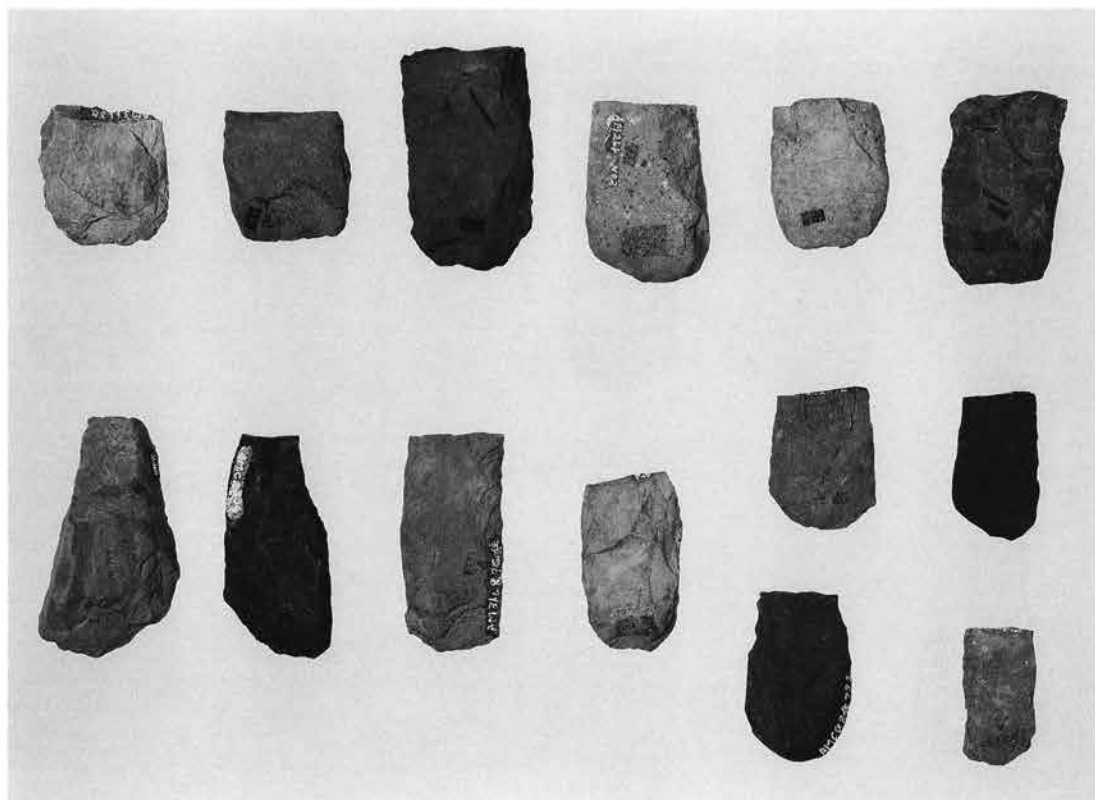
打製石斧



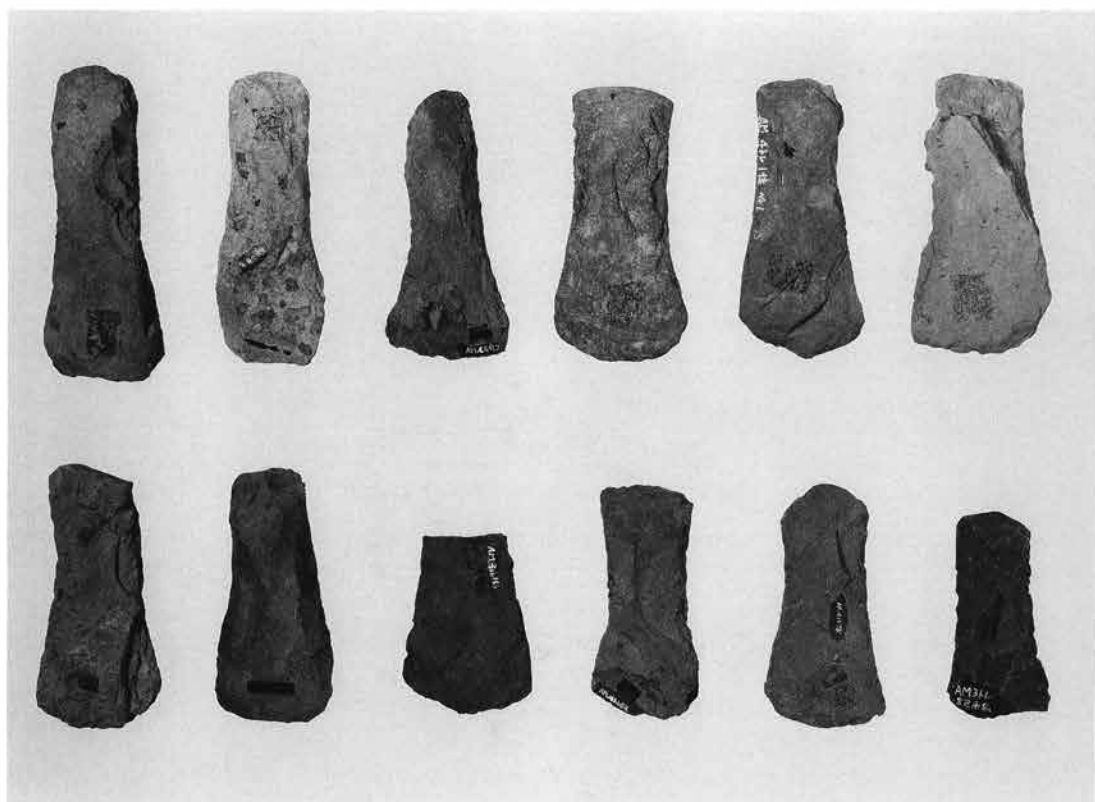
打製石斧



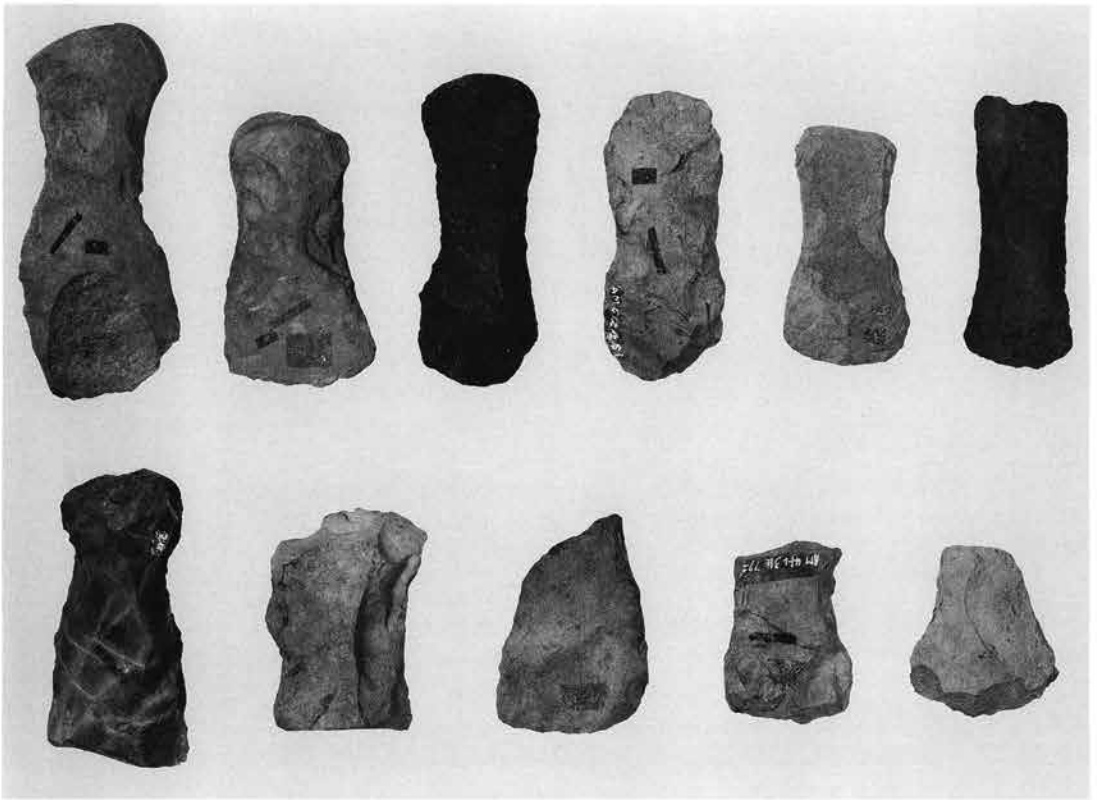
打製石斧



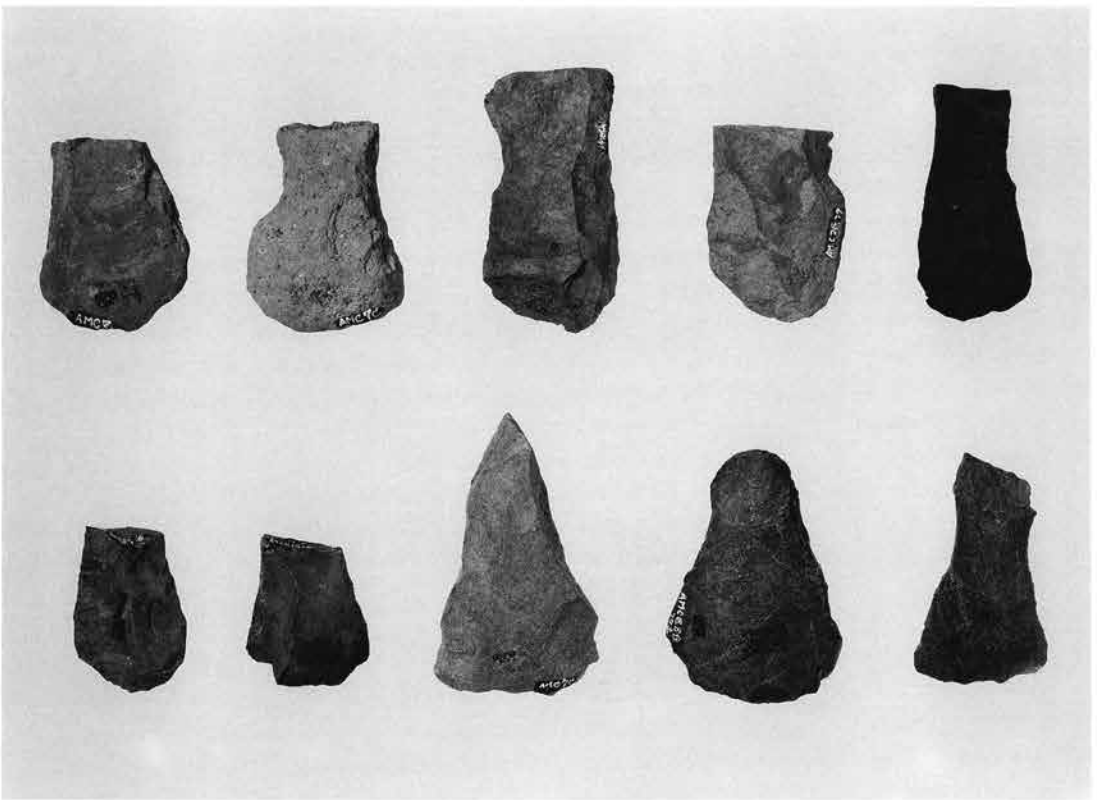
打製石斧



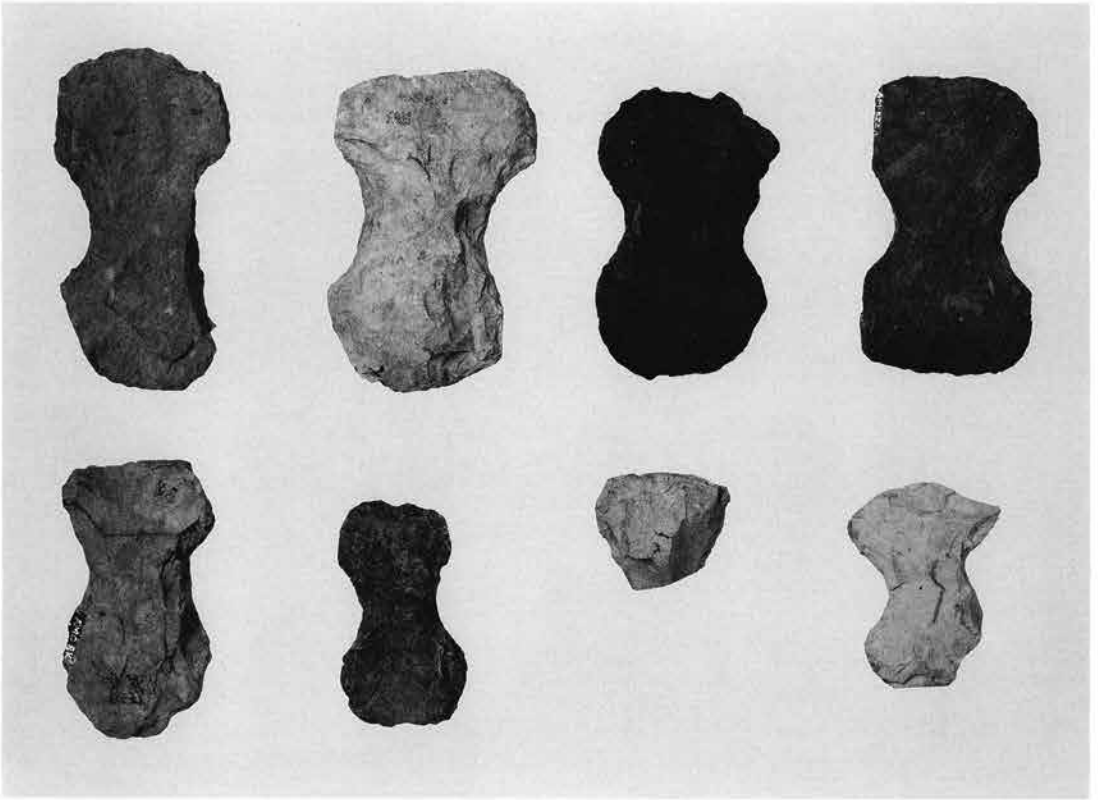
打製石斧



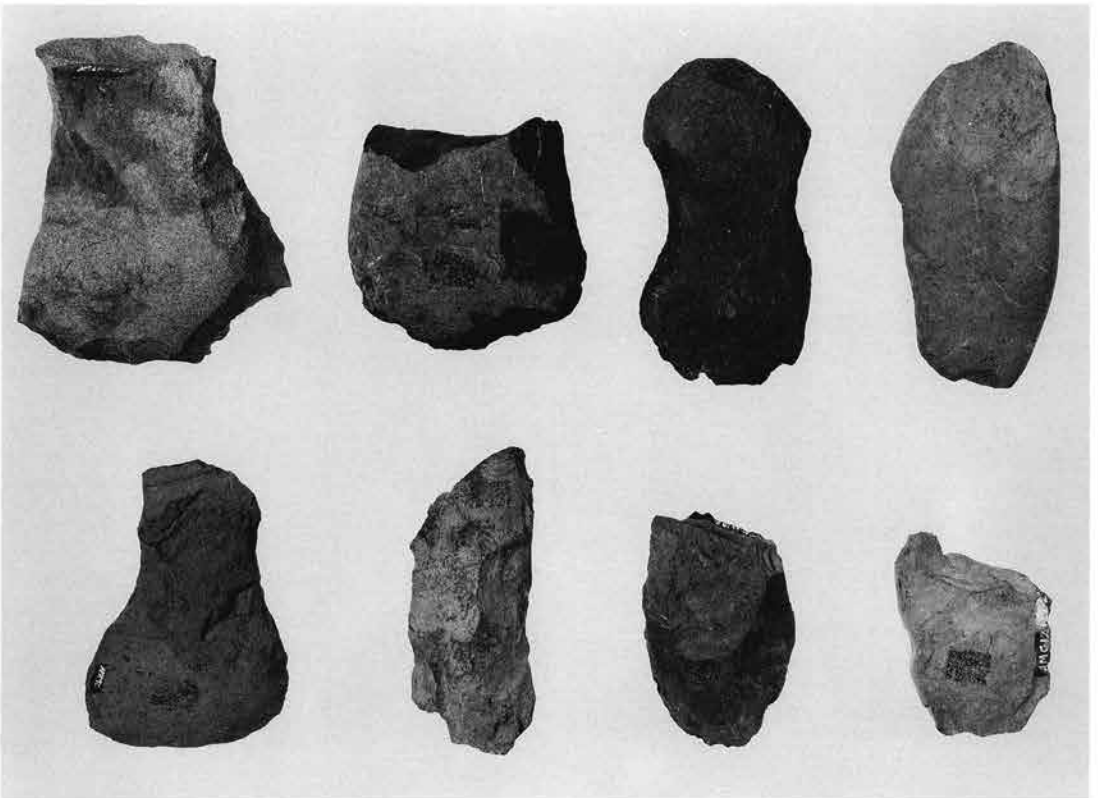
打製石斧



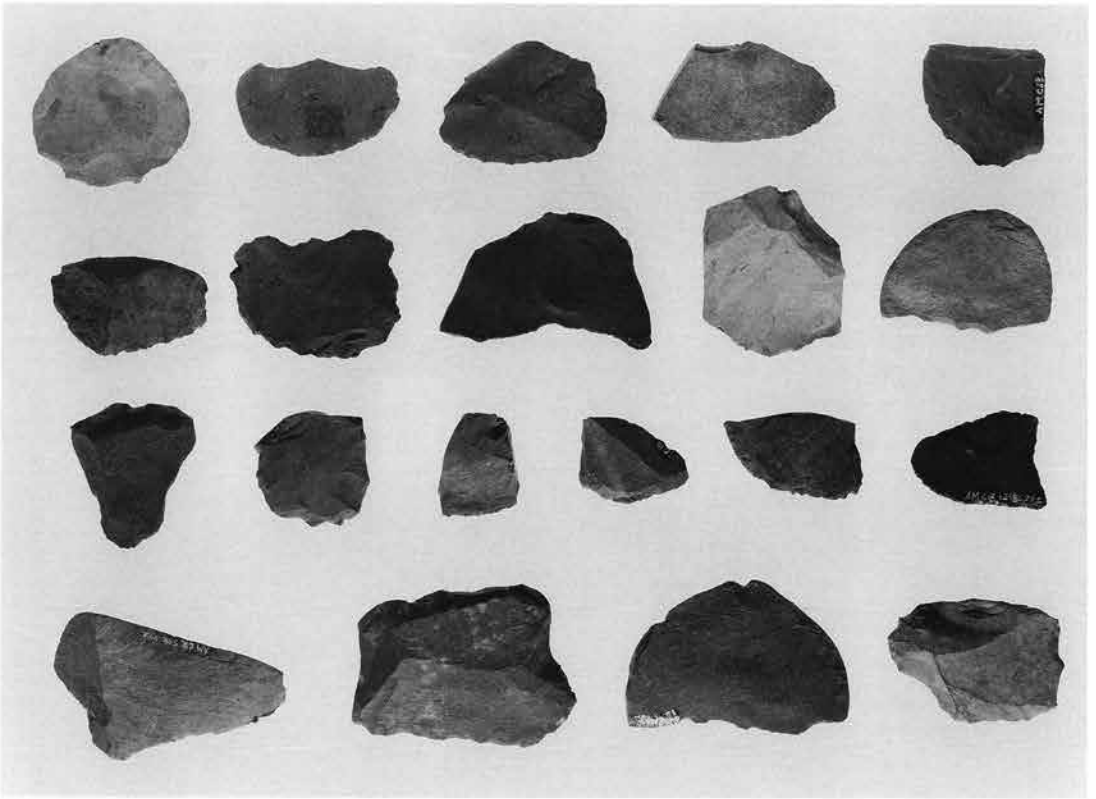
打製石斧



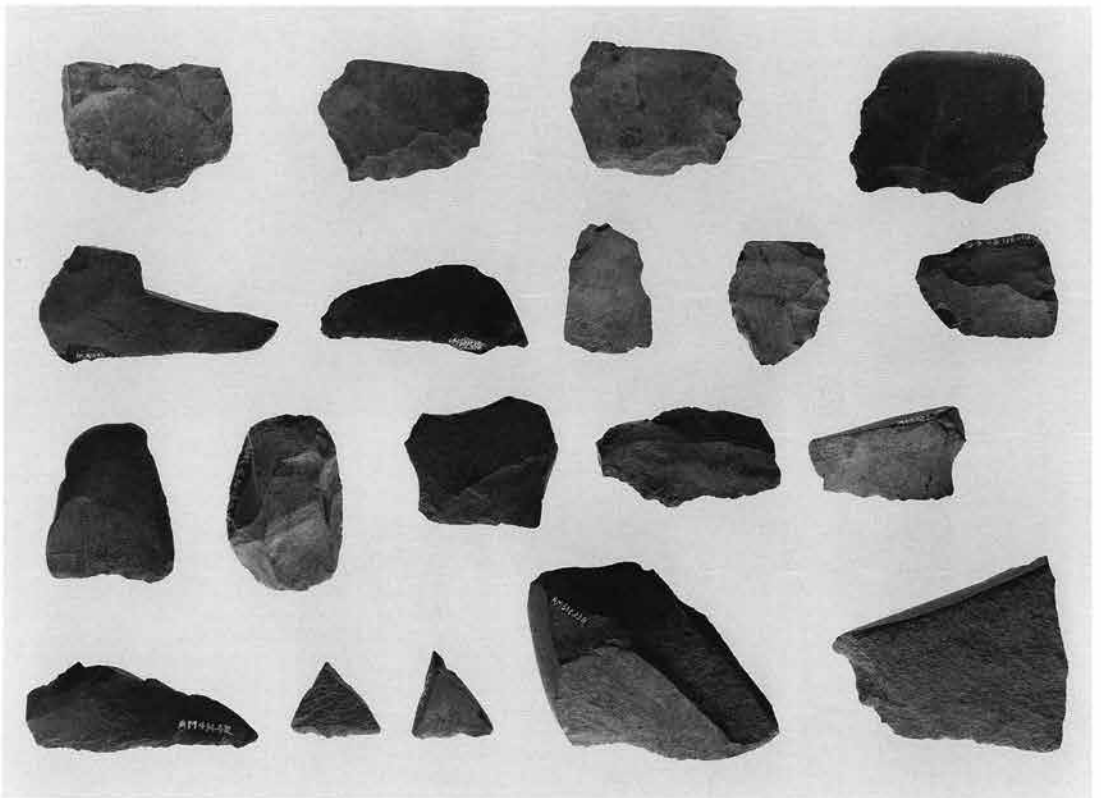
打製石斧



打製石斧



剥片石器



剥片石器



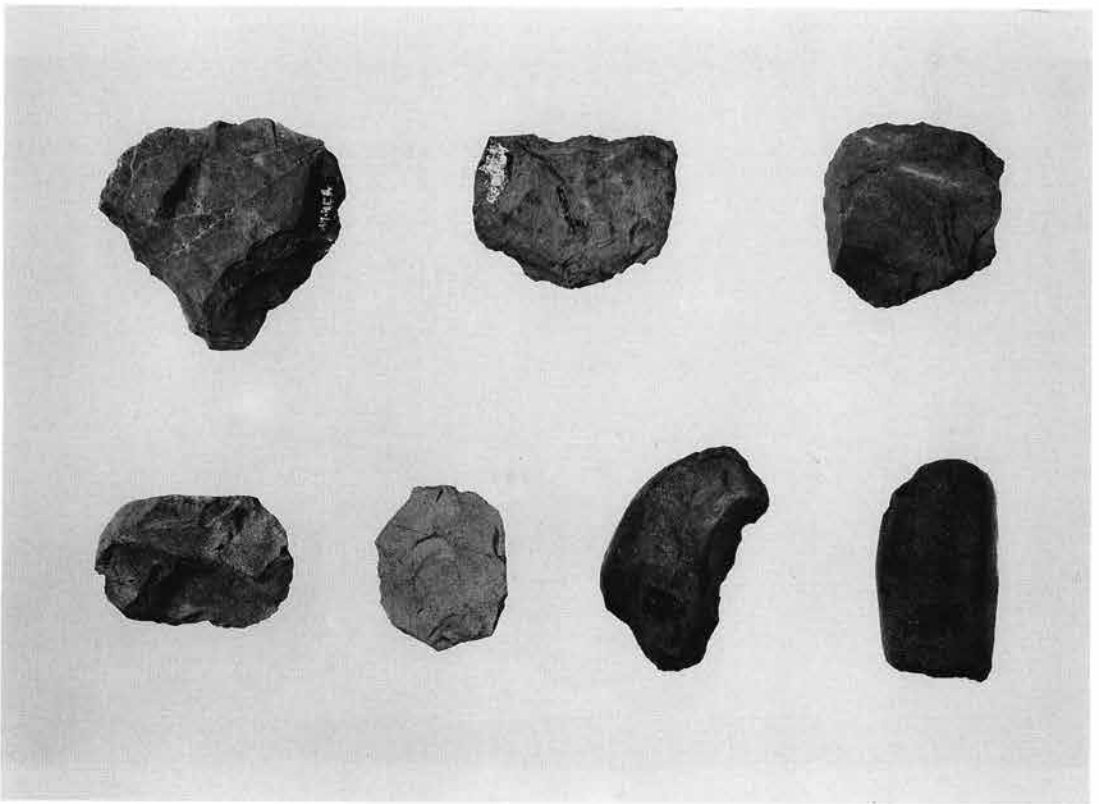
磨石類



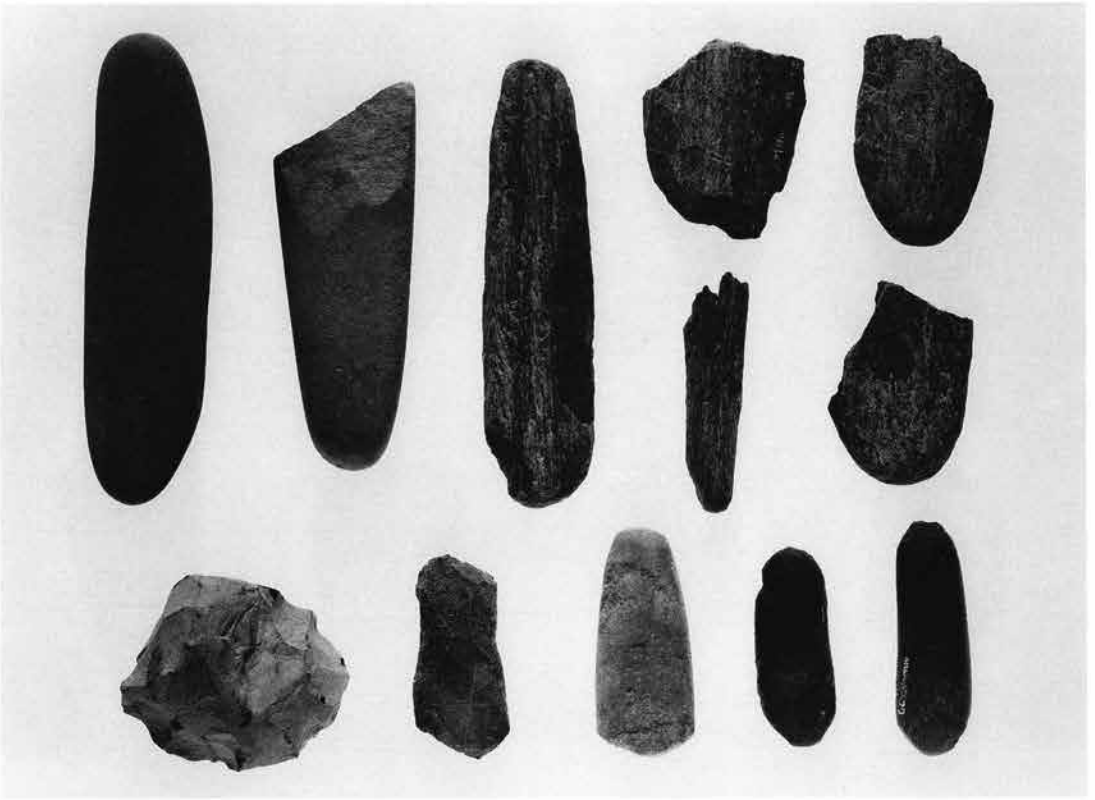
磨石類



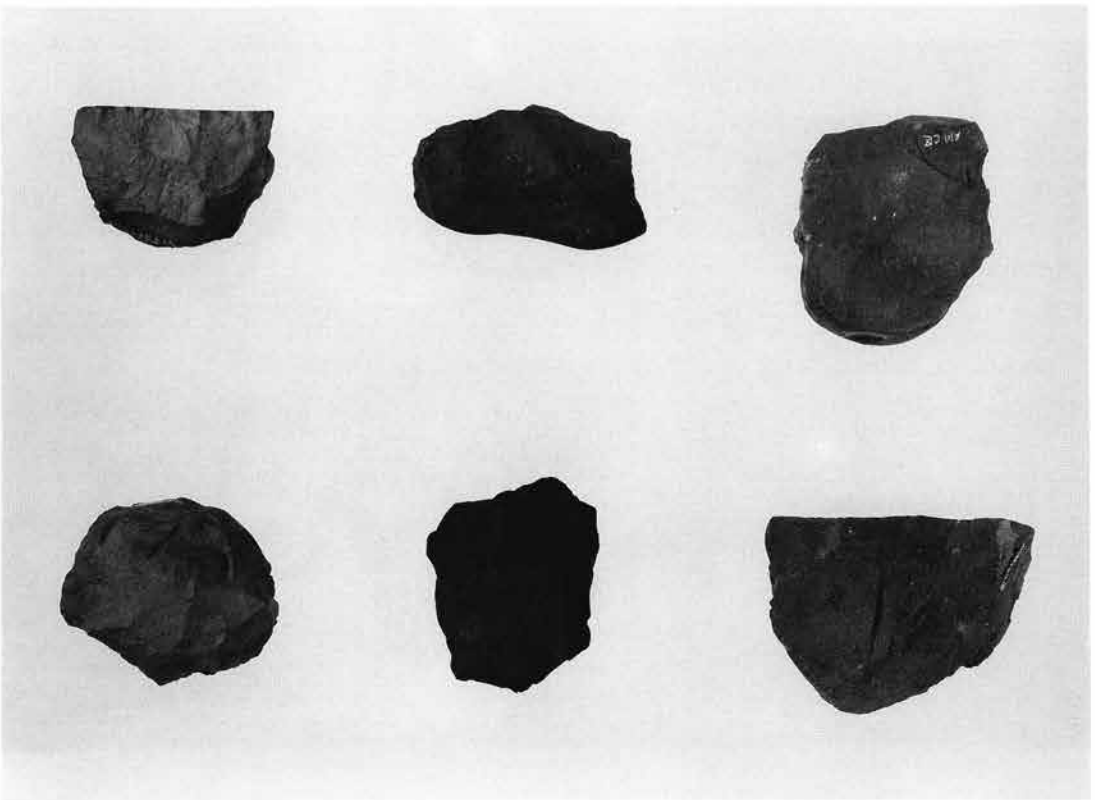
礫 器



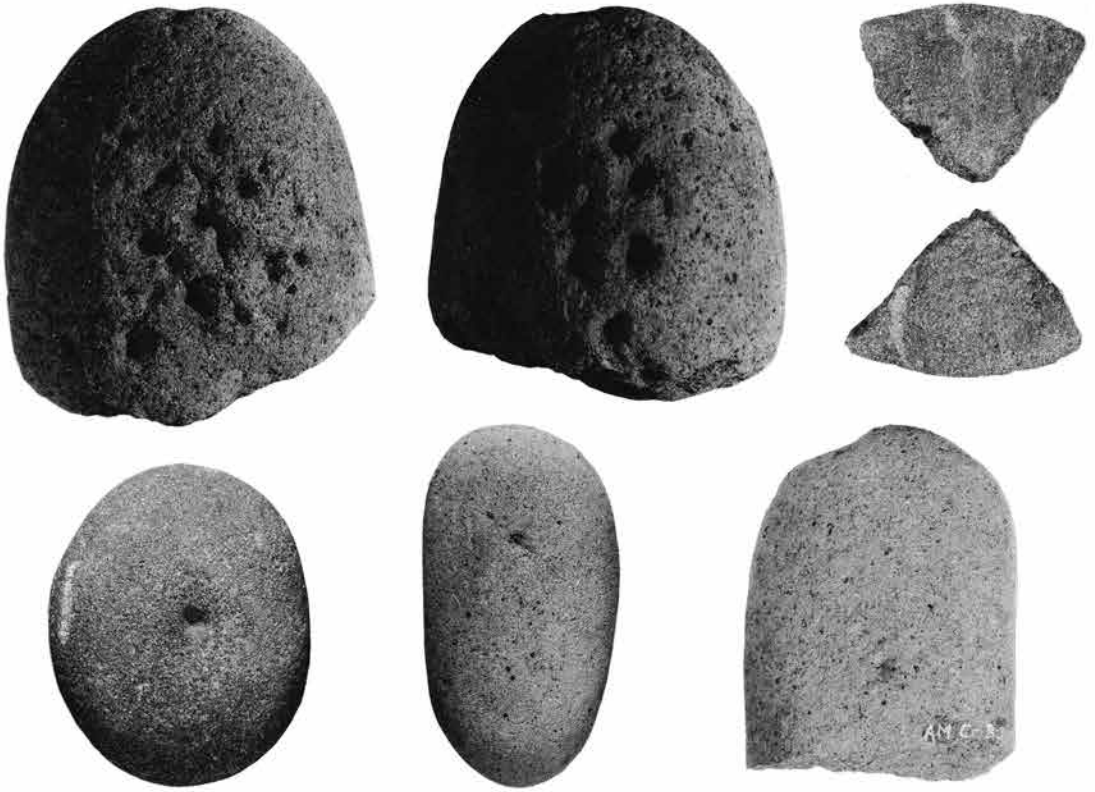
礫 器



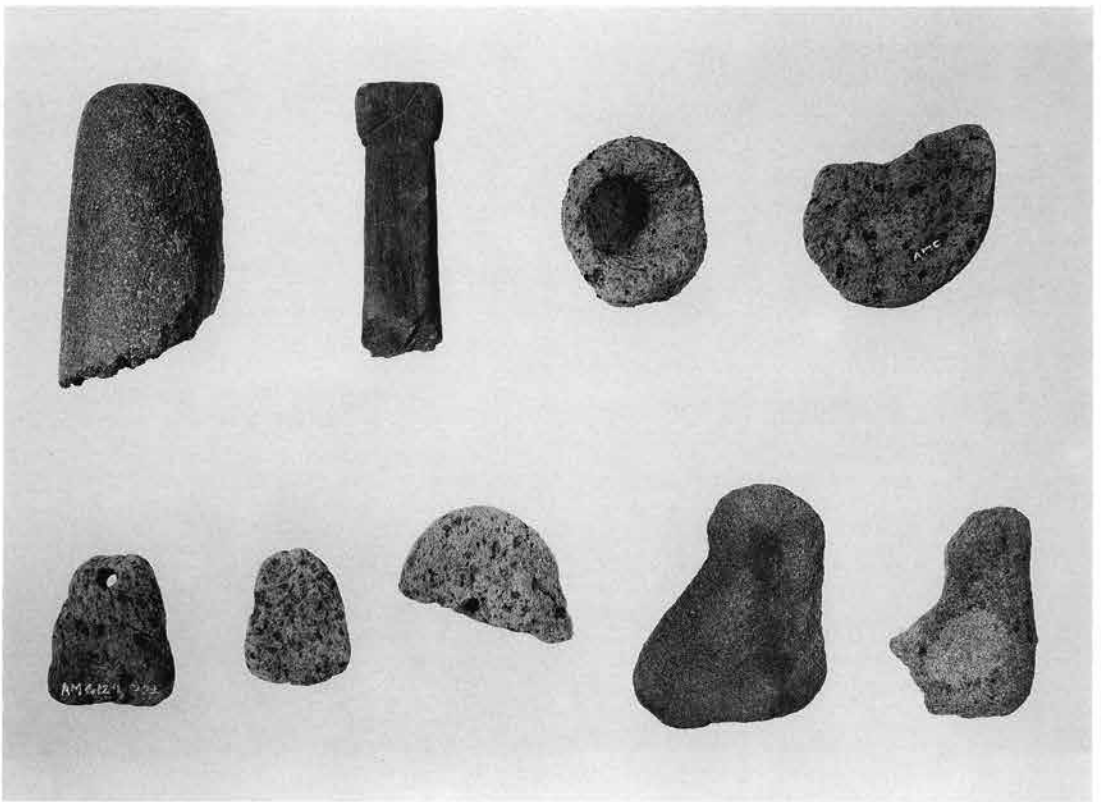
敲石・特殊石器類



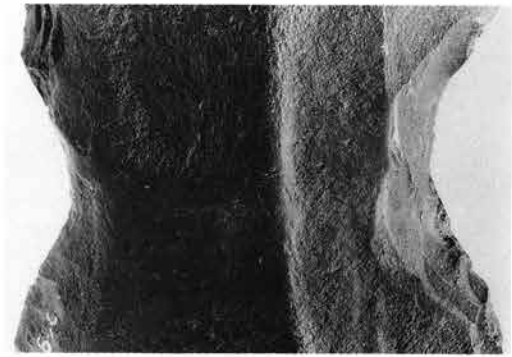
石 核

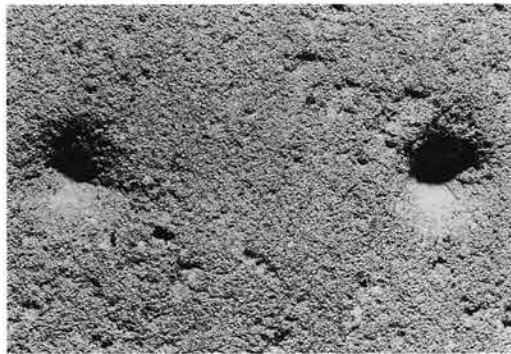
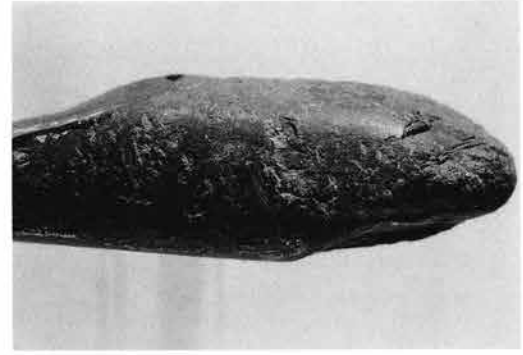
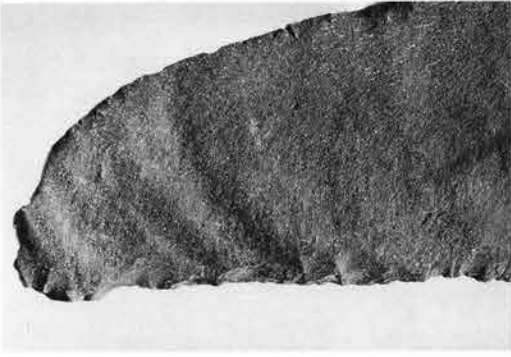


多孔石・単孔石

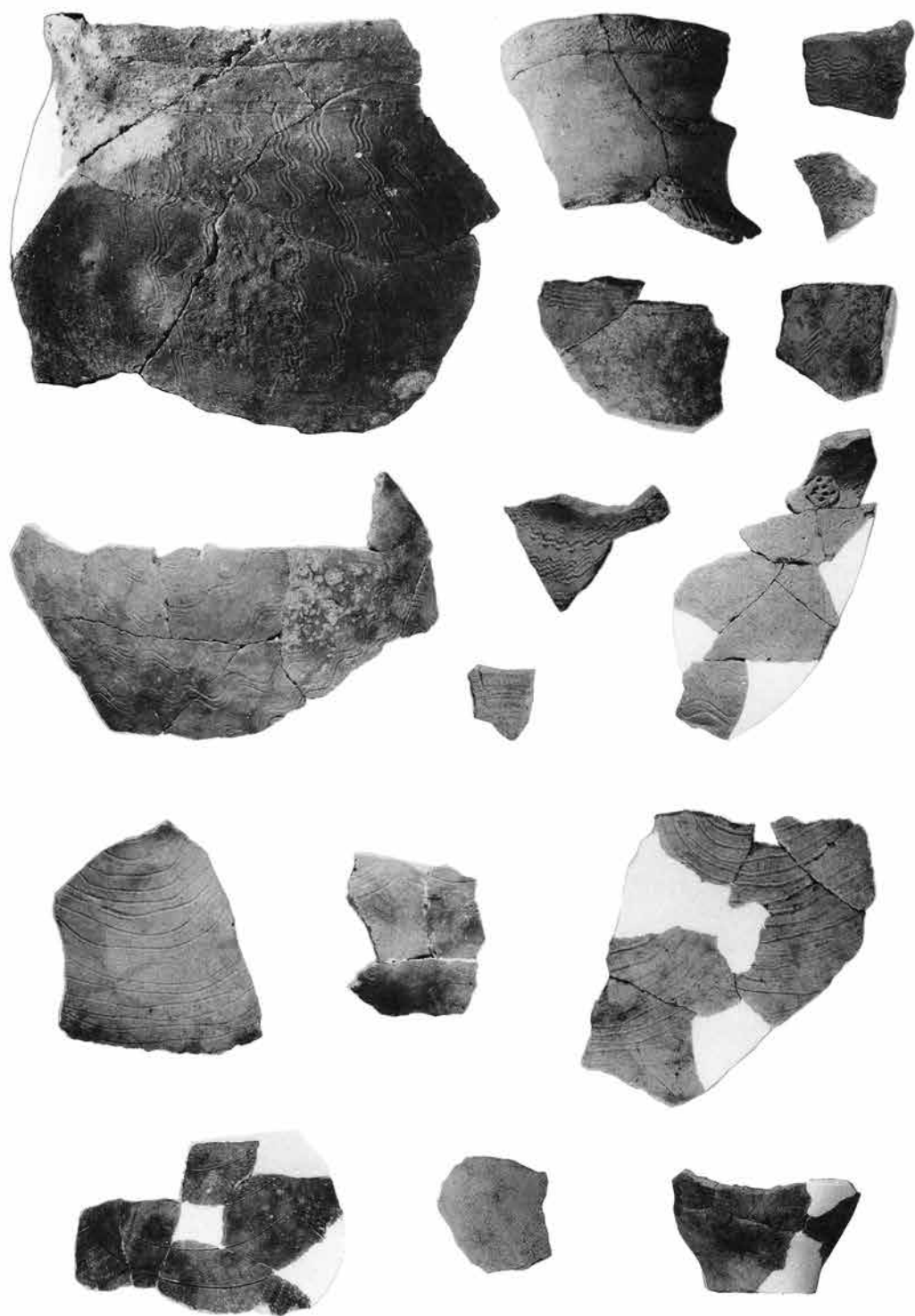


石製品





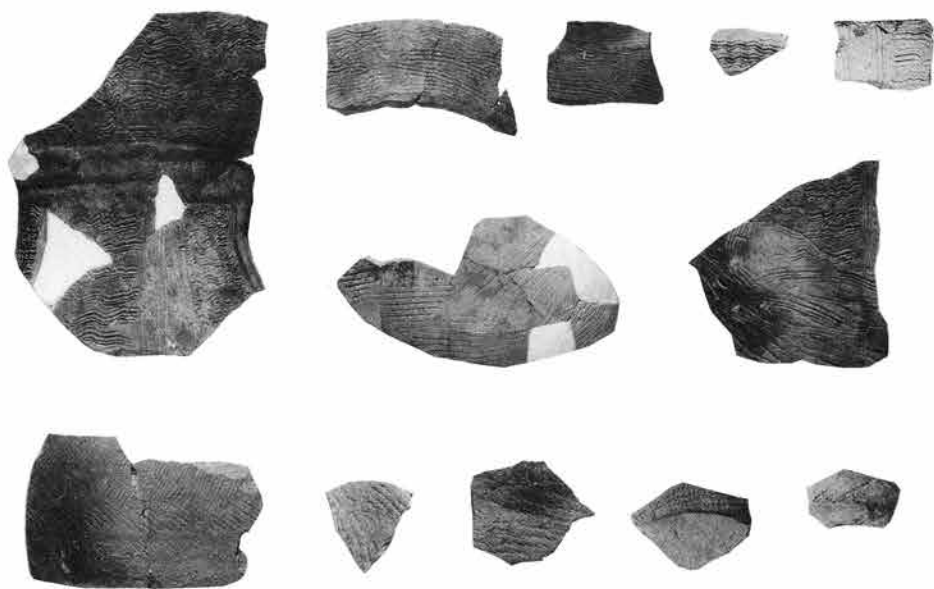
石器の使用痕・製作痕



5 T 1 号住居出土土器



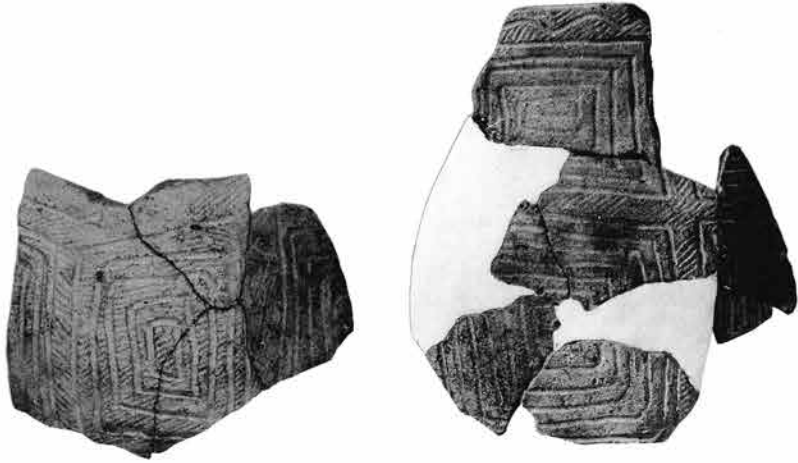
5 T 2 号住居出土土器



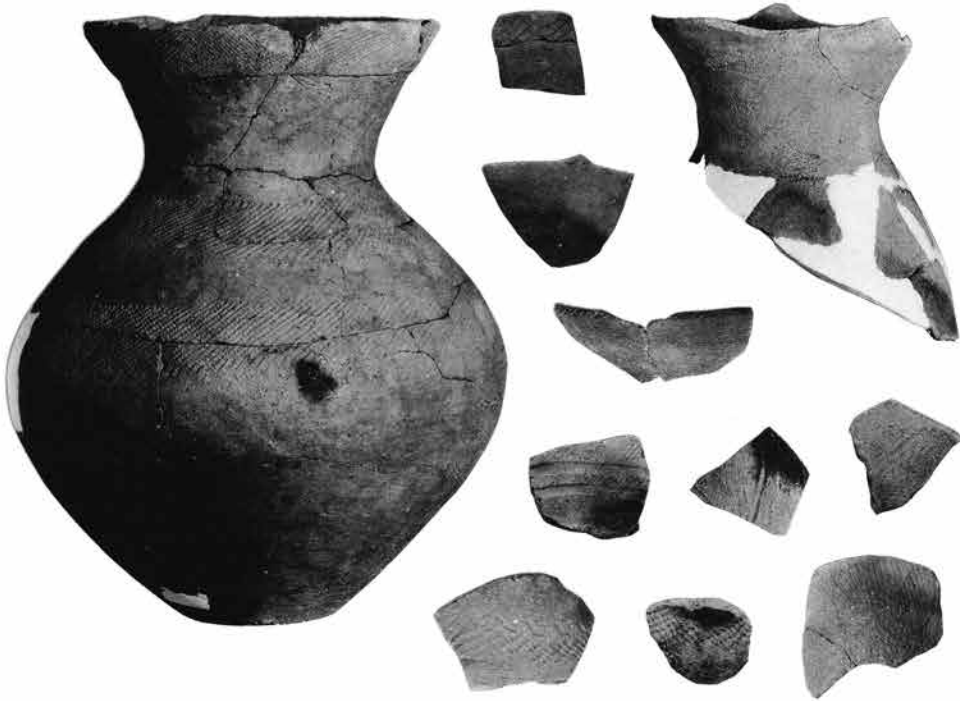
A区1号住居出土土器



B区3号住居出土土器



5 T 1 号竖穴状遺構出土土器



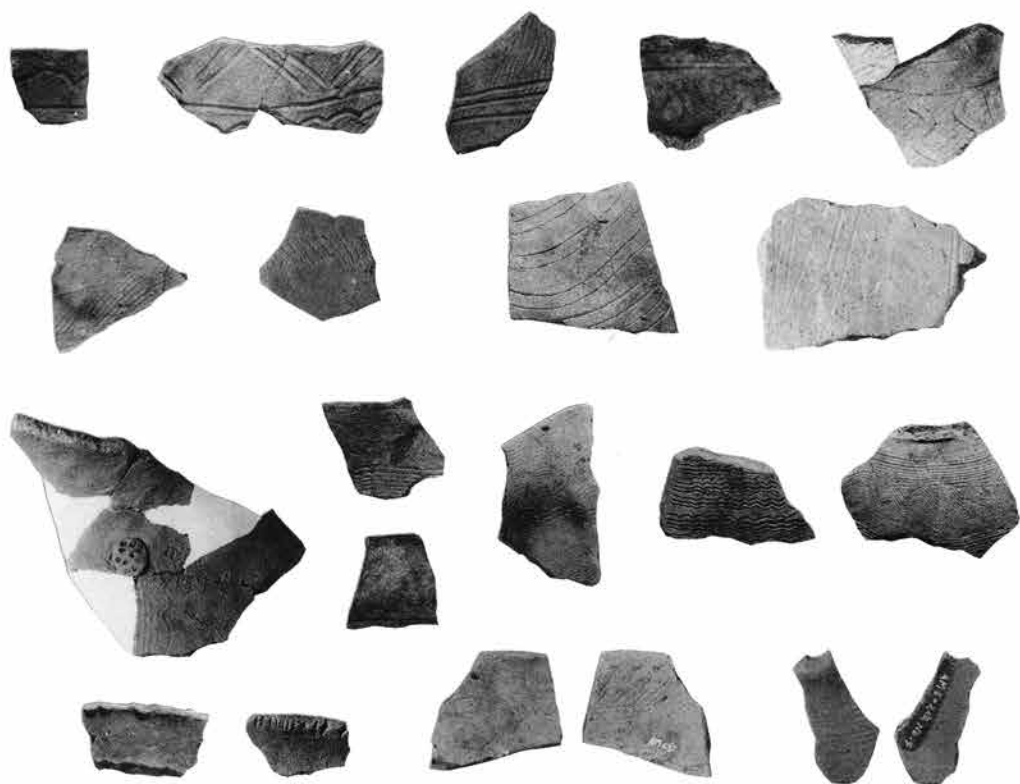
5 T 2 号竖穴状遺構出土土器



5 T 3 号竖穴状遺構出土土器



遺構外出土土器



遺構外出土土器



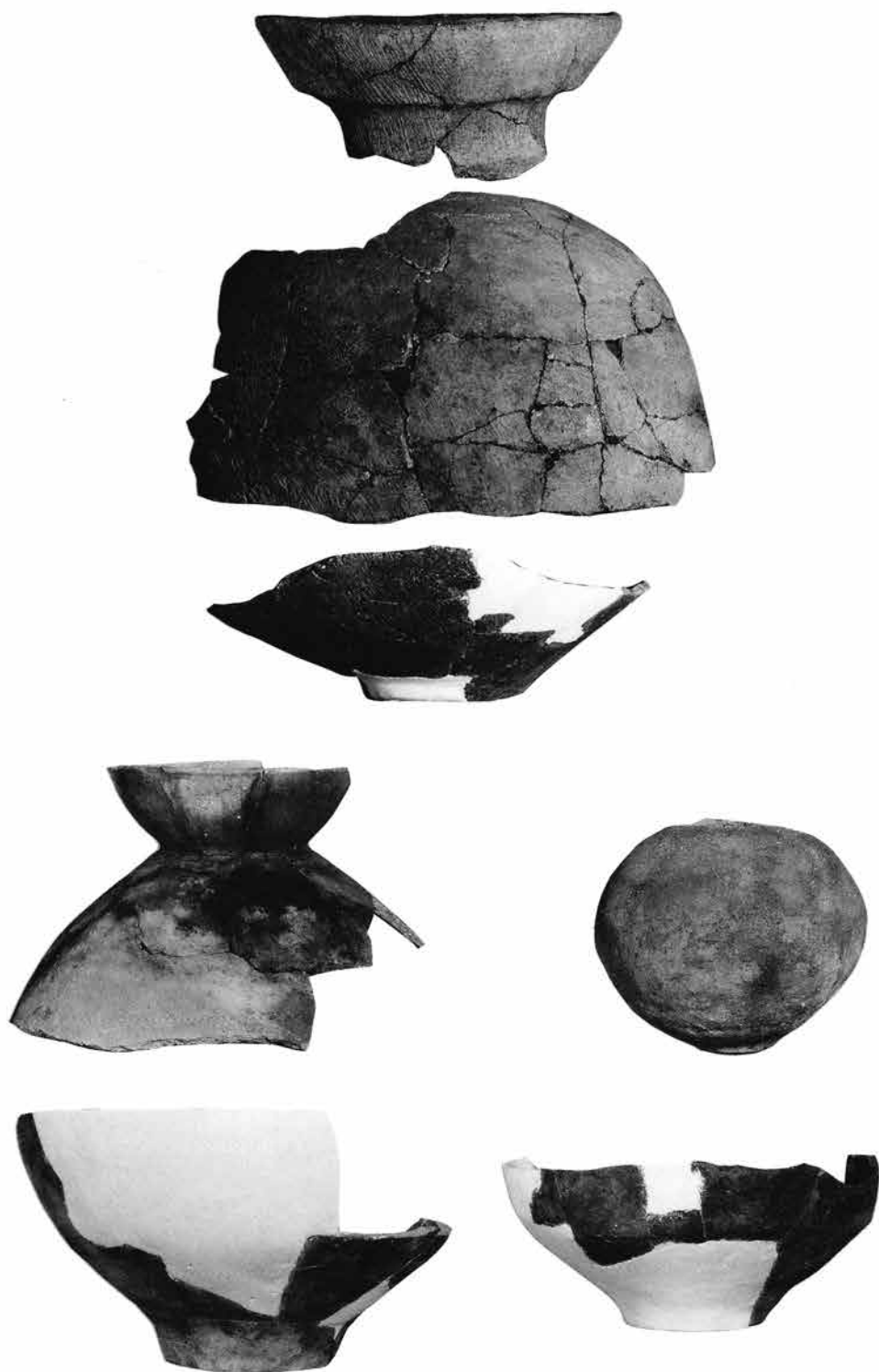
A区3号住居出土土器



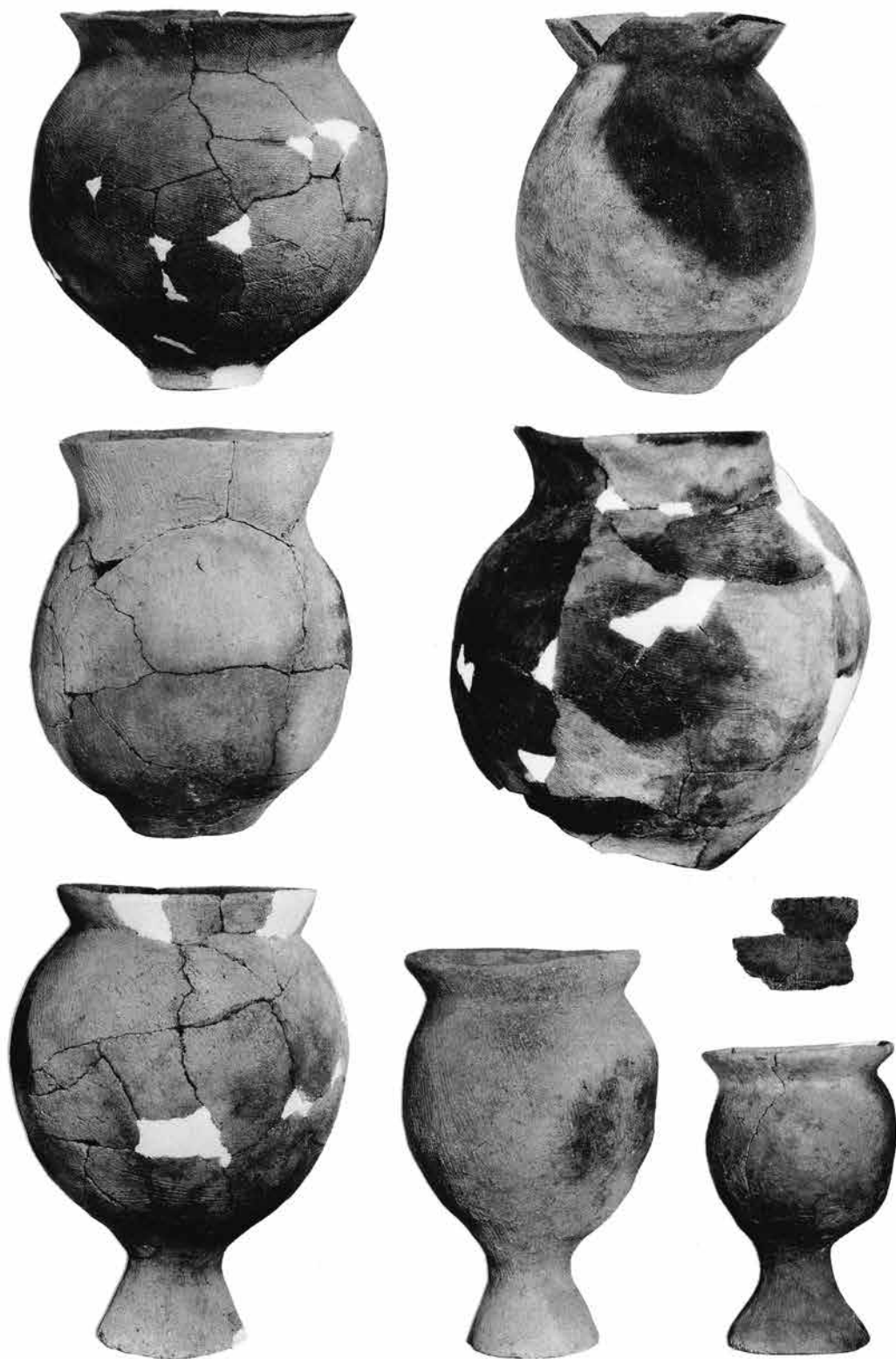
A区2号住居出土土器



B区1号住居出土土器



C区2号住居出土土器



C区2号住居出土土器



C区 2号住居出土土器



C区 1号住居出土土器

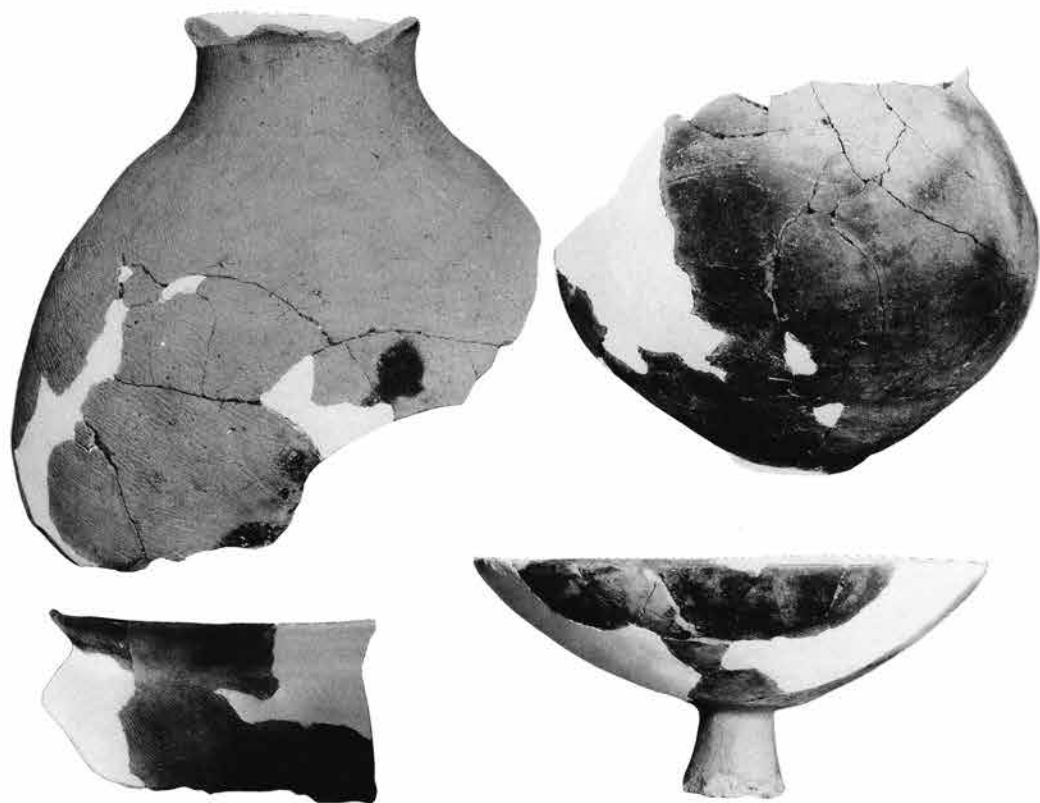


C区 6号住居出土土器

C区 7号住居出土土器



C区 8号住居出土土器



C区 9号住居出土土器



4 T 3 号住居出土土器

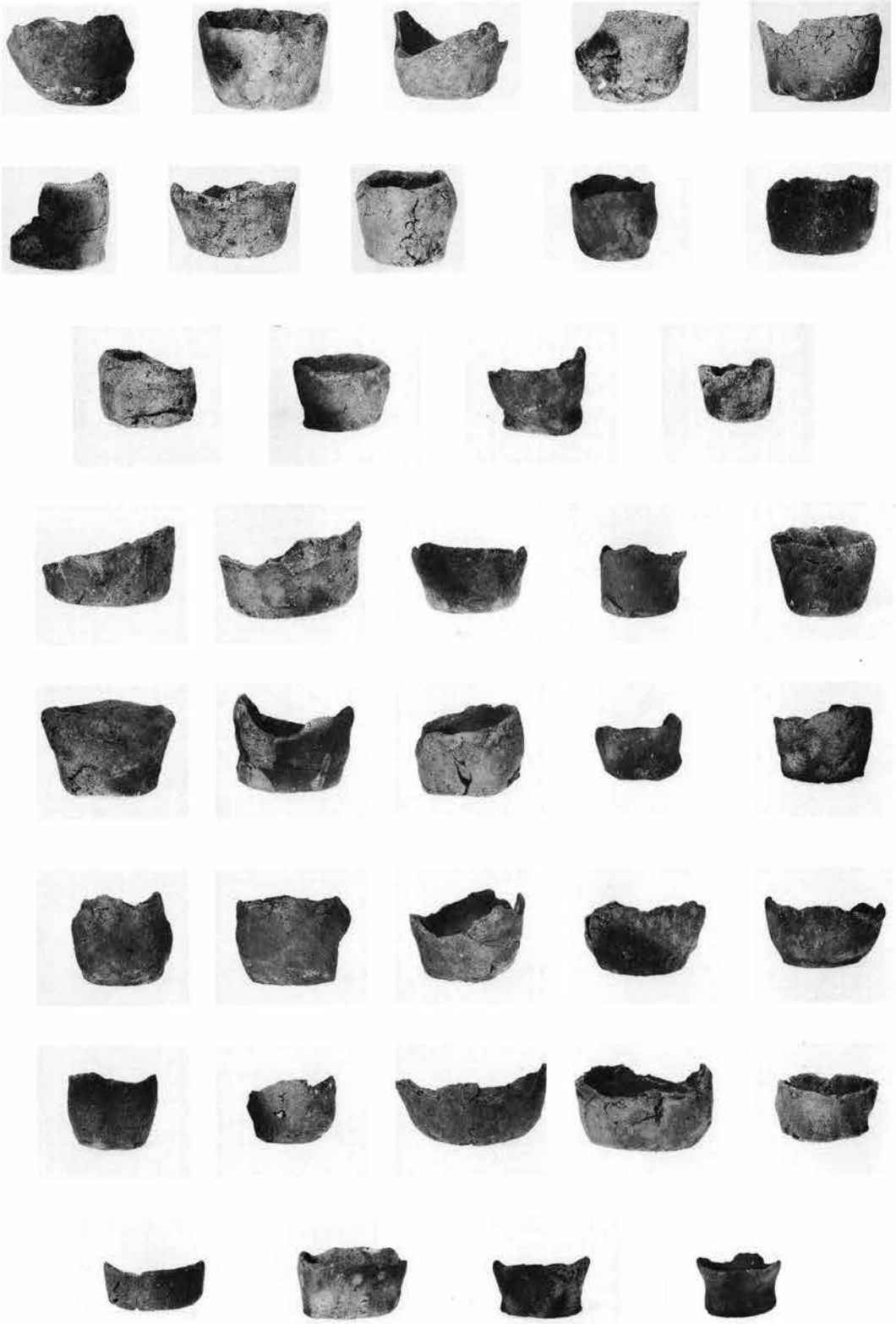


D区祭祀跡出土土器(石田川式土器)

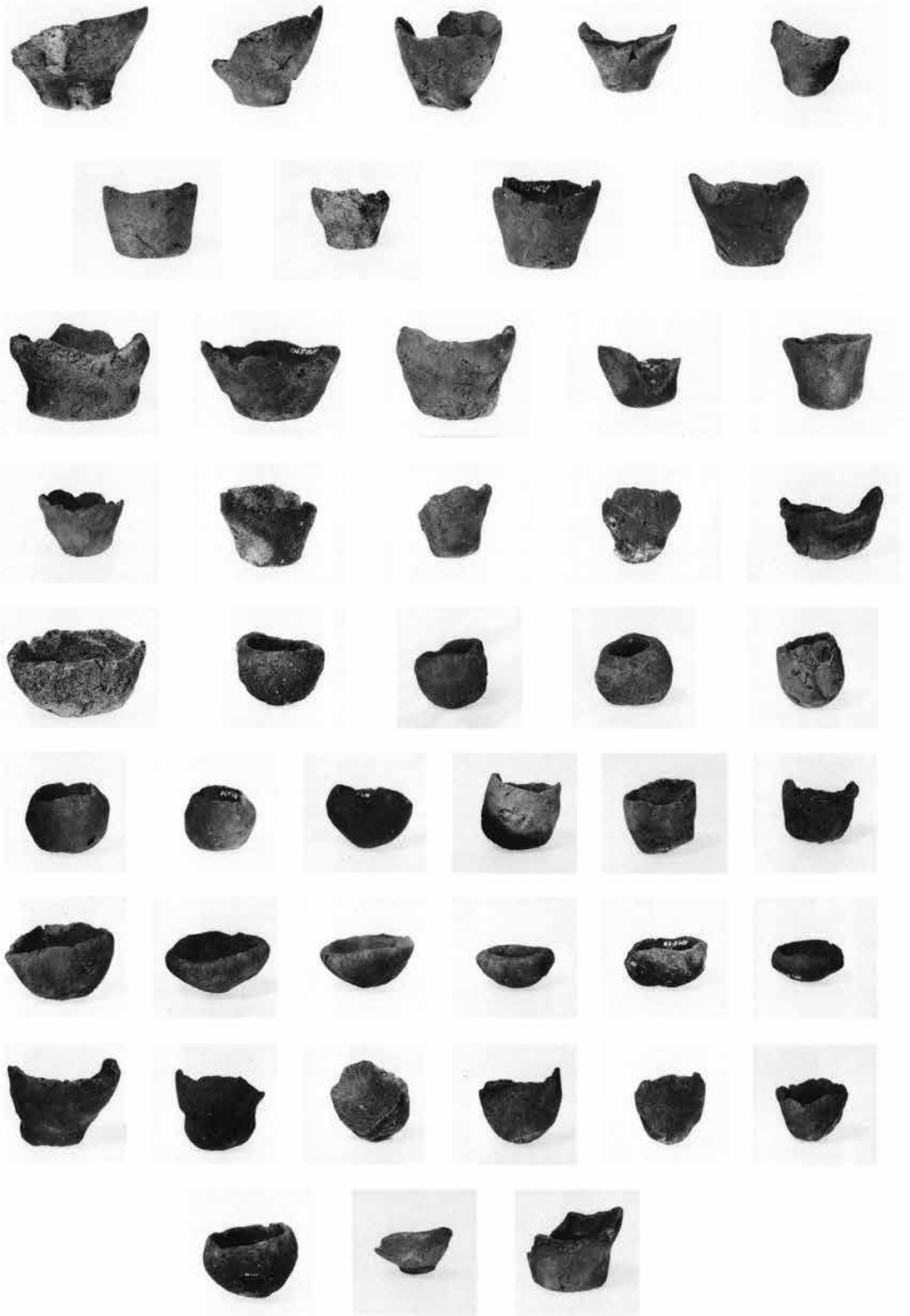


D区祭祀跡出土土器(鬼高式土器)





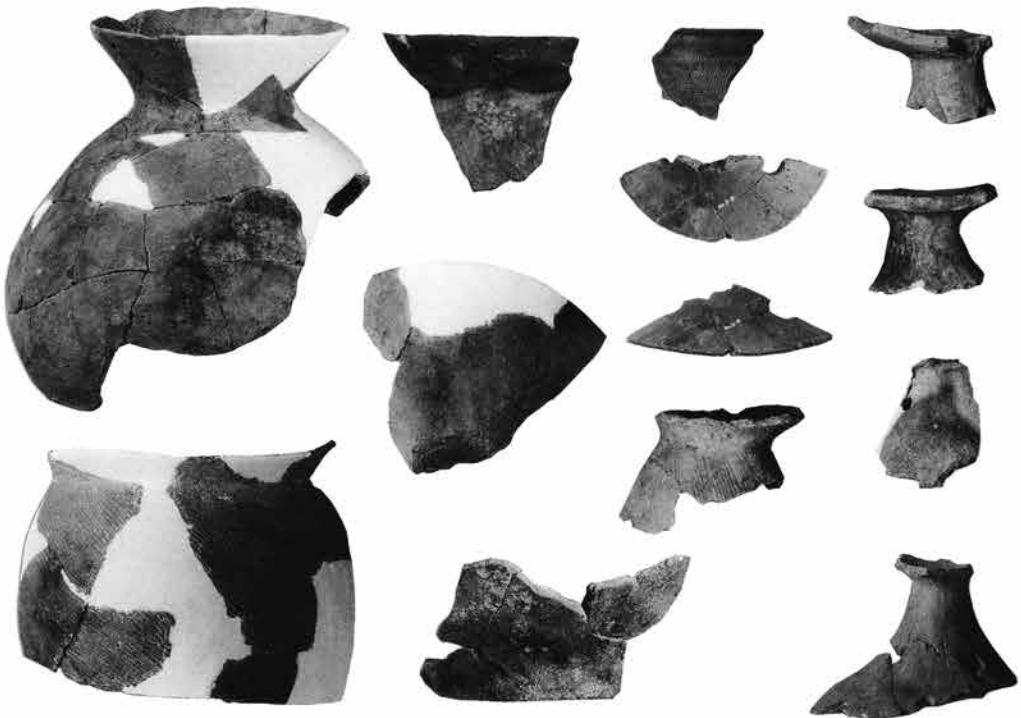
D区祭祀跡出土土器(手捏形土器)



D区祭祀跡出土土器(手捏形土器)



C区13-Kグリッド一括出土土器



遺構外出土土器



1 赤石城址 ビット列



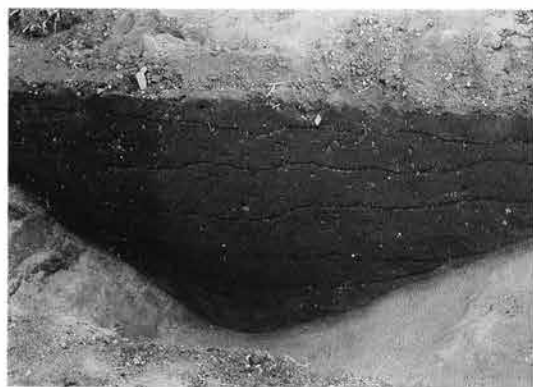
2 同上 壕



3 同上 壕



1 赤石城址



2 同上 Bセクション



3 同上 Cセクション

荒砥前原遺跡 赤石城址

昭和51年度県営圃場整備事業荒砥南部
地区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書

昭和60年3月20日 印刷

昭和60年3月25日 発行



編集／財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
勢多郡北橋村大字下箱田784番地の2
電話 (0279) 52-2511(代表)

発行／群馬県考古資料普及会
勢多郡北橋村大字下箱田784番地の2
電話 (0279) 52-2511(代表)

印刷／朝日印刷工業株式会社